

この世界、あと5年で文明が滅びます。

白紫 黒緑

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

北川龍登の行く先の異世界は、このままだと、後5年で文明が滅びるらしい、原因は自分より前にこの世界に渡った人達で………危機的状況でも思考が横道に反れることに全力を注ぐズレた主人公が人形作りの片手間に世界を救う。………かもしれない。

## 目次

神？との遭遇

壮絶な人生でした。 | 1

名も知らぬ世界での新生活

異世界渡つてすぐに死ぬ事だつてある。(死んでないよ) | 8

代行者は優秀。 | 13

移動で満身創痍からの初戦闘。 | 17

ギルドマスターに目を付けられた。 | 23

襲撃された、殲滅した、 | 27

発展と影 | 33

稀代の人形師だそうです。 | 36

一番常識外れな代行者 | 42

休憩失敗 | 49

オリハルコン | 55

無茶ぶり(頑張った) | 60

恐ろしき害虫(ステインクバグ) | 64

害虫ハンター縮めてガイハン | 71

ピンクの化け物 | 79

お久し振りです！兄貴！とか、心の中で思った。 | 86

スキルの謎 | 93

一方その頃 | 96

一方その頃2 | 100

勇者の仕事だろ…… | 103

ハイリスク、安定のリターン | 108

ほのぼの系ハードな日々 | 115

見た目に反してネガティブ過ぎない？

121

万能金属アダマンタイト

127

真実を写す目と選択

136

まだまだ作るよ。ほのぼのと、

144

テロケーかくです。(バグズミックス1号)

148

狩りの時間だ、

151

北の花園(ノースガーデン)

クラハに到着

155

戦力確認と強化

161

防衛戦に参加

165

報酬のお話。

172

泥臭え奴らと錬金術

178

確保と実食

183

省略された豚

189

次の目的地

194

新たな機構精霊

200

速攻

202

殲滅(蹂躞)

208

終結とその後

214

人形師、家を作る。

家を一から建てるのはDIYに含まれますか？

223

家ができるまで

234

バウンティハンター

241

バウンティハンター 続

249

実は……

252

団体さん

261

ノルン

269

そんなこんなで

275

異世界NGO・みんなのダークサイド・現在、最も能力的に信頼できると思っていた人形がとんでもない欠点を抱えていた件について『の二本でお送りします。』Kさん、正直引きました。ドン引きです。まさかあいつがド

まさかあいつがド

284

選択授業 ベルナー観光のついでに

292

S……だと、

301

朝ラーメンとダンジョン

312

気が向いたので異世界人探し(ウソ)

324

ジエノサイドレイブンの殲滅

334

人はそれを勇者と呼ぶ。

ルシア

343

ダンジョン特別実習と日頃の成果

351

更にチートを！……あつ、ケーキ屋初めました。(試験的に)

358

人形師、パソコンを買う。

366

人はそれを勇者(おろかもん)と呼ぶ。

375

自動人形(オートマタ)のお仕事

383

魔力?何それ、美味しいの? 卒業編

391

troubleshoot(トラブルシュート)

400

408  
空中都市 with GvsG、課題もあるよ?(ポロリはない)

ケーキとバトルと魔改造

420

個別指導	432
まつたり、まつたり	445
終わりの飾り方	458
救済と根絶とパーティーと摩耗したおじさん	471
逆位置の塔	
先生、魔王になったよ。	481
死（XIII）の先へ	492
運命の歯車（輪）を切り裂いて	506
物分りの良いだけの隠者（愚者）にはなるな	517
月（ツキ）を反転させる方法と適度な掃除（節制）の仕方	525
星々（希望）の輝きは	539
唄う悪魔（デーモン）	550
墜ちた太陽（象徴）	558
戦車（勝利）と審判（罪と罰）と	563
不正の魔術師（挑戦）と皇帝（ロイ）の決断	584
吊るされた男（修練者）の目指す境地	609
理想（世界）は果てなく遠い	630
力（意思）無き正義（最適化）	642
恋人（好機）来たれり	660
教皇（真実）の探求	677
女教皇／女帝（異なる表裏）	686
制裁の時代	
最善の沈殿	694
新たな住人	704

神？との遭遇  
壮絶な人生でした。

ー痛い、

体を起こそうとするが足が動かない。辛うじて開く左目で周りを見る。まず目に付いたのは血だ、自分が倒れている所を中心に血溜まりができている、立てないので腕に力を入れるが右腕は何か破片が刺さっており、その先の指や手首はぴくりとも動かない、左手で自分の体を引きずる。アスファルトに擦り付けられ、体がすりおろされるような感覚とともに熱を発する。

「……………」

周囲から呻き声と激を飛ばす声が聞こえるが、どこか遠くの事のようにはつきりと聞き取ることができない。

「……………」

赤い塊を目指して左手を伸ばすが、全身から力が抜けていき眠りに落ちるように視界が暗転する。抗いようのない死が訪れたのだと彼は悟った。

ーのだが……………」

「まず、最初に謝らせてください、申し訳ありませんでした。」

瞬きするほどの間もなかった。死を受け入れた後、痛みがなくなり、視界が広がり、そこにいた女性が頭を下げた。状況が飲み込めない、周りを見回したところ地獄ではないようだ。

「……………えーっと、あの一、」

「怒るのも無理はありません！ ですが！ どうか！」

「状況が飲み込めません。」

「落ち着いてください！」

「落ち着くのお前だろう！」

「ひいああ！ ごめんなさい！ ごめんなさい！ ごめんなさい！  
ごめんなさい！ ごめんなさい！ ごめんなさい！ ごめんなさい！  
ごめんなさい！ ごめんなさい！ ごめんなさい！  
……………」

聞きたいことがたくさんあるのだが会話が成立しない。ここは何処か、あの後どうなった？ そして、彼女は何者なのか、答えを知っているであろう彼女は、土下座をしながら念仏のように謝罪の言葉を口にしている。

「あの……………」

「※繰り返し謝罪中」

……………埒があかない、取り敢えず判断する情報が欲しいが会話のたびにこうなられたらいつまで掛かるか、それに人の話を聞かない奴は嫌いなので、怒気をぶつけて冷静になってもらおうことにした。

「……………おい」

「ひっ！」

床に付いていた顔が上がると涙目になっていて、表情に関しては怯えている。心が痛むが怒気はそのままに質問をする。

「まず、お前は何者でここは何処だ」

「ええ、あつ、ええーと、ええ、あああ、わ、私はあなた達の世界とは別の世界を管理する十席の末席のイーゼルです、一応豊穰神として信仰されて、…………あつ、別に神とか名乗って調子に乗ってる訳ではないのでどうか！ 許してください！ お願いし……………」

「で、ここは？」

「えっ、ああああ、えーと、えー……………ここは私が異世界の人と会うために作り出した空間なんです……………狭かったですか！ すぐ広くなりますのでどうか！ 許し……………」

「いい、広くしなくても……………あの後どうなった？ 俺はどういう状態だ」

「ええーと、それについては、……………言えることは貴方が死んだという



ことしかお教えすることができません」

状況としてはイーゼルは異世界の神様らしい、この空間はイーゼルが作った、イーゼルは自分の死について知っているが、俺が死んだこと以外は教えることができない。らしい、新たに生まれた疑問をイーゼルに聞く。イーゼルも落ち着いてきたので怒気を消す。

「なんで、俺は異世界の神様の前にいるの？ 何で最初に謝ったの？」

「ええと、実は私達がいる世界に魔王が生まれたんですが……………」

「それを俺に倒せとか？」

「いえ、そうではなく」

「え？」

魔王いるんだよね？その世界、それで呼ばれたんじゃないの？勇者がどうこうとか、そういう感じじゃないの？

「魔王はまだいるんですけど……………」

「魔王以上の問題か、しかも魔王生きててそれ以上とか何？」

ゲームとかで魔王と言えばラスボス、そんな奴がいる世界で何かしなければいけないらしいが、魔王より厄介事とかと言うと世界その物が壊れるから直せとか維持しろとかか、ファンタジーの小説でも読んだことあるが、そういう世界はかなりの惨状で住んでる人間がそれに気づいていなくて悪化している。直接手を出せないからヨロシクみたいなことか？

「貴方と同じようにこちらの世界に呼んだ方達がいるんですが……………実はその方達のことです」

「話の筋が見えないな」

「えっ、ああ、すみません、本当に言いづらんですけど、……………問題のある人を捕縛または、殲滅してほしいんです」

間を置いてはつきりとそう言った。

「お断りだ」

「それは無理です」

俺の答えに間髪容れずに返してきた、多くを守るために少を殺す、上立つものは選択を迫られる機会は多くある。選ばなければ全てを失う、時に犠牲を最小にする方法を選び、その業を背負わねばならな

い。この残念な神も神として上に立つ力を持っているようだが、この要求は飲めない。言うまでもないが問題があるとは言えど元は同じ世界の人間だ。それを殺す可能性を含めたものを了承できない。まず、無抵抗に捕まってくれる可能性がない、こつちが殺されかねん。こちらの意思が固いことを伝える意味とこの判断に対する怒りを込めて睨む。

「……………」

「も、」

「も?」

「申し訳ありませんでしたー! 何か気に障ることがありましか!

私が神を名乗ることですか?!……………はっ、まさか、わ、私の存在その物ですか! すみません! ごめんなさい!許してください! 靴の裏でも舐めるんで命だけはー!」

「落ち着け!」

調子狂うわー、やっぱり残念な神だ、

「……………さつき無理って言ったけど?あれは、どういう意味だ?」

「そ、それは…………、もうこつちの世界に送ることしかできませんという意味でして…………」

詳しく聞くと、強い後悔、執着などを持つ人は魂とかがバラバラになりにくいらしい。普通の人だと持つて一瞬で、とても運べないらしいが、たとえバラバラになりにくいと言えど片道分ほどしか持たないようで、元の世界には、戻せないという意味らしい。

「つまり、あつちに行くのは確定、つてことか」

「はい、それと今のままだと後5年で全ての文明が滅びますから、一人二人でもいいので対処してもらってもいいですか?」

そんなんで何か変わるのか?

「5年で滅ぶ世界に行けと…………、具体的にはどういうふうに滅ぶんだ?」

「経済の破綻から各地で紛争が起きて、それを鎮めようと彼らが力業で強引に鎮めるの繰り返しで人口が一定を下回った時が、約5年後と考えています」

「一度減ったものを元に戻す力はない、というところか。あつちの世界にいる奴は」

「無から有は生まれません。彼らの行動には生産性がなく、隣国から奪うなどの方法を取るものが多いですが、無限ではないですし、何もない所から奪うことはできません」

どんな奴送ったんだ……………

「経済の破綻を防ぐのを第一に、人としてアウトな奴を……………そういうえば捕まえた後どうするんだ？」

捕まえたとしても逃げられては意味がない。

「それについてはご心配なく。特殊なスキルを渡すので、今の貴方のステータスを確認してもらえますか？」

「どうやって？」

「ステータス、と念じてください」

言われた通りしてみると、視界に半透明な文字が浮かびあがる。

名前 北川 龍登

種族 #%5\* ; ■

パーソナルスキル 真理ノ瞳

スキル 芸術10 指導8 鑑定5 武芸3

耐性 炎熱無効

称号 爆死

なにこれ、種族バグつとるし、称号爆死って……………、パーソナルスキルって何？

真理ノ瞳 内訳

真理 全ての情報を開示し、嘘、間違い、幻覚等を見破る。(但し、視界内に限る)

千里眼 距離、遮蔽物、方角を無視し、自分の観たいものを見ることがができる。

代行者 並列して情報の処理ができる疑似人格、なお、代行者の得た知識は共有することができる。(他者に付与することもできる)

未来視 集めた情報から未来を予測する、情報が不足している場合、発動しない。(情報の処理にはかなりの負荷がかかる)

で、爆死は？ 別にネットで何かやらかした訳ではない。

爆死 爆発に巻き込まれ、死亡した者が得る称号。

効果 炎熱無効

炎熱無効 炎、熱、火魔法によるダメージを受けない。

あー、そういえばしました。爆死、微妙なところだけど……炎熱無効有り難いけど爆発に巻き込まれる前に欲しかったわー、後名前が不名誉だわ、あと魔法？

「どうかしましたか？」

「何でもない……」

問題しかない気がする。

「では、万能結界を付けますね。……何か希望は有りますか？」

万能結界って何？ コレでどうやって捕まえた後の処理ができるの？

万能結界 内訳

万能結界 指定した場所等に結界または、障壁をはる。様々な条件に対応する。

神聖 穢れを焼き払う、罪が重いと死ぬ、なお、罪の量刑はスキルの保有者に委ねられる。(利益の優先、自分本意な考え等、身勝手な意思を持ち発動すると罰が下る)

隔離 結界に捕らえた物等を現世から隔離する。(捕まえた者はこのスキルで送る)

問題のある奴を結界で隔離、何となくわかった。希望としては……

「魔法と耐性が欲しいかな、火耐性以外で」

「耐性はできますけど魔法はちよつと……風魔法だけならできますけど」

「それでいいよ、頼む」

作戦と言うほどのものは無いが命大事に、その次が結界を使った強制送還である。

「他に有りますか？」

「後はそっちの世界の情報だが……」

「えっ、ああああ！ すみません！ 忘れてました！ 最初に説明しなきやいけなかったのにー！ えーつと、あのー、えー………」

「落ち着け！」

「あああああ！ すみません時間もありませんでした！ すぐに送らないとー！」

「まっ——」

こうして北川 龍登、俺は異世界に行った。

パーソナルスキルに冒流が追加されました。

名も知らぬ世界での新生活

異世界渡ってすぐに死ぬ事だつてある。(死んでないよ)

ゴオオオオオー……………

現在、彼は空中に投げ出されている。恐らく、残念神が、トチって飛ばした先が空だったと言う話だろう、取り敢えずステータス、

名前 北川 龍登

種族 #%5\* ; ■

パーソナルスキル 真理ノ瞳 万能結界 冒瀆

スキル 芸術10 指導8 鑑定5 武芸3 風魔法10

耐性 炎熱無効 低温耐性5 雷撃・突風耐性5 衝撃耐性5 闇

魔法耐性5 聖光魔法攻撃耐性5 精神攻撃耐性5

称号 爆死

何か冒瀆とかいうのが増えてるが、今役に立つ気がしない。耐性がどういふものか分からないが、一か八かでぶつかる気はない。一番有力なのは万能結界と風魔法だが……………滞空時間長いな。

ゴオオオオオー

風を切る音がする。耳が痛い。自分を中心に円を描くように薄い膜のようなものをイメージする。

「結界！」

ゴオオオオオー

しかし、何も起こらなかった。恥ずかしい、あー、もう、くそ、……………誰もいないからよかったものの、叫ぶのはやめよう。

『すみません、その結界条件を指定しないと発動しないんです。イメージは正しいんですけど……………』

居やがった……………キレていいよな、これは。

「おい、説明責任を果たさねえだけで飽きたらず、空中に放り出すのがこの世界の神か？ 元の世界に神がいたか知らないが、中途半端に手を出して放り出すのは、そいつらよりもよっほどの無能らしな、テ

メエは」

侮辱、蔑み、怒りの三つを込めた声色で目付きを鋭くする。人によつてはこれではただ煽っている程度にしか感じない者もいるだろうが、

『ひっ……』

効果抜群、たぶん、というか絶賛落下中だった、

「どうする？ 二択だ、この状況をテメエでどうにかするか、それとも、どうにかする方法を俺に教えるか、答えろ」

これ以上文句を言おうとどうにもならない事になりそうなのでこの辺りでやめとこう、

『け、けけけけ、結界はあ！ あああああ、ぼっ、うぎよを基本に、えー………、あつ、衝撃耐性を結界に付与してください！』

どうやんだよ、イメージはそのままで、衝撃耐性ー！

バアアアン!!

クレーターができてるし、砂煙がすごい、まあ結界の外のことなんだけど、生きてりやいいか、

「あーあ、なんだかなー」

幸先の悪さを嘆くべきか、あの神に目を付けられたのを嘆くべきか、頭が痛い。

「何処か拠点になる街に行かねえとな」

《東南東5km先町があります。》

だ、誰!?

《代行者》

ん、何かあつたな真理ノ瞳の能力の中に。どうして街があるのかわかるんだ？

《落下中に周囲の地形の情報を集めました》

どういう街？

《視覚情報を開示します。目を閉じてください。》

………すげえ、街が見える360度、上からも見ることができ  
人の往来や出店に並んでる商品も見える。代行者すげえ、

《いいえ、千里眼です》

そっちかい！ いや、真理ノ瞳がすごい事には変わらないな。街の中を歩いているような感覚で街の様子を見ているととんでもないものがあつた。

「東南東はどっちだ！ 急ぐぞー！」

《左方向に進んでください》

何であんな物かと思ひながらもクレーターから這い出しひたすら真っ直ぐ進む、

「周囲の索敵頼めるか？」

《了解しました。》

歩きながらスキルの確認をしようと決めた。索敵は丸投げでいいだろうが、一応自分の体の表面薄皮一枚程の結界をイメージして耐性を全てを付与する。

大事なことから二度言おう。金がない、もう一度言おう、金がない、何だつたら武器防具の類いもない、結界はあるが。

バタバタバタバタ……

上を見上げるとヘリが飛んでいる。異世界だよね、ここ、

《元の世界にあつた乗り物とは、少々違うようです。》

思うだけでも伝わるのか、代行者便利だけど聞かないと答えないのが難点なんだよなー、どう違うんだ？

《構造を知りたい場合は千里眼を、名前や原理を知りたい場合は鑑定を、》

鑑定と千里眼か、まず原理から鑑定つと、

ヘリコプター38号

製作者 チームかんぱち

元の世界の乗り物を再現しようと思われた、試行錯誤がなされているが、作り方が全くわかっていないため、殆ど風魔法で動かされている。その量産型38号機

魔法によるゴリ押しでできているようだ、どのくらい魔法に頼っているかは、千里眼で見る。

発動させるとヘリの中に乗ってる人まで見える。空中に浮いているみたいにも見えるな、気になるのは二つ、



魔導制御板

風魔法、滞空、推進が刻まれている。

旋風刃・38式

チームかんぱちで製作された薙刀、ヘリコプターのプロペラに使われている。

暫くすると見たことの無い鳥のようなものがヘリに接近した。ヘリは速度を上げて直進し、プロペラでバラバラにする。当たったものは赤い血煙になった、制御板で浮かせてプロペラは武器、ということらしい。予想通りだったが、武器を付けるのは問題無いとして、体当たりは合理性、効率性に欠く。何よりグロいうえに美しくない。臓腑が大量に付着した機体の掃除とか誰が得するんだ。

《敵接近、オーガ三体》

……………、いや、どうしろと、……………デケえし、三メートルはあるし、風魔法って何ができるんだ、説明早く！

風魔法 ウインド ライトニング

えっ、これだけ……………、どうしよう、取り敢えず……………

「ライトニング」

晴れ渡る晴天の中、草原に一条の稲光が目映い閃光を放ち、響き渡る轟音を置き去りにした。オーガは焼け焦げた残骸と化した。滅茶苦茶焦げた臭いがする。後すぐにここを離れないと他の敵が来るかもしれない。

「どうしよう、ほんと」

ライトニング威力高過ぎ。名前シンプルなのにえげつないわー。

《魔石が有ります、どうしますか？》

何それ？ 何かの役に立つの？

《高額で売れます》

はい、回収ー、したいけどどれかわからんー、鑑定ー、  
石、石、石、石、石、石、石、石、石、石、石、石、石、石、石、石、  
石、石、石、石、石、魔石あった、

魔石（風）

オーガの魔石、雷撃を受け変質している。

三つ回収、離脱、とにかく走る。

## 代行者は優秀。

あれから敵に遭遇することはなかった。水欲しい。小高い丘を越えた所で街が見えてきたが距離がまだまだある。車で移動する現代人にとっては、精神的にも肉体的にも苦しい。体力にはそれなりに自信があつただけどなー、ちなみに俺は27歳だ、爺ではない、断じて！

辺りが暗くなり始めているので急がねばならない、街が見えてるのに野宿は避けたい。と言うか、足がパンパン。

なんやかんやで街の付近に着いた。着いたら着いたで人混みができていた状況は一人の女性と三人組が揉めているようで、そのせいで街に入れない。ライトニングを撃つことを検討してみたが、相手にオーバークルだし、何人巻き込むかわかんないし、考えるのが面倒になったのでやめた。そのまま人混みを突っ切ることにした。

斧を振りかぶった。人影が横切った。当たった。支離滅裂だが、目の前で起きたことだがその人影は、全てを無視して、街に歩いていく騒いでいた周りの声は聞こえなくなっていた。助けてくれたのだろうか、そう思った女性は声を掛けようとした。それより先に一言。「目障りだ、帰れ」

その背中では触れてはいけないものだと思った。声が出なくなった。周りの野次馬も蜘蛛の子を散らすように逃げていった。暫く、彼女はその場を動くことができなかつた。

街には問題なく入れた。難民が多いらしく大きな街の割には確認は名前だけだった。

「宿ー、雑魚寝だろうがよこになるぞー、おー」

テンションがおかしくなってるな、代行者に頼もう。できるか知らんが、あ、金無いわ。

《魔石を売りましょう》

あつ、はい、高く売れることを願おう、……………何処で売るのが？

《次の角を曲がって正面の建物です》

代行者ナビは便利だ、宿も見つけてもらおう。案内通り進むと大きな建物があつた。何か書いてあるが読めん。言語の習得頼む代行者。《言語変換を実行しますか?》

最初からしてほしかつたわー。疲れた。宿が見つかなかつたのは文字が読めないことが大きな原因だった。言わないとやってくれない。思い付いたことは全て言うだけ言ってみるのがいいかもしれない。看板には(ギルド)と書いてあるようだ、中に入ると人でごつた返していたが、通る分には、問題なさそうだ。

《一番左の受付です》

行き交う人を適当に避けながら受付に行く。言葉通じるかなー、ひとつ咳払いをして話しかける。

「あの一、魔石を手に入れたんですが、こちらが買い取りの受付で合ってますか?」

「はい、では、こちらで確認しますので魔石の方を預かせてもらってもよろしいでしょうか?」

「はい」

大丈夫みたいだ、ズボンのポケットに突っ込んでいた魔石を机の上に出す。

「お預かりしました。少々お待ちください」

それを持って机の下にしゃがむと硬貨のぶつかり合う音がして暫くすると三枚の硬貨を持って戻ってきた。

「こちらが魔石三つの合計買い取り価格金貨三枚です」

うーん、価値がわからんなー、こんな時はー、代行者ー。

《金貨は、元の世界の円を参考にした場合、一万円に相当します。十枚毎に他の効果に両替できます。一番下が鉄貨で十円相当です。》

まあ、一泊くらいできるか、三万もあれば、

「おい」

あー、足棒だわー、宿にナビゲーションよろ、代行者。

「お前だよ」

何か騒いでるのがいるなー、さっさと行くか。

「おい！ 待てって！」

あ？ 俺か？ 一応振り返る。こつち見てるやん、無視無視、無駄な時間は取りたくない。結界を少し分厚くする。ついでに防音とかできないかなー？

《可能です》

じゃあお願いします。宿までよろしく。完全無視できるけど、耳障りなんだよなー。

お待ちかねの宿、防音解除。

「おい！ ふざけんなよー！」

マジか、付いてきてた、見ると折れた剣を握って息を荒くしている。テキトーに相手してやるか、

「何？」

「何？ じゃねえよ！ 有り金渡せば許してや……………」

一瞬で間合いを詰めて顎を蹴り上げる、やっぱり無駄な時間だった。さっさと宿で休もう。あれのことは忘れて、宿に入る。

「いらっしやいませ、えー……………、当店のご利用は初めてですか？」

「……………はい？」

「あつ、よかったです。常連の方がよく似た特徴の方が多いので」

黒っぽい髪はこちらでは、珍しいようだ。真理を使ってわかったが、彼はその客を髪色の特徴で見分けていたため、確証が持てなかったようだ。

「一泊いくらかな、後飯つきで」

「えーと、食事代と部屋代合わせて、銀貨七枚になります」

「あー、お釣貰える？」

金貨を袋から一枚取り出し渡す。それを受け取った後に、銀貨三枚と札の付いた鍵を渡された。

「ごゆっくりどうぞ」

そう言うで一礼して奥の方に消えていった。札に書いてある番号の部屋を探すとすぐに見つかった。

「あああー」

ベッドにダイブ、カビ臭い。代行者よ、三つ頼みたいことがある。

《何でしよう?》

- 一、情報収集、魔法の知識、
- 二、手頃な武器、刀が望ましい、(もちろん予算内) なければ棒
- 三、金を稼ぐ方法 (効率重視)

《一と二については、調査します。三については、ギルドで魔石を換金する方法がいいでしょう》

じゃあ、できるだけ武器早く頼む。後は他の戦い方を考えないと。あと魔法、ライトニングはもう少し調べるまで使用を控えよう。ウインドは明日街の外で使ってみよう。今日は寝る。

## 移動で満身創痍からの初戦闘。

宿屋で休んだら体力全快、……とはいかないな、ふくらはぎがまだ少し張ってる。朝飯はシチューとパン。パンは少し水分が抜けてパサついているが硬いということはなかった。

「何か儲かりそうな狩り場知らないか？」

「西の森なら弱い魔物が多いですね、オーガには注意してください。東北の山には強い魔物が多いですが、いい素材が獲れます。」

《森に行きましょう。数が多い方が効率がよく、金額を増やせます。》

あと武器はあった？

《幾つか候補があるので案内します。》

着いたのは道具屋だった。入ると薬品の匂いが漂っていて、何に使うかわかんない物がいっぱいある。

《右を向ってください》

そこには樽と箱が置いてあり樽には剣や刀、箱には乱雑に防具が突っ込まれている。樽の横には、(中古一本銀貨三枚)と、書いてある。防具は買わない。金無いし、結界あるし、何より重い、こんなもの着て動ける現代人はそれこそ軍で訓練を受けた者や山岳登山経験者くらいだ。俺が経験あるのは居合くらいなので刀がいいのだ。何気なく一本の刀を手取る。

《それです》

鑑定してみても固まった。

透く水・七式

製作者 冷凍蜜柑妖精

全属性の使用に耐えられる刀。切れ味もいいが、全属性に対する耐性がないと使えない。名前は製作者の趣味。

……なんか、持ちたくない。製作者の名前が悪い。冷凍蜜柑の妖精なのか、冷凍、蜜柑妖精なのか、わからんし、元の世界のあれに対する未練か？ そんな刀作んな。取り敢えず買おう。そして鑑定持ちの人は避けよう、見られたくないから。

買いました。店を出ました。見つけました。また、冷凍蜜柑妖精の

製作物を。あれはあれだった。確信。

最初はマネキンだと思った。だが、すぐに違和感がした。手足に機械のような防具のような物が付いているにもかかわらず、身に付けてるものは元の世界で見たことのあるスクール水着、そして、鑑定結果がこれだ。

蓮野 愛 オートマタ

製作者 冷凍蜜柑妖精

水の魔石が使われたオートマタで、給仕、護衛を専門に作られている。名前と容姿とはあるゲームキャラクターである。

あつ、買わないよ。しかし、こつちに来た奴自重しろよ。金があるんだよな、狩りだー、狩り、金、金。

さて、街の外だ。あらためて見ると何か異世界感が無い街だ。デカイビルが建ってる。三本も、まあ、ウインドの効果からいこう。

「ウインド」

風が吹いた、えっ、終わり？

《魔法についての調査結果を報告します。ウインド、ライトニングは基礎魔法というものでそのまま唱えると、気象として現れます。ライトニングが落雷、ウインドがそよ風、ブレイズは発火、バーストは範囲が広くなります、ウォーターが一定の範囲に雨、アイスクルは霰に、アースは植物が成長、ストライカーが弱い地震、ここからイメージなどで作る応用魔法と生活魔法に分かれます。》

ふーん、早速やってみますか。手を前に出し、風を球体にするイメージ、圧縮できるかな。

「ウインド」

緑色の球体ができただ。手を前後に動かすと球体が一定の距離を保ちながら付いてくる。手から離れんな。

《球体を飛ばすイメージをしてください》

掴んで投げる感じがいいか、ピッチャー振りかぶってえー、投げたー！

ヒュン、……………バアアン！

弧を描いて飛んでいき地面に当たって爆発した。竜巻を作るイ



メージもできた。さて、実験も兼ねて戦いに行きますか。

さつそくだが疲れた。森遠い。後この世界には空間魔法みたいな  
のない？

《有りますが、万能結果を使えば似たことはできます。》

……聞けばよかった。どうすんの？

《結界で隔離して、異空間に送り、出したい場所に結界をはり、異空間  
から出します。ただ、スキル保有者をこの方法で移動させることはで  
きません。》

俺は無理、がそれ以外は可、といったところか。じゃあ森の敵を隔  
離でこつちに持つてくることはできるかな？

《可能です》

よし、千里眼で探すぞ、後は周りに人が居ないか確認して、目を閉  
じる。代行者も探して、

《こちらはどうぞでしょう》

ゴブリンですかー、……汚いな、一体だし丁度いいか。結界で  
囲って隔離、目を開けて少し離れた所に結界を張り、ゴブリンを出す。  
ゴブリンは驚いていたが、こつちに汚い声をあげながらこん棒を持っ  
て走ってきた。居合やってたけど生き物を斬るのは初めてである。  
刀に手をかけて構える。

「はああー」

こん棒を持っていた手を切り落とす。ギャアギャア騒いでるが気  
にしない。足で押さえて背中から貫く。刀の切れ味もいいうだ。  
ゴブリンについては感想なしである。社会で生きるとは、野生動物  
の生活よりある意味残酷である。金が必要だから殺す。今ゴブリン  
を殺した理由はこれだ。街を荒らした、人を拐った、どんな理由を付  
けても殺したという結果では同じだ。正当化なんてものに意味など  
無い、自分への言い訳でしかないのだから。魔石何処にあるの？

《体の中心、心臓の近くにありません。》

面倒だな、前のとときの魔石は、ライトニングで丸ごと吹き飛ばした  
残骸の中にあつたけど、あの攻撃で傷ひとつ無かった。魔石かなり丈  
夫なんだな、変質してたけど。

《魔石は魔力を貯める媒体などになるため、魔法による攻撃では破壊できません。》

纏めてライトニングで死体を焼いて後から魔石を回収、がいいかな？ 変質してると値段変わるの？

《風の魔石は安いので共通の買い取り窓口で売った方が高値がつきます。》

何で安いのか？ 逆に高い魔石は？

《需要が無いからです。水の魔石が高いです、また、大きさによって値段が高くなります》

とにかく数狩って、魔石集めて金を集めないとな。

斬ったゴブリンの山の上で胡座をかく。何匹ぐらいと戦っただろうか。

《87匹です》

おう、……………この辺りにどのくらいゴブリン居るか知らないが全滅させてないよな。

《現在、この森には221匹が生息しています》

結構いるな、まあ滅ぼすつもりもないのでこの辺りで引き上げよう。能力の確認としては有意義だった。

流石に一気に換金すると怪しまれるので、今日は5個換金した。ゴブリンの魔石はオーガの魔石より少し小さいくらいだった。金貨五枚を受け取り、ある店を目指した。それは千里眼で見たある金属を売っている店だ。

「はあ、……………」

店主いきなりため息だよ、まあ、吐きたくもなるな。

「あれ金貨五枚で買えるだけ売ってくれ」

「ああー 持ってけよ！ チクシヨウ……………」

荒れすぎだろう。何を買ったか、それが大事。

緋緋色金

伝説の金属、純粋な物は柔らかく、合金になると非常に固くなる。

これが一キロ銀貨一枚、何故こんなことが起きているかと言うと、簡単に言えば値崩れ、需要が無いほど大量にあるのだ。大量にある理

由は俺の前にこの世界に来た奴が自重せず大量に作ったり、掘り出したりしたことが原因で、値崩れはそれを商人や貴族が買い締め、そこで様々な街などに売ってその差額で儲けようとした。が自分が思い付くことを隣の人が思い付かない訳がない。売り出す街が被って市場から溢れた、買い手が付かなければどんな宝石も只の石だ。移動させるのだから金が掛かる。量が多ければ尚更、売れるまで荷車を圧迫するならここで身軽にするために処分している。それが、伝説の金属一キロが中古の刀より安い訳だ。

「じゃあ、ここに置いてくよ」

金貨を机に置き、結界で50キロの緋緋色金を隔離する。金が入り次第安いところから買っていくつもりである。何故金属を買ったか？ 伝説の金属だよ、買うに決まってるじゃん。まあ、少し使い道が思い付いたのもあるけど、量が多いのはそのためだ。ここで正式に代行者に依頼を出す。

今日は前より少し大きな部屋のある宿に泊まった。値段は銀貨一枚分高くなつたが、代行者、オートマタの作り方を一通り教えてくれ。《基本的には、機械式と魔導式に分けられます。機械式は決まった動作を行うことを得意とするタイプですが、行動を予め決めておく必要があります。そして、そのパターン以外の行動は取れません。重量は魔導式に比べると非常に重い物が多いです。魔導式は術式を人形に組み込み、動かします。自我の有無でも分かれますが、有るものは自ら考え行動し、行動を予め決める必要はありませんが、行動を強制することはできません。無いものは機械式と同じです。》

んー、魔導式で自我有りで作るか、自我どうすんの？

《仮初めの命、靈魂操作のスキル保有者が作る。または、移す方法とオートマタに宿らせる機構精霊を作る方法があります。》

機構精霊は俺でも作れる？

《恐らく可能かと》

わかった、四つ作りたから材料を教えてください。

《わかりました》

緋緋色金を取りだし作業を開始する。術式を代行者に最適化させ、

それを緻密に刻んでいく。細かい部品は、溶かして、板状にしてそこから削り出す、この作業は夜通し続いた。後日、宿の主人に苦情を言われたのは言うまでもない。

ギルドマスターに目を付けられた。

はあく、寝てないときついわー、そんなときの強い光は特にきつい。今日はこのまま寝てやろうかと思っただが、それを許さない者が。

『朝〜』

『朝〜』

『おはようですか?』

『おやすみですか?』

『マスター朝〜』

『ご主人様です。』

『マスターです。』

『ご主人様です〜!』

騒がしいー、頭に声が響くー、眩しいんだよこいつら。完成した機構精霊はランタンだった。術式に魔力を流し、中に火を灯す。これで完成したのだが、めちやくちや明るいのだ。それが四つ宙を舞っている、寝れるか!

笑顔の向日葵

雪解けのエーデルワイス

蒼い紫陽花

妖艶な黒バラ

できた機構精霊のアイテムとしての名前がこれだ。全て花の名前が付いている。目立つので今は隔離してある。

「眠い……………」

ギルド目指して、足を進める。今持っている魔石を全部、換金して、隣街に行こうと思っている。列車が通っているのでそれに乗っていきたいのだが、金貨30枚と高い。街でも買い物をするので、手持ちの金を増やしておきたい。目立つの覚悟で、さっさと受付を目指して歩くと背後に違和感、誰かが立っている気がした。

「中々腕のいい奴がいるな」

「これのことか?」

振り返り、刀の柄を向ける。ついでに威圧する、

「……………只者じゃないな」

「お前は誰だ、俺は北川。金がいるから魔石を換金してもらいに来た」  
シンプルに自分の目的を告げる。

「このギルドマスターのクライアント、最近魔石を持ち込む奴がいるって、聞いてどんな奴か見に来たんだ」

「へー」

何かあるな、顔色を見る限り頼み事だろう。換金と移動に制限のにかかること以外なら受けようと思う。

「魔石は魔物を倒して手に入れてるんだよな。だったら、戦い方と解体の方法を他の奴らに教えてくれ、頼む」

「解体は無理。戦い方は、どの程度か見ながらになるけどいいか？  
ただ一回隣街に行きたいからその後でいいか」

解体はしたことがない、だって纏めてライトニングだもの。

「隣街か、そりゃ金があるか。往復考えると一ヶ月掛かるな」

「列車なら二日と聞いたが……………異様な差があるな」

「列車かー、まあ、大差ないか。実は領地を移動する時に税を取られるんだが、貴族とかが道をわざわざ領地出入りするようなクネクネした道を作るように、袖の下を渡した……………何て話がある、実際無駄に長くなってるから十中八九事実だろう。そのせいで列車でも歩きでも掛かる金が大して変わらん。しかもそんな作りだから、奇襲しやすい場所も多い、俺としても列車がおすすめだな」

地図とかがなきや分からんだろうな、どんだけ欲望剥き出しだよ。  
まあ、貴族とは、関わらない方がいいだろう。

「貯めてた魔石を全て換金してほしい。大体80個ほどある」  
袋を受付に置く。周りが静かになった気がする。

「……………」

「おいおい……………明日まで待つてくれないか、そこまでとなると……………」

黙る受付と呆れるギルマス、まあ銀行でも100万円近い金額をいきなり出すのは難しい。ATMだと一回では、出せない所もある。

「わかった」

「…………助かるよ、今から時間あるか？　少し手合わせを頼む。実力を疑う訳ではないが、自分で確かめたい」

決意を持って見られると無下にはできない。

「場所は？」

「あそこの奥に訓練所を兼ねた庭がある、そこでどうだ」

「おう」

適当に返事をしてギルマスを鑑定する。

クライン

種族 人

スキル 剣術6 体術3 投擲1 罨1

耐性 火熱耐性6

俺大丈夫か、剣術とか体術とかないぞ、精々武芸3だ、

《武芸は五つ以上の戦闘スキルを統合したものです。尚、武芸のレベルは統合された物の平均によって決まります。》

武芸4 内訳

剣術7 体術7 棒術3 格闘術2 扇1

よかったー、何か4になってる。ゴブリンが原因か？　扇とか使った記憶無いんだけど、あと体術と格闘術の違いがわかんない。

《体術は多くの戦闘スキルに関連する体捌きなどです。格闘術は相手を殴るなどの素手で攻撃するスキルです。》

なるほど、回避、移動が体術、格闘術が攻撃、こんな認識で大丈夫だろう。

目の前のクラインは剣を抜き、構える。こっちは刀に手を掛ける。

「抜かないのか？」

「わかってるだろう？　隙を作りたいなら何か投げてみたらどうだ？」

恐らく間合いに飛び込めないのだろう。スキルに投擲があったので、それを勧める。何が飛んでくるか知らんが、

「そんなことで崩れるとは到底思えないが……………」

「なあ、何で真剣でやるんだ？　替わりの物とかないか？　峰打ちぐ

らいするけどさ」

「その方が本気でやってくれるだろう」

「そりやそうだ」

「行くぞ！」

一気に距離を詰めて体を間合いの外に残し、突きを出す。それを抜  
刀し跳ね上げ、一步踏み込みクラインの首筋に刃を添える。

「これでいいか？」

「……………想像以上だ」

刀を鞘に納める。それと同時に光の塊が飛んできた。

『すごい』

『パチパチー』

『……………』

『ご主人様大丈夫ですか？』

一応見学させてみたが、……………どうなんだろう？ 参考になるレベ  
ルの戦いだとは思うが知識を先に与えた方がよかっただろうか？  
まあゴブリンでは技を見せる的くらいにしかできない。

「何か思ったことがあったら言ってほしい」

『はい、かつこよかったー』

『はい』

『私達には、とても真似できない、素晴らしい技術です。』

『あつという間で、凄かったです。』

少し個性が出てきたような気がする。ランタンの動きを見てもよ  
くわかる。明るいオレンジの光を出す向日葵は今ほぐるぐる俺の周  
りを回っている。定位置は俺の右側、白い光を出すエーデルワイスは  
頭の上に乗っている。蒼い光を出す紫陽花は俺の正面、移動中は後ろ  
につく、黒い光（禍々しくないよ）を放つ黒バラは左側を飛んでいる。  
「また明日来ます。魔石の方をよろしくお願いします」

金と言うのは生々しいし、頼み事をするので一応敬語を使う、今更  
だが。今日は眠いのでさっさと宿に行く。勿論オートマタ製作の勉  
強は怠らない。



襲撃された、殲滅した、

ギルドで金を受け取って、列車乗り場を目指した。この辺りだけ、何か近代化している、といえど一昔前の、ノスタルジックな印象を与える。あのビルとは違い、街との調和は乱していない。この建物を作った人物のセンスはとてもいいものだ。鑑定してみる。

製作者 魔導建設(株)

設計者 Scarecrow

スケアクロウ………案山子か、ここで真理発動。

Scarecrow (鳥山 案子)

真理を持つ俺の前では隠し事や嘘は通じない。解らないことも検索する情報があれば知ることができる。足りないときは代行者に情報収集兼処理を頼む。今のところ、未来視は出番なし。

『ご主人様〜』

『マスター………』

『マスター、どうかしましたか?』

『ご主人様、これなんですか?』

「ん?それは時計だ、時間を知ることができる。」

黒バラの質問に答える。だが、反応を見る限り、構ってほしかつただけみたいだ。

『そうなのですね!ええと………あれは、何でしょう?』

すごく嬉しそう、こつちが引くぐらい………眩し!向日葵がこつちを覗き込んできた。

『むう………』

エーデルワイスは頭の上、紫陽花は後ろにいる。そうこうしている間に列車が入ってきた。予め買っておいた切符で乗り込み指定された場所を探す。六両編成で前から運転車両、VIP 車両、食堂車、残りが普通の客席。そのうちの二両は個室があり、部屋番号3を目指す。作業もできるし、素性も隠せるし丁度いい。中に入ると少し狭いが作業する分には問題ない広さの部屋だった。狭いのは通路とこの部屋の入口ぐらいだろう。早速作業に取り掛かる。緋緋色金を出し、

熱して溶かす。まあ、実験の意味もあるが少し怖い。元の世界でこれやったら体が欠損するだろう。この世界に来て一番緊張した瞬間である。意を決して溶けた金属に手を入れる。

『マスター!!』

『ご、ご主人様!!』

あ、先に説明しとけばよかった。悲痛な声が頭に響く。炎熱無効がどの程度か、確かめるのも兼ねて、やってみたが、駄目だったときのことを考えてからやるべきだった。手の方は何ともない。

「よう」

『『『良くないです!!』』』

この後、滅茶苦茶文句言われた。

辺りが暗くなり始める頃には、満足の行くものができた。それは若干赤っぽい金色の髪である。手ごと熱しながら細く伸ばした甲斐あって非常に綺麗だ。それを隔離で仕舞い、部屋の外に出る。

『どちらへ?』

「トイレ……………」

紫陽花に話し掛けられたが、答えてトイレを目指す。

トイレは食堂車の手前、連結部分の近くにあるので、食事も済ませておこうと思ったが、手をしっかり洗っておくべきだった。食事というものは五感で味わうものだとある人は言った。今食べている物は美味しいのだが……………」

「金属の臭いしかしない……………」

少し気分が悪い。特に胸の辺り、落ち着いてから戻ろうと思ったが、後ろの車両からガラスの割れる音がした。しかも連続でだ。代行者があった!

《何者かが侵入したようです。目的は物取りでしょうか、数は23人、

……………急いで戻りましょう》

走って戻る。そんなに距離がある訳でわないので千里眼は使われない。部屋の前に着くと扉が開いていた。中を見るとガラスの破片が散乱しており、薄いカーテンを風が揺らしている。機構精霊の姿は見つからない。眩しいほど光っているのが災いした。今は夜、襲撃する

側からすれば目印でしかない。代行者、犯人はどこだ！

《VIP 車両です。》

誰ともすれ違っていないはずだか？

《天井を移動していました》

姿を見られないことを重視している？ 情報が足りない。千里眼

でVIP 車両内を見てみると、この車両の客とボスらしき男が喋っている。そんなことよりモゴモゴ動いている袋だ、光ってるし十中八九これに入ってるだろ。迎えに行くか。ただ、人の物を盗む者には相應の罰を与えねばならない。

VIP 車両。ここは車両その物がひとつの部屋となっており、両側の入口は近衛兵が守っているが、今は床に倒れ伏している。鎧と兜の間隙からナイフを入れられ、一撃で仕留められている。

「金目の物、金は全て渡せ。あと武器もだ」

「王から賜った首飾り以外は全て渡す……だから」

「全部だと言った」

「しかし……」

ガシャン！

近くの袋を蹴った。その後ナイフを抜いてもう一度問いかける。

「命と首飾りどっちを取る」

恐怖が心の底から湧き上がってくるが、それでも渡してはならない。その言葉を口にしたとき、それは音も無く現れた。

こちらVIP 車両天井上、北川龍登です。何故ここにいるかと言うと奇襲が手っ取り早いからです。千里眼で中の様子を見てどういう手順で制圧するか決めて、後は機を待つ。方法は窓ガラスを防音結界で覆い、ボスと思われる男の後ろに出る。周りの奴は結界で覆い、邪魔が入らないようにする。そこからボスを押さえる。人質に手を出そうとしたら結界で守ってやるか。俺が突撃してから死なれたら目覚めが悪くなる。もう少しで突入ポイント……コイツ何晒しとじゃ！ 制圧から殲滅コースに切り換えだ！ 突入と同時にウインドで作った珠をいくつか飛ばし、結界にいっしょに閉じ込める。珠は圧力を解放し、その猛威を振るった。結界内はミキサミみたい。人が

ゴミのようだ。まあ死んでないと思うけど、こうやって見ると自信ないな。人間って丈夫だねー、で頭の隅へと追いやる。さて、コイツについて、まーだ気づいてない。ブツ叩くか。

「ぐあー」

面白いように飛んだ。左手で持っている鞆を軽く振った程度だが壁まで飛んだ。あと首飾りのオツサン、こっち見すぎ、あれ……オツサン気絶してない？ まあ、いいや。

「いてえ……、誰だテメエ！ぶつ殺してやる！」

自分の立場がわかってないようだな、お前は俺が作ったもの足蹴にした。その意味を教えてやろう。

「……言ったな、お前は殺される覚悟はできてるんだな」

ナイフを手に持ったボスらしき人物。コイツ多分俺と同じで送られてきた奴だ。髪が金髪なのに眉や睫は黒、金髪も若干色落ちして所々黒い。どうやって染めたのか気になるが、隔離でつきだした方がいいか、何て考えてたら、オツサンの方に突っ込んでいった。と言っても俺の真横だが、人質で脅すか、クズだな。結界を張って次の反応を見る。

「おいーお前……ら、……」

「今気づいたのか……」

仲間に指示を出そうとしてやっと気づいたか。あらためて見ると手や足が曲がってはいけない方に曲がっている気がするがそこは安定のスルーで。わざと一歩、音をたてて近づく、

「く、来るな！来たらコイツを殺すぞ！」

「できるならやってみろ。挑戦するのはいいが、その後はお前の首と胴体が泣き別れするだけだ」

それに触発されたのか奇声をあげながら振りかぶったナイフをオツサンの首に押し当てる。が、結界に阻まれ、刺さることはない。コイツアホだ。救いようが無いくらいに。ここは、駆け引きに持ち込むだろ。こんなのばっかり送ってたら隔離出番ないぞ。人の話を聴かない奴は嫌いだ、空気が読めないうえに救いようのないバカは嫌いだし、見ててイライラする。何か顔色悪いな、今頃理解したか、さ

てと……………さよならだ。

カチン

刀が鞘に納まる。その後ゴトリと音を立てて何かが床に転がる。再び抜刀、刃をなぞるように視線を走らせ、返して繰り返す。ぱつと見刃零れなどはないがやはり血が付いている。血払いをして刀を鞘に納める。部屋が汚れたがまあいいだろう。さっさと袋を開ける。「大丈夫か?」

眩しい塊が激突してきた。そして頭に直接響く爆音、耳に指を突っ込んでも治まらない、泣き付いているのだと思うが、正直何言ってるかわかんない。

「落ち着け!あと泣き止め!」

『『だつてえく、えつぐ、』』』

『すん…………』

一応落ち着いてくれたようだ。今思えばこの世界に生まれて3日目で拐われたのだ。たった数分でもその不安は計り知れないだろう。自分を親のように頼ってくれているのだ。それにふさわしい接し方があるはずだ。

「お前らの本体となる人形に関する希望はないか、勿論それ以外でもいい、……………ここは譲れない所だが、お前たちは俺の大切な娘だ」

『嬉しいです!』

『嬉しい…………な』

『ありがとうございます……………ごさいます!』

『ふあ〜』

感極まった者から呆けているのまでいるが次の一言で戻ってくるだろう。

「まず一体、お前たちの体を作ろうと思う」

「ふうー」

全員の希望を纏めたノートを閉じる。現在の希望だが、殆どおまかせである。俺の思うように作ってほしいらしい。現時点でも叶えられる希望は黒バラの名前をつけてほしいくらいだ。アリスとアイリスで迷ったが、確かアイリスは花の名前だったので紛らわしいので、

アリスと呼ぶことにした。そのうち他の者も名前を欲しがるかもしれないので、一応候補を考えておく。勿論オツサンの意識が戻るまでだが。機構精霊は仕舞っておきたかったが眩しい以外弊害もないのでそのままだ。それにあんな事の後なのでできるだけ一緒にいてやりたい。

「うっ」

起きろオツサン、お前待ちだ。何か知らんけど気絶しおって。

「気が付いたか？」

「ひいいい！」

何故悲鳴？状況が呑み込めてない感じ？OK説明するよー、

「覚えてないか、一応俺が助けたんだが……………」

手っ取り早く、安全と敵ジャナイヨーアピール。ハっとしてすぐに落ち着いた。理解が早くて助かる。と言っても事後報告ぐらいだけ。説明を終えて、残りの生きてる連中をどうするか相談する。

「街の自警団に突き出すといいだろう。報酬などは後で相談すればよいと思う」

「そうですね、死んでるのも突き出したら、報酬貰えますかね？」

「んー……………、それが賊とわかるものがあれば問題ないとおもうが……………」

「何か？」

「いや、何でもない」

死体とその首、とその仲間を隔離して消す。

「では、失礼します」

驚いていたけど説明はしない。後が面倒くさそうだからな。食堂車の方に進んでいくと後から四つの光がついてくる。

## 発展と影

近代化しすぎだろう……、駅に降りてそう思ったのは、元の世界に戻ったのではないかという景色があつたからだ。違いは、点字ブロックや、改札がないことぐらいだろう。さて、金属だ。ここでは、アダマントタイトを買い、体をこれで作る。他にも気になる素材があれば買うつもりだ。代行者案内頼む。

《了解しました》

はあー、買ったわー。アダマントタイトは一キロ銀貨五枚と意外に高かったが、銅貨一枚で、いい魔石がたくさん買えた。材料も揃つたので本格的に作ろうと思う。全体的に街の売り物の値段が安過ぎるのが気になるが、工房あるか？ 硝子細工とかもできる所だといんだけど。

《該当する場所を発見しました。三カ所あります。》

一番近い所を頼む。

《了解しました》

着いたけど、何か所々ボロい。店なのか普通に家なのかよくわからんな。入る勇気でねえー、ちなみにここ以外は何処にある？

《十キロ先に一軒と隣街に一軒ありますが、現在物件の持ち主がいません。》

いつかは拠点は欲しいけど今そんな余裕はない。実質ここ一択じゃん。さっさと入ることにした。

「すみませんー」

返事が返ってこない。留守かと思つたら、奥で何かが割れる音がした。

《ガラスの容器です》

あつ、その情報は結構です。音がした店の奥に行く。ガラの悪そうなのが五人いる。それに囲まれる形で、店主とその息子みたいなのが囲まれてる。事情は知らんがここを逃すと工房がないのでまずは、掃除から始める。刀を抜いて鞘も同じように構えて擬似二刀流、事情がわからなので制圧するため刀も峰打ちだ。ついでにあの二人には結

界で守っておく。素早く距離を詰め、ボコボコにした。ただ、その後をどうするか？変な事に巻き込まれないといいが……なら手を出すなど？もうやってしまったわ！と。

パリン！

後ろで音がした、主に俺の後頭部で、どうも殴られたようだが結界のお陰で何ともない。油断したつもりはないがもっと注意しなければいけない。たった一撃でも辺り所が悪いと死ぬ。当然叩いた奴には渾身の峰打ち（フルスイングで顔面を殴打）。あつ、歯抜けた、白目剥いて気絶してる。これで片付いた。後はここを貸してもらおう。何事もなかったかのように交渉に移る。

「すみません。ここ貸してもらえませんか？ ほぼ1日くらいなんですけど……後硝子細工に関する指導もお願いします。いくらになります？」

平静、笑顔、抑揚、身振り手振りを大きく。この聞き方なら、暫く固まっているだろう。そのあいだにこいつらの仲間を千里眼で探す。笑顔は目を閉じていることを誤魔化すため、身振り手振りはもう少し練習が要りそうだな。こんな動きでは、油断して出てくるということは無さそうだ。刀抜いたままだし、うくん、見たところいな。発見したら報告頼む、代行者。

《了解しました》

「あの、何を作るんですか？」

「ん？」

「も、申し訳ありません！この子には後で……」

「人形を作ろうと思ったんです」

怯えんでも……、こういうときは気にしてない風で言葉を被せる。

「広い場所を借りるのと、硝子で人形の目を作ろうと思ひまして、ここなら両方揃ってますし」

「そうですか……」

「1体分の組み立てと制作、あと4体分の目を作ろうと思うので、硝子はここのを使おうと思うんですけど全部でいくらくらいになります



かね？」

「1日でしたら、銀貨五枚ほどになります。硝子は使った分に応じて額を決めています」

ふーん、さて、まずは伸びてる奴らを纏めて店の外に出す。結界で纏めてポイツ、この二人には、消えたように見えるだろうが、外に放り出したことと外の纏めた奴らを見て安心したようだが、このあと熱した硝子を触ったり、大量の緋緋色金とアダマントライトを出して熱しながら加工したりしていたら、驚きを通り越して呆れてた。人の口つてあんなに開くんだな。そんなことを考えながら体や手足を夜通し、丁寧に作り込んでいく。いつの間にか2日経っていたと気付くのが料金を支払ったときなのは彼の噂の始まりに過ぎない。

稀代の人形師だそうです。

あー……………、栄養ドリンク欲しい、何がキツいって髪を付けていく作業が地獄だ、精神的にも肉体的にも、植毛とかよく知らないが、同じくらい大変ならやる方もやられる方も勘弁して欲しいだろう、昨日の夜から始めたが、今は太陽が沈み始めている。そして今最後の作業を残して一体の人形が完成した。

『こちらは誰の体になるんですか？』

後は機構精霊を宿して完成、なのだが、実は少し材料不足で小さくなった。一応まだ金属はあるが、全部使うと次に差し支える。その為、体格が中学生位になった、顔は美形に作ったので、表情がない今、非常に神秘的な雰囲気を漂わせている。見た目は普通の人と変わらない、中身は球体関節なのだが、その表面を膜状にしたアダマンタイトと緋緋色金で覆って一部を塗装してある。今の説明を聞いてわかったと思うが、目の前に全裸の女子がいる。服どうしようか、

『早く教えてー、誰のー、』

『私ですか？』

『……………』

「今回は向日葵の体のつもりで作った、次は材料が入り次第……………かな？後これがみんな用に作った目だ、」

『わあー！』

『綺麗ですね、』

綺麗だけど単体で見ると気持ち悪いな、目が合うとギョっとする。さて、オレンジの光を出すランタンを開く、そこから出た光は真っ直ぐに人形の胸の辺りに吸い込まれていく。

「どうだ？」

手を握って見たり足を上げてみたり、体を確認し、その後満面の笑みで、俺に飛び付いてきた、

「ありがとうございますー！」

若干赤っぽい金髪を撫でる、今は結んだりしていないのでストレートで、長さは少しバラバラ、これについては切り揃える。その前に服

だ、店に行くにしてもそこまで裸は不味過ぎる。汗臭いだろうが、シャツを貸してやる。何せこつちに来てから全く洗ってない。ついでに俺の服も買うか。

「これでいいですか？」

「……………何かもつとヤバくなった気がする。他に着られる物もないな、ん？何か忘れているような……………？あー、賊突き出すの忘れてた、……………ん、賊の中に三人女がいたような、そいつのズボンだけ出すとか出来る代行者？勿論サイズの合うやつ

《了解しました》

手の中に黒いズボンが現れる、少し汚いが……………まあいい、一時的なものだし、服もある程度欲しいし、自警団に突き出すか、

馬子にも衣装という言葉がある、どんな者も身なりを整えれば立派に見えるという意味だが、今の俺達は周りにどう写っているのだろうか？現在シャツを貸している俺は、下に着ていたタンクトップとジーパン、土木工事のオッサンみたいな格好だ（つるはし持てば炭鉱のオッサン）、向日葵は俺が貸したシャツと賊の煤けた黒いズボン、髪は長さが疎らで俯きながら歩いている。下着はなし、賊から剥ぎ取るのも考えたが可哀想なのでやめた。後、変な誤解を生まないためにも、

《着きました》

小屋じゃん、汚ねえ！辺りに漂う馬糞臭、最初の話が悪かったかなー、馬小屋来ちやったよ、20人も入らないよこれ、

「ふうー……」

ため息を一つ吐いて馬小屋の扉を開く。三人のオッサンと青年一人が絵札を使って遊んでいる。……………仕事しろよ、

「あ？何のようだ、今忙しいんだ、用がないなら帰った、帰った、」

三人とも笑つとるし、かなり弛んでるな、喝入れるか、

「列車を襲った賊を引き取れ、」

苛立ちを込めて、声は低く抑揚を抑えて言う。みんな固まってる、一人は気絶してる。俺そんなにおっかない？

《悪魔系スキルの影響でしょう》

悪魔系？……………思い当たるのが冒流しかないがこれか？

《それです。悪魔系のスキルの保有者は威圧で生物を殺せます。ある程度の力等を持つものは死にません》

怖！結構いろんな奴脅した気がするんだけど、

《今の所、死者が出る程強力なものは出していないので、問題ないかと》

加減すれば大丈夫なのか？後ブチギレたら大変な事になるんじゃないだろうか？

《そうですね》

他人事く、俺結構短気なんだけど、対策とかないの？

《現時点ではありません》

断言しないで欲しい。あんまり固まってるから忘れてたわ、刺激で戻すか、隔離から取り出した生首をテーブルの上に叩き付ける。

「なっ、」

「おいおい……………」

「こいつは……………」

三者三様の反応、気絶は除外だ、

「こいつがボスで残りは小屋の外に出してある、いくらくらいだ、報酬としては？」

「……………」

「こいつは……………こいつには懸賞金が懸かってる、ただ、今すぐ用意できる額じゃない二日待って欲しい。頼む……………」

あの顔色悪いよー、威圧効きすぎ、それとも首のせい？俺？全然平気、昔から肝も据わってるし、常に冷静、テレビで放送される手術の映像も直視出来る俺、このくらい……………うぷっ、……………ん、あぁー、喉が熱い。触るのは精神的にアウトでした。逆流してきたものを胃袋に戻す。ここは気合いだ、

「その他の賊はどうだ？……………20人いる。」

水欲しい、マジで、喉が燃えているようだ、あっ、お茶？ありがとう、熱っっ！猫舌は耐性があっても健在のようだ。

「状態にもよるが死んでるなら銀貨五枚、生きてるなら金貨一枚が基本だ、」

代行者曰く、大体が奴隷墜ち、一部を処刑が一般的な処理らしい、恐らく処刑は国の力を示すためだろう、不幸な生贄にはなりたくないものだ、小屋の外に出たオツサン達を見送り戻ってきたオツサンから金を受け取る。

「金貨十五枚だ、死んでないが、状態がな……………」

「ああ、受け取る、」

服と宿だ、まず服、代行者安いところで頼む、

《了解しました》

安い所でも、三着程揃えると金貨二枚程になった、女性は高いので向日葵の分はさつき受け取った金貨の残りで買うことにしたが、流石に付いていくの気が引けるし、回りの目も痛いし、店員にさつき受け取った金貨の入った袋ごと渡した、勿論、別の店だ、さつきの店は安いだけあってシンプルなもの（農民風）が多く、似合うものがないためだ、暫くして、綺麗に着飾って……………と思ったら、店に入ったときと同じ格好で紙袋を提げて戻ってきた。

「着替えて来たらよかったと思うんだが……………」

「イヤです！着てるところはご主人様に一番に見て欲しいんです！それに、ご主人様も着替えてないですよね？」

「そうか……………」

まあ、俺は何でもよかつたし、店で着替えられる場所がなかったせいでもあるが、

「じゃあ、宿行くか、」

「はい！」

結果を言うと鉢が三つ駄目になったが、向日葵の髪を切り揃える事ができた、切った髪はまた緋緋色金として使う、

「どうです？似合ってますか？」

着替えてきたようだ、ん？ドレス風の服だな、スカート等が短いのは、前に渡った人のデザインのせいだろう、

アイドルのステージ衣装みたいなんだが……………」

「可愛いけど、それ普段着？」

「はい！他の服も着るので見てください、」

ハキハキ明るく笑顔を絶やさない。向日葵の印象はそんな感じだ、ちなみに向日葵は戦闘用である。真理と鑑定を併用して、能力をみる。

No name オートマタ

機構精霊 笑顔の向日葵

制作者 北川 龍登

パーソナルスキル 強欲

スキル 火魔法7 風魔法7 自動修復5

耐性 毒・酸無効

称号 生きた人形

パーソナルに強欲入っとする！何で？生きた人形って何？魔法は目に使った魔石、自動修復は体に刻んだ複数の魔方陣（刻印）、耐性は人形固有のもの、名前は付けていないのでわかるが、

《強欲は自力で獲得したものです。生きた人形は制作者が、【称号 稀代の人形師】を持っている影響です。》

はい？……ステータス、

名前 北川 龍登

種族 #%5\* ; ■

パーソナルスキル 真理ノ瞳 万能結界 冒涇

スキル 芸術10 指導8 鑑定5 武芸4 風魔法10 人形

作成10 義体・義肢作成10

耐性 炎熱無効 低温耐性5 雷撃・突風耐性5 衝撃耐性5 闇

魔法耐性5 聖光魔法攻撃耐性6 精神攻撃耐性5

称号 爆死 稀代の人形師

稀代の人形師 人形作成10 義体・義肢作成10

この称号の保有者が作る人形は生きた人形の称号を得る

いつ付いた、この称号、聖光の耐性も一つ上がるとし、ステータスが変化したら教えてくれる？

《了解しました》

あー、後冒涇と強欲の効果を教えてー、

《了解しました。解析結果は後日になりますが、よろしいですか？》

ん？時間が掛かるのか？なんか嫌な予感がするが、知らなければ、対処も予防もできない、とにかく今日は明日に備えて寝る事にした。

## 一番常識外れな代行者

洗面器で顔を洗い鏡を見ると、切れ長の細い目と目が合った、まあ、自分の顔なんだが、この世界に来る前と全く変わってない。癖の付いた髪に伸びてきた髯を見ながらそう思う。最近、特に物入りなので、稼ごうと思うが、狩場の情報がない、代行者曰く、この辺りは平原のど真中らしく、千里眼で見てもだが魔物らしきものは確認出来なかった、結構遠くにある山岳には居るようだが遠い、それに平原では、誰に見られるかわからない、悪魔系のスキルを使って見るつもりでもいるので特に人目は避けたい。効果の方はまだわかっていない。まあ、長距離を歩くことにげんなりしている。

「おはようございまーす、……………エへへ」

向日葵も起きてきたようだ、勿論満面の笑みだ、戦闘用に作ってはいるが戦闘の知識や経験がある訳ではないし、その辺りの確認もするため連れていく。

移動中だが、説明しよう。魔法を使った攻撃だが、目の材料に使った風の魔石と火の魔石を媒介にする。目にしたのは宝石のように綺麗だったためだ、右は赤く、左が黄色のオッドアイ、今使えるのはウインド、ライトニング、ブレイズ、バーストの四つ、近接戦闘を想定して、アダマンタイトを表面と内部に使われている。内部のアダマンタイトは、体の数カ所に空いた穴（普段は膜に覆われ見えない）からだし、体を覆い防具にする他、武器にして攻撃する事ができる。まあ、そろそろいい距離だろう。代行者、誰かに見つからないように周囲の警戒を頼むな、後悪魔系のスキルについてわかったらおしえてくれ、《了解しました》

と、戦う前に出来る事の確認、

「まず、ブレイズを使って欲しい、できるか？」

「わかりました！ブレイズ！」

笑顔のまま唱えた、目の前で火柱が上がった。これでバーストも問題ないだろう。……………加減について後で話をする必要がありそうだ。次はアダマンタイトで武器作成、



たがここで問題が発生、量が少ないためか、大きな物や長い武器が作れなかった。なので、ナツクルのように拳や足を覆う籠手やブーツのようなものを作り、それで戦う事にした。代行者ー、山にはどんな魔物がいるんだ？

《動物系の魔物が80種類います、大きいものから順に……》

ストップ！ストップ！種類はいいから取り合えず弱そうなのを、向日葵用に一体隔離してくれ、

《了解しました。こちらはどうぞでしょうか？》

早いね、どれどれ……汚な……ねえ、なんか汚ないのばっかり選んでない？頭を見る限りオークって奴ですか？

《正解です》

当たっても嬉しくない、大丈夫か、これ、オーガ程じゃないが、二メートルはあるぞ、まあ、遅そうだから逃げる分にはいいだろうけど、「よし、これからオークを一体呼び出す。それを倒せ、危なかったり、無理そうなら助けるぞ、」

「頑張りますー！」

元氣よく返し構える。完全に素手だ、本当に大丈夫だろうか？刀に手を掛けてもしもに備える。ある程度距離の離れた場所に呼び出す。

「行きますー！」

真正面から突っ込む、

パアアン！

最早破裂音、向日葵がしたのは相手の懐に飛び込んでからの正拳突き、が音が異様な用に威力も異様、オークの肥太った腹に風穴を開けた、殴っただけでこれだ、しかも今のところ戦い方を教えていない、加減も覚えるだろうが、パフォーマンスを上げたらどんな威力になるか、まあ、空手を少し教えてみるか

パアアン！バアアン！スパアン！

……呼び出したオークに次々と風穴を開けていく、笑顔で、一帯は血の池地獄だが、返り血を浴びていない。俺だって何かを斬れば少しは自分の方に飛んでくる。というか、始めに斬ったゴブリンの返り血はいやと言うほど浴びた。まあ、結界があるから服は汚れなかった

が、刀を当てる角度を注意すれば自分の方に飛んでこないようにすることも出来るが、向日葵に俺の技術に匹敵する戦闘センスがあれば可能だが、そういったものは無い、結論は馬鹿力だ、並々ならぬ力で打ち抜かれている。オークが水風船を割るかのように次々爆ている。

《解析終了しました》

ん？ああ、冒流と強欲の効果がわかったか、説明頼む。

冒流 内訳

生命の冒流 触れた物の存在値を操作したり、奪ったり出来る。

魂の再分配 存在値を他者に振り分けたり、貸したり出来る。

………存在値って何？

《この世界に存在する者が持つ、スキル等を全て統合したものが存在値になります。》

わかりません。ちなみに存在値を奪うってあつたけど奪われるとどうなるの？

《消失します》

消失とは？

《文字通り、消えて失われます》

こういうのは実際に見てみた方がわかりやすいな、オークの死体に触れるが何も起きない。代わりに手に黒い炎が纏わり付いてきた。そして狼煙のように空に黒い柱が伸びている、見た目だけでもヤバそう。

《存在値を吸収する場合生きている者からでないかと奪えませんか》

成る程、オークを呼び出し、結界で押さえ付ける。そして、背中に触れる。暴れるが、その程度では、結界は動かない。現在結界で地面に押さえ付けているのだが、この結界、本当に万能である。耐性付与以外にも、指定した物の通過、遮断を設定できる。今のようにオークを遮断で地面に押さえ、俺の手を通過させているように、そういうしているうちにオークは動かなくなっていた。

《オークの魂を入手しました。存在値に変換します。………存在値10になりました。》

いや、お前が消すんかい、消失というよりは消費？変換？

《オークの存在が変換により消失します、隔離すれば消失しません。》  
まあいい、相手の魂を奪い、自分の力に的なことか？

《違います》

えー……、どういう事？小難しい話はパスしたいんですけど、

《では、オークの持っていた剣や槍、どちらでも良いので触れてください》

槍は持ち手が汚ないので剣にするわ、剣の平に手を当てる。すると直ぐに霧散して消えた。

《防具、盾、弓矢、薬品、食品等にも使用可能です。》

薬品と食品に使う利点は？

《薬効、栄養を即座に体に反映します。食事の時間を取らずに済みます》

時間がない時は嬉しいが、微妙だな、薬品に関してはこの世界の薬を知らないのではなんとも言えない。強欲の方の確認をしたい。

《了解しました》

強欲 内訳

亡者の渴望 実体の有るもの無いものに触れたり、動かしたり、自分の物に出来る。

罪源 美德系、天使系スキル保有者に攻撃が当たるようになる。

最初のはいいが、罪源、これはなんだ、美德系？天使系ってなんだ、代行者、

《美德系は、大罪系スキルと対をなすものです。天使系は美德系のスキルを中心に分岐、類似するものの総称です。ちなみに、冒険は傲慢の類似スキルです。》

罪源を見た感じ美德系は攻撃が効かないみたいだけどこれは？

《美德系は防御に特化しているため、普通の攻撃では、破れません。大罪系は攻撃出来ますが、代わりに攻撃したものに毒や呪いをかけます。美德系にはそれらを防ぐスキルが入っています》

成る程ね、対を成すもの以外には無敵みたいなものか、エグいな、《例外もあります。聖職者、眷族、神の使いは無効とはいきませんが、

ある程度の耐性を持ちます》

神の使い……俺も該当する？

《はい》

あれの使いかー、シンプルに嫌だな、まあいいかこれだけである程度の耐性を得られるなら、後は強欲を実際に見ておかないとな、

「向日葵、強欲ってスキル使えるか？」

「えっ、はい、……対象は何でしょう？」

「んー、何がいいかな？……魔石とか、どうだ？」

回収出来れば一石二鳥くらいの感じで頼んだがグロかった、向日葵の細い両手から青っぽく暗い色の炎が生じると、同じように黒い狼煙を上げる。そして、炎が枝分かれして、一つ一つが生き物のようにオークの死体を食っていく。肉食動物はまず、草食動物などの内臓を食らう、この光景はそれによく似ていた、獲物の腹に頭を突っ込み血に汚れながら貪り食う。が、こっちの目的は食うことではない。何体かが爆ぜた、腹ではなく、胸部が、それに続くように次々と死体が爆ぜた、その後、炎は向日葵の元に戻っていき、その手からは、魔石が溢れていた。手に収まらなかったものは、次々と地面に落ちる。

「こ、これでいいで……ああー！」

これ心臓を潰すとか出来る奴だな、何より直接触れると言う制限もない伸ばせる距離、分岐出来る数の限界は今見た感じではわからないが、

《演算・制御系のスキルを付与すれば高い制御が出来るようになりませう》

ふーん、まっ、今んとこ無理だし、手に入ったときでいいか、

《私なら可能です》

えっ、マジで、……あー、なんかあったような、

《付与できるスキルは以下の通りです》

ウリエル

正義ノ使徒

ラファエル

奇跡ノ使徒

ガブリエル

啓示ノ使徒

ミカエル

審判ノ使徒

カマエル

破壊ノ使徒

バラキエル

雷光ノ使徒

サンダルフォン

支配ノ使徒

アリエル

調和ノ使徒

なんじゃこりやー！多いわ！

《現在付与が行えるのは、この八つです》

しかも現在つったぞ、こいつ、

《希望等あればそれに沿って作る事も可能です》

何でもありか？あり得ねえー、

《与える場合存在値ごと与えます。作る場合その内容に応じて存在値を消費します。なお、同じスキルを複数の対象に付与、一人の対象に複数のスキルを付与する事は出来ません》

これ結構難しいね、俺は冒険があるから、他から存在値を持ってこられるけど、無かったら減る一方じゃん、何を与えるかも重要だし、「うーん、」

向日葵の戦闘スタイルを考えるとバランスのとれたものが望ましい。

《演算と戦闘力を丁度半分にした。正義ノ使徒が条件に該当します》

それでいつか、どうやって付与するんだ？

《付与する対象に触れ、『汝、我主トスルナラバ、汝、正義ノ使徒ニ任ズル』と念じる。または、言ってください》

「向日葵、こつち、」

手招きすると、こつちに、パタパタと走ってきた。普段も笑顔だが、

今の笑顔は一段と明るいが、周囲の死体を量産した張本人である。

「何ですか？ご主人様、」

「今更だが様付けは止めてくれないか、柄じゃないし」

「そんな、……………わかりました。ご主人、殿」

あんま変わって無くない？様以外も変えてほしかったが、悲しそう顔をしているのでこれで納得するしかない。この件は、置いといて向日葵の頭に手をのせる。

『汝、我主トスルナラバ、汝、正義ノ使徒ニ任ズル』つと、これでいいのか、確認のために向日葵のステータスを見る。

No name オートマタ

機構精霊 笑顔の向日葵

制作者 北川 龍登

パーソナルスキル 強欲 正義ノ使徒

スキル 火魔法7 風魔法7 自動修復5 格闘術2 体術1

耐性 毒・酸無効

称号 生きた人形

近接格闘のスキルがついてる。ついでに正義ノ使徒の効力も確認。

正義ノ使徒 内訳

律スル者 自らを戒める事で制御能力を上昇させる。

裁ク者 罪を裁く事で力を上昇させる。

通ス者 自らの主張・主義を通す事で防御、精神防御が上昇する。

どのくらい上昇するか知らんが、上がり方によっては完全チート

……………概要は大分フワツとしているが、まあいい、街に戻ろう。

## 休憩失敗

移動手段を確保しないとな、脚が痛てえ、結界の隔離を自分にも使えれば一瞬だが、出来ない事を考えても仕方がない、腹も減ったので店を探す。魔法つてすごいね、臓器も再現できるから、向日葵も食事が出る。まあ、摂らなくても平気だか、あまり食にこだわりはないと言つても、初めての食事がテキトウなものでは、可哀想なので、少し良いところを探す。

《彼処はどうでしょう?》

清潔感のある店内に、開放的なオープンテラス、店員の接客もいい、カフェのようだが、ここでいいだろうか?

「向日葵、あそこでちよつと休憩するか?あと少し話もしたいし、」

「はい、ご主人殿」

嬉しそうに答えてくれたが、聞き方を間違えたな、今の所向日葵から帰ってくる返事は100%yesである。その勢いは白でも俺が黒といえれば黒になりそうぐらい。取り合えず、席に座り、メニューを見る。

「なにがいい?」

「ご主人殿と同じ物を、」

「ん?それでいいのか?」

「はいっ」

まあ、食べ物についてわからないのだから、仕方ないかと思いつながら、ケーキと紅茶を2個づつ注文する。

《敵意のある人物を捕捉しました》

ここですか、猛烈に舌打ちをしたい気分だが、我慢する。数とか距離は?

《右に首を傾けてください》

??わかった、

ガンっ!

後方から飛んできた斧がおしやれなテーブルに刺さった、あぶね!もつと鬼気迫る感じで言えよ!

「あー、外れちゃったよ………面倒臭いなー」

内心冷や汗タラタラだが、まあ、返しておくか。

「落とし物だ」

斧の柄を掴み、テーブルごと投げる。テーブルは蹴り砕かれ、破片がばら時かれる。

「あー、テーブルは関係無くない？」

「落とし物も持ち主の元へ返ったしもう用ないよな」

軽く威圧、当然、死なないように、すると、雰囲気が変わった、面倒臭いと言いたげな表情が、少し引き締まった。構えてはいないが直ぐに動ける姿勢をとっている。鑑定と真理を発動する。

クライスラ

スキル 隠密8 俊敏8 聴力強化5 視覚強化3 投擲7 短剣8 火魔法2

称号 暗殺者

暗殺者 内約 五感が鋭なる

隠密5 短剣5

こいつギルマスや列車の賊より強いかもな、俺の持っていないスキルが欲しいが、

「場所を変えよう」

「……………わかった、」

「向日葵……………そこで待ってろ。」

とにかく店を出ようと思いい店を出ると、クライスラの姿がない、

《店の屋根の上です》

振り返ると刃渡り60センチ程の刃物で首を狙い、飛び降りている最中だった。地面を転がり間一髪避ける。結界で防御しているが、過信は良くない、追撃に来た所を刃物を持っている手を掴み背負い投げ、手首を捻り刃物を離させ隔離、その直後に振りほどかれ距離をとられた。速い奴だな。

「こいつは勝てそうにないな、さて……………」

「ほら、忘れ物だ」

隔離していた刃物を取り出し、放る。驚いているが、さっさと帰っ



て欲しい、

「……………おい、……………テーブル台だ、店に出しといてくれ、」

袋が、こつちに飛んでくる。適当に左手で取る。なにこれ？

《銀貨5枚です》

あー、はいはい、暗殺者の称号持ちがする行動じゃない気がするが……………

「その店、ある渡来人がトップの店なんだ。」

渡来人？あー、異世界人の事ですか、なんか中国から来たみたいな感じだな。ただ、こいつがここまで気を使う理由はなんだ？

「わかった、出しとく」

野次馬がいっぱい、うざい、少し睨むとすぐに散っていった。さつさと店内に戻る。店のカウンターの方に行き、さっきの袋と、迷惑料として、金貨を一枚渡しておく。

テーブルが無くなってしまったので向日葵をつれて移動する。ケーキと紅茶を持って、

「あなたは、もしかして」

横から声をかけた、少年は見た目からして病弱な、黒い髪と茶色の瞳で、か細く自信のない声だったがはつきり、

「北川……………さん、ですか？」

まず、こいつは知り合いじゃない。取り合えず鑑定と真理。

藤白 功德

種族 人

パーソナルスキル 毒物・薬物効能操作・製造

耐性 毒無効 健康体

称号 薬殺されし者？

加護 戦神の加護

何故に、称号ハテナマーク付いてるの？それにスキルの項目がない、ただ称号ではつきりしたのは俺と同じで死んでこの世界に来た……………と思う。あと加護？

「お前、送られてきたのか？」

「はい、この世界の闘いの神様にこちらに送ってもらいました。その

時に魔法とか貰えないか頼んだんですけど、無理だったそうで、病気になるようにしてくれって言ったら健康体を貰いまして、実は僕ともう一人、いっしょに来たんですけど、」

「もう一人の神様が送った人が横に真つ裸で居たんです。送られた先が街中で、その人連行されちゃって、僕戦う力無いですし、あの人が言うには前に送った人のサポートをして欲しいって言われてたらしくて、それで、」

「そいつ送った神、豊穰神でイーゼルとか名乗ってない?」

「はいそうですよ、やっぱり知ってたんですね!」

「……………あの駄目神」

わざとなのかうつかりなのか、どっちにしろされる側からすればたまったもんじゃない。

「あつ（察し）……………あなたも連行されたんですか」

「いや、パラシユート無しの強制スカイダイビングさせられたただだよ、街から5k m離れた所に、はっはっはっ、（怒）」

「はは……………ところでそちらは?」

「私は向日葵です。ご主人殿の人形第一号です。」

誇らしげに胸を張っている。

「えつ……………」

「ああ、最高傑作だ、まあ一体しか作ってないがな、」

「えつと、そう言うことではなくて、……………どこから聞いたらいいか?」

「いや聞くなよ、それより連行された奴は大丈夫なのか、」

状況によっては、説明している時間が惜しい。

「それが、お金が必要なんですけど来たばかりで餞別で貰った金額ではとても……………それで、ここには同じ世界の人がよく通うお店、つまりここで誰かから借りられないかと、そしたら彼から聞いてた特長と一致する、北川さんが通り掛かった訳です。」

「ちなみにどれくらいここに通ってる?」

「二日程前です。」

ふーん、あの神にも考える脳があるんだな、二日前は俺がこの街に来た時期と一致する。なにか狙いがあるのではと考えてしまう。そもそも俺が会ったときの対応がすべて演技なら………考えすぎか、ただ頭の片隅には置いておこう。情報が少なすぎる。

「で、どのくらいの金がいるんだ、あとそいつにはどういう能力がある？」

「それは、ちょっとわからないですけど風魔法を貰ってました。お金の方は金貨50枚が必要だそうです。」

多分、足りない、オークの魔石を売れば足りるかもしれないが、《足りません》

マジでか、どのくらいの金額になる？

《試算したところ、所持金295000円、魔石の売却で、合計359000円になります、この町では魔石1つ、銀貨一枚になります》

魔石が安いな、もの全般が安いせいか？

《そうです》

どう足掻いても手持ちでは足りない訳か、どうしたものか、  
「あ、いました。」

青年が話しかけてきた。誰こいつ？

「懸賞金の受け取りに来ないから探したんですよ。」

あー、あの馬小屋で気絶してた、にしてもどうやってここを？考えていると暫く間を置いて向日葵を見る。

「綺麗な女の子を連れだした男性を探していると聞いたらすぐわかりましたよ。」

普通に嬉しいな、ただ、先の事を考えると目立って仕方ないかもな、対策も考えておこう。

「そういうえば額を聞いてないけどいくら？」

「ええーと、そう言うのは受け取る時に確認をするので………それに僕は探してくれと頼まれただけです」

じゃあ行くか、と言うおうと思ったたら後方から威圧感が、と言うか青黒いのが漏れとる！漏れとる！頭に一発拳骨を落とす。

「ど、どうかしましたか？」

「ん？いや、たいしたことじゃない。」

あれ、気付いてない？結構炎と言うか霧みたいなのが出てたけど、後死人が出る可能性があったことは黙っておくに越したことはない。

「ええつと、お前も来るか？」

「よくわかりませんが、そうさせてください。」

はあー………馬小屋行きたくねえな、金はあるけど、清潔感って大事だよ。あつ、紅茶冷めてる。

## オリハルコン

初めての食事は、あまりいい思い出にはならなそうだが、悪い事をした、何処かで埋め合わせを出来るよう考えておこう。で、現在馬小屋（自警団詰所）前である。

「懸賞金って、なんのですか？」

「列車を襲撃した賊だ、その頭目が、俺達と同じ世界の奴だった。そいつの首に懸賞金が懸かってた、額が多いらしくて、で二日後に来いと言われてまだ一日しか経ってないが、用意出来たとしても探さなくてもいいと思うんだが？」

「額が額ですし、関係ない僕まで駆り出されました。もし、盗まれてもしたら……考えたくないですね。」

え、そんなに？

「……………額聞いてる？」

「聞いてないです。ただあの慌てようだと金貨100枚は超えてるでしょうね。」

足りそうだな。無かったら別の町まで魔石を売りに行くつもりだったが、まあ、何よりだ、が中に入ると、誰もいなかった、まさか、あいつ等も探しに出てんの？一人は残れよ、

「あー……………どうしましょう？」

知らんがな……………まあいい、藤白と話すか。

「藤白……………どう呼べばいい？」

「え？ああ、呼び捨てで結構ですよ。北川さんの方が年上ですし……………でも、僕名前言いましたっけ」

「俺には鑑定とかあるから名前くらいは余裕だ。」

「へー、他にはどんなスキルがあるんですか？」

「剣術とか体術みたいな戦闘系もある。スキルと言えば、藤白は一つもなかったな、」

「ははは……………僕、寝たきりだったせいで、なにもできなかったの  
で、そのせいだと思います……………」

ん？だとするとあの称号は？

「それで、二日前意識がはつきりした時には、横に彼がいました。彼は事故で死んだそうです。」

はつきりしないな、確証もないし、突っ込むべきではないだろう。彼は二日前と言う所で嘘をついている。恐らく死ぬ直前の記憶が曖昧ながら有るのか、あるいは言いたくない理由があるのか、それとも………、まあ、人形を作るか、時間は有限である。

一時間後、あの三人の内二人が戻ってきた。人形の方は………：今からがいいところだったんだよ、コンチクショウ、調子出てきたなと思つたときに呼ぶ母親と同じくらい邪魔になるタイミングだ。向日葵は頬膨らまし退屈そうだが、ずっとこつちを見ていた。作業中は気が散るのでやめてほしかったが、

「他に時間を潰す方法ありますか？」

威圧付きでこう言われてどうしようもない。と言うより、俺なんか見てて暇潰しになるのだろうか？まあ、人形作つてたのは物珍しいかもしれないが、

「ん、………ああ、で？懸賞金ついていくら？」

背伸びをしてから本題を切り出す。

「金貨二百枚だ。」

おお、あいつ相等荒らし回つてたんだな、

「………で、良い知らせと悪い知らせがあるんだが………」

「良い知らせから頼む。」

悪い方は予想がつかない程多いので、良い方から聞こう。

「引き渡された奴らを尋問してたんだが、拠点がわかつたんだ、そこにはいろいろ溜め込んでるらしくてな、そのの所有権があんたにある。多分こいつの懸賞金の倍はあるだろうぜ。」

「で？悪い方は？」

まあ、この流れだと貴族絡みだろう。問題はここからどう来るかだ、俺の取る手段が変わる訳じゃないが、

「この辺じゃあ聞かない、………要するに金に困つた木っ端貴族が、国に納めるべきだとか叫びながら私兵を動かして、自分の懐に、金を入れようって寸法だ、」

はしよりすぎだろう。わかりわやくて助かるけど、モロに木っ端つていたな、何処の世の中も虎の威を借る狐は疎まれる。この場合虎は国で、狐は貴族だな、例え木っ端でも、貴族は貴族、血縁、私兵の数、領土を調べて対応を決めよう。情報収集を頼む代行者。まず、三つ、私兵は動いているかと、賊の拠点の位置情報、とその距離、そこから到着時間の予想、動いていない場合。いつ出発するか、わかるか？

《検索します。終了。結果を報告します。私兵は既に出発しています。規模は50人程度、なお、私兵は20人、残りは武装した領民です。目的地までの到着予想時間は、18時間6分37秒後です。位置情報は千里眼で映像を出します。目を閉じてください》

どれどれ………デカ！ちよつとした砦じゃん、木製では、あるが五メートル程の塀が建物を囲っている。地下は三階まであり、隠し扉に、抜け道が複数あった。罾の類いはないが、ただこれ専門家いるぞ、作る方はこの際置いておくが、今行く50人が、隠し扉を見つけられるか、まあ無理だ。俺には関係ないが、まず、地下を発見しなければ行けない。出来なければ天井裏の量が多いが価値のない物を宝だと思つて持つて帰る事になる。例えば鍍金の金貨や、宝剣のレプリカ、盗賊が盗んだ物だつて価値のあるものばかりではない。相手が本当に価値のある物を持つているかどうかである。転売目的でいろいろ買い込んだ荷車なりを襲撃しようとも偽物を掴まされている場合、得をするのは売り付けた者だけである。そんなこんなで溜まったこれらが天井裏で有効活用されている、と言う感じだろう。放ついても平気そうだな。後から回収すれば良いだろう。何があるかと総額を報告してくれ。

《オリハルコンが………》

よし、回収だ。と言うか今すぐ手元に欲しい。

《では、万能結界の隔離を推奨します》

………マジっすか？

《結界を張るためには正しい認識が必要です。今千里眼で見えている範囲内には結界を張ることができます》

あー、ゴブリンやら、オークやら、これで運んでたな、今更だった

わ、そして、オリハルコンGET！面倒くさいし、金目の物も全部回収するか、ふう、大漁、大漁、少しにやけていたであろう顔を引き締める。貰うものは貰ったのだ。

「盗賊の拠点については、何も知らないことにしてください。場所も結構です、権利については譲ると伝えてください、私としては少しでも国の繁栄に貢献できればと思います。」

笑顔を作り抑揚を抑えてゆっくり喋る。まあ心にもない嘘だ。

「いや、でも、……………そうか、わかったよ。」

「じゃあ、受けとるものも受け取ったし帰るか。」

「はい？」

「え、あのどういう事ですか。」

藤白と向日葵は理解出来てないだろうな。あとで説明してやるか。

まあ、これからの流れだけだな。

「それと聞きたいんだが、二日前に町中に全裸で現れて連行された奴を知ってるか？」

「あいつの知り合いか？」

「ああ、こいつが、」

適当に後ろの藤白を指差す。

「そりゃあ、よかった、捕まえたは良いけど身元もわかんねえし、引き取ってくれる知り合いもいねえし、かと言って何もなしに外に出すわけにもいかねえし、こつちも困ってたんだ。金はあるが出すんだろ？」

「ああ、問題ないだろ、最悪こいつに貸すだろうがなんだろうがするし、」

俺は直接知り合いではないし、ゴチャゴチャ言いそうなら形だけでもそうすればいい、俺は工房を借りに行く。が、ここで問題が発生。

「ただ、その管轄がその木っ端だったような気がするんだよな、」

嘘だろ、ここは手を間違えられない。俺が行けば不都合や詮索されるそして理由を付けて足止めもするだろう。藤白は金の出所や、足元を見られる可能性がある。金に関してはある程度欲しいだろうし、増額されるだろう。ここは、代理人を立てたいが……………



《列車で助けたエドガーが適任だと思います》

あのおっさんか、また気絶しないといいが……どのくらいに地位にいるか知らないが相手が力のない辺境の木っ端なら問題ないだろう。それに俺の強さも知っているし、下手なことはしないと希望する。希望的観測だが、

「まっ、なんとかなるだろう……そろそろ行くわ、」

馬小屋を出た頃にはもう臭いには慣れてた。

## 無茶ぶり（頑張った）

いつも通り、代行者にエドガーの家を探させ、発見したのだが、  
「豪の邸じゃん、」

「えーと……ここに入るんですか？」

尻込みしてるのをよそに正面から普通に入っていく向日葵、待て！  
こっちの心の準備が出来とらん！

「こらー！戻ってこい！」

「不味かったですか？」

絶句、気品ある美少女に作ったのだが、外見に反して中身が脳筋な  
気がする、首を傾げ人差し指を唇の下に当てて考えるような仕草は絵  
になるが……

「中身は思うように作れないからな」

不可能ではないが、無理だ。人形を作るのは簡単、だが人間を思い  
通りに作ることは例え神でも無理だ。それに自分の思い通りになる、  
そんな人形と一緒にいても気が滅入るし、つまらん、第一に俺の意思  
が少しでも入った物を人間と呼ぶ事は出来ない。だから、ゼロから本  
人に作らせる。本来機構精霊は、命令遵守や忠誠等をランタンのよう  
な器に刻印するのだが、性格には一切手を付けず造り出した。その分  
安定しないので、精神の安定と成長の促進を刻んである。

「まっ、いつか、張り合いがあった方がいいし、」

ちなみに今は機構精霊も出している。この方がすぐわかると思う、  
そんな機構精霊達の会話は完璧に現状を無視している。

『体、羨ましいですわ。』

『調子はどうですか？』

「とー！戻ってもすごいの！ご主人殿に髪の毛を切ってもらった  
りー、ご主人殿と一緒に歩いたりー、あつ、服も買って貰いました。」  
『……いいなあー、』

戻ってきたがこんな感じで、楽しそうに会話している。エーデルワ  
イスは俺の頭の上、こいつはこういう奴だ、大人しい性格でマイペー  
ス、あまり喋らない、だが、少し頑固な、いや我が儘と言うべきか、

『今、作ってるのって誰の?』

嫌な予感……………

「……………一応お前のだが、準備を考えるともう暫くかかるぞ。」

『明日……………』

はい?まさか、それまでに作れと?いやいや、まだ中枢の作成も刻印も途中、頭は作ったが、髪の毛はまだ、手足に至っては手付かず、体の外装は中途半端な状態、髪の毛その物を作るのは前に作ったので問題ないが、その後の事を考えると……………死ぬんじゃないだろうか。

『頑張つて、マスター、』

俺この交渉が終わったら死ぬかもしれない。と言うか、死ぬ気でやらなきゃ間に合わねえ、ここでくだぐだしてても始まらないし。

「よし、行くぞ、」

あつさり通された。大丈夫なのだろうか、セキュリティとか警護の観点から見るとアウトだろう。面倒がないので良いが、周りの調度品には目を惹かれるが、人の家の応接室でキョロキョロしてるのは行儀が悪いし、良い印象を持たない。俺もそうだし、さつさとソファーに座る。それに続いて藤白と向日葵が座った。で、千里眼で、調度品を見る。これなら視線を動かさない、一つずつ見ていくと、選りすぐりの品のあるものばかりだ。数は多くないが、自然と寂しいと感じない。配置も工夫されている。エドガーはかなり位の高い人物だろう。さて、気を引き締めるか、

暫くして、おっさん改め、エドガーが入ってきた。話が長くなるかと覚悟していたが、すぐに進んだ。ただ、人形を作つて欲しいと言われた。子供の贈り物にしたいそうだが、裁縫とか学校の授業でしかしたことないぞ、だが、代行者曰く、人形作成は、どんな人形にも適応されるらしく、全然問題ないそうだ。実験の意味も含めて引き受ける事にした。そして工房に直行、テキトウに何枚か金貨を藤白に渡す。「明後日、ここに来てくれ、俺は人形を作る。その間その金で好きにしててくれ、」

「え?あの、」

「じゃ、」

「あの、私は？」

「明日、完成予定の人形の服を買ってきて欲しい。明日頼むと思うから、今日は自由にしてて良い。」

まず中枢、これは機構精霊の器、それと人と同じく食事等を取るための胃と会話に必要な肺がこれに当たる。そしてそれに刻印をしていく、これについては代行者が最適かつ効率的な物を作れと言ったら、これを提案された原理は知らん、少しずつ勉強しているが訳わからん、器に3つ、肺に一つづつ、胃に4つ、合計九種類の刻印を指定の場所に刻む、緋緋色金なので加工はしやすい。大体1つ彫るのに30分なのだが、あと5つある状態で辺りはもう真っ暗………寝なきや行けるか？

さて、現在10時くらい、途中から記憶がありません。……ヤバい、マジでヤバい、何がヤバいって時間だ、もう1つおまけに材料もヤバい、完成だけ考えるなら間に合う、が中途半端なものなど作りたくない。代案の模索をしながらオリハルコンで髪を作っていく。前は余り長く出来なかったが、2メートルくらいは伸ばせるようになった。見た目は透明だが、金属特有の光沢（光ってるようにも見えない）がある。光の当たり方によって銀や白っぽく見える。後手触りがいい。

代案は決まった。文句とか言われないと良いが（後々の話だが）、芯に今回手に入れたオリハルコン（前回はアダマンタイトと緋緋色金の合金）、表面等強度が必要な箇所はアダマンタイト、今回向日葵と違い体の中には緋緋色金を入れることにした。武器にする訳ではない、魔力の貯蔵用である。エーデルワイスに作った目の魔石なのだが、両方聖光属性で、魔法（回復等）に特化している物だ。そのため貯蔵出来る魔力量が多い緋緋色金をいれるのだ。さてと、ラストスパートだ。辺りは真っ暗、月は満月、眠気も限界、ついに完成した。

『これが、私の、体？』

「ああ、」

『………なんか、小さくない？』

「ああ………」

だってしようがないじゃないか。むしろ完成に漕ぎ着けたこと

を褒め称えて欲しい。

比較

向日葵

身長 156

エーデルワイス

身長 127

代案、それはサイズを小さくすることだ。手足等の製作に掛かっていなかったからこそ出来る方法だ、うんうん、

『ごつち向いて、』

目が泳いでたか………と言うか俺はよく目が開いてるかどうかからんと、子供の頃から言われてきた、読まれた理由は簡単、思った通りに作ることが出来なかった事に対する不安、気に入らないのではないか？もつと大きく作ってほしかったとか、自分の都合で変えた、その負い目がある、代案でも全力で作った、だがそう言う問題ではない。そんな不安定な感情を持っているため、表情にも動揺が大きく現れたんだらう。

「………やっぱり、嫌か？」

『嫌じゃない』

即答された。それでも不安は晴れない。

『マスターが私のために作ってくれた体、こんなに嬉しい事はないです。』

笑っていると思う。声だけが伝わってきた、不安はいつの間にかどこかに消えていた、

「………さて、お前はこの体でいいのか？」

『早く、』

ランタンを開けると、白い光が人形に入って消えた。

「どうだ？」

倒れかかるように抱きつくつと、消え入りそうな声で、

「………嬉しい、」

## 恐ろしき害虫（ステインクバグ）

…あれ、いつまにか寝てたようだ、体を起こすと改めて体の痛みがよくわかる。中指と人差し指の関節と手首が、ヒリヒリと言うかジンジンと言うか……まっ、顔洗ってくるか、ん？なんか横に違和感が、  
「マスター……………」

「主人殿……………」

エーデルワイスが裸で俺のとなりで寝ているのは一旦置いておこう。何故、向日葵も同じ状態で横に寝ているのか？うん、まず昨日の最後の記憶を思い出してみよう、エーデルワイスに体を作って、それで抱きつかれて、それから……………記憶がねえぞ、おい、

「すみません、藤白です。北川さんいますか？」

ヤベエ、マジヤベエ、状況が状況だ、えーと、間に合えー！！  
結界で向日葵とエーデルワイスを被い隔離、その直後藤白が入ってきた。なんとか間に合ったか、ほっとして立ち上がる、そのとき気づいた、俺なんで全裸？

「あ？」

「あ、すみません。起きたばかりですか、」

「あ、ああ……………」

まだ少しパニックだが、なんとかごまかせた。

「すぐに片付ける」

「じゃあ外に出てま……………」

俺の服を探すべく、恐らく向日葵が掛けたであろう薄い掛け布団を動かした。そこから向日葵の下着らしきものが、しかも上下、

「……………」

「……………取り合えず、タイム、」

藤白は無言で部屋から出ていった。誤解を解けるか正直自信がない。ただ、現状を知らないことにはどう説明して良いかわからない。とにかく服を着る。しかし、いくら探しても上の服がない。これも含めて事情聴取だ。結界を張り、隔離していた二人を出す。

「起きろ、正座」

「……………」

「起きてるのはわかってる。藤白の声が聞こえた時、向日葵は右眉、エーデルワイスは肩が不自然に動いたよな、」

少し殺気を出す。ちなみにエーデルワイスの方は嘘だ、千里眼を使えば両脇の二人を同時に視認できるが、向日葵の方を見ていたのでこっちしかわからないが、殺気を受けた二人の反応は速かった、跳び起きるとすぐさま正座した。

「まず、服を着ろ、で昨日俺が寝ている間にあつた事を順を追って話せ、」

エーデルワイスの着替えと髪形を整えると、改めて正座させる。向日葵はなんか羨ましそうな目で見てたがセルフな、初着替えだから手伝ったんだしな、

「聞きたい事はいろいろあるが、俺が寝てから順を追って説明しろ。」話をまとめるところだ、俺はエーデルワイスを受け止めた後、そのまま寝たらしい。で、なんやかんやである状態だそうだ、なんやかんやは、このまま寝たら風邪を、だとか、こう言うときは裸で（以下略）という大義名分程度の言い訳だ。

「あれ、俺の上着は？」

「それは……………」

「これが破った」

「ちよつと！これってなんですか！それにあなたが手を離さないからでしょう！」

「だって、私、服無いもん。」

「持って来たじゃないですか。」

「……………目がヤバかったし、上着の安全を考えて、死守すべきと判断、キリッ」

「ああー、もう良い、別に上着の一着ぐらい、引つ張って破ったんだな。」

さてと、どう言い訳したのか、

何とかいろんな誤解を解くことができた。それは良いとして、

「その格好はどうした？」

「一応もしもの為の防具です。冒険者ぽいでしょう?」

所々鉄板がついた軽装、だがヒョロヒョロの奴が着てるとなんか、頼りなさそうだな、勿論言わないが、

「弱そう」

そう言うこと言わない……………

「おい、誰が弱そうだって!」

ほら、要らないのが絡んできたよ、藤白とは対照的なムキムキの強そうな半裸の男がいた。あくまでも強そうという評価なのは背中のでカイ斧からだ、ちなみに重さは関係ない、ビッチリと背中に固定されている。これでは咄嗟に構えることができない、斧の側面には土がついている。力任せに降り下ろしたのだろう。柄にもヒビが、その癖今、攻撃しにくい至近距離までつめているし、何がしたいのこいつ? 馬鹿なの? それとも武器なんて要らない的なことですか? 殺気で追いかけるか、

「話しかけないでくれるかな、」

最近わかったが、この殺気には指向性をつけることが出来る。距離は30メートルと狭いが、その範囲内なら選んで一人だけ強力な殺気で殺すことも出来る。がこの男は退かない。うざい、帰れ、危機感知等が余りに低いと致死量当てて死ぬまで気づかないらしい。そしてなんか喚きながら斧に手を伸ばす。その距離で斧使うとかホント何がしたい訳?

「ぐはあ、」

当然待ってやるつもりはない。蹴る。とにかく蹴る。

「あの……………」

藤白がなんか言ってる気がするので止めに踵落とし。気絶したので放っておく、

「弱そうじゃなくて、弱かったな、」

「その人……………昨日防具を買うとき近くにいた人です。その後短剣を売って貰いました。」

お前が蒔いた種か、

「その短剣、見せてくれ、」



「はい？」

納得していないようだが見せてはくれた、何てことのないただの短剣、問題はこれをいくらでというところ。

「貴重なものらしいですけど金貨三枚で売ってもらいました。」

頭抱えたくなくなってきた。斧持ってるじゃん、そんな奴が何故、短剣を……………もういいわ、この手の奴が纏まった金を持っているとは思えないし、手っ取り早くスキルを恵んでもらうとしますか(笑)。一応代行者に持つてるか確認してもらおうか。

《銀貨が12枚と銅貨3枚と殆どゴミに等しい服と斧だけです。》

君も辛辣だね。代行者さん、まあ、とるに足らないということですよ。で、私のステータスはこうなった。

名前 北川 龍登

種族 #%5\* ; ■

パーソナルスキル 真理ノ瞳 万能結界 冒瀆

スキル 芸術10 指導8 鑑定5 武芸3 隠密1 人形作成

10 義体・義肢作成10 風魔法10 火魔法1

耐性 炎熱無効 低温耐性5 雷撃・突風耐性5 衝撃耐性5 闇

魔法耐性5 聖光魔法攻撃耐性6 精神攻撃耐性5

称号 爆死 稀代の人形師

武芸3

剣術7 体術7 棒術3 格闘術2 斧2 扇1

斧しかスキルなかった、張りぼて感が否めない。更に武芸がレベルダウン、後火魔法と隠密、これはクライスラから拝借しました。返すつもりはありません。(無断借りパク)

「お前はこうならなかったためにどうする？」

「え！僕ですか？……………すいません。戦い方って教えてもらえますか？」

「はあ……………、まずともな武器からな。」

こいつにはまず、人を疑うことから覚えて欲しいところだが、鑑定みたいなスキルを身につければ少しはマシになるだろう。

はいっ、と言うわけでやって来ました平原、藤白には、メイス（金属製の棍棒）を持たせた、で素振り中、武器の素振り何て意味があるのかと言えば、藤白にとっては一番大事な基礎である。始めに筋力の向上、次に武器の振り方を覚えさせる。取り合えず武器に振り回されない程度には使えるようにしておきたい。

「あの、何で僕鈍器なんですか」

そこから聞くか、いろいろ言いたい事はあるが………

「これで俺を刺してみろ。」

短剣を渡す。あの男が売った短剣、削ぎ取りナイフだ、ゴミだ。

「あ、やっぱ、ちよつと待って、」

ナイフを消毒、何がついてるかわかんないしな。

「よし、来い」

「えっ！あの、どう言うことですか、」

「早くしろ」

おどおどしていたが、ナイフと俺を交互に見て、汗をうかべ、ナイフが揺れる。

「無理だろ、だからメイスの素振りなんだよ、筋トレと武器に慣れる事が大事だ、」

まあ、藤白に刃物はハードルが高い、ナイフは使いやすいが、その分リーチがないため返り血を浴びる。精神的な負荷を減らす意味ではこっちの方がいい。さてと。こっちは火魔法の練習といこう。

「フレイム」

しかし、なにも起こらなかった、恥ずい。おい、素振りしろ素振り、向日葵とエーデルワイスは首を傾げる。

《使用者、北川 龍登には、火魔法の適正がありません。》

えーと、それはあれですか？スキルは取得できるけど使えはしな  
いって事ですか？

《本来は取得する事もできませんが、強欲のようなスキルを使い、習得  
することは出来ます、が適正がなければ使うことが出来ません》

じゃあ他に使える属性は？

《風魔法以外の適正がありません》

だから、イーゼルは風魔法だけを渡したのか、ちなみに藤白の適正は？

《聖属性の適正が最も高いです。他の適正も使えない程低くないです。最も低い闇魔法適正も一般平均の三倍です。》

ふーん、平均ってどういう平均なんだ、どういう方法かで大きく話が変わってくる。

《人の平均です。数値化すると火23水15風13土27聖9闇3です。》

こう言うことだ。平均の三倍と言えば多いと聞こえるだろうが、元が小さければ意味がない。これでは聖属性と並ぶ程度、そしてこの平均の対象、多分この街だよな。

《正解です》

なあ、もしかしてだけど、人は闇魔法の適正ってその他と比べると全体的に低いだろう。

《確かに低いです。ですが稀にかなり強力な者が産まれる場合もあります》

どこで調べたその情報？まあいい、藤白の適正を数値化するとどうなる？

《火50水70風66土52聖116闇9です》

多少闇魔法使えないくらい跳ね返すアドバンテージがあるんじゃないですかね、代行者さん？

《あなたの適正次の通りです火0水1風19土2聖1闇1》

おい!?聖と闇どうなってるの!?なんか怖い!!他の適正どうでもよくなるくらい不安なんですけどこの表示は？

《測定不能です》

最初からそう言うてください。ビビっただろう。と言うか低いな魔法適正。風でも平均少し越えたぐらいだ、火魔法に至っては0ときた。使えない訳だ、これは、

《使えない訳ではありません》

と言いますと、0でも可能性がない訳ではないと？小数点より下に数字があれば完全な0じゃないが限りなく0なら諦めるよ。他を伸

ばすし。

《冒流を使つて適正を書き換えれば、使用は可能です》

冒流すげえな、唯一の欠点は自分以外への使用は対象に触れる必要があることだけか、それ以外はほぼ万能と言えるだろう。では少し養分を蓄えにいけますか。存在値が大きくて楽に倒せる生け贄を所望する。代行者よ、別に俺が動く訳ではない。はっはっはっ、

《こちらはどうぞでしょう》

ん？こいつは、まさか！

《一体一体は少ないですが、数が多く、強さに反して存在値が大きいです》

ステインクバグ

スキル 悪臭1 逃げ足1

へえー、ステインクバグっていうんだー……カメムシじゃね？俺が嫌いな害虫ベスト3位に食い込んでくる強者だ、(1位はG)こいつの厄介な所は、遭遇率の高さと臭いだ、ちよつとした隙間から屋内に侵入し、あの青臭い臭いを放ち、自分の臭いで気絶する虫だ。が、それは元の世界の話だ、今視界に捉えている虫は猪位はある。尚且つ、赤いのや、青いの、黄色いの、明らかにヤバそうな紫、オーソドックスな緑色と茶色

よく言えばカラフル、有りのままを言うなら地獄、その内デカイGに遭遇しないといいがな、

## 害虫ハンター縮めてガイハン

こう言うときは代行者と相談だ。元の世界では果物やアブラムシを吸う生き物だったがこつちで人を襲わないという保証はない。でも、一番気になるのはやっぱり悪臭、

《冒洗で存在値を吸収する際に悪臭をポイント返還して、別のスキルに振り分け治……………》

ちよつと待て、……………そうか、触らなきゃいけないのか。しかも冒洗で瞬殺は無理。臭いの確定コースやん、うーん、……………万能結界でなんとかなるか？

《恐らく問題ないかと》

そこは断言して、割りとマジで……………、それと人を襲うのかこいつらは？

《悪臭を出す以外は無害です》

それが一番問題なんだけど……………はあ、無害ならその内藤白の特訓相手にしても大丈夫だろう。その前に幾つか検証しよう。

覚悟を決めて一匹召喚、オーソドックスな緑のやつだ。ちなみに藤白には、素振りができなくなれば持久走をするように言っている。

「まずは、様子見だな。」

結果、襲つてこない。おとなしい。さて、万能結界、臭源遮断！素早く背中に飛び乗り、冒洗で存在値とスキルを奪う。ステイ……………カメムシでいいや、カメムシは暴れるが、人を振り落とせる程の揺れではない、オークより時間は掛かったが動かなくなった。ここで真理発動。周囲の状態を見る。カメムシの臭い、分泌物を探すと大量に空気中を漂っていた。臭いはしないので結界で防いでいるようだ。ただ防げるのは臭い物だけ、紫は避けるつもりだ。

《紫以外なら何でもいいですか？》

？よくわからんが頼む、そうだ、このカメムシ、素材は金になるか？

《素材等は需要がないですが、ギルドに討伐証明すれば、ある程度の金額がもらえるでしょう》

どう証明するの？臭い？嫌だよこの死体持ってくるの、  
《触角を削ぎ落として、それを持っていきます》

あー、そうなの、……あれ？だとしたら、ゴブリンとかオークでも似たようなの有るんじゃない？

《ゴブリンは耳、オークは足（蹄）、オーガは角、虫は概ね触角です》  
前、ライトニングで焼いたゴブリンの総額はいか程？

《一体で銀貨一枚ですので、金貨8枚と銀貨7枚です》

決して少くないが、手間を考えると微妙か？過ぎたこと考えても仕方ない。カメムシの触角を切り、隔離で仕舞う、ついでにカメムシ本体もだ。何かに使えそうだし、さて次のカメムシだ。

この時、俺は完全に油断していた。

今度現れたのは赤いカメムシだ。何か早そうな気がするが、速度は至って普通だ、同じように飛び乗ると同じように冒流を使う。その後、目と鼻を激痛が襲う。

「あー……！」

こんな大きい声出したの何年ぶりだろうとか一瞬思ったが、余裕は然程無い。

「目があー染みるううー！」

カメムシに止めを刺してから、近くの川の水中に結界をはり、そこから水を隔離していき、俺の頭上に張った結界から水を出させ洗う。まだ違和感があるが幾分マシになった。で、代行者よ、さっきのはなんだ、

《ステインクバグです》

そうじゃない、いや、体験したから大体解ってたけどさ、唐辛子等の刺激物、催涙スプレーのようなものか？

《そうです。》

カメムシという概念で、臭いだけだと思っていたが、元の世界とは違うのだ、切り替えないとな、だが、

「涙と鼻水が止まらない……！」

暫く休憩、ついでに自分の考察を交えながら、代行者に相談してみる。ここでは、元の世界の知識と手持ちの情報を使う。まずカメムシ

の色だが、元の世界では食べ物によって体色が変わる生き物がいる。他だと警戒色、識別、交尾等があるが、緑と赤で出すものが違う点から他の色も違う可能性がある。代行者わかるか？あと火魔法の適正とスキルを上げといてくれ。適正は40くらいにして残りはスキルに頼む。

《わかりました。臭いについては以下の通りになります》

緑 雑草臭 気絶しそうになる。鼻腔に違和感が残る。

茶 排泄物臭 間違えなく吐く、ドラゴンさえも吐く。

赤 刺激物 悶える激痛、涙と鼻水が止まらなくなる。

黄 腐敗臭 鼻が曲がる気絶もする。長く臭いが残る。

青 魚臭 気合いがあれば吐かずすむ。なければ吐く。

紫 毒物薬物臭 精神的に不安になるが、害はない。

《他にもいますが、こんなところででしょうか》

他にもまだ見ぬカメモシ達が君を待ってるぜ！知るかボケ！待つんじゃねえ！なんだまだ見ぬカメモシって！全然心踊らねえよ！あんなだけ毒々しい色して無害なのか紫！

それと茶色、知らずに選んでたら大変な事になってたかもな、あとドラゴンいるのか、

《通常の排泄物の約百倍、放出一秒で直径五十メートルの範囲に広がり、確実に一週間は臭いが残ります》

怖！百倍のう○こ臭が一週間………生き地獄だな。この時ほどあの神に感謝した瞬間はないな、さて、再開しますか。

結構時間が経ったな、成果を確認しよう。ステータスつと、

名前 北川 龍登

種族 #%5\* ; ▪

パーソナルスキル 真理ノ瞳 万能結界 冒瀆

スキル 芸術10 指導8 鑑定5 武芸3 隠密1 風魔法1

0 火魔法4 → 人形作成10 義体・義肢作成10

耐性 炎熱無効 低温耐性5 雷撃・突風耐性5 衝撃耐性5 闇

魔法耐性5 聖光魔法攻撃耐性6 精神攻撃耐性5

称号 爆死 稀代の人形師 new害虫ハンター

武芸3 内約

剣術7 体術8 → 棒術3 格闘術2 斧2 扇1

火40水1風19土2聖1闇1

気が付いたら害虫ハンターになっていた件。

内約 害虫ハンター

虫系の魔物に与えるダメージを増やす。(三割増し)

……微妙、これは置いといて火魔法行くか。

「フレイム」

ゴオオオオオオオオ!

……代行者さん? 発火レベルの魔法なんだよね? 天を貫かん勢いで火柱があがってるんですけど!?

《調整してください》

いや無理! 初見で上手いこと出来るか! 練習でこんなもん出す予定じゃなかったわ!

《では、魔力の供給を絶ってください》

まず魔力がよくわかりません。……仕方ないし、火柱を消すイメージ。チョトづつ火力を弱める感じ、すると、火が少しづつ小さくなり焦げ跡を残し消えていった。ホツと胸を撫で下ろす。が、その後、遠くから何かが砂煙を巻き上げながらこっちに来る。千里眼で見ると向日葵だ、状況はよくわからんが、エーデルワイスと藤白が振り回されている、いや、しがみついているのか? あつという間に目の前に来るとその勢いのまま、飛び込んできた。

「ご主人殿! 御無事でしようか!」

さつきまで何ともなかったが……骨まで衝撃が浸透したわ、

「さつき、凄い火柱が上がって……」

「……………(コクコク)」

藤白はともかくお前らは俺が火や熱の類いが効かない事は知ってるだろうが、

「俺に火は効かん、お前らを作る時、焔に手え突っ込んでただろ?」

「あははは……は……」

「……………それでも、心配、」



向日葵は完全に忘れてたな、笑いもしりすぼみに小さくなっている。

「そ、そうです。心配です!」

本当だろうけど、後から言われても……………

「あの?火が効かないとは?」

「……………ああ、効かない、炎熱無効があるからな、お前も毒物が効かないだろう?」

「え?」

「……………ん?」

あれ?なんか噛み合わない。

「ステータスについては聴いたか?」

「ある程度の金があれば、後は魔物を狩ればなんとかなるだろう、って笑ってましたけど、駄目ですか?」

「……………うん、駄目だね。」

問題しかない。

自分の能力の確認の仕方くらい基本だろ。話を聞く限り脳筋のよ  
うな……………、そして、こいつに魔物を狩れるかどうか判断しろよと  
思う。

「まず、ステータスと言う、または思う、念じる。」

「はい!ステータス、」

ついでに俺もチェック。

名前 藤白 功德

種族 人

パーソナルスキル 毒物・薬物効能操作・製造

スキル 棍棒4

耐性 毒無効 健康体

称号 薬殺されし者?

## 加護 戦神の加護

……………にしても、加護つてのが解らん、棍棒のスキル伸びすぎだろ。向日葵の格闘術の二倍成長している。

《加護については次の通りです》

戦神の加護 武器を含む戦闘系スキルの成長を早める。

これのせいかな、藤白の努力もあるだろうがこの加護があれば多少鍛えれば即戦力である。が、いくらスキルを鍛えても体力がなければ意味がない。

「持久走に力を入れるか、」

ん？なんか引つ張られてる？後ろを見るとエーデルワイスが服を引つ張っていた。

「私も見て、欲しい、」

どういう意味？いや、何となくわかるが言葉のほうかわからない。表情等からだだ見て欲しいのではなく、能力を見て欲しいと言う意味だろうが、何故わかったか？と、その疑問は真理で見た結果わかった。

No name オートマタ

機構精霊 雪解けのエーデルワイス

パーソナルスキル 救恤

スキル 聖光魔法9 精霊魔法10 自動修復3 読心6 家事

8

耐性 毒・酸無効

称号 生きた人形 良妻賢母？

言いたいことがいっぱいあるな、まず救恤これは？

《美德系で強欲と対をなすスキルです》

救恤 内訳

救済の聖者 補助、回復系の魔法の効果が格段に上がる。

神秘 大罪系、悪魔系の威圧や毒、呪いを退ける。

じゃあ次、良妻賢母？は、この短期間で称号？付いてる奴また見るとは思わなかったわ、

良妻賢母？ 家事8

家事8 内訳

なんじゃこれやあ！いや、最初はいい、最後の催淫、それと読心、何か手玉に取らそうな組み合わせだ。

「……………」

あつ、こら、読心使っただろ、上目遣いやめい！言葉の違和感は読心で俺の考えを読んでいたか……ちよ、そこからの催淫はヤバいつて、軽く拳骨一発でもこの状況では、降り下ろせない。これは孔明の罠か！誰か！ヘルプ！

ゴウツ！

……………あの、すいません。向日葵さん？何かパチパチ燃えてませんか？その炎の塊どうすんの？振りかぶつて……………投げた！ぐはっ！おい！いや、熱い訳じゃないけど、服が景気よく燃えてんじゃねえか！

「ご主人殿から離れるです」

エーデルワイスは炎が飛んできた段階で離れている。笑顔で威圧を解放している。青黒いのがゆらゆらしてるよ。

「何するの？」

が、効果はないようだ、俺のは何故か効いたが、と言うより避けずに守って欲しかったかな？新しい服着よう、エーデルワイスの周辺には、青白い光のような者が漂っている。そしてこれも天を貫くように上に昇っている。

「あの……………大丈夫なんですか、あれ、ただならぬ雰囲気なんですけど」

「対を成しているがために相性が悪いのか？」

「対？あの二人が？」

「いや、スキルがな、あの煙と光を見ればわかるだろ。」

「えー……………、何の事ですか？」

「いや、……………全身覆うように出てるし、何より空に……………」

いや、待て、藤白と初めて会ったとき、向日葵から出ていたが、周りの人間、つまり店の客、店員、呼びに来た青年、そして藤白、俺以外誰も気付いた者がいなかった。それこそ盛大に漏れ出ていたにも

関わらずだ、

「藤白、これ見えるか？」

右手を突きだし、冒涇を発動黒い煙のようなものが上がり始める。  
「何も乗ってませんよね？」

「どうやら見えてないらしい。じゃあ次だ、

「あれはどういう形をしている？」

頭上を漂わせ練習している立方体を指差す。

「……………何も無いと思いますけど」

何がしたいのかわからないと言う顔をしていたので見えるように  
するか、見えてないようだし、万能結界、着色・黒。

「な、なんですかこれ！」

まあ、なんだ、ただネタばらしをしても面白くないので、太陽の光  
を利用してちよっとした作品を作ってみた。頭上の黒とは別にガラ  
スのような（俺からの見た目では何一つ変わってない）結界をそのま  
ま可視化、太陽の光を乱反射させる、複数の小さな結界を適当に配置  
する。

「これは俺がもらった能力だ、送られ方は、アレだったが……………、も  
らったスキルには感謝してるよ。あと耐性関係な……………そろそ  
ろ止めるか、—おい、帰るぞ、置いてかれないか？」

「あつ、ま……………」

「置いてかないで—！うううっ……………」

半泣きで鳴き声でこっちに走ってくるエーデルワイスは受け止め  
なければいけないという義務感を感じた。娘をもつ父親の気持ち  
がわかった気がする。

## ピンクの化け物

さあつて……と、エドガールのところに行きたいのだが、今更ながら服装を整える必要がある。流石に農作業服や、来たときのシャツとズボンと薄い上着でいくのは、一回行って見た感想としてはアウトだ。正装とはいかないまでも少しマシな服装にした方がいいが……

「こちらはどうぞでしょう。」

「あっちの方が、いい」

店選びの段階でこれだ、このままだとまた揉めそうだ、ただ服装を見直す必要性はいろんな意味でありそうなので思い耽り、行き交う人を観察する。

「……………どうするかな？」

元の世界と同じ感覚で着るものには、こだわりがなく農作業用の飾り気のない服を選んだが、元の世界程治安も良くない、絡まれるリスクも高くなるし、何かと不利になる。某国の例だが、肌の色の違いだけで銃を向けるだけか、即発砲かが変わる。警察も法の元に公平に見るとか姿勢ではいうが、結局一人の人間、極端な話、片方が権力者で、片方が、農耕夫で、揉め事があつたとし、権力者に非があつたとしても、必ずこちらに味方してくれる保証がどこにある？勝てなくても責めてイーブンに持ち込める、話をまともに聞いてもらえる職業に見える格好、が理想、いろいろな街を歩き来する点から、第一が冒険者や旅人だが、前者は揉め事が多そうという印象で話を聞いて貰えない可能性がある。後者は立場が悪い、根なし草だ何だとかで追加で話を聞いて貰えない可能性もある。冒険者はその辺り、魔物を狩るので目的は事欠かないが、旅人の目的はなんだ？それによつては要らぬ疑いを生む。生まぬために調べることも出来るが、いろいろはしよると面倒臭い。手間に見会わない。まあ、それらの立場が逆に有利になることも有るかもしれないが、そんな希望的観測で決めるには楽観的過ぎる。

「……………静かにして貰えないかな？」

考えながら、人間観察しながら、会話を聞き流しながら、ちよつとイラつきながら、近くの………つて、藤白がいねえ！また変な物買わされそうになってる。あいつには世間には、どういう人間がいるかを教えながら、やっていくしかない。俺大忙し、えっ？そんなに忙しくない？まさつかー、五つのながらだよ、（実質三つ）

「小物は最悪作るとしてもベース………」

その時、荷車の影から出てきた人物に目が止まった。予想が正しければ商人だが、ただの商人ではなさそうだ。使い込んだ外套、細かな彫刻が入った細剣、それらのバランスを乱さず動きやすい靴、鑑定と真理を発動させる。

名前 ブライアン

種族 人

スキル 剣術3 投擲3 体術3 鑑定3 水魔法2

耐性 毒物耐性2

代行者経歴は？

《元冒険者で3年前に旅商人なっています。》

旅商人の立場は？

《上は国と取引で引く手数多ですが、下は行商人です》

ふむふむ………、それなら悪くないかもしれない。まずは外套を探すべく、藤白を回収、残りは首根つこを掴んで目的地に引つ張っていく。これ以上、引つ張る奴が増えないといいのだが………

まあ、最低限は揃ったので、これで行くでしょう。黒い外套、帽子、靴に、ズボン、あとシャツ、合計金貨3枚で銅貨二枚のお釣りが帰ってきた（2キユパ）。

「ふう、これなら大丈夫だろ、多分後は、と、」

やるべきことを思い出しながら、最優先事項から実行していこう。

1 ギルドでカメムシの討伐報告と魔石の換金（足りない場合は仕事を探す）

2 プレゼント用の人形作り、外套に防衛式の刺繍と小物作り、時間は有限である。ギルドに入る。直後、

「死ねや！」

と言う声と共に斧が、降り下ろされた、がバキツ、

頭に命中した、ように周りには見えただろうが実際は違う。柄のひびの入った箇所当たりに当たるように結界を張り、そこで折った。そしてその刃先は……………

バタン！

半裸の男の眉間に命中。脳に達しているので死ぬだろう。代行者と未来視によって導いた結果だ。事故死なら怪しまれないし、しつこそうだから警戒はしていたが、……………ここで仕掛けるか、まあ、……………おっとと、

「大丈夫ですか！」

立ち眩みか？ 攻撃は当たる前に防いだ筈だ、

《未来視を使用した影響です。完璧なシミュレーション結果を出す事が出来ますが、演算能力を酷使するので、倦怠感や眠気に襲われます。代行者にリンクすれば負担を大幅に減らす事が出来ます》

……………次からお願いします。

「大丈夫だ、」

不安そうな顔の藤白に声をかける、ただよろけたお蔭と言うのもなんだが、周りには俺に攻撃が当たってフラついているように見えるようだ。若干頭が重く感じるが、まともには歩けるので、受付に行く。ただ、初めてみるな獣人さん、犬か？ 狼か？ 赤髪のまだあどけなさの残る顔立ちの少女と言えるだろう。

「討伐証明がしたいんだが、この受付で合ってる？」

「はい、ではカードを」

「……………カードは無いんだけど、ないと駄目？ 駄目だったら登録したいんだけど？ こいつも一緒に、」

後ろの藤白を指差す、

「はい、わかりました。では、お手数ですが、登録の方を……………」

「わかった、」

渡された紙を見ると、項目が二つ、名前と特技だけ、が、問題に直面した。字が書けない。代行者なんかならんか？

《わかりました。特技の欄はどうしましょう?》

剣と風魔法にしといて、

《わかりました》

右手でペンを握ると後は、代行者が手を動かす、………なんか変な感じだな、勝手に手が動いてるのつて、書き終わったら紙を渡す。あつ、藤白は大丈夫かな?

「僕も書けました。」

一応確認………特技は、毒が効かないって、まあ、本人がいいならいいか、………と言うか、何故書ける?

「こちらがカードになります。」

早!もつと手続きとか、時間が掛かると思ってた。ポイントカードと同じくらい感じた、

「これで討伐証明ができるな、」

この時俺は、完全に忘れていた。失念していたと言うべきだろうか、さて、ここで問題です。

Q、ステインクバグの排泄物臭は通常の100倍ですが、触角は臭いが半分になります。犬は人間の10倍の嗅覚をもっています。

「うっ………」

※しばらくお待ちください。

何があつたかは彼女の名誉のために言わない。例え部屋の隅で、虚ろな瞳で桶を覗き込んでいようと、

「……………」

困ったのは、彼女以外の冒険者や、ギルド職員が、蜘蛛の子を散らすようにいなくなってしまった。触角は閉まった、藤白は臭いには強いように鼻を摘まんで顔をしかめている。残り二人は………

「すうー………、はあー………」

「んっ、うんん、……………ふあ………」

外套をマスク代わりにして、呼吸をしている。五感については、offset可能なようにしておいた筈だ、呼吸も本来要らないので、同じ仕様にしてある。

「……………ぐぐっ、」



※しばらくお待ちください。

いや本当、悪いと思ってるよ。だから、たまにこつち見るの………  
「う……………」

※しばらく(以下略)

このやり取りを何度か繰り返した後、奥から宇宙服のようなものを着た、ギルドマスターを名乗る人物が出てきたのでそちらに引き継がれた。

帰りに受付カウンターのケモミミさんの所に少し金貨を置いておく、以外と金になったな、カメモシ、ただ出す時は注意しないといけない。茶に至っては街の入り口で報告するのが基本だったらしい、持ち込み禁止とかではないのが助かったが、

「今度は裁縫系の工房探しだな、」

藤白はあれ以降一言も喋っていない。まあ無理もないか、自力で、激臭に長時間耐えたのだから、時間としては晩飯時だが、食欲が湧きそうな者がいないのでそのまま工房を目指す。勿論、代行者ナビだ。

《ナビではありません》

じゃあ、G O O g l eだ、

《違います》

まあいい、移動中に説明しておこう、未来視の能力だが、無駄にハイスペックで、燃費の悪い能力だ、現在の状態から、何日か先の天気や、何十年後の街の栄枯盛衰に至るまでスーパーコンピューター並みだが、人の身には余る力だ。現在かなり眠い。だが、役に立たない能力ではない。演算能力を高まることで、思考速度をあげ、反応速度をあげることができる。雨の日に使えば、雨粒一粒一粒が止まっているように見える。いつ未来視を使ったかって？列車の移動中、人形作りの休憩がてらに一回試したのだが、使いすぎてそのまま寝落ちした。起きたときの気だるさときたら……………

《……………着きました》

なにその呆れた感じ、間の部分にため息的なものを感じたんですけど？

《気のせいです》

………なんあんですかあー！このどピンクの建物は！お邪魔しまーす。

「あーらー、いらしや………」

名前 黒田 源次

種族 人

スキ………

お邪魔しましたー。

「ちよつとー待ちなさいよー！」

鑑定を中断するくらい見た目でごめんさいなピンクの化け物。それが目の前にいれば、逃げるよね、普通、

「はあ………、工房を借りたい。」

本音は帰りたい。マジで、………寄るな！モザイク物体！

「工房は今は1時間で銅貨七枚、糸や布はここで買ってもいいし、持ち込みもOKよ、工房の機械は使ってもいいけどくれぐれも壊さないでね、」

「………わかった。」

糸と布、綿も吟味して選ぶ。その値段と三時間分の料金を渡し、さっさと作業に掛かる。時間は有限である。人形だが、くまのぬいぐるみにしよう。ついでに防御式の刺繍を入れよう。綿も魔力が多く溜められる物、それと、外套の裏、背中に当たる部分に刺繍を5つ、向日葵の髪の毛を作った時の余りを使い、切った分は襟や袖の装飾に使えそうな物を代行者に出させる。まともな方法だと間に合うはずがないのは明白だが、何も全てやる必要はない。後で出来ることは後に回せばいい。ピンク色の装飾の鬱陶しいミシンを睨みながら、作業を開始する。………その前に、

「藤白、向日葵、宿押さえといってくれ、」

藤白に金貨を放り、ピンクのミシンに向き直る。一定の間隔で布を針が貫く音だけが聞こえる。その単調さ故に、眠気が………いかに、いかに、なにか別の事を考えねば、………作業に集中しろと？やっていますよ。手は動いてるよ、寝たら止まるけど、所持金については、保

釈金は足りている。盗賊から回収した宝は、金貨68枚分は直接使えるが、残りは売却、換金する必要がある。だが、この街では何かと問題になりそうなので、置いておく。あつ、そうだ、

「エーデルワイズ、こつち、」

「何………マスター、」

頭に手を置くと、念じる。『汝、我主トスルナラバ、汝、奇跡ノ使徒ニ任ズル』

奇跡ノ使徒 内訳

体現セシ者 魔法の効果を2倍にし、演算能力、情報処理能力を大幅に引き上げる。

宣言スル者 効果範囲や射程距離を大幅に延ばす。

えげつない魔法特化だ、しかし、近寄られた時の戦い方は、教えておかないとならないだろう。体格的にも、重要になるだろう。さて、作業の続きだ。

お久し振りです！兄貴！とか、心の中で思った。

まだ、眠い目を擦りながら洗面所を目指し足を進める。実は5時ぐらいだったりする。まだみんな寝てる。だが、職業柄と言うべきか早く起きるのは癖のような物だ、顔を洗い、今日の予定と、今後の技能修得についてのプランを代行者と話し合う。昨日聞いた通りだと、属性魔法以外にも魔法はある。錬金術、陰陽術、風水術、死霊術、幻惑魔法、他にまだあるが今知っているのはこれだけ、特殊なものは魔眼系、精霊魔法、召還魔法、それと、異世界人特有の魔法等がある。特殊なものはいと置いて、錬金術を勉強しようと思う。

《錬金術を修得するためには火魔法と土魔法の適性が必要です》

適性上げるか、何するにしても金属は必要になることが多い。俺の場合は特にそうだろう。冷たい水は一発で目が覚める。……飯食いに行くか、と思ったが、机の上に料理があった。置き手紙もある。『朝起きられる自信がなかったのでつくりました』

ありがたいな、今にやけているだろうな、ほっこりした気持ちになりながら、改めて料理を見た。……どうしよう。右半分が見れない。恐らくこの左右で向日葵とエーデルワイスの作った物の違いだろうが、左は見た目普通、右は黒のモザイク、原材料もわからないくらい炭化している。と言うか、あいつらどこから食材調達してきた？「いただきます。」

まず、左から、スープを暖める間にサラダやパンを食べる。ドレッシングは作ったものだろうか？あまり酸味がない気がする。うまいのだが、馴染みのない味だ、作り方が気になる。スープは文句なし、シンプルながら食後には満足感のある味だった。……さて、次だ、まづ物体1……炭だ、物体2……炭です。物体3、パリッパリの……炭でした。感想どうしよう。結構真剣に悩んでいると、服の裾を引っ張られる。

「炭……食べた？」

エーデルワイス？お前じゃないのはわかったが、もう少しオブラートに包もうか？

「スープは特に美味しかった。ありがとう。」

頭を撫でるととても嬉しそうだ、癒されるわー、背中に凄く視線が刺さるが……感想どうしよう、しかし、手触りもいいし、ずっと撫でてたいなー、うん、………ん？

「お前、催淫使ってるだろ、」

当人はどこ吹く風と、嬉しそうに撫でられている。まっ、いつか、  
「……うう~~~~~」

向日葵が飛び付いてきた。多分焼きもち、頭を撫でてやり、何とか料理の感想についてを誤魔化す。と言うか起きられてるじゃん、気になっただろうけど、微笑ましい限りだ。

今日はいいい一日になりそうだ。天気もいい、藤白もだいたい一時間後に起きた。

「それにしても驚きました。僕魔法の適性高いんですね。」

「閻属性魔法以外なら難なく習得出来るだろう。」

魔法は強力だ。だが、魔力が無くなれば使えなくなるし、近距離なら、武器の方が有利になるだろう。理想としては取り回しのよいナイフや拳銃なんかがいいのだから、刃物は無理、銃は存在さえ不明、仕方ないので筋トレだ、

「話が合えばイーゼル被害者の会でも作るか」

エドガーの所に行つて、そいつがどんな奴かにもよるが、可能なら情報共有と一緒に行動するのもありだが………今悩んでも仕方ない。

名前 芦原 輝一

パーソナルスキル 最後の一服

スキル 剣術5 短剣術4 威圧5 風魔法6 格闘術5

耐性 物理攻撃耐性8

称号 戦い抜きし者

「遅かったやんけ、」

刑務所からしゃばに出できたヤクザを迎えに来た気分だな、うん、左目の下の傷ヤベエな、おい！

「坊主、横におるんが北川か？」

「はい」

これは素早くこちらの交渉に持ち込むべきか？縛りになりそうなワードは避け、当たり障りがない会話、共感できる話題も添えて、

「はい、僕が北川です。しかし、お互い災難でしたね。僕も空に放り出されまして、送られて早々死ぬところでしたよ。」

「ホンマやで！あの糞アマア〜……………」

はい、自主規制入ります。

「……………、キツチリ落とし前つけたらあ！」

怒りを露にする芦原さん、ちなみに三人の教育上宜しくなさそうなので、万能結界で囲って音を遮断しておいた。が、口パクで物凄い形相で何か言っていたら、それはそれで怖いよな。エーデルワイスが俺の後ろに回った。

「ああ、嬢ちゃん怖がらしてしもたな……………」

まあ、反応を見る限り、根からの悪人では無さそうだ。俺の経験則では、裏表のない人だな、藤白については度を越えた世間知らずだ、「気にしないでくれ、人見知りなんだ、」

実際街中でも、害意ある視線を敏感に感じ取り、俺の後ろに怯えながら隠れたりする。おまけも付いてくるが……………、俺ならその害意の内容も何となく分かるが、不快感が込み上げるばかりだ、神に高所に出される理不尽さより、よっほど腹立たしい。ヤバ、思い出したら、威圧が漏れそう。

「……………北川さんよう、あんた、前は何しとったんや？」

やべ、漏れてた。警戒されたか、称号からもわかるように、戦闘の経験者だ、もっと注意すべきだった。

「……………あなたは何を？」

「見ての通りや、堅気の仕事やない、せやからわかるんや、雰囲気とかでこつちか、そうでないかがわかるんや、けどな、あんたは、……………訳がわからん、気のせいかもしれないけど、一瞬こつち側の雰囲気がな、」  
雰囲気ね、勘だらうけど、……………隠すほどの事でもないし、言うか、若干不安だけど、

「……………教師、美術の」

「……………はあ？センコウ？」

その呼ばれ方は、腹立つけどそうだよ。

「……………なんで死んだんや、交通事故とかか？」

「火の無効化が関係してるんですか？」

「爆死だとよ、ボランティア活動の引率でいったら、空港出てすぐのバスで自爆テロだ、それに巻き込まれた、」

俺が嫌いなものは、……………結構あるが、エゴイストは一際嫌いだ。自己中、アホ、偽善者と三拍子揃っている。ここに空気を読めないが加われれば、ゴミの完成である。別に思想を訴えるのは構わないが、押し付けがましい態度や姿勢、テロのような暴力もとい、自爆、巻き込まれる人の身になってほしいものだ。まあ、誤認の多い偽善者や、自己中はどう足掻いても無理だが、

「……………はあ、」

こつちも完全に理解できるとか、のたまうつもりもない。一番危険なのは過信だ。

「……………そうだな、また後で改めて話をしよう。」

あとはエドガーに金貨と人形を渡すのみ、何事もなければいいのだが、もう無理なのはわかってる。千里眼で確認したが、まだ、居座っている。ときより周りを見渡すが、その目は欲に眩んでいる。こつちとしては、渡すもの渡してさっさと帰りたいのだが、

「どうかしたんですか？」

「なんや、辛気くさい顔しおって、」

「……………行くか、」

「ご案内致します。」

使用人がいるからだ、こういうのは挨拶に来てほしいと言う意図があるからだろう。

扉の前まで来てしまった。ため息を吐きたい気持ちを押さえ込みながら、ノックをする。ここは使用人がする所なんだが、あつちと礼儀作法が違うかも知れないし、まず、そんなに詳しくくない。

「失礼します。」

軽い感じでやってしまったが大丈夫だろうか？ドアノブを捻る。藤白と芦原さんは置いてきた。今は向日葵とエーデルワイスをつれ

ている。正直、こいつらも置いて行きたかったが、頑として引かなかったので連れていかざる終えなくなった。

「頼まれていた人形を持ってきました。」

隔離しておいた人形を机の上に置く。そしてその横に、袋（金貨入り）を置いておく。そしてさっさと退室、

「待ちなさい！」

……とは、行かなかった。因縁付けられる可能性もあったので、完全無視で行きたかったのだが、あく、めんどくさい、無論、表情には出さない。

「なんででしょう?」

ドアノブもう掴んでたのに、そんなことを考えながら振り返る。木っ端改めて、クリホードは、一言で言えば雑誌のモデルみたいな奴だ、素材はな、服装なんかをみればわかるが、完全に装飾過多、ハッキリ言っただけ目障り、洗練がなされていない、何でも付ければいいと言うものではない。出来るなら今すぐ目を逸らしたい。一回、咳払いする姿は、俺にとっては鳥肌ものだったと言っておこう。

「そちらは私の客人で、キタガワ殿です。」

エドガーナイス!これですんなり帰る流れに持っていける。と思っただけ、

「……………それにしても、美しい。」

このバカが、俺に殿まで付けてるんだぞ。しかも、客として呼んだとまで、エドガー見てみる。呆れてものも言えないって顔してるぞ、旅商人に見える格好を選んでこれだ、相手の接し方や、権力など少しでも探れや、だが、このままなにもしないと、俺の横をすり抜けていくだろう。

「これは、これは、クリホード”殿”では、有りませんか、わざわざ”遠い所”から、どの様な御用向きで、エドガー”様”のお屋敷へ」

トゲだらけの言葉と共に彼女達に伸ばされていた手を掴み、握手に持っていく。そして、自分の体を壁にして進行を遮る。視界的な意味でも、さして、どう来る?」

「そんなことより、そちらの方は?」



至近距離であからさまにため息の一つでも吐いてやろうかと思っただが、それとは別の有効打を打つ方が効率的なのでそつちを進めよう。

「二人とも、……ちよつと外で待っていてくれるかな。」

「……………わかりました。」

こう言うとき笑顔で向き合うべきだが、それだどごねるので、声色は明るく真顔で言った。渋々ながら了承してくれた。あんまりこういう顔は見せたくないよね。全く、さて、二人とも部屋を出たところを確認してから、思考を切り替え、薄い笑みを浮かべて振り返る。

「あの子達は護衛でもあるので、手を出さないでもらえますか？」

「護衛……………ですか？」

「私はさまざまな場所を行き来しているのですが、自分の身を守る程度の實力はあっても、荷物まで回らないので、それで、」

「そ、そうですか、……………」

「では、私はこれで、……………」

「少しよろしいですか、人形の説明をお願いしてもよろしいですかな、」

「……………実際に見てもらった方が早いですね。一応説明書は袋の方に入れておきましたが、少し魔法を使います。」

机の上の人形を手に取り、反対の手に火を出す。加減はある程度出来るようになったので、問題ない。

「フレイム」

その火で人形を炙る、二人とも啞然としていたが、人形には一切焦げ跡も火も付かない。それどころか火が人形を避けている。

「効果は所有者を守る魔法、それ以外でも守ってくれます。魔力は所有者の物を貯めておくことも出来ますし、自然と貯まりもします。魔力が無くなれば所有者が魔力を供給すれば効果は持続します。他は救援関係が二つ有ります。300メートル圏内に思念を飛ばす機能と、あとは光魔法の初歩のフラッシュを使えるようにします。」

人形に付けられた機能は、魔力貯蔵、結界、念話、光魔法の刺繍、防御重視の構成だ。

「最後のは適性次第ではありますが、喜んでもらえれば何よりです。それではこれで……………」

止められる前に外に出る。

「失礼しました。」

さあーつてえ……………、逃げるかあ、代行者案内頼むぞ、

## スキルの謎

「……………と言うわけで、すぐに街を離れたいんだ。」

芦原さんの保釈金を出したことはバレてないとか、そんな希望的観測よりすぐ街を離れる方が手取り早い、状況や能力の説明と情報交換を行った。芦原さんの最後の一服と言うスキルだが戦闘に置いては全く役に立たない、何せ、

### 最後の一服

前世で吸った事のある煙草を前世から召喚できる。召喚の際には、その代金を消費する。

これである。どうしろと言うのだ。炎熱無効の俺にはなんの意味もない。条件反射で避けそうだが、まあ、素で強そうなので問題ないだろう。適当な小銭を渡す。

「芦原さん、これだけあれば足りませんか？」

「ん？なんや、……………これ、金か？汚つたないな、それより、何の金や？」

「それはですね。最後の一服って言うスキル実際に見て確認しておきたくて、」

「……………あー、なんや、あん時は、無性に吸いたかったな、そういえば、こつち来てから一本も吸うってへんな、」

そんなことを言っているといつの間にか小銭を渡した反対側の手に煙草の箱が握られていた。いつの間に、

「あれ？いつ買ったんですか？その煙草、」

「あぁ？いや、そんな……………何でや?!」

あんたのスキルだろうが！

ツツコミたかったが、小銭の減りを見ると一箱分減っている。後芦原さんの魔力（俺の中ではMPと読んでいる）も減っている。ついでに召喚魔法も習得している。1だが、ちなみに何故そんなものが見えるか言えば、真理のお陰だ。他にも体力、装備耐久値（一杯あるとまあまあ目障り）精神攻撃耐久値（増えたり減つたりの法則が意味不明）、そして、存在値、これだけは時間が掛かるのが課題だが、

《芦原 輝一が召喚師になりました》

……………はい？

《召喚を一定回数行った事により職業がつかまりました》

気が付いたら渡した小銭は全て、煙草の箱に変えられていた。約20箱程だろう。そんなに出してどうする？

「誰か火貰えるか？」

「まだ少し制御が甘いが出せるぞ、……………フレイム」

「おう、おおきに、」

煙草くわえたまま顔を近付けて、火をつける。暑くないのだろうか？それとも、早く吸いたいという気持ちが勝ったのか、その後は満足そうに吸った煙を空に向けて、吹いている。ただ、俺は今魔法を使ったが魔力が、全く減っていない。最初は無限スゲエとか思ったが、何というか不気味過ぎるわ、ゲームみたいにゲージで見えるのだが、境界等で防御もしてるので、ゲージに動きが全くとっていい程ない。何か別の何かを消費しているのでは無いだろうかと不安になる。

「……………どうや、一本」

「いや、俺は吸わないしいいよ、」

まあ、悩むのは逃げてからでいいか。芦原さんの服装なんかを変えたり、武器も必要だろうし。手早く準備をしよう。

スキルの説明には、何か欠落していることがある。広場の噴水の縁に腰掛けながら、そんなことを考えていた。例えば冒涇だ、生命の冒涇は、触れた対象から存在値を奪ったり出来るのだが、生物は生きている場合可能だが、死んでいる、死体からは吸収出来ない。そして、全て吸収された生物は息絶え、死体が残る。その他だが、(剣にしか使ったことはないが)効果については実感が無いが、使ったものについては消えてしまうようだが、データが足りないため断定は出来ない。

「自分の能力を把握しないとな、」

何ができて、何が出来ないのか、これを確かめて置くことは大事なことだ。特に俺や向日葵のようにスキルを奪うことができる場合、地道に鍛えた能力とは違い、いきなり力が手に入るが、身に付くかは別

問題、使いこなせず振り回されるなど、もつての他だ。まあ、俺の場合には使えないスキルは別のスキルのポイントに還元して、振り分け直す事も出来るが、

「お待たせしました。」

「……………準備できた。」

「何から何まで、すまんな」

「皆さん揃ってるみたいですね。」

……………芦原さん、いつの時代のヤクザですか？着流しとか着てさあ、目立つわ！口には出さないが、

「みんな揃ったな、ここでは目立つから少し街を離れた所か、どっかの建物の屋上にいきたいんだが、反対あるか？」

「……………何故屋上か外の二択なんですか？」

「人目に付かないのと、移動手段の都合上な、」

「こつちにもヘリコプター、なんかがあるんかいな、」

「……………有るには有るが、アレをヘリと呼ぶにはなあー」

魔導制御板の付いたヘリに見える箱だし、アレは、

「俺が結界を使えるって説明したと思うけどそれで行こうと思う。」

やることは簡単、大きな結界を張り、その中に入り、結界を動かして目的地まで行く。指導を頼まれてたあの街に、確かミレって名前だったか？ナビ頼むわ、代行者、

## 一方その頃

ミレ、変わってないな、………まだ、着いてないけど、俺からすればいつでも千里眼で見れるんだよねえー、数日の間だし、懐かしさも感じない。かなりの高度を飛んでいるが、結界内の空気は地上に張った結界から隔離して持ってきているのでそこは気にしない。ただ結界が透明なので二人は落ち着かないようだが、………俺？人形作ったり、向日葵と話したり、エーデルワイスと遊んだり至って平和です。とは、言ってもここが平和だから周りも平和とは限らない。さっきまでいた街、アスメシアだったか？何でも昔の勇者の名前の一部が付いた名前らしい。どうでもいいが、そんなこんなでミレ到着、とは行かないので、暫くは空の旅を満喫しよう。

こちらは所代わって、エドガーの屋敷、主人は首飾りを眺めて、物思いに耽っていた。異様な力をもつ異世界人、他の世界から来たその意味を込めて渡来人と呼ばれる彼らは、特殊なスキルを持つてこの世界に来る。伝承に残る悪魔系や天使系に近い、またはそれに準ずるスキルを手にするものや、奇怪なスキルを手にするもの、どれも強力だが、それは必ず”一つ”なのだ。彼の能力はおそらくは音を消すものだろう。だとすると、他が説明がつかない、篡奪や略奪の類いのスキルを手にする事はよくあるらしいが、それだと風魔法や剣術をどうやって習得したのか？既存のスキルに篡奪、音を消すスキルは聞いた事がない。

「………しかもあの人形、」

彼がに付いてきていた人形を思い出しながら、熊の人形を見る。話している限り自分で作っているのだろうが、あり得ない性能だ。魔法の効果を付与するには魔方陣を彫ったり、刺繍を入れたり、書いたりとか色々だが、材質の影響を受ける。木材は火に弱い。紙は水にも弱い。それは布や綿も同じ、対火魔法の刺繍に絞ったとしても少し焦げたり、最悪失敗して効果が出ない。だが、焦げ跡もない、それどころかさつき、使用人に水魔法を使わせたがそれも防がれた。そして、ナイフも逸らされた、つまり火だけでは無いのだ。値段を付けるとした

らいくらになるだろうか、それこそ国の宝物倉にあるようなものだ。  
「……………それより、あの辺境のガキだ、どうしてくれよう。」

あれはどうしようもなかった。状況が見えていない。その上、彼が出た後の失礼極まりない態度や質問の数々、何とか帰ったが、勿論行動を監視するように使いをやったが、

「失礼します。」

「入れ、」

連絡係が来たようだ、届いた報告は予想より悪い。当たり前のように犯罪行為を行っている所から考えて常習犯だ、証拠を集めるように指示し、窓の外を眺める。

「……………そっちはどうだった」

「ダメだ、いない」

「こつちもだ、」

「情報屋もダメだ、揉めた相手をボコボコにしたってくらいだ」

路上裏の四つの人影は、有力な情報がないか、話し合っていた。だが、痕跡は街中で忽然と消えた。分かっているのはそれだけ、しかし、「街を出たという情報が一つもない」

それが一番おかしい。街の出入りは門が東西に二ヶ所、それと列車乗り場とヘリポート、そこには門兵や係員が必ずいる。そこを抑えれば何かしらの情報が入る。しかし、蓋を開けてみれば完全に空振り、残された手は自分達の立場を危険にする手しか思い付かない。

「どう報告する？」

だからこそ、見つからないターゲットは諦めて依頼主をどうやって誤魔化すかを考えることにした。依頼主のクリホードは、顔立ちも整っているが金遣いが荒く、よく偽物を掴んだりする上に、性格も悪いことで有名、前の代から貴族としての力は弱り始めていたが、クリホードに代わってから急速に衰え、複数の商人に借金をしている。今年で23歳になるのに、縁談の一つも来ない。貴族としてはあり得ないことだ。何が言いたいかと言えば、騙しやすい、騙したとしてもこちらの受ける損害は少ない(得るものも少ないが)。鴨ネギだ、ただ一応貴族なので、進んで使いたい手では無いが、それが一番いいだろう。

「それじゃあ俺が行ってくる。…………つよ、と」

会話に参加していなかったクライスラが立ち上がる。彼にとってこの仕事は反対だったが、自分以外の反対に押されて引き受けた、元々気乗りしなかったのだ。そもそも彼は情報屋である。この中では一番適任だろう。四人は彼を見送ると、闇の中に散っていった。

青生生魂アポイタラカ

違いが生じる理由はわからないが、青い緋緋色金で、金属というより宝石を思わせるような透き通るような青で、不思議な金属である。それがミレの近くの街で価値が暴落、手持ちの金で買えるだけ買う。まあ、休憩の意味合いもあるが、

「なあ、…………どうやって儲けたんや、それ、」

モンスターの魔石を売る簡単なお仕事ですよ。（解体を除く、したこと無いが）

「コブリンやオークから魔石をとって売ったり、懸賞金の懸かっている人を捕まえたり、色々ですよ。」

言っただけで思い付いたが、千里眼と代行者があればどこにしようと容易に見出される。情報収集も同時に出来る。あまり気が進まないが、異世界人探しもしなくてはならない。まあ、こつちに連れ来られて迷惑している奴等のためと思っただけでやることにしよう。

「僕全然戦えるイメージが湧かないんですけど、」

「まあ、何とかなるやろ、」

「そこら辺は俺からも力を貸す、だけど過信はするなよ。」

真理で、スキルを細かく見て気づいたのだが、存在値を振り分ける事で能力を強化したり、進化させることが出来る。藤白のパーソナルスキルは進化させることが出来ないが、芦原さんの方は進化を促す事が出来る。まあ、吸った事のある煙草の制約が消え、追加で酒も召喚できるようになる程度だが、酒は武器になる、寒い場所等では、身体を暖める他、火を付けることも出来る。存在値を貯めてからだだが、

「それは助かります。」

「いや、そつちの力も借りたいし、お互い様だよ。お前らも期待してる



ぞ。」

「はい!!」

「うん………」

いい返事だ、そろそろ出発しよう。

## 一方その頃2

「あんまりかわいくない。」

エドガーの前にいる少女の人形に対する第一声はこれだった。これは仕方のないことだった。作った本人も初めて作ったのだそれにカラフルな物はあまり受けないかもしれないと思ったためにシンプルなものにした。そのため可愛さより品よく見えるようになっていくのだ。

「……………うむ、それは防御式を織り込んだ人形なんじゃが、」

「えっ？…これで？」

明らかに不安そうな顔をする。防御式を織り込んだ持ち物は、護符と呼ばれ、貴族の間ではよく送られる物なのだが、日用品が多く、式も決して小さくないので、丈夫だが金属は重いため、必然的に布製品や木製の家具やコップなどになるが、子どもに贈るものだと人形や服、本など限られてくる。その中で人形は小さい物になるのだが、しつかりとした式を織り込めば、人形とは言えないくらい。びつしりと織り込まれており、かわいいどころか不気味である。しかもそれだけしても火魔法の類いを完全に防げない。防ごうと思えばそれこそ子どもより大きな、それこそ着ぐるみサイズ、だが見た目重視の物はそれこそ容易く燃える。目の前の人形は明らかに後者だが、エドガーは前者よりも上であることを知っている。

「そんな顔をするな、火も防ぐし、水魔法も防ぐ、刃物まで防ぐ、性能は本物じゃよ。」

「ふーん、」

信じてないな、と思いながらそれでいいと思った。こういったものが役に立つ時は、この子に危険が降りかかったときだ。そう思い、機能の説明だけに留めた。

「な、なんやこれ！うまいやないか！」

エーデルワイスに幾らか金を預けて料理を作って貰ったのだが、あつちでは食べたことのないくらい絶品だった。素材は元の世界に比べると少し劣っている（多分異世界から渡った者が少し改善を加え

たのだろうが)が、総合的な料理になったら上回るのは、エーデルワイスの腕だろう。この世界のスキルは不思議である。まあ、幼女に金を渡して食材の調達から調理まで任せる光景は何とも言えないが、うまい飯の前では細事だったらしい。藤白も気にせず食事をとっている。こっちは無言でがつついていっている。

「マスター」

「ん?どうした?」

服の裾引っ張られて振り返るとエーデルワイスが上目使いでそのあと言い淀むような仕草を交えて視線を外す。ちなみにこの間催淫を発動させている。お陰で昨日、精神攻撃耐性が1つ上がった。

「わ、私名前、欲しい……………」

そう来たか。まあ、みんな一応は決めてあるんだが本人が望まなければ、付けるつもりはない。

「アナスタシア、それがお前の名前だ。」

寒いところにちなんんで決めた名前だが、ぴったりだ。白銀の髪、陶器を思わせる白い肌、向日葵は天真爛漫で活発、健康的な見た目で、向日葵を動とするならエーデルワイス、いや、アナスタシアは静の魅力だ、催淫なんて使わなくても二人とも別の魅力を持っている。ただまあ、催淫も家事に統合されてるのはよくわからんが、その上MAXの10だしな、

「アナスタシア……………うん、いい名前、ありがとう。」

喜んでもらえたようで何よりだ。アナスタシアの頭を撫でる。

「お前はどうか、向日葵?」

「えへへ、」

素早く俺のところに来ると、顔を近づけてくる。理解しかねていると、アナスタシアから一言、

「撫でて欲しいんじゃない?……………」

仕方ないな、少し呆れながらも頭を撫でてやる。顔を近づけられた時見とれていたのは、心の中に閉まっておこう。

「……………んっしょ、と」

何故、膝の上に乗るアナスタシア、そこからの上目使いと催淫のコ

ンボ止めなさい。お前俺の心読んだな、

「うん、」

うん、じゃないよ！これは心の中でも変なことは考えられないな。それに今は二人だからこそ、手が足りてるが（頭撫でる事）似たようなのが増えたら、俺の身が持たないな。

勇者の仕事だろ……………

さてと、精神的にはあまり休まらなかったが、藤白も芦原さんも平気そうなので出発しよう。

「……………また、アレかいな、」

「近いんでしたら歩きましょうよ。」

「ここから幾つか山越えて直線距離で70キロはあるぞ。」

「なあ、前こつち来るとき使ったゆうてた列車はどうやって来たんや？」

「でかい山二つにトンネル通して残りは迂回して、線路を通してる。」

作ったのは魔建(株)である。この会社も異世界人が創設者らしく、土魔法の使い手やドワーフが多いらしい。

「かなりの日数が必要だぞ、それに野宿の準備に警戒、足りない……………訳ではないが、とにかく時間が掛かるしこつちの方が安全なんだ。」

警戒等は、最悪睡眠を必要としない、向日葵達に任せてもいいが、生きた人形の称号がある分休ませる必要があるか、分からないことが多い。プラスばかりではないのだ、毒・酸無効は人形固有のものだが他にもあるはずの痛覚無効が無いのだ、これ以外にも何処かに弊害がある可能性もある。過信は出来ないし、あまりやらせたくもない。

「それはそうやろうけど……………」

「とにかく行きましょう。」

移動を開始する。だが一つ忘れていた、ここは異世界であるという事を、

眼前に山々を見ながら代行者に方角を聞きながら直進する。その方角に結界を動かすだけなのだが、手に入れた青生生魂を糸のように細く伸ばしながら周りをぼんやりと眺めていた。それは起きた、結界の外が一瞬で赤に包まれた。何が起きたかさっぱりわからなかった。周りを見渡すと周りの面子は驚いてはいるが無事だ。千里眼で赤が迫ってきた方向を確認する。

《イグニスドラゴンです。炎のブレスを吐きます。》

いや、知つとるわ！思つきり直撃したわ！しかし、あんなもんよく

防げたな、

《属性が火だったために炎熱無効で防げました。なお、属性が違った場合全滅でした。》

……………縁起でもないこと言うなよ。ただまあ、全員の命を預かっておきながら軽率な行動だった事は認めなければならぬ。

「悪い、ドラゴンに見つかった。」

「軽うー！」

「ほんまか！何処や！何処や！」

嬉しそうだな芦原さんは、と言うか藤白、お前そういうキャラだったか？

「まあ、狩ってくるわ、」

「ちよつと待つてくださいいよ!!狩るって、ドラゴンですか?！」

「お、それやあええな、後でステーキにしてもらつてもエエか?」

「ああ、ドラゴンのステーキかあ……………、ロマンがあるな、旨いかどうかわからんが、俺も食いたいし、頼むぞアナスタシア、」

俺の推測では筋肉質で固いと思う。が、好奇心に勝てそうにないし、今ここで言う必要はない、試すだけなら、毒でもない限りは挑むだろうし。

《イグニスドラゴンの肉は固く食用に向きません。ハンバーグ等に加工すれば食べやすいですが、包丁程度では切れません。》

逆に食用に適するのは?。

《卵や、幼成なら珍味や、高級品として有名です。》

卵か、売値は?。

《オークション等での、最……………》

ゴオオオオ!!

おう、二射目が来た。喰うにせよ、売るにせよ、捕まえる前では撰らぬ狸の皮算用、今回損傷を抑えるためにと、どの程度通じるのかを試すため、ライトニングは使わない。

「テンペスト」

竜巻が飛んでいるイグニスドラゴンの動きを妨げる。アメリカとかで見るサイクロンレベルの物を出したが妨げる程度でしかない。

ちなみにいまのテンペストだが、風魔法ウインドの竜巻のイメージに名前をつけたものだ。このスペルをルーティンとし、イメージを固めて、発動を早める事に成功している。あっ、怒って突っ込んできた。仕方ないので地上に結界を張り、こっちの結界で、俺以外の全員を隔離で移動させる。さて、まずは、

シユツ

「ギャオオオオ!!」

結界から飛び出し、もう一つ張っておいた結界を蹴り、身体を捻り、顎を避け、片目を刀でなぞる。効果はあったようだ。次に背中に刀を突き立て勢いを殺そうとするがうまく刺さらない。そのまま落とされそうになったので尻尾を素手で掴む事になった。その間も目をやられた痛みで暴れているドラゴンから振り落とされたい様にしつつ、少し落ち着いた瞬間に、素早く走り、翼膜に刃をあて、頭の方目掛けて切り裂いて行く。

「らあああー!」

半分程切った所でバランスを崩し、落下し初めた。掴まっていたドラゴンから離れ結界を張り、それに乗る。そしてドラゴンに近づいていく、

「これでくたばればいいんだが……」

落ちた箇所からの外れな方角にブレスが飛ぶ。飛べなくなっただけと捉えるべきだろう。自重で死ぬかもしれないと思ったが、まだ元氣そう、真理で見るとまだ体力が六割ある。さて、どうしたものか、目のように弱点には刃物が通るが、その他は難しい、翼膜を切り裂くのもかなりの力が必要だった。鱗の多い背中論外、それに素材として使う為には傷が多いのは困る。使える手は幾つかあるだろうが、思い付くのは二つ、目から脳めがけて刀を突き立てる。が、ドラゴンという未知の生命体に果たして有効なのかと不安が残る。もう一つは冒険で仕留める。こっちは時間が掛かるが、ほぼ確実だろうが、手負いの獣は厄介だ、それがドラゴンともなれば災害の様なものだ。それに近づき触れていなければならぬ。存在値の大きさはスキルの数や強さによって変わる。その大きさに比例して吸収に掛かる時間も増

える。

イグニスドラゴン

種族 赤竜

スキル ブレス(炎) 6 飛行 8 頑丈 5 自己再生 5 体力自動

回復 3 魔力自動回復 2

耐性 炎熱耐性 7 風圧耐性 3 衝撃耐性 5 苦痛耐性 1

オークが1のスキルを持つていた場合でも10秒、半裸の斧2で12秒、スキルだけに集中すればもう少し短くなるだろうが、これだけのスキルに存在値もプラスされる。体に張り付こうがのた打ち回って巨体の下敷きされればひとたまりもないが、試してみることにした。貴重なスキルもあるので確実に狙っていかうと、冒険でも、持っているスキルをゼロから作ることは出来ない。せめて1でも取りたい。代行者、なんかいい手ないか？

《でしたら向日葵に強欲で押しさえつけさせて、結界で、地面と固定しましょう。》

鬼か、だがまあそれが確実なのか、あんな霞にドラゴンを押さえ付ける程の力があるのか？

《強欲系のスキル保有者は腕力が増します。それに比例し、行使できる力も増します。》

あー、……：オークにデカイ風穴空けてたもんね、道理で強力な訳だ、爆発音だもん、まあ、試すだけなら問題ない。結界を張ってそこに向日葵を呼び出す。結界から隔離、結界に出すはスムーズに出来るようになったてきた。

「強欲で押しさえてくれ、頼めるか？」

「はい！わかりました。」

青黒い狼煙を上げると、その煙の根本から複数の手のようなものがドラゴンに襲いかかる。だけなら良かったが、地面に蜘蛛の巣のような亀裂を走らせるクレーターを量産、強過ぎ、

「動きを止めるだけでいい、やり過ぎだ、」

「すいません！」

あつ、手離すな！と思ったが、ピクリとも動かなくなった。死んで



はいないから、……………気絶？が、体力は三割程度しか残ってない。ほつといたら圧死してただろうな、どんな力だよ。結果として生きるからいいが、加減については後で、言い聞かせておいた方がいいかもしれないな。一応押さえさせ、冒瀆で吸収、が一分ぐらいで吸収できた。早いな、

《対象の意識の有無や、抵抗力や抵抗の意思の強さによって変化しますが、意識のない相手からは簡単に吸収が可能です。》

成る程、……………あれ、なん、か、視界……………が……………、

ドサツ

最後に見たのは、地面だったと思う。

## ハイリスク、安定のリターン

《洗浄に成功しました。》

その言葉の後、意識が戻った。空を見る限りあまり経っていないようだが、何があった？確かドラゴンを倒した後……………

《一定以上の存在値を吸収したため、自浄可能な量を超える精神汚染を確認、意識を遮断し、洗浄しました。》

ナニソレ怖い、代行者、前吸収したオークと半裸の分も浄化してくれ、それと浄化しなかった場合はどうなる？

《放置された場合、最悪自我の消失、軽度のもので、情緒不安定になります。現在の汚染率は5%です。》

それも洗浄して！許容範囲とかそんなんいいから汚染しないようにして！

《ではこちらでバックアップを作成して……………》

それは無し！他は？どうせコピーのトレースだろう。それを俺と呼べるか？

《正解です。では、こちらで預かって洗浄して渡します。》

嬉しくない正解だ……………、それで頼む、少し体が重いが、身体を起こす。

「ご主人殿！だいじょうぶですか!!」

「ああ、大丈夫だ……………」

とにかくドラゴンの死骸を隔離、したかったのだが上手くいかない。

《一定以上の大きさの物を収納する場合、結界ではなく障壁を張り、それを窓として移動させて、収納します。この場合物以外収納できません。》

わかった。じゃあこんな感じか、頭の辺りに張ってそれを尻尾の先まで動かす。するとみるみるうちにドラゴンが消えていく。

「……………さて、行くぞ」

「はい、」

結界を張ってそこに残りのメンバーを出す。

「わあ！今度はなんですか?！」

「ん?.....おう、無事みたいやな、あんさん強いやろうとは思ってたけど、.....龍はどうしたんや?」

「ああ、隔離してある。まあ、異空間に仕舞ってるって感じだ。」

「ドラゴン、倒したの?」

「ああ、倒したが、俺に解体は無理だし、並みの刃物じゃ解体できないし、どの部位が価値があるとかわかんないし、プロにやってもらおうよ。」

まあ、ドラゴンの素材の価値はそれとなく聞けばわかるだろう。勿論下調べはする、代行者が、とにかく出発しよう。

人形の中枢がだいたい完成したところで、ミレの街に着いた。少し離れたところに降りて、ギルドに入る。

「買い取りをお願いします。盗賊がらみの物もあるので、」

「わかりました。では、こちらに.....」

「お、少し見ない間に人数増えたな、」

「ちょうどよかった、直接相談したいことが.....」

「いや、少しは驚いてくれよ、」

この人毎回背後に現れる。ギルマスのクラインさん、どうせ来るだろうと思つて千里眼で背後も確認していたのだ。

「.....そうだな、取りあえずー、話せる部屋と、ドラゴン一匹解体できる場所を手配してくれないか?」

「うん?.....話から聞こうか?」

「.....これは随分と忙しくなりそうだな、え?魔石の換金はいい、盗賊の財宝の仲介も大仕事だが、ドラゴンの解体なんぞ、ここで出来るか!」

「.....どこでなら出来る?」

「あのな.....はあ、もういい.....」

ため息を吐くと、クラインは机の中から地図を出し見せてくれた。なんと言うかグニャグニャだ、紙が、とかではなく、書いてある地形がだ。位置関係は代々合つていが、見にくい、かなり遠いな、クラハつて街らしい。代行者ここからクラハまでの距離は?。

《北に直線距離で170キロです。》

ゲロ遠い、某検索サイトの音声検索みたいになっただが、負けず劣らず便利だ、俺らの場合徒歩か結界で調べないといけないが、

「じゃ、残りはよろしく、」

「ああ、わかったよ、……………それと、指導の件だが、」

「それか、街が遠そうだし、しつかり準備するつもりだ、それに盗賊の財宝の件もあるし、その間なら問題ない、」

「そうか！じゃあ、明日から頼む。」

そこからはいつ頃に行くか等、打ち合わせをして、部屋を出た。さて、ここからだか……………、

「向日葵、この紙に書いた物を揃えてくれ、これは料金な、」

「はい！わかりました！」

魔石の売値の大半を渡し、見送る、代行者に監視も命じておく。

「私は？」

「武器の使い方、戦い方を教える。芦原さんの戦い方も見せてください、藤白は素振りして、そこからダメなところを指摘する。それを直しながらやろう。で腕が疲れたら持久走な、」

まあ、それで走れる距離があまり長いと全身を使って武器を扱えないのだが、前回以外と走れたので改善が必要だろう。まあ、代行者に計算させておいたのだが、

「……………しかし、何故筋肉痛になってないんだ？」

ここ最近ほとんど一緒にいるが、それらしい素振りは見てない。それはそれで鍛えやすいしいいか、

はい、やって来ました町の外、

「わしの力あ、見る言うと思ったけど、どうやって見るんや？」

「必要なものは向日葵に調達させるから大丈夫です。向日葵が戻ってくるまでは好きに過ごしてください。言いますのから、」

藤白の方にメイスを投げて、素振りを見ながら思案する。考える内容は二つ、一つは振り方の指導、もう一つはアナスタシアに持たせる武器についてだ、決めてはいるが、出来るかなー？

「……………その状態でストップ、まず足も動かせ、棒立ちじゃあ威力が出

るものも出ない、それと腰も落とす、あと肘を伸ばしきれ、一つづつでもいいからやってみてくれ、」

「はい……………」

もう辛そうだな、三回しか振ってないぞ、まだ、

「次回は実戦形式でやるから、頑張れよ、必要ならメイスも預けるし、」

「……………僕、死ぬんじゃないですか?」

「大丈夫だ、お前は好きなようにすればいい、俺は素手で行く、……………  
なにか条件があるなら聞け……………」

「攻撃しないでください!!」

なんでそんな切羽詰まってるんだ。

「……………それじゃあ、実戦練習にならない。」

色々言いたいことはあるが、サンドバッグを打っているだけでボクサーになれる訳ではない。試合に出て(その前にライセンスの取得)戦ってこそだろう。こればかりは本人の経験の集積、それに勝るものはない。

《向日葵の買い物が終了しました。すぐに呼びますか?》

ん? ああ、頼む。

「……………へ? さっきまで街の中にいたのに、……………あゝ! ご主人殿  
!」

「買い物が終わったみたいだからすぐ呼んだんだ、」

「ありがとうございます。」

向日葵から頼んでいた物を一つづつ受けとる。細剣、大きさの違う三つの扇、そして、刀と短刀、細剣は俺が使う予定なので隔離、刀と短刀を芦原さんに渡す。

「これを……………好きなように使ってください。」

「ほんで、どないするんや?」

初めは適当にゴブリンでいこう。この辺いっぱいいるし、

「多分勝てると思いますが、ゴブリンを出しますね。」

お手並み拝見と行きますか、と思ったが、ゴブリンと芦原さんの追いかけてっこを見る羽目になる、これでは実力もわからない。

「……………向日葵、魔石の回収頼む。」

魔石は心臓や脳と同じで魔物にとっては急所になる。生きているオークから取り出して貰ったが、暫く間を置いて絶命した。ただ俺には霞のように見えているが他の人からはどう見えたのだろう。ゴブリンが、

《いきなり胸部に穴が開いたように見えます》

あー、そうなりますよね……………

「別の出しますね。」

観察してわかったのは、我流で、攻撃特化、結構ヤバイ時は、突貫して、一か八かの攻撃を出す。思い切りの良さや、度胸があればこそものだ、あまり捨て身になり過ぎるのも問題だが、

「問題なさそうですね、」

「おう、当たり前やないか、」

さて、ここからだか、扇である、どうしよう。だって知らないだもん、……………仕方ない奥の手を使うか。

《扇のスキルが6になりました。》

ドラコンを倒した時の存在値のほとんどを注ぎ込み、これをアナスタシアに与える。この状態で実践形式で教えるしかない。

あー、疲れた、宿のベットに飛び込むとステータスの確認をしようとしていたら黒い光が近づいてきた。

「アリスか？」

『はい！お疲れの所申し訳ありませんが……………』

「構わない、それよりなんだ、」

『今お作りになっている体は……………』

「紫陽花のだな、……………すまん、期待してたよな、」

『いえ、……………』

んー、次は出来るだけ早く作ろう。だが、今刻印関係で少し行き詰まっているのだ、案を代行者に提案したが、中々難しいらしい。そのため今出来る所から作っているのが、今日は特に疲れた。その為に、人形作り以外のことをして気分を変えようと思ったのだ。それに一度始めるとすぐ明日になっていることもあるし、今日は疲労を回復する意味でも、ステータスの確認に留めることにしたのだが、

名前 北川 龍登  
種族 #%5\* ; ■

パーソナルスキル 真理ノ瞳 万能結界 冒瀆

スキル 芸術10 指導8 鑑定5 武芸4 隠密1 風魔法1

0 火魔法4 人形作成10 義体・義肢作成10 飛行8 頑丈5

体力自動回復3 魔力自動回復2

耐性 炎熱無効 低温耐性5 雷撃・突風耐性6 衝撃耐性7 闇

魔法耐性5 聖光魔法攻撃耐性6 精神攻撃耐性6

称号 爆死 稀代の人形師 害虫ハンター

剣術7 体術8 棒術3 格闘術2 斧2

火40 水1 風19 土2 聖1 闇1

使えないスキルは予め還元して、耐性は統合して強化されている。まず土魔法適正を上げてくれ、それと土魔法や水魔法が使える魔物な人も探してもらえるか？

庭と言う名の演習場に刀を携え、立ち尽くす。……暇だ、空を仰げば、雲がゆつくりと動いている。その視線を地面に落とせば、死屍累々と表現すればいいのか？五人一組のパーティーが力なく倒れている。浅く激しい呼吸を繰り返す者。仰向けでピクリとも動かない者、大の字で寝転がる者、反応は様々だが、全滅である。五分程時間を遡って説明すると、

「お前が、俺たちを指導するのか、あいつがうるせえから来てやったが、……おらあ！」

昨日、頼まれた戦い方の指導のため、前にギルマスと、手合わせ的なことをした庭で待っていると、参加を希望していた五人組と思われるパーティーのリーダーの言葉のあとの不意打ちから始まった。当然避けた、会ったときから攻撃の意志があったのだから、これで対処出来なければ恥ずかしい。ただ攻撃の意志を持っていたのはリーダーだけではない。後ろに回っていた短剣使い（まあ、ずっと意識してた）が一撃、連携は上手いが、

「考えが甘いな、」

手に持った刀のその鞘の先、小尻を短剣使いの胸部の中心（これが

大事)に叩き込む。千里眼で見ながら打ったが、本気でやったせいなのかか、かなり遠く20メートル後方の壁にめり込んで、倒れ付した。こいつらにはノールックでやったように見えるだろうが……、暫く間を置いて正気に戻ったリーダーが放った一撃を避けて、刀の柄を胸部の中心に叩き込む、そして逃げようとした奴らには、鞘で一撃、鞘で一撃、首に当てて締め落しで、現在に至る。刀を抜く必要もなかった。苦労したのは刀の小尻を短剣使いの胸部に叩き込む事だろうか、千里眼で視点が変化するため、体の動きもそれに対応させなければいけない。ここは要練習である。後は……

「ギルドマスターも暇なんですね……」

皮肉たつぷりに声をかける。わざわざ入り口付近にいるのだ、声をかけない方がおかしいだろう。

「……明日からは大丈夫だろ、」

「頼みますよ。今日は帰ります。」

代行者よ、情報収集は順調か？後刻印の方は？

《情報はまだ時間を要します。刻印は明日には完成するかと》

明日か、ここからは狩りに出て、金を稼ぐか、背伸びをしてからふと思ったが、他のメンバーは何をしているのか、

《芦原は街を散策、藤白は素振り、残りは宿です。》

残りって……、まあいい、とにかくゴブリンを血祭りにあげてくるか、



## ほのぼの系ハードな日々

ちよつと休憩、ゴブリンの残骸がいっぱいあるが、血は一滴も流れていないので、魔物が寄ってくることも少ないだろうし、こつちに連れてきているので縄張り等の外、比較的安全だ。まあ、周囲の警戒は代行者もしているのだが、念には念を入れてだ、何をしていたかといえば、冒険は触れた者に、触れている間しか、効果がない、リーチの長い武器を持たれると、相手の実力次第だが、遅滞は避けられない。そんな訳で近接戦闘（絞め技多め）の素手での戦闘を行い、立ち回りの確認をしていた。槍持つる奴を狙って隔離してみたが、稽古台くらいにはなったな。

「……………存在値ってなんだろう」

ふと、思ったが結構曖昧なんだよな、オークが10だ、って事は知ってるが、その他がさっぱり、何となくだが魂的なもの、

《存在値は、その者が持つ根源的な力です。存在値が大きいほど多くのスキルや高レベルのスキルを習得出来ます。》

はい？……………どう言うこと？えーと、ちよつと待って……………あれか？パソコンで言うところのメモリー記憶領域が存在値、でスキルはアプリケーションやら、といった感じで、メモリー容量を超えるアプリがとれないように、スキルにも同じことが言えるのか？

《だいたい合ってます。》

雑過ぎない？その返し、

《存在値の大きさが取得出来るスキルポイントの量を増やせます。スキルポイントは一定量を集めるとレベルが上がります。主に10を最高としています。進化や派生があり、それによって辿る道が決まります。》

……………そんなのまであるのか。今現在持っているスキルで進化とか派生が出来るスキルはないか？

《概ね可能ですが、真理ノ瞳の真理、万能結界の神聖、芸術、義体・義肢作成には、変化を与えることができません。》

ふーん、逆にそれ以外は可能、ってか、面白そうだな、進化の先、その結果を知る事や、操作する事は出来るのか？

《可能です。例外もあります。強い望みにより、特異な進化を辿るものもあります。なお、選択により、消費する存在値の量が変わります。》

選択肢はどうやってみるの？

《真理を使えば、現在、進化や派生が可能なスキルを表示します。》

ほうほう、まず、風魔法からいってみよう。

風魔法 旋風魔法

雷撃魔法

この二択か、さらに真理、

旋風魔法 ウインド

スラッシュ

ストーム

雷撃魔法 ウインド

ライトニング

チャージ

ふーん、……………雷撃魔法一択だな、旋風魔法はライトニングが使えなくなる。怖いのであまり使っていないがもしものために高威力の攻撃手段は持っておきたいし、……………ただ、

「チャージってなに？」

いや、溜めるんだろうけど、詳しく見てみよう。

チャージ 帯電させたり、電気を一定の場所に留める。

いまいちわからんな、電撃何かするようだ、使ってみるか、代行者、雷撃魔法の方に進化させてくれ、

《分かりました。雷撃魔法を取得しました。これに伴って風魔法が消失しました。》

わかった、早速使うか、

「チャージ」

何も起こらないな……………、もしかして、発動してる？

《発動していますが、効果は発揮されていません。》

はい？どう言うこと？

《では、何かに触れてください》

何でもいいのか？刀に手を伸ばす。

バチッ！

痛！静電気来た！……………えっ？これだけ？

《イメージがない状態だと、発動者が帯電します。》

……………そう言えばよかったんじゃないかな？何故やらせた、説明伝わりにくいからやらせたんじゃないか？

《魔法を使った時点で何かに触れた時に放電するので、理解を早める意味と、放電させる目的が一致したためです》

ああ、どつちにしろか、

「ふう、……………チャージ、」

球体をイメージしてみたが、うまくいった。ライトニングでもやったことがあったが、うまくいかなかったのだ、何故か、手から雷を発射してしまう。威力は通常のライトニングと同じ、加減とかさっぱりできなかつた。

「後は、何ができて何ができないのか、だ、」

確認は大事、出来なくて困るのは自分だからな、

「……………おう、帰っ、うお！……………なんやその頭あ！あはははは！！実験して爆発でもしたんか！！」

「……………電気を使った実験を少々、」

いやー、大変だった、チャージがどういう魔法なのかは何となく掴めた、かなり疲れたけど、

「お帰りなさいませ、ご主人殿、ご飯にします？それともお風呂？」

反応なしか！これはこれで嫌だな、

「マスター、お風呂、脱ぐ」

こっちは問答無用、

「北川さん……………今度は何やったんですか……………う？」

おい、俺が毎回問題起こしてるみたいない方すんな、

「あー、腹痛い……………死ぬ……………」

まだ、笑ってたのね……………、

そんなこんなでギルドの庭、昨日は色々あった、主に風呂、油断してた、二人の突撃、パワー的に厄介な向日葵に、精神攻撃の観点から厄介なアナスタシア、意識も理性も飛びそうだったが、何とか物損を出さないようにうまく立ち回れた事は誇ってもいいと思う。疲れはあまり取れなかったが、で今三十人一気に相手することになってい。簡単な話、気に入らないからと突っかかってきた。ギルマスは近くで見ている。場所は昨日と同じ、出てこいや!!

「はあ、…………俺に刀を抜かせれば勝ちにしとくか?」

「ふざけんな!」

殴りかかってくる若い冒険者(男)、さて、ここで、居合について説明しておこう。居とは座った状態を差す、奇襲された際に、刀を抜く動作で攻撃を行い、それ、または、二のたちで敵を仕留める。剣技である。…………という認識では、及第点である。最も居合に必要な地力、それは体幹である。そして、剣技という認識だが、これは間違っている。「鞘の中に勝」という考え方がある。これの意味は刀を抜かずに勝つという意味だ、詰まるところ、

「刀だけじゃない、」

冒険者(男)を投げる。柔術と剣術それを合わせた体術、それが居合だ、まあ、流派やらによつて考え方なんかも違うが、剣術主体、体術主体みたいな感じで、そんなことを考えながら攻撃を避けて、鞘で殴る。時より飛び交う魔法を避けながら、10分程で制圧、全体の連携は上手いが、個人の技術がひどすぎる。刀は抜いていない。抜かずとも捌けた、蹴ったり、殴ったりはしたが、

「まともに指導受ける奴がいいるのか?それとも、」

「俺はなにもしてないぞ、」

「あんたのせいだとも言つてないぞ、」

過剰反応…………では無さそうだな、本当に関わりがないらしい。  
「……………じゃあ、今日は帰るわ」

今回は鍛冶屋の工房を借りる。他の工房だと火力が足りず、アダマントタイトを溶かせない。今の簡易セットでは、緋緋色金や青生生魂しか溶かせない。オリハルコンはギリギリで、溶かせるがすぐに固ま

る。試しで最初に手を突っ込んだ時、固まったのは焦った。ちなみに簡易セツトは鍋の煮炊きに使うコンロを炎熱無効と熱を通すが逃がさない、二つの結界ともう一つの隔離空間から空気を提供する結界を使い温度を上げていたのだが、所詮簡易なので、温度があまり上がらない。多分空気の問題だが、そんなことを考えながら、火の入った炉に肩まで手を突っ込む、ちっさいおっさん（多分ドワーフ）が顎外れそうなくらい口開けてるけど気にしない。

「ふう、」

腕は黒いすがすがいっぱいついてる。あんま掃除してないな………、それより加工だ、加工、刻印については解決したので、できていない手足や、外装を作っていく。今回はその外装の内側にも刻印を掘るので時間がかかりそうだ。

「いつまで借りても？」

ちっさいおっさん、店主の顔を見る限り暫くは戻ってこないな、じっくり作業をさせてもらおう。

………明日組み立てよ、ベットにダイブした、朝を迎えると同時に組み立てを開始した。紫陽花の体は向日葵達より大きい、全体的に、顔立ちは向日葵と同じように美形だが、あどけなさを残す印象だ。青い瞳に小さな星の装飾が施され、覗き込めば夜空のように深い、そこに黒縁の眼鏡を掛けさせる。

「これでよし、後は、………」

『出来たんですか。マスター、』

「出来たが、………気に入ってもらえたか？」

『勿論です！』

青い光をランタンから出す。その光はゆつくりと体に吸い込まれていく。

「お前の名前はクロエだ、期待してるぞ、」

「はいー」

クロエ オートマタ

機構精霊 蒼い紫陽花

スキル 水魔法8 土魔法1 自動修復7 変形5

耐性 毒・酸無効  
称号 生きた人形

尖った所のない安心できる子だ、そう思ったので、何となく、クロエの頭に手を置き、『汝、我主トスルナラバ、汝、調和ノ使徒ニ任ズル』これでよしと、手元の金も心許なくなってきたし、ギルドに行くか、

見た目に反してネガティブ過ぎない？

盗賊関係の宝は一部売れたようだがまだ残っている。後は、前倒したゴブリンの魔石と耳を出して、買い取ってもらおう。その間に指導をする事にした。いつものように庭の方に足を進めると、素振りしてるやつがいっぱいいた、

「宜しくお願いしますー」

昨日とは打って変わったな、これでマシな指導が出来るだろう。

「初めの指導だ、素振りからなってる、一人づつ治す場所を指摘する。全員終わるまで、素振りだ、サボンなよ、全部見てるからな、」  
冒険者と言うだけあって、体力は問題なさそうだ、後は技術だ、今日が一番長かったが、不思議と充実している。……さてと、帰るとするか、

ガシャン!!

まだ、辺りが暗い早朝に何かの割れる音が聞こえた。がそれに続いて、

「ひゃああああ!!」

ガシヤヤヤ、バリバリパリン!!

複数の何かが割れる音がした。多分、棚が倒れたんだな、食器は全滅だろう。布団から出たくないので千里眼で見してみる。あー、これはひどいな、……あつ、部屋の隅でクロエが三角座りしてる。今更だが、クロエはメイド服を着ている。実利的なものと同じスカート  
の長さだが、袖は半袖くらい、背中はかなり空いている。これらは  
作った機能に関係しているのだが、あつ、忘れてた、

「……うっ、えぐっ、すん、」

駆け付けてみれば泣いてるし、隅に居ないでこっちなさい、藤白  
以外は集まっていた、さつき見たが、まだ寝てた、後で素巻きにして  
やるつもりだ、

「何があったんだ、話してくれるか?」

「……料、理を、作る、うとしててえ、転け、て、…すん、全部割つ、  
ちやった……」

「気にするな、それに、料理は何故作ろうと思っただ、」  
予想は付いてるが、それよりも今なお、火にかかっている鍋の方が気になる。

「みんなもご主人様に料理を食べてもらってるから、私も作ろうと……」

まあ、鍋の火を止めよう。……うん、見た目は普通、味噌汁？ 皿はないので結界で掬って、それを口に流し込む。

味薄っ、

「……………ど、どうでしょうか？」

皿やらを大量に割った事も相まってかなり不安そうな顔をしているが、気になるのだ、期待も相まって複雑な心境なのだろう。

「……………もう少し濃い味付けの方がいいかな、次作る時はみんなで作ろう。味噌汁は結構好きだし、」

「……………濃く、ですね、分かりました。」

「マスターの、好きな物」

「私も作りますよ。味噌汁！」

うん、お前らはいいいから、クロエはなんかネガティブだな、もう少しフォローしてみるか、

「どんな料理にして、相手好み作るの難しい、焦らずやっていこう。」  
「……………はい、」

あれー、まだ暗いなー、でもこれ以上言うとなんか拗れそうなのでやめておこう。

さて、弁償と迷惑料を混ぜた金貨をクロエに見つからないようにカウンター越しの店員に渡すと、今日は指導だのには行かなくていいので、本格的にクラハに行く準備を進めようと思う。纏まった時間が無かったので食料等を余分に買い込む。移動手段等は結界で事足りるので問題ない。他に必要な物は、と考えていたら、ピンクの化粧物が正面に出現した。

「あらく、久し振りねえ、」



思わず身構えてしまった、大体街中でこんなのと遭遇すること事態がホラーである。と言うか何故ここにいる？

「な、なんやこのけつたいな化けモンは、」

「……………（絶句）」

「……………どうしてここに？」

「仕入れよ、し・い……………」

「あつ、そう、仕事の邪魔だろうから俺達はこれで、」

「釣れないわねえ、もうく、」

熊みてえな体格でそんな動作をとるな、素早く撤退する。警戒を怠るな、代行者、

《怠っていません》

次からは教えてくれよ。心臓に悪いからな、

《わかりました。》

んー、あれ見て思い出したけど、服やらと言ったものが最低限は不安だな、それに個人で必要な物も変わってくるだろう。

「……………これを予算として渡しておくから、これで長旅に必要そうな物を見てきてほしい、個人の服でも構わないし、自由に使ってくれ、」  
「わかりました。」

「うん、」

「が、頑張ります。」

クロエ？何を頑張るの？

「勿論、お酒やタバコでもいいですよ、藤白は買う前に相談な、」

中古のナイフを買わされている前科もある。しかも脅されてとかじゃなく普通に騙されて、引率なんかは結構慣れているので苦はない、それに千里眼があれば目の届かない場所はない。昔は苦労したのだ。しかし、俺はどうしよう。代行者とお話でもするか、まだ理解出来ないことが多そうだし、立ち去る背中を見送った後、一吸収についてから聞こう、……………まず篡奪と何が違う？

《吸収はゆっくり浸食するように行うため防がれにくいですが、時間がかかります。篡奪は一瞬で奪えますが、失敗や抵抗の影響をよく受けます。なお、篡奪は自分と相手の力量の差や、スキルの差によって、

奪えるスキルのレベルが変動します。》

吸収の場合は？制限なし？

《吸収の場合は抵抗は出来ませんが、完全に防ぐことができません。ただ、吸収対象のスキルによつては吸収出来ないものがある可能性があります。》

んー、防げないのと、吸収出来ないスキルがあることはわかったが、他には？

《スキルの元となる物を吸収しているので、持っているスキルならそこに還元、強化されます。スキルの元を変換することで別のスキルを強化することも出来ます。なおこれらには上位下位があり、スキルの元へ存在値へパーソナルスキルの順になり、パーソナルスキルや存在値は差があります。》

えーと？……………

《スキルの元、スキルポイントとしましょう。スキルポイント1000でレベル1のスキルが習得できます。存在値は1にあたるポイントが5場合や10の場合があります。パーソナルスキルは一つの塊となつているので、最大吸収量を上回る場合吸収できません。なお……………》

ちよつ、ストップ!!……………えーと？どう言うことだ？うん、……………スキルポイントは一律で、存在値は個人差がある。でパーソナルスキルはスキルの発現に至るポイントが一塊になつているから最大吸収量？を越えない限りは吸収可能ってことか？

例えば悪いが掃除機の吸い込み口以下の塵（後、G）やらウオークマン（ゴオ、カラツ、あつ、つてなつた時にはもう遅い）は吸い込めるが、ティッシュ箱のような物、吸い込み口より大きい物は吸えない。《パーソナルスキルは、その大きさにばらつきがあるため、小さい物は吸えます。100が最大吸収量なのでこれを越えると吸収できません》

小さいスキルは、コオツ、つて吸えばいいと？

《擬音の意味は理解しかねますが、そういうことです。》

後半投げやりじゃないですかね？後は、今後の方針について、だな、

……ケツ痛い、あんまり長いこと考え込みながら座ってるもんじやないな、今後についてだが、俺自身は人形師でいいが、藤白達をどうするかだ、理想としては団体、組織なりを作り、そこに所属してもらい、こつちに来ている悪質な連中の捕縛なりを手伝ってほしい。が資金も無ければ情報もない。情勢も不明、二人の意志も未確認、こんな状況での旗揚げはいいことがない。どつかで問題が起きる。そうでなくとも衝突や摩擦は発生するのだ。そんなことを考えながら、藤白の実践形式の練習をやっていた。メイスを避けて、ケツやら背中やらを蹴る。

「まだ基礎が出来てないからな、……よし、次は攻撃の時、隙のあるところ後緩んでる所を注意しろ、蹴るからな、」

「……まだ……やるんですか、」

「とにかく隙が大きい、次で終わりにするか……、こつちもある程度本気で行くから、死なないように、」

「えー、死ぬんですか!?!」

「早く来い、でないところこつちから行くぞ、5、4……」

「えっ、ちよっ、待つ、……りやあ、」

「胴ががら空きだ、」

しかも緩んでる、モロに入ったな、

「ごはあ……」

「……あんた、ホンマに美術の教師か？体育のセンコーでも、あないな動きできへんで、」

「はっはっはっ（棒）」

藤白はまだまだだがそれ故に伸びしろはある、本来長い目で見て行かなければならないが、5年しかないのだ、最低でも、自分の身は自分で守れるくらいにはなってもらわないと、こつちも足手纏いを抱えていては、もしもに対処が出来ない可能性が出てくる。さて、ここで話題を変えよう。

「クラハでドラゴンを解体した後はどうします?」

「そりやあ、ステーキにでもして、」

「いや、そうじゃなくて、」

「……………まあ、小難しいことは任せるわ、」

ええー……………、代行者さん、代行者さん、また調べてほしい事が来てただけど、頼む。

《わかりました。少し遅延が発生すると思いますがよろしいですか？》

仕方ない。かなり頼んだ事がある気がするが、あまり思い出せない。調査でき次第、報告してくれ、

「……………まあ、しいて言うならうまい酒が飲みたいな、」

そんなことを言いながら煙草をふかす芦原さん、若干だが頭が痛くなってきた。

## 万能金属アダマント

今日も今日とて、指導だ、そんなことを考えてギルドに入ると、周りの空気に違和感を感じる。気色ばむと言うか、浮き足立つと言うか、いい知らせに浮わついているような、

「景気のいい話でも有りましたか？」

「うお！全然気付かなかった、……………実は、人探しの依頼なんだが、……………ただ後ろから話し掛けただけでそんなに驚かんでも、……………にしても、人探し？」

「何でも鍛冶屋の工房を借りたって来た男が、アダマントを飴細工みたいに加工したとか、精巧な刻印を施したとか、燃えたぎる炉に腕を突っ込んだとか、……………情報は定かではないが、報酬をかなりかけてるし、嘘ではないだろう、どうやって探すか考えてる所なんだ、」

……………何も聞かなかったことにしよう。報酬等は依頼を出す時に、ギルドに預ける。嘘やいたずらを防ぐとともに、冒険者の報酬の取りっぱぐれを防ぐ目的がある。頭を抱えたい衝動を抑え、庭に向かうがあの依頼のせい、庭に男女が一人づつしかいない（昨日結構な人数が集まったのに）。しかも子供、逆に言えば彼らは、人探しの報酬より、こつちを優先したのだろう。（力が欲しいとか）そんなことを考えていると、

「……………なあ、こんなことして強くなかならないぜ、」

「人探しても、みんなが血眼になって探したら、私たちが見つけるのなんて無理でしょ、終わったらギルマスがご飯奢ってくれるって言ったし、そっちの方が確実でしょ、」

「……………」

ほら、後ろ後ろ、ギルマスいるよ窓のそこ、あつ、目が合った、逃げるなコラ、

「はい、これから指導を初め……………」

「めんどくさい素振りはいいいから、実戦やってさっさと終わらせようぜ、」

昨日も居たのか？代行者確認できるか？

《指導はしていませんが、見学者にはいました。》

「取り合えず、振る形を一度見せてくれ、」

「えー、やだよ、見てたけど何の意味があるの？時間の無駄だよ、」

「素振りしか教えてないって聞いたけど、大したことないじゃないかなー？」

ぷちっ、

恐らく俺は周りから非常にいい笑顔をしているように見えている事だろう。人当たりが良さそう笑みをうかべながら、諭すように、

「じゃあ、実戦形式でいこう、俺は刀は使わない。そっちの武器はなに？」

刀を隔離しながら聞く、

「俺は剣だ」

「私は短剣と土魔法を、」

「よし、じゃあ全力で来い、俺は魔法は使わない、後は、……俺は囲んだこの円から出ない、使うのは右手一本だけだ、そっちは何をしてもいい、触れるなり、攻撃を当てられればそこで終わりにしよう。」

地面に円を描きながら、ルールの説明をする。……よし、できた。

「二人同時でもいいよ、」

円の大きさは大体二メートルだろうか、さて、ここからは結構本気で行かないとな、

「俺一人で十分だ、どりゃああー！」

ああ、これは剣に振り回されてるな、持ち上げるのでさえやつとみたいだな、右手の平を胸に添えて、そこから押す。ここから引く、勁力を用いた内蔵にダメージを与える技、八極拳や太極拳にある、俺が使ったのは八極拳の方、射程距離は短いが威力はバカみたいに強い、なんせコンセプトが相手の防御を突き破る、である。防御の上からでも通る攻撃、または超至近距離で防御の意味を無くし、流れるような連続攻撃で急所を様々な角度から攻撃できる。勿論、加減しないと死ぬ。

「…………え、ほう、……………えつ、あ、…………か、」

その場で膝をついて蹲る。

「基本からやり直せ、……………お前に一番必要なのは素振りだな、さて、」  
背後からの短剣の攻撃を避けて、手首を掴み、向き直る回転を利用して捻るように回して、短剣から手を離させると同時に投げる。要領は、合気道だけど、

「背後を取るのには悪くないが、もっと狙う場所を考える、さて、……………アナスタシア、回復してやってくれ、」

さーてと、根性から叩き直してやらんとな、武道には地力や技も大事だが心構えは効率化のためにもある。心・技・体揃ってこそ最大のパフォーマンスが発揮できる。練習する機会がなかったか、練習する気がなかったのか、どっちにしろ、俺がやることは変わらない。経験が足りないのならば今つけてやればいい、

「今日はこれで終わりにするか、ほらギルマスに飯奢ってもらえー、食えるかどうかは知らんけど、」

あれだけの運動とダメージは確実に尾を引く、飯は、食えなくても、確実に強くなれるだろうが、

「次は、程ほどにな、」

「あなたには聞きたい事があるし、手合わせしながらでもゆっくり喋ろうや、明日」

笑顔そのままに、声に威圧感を添えて、はつきりと言う。

さてと、一日も残り僅かだ、宿のベットで考え込む。代行者と情報を擦り合わせる。今日は錬金術についてだ、まず、対価が必要な方法と材料を集めて一気に形にする方法、そして、魔力を注ぎ込んで土塊から作る方法、様々だが、上から順に説明する。

生物の素材と魔力を用いる方法、儀式や祭壇等規模が大きい上に、時間もかかるが、消費魔力が少ない。後は生物の素材（生贄次第）による。結果は運次第。（最悪発動するかさえも運）

武器、製鉄、料理等、用途が幅広く、一番よく知られている方法らしい。が、やるのはかなり難しい。完成形のイメージが必要で、知らない物は作れない。そのため複雑な物はかなり難しい。釜や器、壺の

用な容器が必要となる。完成度は用いた容器に影響される。

そして最後、魔力をバカみたい使うが、なんでもない土を金に変える事もできる。ただし、魔方陣や、詠唱で何に変化させるのか、決める必要がある。使用者の能力に応じて作れる種類、完成度が上がる。

土魔法の習得は急務だが、どういう物かは知っておきたい、ニーズに合うのは最後の奴、それ以外はなんか微妙、共通なのは何らかの形で準備が必要なことだが、

「早いとこ、何とかしないとな、」

そこでふと、思ったのだが、俺は自力で魔法を習得した訳ではない、本来はどうやって習得しているのだろうか、ギルドの庭で指導（三十人程しめた）時に使われた魔法、の前に何か言ってた、内容はわからんがあれが詠唱なのだろう、だが俺は一言で発動する。

《魔法はイメージによって形や効果を変えますが、イメージの構築には時間が掛かります。初めて発動した際の感覚、それを元にするため、詠唱なしのイメージが固まりにくくなる傾向があります。》

?……………よくわからんが、詠唱が魔法を発動させる課程に必需のものとなり、詠唱なしでは発動しなくなるってことか? 差し詰、技を使う前に型をとったり、所定の動作（癖を出したり）をとり、成功のイメージを固めるルーティーンのようなものか?

《それと、指向性や威力を決めたり、空間に漂う魔力の使用にも関係します。》

あー、何かたまに漂ってる青い奴の事か?

《…それは、精霊です》

マジか……………、衝撃の事実だわ、何だろうとは思っていたが、精霊だったのか……………アレ、結構ウヨウヨいるし、……………ん? アナスタシアは精霊魔法を使えるみたいだけどういう魔法なの?

《付近の精霊の力を借りて魔法を使います。使う魔法は付近の精霊の属性によって変わります。》

何そのランダム要素、怖い、

《精霊は土地によって、住んでいるものが違います。水辺には水精、洞窟や鉱山には土精、高い山等に風精、火山や砂漠には火精、他にも雪



山等には雪精、強力な力をもつ海精、光精、闇精、がいます。》

あー、情報が多すぎ、今日は寝るわー、海精が何かは気になるけど、  
「暫く、図書館にしようと思う明日には帰るから、弁当頼めるか？」

代行者に調べさせてはいるが、いかんせん情報の集まりが悪い、自分でも調べるついでに、色々勉強しようと思ったのだ。

「御一緒します！」

「着いていく、」

「わ、私も……………」

お前らは留守番、と言いたいところだが、一人は連れていった方がいいだろう。アナスタシアは食事の意味で置いていった方がいいとして、向日葵は俺の事に関しては全力（フルパワー過ぎて空回りするぐらい）だが、その他の事に関しては幼稚園児並みの集中力しかない。その為本人が乗り気で無いときの魔法の制御は危険極まりない。やる気を出せば出来る女なのだが、対してクロエはまだ性格が分からないもの。かなりネガティブ、置いて行った時どうなるかわからない。……………消去法でクロエか、

「クロエだけ連れてく、その間はゆっくりするなり、好きなようにしててくれ、」

「は、はい！」

「むう……………」

「……………」

いい返事だクロエ、膨れたって、催淫使っても連れていかないからな、

……………着いたはいいのだが、本がいっぱいだ、その上、

《ここにある本は間違った歴史や、知識が多いようです。保存状態も悪く、読書にはむかないでしょう》

……………読書にむかない本って、鈍器とか、押し花する時の重りぐらいしか用途ないし、本は本来読むものだしな、そんなことを考えながら本に手を伸ばす、手に取ったのは戦争の歴史物、分厚いその本をパラパラ漫画でも見るようにページを表紙からあとがきの方向に流す。……………うん、読めねえ、忘れてわー、どうしよう、

《…目で見た文を音声翻訳しましょうか?》

うーん、それだと効率がな、……………奥の手でいくか、文の配置に目を通す。気になる一文を代行者に訳させる。一時間は経ったろうか、内容は概ねわかった、いつ、どういう理由で、戦争が始まり、相手国の非難や、いかに自国が優れているか等をつらつらと並べているのだろう。所々訳させただけなので全部がわかる訳ではないが、恐らく自国民向けのプロパガンダの為に作られた本だろう。背景を読むならかなり切迫していたと見られる。守秘義務があつたにしても、奮闘多いし、勝ったかどうかはかなり曖昧に表現されている。

「はあー、」

早速、一時間も無駄にした。次に魔法関係の本、同じ要領で目を通す、いかに詠唱が大事かだの、著者の体験談(ムカつく自慢話)、あと根拠のない仮説、わかつた事はこの本はごみ箱に捨てた方がいいと言ふことぐらいだ。今度は三十分無駄にした。

「クロエ、気になることとか、読みたい本はあるか?」

声を掛けて気付いたが、絵本読んできた。字が読めなくても絵でわかる本を選んだのだろう。声を掛けたが気付いていないようだ。そつとしておこう。

いくつかの文字が読めるようになり初めた頃には大分暗くなつていた。成果はほぼ無し、他に本のある場所なんかあるか?

《王都等の宝物蔵に、かなり古い本ならたくさんありますが?情報はかなり正確なものです。》

そうですか、……………多少言いたいことはあるが、情報が得られるなら問題ない。千里眼があれば場所なんてどうでもいい。

ミレの図書館内で一夜を明かす。この図書館から王都の宝物蔵の本を千里眼で読みながら、考える。この図書館、一人の職員もいない。結果泊まれた。まあ、クーラー等もないので快適かどうかはアレだが、成果は上々、まだ調べなければいけないが千里眼で見るとこの場所に拘る理由はない。宿に戻るか、

「クロエ、帰るぞ、」

利用者が他にもいないので大声を出すのも気にしない。外套のポ

ケツトに手を突っ込み出口へ進み、出口が見えてきたところで足を止める。

「どうかしました？」

「……………待ち伏せだな、隠れきれてないが、」

一人は日射しで影が見えてる。もう一人に至ってはつま先が出てる。寝込みに来なかったことを考えると張り付き始めたのはついさつきか？たいした相手ではないのだろうが、しかし、クロエの能力を考えると直接姿が見えないのはやりにくい。誘き出すのも手だが……………ここは撒くか、

「クロエ、頼めるか？」

張り込み始めて12時間以上の時間が経っていた。報酬に文句はないが、この状況はきつかった、つま先が見えてる男、ウイロは、眠気と戦いながら向かいの影が見えてる男を見る。無愛想な上に無口、取っ付きにくい、腕だけは確ね、喋り掛けても返事は無し、味気ない携帯食料、少し気が滅入ってなった。そんな時何か違和感を感じた。図書館の奥で何かが動いている。人の発する音ではない。ただ何なのかがわからない。しかし、その音はどんどん大きくなっていき、覗き込もうと顔を近付けた瞬間、とんでもない速度の物が通り過ぎ、その後襲ってきた風圧に吹き飛ばされる。

「何が……………」

辺りを見渡すが、それらしき物は見当たらない。そこでもう一人の無事を確認すべく視線を走らせると、かなり驚いた様子で上を見上げていた。

「えー、あの……………何をすればいいんでしょう。私に出来るでしょうか……………」

「ぶつつけになったのは本意じゃないが、クロエ、お前を作ったのは俺だ、これは向日葵やアナスタシアには出来ないことだ、」

「……………そつ、そうですか、ど、どうすれば……………」

まず、落ち着こうか、

「図書館の奥に少し下がろう。そこから説明していく。」

「は、はいー」

ん？何か顔色悪くない？人形なのに、もしかしてあの称号の影響？  
《正解です。あまりに精巧な上に、称号の効果で人間にかなり近い  
ため、精神状態が身体に影響しているようです。なお変調には個体差が  
あります。》

うーん、この状況で問題発覚、大丈夫だろうか、まあ、やることは  
変わらない。不足の事態に備えるのは常に必要なことだ。

「背中に集中、翼をイメージしてみてください、」

「はいーうぐぐぐぐ………」

暫くすると背中から黒い羽根が生え始めそれが翼を形作っていく。  
苦勞した甲斐があった。この形態をウイング、他にも、直進時のス  
ピード、推進力の高いブースト形態もある。今回はブーストを使う、  
ただ出る前にスキルを渡しておく。飛行8だ。俺が持つても仕方  
ないし、この為に分解せずに持っていたのだ、………渡し損ねてはい  
たが、

「さて、もう一つのブースト形態にして、出発準備をしてくれ、最速で  
出れば、振り切れるだろう。」

一番苦勞したのは代行者でも難航したブースターの動力、水を使う  
のだが、原理を聞いても魔法の要素があるせいかわりに、作り出した水を  
云々言われてもさっぱりだ、真空だ、水蒸気爆発だ、言ってたので、危  
険がないか、心配で仕方ない。

《ブースター内に複数の………》

説明はいいから、わかっている事は魔法で水を供給するために出来る  
と言うことぐらいだ。はい、この話終わり！

「準備できました。次はどうすれば、」

「よし、じゃあ行こうか、」

「はい？」

「持ちやすいように抱えてくれ、結界に乗れば空を飛べるが、速度はで  
ないしな、」

「………そ、それでは………失礼して………」

声の上擦ってる、その後の言葉はしりすぼみに小さくなって聴こえ  
にくい。ゆつくりと後ろから手を回すクロエ、

「……………そんなんじや、俺落ちるんじやないか？」

力が弱い、これだと冗談抜きで落ちる。

「しっかり身体を密着させるように固定してくれ、力は少し入れ過ぎても気にしなくていい。」

「……………で、では、」

手の力が強くなると同時に背中に弾力のある物が押し当てられ、元の形に戻るべく激しい主張を圧力で訴えかけてくる。……………意識を逸らせ、背中に集中するな、よし、落ち着け、一旦落ち着こう、な、ま  
ず、……………

「ど、どうでしょう……………」

「だ、大丈夫だと思うー！」

無駄にデカイ声出た……………

落ち着け、別の事を考えるんだ、……………アダマタイトは硬いが武器に使うと所有者の意思によって形を変える。どの人形も表面に薄く伸ばしたアダマタイトを使っている。質感の難しい箇所、中枢を守るためにも使っている。その為、俺が作る人形はアダマタイト無くしては完成しない。金属では無理だろうと言うところもアダマタイトを使えば、弾力のあるバ……………やべえ!!ループが思考してる!!  
「そ……………そろそろ行こうか、」

なんとか声から焦りを消す。後ろから抱き付いてるから誤魔化せるだろうけど、

「へ……………あっ！はい！」

ぼーっとしてたみたいだ、助かった……………、

「さて、……………カウントするぞ、5、4、3、2、1……………ゴー！」

爆発音と共に、加速特有の圧力を受けながら、高速で移動し、図書館を抜け、空へと飛んでいく。かなり上がった所で追っ手の確認、……………こつちを見てはいるが、追ってくる様子も無し。ふう、帰ろ、

## 真実を写す目と選択

宿に戻った後、いつ出発するかを何処かの国の宝物蔵の書物を読みながら考えていた。ミレとクラハの間には小さな中継地点がある。どういうルートでいくかとか普通は考えるのだが、結界で移動するのあまり関係ない。ただ、もしもの時の為にプランを立てるのは怠らない。……………しかし、

「……………よくわかんねえな、魔法、」

土魔法を習得すべく本に目を通してはいるがなかなかどう解釈していいものかさっぱりである。例えばアース、これでも小さな礫を作ることが出来る。が、あまり飛ばせない。ストライカーであれば飛ばす距離も伸びるし、さらに大きな物を作れる。その上、重力にも干渉できる。その線引きがわからない。ライトニングとチャージもそうだが、ライトニングは瞬間的にしか効果がない。チャージのように留める事ができないのだ、チャージは逆、動かない、球状の物も作れるが投げることは出来なかった。何らかのルールがあるようだがそれについては書かれていない。結局自分で試していくしかないようだ。

「はあ……………ん……………ああー、」

ため息をついて、その後身体を解すように背伸びをする。ギルド行ってくるか。

「昨日、何してた？」

「図書館行ってた。(棒)」

「俺、昨日何してたと思う。」

「……………知らね、」

「待ってたんだよ！ここで！」

「あー、そんなこともありましたねー(棒)」

「損したような得したような……………微妙な気分だ、」

「じゃあ今から始めますか？」

「え？いい、いや、止めとこう。」

おい、歯切れが悪いぞ、前の指導の時に言った通りに待っていたのだらうけど、こっちは始めから行く気はなかった。嫌がらせだから

な、さて庭に行くか、と行きたいが、見える範囲に人がいない。見える範囲には、千里眼を使えば物を透視することも出来る。結果前の指導の二人が、昨日の図書館の入り口の二人と同じ隠れ方をしていたら既視感（デジャブだわー）を覚える。今回もアナスタシアを連れているので怪我は治せるぞ、聖光魔法は光魔法の上位の魔法で、回復、解呪、異常回復、閃光、浄化、これらが出来る。レベルも高いので、即死でもしない限り問題ない。勿論そんなことをするつもりはないが、……さて、実験も兼ねてやるか、正面からいこうじゃないか。刀に手をかける。そのままゆっくり歩く。門を抜けた瞬間に両サイドからの攻撃が迫るが、刀をしっかりと握った瞬間に動きが止まる。

「多少は身に染みてるみたいだな、」

間合いという奴だ、読めるようになったのなら上出来だ、強張るのは宜しくないが、

《攻撃、上から来ます》

は？それでわかるか！何処からだ、

ドス、

いつの間にか手が動いていて、屋根から奇襲をかけたギルマスの腹に鞘の小尻が吸い込まれていた。……何してんだ、この人、踞ったギルマスを見下ろす。冷たい目である。

そんなこんなで指導を終えて、アナスタシアを肩車しながら明日の料理を決めるべく、食品を見て回っていた。夜に何故微妙に目立つ事をしているかと言うと、先程代行者から尾行について警告されたからだ。その為アナスタシアに買い物させながら、相手に気取られないように視線を走らせる。人通りが多いため千里眼で遮蔽物を除害しても人が遮蔽物となる。かといって人を除害すると、尾行している者も丸ごと消えてしまう。……が、見回して見たものの自力での発見は無理だ、三人いる尾行の二人しか発見できていない。代行者、残り一人は？

《左側の建物の緑の屋根の上です。》

あー、人混みにはいなかったのか、うん、いるわー、ちよつと悔しい、

「さて、ここならいいかな？」

右側の路地に飛び込む。ここは屋根の上のやつから死角になる。足元に結界を張り、それに乗る。そして結界を上上げる。遅れて二人路地に飛び込んできた所で、背後に着地、一撃加えて隔離、屋根から見てた奴も結界で隔離する。あとは尋問が出来る場所まで移動する。

「…………と、そんな訳で、尋問とかやったことあります？ 芦原さん、」  
そんなこんなで宿に戻ってきたのだが、芦原さんには伝わっただろうか？

「……………無茶苦茶やな、吐かせるだけなら餓鬼にでもできる、大丈夫やろう。」

軽いわー、そもそもつけられてる時点で背景を見ようよ、誰の差し金だ、とか、…………あれ、俺の方が適任？ まあいい明日にしよう。疲れた、寝る。

……………朝一にギルドに持ち込むことにした（卸しの業者みたい）。専門とする者もいるだろうし、情報も得られる。後もう一つは、一石を投じる意味で、迂闊に飛び込んだ訳じゃないし、面倒くさかった訳でもない。いや、ホント、

「……………全く、次から次へと、」

「いやー、悪いね、」

適当に返事をしながら、周りを見回す。……………三人くらいになつたな、露骨こっち見てたし間違えないだろう。代行者、行き先を辿ってくれ、

《了解しました》

…………でもって、こいつらは今の奴ら関係か、それとも新手か、聞けばわかるだろう。さて、一人目、抑揚を抑え、低い声で、冷淡にゆっくりと問いかける。

「お前の飼い主ないし、俺の情報を流したのは、誰だ？」

ただ黙って見つめる。

「す、済まない、言えないんだ、」

「ほう、理由を聞こうか、」



抑揚を戻して、表情を柔らかいものに変える。ただし、柔らかいものに変えただけ、笑わない。周りを見渡すと彼はゆつくりとだが重い口を開いた。

「人質に……妻を……」

「成る程、わかった、どうにかしよう。」

「は？」

「……その代わりに、お前の知ってる情報を寄越せ、まず、妻の名前、身長、……でいいか、」

「……どういう」

「聞かれたことに答えろ、」

「……妻の名前はエミリ、身長は俺より少し小さいくらいだ、」

よし、代行者頼めるか、

《該当する人物は既に確認しております》

仕事が早いね、で見してみ、結界で囲って隔離、H A H A H A、ざまあ、

「さて、他にも聞くか、」

どうもこの界限を根城にしている、犯罪者集団か、この様子だと残りの二人も話をした方がいいな、個別で、その間もエミリさんを隔離しておく必要性はないので、近くに結界を張り、そこに出す。

「エ、エミリ……」

「話は後で聞く、そこから出て少し待ってろ。その間は二人で好きなように過ごせばいい。」

多少の衰弱が見られるが、歩けるし、すぐに体調は回復するだろう。

二人の退室を見届けてから、二人目も出す。

「お前は誰を人質に取りられている。名前と大体の身長を答えろ、」

「え、……あの！シエリーは！シエリーは無事なんですか！」

「それを調べる為に聞いている。あとは大体の身長、」

「このくらいです。」

手で腹部（大体横隔膜があるところ）に持ってきていた。男の年齢から人質は娘だろう。代行者見つかったか？

《該当する人物は見つかりませんでした。》

……は？おかしい、……見つからない、だと、……もつとよく探せ、

《該当する人物は見つかりませんでした。》

……まさかな、自分の頭の片隅で乾いた笑い声がした気がする。ただ、まだ調べてない事がある。不確定なものを報告する訳にはいかない。質問を替えよう代行者よ、……殺した、または死に至らしめたのは、誰だ、

《該当する人物は四件です。》

「……はあ、」

ため息が漏れる。頭を抱えたい気持ちを抑えて、次の質問、シエリーの死体は何処だ。

《現在、森の中に放置されています。視覚情報を、》

すぐに受け取って見れば狼が一ヶ所に集まっているのが見えた。自分の身体から血の気が引くのがわかった。まだ、確かでは、ない。そう自分を騙しその中心を見る。そこには無残な姿になった少女の、いや、少女だったものか、だが、それでも！

「……」

歯を食い縛り、結界を狼にぶつけて弾き、追撃で頭や腹を潰す。頭蓋骨おも砕く一撃で、五匹いた狼を殲滅する。狼だつて生きるためだ、八つ当たりだと言うことはわかっている。一瞬にして沸き上がった怒りは霧散し、虚しさだけが胸に巣くう、少女の状態は宜しくない。右腕が噛み千切られ、左目、左足もない。ただ、左側は明らかに獣のものではない、左足の切り口が刃物のような物で切られた後がある。顔には殴打、両手の甲と平には、刃物が貫通した痕がある。胸くそ悪い、自由を奪い、四人係で……

「あ、あの、」

「悪い、いい返事は返せそうにない。」

崩れる男を余所に、別の命令を下す。代行者、該当する四件の奴らを隔離しろ、その後真理を使い、少女だったものを自分で隔離する。

「……シエリーさんは、昨日の深夜に死んでいます。」

要するに、俺とか人質とか、関係なく殺されたのだ。追撃をかける

ようで悪いが、現実を受け止めてもらわないと次に進めない。いろんな意味で、

「彼女は、入ってきた四人組に……………」

「ちよー！」

今まで静かに見守ってきたクラインが口を挟むが、無言で睨んで黙らせる。

「……………必死で逃げようと思いました。ですが、左足を切られ、手のひらを貫かれ、体の自由を奪われ、犯され、罵られ、最後は口封じのために

殺され、森に捨てられました。」

「何故！何故そんなことを言うんだ！私の娘は！何処に……………」

胸ぐらに飛び付いてきた男は泣きながら、唾を飛ばしながら叫んだが、最後は俺にもたれ掛かるように咽び泣いた。全てを話した。ここからは彼の選択次第だ、

「私には特殊なスキルが有ります。その犯人の特定、確保は済ませています。……………あなたに問います。復讐を望みますか？」

一瞬動きが止まった。嗚咽も止まる。その後、別の震えが、いや、怒りが彼を支配したのだろう。

「この手で、この手で！シエリーの無念を、シエリー苦しみを！私が！」

「…わかりました。」

地面に叩き付けられる四つ物体、

「こいつらは……………」

「知ってるんですか？」

「ああ、ギルドで追ってる沼蛇って言う。犯罪組織だ、なかなか尻尾を掴めなくてな……………、こいつらなのか？」

「ああ、間違いない。元はギルドの冒険者なんだろう？一人は違うが、」

「……………そこまでわかってたか、」

未来視があれば未来の可能性を、真理を使えば、過去の出来事や、事実を白日の元に晒す、対象がいてこそそのスキルだが、それは代行者と

千里眼で見つけてもらう。情報収集に一際特化しているのだ。

「手前のが足を切った奴だ、その奥が短剣の柄で顔を殴打してた奴、その横のが短剣で手を刺した奴で、最後がへらへら笑って目を抉って、死んだら森に捨てにいった奴だ。……性的暴行に関しては全員だ。」

無造作に短剣などを放る。隔離した時に奪っておいたものだ。その他、多種多様な毒物や暗器も、

「どうするかは、あなたが決めてください。……クラインさん、」

「はい、はい、行けばいいんでしょ、行けば、」

ギルマスを連れて部屋を出る。抵抗は出来ないように手に錠、出るときに黒い袋を被せてある。黄色い服は用意していない。

「おっと、そうだ、これを、ステインクバグの臭いの元を詰めた瓶です。開けたら臭うので、取り扱いはには注意を、」

適当に色別の小瓶を置いて立ち去る。さて、もう一人尋問するか。

お前に聞きたい。お前ならどうした？

《死体を隔離して見せました》

チツ、お前なんか聞くんじゃないやなかった。残り一人はギルマスに預けて今は代行者を尋問している。ちなみに残った一人は二人の監視役なので、人質もなにもない、直で牢にぶちこんだ。

《死体を確認させれば、すぐに済むのでは？》

そういう問題じゃねえ、代行者は俺の心を写し取った物かもな、自分の何処かで常に客観的で、自分さえ、他人のように見ている自分がいる。ただ見ているだけの自分が、

……うぜえ、我ながら呆れたものだ、

俺は俺で気持ち……この気持ちを沈めるためにお前には付き合ってもらおう。例え、虚しい気持ちになろうとも、この怒りを、思いを、嘘だの気のせいにするつもりはない。仕分けろ、代行者、

《三十秒後に完了します。》

そう、千里眼で目標に狙いを定める。

《隔離、完了しました。》

おし、犯罪組織の根城になっている洞窟目掛けて、

『ライトニング、ライトニング、ライトニング、』

複数の落雷を落とす。念じるのも面倒くさくなってきた。

『ライトニング×10』

落雷が雨のように降り注ぐ。使つといてなんだが、こんなんでいいのか魔法、

『ライトニング×20、ライトニング×30』

ふうー、これだけやれば生き残りもないだろう。そしてあれだけやっても減らないMP、魔力ゲージ微動だにせず、気持ちは少し落ち着いたし。さっさと帰るとするか、聞こえていた呻き声は無事を確かめ合う夫婦の声に掻き消されていく。

まだまだ作るよ。ほのぼのと、

おはようーございまーす。

そんな訳で寝起きドツキリ迎撃を行う。昨日泳がせた3人が、雇い主に報告後、暗殺者が差し向けられたようだ。そんな訳で、現在、屋根の上です。腕が立つのは屋根伝いで一人、残り1ダースは影に隠れながら移動している。まあ、初動から見えていたので対象に関しては余裕があるが、さて、ごちやごちやいっぱいいても邪魔なので、街中は適当にやる。追い払えばいい。瓶に入った液体を目の前の結界に注いでいき、隔離を介して、目的地に飛ばす。

「フレイムシールド」

パチン、と指を鳴らすと火花が出る魔法、生活魔法の一種だ。その火花を結界に飛ばし、隔離を介して同じ場所に飛ばす。さっきの液体はスピリッツ、蒸留酒だ、前ゴブリンやらから集めた存在値で芦原さんの最後の一服を進化させた時に頼んでおいた。アルコール度数95%、火気厳禁と表記される酒だ、……：辺りが騒がしくなってきたな。消火要員にクロエも回してあるのですぐ消せるだろ。そうできや火なんぞ付けん、景気よく何人かは火だるまになったが、「さて、……：そろそろか。」

刀を杖代わりにして立ち上がる。悪いが強いとわかってる相手に正面から挑むつもりはない。真横を通過するタイミングで高速で飛び込んで、仕留める。万能結界で空中に滑走路を作る。ちょうど建物と建物の間に、あとは千里眼でタイミングを計り飛び出す。……：

1、2、3、

ヒュ、

空を切る音と共に腕を一本切り落とした。完全に急所を外した。着地を決めて周りを探すが、一目散に逃げているようだ。追うのは難しいだろう。切った腕を隔離、証拠隠滅、あとは宿へ戻る事にした。

さて今日はどうしようか、等と、考えながら人形の中枢を作り上げていく。最近は魔法で火加減ができるので、作業は楽だ。髪の毛にアダマントタイトを使うのは大変そうだが、出来れば綺麗な黒髪になる。

やることはいっぱいあるのだ、ただこれで殆どの金属を使いきってしまおうだろう。青生生魂は結構あるが、アダマントタイトは無くなるだろう。オリハルコンも多少残っている。緋緋色金はあと一体分だろう。といっても作る人形によって使用する割合も変化するのでなんとも言えないが、

「また、安いところないかな……………」

《こちらがデータを纏めた物です》

うわあ、……………なんかいろいろあるわ、…………………………在庫補充といきますか。後新しくミスリルも、そうと決まれば、

「向日葵、アナスタシア、クロエ、」

ほぼ全財産を使い伝説の金属を買い込む、ただ距離が遠すぎるので、金を渡して結界で飛ばす事にした。お使いだ、

「それと買った物は袋に入れてくれ、」

「……………小さくない?」

「それは気にしなくていい、隔離の瞬間は物が消えたように見えるし、それを隠すためのブラインドだな、聞かれたら主人から預かったとかでいい、」

「わかりました。」

「うん、」

「は、はいー!」

行き先を説明して送る。勿論心配なので、千里眼で観察する。そして、回収、

よし、「反省会だ、

「まず、向日葵、お前誤魔化す気少しでもあるか?ブラインドのどこまで言わんでよろしい。」

俺の言ったままだを繰り返したのだ、言ったら不味いところも、主人というワードで俺を特定するのは無理だが、スキルのことは不味いだろう、

「そして、アナスタシア……………主人とは言ったが、お前いつもはマスターって呼ぶだろう。何故夫?完全に要注意人物に指定されたわ!」

店主には子供の冗談だと受け取って欲しい。割りとガチで、

「最後にクロエだが、落ち着いて喋ればいい、店主は多少厳しかったけど、お前は客として行ったんだ、堂々としていればいい。」

クロエは店主が厳しかったのもあって結構時間が掛かった。その他はそれといった問題もなかったと思う。

「次は注意するように、わかったか、」

「はい」

「よし、じゃあ次頼む。」

ミスリルの性質を確認しながら今後の利用方法を考える。それとは別にさっきのデータについてもだ。かなりの箇所で物価の下落が発生している。そういう意味では芦原さんのスキルは危険だ、何せ貨幣が世界から消えるのだ。もし似た系統のスキルの持ち主がいれば探さなければならぬ。経済はバランスが大事なので、ちなみに今、藤白は芦原さんと模擬戦をしている。変な癖が着かないといいが、

「……マスター、ご飯冷める、」

「………んっ、ああー、………もうそんな時間か、」

お使いを終わらせた後(俺は送るだけなんだが)、今日はずっと人形作りをしていたので、時間の感覚が曖昧なのだ、なので時間を決めてアナスタシアに呼びに来てもらっている。駆け寄ってきたアナスタシアの頭を撫でると、向日葵も何処からともなく出てきて、頭を撫でやすい位置に持ってくる。出遅れたクロエは帰ろうとする。

「ああ、待てクロエ、後で撫でてやるから、」

「お、お手ば………!」

手羽?なんか顔が赤い、………ああ、噛んだのか、左手をクロエの頭の上に置く。

「遠慮なんかするな、」

「じゃあご主人殿、私の頭を撫でてください。」

「物理的に無理、俺の腕は二本しかない。」

「足でもいいです。」

変態か、間を置かずに言うところが迷いの無さを感じる。少女と言える女の子を足蹴にする。絵面も文面上も最悪だ。最も、俺が作った人形なのだが、………なんかもっと拗れそうだが、



「俺が嫌だわ！」

「……………ご飯冷める。早く、」

「……………あっ、そうだな、」

忘れてた、何のために呼びに来てもらってるやら、アナスタシアが作る料理は旨いのだ。台所に立つのは踏み台が必至だが、

テロケーかくです。(バグズミックス1号)

今日の指導を終えて、……いや、ギルマスをボコボコにして、冒険者達に見識を身に付けさせていた。勿論藤白にも、俺もいい刺激になった。

「……………悪鬼を無傷で、」

「現役じゃないにしても……………」

なんかヒソヒソ言ってる。悪鬼は多分ギルマス、クラインの二つ名だろう。……………しかし、悪鬼って、何したらそんな、

《火魔法を受けようと前に前進し、敵を薙ぎ倒す姿から付いたそうです。》

あー、炎熱耐性6あつたな、その割りに火傷みたいなのが無いんだよな、この人、

《現役を辞めた際に、高値の回復薬で治療しています。なお、異世界人作です。》

成る程ね、薬と言えば、藤白にも、薬物毒物関係のスキルがある。それでも作れるか？

《同等のものは難しいですが、それに近い物なら可能かと、存在値を振り分けて強化すれば同等かそれ以上の物も作ることが出来ます。》

それはいいな、もしもの時の備えは多いに越したことはない。さて、クラインを起こす。気絶してるだけなので、ペチペチと叩いてみる。

「くっ、……………まさか、一撃も当たらないとは、な、」

捨て身の攻撃の思いきりは悪くないが、苦し紛れの反撃なんぞ、牽制程度の役にしかたたない。事実それで姿勢が崩れて、次の攻撃を受けきれずぶっ飛ばされた訳だ。ちなみに今回は鉄パイプのようなもので打ち合っていた。

「明日街を出ようと思う。盗賊の宝については売れた分だけ受けとる。残りはまた来る時に受けとる。」

「わかった、……………また、書類と向き合ねえとな、」

また仕事が増えたと、心底、鬱陶しそう表情を見せると、受付の方

に歩いていった。

「さて、俺は俺で準備するか」

「今度は何を……………」

なにその不安そうな、訝しげなその表情、久しぶりに見た藤白は体格がすっかりとじていた。まあ、実験の意味もあつたけど、すっかりやってくれているようだ。基礎は出来てきたし、あとは技術や技、そして心(精神論や効率化)、それを教えればあとは実践等を行い仕上げていくだけだ、

「そつちも問題無さそうだし、明日出るまでに世話になった奴等に挨拶して回るだけだ。」

挨拶は大事だ、人との関わり合いの中で第一印象を決める大事な要素だ。どんなものであっても。

今回は人形作りではなく、武器兼アクセサリ、ミスリルを使った羽根の形をした投げナイフ。それを紐に通してズボンの右側にチェーンのようにして付ける。魔力を流すと、羽根の状態の空いている隙間が閉じ、命中補正、切断強化、当たらなければブーメランのように戻ってくる式を組んである。この式があるので長距離には飛ばないが、咄嗟の際には役に立つ。ミスリルは軽く、魔力が通りやすいため、属性の付与がしやすいのが特徴だ。俺の刀もミスリルとオリハルコンの合金で出来ている。取り合えず一つ作って残りは、それで型をとって残りを作ればいい。ただ大きさがないので付ける属性は一つで強力なものは付けられないが、十分だ。

「ふう、……………よし、問題ないな、」

藤白用の奴は切断強化を除き、属性と命中補正を強化しておく、刻印は付けたい効果を俺が言って代行者が案を出したもの、後は別で芦原さんの防護式の刻印を入れた首飾り(タグみたいなもの)、一枚には、魔法軽減、もう一枚にはステータス強化だ、藤白の分もある。後はこれを渡して……………

「……………」

『……………』

背後から視線が刺さる。いや、防具みたいなものだからね。アリス

は貰ってどうすんの？アレか、早く作れって催促か、ただ目は口ほどに物を言うとは、よく言ったものだ。だが、口にしてしまうと後戻りは出来ない。

「……………アクセサリーが欲しいのか？」

いやー、人形とは言えど女の子はやっぱり女の子だわー、金色の薔薇の飾り（大小様々、小物から服のボタンまで、）透明な（以下略）……………自分で作っておきなごうだが、各種金属の薔薇だコノヤロウ、……………いや、綺麗だよ、でもこれすげー手間かかるわ！花びらの一つ一つから荊の棘に至るまで全て俺のオーダーメイド、種類ならやりがいあるなーと思ったが、そこから材質変えて四種類同じものを作る。全部一から、硬てえのから、脆いのから、付けたすぐからポロポロ取れるのから、メチャクチャストレス溜まるわ。楽しそうにしているのに、水を指すのも悪い。空気を読んで集合場所を街の外にして早めに移動してゴブリンやオーガにストレスをぶつけていた。旅をする人に危害を加える魔物を狩っているのだ。文句あるか？オラア、目の下に隈作りながらすることでは無かろうがな、ふはははは、……………寝てないせいで若干変なテンションにもなっていた。さて、ストレスを晴らす最後の仕上げはこれだ、カメモシエキスー、これを夜襲の依頼者、この前の木っ端、図書館での襲撃依頼者の家に隔離で飛ばして撒き散らす。今回はオールブレンドで、さて、スッキリしたしそろそろ終わるか。朝日が昇って辺りが薄明かりに包まれる中、一条の落雷が天を切り裂いた。これがまさか魔石を回収するために撃たれた魔法だと知るものは少ない。

狩りの時間だ、

さて、スッキリしたし、改めて作業を開始しよう。少し眠いが、……っと、その前に、

「クロエ、索敵頼めるか。」

「は、はいー!」

前、ドラゴンに遭遇したからな、何回も同じことを繰り返すつもりはない。レンズの役割を果たす水がクロエの前に3つ重なる。千里眼に比べれば劣るだろうが、もし、俺が能力を使えなくなった時、誰もできませんでは済まない。今は人形を作っている最中だ、索敵に割ける集中力はない。役割を与えた方がいいのだ、簡単な話この移動は安全だが、凄く暇を持て余す。芦原さんは酒飲んでるし、藤白は顔色悪いし、向日葵とアナスタシアは、ずっとこつち見てるし、……一番は自分の趣味なり、やりたいことを見つけてくれるといいが、

「何だーこのっ……!ーぐっ!」

「うぐっ!……かっ!」

「誰だー……ぶっ殺してやる!何がなんでも探……!ーうぶっ、」

三ヶ所で上がった声は直ぐに、呻き声か嗚咽に変わる。

オールブレンドカメムシは聴覚を除く、全てを徹底的に攻撃する。特に嗅覚を徹底的に破壊しているのは言うまでもない、彼らの屋敷の機能は何日も止まった。

中継地点を通過してからも特に何もなく飛行していた。藤白と芦原さんが時々リバーズすること以外は、勿論、吐瀉物については結界の外に出るようになってあるが、臭いと音はどうしようもない。今は換気中だ。

「飲み過ぎですよ。」

水の入った瓶を芦原さんの前に隔離で出す。

「ほかにすることないねんから、しゃーあないやないか、」

そう言うってから水を飲み干す芦原さん。確かに暇だ。俺は人形作りがあるし、時間はいくらあっても足りない。今度はタバコを吸う芦原さん。基本的にこのローテーションだ、不健康過ぎるし、いくら好

きなものでも飽きる。

「降りて狩りでもしますか？」

作業を中止し、道具やらを纏めて隔離すると、代わりに刀を出す。「もうちいと、手応えのあるの戦いたいしな、……………水、もう少し貰えるか？」

酔いは抜けてない筈だが、スイッチが切り替わった感じがする。藤白は……………まあ、いいか、そんなこんなで着地、水も出す。狩りの対象を探す。千里眼で、……………えっと、野うさぎ、鹿、馬鹿アカイ蜂、例のカメモシ(赤)、いっぱいいるわ。蜂はマジ無理、野うさぎは鑑定してみる。

毛玉

毛皮が人気、が肉は少ない。乱獲で数が減っている。

耳長

足が早い、二つの意味で、その場で調理を推奨。

玉

肉が硬いが、ペットとして人気、

白

数が少ない。非常に美味、臆病で毘でしか捕まらないとまで言われている。

黒

毒があるが、美味。毒抜きをして燻製にすると旨味が増す。

兎だよな、何故毒？白いのをてきとうに一匹捕まえて、毛玉も何匹か捕まえる。勿論黒も、さて、狩りの対象はなにがいいか、

「何か要望とかありますか？」

「うーん、……………酒の肴になりそうなもんであるか？」

……………それはちよつと無理、加工しないと、……………辛いものが、がいいのだろうが、胡椒の効いたもの、塩辛いものは大体加工済みだろう。海なら塩辛ぽいものがあるかも知らないが、代行者、別で準備しといてくれ、

「燻製や干したりするとして、肉行くか、」

尻尾の辺りが蛇みたいな鶏、トラツク並みの牛、豚はオークでいい

か。後鹿も（少しでかい）、

「こんなもんか、」

てきとうに隔離して呼び出す。

「どれにしますか？俺、余ったので、」

「……………豚か、鳥で頼むわ、牛は頼む。」

「藤白は？」

「遠慮しておきま……………」

「よし、牛でいいんだな？」

「……………鹿で」

「芦原さん、どっちも行けそうならお願いします。」

「おう、任しとき、」

あまりにも呆気なかった。約三十秒のロデオを楽しんだ後、周りを見れば一撃で、角をへし折り頭蓋を粉碎された鹿とメイスを持つ藤白、切り捨てられたオークと、逃げる鶏と追う芦原さん。あっ、藤白また吐いてる。

「待たんか、コリアー！」

それは無理じゃない？殺すつもりなんだもの、相手も必死に逃げるわ、……………首ちよんぱした。みんな終わったか。

「これも解体して貰いましょう。」

障壁を動かし、まとめて隔離する。

「マスター……………、石化、」

は？石化？どう言うこと？体を見回そうと動いたとき、右足がぎこちないのに気づいた。膝から下が石になってる。なんで？……………もしかしてあの鶏、コカトリスなのか？

《正解です》

いや、もつと早い事言わんかい!!どうすんのこれ！

「デイスベル」

あ、治った。……………解呪の魔法だよ、それ、アナスタシアの聖光魔法がなんかおかしい。

「状態異常を解くのは一緒、」

魔法はイメージだ、出来たんだしできるものなのだと言う認識でい

いだろう。あと平然と心の声と会話しないでくれるかな、

狩りをした後、移動を再開する。芦原さんには風魔法の練習を提案した。藤白については前より青い顔で吐いてる。うちの人形達は介抱してやる気はないようだ、ずーと、こっち見てるし、こう言うとき心が読めてるなら行ってやって欲しいが、視線を送ると目を逸らすアナスタシア、……かわいそうな奴だ、藤白。かく言う俺も人形作りに勤しんでいる訳だが、代行者あとのくらいで目的地に着く？

《5キロ先斜め左方向です》

ナビみたいない方だな、まあもう暫くか、ゆつくり移動したので6日掛かった。人形の方も後は組み立てるだけだ、今回は何カ所か失敗するぐらい難しい刻印もあつたからな、要望出したの俺だけど、さて、今日最後の仕事に掛かろう。



## 北の花園（ノースガーデン） クラハに到着

### 画竜点睛

これを欠くは、如何なる精巧さを出せても、如何に美しくとも、その全てに影が差す。四体目とあっても、馴れる事なく、微妙なズレを削り、修正し、完成に近付けていく。

「……………ふう、出来た、」

いつの間にか止めていた息を吐き出し、安堵する。心地よい達成感の余韻に浸りながらも強張った体をほぐす。……………さて、アリスは、つと、……………居た、背後にビツタリと張り付いて見ていた。目がないので定かではないが、

『やつと、……………待ちに待ったこの日が……………！』

感極まったという感じだな、これだけ喜んでもらえれば作ったかいがあったと言うものだ。ランタンを開けると、黒い光は一直線に人形に吸い込まれていった。

《北川 龍登は人形師になりました。》

今更感が……………、言いたいことはあるがまあいいか、多分何体人形を作ったかだろう、基準は、

「アリス」

「何でしょう。」

他の三人とは違い、大人びた印象になるように作った。クロエより身長は高いが、その他は平均的な体つき。後は性格だが……………、スキルから見るか。

アリス オートマタ

機構精霊 妖艶な黒バラ

パーソナルスキル 嫉妬 魔眼

スキル 死霊術 | 完全再生 | 闇魔法 7

耐性 毒・酸無効

称号 生きた人形

いっぱい訳わからんわ、自己再生を強化したのだが、進化して完全再生になった。死霊術とか闇魔法を置いとくにしても魔眼、これだけは、放っておけない。

魔眼 内約

魔力が宿る眼、

おい！雑すぎ！ぎっくりし過ぎだろう！もっと詳しく見るしかない。真理を魔力の項目に集中、

相手に魔力を当てる事によって異常を発生させる。

うーん、まだ少し分らんな、異常の項目に集中、

呪い、毒、催眠、麻痺、金縛り、腐食、石化、発火、凍結、精神崩壊、

ぶちこみ過ぎだろ……、原因は間違いなくこいつだ、

嫉妬 内約

羨望の眼差し 敵を拘束、弱体化させることができる。魔眼を習得する。

罪源 美德系、天使系スキル保有者に攻撃が当たるようになる。

もろ書いてあった、しかし真理もとんでもない力だ、俺鑑定いらなくね？でもアレか……、鑑定ではパーソナルスキルが見えない。偽装もされるが、相手からの鑑定対策と真理ノ瞳を隠すためにも、持つておいた方がいいか、つと、そろそろクラハについて説明しよう。大きな街で運河や航空関係の物流で栄えたようだ。その分様々な業種、言葉、種族が行き交っている。これは人間観察のやり甲斐がありそうだ。荷車を牽くドラゴンみたいなまでいるが、

「まず、宿を取って何かあったらそこに集合、俺はドラゴンの解体を依頼に行ったら、今日は宿にいるつもりだ。なにか質問、リクエストは

？」

「……………先生みたいですわね。」

「みたいじゃなくてそうなんだがな、藤白くん？」

「全くもって侵害だ、」

「ちよつとええか？……………ギルドに登録ちゅうのがやつときたいやけど、」

「全然構いませんよ。後で案内します。」

「代行者ナビでな、ここのギルドとか知らんし、」

「……………なあ、」

「何でしょう？」

「俺は自由行動でいいって言ったよな、」

「言った。」

「……………ならこの状態はなんだ？」

「それは当然、ご主人様を守るためです！」

「ドヤッ！という効果音がつきそうな顔で言いきるアリス、」

「わっぱり、めいわふうてふよめ、」

背中に張り付いてるクロエの声が体に響く。密着しすぎだ。これだけ近ければ守ると言うより盾ではなからうか？両脇はアリスと向日葵が張り付いている。

「アナスタシア……………一応聞いとくが、お前の担当は？」

「……………上？」

聞くなよ、……………まあ仕方ない事ではあるが、アリスが肩車して欲しいって言ったときはどうしようかと思った。見てて羨ましかったそうだが、街中で少女と言えるアナスタシアを担ぐのと、女性と言えるアリスを担ぐのは注目の度合いが違う。お陰で向日葵まで立候補する始末、人の目のない場所ならいくらでもしてやるから我慢しろと思った。言うとは絶対しつこいので言わないが、

《目的地を通りすぎます。注意してください》

おっと、もう着いたか、……………なんかこの辺りだけ現代の工場のような倉庫のような建物が、

「すいません。こちらは解体や素材の買い取りをする場所なのです

が、どのようなご用件で？」

「は？失礼な受付だ。と思っただが、これは俺の悪い。持ち込みなら荷車なりで現物（魔物の死体等）を持ってくる。他に依頼している場合もあるだろうが、買い取る場合も荷車が必要だろう。手ぶら………両手に、いや、四方に花で来る場所ではない。」

「解体をお願いしたい。………結構大きなスペースを確保したいんだが、」

チップとして金貨を五枚程置く。

「わかりました。申し訳ありませんが、こちらは受け取れませんので、ご了承を、」

ほう、教育が徹底されているようだ。建物からも予想はしていたが何らかの形で異世界人が関わっている。送った人がこう言う人ばかりなら経済破綻から文明の崩壊には繋がらないだろう。

#### 前言撤回

柱の位置がおかしい事を、代行者に相談したところ、

《震度3で倒壊するでしょう》

とのこと、これだけの大きさのものだと一人で作れる物ではない。依頼したが技術水準がこちらの人では満たせなかったのだろう。だが、確認に来れば知識があれば文句を言うなり建て直しをするだろう。建てる段階なら監督もできる。あと汚れ、床に赤茶色のくすみがある。大小様々な元血溜まりが転々と目につく。掃除は外部に依頼しているようで、ちらほら格好の違う人が掃除しているが、臭いには効果なし、まあ消臭剤もないし、仕方ないのだろうか、

「これは、いろんな意味で大変そうだ………」

経済的に持ち直せるか、………難しいだろう。誰が原因かは知らんが、もし、俺が企画等を依頼する際、………まあ、元の世界でもぶつかる問題だが、企画と現物のコオリティの差がどの程度になるか？パソコン等もない。口で伝えるのも限度がある。

「この辺りでいいですか？」

「うーん、………少し不安が残りますが、取りあえず出してみます。」  
大きいものを入れる際には結界で囲って一瞬とは行かないが、出す

ときは一瞬、カメムシ以外の魔物などを出す。ドラゴンと牛がかさ張るなり、ドラゴンの方がデカイが、

oh…………、場が一瞬でカオス、

反省は全くしていない俺だが、阿鼻叫喚の騒音の中心に置かれるのは納得いかない。案内してくれた職員は、ため息を吐き、頭が痛そうだが、慣れてるみたいだな、

「解体できますか？」

「……………出来ませんが、お時間を、……………それと竜種を持ち込む際は、受付で予め申請をお願いします。次回からでいいので……………」

どつと疲れてますね……………

「あつ、解体の費用は、どのくらい掛かります？かなりかかるようでしたら、素材で補填とか出来ますか？」

「売値次第ですが、何処を売りますか？」

「肉を10キロ以外は全部売ってください。俺素材より金がいるんで、」

「は？……………なんで肉？」

呆氣にとられたな、素になってるし、

「はい、それで、流石にこれで解体費の方が掛かった……………何て事はないですよね？」

無償の信用は高くつく、元の世界でも相手を選ぶ必要があるが、こっちは特に注意が必要だろう。何せ法律が緩い、それどころか領主などの個人に裁量が任せられるなど、その領主が無能など録な事にならない。まあ、ピンはねくらいは見逃してやるが、足りないだの吹っ掛けて来るようなら容赦はしない。その意思表示だ。まあ、素材全部売りの意味する所はこっちに干渉するな、だが、（金がいるのはホント）

「いつ頃にお伺いすればよろしいでしょうか？」

「すみません。私では判断できないので……………連絡先をお伺いしてもよろしいでしょうか？」

「では、宿を取っているのでそこに、」

紙を差し出す。予め準備しておいたものだ。他にも何枚かある。

ダミーの紙も準備してある。書いてあるのは宿の名前、後は俺の制作者名だ。

ノースガーデン

「北の花園……………」

この名前は人形師になった時に設定出来るようになったものだ、本名を隠したいときや、対外的にはこの名前を使っていこうと思う。冷凍蜜柑妖精なんかも異世界から来たことを隠すためだろう。俺も名前だけなら何とか誤魔化せるだろ。会えばバレるだろうが、

「では、私はこれで、」

向日葵達は隔離して、素早くその場を離れ、脱出した。

「……………この辺りならいいだろう。」

隔離していた向日葵達をだす。

「折角、ワタクシの出番だと思いましたがに……………」

アリス……………お前何する気だった、隔離しといて正解だった。芦原さんを迎えに行つて今度はギルドに向かおう。後は道すがら今日の晩ごはんの食材を見ながら行くとしよう。

## 戦力確認と強化

昨日、ギルドに行つてわかったことがある。芦原さんも受付で普通に文字が書けた。……………何故、俺だけ書けない。いやそもそもあんな字元の世界にはないので、思い当たる原因は一つ、

「何が豊穰だ、愚劣さの神だろ、」

ついでに街を行き交う人の言語の違いを聞いたところわからないそうだが、違う言語があることが、……………人の言葉だけでも同じでよかった、通訳とかは二人を頼ろう。数日で言語や文字の習得なんぞ無理だしな、ギルドから帰ってきたら晩ごはんを食べて、街を千里眼で見渡してみた。この街結構闇が深そうだ、夜見た見解を代行者に質問すれば思った通りの答えが返ってくる。密売、密輸の類い、薬物が多いらしい。あと人身売買に、武器が基本のようだが、オークション会場を覗いた感じ、俺には縁がなさそうだ。出来るなら行きたくない場所だ。備えとして戦力の底上げのため、今日は街の外で藤白と実践形式の指導を行っていた。鹿を一撃で倒せたように予想より早く力は水準以上になったが、そのせいで技術が全くついてない、本来もつとゆっくり積んでいくつもりだったのだが、戦神の加護か、俺が言ったことのせいか、心・技・体で言うところの体だけを完成させた状態だ。無いものは身に着けるしかない、

「踏み込みが浅い、」

攻撃を受け流し側面に周り、太股を蹴る。

「脇が甘い、閉めろ、」

攻撃を打つより速く接近し、投げる。

「何で目を瞑ってるだ！相手をしろ！相手を！」

通り過ぎた所を背中を押すように蹴る。

「全力で降ればいいってもんじゃないぞ。」

迫るメイスを片手で止め、勁力で吹き飛ばす。

「……………少しは対処しろよ、」

相手の反撃の防御の仕方と、実戦を混ぜたものをやっていたが、防御が全く出来てない。筋力は上がっているが、それらを活かした攻撃

の仕方、体の使い方も出来てない。もう倒れてるし、この指導では打たれ強さも鍛えてもらわないと困る、が、潰れても意味がない。

「休憩にするか？俺はちよつと狩りに行つてくる、」

まだまだ刀を使うことは無さそうだ、さて、狩りの目的はクロエとアリスがどのくらい戦えるかを見るためだ、まずはクロエから、今回は遮蔽物のない場所、ここから一直線の山の上に、さつき隔離したてのリザードマンを出す。

「あれの頭を打て、」

「わ、わかりました。」

背中から伸び出てきたアダマントタイトが形を構築していき、巨大なライフルになった。他にも拳銃やらショットガンなんかも出せるが、主体は遠距離攻撃、土魔法で打ち出す弾を作り、ブースターと同じ要領で弾を打ち出す。魔法を使つての物理的な発射だ。

ズガアン！

轟音が響き渡る。……洒落にならん威力だ。千里眼で観測したところ弾丸は顔の中心を捉え、首から上を消し飛ばした。

※魔石は後で回収しました。

さて、次はアリスだ。アリスは武器が多い、それと別にも武器を与える。

「これとこれだ、片方は俺が作った。結構苦戦したな、」  
ラストブレット  
錆びた大剣

刃はついていないため重みで潰すように斬る。丈夫、

獄鋏・十三枚刃  
レヴァテイン

変幻自在の鋏、複数の形態に変形する。十三枚目の刃が使われる形態は一つしかない。

まあ、中々近距離が主体だ。薔薇の髪飾りも一応武器になる。後は嫉妬、それと魔眼、実際にやってみて貰った所、指定した範囲に黒紫の茨が発生し、その範囲内では、ステータスが7割削られる。敵が弱いのもあるだろうが。ちなみにその範囲内なら茨を使つて動きを拘束することもできる。ただ指定できる範囲は視界内と自分の周囲に限るが、それと魔眼、合わせるとエグい。弱つているところに毒なん



かを盛る。その上身動きがとれない。欠点があるとすれば二つある。一つは視界内か自分の周囲しか使えない事と、もう一つは魔力がすぐ無くなる。アリスの魔力は向日葵達と比べるとかなり少ない、アダマンタイトは硬く丈夫で、魔力を流すことによつて使用者や制作者の意思に合わせて形や性質を変えることができるが、魔力を蓄えることがあまりできない。一番多いのはオリハルコンで、次が緋緋色金と青生魂、ミスリルはほぼ蓄えられないが、アダマンタイトよりも魔力をよく通す。変形はしないが、

「はあっ！」

リザードマンをラストプレートで一刀両断する。……刃無いよね本当に、頭蓋骨まで真つ二つなんですけど、いや、刃がないからこそなのか？

「戦いについては合格か、後は、」

俺自身の存在値稼ぎ、魔石回収……は向日葵任せて、アリスにスキルを与えるか。

「アリス、」

「はい！何でしょうか!？」

いい返事だけど、期待とかが重い、そんな蘭々と目を輝かせられても……、頭に手を置き念じる『汝、我主トスルナラバ、汝、破壊ノ使徒ニ任ズル』つと、効果は……どれどれ、

破壊ノ使徒 内約

血ト殺戮 浴びた血の量によつてステータスが上がる。

黒ノ時 一日一回だけ、直径一メートルの時空間属性の球体を作り出し、攻撃できる。

強力過ぎませんか？これ、血ト殺戮は不穏な名前だが、黒ノ時、これはどうなの、まず時空間属性、これは何ぞ？

《時空間制御を持つもの以外が取り込まれると確実に死に至ります。》  
そのスキル持つてる奴は？

《現在該当者がいません。》

実質防衛不能の無敵攻撃、使いどころが難しいだろうが、切り札として持つておくには心強いだろう。

「そろそろ戻るか、向日葵、」

「はい、もう少しで全て回収できます。ちょっと待ってくださいね。」  
「そんなにすぐは無理だわな、……………、向日葵さん？それ生きてる。せめてとどめ……………南―無―、強欲で生きたまま抉り取ったよ、魔石を、」

「回収出来ました！」

うん、爽やかな笑顔、周り地獄絵図だけどね、

「さて、休憩も済んだろう。今度は細剣で相手をしよう。」

「いやいやいや、今日はもう無理です。」

「細剣は当てていくからな、急所は寸止めする。間違っても突っ込むなよ、それも見極めの練習だ。投げ技は使わないぞ、」

「突っ込んだらどうなるんですか？」

「やる前から聞くなよ、アナスタシアに回復してもらおう。安心しろ、」

「全然安心できないんですけど、」

「まあ、実戦あるのみ、ちゅうやつやな、」

「ほら、始め、」

「……………身体がヒリヒリする。」

「回復したのにか？」

「……………感覚的に残ってるんですよ、攻撃されたら痛いでしょう！」

「じゃあ、頑張れ」

4回は串刺しにしかけた、回避できた攻撃は今のところ皆無、回復は帰る前に一回で十分だった。

「次はコブリンか、オークと戦ってみるか？」

「……………そつちでお願いします。」

技術も大事だが、場数を踏ませるのも大事だ、咄嗟の判断は経験がものを言う、明日ギルドに行つて魔石を売りに行くか。

## 防衛戦に参加

「警報、警報、リザードマンの群れが接近中、冒険者につきましてはギルドに集まってください。」

朝、コーンスープのカップに口を着けたとき、けたたましいサイレンの後に召集が掛かった。食事を終えてから、アナスタシアとクロエを連れてギルドに行ってみる。藤白は向日葵、芦原さんはアリスと一組になってもらう。多数の敵と戦うのに個人で太刀打ち出来るものではない。連携がとればかなり違う。連携に不安はあるが、

「止血帯寄せ！」

「重傷者から優先だ！そいつをこっちに！」

「誰か！手を貸して！」

所々響く怒号、声からも切羽詰まった感情が現れている。……………リザードマンってそんなに強いのか？昨日、的にしたり、斬り捨てたり、存在値的には耐性がおいしいという記憶しかないが？低温耐性が2上がった事と、毒耐性、麻痺耐性、衰弱耐性を取得した後、龍鱗とか固有のスキルやら使えないスキルはポイントに変換した。炎熱耐性も、

「アナスタシア、ここにいる怪我人を回復して魔力は半分以上残りそうか？」

「大丈夫、ヒール、」

回復は一瞬で終わった。回復魔法といっても実は二つある。キュアというのがあるが、こっちは消費魔力が少ないが、時間掛かけて回復するため、近距離で一人づつしかかけられない。対するヒールは一瞬で離れていても回復できるが、キュアに比べると消費が多く、距離が離れすぎると減衰する。使い手の能力の高さがこの魔法にはよく出る。

「こ、これは、……………」

「君が？……………」

「……………」

回復した人を見ると意識はないが、様子は落ち着いているようだ。

さて、ギルドの作戦を聞いてから行くか。

この世界において、回復魔法の使い手は決して多くない、氷水魔法か聖魔法の使い手にしか使えない。しかし、氷水魔法は水魔法を進化させたもの、リライブの使い手はかなり少ない。ただ聖魔法ではキュアしか使えない。光魔法の使い手には回復魔法を使えない。ヒールを使えるのは聖光魔法の使い手だけだ、それでも……………

「……………複数の怪我人を一気に全快なんで、」

ギルドマスター、ダインは知らない、広域支援を効率的に圧倒的に強力にするスキル、救恤、格段に威力を上げる他に、消費魔力軽減がある。広域化には別の能力が関わっているが、

「私では、せいぜい8人が限界だろうに、」

ダインはリライブを使える。だが、一人づつでも30人もの重傷者を回復することは出来ない。それにリライブは作り出した水で患部を覆うことで火傷を治すのが主な魔法だ、回復力は多くない。しかしここまで差は普通生まれえない。ダインにわかるのは目の前の可憐な少女が高位の聖光魔法の使い手であるという事だけだ。そして、今更ながら自分の職務を思い出した。彼女に声をかけないといけない。

「少し、いいですか？..」

「何?..」

可愛らしい仕草に声、自分にこんな孫がいたら溺愛していたことだろう。

「私はこのギルドマスターのダイン、」

「私はアナスタシア、」

短い答えはダインが探りを入れるには情報不足だった。次は何を聞こうか等と考えていると一人の男が近づいてきた、

「マスター、これでいい?..」

「ああ、上出来だ、」

アナスタシアに話しかけるのは予想外だったが、ギルドマスターが出てきたのは、話が早くて助かる。多分魔法関係を使う人なのだろう。それっぽい格好してるし、そんなことを考えてる間もアナスタシアの頭を撫でていたりするのだが、

「リザードマンの群れへの対処や見解をお伺いしてもよろしですか？」

本題を一気に切り出すのは失礼だろうが、周りの状態から切迫していることはわかったので、これでいいだろう。一応冒険者として登録書（カード）を見せる。ランクは一番下のFだが、

「殲滅が望ましいが、この状況では退けるのが最善だろう。」

群れの規模はわからないが、元怪我人は状態は安定しているが、意識はないし、戦力にはカウント出来ない。恐らく戦力では？というのを数えても多くて17人ほど、心許ない、

「群れと放送されてましたが、何匹程？」

「少なくとも見積もっても100はいる。150匹位かもしれん。正確な数はわからん、」

代行者何匹いる？

《156匹です。》

刀だけでは厳しいか、一発ライトニングでも打つか？結構数を減らせるはず、

「一番の問題はそこに上位個体が確認されたことだ、」

そんなのいるの？

《該当個体は12体います。キング一体、ガード二体、メイジ三体、ジエネラル6体です。》

「怪我をした冒険者もリザードマンの調査で送り出したチームだったんだが、何とか受け取ったのがさっきの情報だ。」

……色々とごめんなさい。代行者や千里眼がある俺なら調査だけなら、定期的に観るだけで終わる。戦争において情報は万金に値する。それこそびくびくしながら遭遇戦をするのと、相手の不意を突いて奇襲するのでは被害や士気に大きな差が出る。さて、俺はどうするかな？

話を聞いたところ街の砲台等を使う予定らしい。この人数では当然だろう。なので、その前に、数を減らそうと思う。方法は簡単、千里眼で位置を確認、ライトニングを落とす。それだけ、……意外と減ってないな、後二発程いつとくか。これくらいになれば危なげなく

戦え………逃げるなおい、隔離してこっちの付近に出す。進行方向をこっちにしておくのも忘れない。

先頭を一太刀で斬り伏せる。すぐさま次が来る間合いが近い。抜刀状態では斬りにくい位置だ。手の中で回して逆手に持ち替える、すれ違い様に斬り、血払いから納刀、飛びかかってくるリザードマンの剣の軌道を抜き放った刀で逸らしつつ、刀はリザードマンの急所を目掛けて進ませる。攻撃を受け止め、往なす、時にそのまま刀を滑り込ませ、胸や喉を突く、時より火花が散る、やがてその速度は上がっていき、相手に攻撃させる隙を与えず、敵陣の隙間を縫いながら敵を切り裂く煌めきとなる。しかし、リザードマンってなんでこんなに蜥蜴っぽいのだろうか？ちなみに周りは？苦戦してないか？

「えいつ、と」

気の抜けた掛け声に反して十メートルは飛びリザードマン、一対一なら問題無さそうだが、

「うわー！っばい来た！」

そこら辺はわかつていようで安心した。藤白の後方で控えていた向日葵が一気に前に出て回し蹴りで三体中二体の首を飛ばす。その後は直ぐに後ろに戻る。それを繰り返している。

「なんやーもつと来んかい！」

そう言う芦原さんの足元にはジェネラル（頭一つ大きい奴）が二体転がっている。周りのリザードマンは一定の距離を保ったまま近づかない。弓は不味いな、そう思ったとき、弓が朽ち果てた、俺は何もしてない。やったのは、

「もつと注意してくださいます？もう魔力が残り少ないのですけど、」アリスの魔眼、効果は腐食、金属なら錆びる、動植物は朽ち、壊したり、脆くすることができると。それに効果範囲外に出ても効果が残る。呪いや石化、凍結、発火の火傷（火は残らない）も残る。魔力もまだあるし、今すぐ破綻しそうな感じではないし、問題ないだろう。問題なのは何故、直接戦っているかだ、簡単な話、雷撃でパニックで散々に走っているのだから、数体程度しか倒せず、

門の守りを担当するこっちにっばい来た。頭数はある程度減ら

したが、それでも結構いる。なので、責任もって敵陣に斬り込んでいく訳だ、クロエには遠距離からのカバーとメイジやジェネラル等の上位個体を狙ってもらい、アナスタシアには、負傷した冒険者の回復のため後方にいる。そんなことを考えている間もリザードマンを斬っている訳だが、……………何体目だ？

《32体目です。》

残りはいくつ？

《67体です。》

まだまだいるじゃん、ライトニングで削った分減ってはいるが、結構残っている。血払いをして、納刀、次を探す。……………つもりだったのが、一際デカイのが来た。筋骨隆々で、鱗もなんか違う。斬りにくそうなのが来たな、鉄の塊のような太刀を引き摺っている。仕方ないし相手になろう。周囲のリザードマンも距離を取り始めた。まあ、薙ぎはらえば当たるからだろうが、鈍重な動きで剣を振りかぶるとそれをストレートに降り下ろしてきた。避ければ済むのだがそれでは面白くない。前進しながら降り下ろされる剣に刀を添えて軌道を逸らす。これだけでは足りないので自分の進行方向も逸らし、火花を散らし刀を滑らせながら前へ、懐に飛び込み脇をすり抜ける前に浅く腹部を切り裂く。

「力ばっかりだな、」

ダメージを気にした様子はない。それこそ力だけの証拠だ。反応して防ごうと思えば防げたものを受けるからだ、加減してなかったら三回は斬ってる、臓腑もバラバラになる。さつき一撃を入れたら感じ、骨はわからんが鱗くらいなら気にせず一刀両断できるからな、にもかかわらず、力任せの薙ぎ払い、上半身と下半身の間を狙ったような攻撃だ。さつきと同じ要領で受け止め、地を這うように剣の下に潜り、剣を滑らせ前進する。ただし今回は出来るだけ剣の下に着いていく。出た頃には真横を陣取っていた。そしてリザードマンの反応は完全に見失っている。剣がブラインドの役割を果たしていたとしても予想くらいつくだろ……………全力なのはいいが首まで振られて、敵から目を離すの論外、終わりだ、

チツ、カチン、

納刀と同時に、剣を抜き放つ、一太刀で胴体を輪切りにすると、いつものように鞘に戻す。斬りにくいのが、斬れない訳ではないのだ。やっぱり骨は固かった。刀を抜いて刃を見るが刃こぼれは無さそうだ、

「異世界の刀すげえな、」

藤白は目撃した。流れるような煌めきを、その煌めきは右へ左へ、そのたびに敵の命を散らしていく。訓練の時に見せる動きより早い、その事に思い至る。

「本当に同じ世界の人なんですかねえー？」

芦原さんと模擬戦をしたときは、凄く強いと思った、が、今の北川さんの動きは次元が違いすぎ、乾いた笑いが漏れてくる。どれだけ頑張ってもあんな風になれる気がしねえわ、最後の一撃に至っては見えないし、刀を鞘に納めた瞬間少しか鞘から出して、元に戻したようにしか見えなかったぐらい。後から崩れたりリザードマンを見て斬ったことに気付いたぐらいなのだから、

「藤白！お前これ使うか？」

そういいながら、巨大なリザードマンの剣を担いで、持ってきた。

デカイだけの粗悪品だが、素振りをするのには役に立つ。手首なんかを痛めないように注意してもらおう必要があるが、リーチの長い武器を使う経験はしておいた方がいいだろうし、自分に合ったものを使わないと武器に振り回される事になる。遠心力や重量に、

「う、後ろー！」

ん？ああ、リザードマンか、担いでいた剣の腹を向けてそのまま後方に剣ごと倒れこみ、剣の重みでリザードマンを潰す。短い悲鳴のよなものが聞こえた。下手に振ると腰も痛めそう。ちよつと重すぎるかなー？……………まっ、いつか、取りあえず隔離しておく。起き上がって周りを見るとリザードマンの大半が逃げ始めていた。何故？

《リザードマンキングを倒した影響でしょう。》

ふーん、後は追撃か、呆気ないな、何時からか響いていた音に意識を向ける。銃声と言うより爆発音だな、一定の間隔で響くその音は、



クロエのライフルからしている。ライフルと言っているが、形はマシンガン、大きさは銃と言うより小型の砲台？銃座とかではない、形マシンガンのまま、……うーん、昔のカノン砲の砲身くらいの大きさにしたもの、かな？もう少し小さい感じのイメージだったのだが、……まあ、いつか、後はギルドに戻って問題を片付けるか、

後に、この防衛戦は死傷者が出なかった事で有名になるが、それはまだ先の話だ、

## 報酬のお話。

「……………それで、三人のランクをDに、お嬢様方をギルドの冒険者に登録していただきたい。」

どうしてこうなった？いや、ギルマスに呼ばれ、応接室に来る所までは俺も用があるし、賛成だったが、とにかく聞いてみるか。

「……………理由を伺っても？」

「街の防衛、危機から救った冒険者の功績を評価してのランクの昇格、実力はもつと上だろうが、権限や制度の都合で上げられない。」

あー、なんか最初の時聴いたな、Cに上がるときは一定数のDの依頼を達成しなければならぬとか、実力があっても信頼出来ないのを上に上げないためらしい。で、もう片方は？多分、言いにくい事なんだろう。間が長いので、笑顔で続きを促す。

「……………実は、魔法を使える者がこのギルドに片手で数える程しかない。」

話を聞いてみると魔導ギルドに魔法が使える者が流れている上に最近護衛の依頼で街の外に冒険者が出てしまっているのだそうだが、……………魔導ギルドってなんぞ？

《魔道具の制作開発を行ったり、魔法を使える人間を派遣する。魔法職限定のギルドのようなものです。》

……………もしかして、そう言うギルドみたなのっていっぱいあるの？

《冒険者ギルドに準ずる役割を持つ組織、または団体は100以上存在します。》

破綻の原因の一端がこんなところにも……………、いやその前に確認、そう言った組織が複数ある町は幾つぐらいある？

《ほぼすべての街に有ります。多い街には、17の団体が存在しています。》

これはあかんわ、街の人間を100人と仮定して、非戦闘員を30人としたとしても17で残りを割り、小数点以下を切り捨てると一つの組織に4人しかいない事になる。実際平等に割り振られる事はな

いが、常に人員不足になるはずだ。そして、こういった防衛戦の時、組織ごとに方針、意見が異なったり、人員を出し渋って参加しない所があったり、全員で当たれば勝てる敵に戦力不足や、足の引っ張り合いで負ける、なんて事がある。実際、防衛戦に冒険者ギルドの討伐隊？以外は当直の門番やら、砲撃手以外いなかった。門番は戦つてないし、多分だが、魔物の討伐は冒険者の仕事だろう、みたいな姿勢なのだろう、この街の魔導ギルドは、派閥争いだの、覇権がなんたらだの、この手の争いは始末が悪い。正直、巻き込まれたくない。仕方ないし、断る方向でいくか、

「彼女達は人形、オートマタです。私の言うこと以外は聞きませんよ？」

「？………本当ですか？」

「凄く疑われてる。クロエとかライフル出してたじゃん。」

「クロエ、ショットガンで頼む。」

「わかりました。」

ライフルはデカ過ぎ、翼は部屋を突き破る。拳銃は分かりにくい。丁度良いところ、ショットガンだろう。黒曜の輝きを放つ、芸術的な銃身が形造られていく。

「これは？」

「鑑定すればわかりますが、それ以外だと機能を見てもらうしかないので、私も多少使えますけど、それでは証明にならないでしょう？」

ちなみに鑑定対策で特殊なスキルや高いレベルのスキルは冒険で偽装している。パーソナルスキルは見られないが、一応隠蔽の効果を掛けてある。見破られないか多少心配だ、なんせ真理にはまるで効果がなかった。藤白のステータスで実験したが、偽装も隠蔽も効果を成さなかった。過信は禁物だ、

「………だったら、依頼してもいいか、怪我をした冒険者の治療をしてほしい。勿論タダではない。値段は追々相談させてもらう。どうだろうか？」

「悪くないですが、その辺りは打ち合わせをしてからきめましょう。その時は頼むぞ、アナスタシア、」

「……………わかった、」

条件におかしな所はない。が安請け合いもしてはいけない。

「それと今回の報酬についてだが、……………」

「それは出来るだけお金にしてください。素材やら魔石はいらないので、」

前の金属在庫補充でかなり少なくなってたのだ。素材とかいらんし、何故か、デフレを起こした街に、一級品の品物が流れ着いている。安くなっていると言っても金がなければ買えない。こういった街単位のデフレとインフレの中心には大体大金を手にした異世界人やら、この時代に成り上がったこっちの住民が金の使い方を選ったというか、なにも考えず馬鹿みたいな額を動かしているからだ。

「それは少し勘弁してもらえますか？キタガワさんの全部買い取ったら、他の冒険者の支払いが出来なくなりそうで……………」

え？俺そんな変なもん狩ったけ？リザードマンしかいないよね？

《ジェネラルを除く上位個体はすべて討伐しています。メイジは魔石が高く、ガードやキングは防具の素材として人気です。》

……………ごめん、全然記憶にない。あのムキムキがキングだったのか？王冠とか被つとけよわかりにくい、ガードとかメイジとか思い当たる節さえない。

「無理のない範囲でお願いします。余ったら別のところで買い取ってもらいますから、」

「でしたら、魔石はこちらで買い取りますので、素材は、鍛冶屋、防具屋に売ってもらえませんか？手紙を書くので、」

「ありがとうございます……………それと、少し聞きたい事が、」

「何でしょう？」

「掘り出し物とかがありそうな所ってわかりますかね？」

「物にもよりますねー、……………武器なら大通りの雑貨店、酒なら同じ通りの酒屋に、魔石なら帽子屋の角を曲がった外れの道具屋がいいと思う。」

なるほど、代行者はどつ？

《このギルドにも特殊な魔石が二つ有ります。》

どれどれ？一角竜の魔石と月光獣の魔石か、どう交渉するか、

「では、道具屋の方に行ってみたいと思います。ギルドでも魔石とか買い取ってますよね？後で見てもいいですか？別で買いますし、」

「あまり良いものではありませんが？」

非売品の扱いか？それとも知られていないのか？いや、その割りには棚でしつかり管理されてるし、……代行者の見解は？

《一角竜の魔石は商会に売約が入っています。月光獣には魔導ギルドから売約が入っていますが、商会は手付金を払っていますが、魔導ギルドは手付金払っていない口約束の状態です。月に一回程、催促に職員が訪れています。商会の方も手付金を払ってから半年が経過しています。》

迷惑なやつだな、絶対関わらないでおこう。魔導ギルド、ただ商会か、こつちはちよつと厄介だな、何故買うのか、と言う点と、手付金がいくらだったか調べてくれ、

《手付金についてはギルドの記録に残っています。なお、払った時期についてもこちらを参考にしました。》

半年前って言ってたからどうやって調べたのかと思つたらそういうことか、記録を漁るのはいい手かも知れないな、本とかじゃない機密文書とか、うーん、さて、……商会は穏便に交渉で解決出来るだろうし、魔導ギルドは無視でいいだろう。

取り敢えず報酬を受け取り、防具屋や鍛冶屋を巡る。一ヶ所では買い手が付かなかつたので結構歩いたが、資金は集まった。藤白と芦原さんも報酬を受け取り、目ぼしい物がないか散策している。それを見送り、帽子屋の角を曲がると、一気に風景が変わった、さつきまでは元いた世界の一昔前くらいの風景が広がっていたが、中世ヨーロッパを思わせるそり立つ壁のような建物が道幅をより狭く感じさせる。日が差さないことも拍車をかけているだろうが、

「ここか、」

魔女でも住んでいそうな狭そうな店の扉を開ける。

「いらしゃいませ、きょうはなにをおさがしでえっ？」

舌足らずの子供が対応に出てきた。店主は留守なのだろうか、

「少し魔石を見せてもらっていいかな？」

「どうぞ！……うーん、あっちー！」

「うん、ありがとう、」

さてと、どんなのがあるかな？と、

「ねえねえ、お兄さんはませきのいいやつわかる？」

「ん？多少鑑定ができるからな、」

「えー！すごい！レベルは？」

「5」

「お婆ちゃんより上だ！ねえねえ、どうするの！どうやったら上がるの？」

お、おう、わからん、こつち来た段階で5だったしな、5でも十分レベルが高すぎるのか？真理がある俺としてはあまり使わないのだが、それとなく聞いてみると、鑑定を取得しようと頑張っても、目利きと言うスキルになることが多いそうだ、代行者の見解を聞くと、

《金銭的価値を見極めるため、取得しようとする、価値を見抜く方に傾くので目利きになるのでは？》

とのこと、分かりやすく例えるなら絵を見ると、その絵を学術的、または芸術性を重視して見ていると鑑定、金銭的価値で見ていると目利きになる、実際商人が頑張つて取得しても大半が目利きになってるのがいい例だ。まあ、吹っ掛けられたりを防ぐ意味では有用なようだが、このインフレ、デフレを繰り返しているこの現状ではあまり役に立たないだろうが、見極め方はわからないのでいい魔石とあまり良くない魔石を比較して見せることでスキルの取得を手伝うことにした。魔石とにらめっこしてる間に珍しい魔石を見ていく。物によっては箱に乱雑にぶちこまれている。ただこの箱にはないな、……と、壁と棚の隙間に珍しい魔石が、大分汚い、触りたくないの一端隔離して棚の上に出す。

#### 花竜の頭魔晶

風と土を司る竜のようだ。しかし、魔晶か、なんでも代行者の話だと、竜の魔石は一つではないらしい。その上場所、数まで個体や年齢によって差が出る。頭にできるものもいれば、体の中心に一つとか、

両手に一つづつとか、身体中いっぱいできるやつとか様々なようだ。そして魔晶、これは長い年月生きた魔物などの魔石が結晶に至ったものらしい、値段わからんし、一端置いとこ、いくつか目ぼしい物を見繕って行く。それでも店主は帰ってこないなので鑑定が習得できるか様子を見ておく。最悪、目利きになったとしても、冒険で鑑定にねじ曲げるくらい近いスキルなので簡単だ。

「珍しいね、ダイン以外のお客さんは、」

「あ、お婆ちゃんおかえり！」

「どうも、そのダインさんからここにいい魔石があるとされたもので、」

「あら、そうだったの、」

そんな世間話を交わしながら魔石、魔晶の値段を聞く。適正な値段とか未だにわからないが、安いと思う。金貨20枚で全部買えた。10個ほどだが、どの魔石を使うか、よく考えて決めよう。

## 泥臭え奴らと錬金術

木漏れ日が指す湿地の石の上に座る影が一つ、  
「ふう、……これだけ狩れば、いけるか？」

なんと言うか辺りが臭い、この辺りの魔物は可笑しすぎる。目的は土魔法と水魔法の習得（ステータス上）だったが、ターゲットが手足の生えたブリサイズのフナ、一匹で習得できないが、複数倒せば土魔法も水魔法も両方習得できるらしいが、………そもそも何故こんな文字通りのモンスターがいるかと言うと、

鮒（大）

五十嵐釣り堀の名物魚で、食欲旺盛で、繁殖力が高いが、決して人を襲わない。

とのこと、ここは五十嵐釣り堀の敷地内ではない。元の世界でもよくあることだが、外来魚、ペットの放棄みたいなものだ、経営に困り捨てたのだろう。しかも、この鮒、さつき解体して確信したが、自然界に元から存在するものではない。骨とか訳わからんことになった。何らかのスキルが関わっているのは間違えない。

「しっかし、何匹いるんだよ、」

《1367匹います。》

えー………、食欲旺盛とか繁殖力が高いとかあったけど、そこまで？何食ってんのこいつら？

《雑食です。》

いや、もつと具体的に言えや、と思ったが、そうとしかいいようないか、今までの流れでわかっていると思うが、水陸両用なのだ、解体した感じ両生類ではなく、完全に魚類なのに、謎だ。………うわ、また来た。

「はあ、………よし、ここで心機一転手足のある鮒との戦い方講座、」  
鮒のエラに指をつっこみ、地面に叩きつける。その間に存在値奪い、倒す。最初は結界でこっちに持ってきていたのだが血の臭いを嗅ぎ付けてか、わらわらと来た。魚くらいと思って三枚に下ろしたせいなのだが、魔石も見つからなかった、………もう、ええって、また来



たし、同じ動作で仕留める。

《水魔法を習得しました》

おっ、習得できたか、ハイ！ギブミー、TUTTI MAHOU！  
……………マジか、まだ狩らないかんのか、  
「……………あつ、北川さ……………臭っ！」

うん、臭いね、泥臭十魚臭だもん、ついでに隔離した鮎とかもこれと同じ臭いがする。吐かせるとか、死んでるから無理、かといって捨てるのはあれだし、……………それはさておき、土魔法は習得できた。さて、本題はここからだ。錬金術が習得出来るかの挑戦だ。三種類の方法があるが、生け贄を使うものをシャーマン、材料を容器に入れて武器等を作る者をアルケミスト、そして俺が使う魔力で全てを作る方法をを用いる者をクリエーターと呼ぶそうだ、何を作ろうかな？魔方阵や詠唱を考えるのは代行者に任せるとしても、作るものは決めておかないといけない。……………うーん、俺に馴染みの深いものとかで任せていいか？

《候補を検索……………該当する物が三つあります。》

その三つ気になるな、それと金のインゴットの四つ挑戦しようかな？

— 三十分経過

代行者に伝えられたイメージを元に書いてみたが、ここからどうするんだ？どれがどれのかわからんが、

《魔方阵に魔力を流して下さい、規定の量に達すると発動するようになっています。》

だから、魔力がイマイチわからんのだ、前も触ってればOKみたいなあつたけど、その感じでいいの？

《それでも可能です。三十分掛かりますが、よろしいでしょうか？》

よろしくない。出来るなら早く、四つもあるんだよ、……………あれを真似ればいけるか？目に見えるものじゃないから出来てるか不安はあるが、気と言うやつだ、よく耳にする人もいるだろうが、オーラのな物をイメージする人が多いのではなからうか？中国の武術や医学なんかで気血と言う言葉が使われることがある。気とは血の流れま

たは血と同じように流れるものである。(持論ではリンパ?)ただ武術なんかでは手に血を集めてその手で攻撃する技や集める習練方なんかがある。(遠心力なんかを利用する)まあ、知ってるからと言って真似出来るわけではない、だが、

「……………イメージでなんとかなるか?」

魔法の応用にはイメージが密接に関わっている。その感じのできないだろうか?

結果できた、あと色々衝撃の事実がわかった、魔力1割くらい減った。これで少し安心できた。なんか訳のわからない物を消費している訳ではないと、そして出来たものは?

金のインゴット×7

彫刻刀

鉛筆

携帯電話

……………携帯電話とか、どうするんだよ、鉛筆と彫刻刀はありがたいが、通信環境のない異世界で何の役に立つのか、取り合えずポケットに仕舞つとく、残りは隔離した。それと金、これがどのくらいの値段になるか、町の状況を見て売って行くつもりだ。それと芦原さんのスキルでお金代わりに使えるかも試そう。あともう一つ、書いた魔方陣は使い捨てのようだ。地面にクレーターを残して魔方陣は消えている。咄嗟の時には役に立たないスキルだな、さて、おれのステータスは、つと、

名前 北川 龍登

種族 #%5\* ; ■

パーソナルスキル 真理ノ瞳 万能結界 冒瀆

スキル 芸術10 指導8 鑑定5 武芸4 隠密1 雷撃魔法

5 火魔法4 水魔法2 土魔法3 錬金術1 人形作成10 義

体・義肢作成10 頑丈5 体力自動回復3 魔力自動回復2

耐性 炎熱無効 低温耐性7 雷撃・突風耐性6 衝撃耐性7 闇

魔法耐性5 聖光魔法攻撃耐性6 精神攻撃耐性6 毒耐性2 麻

痺耐性2 衰弱耐性4

称号 爆死 稀代の人形師 害虫ハンター

剣術7 体術8 棒術3 格闘術2 斧2

火40 水1 風19 土17 聖1 闇1

ちやんと取得出来たみたいだ、少し不安だったので前のリザードマンのスキルを還元したポイントを土魔法と適正に振っておいたのだ。まあ、今日はこの辺りで終わりにしておこうか、

「……………これ本物かいな、」

「錬金術で作ってみました。それで、これをスキルのお金代わりに使えないか、試してもらってもいいですか？」

「それはええけど、……………はあー、……………初めて見たわ、金の延べ棒、」

それは俺もね、

こんなもんいくらするかわかったもんじゃない。芦原さんの手が触れるとその一つが消える。進化させる前は直接持つる所持金でしか、買うことができなかったが、今はクレジットとして、入れておくことが出来る。まあ、出すことは出来ないのだが、

「えーと、一十百千万……………」

金は相場がかなり変動する。高騰すればたった1グラム4000円以上が当たり前だ、それが一キロ、

「4200万いっとる……………」

え？読み間違えてないか？

「……………もう一回確かめて貰っても？」

「あ、ああ、……………間違えなく4200万やな、」

この世界の金の価値が可笑しいのか、それとも……………、あー！もう！訳わからんことになつとる。代行者、原因は何？

《原因は様々ですが、主な原因は金です。》

高純度金 100%

錬金術スゲエ、あり得ない数字出しとるやん。18金や24金でも、100%はない。完璧な金なのか。これ、……………いや値段つけら

れないじゃん、何本も持つても仕方ないので、芦原さんに加えて三本クレジットにしてもらった。(4本で総額1億6800万分)

「……………なんか落ち着かん、」

すいません。残り2本は相場とかで変動するのか調べるためのものなので、もつと持つてもらうことになる、魔方陣を書けば作れるものなので気にしないほしい。現金にするには酒にして何処かに売ればいい。原価なんて俺の魔力1割くらいだ。

「別に作れるので自由に使つていいですよ、経済的なバランスを崩さない程度でお願いします。」

「……………こない大金持つてるだけで怖いわ、自由に使え言われても……………」

「また、金塊持つてきますからその時は……………」

「まだ増えんのかい！」

おう、ナイスツツコミ、まあ、芦原さんのスキルは進化させていくつもりだし、俺も欲しい物ができたら遠慮なく頼むつもりだ。その日の晩、芦原さんは高級な酒を真顔で飲んでた。(多分大金のせい)

## 確保と実食

「ちよつとギルドに顔出してくるわ、」

「素晴らしい残し、頭を押さえながら朝早くから出ていった芦原さん、昨日は全く酔えなかったが、しつかり二日酔いにはなったようだ、申し訳ない。」

「アナスタシア、二日酔いに効きそうな物を作っておいてくれ、」

芦原さんが元気になるようにドラゴン肉急かしてくるか、あとギルドにも寄ろう。なんやかんや魔石の交渉ができてない。……………おつと、その前に商会にも顔を出さないと、

肉は案外すぐ受け取れた。滅茶苦茶堅い肉だ、ステーキにしたら歯が折れるんじゃないかと不安になるくらい、そもそも切り分けられるのか？

《通常の刃物ではほぼ不可能でしょう。》

……………そんなもん、食って平気なんですかね？そうこうしている間に商会の前について。さてと、どう交渉するのが最適か、手持ちの情報を組み立てていく。まあ、代行者の調べた情報を元に決めるのだが、入り口をくぐり、真っ直ぐ受付を目指す。

「二角竜の魔石を買い取りたい、担当者を呼んでもらえないだろうか？」

勤めて笑顔を作る。その表情をあまり動かさないと柔らかい印象を出さないようにするため、雰囲気です。

「か、かしこまりました。」

何とか押しきれたな、これで交渉に持ち込めるはずだ、居留守を使わない限りは、保険として、何枚か金貨を握らせといた方がよかったか？交渉だつて相手の時間をとるのだ。名義は部屋代としても渡すか？暫く考えていたが、あまり金を出しすぎるのも良くない。金額を釣り上げられる可能性がある。嘘は見抜けるが気分が良いことではないし、今後（あるかどうかは知らん）に支障をきたす可能性が出てくる。……………相手にとつてもいい客だつたと思つてもらえた方が都合がいい。慣れないことはするものではないと今後どうする

か、悩んでいると、

「今確認の方がとれましたので、こちらにどうぞ、」

通された部屋は意外と普通の部屋だった。ただ所々違和感を覚える。部屋の角に人が立っている。あと空白のスペース、なんと言うかそこを境に物が何も無い。窓もない。そこに三人、ゴツいのが座り込んでいるし、その奥には杖を持った女性もいる。よく見てみるか、まず後ろ、……………ふーん、警戒されてるね。

わかった事

後ろの二人は首飾りと指輪に所有者を透明にする効果がある。

正面のスペースは境目に幻影で窓のある壁を見せている。奥の女性が、(ちなみに後ろ二人も女性)

まあ、要するに真理ノ瞳の前では透明になろうと、幻影を見せようと無意味、後ろ二人は微動だにしない所からかなり腕が立つのがわかる。しかし、これで隠れているつもりなのだから、少し笑えてきそう。

「お待たせしました。私はクラハ商会の会頭のクルツです。」

「北川です。人形師をやっています。……………回りくどいのは無しで行きましょう。ギルドで魔石を見たのですが、こちらで売約があったので、お伺いしました。……………それで、これを使えますか?」

金の延べ棒を机に置く。不安ではあるが、これが使えれば所持金を崩さずに済む。天秤も店先にあったし、これで行けるならその方がいい。この世界もそうだが、昔の硬貨は金やら銀やらで出来ていた。しかし、純度にばらつきがあったり、偽物があったり、重さで価値を決め、両替を行っていた。なら、金塊でもいいけんじゃね?と、勿論クルツが鑑定持ちなのは確認済み、

「……………使えますが、他には?」

この反応は判りにくいな、ここは無難に、

「足りませんか?なら、もう一本……………」

「いえ!結構でき……………結構です。一つでも余るので他にご用命がないかと……………」

こう言う時は遠慮なく言った方がいい。

「では、大きい盾と小さい盾を、あと二人分の装備品を見繕ってもらっ

ても？あつ、男女で、」

「そ、それだけ、ですか？」

ん？これは別の意味があつたか？……………こう言う場合使った値段を確認して、落とし所を探るのだが、比較すべき情報を持つていない。聞くのはアレだし、それにこれだけ頼んだのだ、余った分なんて大したことはないだろう。

「では、この街で何か困ったことがあつたら頼つてもよろしいですか？」

「具体的にはどのような？」

無難なところ後ろ楯になつてくれ、と頼むか、

「そうですね、冒険者ギルドで聞いたのですが、この街にある魔導ギルドは魔法を使えるものを集めているそうで、僕のところには魔法を使える者が多いので……………」

「わかりました。全力であたらせていただきます。」

いや、そこまでしなくても結構ですよ、顔が真剣と書いてマジと読む顔してるもん、さて次は、冒険者ギルドに顔出すか、

さてと、魔石の交渉をどうするか、簡単な方法は相手の約束を蹴り飛ばす。鬱陶しそうなので、ここは、商會に何とかしてもらおう。問題はどうかやって買い上げるか、口約束とはいえ、売約は成立している。まあ、そのために魔石を見たいと言ったが、売ってもらえる保証はない。冒険者ギルドに入ろうとした時、異常を感じたが、気に止める程ではなさそうなのでそのまま入る。

……………酒臭っ！

辺りに横たわる死屍累々、だがその表情は楽しそうな者から、青い顔の者まで幅広い。そしてその中心には、

「かぁー…こんなにいい酒は飲んだことがないな！はははは！」

できあがつてるダインさんがいた。大丈夫なのか？飲ませた本人は土産も含めて渡してるし、受付嬢もカウンターに布団の如く干されている。ギルドの機能が完全に麻痺している。なんか盗難とかで誤魔化せそうだが、そんなことはしない。

「芦原さん、次進化させるとしたらどういう方向性にしたいですか？」  
「……………一番はこっちにある分を吐き出せるようにしてくれと助かるんやけど、」

それは暫く無理、代行者曰く、あと3〜4回進化すれば出来るらしいけど、それにしたって結構な存在値を使う。それにパーソナルスキルは一塊のもの、くつつける事はできても削れないのだ、他にも強化したりしなければいけないスキルやら耐性やらあるのに、存在値を集められるのは俺だけ、一人分でも足りないのにこの人数で振り分けてたらずぐに足りなくなる。

「また次の時やってみます。」

「頼むで、」

目がマジだ。さて、交渉を始めよう。

「……………ダインさん、」

殺気を放つ、強力なものだが一切鋭さのないものだ、完全に覚めるとやりづらいので、少しだけ覚ますためだ、後で悪酔いはするかもしれないが、知らん、こっちはここからが勝負だし、一気に畳み掛ける。

「……………なあ、」

「ん？なんですか。」

「ほんまに教師なんか？同業の臭いしかせんかったんやけど、」

「いやいやいや、そんな訳ないでしょ、」

同意も契約書も書いてもらってるのに、違法な訳ないでしょ、

「機嫌のいいときに交渉したからうまくいったんだよ、」

お陰で元値の三割（金貨70枚）で手に入った。左手で軽く投げた月光獣の魔石を隔離する。

「それより今日はドラゴン肉のステーキですよ、今朝受け取って来たので、晩には食べられると思いますよ。」

話題を素早く変える。出来る処世術である。……………まあ、ステーキは遠慮したいが、

「あ？……………ああ、そうやな、」

まさかの忘れてた？大金の事が予想を越えてダメージを与えてくれるようだ。……………マジでどうしよう。有効的な方法が思い付かない



い。

「……………芦原さん、何か趣味とかありますか？」

「せやなあ……………特に趣味ちゆうもんはないな、けど新聞や雑誌は、よお読んどったわ」

よし、雑誌や本の方向に伸ばそう、スキルも元々の形を変えるように進化させようとする、存在値が多く必要になる。雑談はギリギリ嗜好品の範囲で行けるが、その他の本については物によるのでどこまで実現できるか、取り合えず試算を頼む、代行者、

《了解しました》

「……………うん……………ぐ、いつ……………ふぐうう……………ふあー、」

「……………なんか、大変そうだな、」

「……………だつて、んうー！……………かたいん、……………だもん！」

潤んだ瞳に上気した頬、熱の籠った吐息で、甘えるように、その様は幼くも仕草の一つに至るまで妖艶で、こちらに伸ばされている手がゆつくりと動いていることが時が止まったように魅せられたこの空間の時間が動いている事を囁くように教えてくれる。

「……………いや、ドラゴン肉切ってる最中になにしてんの？」

「……………駄目？」

ちよつ！スカートをたくし上げるな、首を傾げて上目遣いもやめい！……………しかしここまで切れないか、

《ミスリルのナイフはどうでしょう》

ミスリルのナイフ？何故？

《魔力を通せば切れ味が上がります。アダマンタイトは硬度と変形に優れますが、ミスリルの場合、魔力を流せば切断性が上がり、魔法を付与しやすいのが特徴です。ドラゴンの肉を切る場合はミスリルの方が適切でしょう》

あー、なんか前似たような話してた気がする。そんな訳で包丁作製。火魔法を手に入れてからはあまり工房に行かずとも大体のものは作れるようになってきた。……………おー、切れてる切れてる。通販みたい。切られた肉はフライパンの上に乗せられ、塩を振ってシンプ

ルに、

「出来た。」

「食べられるのか、これ」

例え食器をミスリルにしても、歯はどうにもならない。さすがに折れるなんて事は無いと思うが、ガムみたいにずっと噛み続ける事にはなるかもしれない、ともかく食卓に持っていく。

そんな訳で、いざ実食、

.....

.....

.....嘘だろ、

口から出してみた肉を見ると、歯形の一つも付いてない。口に入れた味は絶対食用じゃないと思った。なんか有害そうな油の臭いがした。正面の藤白に至っては前歯が折れてる。芦原さんは奥歯で格闘しているが多分無理、俺？口の中に入れた時に諦めた。テンション下がるわー、今日はさっさと寝よ、

## 省略された豚

「……………まだ変な感じがするわ」

「……………あの、朝起きたら歯が生えてたんですけど、」

……………ホントだ、生えてる。なんで？」

《健康体の作用です》

そんな感じで朝からとんでもないカミングアウト。耐性の枠に入ってるスキルだが、イマイチ効果がわからなかった。そんな訳で真理。

健康体 内約

状態異状の回復を早め、健康状態を維持する。

効果がよくわからないので、後半の文に真理。

風邪や病気を防ぎ、体の損傷、欠損を再生する。

……………これだわ、名前完全に間違ってるだろ、どの程度かわからないがこれあるならもう少しハードに鍛えても大丈夫だな。うん、

「あの、なんだか嫌な予感が……………」

「気のせいだ、それよりみんなは今日どうする？」

「私はいつも通りご主人殿に付いていきます。」

「ワタクシも付いていきます。」

「市場行く……………」

「少し本を見てきてもよろしいですか？」

マスター呼び組は行きたい所があるようだ。

「ああ、構わないぞ、藤白、芦原さんは？」

「特にないな、」

「少しギルドで依頼を受けてきてもいいですか？」

「許可なんていらんが、注意はしろよ、」

一応見守るが、基本手は出さないつもりだ。……………しつつかし、近接ばっかりだな、向日葵と芦原さんは言うまでもない。アリスは辛うじて中距離間接だろうか？俺？俺は近接と超遠距離特殊だと思う。見える範囲なら何でもありだし。

「少し気になる討伐依頼があったからそれをやろうかと思つて、」

内容はでかい豚の討伐、でかいの単位はけた違いだが、今回の依頼内容は討伐と肉の納品で終わる。皮は食えない程分厚くなっている。でギルドで買い取り、鞆や靴、なんかを作る店に買われるのだが、それを幾分かこちらで貰おうと思う。勿論話も付けてある。では何故、今回声を掛けたかというと、

「今回まあ、頭数を揃えたくてな、」

最低でも4人で受けるそうだが、何でもレイドとか言うのを結成する。そう、俺の頭の中ではお一人様一パックの玉子を買いたいから付いてきてくらの感じ、昨日でた依頼を受けて、最速で仕留めに行く。距離もそんなに遠くない。

省略、

そんな訳で、冒険でやりましたが、何か？ 隔離して持って帰ってきて、現在は解体待ち、この大きさならギルドでも解体出来るそう。

「……………いろいろ気になるが随分早いな、収納持ちだからか？」

収納とはスキルの事だ、この依頼には、運び手も募集していたので、これも俺が受けた。別で報酬もでるので現金の方も貯まる。推奨項目には、収納、格納庫、空間魔法4以上、である。代行者曰く、《収納はスペースの容量によって決まります。スキル保有者によって違いが大きいのが特徴です。格納庫は30の項目内に、一定の大きさ以下の物を最大15個入れて置くことが出来ます。項目を取り去れば大きなものも入れられますが、30以上の種類の項目は作れません。こちらはスキル保有者による変化がありません。最後は魔力を消費して収納を作る方法です。こちらは消費魔力、術者の技量に比例します。》

とのこと、いまいち格納庫はよくわからないが、回復に使うポーションなんかを多く保存でき、すぐ出せるので戦闘向きらしい。商人にもこのスキルを持つものは多いそう。隔離は収納に近いようなので収納持ちと言うことでこの依頼を受けた。

「まあね、他にもあるけど、」

こう言うのは否定せず含みを持たせておく、しつこく聞く空気読めない奴は、無言で通す。相手するだけ時間の無駄なので、

「そうか、」

「そんなじゃあ、俺はこれで、」

今度はドラゴンの解体現場に向かう。

「……………で、いくらだ、」

部屋の中に転がる死屍累々、……………まあ、生きてるが、

「お、おい……………こんなことをして」

ガンツ！

座っていた椅子を後方に蹴り飛ばす。

「ひいー！」

「聞こえねえ、……………いくらかって聞いてんだ、」

「それは、あの個体は若いもので、……………」

「違う、素材の価値の話じゃない。……………テエメエの命はいくらだつて聞いてんだ、」

まあ、こうなった理由を知るには少し時間を遡る。

―五分前

俺は案内された部屋に通ると、商会と同じように護衛付きの部屋に  
来たのだが、全てが不快だった。その一、

「実はドラゴンの解体費用なのですが、素材の買い手が見つからず、あ  
まり埋め合わせができていないのですよー、」

下卑た笑みを浮かべながら、ねつちこいしやべり方をする小男、人  
を馬鹿にするのも大概にしろ、売れてない？売ってないの間違いだ  
ろ、裏で売約を進めて売る時期を遅らせているだけ、今は売れてない  
だけで買い手はしっかりついている。要は俺に借金をさせて、素材を  
安く買い叩き、その上でさらに金を取ろうと言う寸法、不快その二、  
カツ、カツ、カツ、

護衛の貧乏揺すりの類いと、周りからの不快な態度と視線、視線も  
そうだが話してる最中に咳だの、鼻を吸る音だの、カツ、カツ、カツ、  
うるさい。腕もよくないのが窺い知れるほど態度も悪く、集中力もな  
い。フラフラフラ目障りだ、おまけに話もどんだんアホな方に転がし  
ていくし、最後決め手になったのは、これ、

「……………しかし、お支払いが出来ないとすると埋め合わせが、そうで

す。あなたの傍にいつもいらっしやる……」

最後まで言わせるつもりはなかった。鞘付きのフルスイングで鼻つ柱をへし折る。攻撃を許している時点で護衛の無能も露呈したところで後ろからの短剣取り出すハゲ、もたれ掛かるように貼山靠（八極拳と言えばこれ）で攻撃前に吹き飛ばす。次の敵の胸部に肘を叩き込み黙らせる。横から殴りに来た奴を避けて、鳳凰双展翔（避けて相手の背中に貼山靠）中途半端な距離の奴には寸勁（触れた相手に運動エネルギーで攻撃する技、発勁法）、最後はシンプルに川掌（腰を落として体を横に向けながら相手を掌で攻撃する基本の技）、存在値もちよつぱり拝借。そして、現在に至る。

「……あと、先に言つとくが、もし後からちよつかい出そうつてのは止めとけ、俺の攻撃に距離は関係ない。」

いくら従うフリをしてもそれはフリだ、顔に出てるぞ、大袈裟に怯えてはいるが、憎悪や嫌悪が見えるつてどんだけの屑だよ、こういうネズミは斬った方が早いと思うが、裏切りに注意すれば利用価値が高い。仲間ではなく利用だ。なので、裏切らないよう釘を刺しておく。物理的に、

ゴツ、

「痛っ！ああっ！」

鞘を床に押し付ける先を隔離で繋いでこいつの靴の先に出し、グリグリする。障壁で窓を作り隔離空間を概して繋げ直接攻撃出来る。出す場所次第で全方位から攻撃出来るし、相手の隙を作る駆け引きでは最高の切り札だ。正直受け取りたくないが、初めが肝心だ、緩い対応で後々背中を刺されたくないし、なので金額とかは確認せず、袋を受け取りさっさと出る。勿論出た後も千里眼で監視する。怪しい行動があれば、一回目は警告で声だけをとばす。二回目は行動次第だ、ただこの街には似たようなのが結構いるので拠点を構えるには向かないだろう。信用できない後ろ盾はない方がマシ、……あーあ、久しぶりになんか甘いもん食いたい。けど高いんだよなー、

さて、そんな訳で錬金術に頼ることにした。ただ作れるものと作れないものがあるようだ。クリエイターの錬金術は原材料を作るだけ、

加工はアルケミストが得意な分野のようだ、塩、胡椒の実、は可能だが、砂糖、味噌、醤油、味醂なんかはできない。ルールがよくわからないが、何となく加工品は無理と言うことだろう。基本は、「と言うわけでよろしく代行者、」

そんな訳で砂糖を直接作る魔方陣と、原材料のテンサイを作る魔方陣を作ってもらおう。ちなみにテンサイは砂糖の原料となる株のような見た目の二年生の植物のことだ。砂糖と言うとサトウキビをイメージする人もいると思うが、国内の約20%程で、約80%がテンサイを原料とした砂糖である。北海道なんかで育てられている。さて、地面にお絵かきタイム、

120分後

魔力を流すと砂糖とテンサイができた。……………テンサイはいいが、地面に直に砂糖はやめてほしいかな、

《隔離で回収すれば砂等の不純物の混入は防げますが?》

そう言うことじゃないんだよねー、気分の問題。使うとき嫌じゃあ、ここ地面に着いてたのかなー、とか考えるの、とりあえず回収、……………テンサイどうしよう。売るか?

## 次の目的地

現在の一番の悩み、拠点探しと、安定した職と収入だ。次何処に行くか、どうやって資金を集めるか、今は魔石やら素材やらを売って金を捻出しているが、価値が落ちない保証もない。発展している街ほど価値の暴落、高騰が激しく、一時的に行く分には問題ないが長期的には、何処かで躓く。それで辺境に構えるとしても、行って職をどうするか、運営できるのか、常に頭の何処かで漂っていた疑問を振りほどいて発生した問題、

藤白が拐われた。

頭が痛い、少しは危機感を身に付けろや、昼過ぎに代行者から報告された場所は放棄された工業地帯、見た目からして油臭そう、この辺りだけ元の世界から切り取って持ってきたのではと思うほど近代化されている。おまけに爆弾付き、事後報告になるが爆弾は回収済みだ、

「第一回黒幕は誰だ会議を始めます。」

「いや、助けたれや、」

「その辺りは大丈夫です。もしもの時は隔離するんで、」

まあ、爆弾のある空間にだが、

「そうやな、そやったら何ですぐ助けたらんのや？」

「それが今回の会議のタイトルに繋がってくるんです。今回の奴はノーマークなのでどういう繋がりがあるか殲滅してしまうとわからなくなります。」

相手の狙い、スキル、俺達の情報を入手した経路、知ってることは全て吐かせるつもりだ、なら相手の話がしやすいように筋書きを決めておこう、そんな寸法だ。狙いがわからないのでいくつかのパターンを用意しておくが、もしどれでもない場合は俺が合図を出して、みんなは黙ってもらおう。そんな訳でオーディション、

「そんなことのためにー、………酷いー、(棒)」

下手くそー、台詞ガン見やん、向日葵ボツ、

「私たちは争うつもりはない、あなたたちの目的はなに？」



上手いけど、わざとらしいぞアナスタシア、  
「わ、私たちが何をくしたと言うんですか、」

ヨレヨレだな、クロエの台詞、

「……………何でしたか、」

見た目だけなら様になってたが台詞を覚えられない論外のアリス、  
「なんや、下手に出とったら、調子に乗りおって、しばいたるか！アホンダラ！」

任侠ものの映画にしか見えない芦原さん。三人欲しいが、芦原さんとアナスタシアはいいとして、三人目だ、どうしよう。

彼らはいつも通りに依頼を実行し、いつも通りの仕事をして、いつも通りに報酬にありつくつもりだった。金の鎖のリーダー、伊東 和彦、昔飲食店を開業したが、不況で店は潰れ、借金だけが残り、夜逃げをして気付けば7年、仲間と飲むのが細やかな楽しみだ。

「リーダー、来たぜ、」

そう言いながら駆け寄ってきたヒルマン、悪人面はいつもの事だが、今日は特に嬉しそうだ。こいつ腕はそこそこだが、女癖の悪さはメンバー1だ、今回呼び出せと言われたターゲットはお付きか何かは知らないが、絶世の美女を何人も連れているそうで、そう言うことには無縁だった自分からしても羨ましい限りだ、

「ほら、きい引き締めていくぞ、」

人質を担いで合流すべく外へ繰り出す。

一部始終を全て見届けると、最短で合流した。ちよつとしたサブライズ、まず爆弾投下、無論爆発しないようにしてある。

「これがこの工場内に転がってたけど、お前らなんか知らない？」

この工場内にはこの爆弾を作る設備、材料、あつちにもそれに関係する技術者はいない。疑問を問い掛けるのと、揺さぶりだ、

「何だそれは、」

知らないか、仕掛けたのはこいつではなさそうだ、……となると、依頼主側か？それだと俺らごとく消すのが目的だろうが、確証に至るにはまだ足りない。俺らを消して利益を得るものに心当たりは無いこと無いが、このまるごと吹き飛ばすと言う行動が矛盾している。では、

次の質問、

「これはもういい、俺の方で処理した。それより藤白を拐った目的は何だ、」

「ここが大事、理由がないに等しいのであれば吹き飛ばすのが目的だろう、あるのであれば保険または、吹き飛ばす口実？」

「お前が持つてる物、後ろのも含めて全部置いてけ、」

「んー？……これではわからないなー、……仕方ない。」

「作戦開始！」

藤白を隔離、遠距離に控えていた、クロエの狙撃でリーダー格の男の両サイドの頭を撃ち抜く。天井の穴から向日葵の奇襲、強欲で強化された腕力を使って押さえ込む。芦原さんにアナスタシアの守りを任せて、アリスと一緒に突っ込み、向日葵を攻撃しようとする敵を倒す。数人しかいないので、数十秒で片付いた。声をあげる暇もないはこの事だろう。ちなみに当初の交渉作戦は諦めた。

「クソッ！離せ！……折れる折れる折れる！」

全力でタップしてるが、向日葵は理解できていない。このままだと本当に折るので、緩めるように指示する。

「さて、早速で悪いが依頼主は誰だ？」

「言ったら見逃してくれるのか？」

信用されてないのはすぐわかるな、まあ、こいつ以外は殺してるし、当然か、真理を使って見た感じ、嘘ではなく事実のようだ、ようするに依頼主はいる。

「名前を知らないなら何でもいい、特徴とかな、」

「……その前に安全と命の保証してくれるか、……それと仲間の墓くらいは作らせてくれ、」

「ああ、いいぞ、」

「軽いなー、」

「それについては、俺の貰ったスキル隔離で何とかする。」

あれは本来、異世界人を送るためのスキルだ。しかし、気の毒な話、アリスの鞭（本来は鋏）は切れ味も使い方もやらかしている。一薙ぎで胴体だろうが頭蓋骨だろうが、CTスキャンのごとく輪切りにす

る。

「で、依頼主は？」

その言葉の直後に死体を隔離、地面に穴を開け、そこに隔離空間でくっ付け直した死体を入れて、隔離した砂をパラパラと掛けていく。後は墓石に名前を入れて、完成、

「……………」

「おーい、聞いてるか？」

「……………あ、ああ、依頼主だったな、ゴールド子爵だ、あんたらをここに呼び出すように依頼された。」

ゴールド……………聞いたことないな、代行者は？」

《検索……………ミトラ合衆国の貴族です。アスメシアの隣国で、二日前にエドガー公爵の娘を盗賊に襲われたように見せ掛け、暗殺しようとしたが、贈った人形の効果で暗殺に失敗したようです。》

……………それで、こつちを排除しに来たと、突っ込みたいところがいっぱいあるが、ゴールド子爵の情報網は侮れない。二日前防がれ、人形の制作者や居場所を特定、昨日の晩頃藤白を拐った事から推測すると、ほぼ一日足らずで調べあげた事になる。この世界にはスキルや魔法なんかがあるし、未知の力が働いていてもおかしくない。……………とにかくゴールド子爵の周辺や関係を徹底的に調べて、エドガールの血縁者を中心に監視、危険が迫り次第報告、対処はこつちで決める。《了解しました》

さて、あまり火中に飛び込むような事はしたくないが、放つとく訳にも行かない、次が無いと決まった訳でも無いし、こつちは先手を取られたのだ、呑気に傍観をしている場合ではない。そんな訳でリーダーを隔離、まずはアスメシアでエドガーと接触、そこから対処の仕方聞き、無理のない範囲で協力しよう。無い時はその時考えよう。

「ごめんなさい」

「いや、気にしなくていいぞ、元はと言えば、こいつが捕まるのが悪いんだからな、」

「すいませんでした……………」

帰ってきた頃には昼頃になっていたのだが、当然帰ってきて直ぐに

夕飯の仕度ができる訳がない。そんなアナスタシアの謝罪だ。気にすることは無いと思う。

「昨日の残り物とか無いか？」

「最近全部アリスが食べてる。」

「ちよつとーそれは言わないでください！お願しましたでしょー！」

ここに来て食いしん坊キャラ発覚、食卓ではあまり食べないと思っていたが、そういう事か、しかし、結構な量があるぞ、人数の割に品数が多いんだよ、あれで渡した予算足りてるのか、って思うぐらいに。「そんな事気にせず食べればいいだろ。俺としてはありのままのアリスでいて欲しい。無理とかするなよ。」

しかし、まあ、人形で食いしん坊キャラって……………、

「アナスタシアも一人で無理にやる必要はないと思うぞ。」

「そうです。洗濯くらいは任せてください。」

「そつ、そうです。私だって、」

「……………向日葵の洗濯は服を破る。マスターの服が全滅する。でも、買い出しは行きたがらないし、クロエは危なっかしい。皿の前科。」

「……………」

「ううっ、ごめんなさい、」

クロエの心の傷を扶るなで、向日葵は力の制御が結構大雑把、特にこれと言って問題は起きてないが、家事には物損の危険が付き纏うようだ。俺も出来ることを手伝うか。

「……………本当に無理させて悪いな、何か出来ることがあれば俺もやるぞ、」

「買い出し付いてきて欲しい。食材が無いの。」

ん？そこから？

「市場には……………」

「行けてない。……………ごめんなさい。」

「もしかして最初のごめんなさいは、そう言う意味か？」

ああ、そう言えば人見知りだったな。いつも買い物には誰かしら付き添いがいたからな。前の時は狩りで人数が必要だったので、付き添

える者が居なかったからな、しつかりしてる様でも、見た目通りの所もあると再確認し、頭を撫でる。

「じゃあ、買い出し行くか。」

ふう、……………何とか撒いたか、案の定付いてきたがっていたので待つように言ったが、約二名付いてきたので、余計な時間が掛かった。ちゃんと待つてるクロエにはお土産を買って帰ろう。さてと、

「何かして欲しい事とか要望はあるか、やりたい事でもいいぞ、」

「……………じゃあ、一緒にお茶したい、」

普段人を催淫したり、読心でふざけたりするが、こつちからのアップローチには弱い。こういう時ほど遠慮なく言っほしいが、

「それでいいのか？」

「うん、」

ほんのりと頬を色付かせた柔らかな微笑は、暫く言葉を失わせるには十分だった。

他愛も無い会話を楽しみ、お茶を楽しみゆつくりとした時間を過ごす。たまにはこんなのもいいな、そんな事を思いながら、一つ提案する。

「やっぱり、家事ができるのを作ったほうがいいか？」

「……………しばらくは、いい、」

「そうか、またこうしてどっかでお茶しような、」

「うん、」

こういう笑顔が見れるならすぐに行きたくなりそうだ、連れてきた甲斐もある。さて、料理については俺で何とかするか、

## 新たな機構精霊

それで、どうだ代行者、あっちの情報は掴めたか？

《黒魔術系の魔法、サーチとチエイスの応用系魔法と断定、条件は、痕跡、所持品から、相手の居場所を探す魔法です。精度甘いので街や国単位でしか特定出来ないようです。》

なるほどね、ただ、黒魔術ねー、どう言う魔法なの。

《まず魔法と魔術の違いから、一人でも運用可能な物を魔法、必要魔力が多く、実質一人では発動できない魔法を儀式を用い使うものを総称して魔術と呼びます。》

要するにゴールドーがその黒魔術を使える人員を抱えているってことか、目安としてどの位使える？それと一度使ったら準備がいるものなのか？

《人数を見る限り一日三回が限度ですが、床の魔法陣に依存しているため、6時間以上の間隔を開ける必要があります。》

面倒だな、思ったより間隔が短い、次その魔術が発動するタイミングはわかるか？

《三時間後に発動します。》

となると、目的は生存確認が濃厚だろうな。ここで反応を隠せば……、代行者、サーチとチエイス、それと発動されたその応用系の魔法の情報をくれ、

《サーチは魔力を動かしてその振動で周囲の生き物を探る魔法です。チエイスは足跡など、痕跡から対象を探す魔法です。合わせる事で魔力の振動、以後波と呼称します。波の届く範囲内の対象の位置を知ることができません。》

そうか、術式に干渉するか、波の相殺、退避、または無効化、俺の持つてる能力と相談して、方法を決める。

で、結界を使って移動。結界には波の干渉を防ぐ効果を追加、でもって、隔離空間を介して冒涇と魔力で作ったデコイを撒く。

「あとは直後に魔法陣の改竄をすれば、時間を稼げるはずだ。」

術式を起動する際に術者の魔法を使えなくするように少し手を加

える。……よし、出来た。陸路なら一ヶ月以上は掛かる移動も結界があれば三〜四日程で終わる。それまでに終わってないといいが、……

「おやつ、」

「ああ、ありがとう。」

砂糖等の調味料を錬金術で作れるので、甘い物をいつでも食べられるようになった。前行った店のケーキに比べてこっちの方が美味しいが、場所の雰囲気だつて大切だし、研究にもなる。……まあ、この空中で食べるのも見晴らしが良くもいいが、

のんびり過ごしながら次の人形の案を練る。クラハでは色々あったが、人間観察という意味では興味が尽きなかった。少し実験の意味もあるが、次作る人形については大体決めている。ケーキを味わった後、隔離から前に使っていたランタンを取り出す。

『う〜、あ〜、………キヤツ、キヤツ、キヤツ、』

『おとーうあま？』

『眠いのですー。』

『わあーい、………うやー！』

おめでとうございます。元気な機構精霊ですよー。………なんてね、

叡智の翠玉

支配する琥珀

真実の紫水晶

忠誠の金剛石

今回は宝石にちなんだ名前になってるな。一日もあれば自我がしっかり構築されるので今日は様子見。今は人形を作る準備をする。………しかし、緑や紫はどうしよう？

## 速攻

ケツ痛い、結界に同乗していたメンバーはたまにウロウロしていたが、俺は基本寝る時と食事以外はずっと同じ所に座ってたからな。……トイレ？出た物は隔離で地面に埋めてます。人形制作の進捗としては七割ぐらいだろうか、髪の毛とかで結構、試行錯誤したからな、その甲斐あっていいものがあった。拠点は何処かに構えれば制作にももつと打ち込めるのだが、そんな事を考えながら宿を取り、エドガーの元に向かう。前来た時もそうだが、あっさり通されるな。話が早くて助かるが、

「このタイミングで来るということは、こちらの事はわかっていると  
思ってよいか？」

「ああ、暗殺の件だ、ゴールド子爵がこっちにまで刺客を寄越してきた。黒魔術は潰しておいた、で、そっちの子が狙われた娘さんだな。」  
「そうじゃ、エリーはあれ以来人形を手放さなくなった、今はその時この娘を守り抜いた護衛の一人と、わし以外には話も出来ない状態じゃ、」

それはそうか、襲撃を受けてまだ一週間も経っていない。もつと時間を置いて会うのが普通だろう。だが、エドガーがこの娘をこの場に連れてきている。ただ離れなかった？

「しかし、もう依頼主を突き止めているとは、………てつきり心当たりが無いか聞きに来たと思っていた。」

「締め上げて吐かせた、」

………おつと言葉が悪かったな、エドガーの後ろに隠れてしまった。ここは素早く用件を伝えてお土産を置いて退散するが吉だ、

「ゴールド子爵についてはどうします？」

「現状どうにも出来ないのが腹立たしいのう。この街の中のことならどうとでも出来るのだが、」

「………わかりました。では、こちらを、箱にはアナスタシアが作ったケーキが入ってます。それとこちらは護符です。………娘さんにごうぞ。」



今回は攻撃性をもつリボン。持ち主に危険が迫ると小さな龍の姿をとり、敵に襲いかかる。話し相手にもなるし、ちょうどいいだろう。そんな事を考えながら部屋を後にすると、左手の無い女性とすれ違った。この廊下はエドガーの部屋までの一本道、恐らくは彼女がその時の護衛だろう。……しかし、協力も情報もなしか、エドガーの情報網は外より内に向いているらしい。この辺りの治安がいいのは彼のおかげかもしれないな。

ミトラー合衆国のゴールドー領に攻撃をすとしても作戦がいる。目的としてはこつちの足が付かないようにするのが主な目的だが、ちなみにゴールドー子爵は近代的なビルを自宅兼会社に行っているようだ。上から三番目の階に住んでいる。上の階はなんかプールとかが見える。下の階も覗いてみたが、自宅の階から上はプライベートスペースにしているようだ。その為ほぼ無人、空からの潜入もありだな。しかし、爵位では上のエドガーよりいいところ住んでないか？

《属する国が違います。ここは国境の街で、ミトラー合衆国と英領シクラの中間にこの街があります。なおミトラー合衆国は利益を得るため小国が集まってできた国なので、財力が爵位に影響します。シクラとは方針が違うためこのような差が生まれています。》

ふーん、国が違うのか、隣国暗殺仕掛けてくるような所は拠点としてはマイナスだな、仕掛けるような所もだが、もしかしたら外交問題になるから動けない？証拠が掴めてないのか？……わからん、だんだんあのスペースに腹が立ってきたな、まあ、二日程は移動と準備に使うか。攻撃する事は確定なのだが、概ね作戦が決まったので買い出しをして結界で移動する。

大きな机の前に小さい男の影、神経質そうな表情を常に張り付かせ、鼠を思わせる前歯、彼こそがゴールドー子爵、

「またハズレか、」

そんな事を言いながら不機嫌そうにマッチに火をつけ、その火でタバコに火をつける。

「しかし……、何者なのだ、」

北の花園、生産系のスキルを強くしているはずなのだが、戦闘では

ギルドマスターを一撃も受けずに倒したと噂されている。幻術を使う可能性もあるが名前以外の情報はどうにも浮世離れた噂ばかりでどれが本当の情報なのか判断ができない。すべて本当なら人間じゃない。吸い込んだタバコの煙を一気に吐き出す。その途中、  
ドン！

とてつもない轟音と共に、ビルが揺れた、

「襲撃です！屋上から二人！」

「何！上からだと！」

このビルの周辺はヘリの飛行を禁止している。上にも見張り程度の人員を配置していたが、サボっていたのか、……………見張りはあとで全員クビにするとして、

「警備の者を集める！さっさと行け！」

報告に来た者に次の指示をだすと、弾かれたように部屋を出て行く光景は彼にとって見慣れた事だった。後は自分も逃げるべく重要な書類と財産をまとめた鞆に手を掛けた時、違和感を感じた。軽いのだ、すぐさま鞆を開けるとそこに入っていたはずの書類がない。鞆一杯に詰め込まれていたはずだが、今は一枚も無い。噴き出る汗を気にせず次々と鞆を開けるが、財産はあっても書類が一枚も無い。不味い、不味い、不味い！

「何処だ！クソ！……………ここか！違う！こつちか！……………ああああ！」

あの書類には脱税、そっち鞆には殺害の依頼に関する書面、あつちには会社の顧客名簿と裏取引の帳簿、一つでも大問題になる書類がすべてこのタイミングで紛失。何か繋がりがあると普段の彼なら考えたに違いないが、引き出しをひっくり返しているようなこの様では思考はまともに機能していなかった。侵入者が来ていることも忘れて、  
バアアアアン！ドン！パラパラパラ……………

大きな音と共に天井が取り払われ、太陽の光が差し込む。砂煙の中心から姿を表したのは、二人の男だが、……………顔が認識できない。顔だけが黒くのっぺりとしていて塗り潰されたような、何かに覆われているようにも見えるが、不思議と目線だけは読むことができた。し

かし、それが逆に不気味で仕方なかった。

さてと、上から二人には乗り込んで貰うのだが、素性や顔バレはよろしくない。そんな訳で、冒涇と魔力で作った霧を顔に纏わせ、隠蔽に使う。服装も変えてもらい。準備OK。結界で上空へ、床を突き破りながら降りる手筈で頼んでいる。割るのは藤白のメイス。パワーだけは異常になってるので、物を壊すだけなら何の問題もない。戦闘面の不安は芦原さんにカバーしてもらおう。俺はその襲撃に合わせ結界で、様々な不正の証拠を隔離で回収。それと、正面から乗り込んで憂さを晴らす。このビル、結界が張られているので魔法で破壊する訳にも行かなかった。しかし、入る出るに制約がなく（検知はされる）。内側からならやりたい放題出来る。カメモシ戦法も有りかと思っただが、あれでは物は壊れなし、営業妨害程度、それでは気が済まない。それに、ここの警備にはどうも異世界人がいる。ついでだし、対処しておこう。回収か、始末かは相手次第だが、まあ、入り口の奴から話してみるか。お邪魔しまーす。

「おやおや、これは、懐かしい雰囲気がありますね。」

あつ、アウトだわこいつ、もう何か武器に手が伸びてる。こんなの戻した所で殺人鬼だろ。目が逝ってるし、隔離で刀を取り出す。

「ご主人様。私が行っても宜しいですか？」

「…………一階だから暴れすぎるなよ。」

不安しかないが、まだ他にもいるし、時間も割けない。回収しないなら任せていいか。

「頼んだぞ、向日葵。」

やばくなったら、回収頼むぞ、代行者。

《了解しました》

「先を急ぐぞ」

「行かせませんよー！」

針状の物が飛んできたが、それは空中で停止し、折れ曲がる。強欲の能力で握り潰したのだ。俺にはきっちり見えてるが相手にも見えてるかどうか、

「飛び道具は意味が無さそうですねー、」

そう言いながら楽しそうに笑っている。その後複数の金属が床にばら撒かれる。向日葵は一言も発する事なく無言で立っている。笑顔で、

「ご主人様から御用名受け、あなたの相手をさせて頂きます。向日葵です。」

北川の前では殿にしているが、心の中ではアリスと同じ様付で呼んでいる。

「これは、これは、ご丁寧に、私は……………」

「あつ、そちらからは結構です。」

素早い拒否、

「……………理由をお伺いしても？」

「私があなたの名前を覚える必要も、興味も無いので、……………ああ！そうでしたね、そちらからどうぞ。」

向日葵にとっては主人以外の事などどうでもいい。

「では……………遠慮なく」

一気に距離を詰める相手にウォーミングアップを兼ねた正拳突きが空気を打つ。それを確認し、掴みかかった、この時彼は大きな失敗をした。向日葵は、はじめに作られた人形で、材料の制限が大きく、シンプルで小柄に作られている。その上強欲の副産物として腕力が強化されている。見た目や体格からは中学生程にしか見えない華奢な腕だか、脂肪の厚いオークの腹に風穴を開けられる力が出るのだ。

パキイ、ミチ、グチャ、

挟み千切られた指が床に落ち、激痛に絶叫を上げる。しかしその声は直ぐに止まる。

「迷惑になりますよ。舌を噛まないようにしてくださいね。」

掴んでいた手を片方を離し、思いつき振り振った。

ドチャ！

「カッ！……………ああー、」

地面に叩きつけられ、肺に入っていた空気を吐き出し、呻き声を漏らす。だが、これで終わりではない。

ズガッ！ドカッ！ビタン！

向日葵の頭上を超えて上がり、そこから何度も前後左右に叩きつけられる。抵抗できず叩きつけられる。そんな時肩から先の痺れが強い圧迫感になったと同時に浮遊感に襲われ、宙に放り出された。

「申し訳ありません。取れてしまいました。」

一瞬、なんの事か理解できなかつたが上体を起こそうと右手を付こうとした時あるべきものが無かつた事と、そのまま倒れた際に目に付いた、向日葵の手に握られた右腕を見て、そこから改めて自分の腕を見ると、腕が丸ごと無くなっていた。認識した瞬間にそれは痛みとなつて襲い掛かつてくる。それと同時に次元の違う力を目の当たりにし、恐怖に心を押し潰され、逃げたいという衝動に駆られる。そのどれよりも早く、身体が本能的に動いた。逃げる為に、身体の中にある物を垂れ流しながら、呼吸のリズムを無視して、ただ走る。しかし望みとは裏腹にその足はすぐに止まる。

「お相手するように言われているので逃げないで貰えますか。」

後ろを振り返ればそこには初めと何一つ変わらぬ笑顔があった。

## 殲滅（蹂躪）

向日葵と別れてから暫く進んで目的の二十階に着いた。ここには二人いる。まずは話し合い。ダメそうならここからゴールド子爵を抑えに行く。

「もしもの時は頼むぞ、アリス、クロエ、」

「はい、」

ここにはこのビルを覆う結界を維持する為の部屋がある。その防衛を任せられているようだ。

「…………おつ、こっちにもお客さんか、暇で仕方なかったし、こいつといると気が滅入ってくる。丁度いいし、相手してくれるか。」

「……………」

これは…………、測れないな。もう少し話すから、抑えてくれませんかねー？アリス？

「おたくはどういう関係でゴールド子爵の所に？」

「俺？楽に過ごせるって言うから着いてきてるって感じだな。実際楽だし、こういう所に居ればいいだけだし、暇になったら遊びに行けばいいし、」

「…………強い奴と戦える。それで十分だ。」

「いや、…………お前の相手は疲れるんだよ。今日玄関の今井川に付き合ってもらえよ。」

遊び…………ねえ、真理を使い過去の行いを閲覧する。…………なるほどね、そういう店から出禁になってるし、強姦の常習犯（ゴールドが証拠を消している）、元の世界でもやってたみたいだな、心神喪失や責任能力を問えないので、不起訴になってるが、釈放される事、9回、内面を覗けば愉快犯、酒を飲めば犯行自慢げに語る。列車に轢かれて死んだようだが、4回目の被害者の遺族に突き落とされている。遺族という言葉で気付いたと思うが、4、7、8回目の被害者は暴行の末死亡している。もう一人の無口な方は自殺。元の世界ではいじめの標的にされていたようだ。元の世界に戻せないな。どっちも、力を手にした今何するかわかったもんじゃやない。無口な方は隔離してやり

たいが……………」

「アリス、クロエ、あつちはいいぞ、静かな方は出来るなら確保、無理そうならいい。出来たらでいいから無理するなよ。」

もし確保に固執して、アリスやクロエに被害が出ても困る。俺自身がやるならともかくだが、こういう時に制約や枷になる事は言わない方がいい。ただまあ、このフロアを覆う結界は張っておく。この手の奴ら逃げるので、アリスとクロエは通過出来る。勿論俺達も、

「任せたぞ、」

「頑張ります！」

「おまかせください！」

「……………本来は侵入者は発見次第殲滅なんだけど、ここを守るのも仕事だし、気楽に楽しもうか。」

「倒して追う……………」

軽口を叩きながら長さの違う剣を構えると、横ではゆっくり大盾を構える。アリスは太股辺りにつけてあるホルダーから鋏を引き抜き、クロエは巨大なライフルを作り出す。

はじめに動いたのはアリスと二刀流の男、正面から来た男に鞭で牽制、しかしここは通路壁を擦った鈍い動きでは牽制の役割を果たしていない。仕方がないので間合いを取り直して鋏に戻し、攻撃を受け止めて、剣を切断する。

「あくあ、これ高いんだよ。」

一度の開閉でシュレッターのように細かく切り刻まれ、破片がパラパラと落下する。そう言いながら半歩後ろに下がる。

「これは、マスターがワタクシに、そう！ワタクシの為に作ってくださった鋏です！斬れない物なんて……………」

そのマスターがこの場に居れば間違いなく注意するだろう。相手が半歩しか下がってない事を、

ガキイ、

「うわっ！硬っ、」

「ちよっ！何するんですの！」

鋏を持っている方の手首に隠し持っていたもう一本の剣で攻撃す

るが、アリスは特にアダマンタイトを多く使われてある為、鉄製の剣では傷一つ付かない。むしろ剣が刃こぼれした。しかし、傷が無いが手首を凝視するアリス、敵の目の前でする行動ではない。その隙にアリスの脇を抜けて、刃こぼれした方の反対の刃を使い、

「こつちはどうだー！」

ジツ！

クロエに接近し、横薙に一閃。掠った手応えはあったが、それだけだ。クロエは後ろに飛んだが、その後そのままの姿勢でぴくりとも動かない。ただ目の下に手を当てて……………

「おい、」

その一言、たった一言であたりの空気が一変した。アリスは恐る恐る後ろの声の主を見る。さっきの声は低い声だったが、男性のもではない。表情は見えない、と言うか見れない。それだけの威圧感を纏っていた。何があったのか、それはさっきの一閃が目の下、つまり頬を掠めたのだ。

「テエメエ何したかわかってるか？」

誰も動けなかった時間は唐突に終わりを告げる。クロエの手が男の頭を掴む。その激痛から武器を捨て、クロエの手を外しに掛かるが、ビクともしない。ただこれはあり得ないことだ。クロエは、遠距離攻撃主体に作られている為、人に比べれば力は強いが、相手が相当非力でない限りは全力でやれば外れる。

「死ぬ、このクズ野郎！」

ベキツ！パキギシツ！グチュ、ビチャ、

聞いたこともない音がしたが、恐らくは頭蓋骨が碎ける音だったのだろう。軋むという過程を無視し、一瞬で握り潰され、ゴミを捨てるように軽々と後方に捨てられる。内からの圧力で飛び出た床に落ちた眼球を足で踏み潰し、盾を貫かんばかりの眼光で睨みつける。

「次はお前だ。死ぬか、大人しく四肢を引き千切られるか選べ、」

「えっ?!クロエ、それは……………」

「あ？」

「な、なんでも無くてよ！お気になさらずどうぞ！はい！」



「死ぬ気も五体を引きちぎられる気もない。」

「じゃあ、死ね」

瞬く間に距離を詰められ拳が振り上げられた。それを間一髪防げたのはこの世界に来てから培って来た経験の賜物だろう。が、途轍もない衝撃で後ろに吹き飛び腕に激痛が走った。状態を確認すると盾は使い物にならない。腕も折れている。しかも盾が拉げて腕も抜けない。一撃でこれだ。

「っ、降さ……………」

それを言い切るより早く、背中のブースターで加速し、頭に一撃、死んだ後も乱打を浴びせ、挽肉を作りあげている。あの声の後、一歩も動けないアリスは眺めている事しか出来なかった。

……………何か物凄く揺れてる。多分下の方。大丈夫か？建物そのものが潰れたらこっちも終わりだぞ？異世界人は歪んだ連中が多い気がする。精神面が、

「しかし、予想に反して熱烈歓迎してくれるみたいだな、」

「敵？」

「まあ、寄せ集めだがな、」

「私、相手するよ、」

「大丈夫か？結構いるぞ」

この先は重役のエントランスホールで天井を三階分抜いている。柱は立っているので強度に問題はない。ただ下で暴れてるのがいるので絶対に潰れないと確約は出来ないが、

「じゃあ任せる、でも、無理はするなよ、」

まあ、初撃はこっちで引き受けるか、足首と手首を回し準備運動、手を床に付いてクラウチングスタートの姿勢で前を見据える。よーい、……………ドン！

バン！ドン！ガシャン！ボウツ！

エントランスの入り口を潜ると同時に魔法が炸裂する。俺の後方に、その後を追うように、行く手を阻むように飛来する魔法を避けながら前に進む。ただすんなり通して貰えないのは確認済み、盾を持った者たちが階の入り口を封鎖している。なので、

「ウインドボール」

魔法で軽く吹き飛ばし、開いた道を直進する。その後は結界で封鎖する。

階が本来ある位置にはテラスが設けられている。普段は息抜きに景色を眺める者や、一服する者の姿があるが、今は侵入者を攻撃する足場となっていた。攻撃が殺到する先には幼い少女がいる。しかし、その攻撃は床に当たることもなく途中で霧散する。扇を持ち、舞いながら、詩を歌うように詠唱を紡ぐ、その舞は美しく、歌う姿は儂げで、気を抜くと魅入れられ動きが止まってしまう。実際魔法を放っているのは半分に満たない。断続的に魔法を打つローテーションはすでに崩壊している。

聖光魔法 サンクチュアリ

聖魔法以外の効力を減衰、無効化する空間を作り出す魔法だ。救恤により強化された魔法は他の魔法を容易く無効化する。そして舞は催淫の効果上昇と範囲の拡張に使われている。儀式に係るスキル舞、北川とクロエが図書館に行っていた日。アナスタシアは丸ごと一日、24時間舞い続けた。彼女には時間が無かった。食事の準備、買い出し、洗濯、と洗濯物の防衛。家事全般をこなしながらスキルの強化や練習に割ける時間はあまり無い。その為の舞の練習だった。そんな時にある称号を取得した。その名は舞姫、魔法の効果をより広域に発揮する能力を持ち、その効果は普段から発動しているが、舞う事でその効果を更に高める。いや、高まっていく。

「呑まれるぞー！」

「早くなんとかしろー！」

範囲はどんどん広がっていき、テラスを呑み込むのも時間の問題だった。盾を持った者たちが空間に飛び込み、抑えに掛かるがアナスタシアの舞は止まらない。鮮やかに避ける。時より光を放つ魔法ライト、一瞬閃光を放つフラッシュを使い攪乱、そしてフロアを覆い尽くした。

「我らが敵を討ち滅ぼし給え、天罰【ヘブンズシヤジメント】」

サンクチュアリ内にいた者が倒れる。精神攻撃の一種なので死ん

ではない。

パアアアン!!

「すいません遅れました。……ご主人殿は？」

向日葵が追いついたように入り口の横の壁を撃ち抜いて何事も無かったかのように話し掛けてきた。

「……………この先、」

「わかった。じゃあ早く……………」

パリーン!

「私達を忘れて貰っては困りますの!」

ガラスを突き破ってアリスが突入、後ろに翼を展開しているクロエが見える。

「見えた、薄紫……………キリツ」

「ちよ!人の下着の色を晒さないで貰えます!」

「クロエは黒ばっかりだもんね!」

「おいコラ!イジるならアリスだけにしろ!」

「それもおかしいんですけど……………、アナスタシアも白ばっかりじゃないんですか?」

「当たり前」

そう言っつてスカートをたくし上げる。

「見せなくてもいいんじゃないやあ、……………私は今日緑です、」

「まさか、自分から言うとはな……………揃ったことですし、行きましようか。」

クロエは、荒っぽい口調を元に戻すと先を促す。

## 終結とその後

「はっはははは！潰れるー！」

巨大な鉄の塊が轟音を響かせながら暴れる。千里眼で確認する限り、二人は無事なようだ。ビルの天辺（現在の）でこんな物が暴れて問題ないのか？と言うかどっから湧いて出たこのロボ。

《ゴルドーのスキル収納に入っていた物です。なおビルについては約五分後に南西に傾き始めます。》

ダメじゃん、うーん、ロボは始末したいけど、中身のゴルドーに死なれても困るしな、あとで責任を取ってもらうためにも、ロボの見た目は戦車のキャタピラを脚に変えたような感じ。ただ脚が太いし長い、運転席の上部までの距離が10メートルぐらいある。太さは立体駐車場の柱より太い。上の方には砲身も付いているが、ビルの上で打つ自殺行為は流石にしないだろう。まあまずは様子見がてら軽く攻撃する。刀に炎ではなく熱を帯びさせる。火魔法を熱の方向で発動させた物だ。

「ヒートエッジ」

眩しい程赤熱した刀で、脚を切断するつもりで斬りかかる。様子見と言っても時間がないので本気で攻撃する。

ジユワ！ガシャン！

……あつさり斬れた。輪切りになった脚部からは白い液体が漏れ出しているな。何だこれ？ER流体？

《違います。核竜の唾液です。燃料兼脚部を切り離し……》

直ぐに後ろに飛び退く。刀を追い掛けるように炎が尾を引く。代行者の言葉を最後まで聞かなかったが恐らく爆発物、または焼夷弾の類、……しかし、核竜ってどんな生き物だ。まともに食事出来るのか？

《口内に火打ち石の役割を果たす歯が存在し、それを打ち合わせる事で着火し、対象に吹き付けます。》

……それ、窒息死しない？核竜が、

《核竜の首には複数の……》

「何者だ！あいつ等の仲間か！」

あーもう、続きが気になる。斬れるのはわかったので一気に距離を詰め、残りの脚を斬る。続きはよ、

《核竜の首には複数の穴があり、そこから空気を六つの肺に……》

「北川さんー！」

「あー………、えらい目に会ったわ、」

クソ、また良いところで、六つの肺とか気にならん方が可笑しいだろう。何でそんなにあるんだよ。………ちやっちやと、逃げますか、話なら移動中に聞けばいいし、

なんと言うか竜ってのはとんでもない生体してる。核竜は首の穴から空気を吸う。この穴は吸気専用、吸われた空気は酸素と空気中を漂う魔力とそれ以外に分けられる。ブレス等を吐く際、火が体内に入らぬように貯めて置いた窒素、二酸化炭素を口から吐き出す。肺が複数あるのはそれらを貯めておくためだ。魔力と酸素は体に吸収される。が、人とかかなり酸素の吸収率が違うと考えられる。吐く分に酸素が混じってたら大変なことになる。次の時竜を狩ることがあつたら解体してみよう。興味深い発見がありそうだ。

「………っで、これだけあれば叩けそうか？」

エドガーの前にゴールドー子爵の所から拝借した。書類がつまれてる。

「これだけあれば、他国であろうと叩けるとは思うが………」

そこでエドガーは口籠る。理由は幾つか思いつくが、これを出す事で自分の首を絞めかねない可能性があるからだ。襲撃して取つてきた物だしな、

「まあ、好きにしてもらえばいいです。こっちは打撃と回収が目的でしたので、」

「回収？」

書類を取るだけなら別に敵地に乗り込む必要は無かったが、黒魔術で使われてた髪の毛の回収、あと異世界から来たのもいたので、対話をしてどうするか決めて、ついでに会社にも打撃を加えた。そんな感じ、

「それはこっちの話ですし、気にしないでいいですよ。」  
「わかった……………」

察してくれたような感じになったが、聞かれない方がこちら都合がいいのでその空気に乗っかつとく。あっそうだ、

「ケーキはどうでした？」

「……………娘が全て食べてしまう程ですから、かなり気に入ってますよ。」

あー、…………甘い物苦手だったか？しまったな、

「今日も別のケーキを持ってきたんですが……………」

「おお！娘も喜びます。」

うん、これは、嫌いな反応じゃないな、食べられなかったのが、残念だった系だ、

「……………それとこれは護衛の方にどうぞ。」

「こ、こここれは?!」

……………びつくりした。そんな大声出さんでも、

「義手です。自動修復と水魔法強化の効果が付いています。」

「義手ですか?!……………てつきり子爵の、」

そんなことしませんからね？表面は人数揃えて狩った豚の革が使われている。材料のあまりだが、これなら義手だと気付かれにくい。

……………外して置いとくとホラーだが、

「しかし、このような物まで……………受け取ってもらえないかもしれないかもしれませんな、」

「これは娘さんのためでもある、って渡せばいいと思いますよ?」

彼女が護衛を続けるのならだが、対外的にも見た目は気になるだろう。例えば名誉の傷でも見えていて気分の良いものではない。アホはどこにでもいる、それにその傷がエリーの記憶とも繋がりが強い可能性があるがある。名目には事欠かないだろう。

「うむ……………、私から出来ることはないかの?」

うん?なんか怖い、なぜだ?…………………………あ、ギブアンドテイクが成立してない。交渉の基本の一つだ。対等に近いスタンスの人間がただ自分に情報やら贈り物を無条件に何の見返りも無く

送られ続ければ不安要素になりかねない。友人とかなら問題ないが、バランスを取るしかない。

「……………幾つかお願いがあります。」

「こんな所で危ない橋を渡ることになるとはな、

「……………そんなことで？」

「ええ、お願いします。遠くについては僕の名前で、街の中の方はお願いします。」

少し手を打ち間違えたが、問題ない範囲だ。ただ藤白の育成が急務となる。芦原さんにも魔法をある程度きつちり使えるようになってもらわないとな、

「……………で、今日は魔法について訓練してみよう。」

「ついに、魔法ですか！」

「……………そんなん要らんやろ、」

「藤白はどの属性の魔法が使いたい？あと芦原さんは風魔法を土魔法に振り直す。」

風適正0だったんだよな。あのアホ神、よりもよって使えない属性の魔法を渡してたのだ。なので適正の高い土魔法に振って置く。まあ、一回こっちで風魔法を預かって土魔法に変換して渡したのだが、この手の変換作業は俺が持つてるスキルにしか変更できない。なので、

「アナスタシア、スキルを少し借りるぞ、」

無いスキルは借りるしかない。1でも借りれば変換して渡せる。

「藤白、聖光魔法以外に取得したい魔法あるか？」

「……………火魔法と水魔法をお願いします。」

「わかった。棍棒と格闘術を変換するからな、」

藤白については実験の要素もある。習得していたスキルを、再習得できるかという事、それによっては藤白の戦神の加護を利用して、鍛えた戦闘スキルからポイントを供給できる。で、こんな感じ。

名前 芦原 輝一

パーソナルスキル 最後の一服

スキル 剣術6 短剣術4 威圧5 土魔法6 格闘術5

耐性 物理攻撃耐性8

称号 戦い抜きし者

藤白 功德

種族 人

パーソナルスキル 毒物・薬物効能操作・製造

スキル 火魔法3 水魔法3 聖光魔法3

耐性 毒無効 健康体

称号 薬殺されし者？

加護 戦神の加護

「さて、藤白はこれからどうする？」

「どうとは？………不吉なんですけど？その笑顔、」

「まず武器からだ、いくよ、」

「………はい。」

「うーん、すぐバテるようになったな、振る速度も遅くなってる。型はある程度様になったくらいそのままの状態が維持されてるな。」

そしてスキルチェック、………あー、あるある。1だけど、棍棒があった。

「次は魔法を使ってもらえるか？」

最初は叫んだだけになったが、何回か叫んで7〜8回目で発動した。それ以降は問題なく使えるようになった。5回目で心が折れたみたいだが、諦めず続けてよかったな、しかし、これから芦原さんの魔法を発動させる大仕事が待っている事はまだ知らない。

「おかえりにやー！お兄ちゃん、……むふうー、」

緑のショートカット、碧眼、甘えた高い声、宿の扉を開けると出迎える言葉の後に抱きついて来た。ちなみに俺に妹はいない。

「クロシエツト、ご飯の準備するから離れてくれるか？」

「いくや！今日は寂しかったからー、うんつと甘えるにや！ね！いいでしょー！ねえ、」

そんな彼女の後ろでゆらゆら動く影、尻尾である。頭には猫を思わせる耳が着いている。今回作ったクロシエツトは猫の獣人をモチーフにしている。でもってこれがステータス、



クロシエツト オートマタ

機構精霊 叡智の翠玉

パーソナルスキル 暴食 雷光ノ使徒

スキル 跳躍10 雷光魔法3 自動修復4

耐性 毒・酸無効 雷撃・突風無効 雷撃吸収

称号 生きた人形

暴食 内約

万物の捕食者 生物、非生物を問わず、食べることができ、それ等を力や養分に変換できる。また身体の内側からの作用を無効化する。

罪源 美德系、天使系スキル保有者に攻撃が当たるようになる

雷光ノ使徒 内約

縦横無尽 移動速度補正、跳躍10、

雷ノ化身 電撃を纏う事ができ、その強さで移動速度を上昇させ、電撃の無効化、吸収ができるようになり、雷光魔法を習得する。

スキルの性能がいつもより一段とブチ壊れてます。全体的なスキルの数は少ないが、ここでは見えない移動速度補正が一番洒落にならない。代行者曰く、

《最大速度マツハ52に達します。》

との事、風魔法なんかで空気抵抗を減らすと更に上がるそうだ。ついでに電気まで纏うともっと上がる(纏う電撃の強さによってどんどん加速する)。

ガシッ!

「みぎやつー!」

「はい、行きましようね。」

クロエに尻尾を捕まれ別の部屋へと連行される。笑顔なんだけどころなんか怖い。前からあんな圧迫感あったかなー?

「いーやく、離してー!」

「少しお話をするだけですから、」

あんなに力も強かったか?.....見てみるか。

クロエ オートマタ

機構精霊 蒼い紫陽花

パーソナルスキル 調和ノ使徒 憤怒  
スキル 水魔法8 土魔法3 自動修復7 変形5 飛行8  
耐性 毒・酸無効  
称号 生きた人形

憤怒があつた……………、

憤怒 内約

破壊の権化 感情の高まりによってステータスが際限なく上昇するが、強い意志や制御能力が無いと暴走する。

罪源 美德系、天使系スキル保有者に攻撃が当たるようになる

だ、大丈夫な奴か？……………暴走しないかだけ確認しないと、後で、「あむっ、」

ギシッ、

「ギャギャギャギャギャッ！」

「ゴラッ！さつきご主人様にもゴブリンは汚いから食うなど言われたばっかりでしょうが！」

「……………いや、それもあるけど生きたまま食い千切ろうとするのもやめろよ。」

ギシッ、カツ！カリカリ、ポリッ！

あ、終わった、あむっじゃねし、何してるし、実力テストとクロエの様子見を兼ねてゴブリン狩りをしていたのだが、俺の隔離は不要だった、一直線に森に突っ込んで行き、満身創痕、または、意識のない状態のゴブリンが2〜3秒に一匹啜えて連行されてくる。音速を遥かに超えた速度で引きずり回されるとも言うが、

「だってー、お腹が空いたにや……………」

で、二分毎に空腹を訴えてくる。最初ゴブリンを喰おうとしたので止めたが、原因は恐らく暴食、

《正解です。力を使う際には養分が必要となります。》

力を着ける為に食べる。力を振るうために食べる。……………ただ随分燃費の悪い能力だ。それに合わせた武器が必要になりそうだ。

……………なんてな、

「これを使え、」

ヘカトニケイル  
袋槌・千枚歯

槌と付いているが、袋だ。殴打も出来るという程度の物。

「じゃあそれでゴブリンを攻撃して見てくれ、」

「はいにやー!」

袋をまだ辛うじて息のあるゴブリンに覆い被さるように振り下ろす。その直後、

「ギ、ギャー!」

バキッ!ブチユグチャ!バキッ、ゴリゴリ、

袋の中で籠もった断末魔の叫びを上げる何か、しかしその声も袋の中から発せられる異質な破砕音によって掻き消されて行く。袋を退けるとゴブリンどころか地面に生えていた草もその範囲だけ無くなっていく。この袋は様々な場所が開くようになっており、そこから中に入れて中の刃物でいかなる物も悉く粉碎し、養分に変えて吸取出来る。表面はあの豚の革で出来ていて、焼きを入れるように様々な刻印で強度なんかを上げてある。コレの余りが義手の表面に使われたのだ。

「おお!これなら美味しくない物を食べなくて済むにや!」

やっぱ、ゴブリン不味いんだね。ちなみに収納能力もあるので物入れにもなる。もしも食料に困った際に役に立つ。まあ、食べなくても死ぬ訳ではないが、いざ戦う時に力が出せないのは困るしな、クロエには多少の格闘技を教えておく。暴走の心配は調和ノ使徒によってかなり抑えられるようなので心配なさそうだ。ただ……………

バン!……………パラパラ

威力が過剰過ぎる。殴られた敵がバラバラになったり、千切れ飛んだり、穴が空いたり、時頼ショットガンで撃ち抜いたり、ゴブリンミンチを量産している。……………あ、魔石はちゃっかり回収してます。しっかし、

「あはっ♡」

……………怖い、どんどんヒートアップしてる。言葉で表すなら”笑う”では無く”嗤う”と表現した方がいいだろう。……………ベースは可愛い顔立ちに作ったんだけど、なんて事を考えているとクロエと目が

合う。すると一気にしおらしい普段の雰囲気に戻った。暴走とかはしてないから、スキル関係ないんじゃないやあ？そう仮定すると、

### 1 戦闘狂

2 元の、または隠している性格

3 力の強さに溺れている

こんな所か、最後のは性格的にほぼ無いと言えるだろう。まあ、一応注意はしておこう。

「強力だな、助かるけど、無理したりするなよ。あと周りを見るのも忘れずに、」

「はい！わ……………」

「おい！嬢ちゃん後ろ！」

片手の千切れたゴブリンが残った手に折れた剣を持ち、襲い掛かろうとしていた。が、回し蹴りで沈められる。そこを足で踏み、ショットガンを三発発砲した。容赦ねえー、多分足で踏んだ段階でショットク死してたと思うけど、

《調和ノ使徒の演算能力補正等により反応速度が高くなっています。》なるほどね、それで土魔法で弾を作るショットガンの連射があり得ないくらい早かった訳だ。実際弾丸を撃つ度に魔法を使わなければならぬし、あんな風には普通撃てない。

調和ノ使徒 内約

調停スル者 演算能力を高め、思考速度を加速出来る。

協調ニヨル支配 味方と距離を無視した念話ができるようになり、仲間の演算能力を補助出来る。

「……………」

「ん？なんか言ったか？」

「い、いえ、何でもありませんよ」

そう言うときクロエはパタパタとこちらに走ってきた。だが、アナスタシアにはわかった。読心をスキルにもつアナスタシアには、聞こえる聞こえないはあまり関係ない。その声は低く小さく、

「マスターと話してる時に邪魔するなよ？殺すぞ」

人形師、家を作る。

家を一から建てるのはDIYに含まれますか？

シャー……シャー……シャー……

「ご主人殿は何をしているのですか？」

「……………カーンーンがけ……………」

理想とも言える長い鯉節みたいな削り節を目指して頑張る。今の音がF1っぽいな、

「いや、あの何ですか？」

「長さ見てわからないか？家だよ、家」

「建築関係で頼んだらええんとちゃうんか？何も自分で作らんでも……………、そもそもどこに建てるんや？」

「それが問題だからこそ、ですかね」

経緯を説明すると、俺は拠点の為の土地をエドガーの名義で二箇所買う事にした。一つは街の中、ここを使ってこっちに来た人達を保護する為の団体を作る。それともう一つ、何かあったときの為の避難場所兼工房、こっちは街の外で人が滅多に入らない森にしたのだが、街の中の土地は建物ごと買うにしても、外は建てなければならぬ。そうすると必然的に値段が上がる訳で……………

「予想を遥かに越える値段だった。ならいつその事、一から自分好みの家を作ろうと思ってな。」

代行者と残りの手持ちの金と相談しながら設計図を作り、材料を買い、後は目的地で組み立てられるように加工している所だ（完成しているのは設計図位だが）。森だから木材買わなくて良くない？と思っただ人もいると思うが、生木は水分が多いので乾燥の時間を考えると材木の方が良い。こっちの木の値段は元の世界に比べるとかなり安い。ただ、鋼材はほぼ無い。あつても釘やらあつても蝶番のような物しかない。石材はあったが石畳ぐらいしか使い方を知らない。無難な所、木材で作るしかない。

「……………よし、このくらいにしとくか、じゃ、ギルド行ってくる。」

所持金もほぼゼロどころか足りないので依頼をこなして稼いだ金で材料を買う。最近暇で暇で仕方が無い。お茶引いてる二人には、去り際に爆弾を投下していく。

「街中に作る団体の代表決めといってくれよ。俺は出来ないから、あと名前も、」

その場をさっさと退散する。こういう時はしれっと、出て行くべし、

さて、俺のスキルで一番簡単な依頼とは何か、採取だ。俺自身は寛いでもいいも千里眼と代行者、隔離を使えば、手元には依頼に必要な物が揃う。それは俺がかんながけをしていようと同じだ、そんな訳でギルトに納品。

「では、金貨38枚です。お確かめを」

「ありがとう」

受付で袋を受け取り、重さで確認、大丈夫そうだな、

「……………数えないんですか？」

「数える方が物騒だろう。」

周りの視線を不快に思いながらも返す。受付で渡す額の上限が金貨50枚。それ以上は別室で渡すらしいが、セキリティーの観点から言えば宜しくない。なんせ数えてる姿が丸見えだからだ。それに俺の場合、

《金貨の枚数を確認、合っています》

……………金勘定の早い奴もいる。重さでも測るが、確実な方がいいしな。後は出口を塞ぐ様に立つものの隙間をすり抜けると後ろからの声に耳を貸さず材料を買うべく足を進める。

『ねえねえ、私達の体は？』

そう問われると言葉に詰まる。現在材木なんかを加工している最中で、作業は完全にストップしている。

「悪い、暫くは無理かもな、それにクロシエットの様子見の最中だし、まだ調整に時間が掛かる。それに中途半端な物も作りたくないしな、」

クロシエットの様子見というのは作った物のスキル補正の範囲を

探っているのだ。人形作成には適応条件がある。それは人の形だ。手足があり、頭がある。ここまででは分かっているのだが、前にエドガーの娘に贈った熊の人形、これもスキルが適応されていた。頭の上に耳もある。尻尾も短いながらある。そこで思いついたのが、人の部分さえ作っておけば他は、どんな物を追加しても問題ないのではないかと、……ただ、スキル補正を受けているかと言うのを調べるのが代行者でも時間が掛かる。材料やら魔石やら、俺自身の技量や部品の完成度、これらを数値化し、計算するのだが、数値化が難航している。

『大丈夫、わかった!』

『済まないな、何か要望があれば言ってくれ、出来るだけ反映するか、』

『じゃあ、お父様の理想のお嫁さんに』

ゴツ!

『痛え!』

ぐおおお……、かなな足の上に落とした……、俺の事お父様って呼んどきながらその要望は無いでしょ。

うん、頑張るけども、

『わかった。善処する。』

『私もよろしいでしょうか、旦那様!』

茶色の光の後ろから紫の光が見える。

『何だ?』

聞きながら落としたかななを拾い、材木に向き直る。

『旦那様は、おっぱい大きい方が好きですか?』

ガツ!

指挟んだ、……血は出てないな、

『要望だぞ、それについては言わん、』

『じゃあ、スタイルがいい方と小柄なのだったら……』

『……お前は最後にしようか?作るの』

『ごめんなさい、出来るだけ早くお願いします』

『殿下お願いします。』

色の付いていない光が迫ってくる。近い、まあ、呼び方を聞いて気付いたと思うが、他の機構精霊達と比べるとズレた奴だ。もう大概の事には動揺しないぞ。そう覚悟してかんなを引く。

『殿下が私達に求める物を知りたいのです。力はアリスや向日葵、魔法ならアナスタシアやクロエ、……………ですが、殿下は両方とも卓越した實力をお持ちです。殿下が私達に求めるものとはなんですか？ご期待に添えるのか不安なのです。にやじつ……………何卒、』

ドン！カツ、カラカン……………

コケたわ、機構精霊の状態で噛むか、普通、噛む舌ないだろう。真面目な話で噛まないでください。材料が転がり落ちたし……………

「いや、……………俺にとって娘のようなものだ。居てくれるだけでも俺は幸せだ。まあ、作るのも好きだけど、」

俺が人形を作り始めたのは、心細かったり寂しかったからかもしれない。人間は一人では生きていけない。人は動物、人間は社会に生きる者だ。社会は一人では成り立たない。誰かとの関わりがあつてこそ成立する。俺はこの世界に來た時点で、社会の関わりを全て失つた。本来死んだらそれまでだが、この世界に來た。無一文、事前情報も無し、ホームレス（帰る家もない）、助けを求めたい、誰かに継り付きたい。そんな気持ちで芽生えるが、信用はできない。そんな時に信用できるものを作れる可能性が目に入った、……………頭痛はしたが、全力でそれに打ち込む事にした。それこそ継るように、一人で生きていこうと思えば行けたかもしれない、だが、それでは何も残らない。取り敢えず生きるだけになる。つまらないし、虚しい、どうせなら楽しく生きたいだろう？

「まあ、皆で暮らす家だし、頑張つて作らないとな、」

材料を台の上に乗せなおすと、作業を再開する。

《衝撃に備えてください。》

ん？そ、ぐほおおう！

シユーン！バン！……………パラパラ、

「ふぁー！お兄ちゃん捕まえたにや！……………ねえねえ、遊ぼうよ〜」

あーあ、材料が木っ端微塵、音が遅れて聞こえたぞ、クロシエツト、



木材だったものに手を合わせる。さらば梁よ、

「にやーあーにやにやにやにや？にやー♪」

放つとくといつもこうなる。気を引きたいのだと思う。俺の周りをぐるぐる回ったり、顔を覗き込んだりした後には、体を密着させてくる。スキンシップが激しい。胸な当たるとかほぼ当たり前のレベルで、顔とかに当たると凶器と化す。あれは質量と速度の相乗効果で首が折れると思った。俺の後ろで向日葵がクロシエツトを呼んだことで発生した事故だが、

「わかった、わかった、遊んでやるから離れろ。」

「ありがとうにや！だーい好き！」

更に強く抱きしめられる。なんか視線を感じる。4 + 精霊3。

「にやー……」

『『ジトー……』』

ちなみにスキンシップが多い順に並べると、

アナスタシア<向日葵>クロエ<アリス

クロシエツトとはこの中でもダントツが多い。アナスタシアは肩車やらいつの間にか手を握っていたり、アブナイやつだと俺を呼んでから見えるか見えないかぐらいのところまでスカートをたくし上げるとかな、

向日葵はシンプルに抱きついてくる。クロシエツトと同じだが、頼んだ事ができた時に頭を撫でて欲しい等、リクエストされる事が多い。

クロエはスキンシップ自体が少ないが、抱きつかれると長い。最短5分、長ければ二時間、たまになので答えてやりたいが、二時間は勘弁して、

アリスは口では強気で周りに色々言っているが、恥ずかしそうにしては袖に伸ばした手を引っ込めたりする姿を千里眼で何度となく見ている。なのでたまに頭を撫でたり、髪を梳いたりしてあげるのだが、その自慢話を半日できるらしく、藤白が生きる屍となって帰ってくる。

「ほら、こっちおいで、おやつ時間だ。」

人形を食べ物で釣る。異様の一言に尽きるが、これで丸く収まるので気にしない。ただ拠点を作るのはいいが、そうなつてくるとギルドの依頼のような不安定な収入より、定期的に、それで安定した収入が欲しいところだ。

「で、どつちが代表?」

ボロ雑巾のようになった二人に聞いてみましょう。二人共最後の力を振り絞るように手だけを動かしお互いを指す。そんなに嫌か、

「よし、じゃあジャンケンで決めよう」

年に一度の役割分担も最後の方はこれで決まる。長々と引つ張る事でもないし、スパツときめたらいい。………って、そのまますんのか?俺が審判なのね、

「最初はグー、ジャン………」

「ご主人殿大変です!」「マスター大変です!」

………うん、君らも足の下見てみ、大変な事になってるから、どうやら芦原さんの勝ちのようだな、止めさされてるけど、

「落ち着け、二人共同要件か?違うなら向日葵から頼む。」

「実は宿の前に、喉に傷がある子と左手が火傷だらけの子がいるんですけど、宿を出る時にじゃ………、むごお!」

「ええつと、………その二人を中心に人だけが出来てまして、何だろうと見ていたら、二人に暴行を加え始めたので、追いついたので………」

怪我などのせいか意思疎通が出来ず、どうすればいいか、という事だ。街の自警団に行くにしても説明が出来ないのは困る。こつちも無関係とは言えないし、まあ、何にしてもその子達の事情を知らなければならぬ。それより向日葵。一回邪魔って言いかけたよな?クロエが口抑えなかったら言っただと思うけど………少しの間だし、こつちの二人は放つといってもいいか、

「………ええつと、ここ宿の前だよな?」

「……………」

目を逸らすな、辺り一面が水浸し、焦げ跡だらけだし、焦げ臭いし

……代行者、犯人の特定は？

《完了しています》

じゃあ、証拠頼むぞ、あと背後も洗ってくれ、ここはこっちの正当性を固めないと、被害の賠償とか御免被る。金だつて配つてまわれるほど持つてる訳じゃないし、即金だと詰む。それと焦げ跡、痕跡に真理を使い、情報を一通り見たあと、二人から事情を聞こう。

「アナスタシア、頼みたい事がある」

「わかった。」

傷が原因なら口の動きは変わらない。読唇術を久しぶりに使うので確認を頼みたいのだ。読心なら心を読めるし、読唇術のようなくつかの技能はこの世界のスキルには反映されない。一部の生活魔法も同じだ。元はボランテイア関係で覚えたのだが、精神的要因で喋れないなら読むことが出来ない。殆が話す前に止まってしまったためだ。声が出ないだけならいいのだが……

お腹空いた……

そう思うのは何回目だろう？最後に食べ物をお口にしたのはいつだったか、朦朧とする意識の中、通り過ぎようとする人に駆け寄るが意識さえ向かない。声が出ればそう思ったが、喉に矢を受けて生きていくのだから、それ以上は高望みし過ぎだろうと、考えを切り替え、今日を生きる為に大通りに立って、物乞いをする。私は一人じゃない。そう思った矢先、何かにぶつかり転げる。起き上がる時、腹部に衝撃を受ける。感覚からいつて蹴られたのだろう。苦しい。駆け寄ってきた影を少しはつきりした意識でみると焼け爛れた手が目に入った。兄の手だ。衝撃はあるがさつき程ではない。兄が覆い被さる様に蹴りを私の代わりに受けているのだと遅れて理解した。泣きたくなつた。でも、泣いちゃ駄目だ。そう思った時、衝撃が止まった。限られた視界の中、周りを見回すと炎に包まれていた。そんな中ただ一人立っている少女の姿があった。

「これで、よしつと、」

その言葉の直後、バケツをひっくり返したような水の塊が直撃す

る。少女を含めて、

「いい訳ねえだろ！テメエマスターが泊まってる宿ごと焼き払う気か！」

水溜りから少女の頭を掴んで引っ張り上げる口調の荒い美女、そして、その手を引き剥がそうとする少女。

「い、痛いです……軋んで……」

「お前らか！俺らに火放った奴は！」

殴りかかってくる相手に美女は空いた手に何かを持ち向けて、やめる。理由は簡単、発砲音だ。その為、美女ことクロエが次に取った行動はシンプルだった。

ブン！

「がはっ！」

「ちよっ！」

向日葵で殴る。いや、蹴る？

「オラオラオラー！」

向日葵をブン回し、近づけない状態を作る。相手もこんな奴相手できるか！みたいな感じで逃げていく。

「よし、これでいいか、」

そこらへんに向日葵を放り投げる。

「……………グツ、……………ウプ、……………ぎぼじわるい」

「はあ……………、気乗りしねえけど。マスターに報告しねえとな、お前も来い。お前らはそこで待ってろ」

そう言う宿の中に少女の襟を掴んで宿の中に消えていった。それからしばらくすると旅商人のような格好をした男が出てきた。その後ろにはさつき見た少女達の姿もあった。出てきた時は呆れた表情をしていたが、一言三言やり取りをすると、こちらにきた。私と同じくらいの女の子を連れて、

「ヒール」

何かに包まれるような感覚の後、蹴られた痛みがきえていく。回復魔法をかけてもらったようだ。反射的にありがとう、つと言ったが、声はでない。だが、

「どういたしまして」

「お、その年でお礼が言えるのか、えらいな」

(え?わかるの?声出てないよ。)

「ん?.....ああ、アナスタシアは読心のスキルを持つてるから考え  
てる事なんかわかるんだよ。.....というか、回復魔法使って、礼  
言われたただけだろ。後ろ隠れるなよ。」

「むう.....」

「膨れるなよ。.....しっかし、この街比較的治安がいいはずなんだ  
けどなー」

「そつちも回復したけど、気を失ってるみたい。」

「そつか、心配だし地面に直に寝かしとくのもな、それに何があつた  
.....」

キョルルル.....

喋れなくても腹の虫は関係ないとばかりに空腹を訴える。恥ずか  
しい。

「.....お茶くらいは出すよ。聴かせてくれる?」

俯いて、静かに頷くしかなかった。

最初は食べる事に集中すると思つたので、その間に思考を整理す  
る。エドガーの治めるこの街は確かに治安はいい、貧富の差も少ない  
が、貧層はいる。全体から8%、しっかり雇用を確保できていると言  
えるだろうが、それが故に今回のような揉め事が起きた。調べてみた  
所、彼らに物を売らない店があつたり、給与を削っていたり、今みた  
いな暴行は稀だが、治安維持等の名目に引つ掛かるかどうかのギリギ  
リの嫌がらせを行っている者が多くいる。優越感に浸りたいだけ、劣  
等感を紛らわしたい、どちらにしろ、人間の社会的欲求やチンケな自  
尊心を満たしたいだけの身勝手な振る舞いだ。許されるべきではな  
い。ただ、誰もが聖人のような心を持つている訳でもないし、まして  
や自分が聖人だとも毛程も思っていない。

.....さて、お盆のお茶請けが二回無くなつたあたりで話を切り  
出す。子供の話なので要点をまとめるとこうだ、少し前まで家族で農  
業をやっていたそうだ、数日前に火が家屋を焼いたそうだ、その時、こ

の子は喉に矢を受けたそうだ（推測するに住んでた村、または集落がゴブリン等に襲われた）。ベッドに寝かせた兄の火傷はギリギリまで、瓦礫の下敷きになった母を助けようとして負ったものだ。父はゴブリン？を引き付けていたそうだ。そしてこの兄妹はこの街に助けを求めたが、戻る村はもうない。お金も持っている訳もなく、仕事も受けられない。その日その日物乞いをしながら生きていたそうだ。話を聞き終わる頃にはお盆はまた空になっていた。炊事場との往復を繰り返すアナスタシアの頭を撫でてやる。

「私も撫でて欲しいにやー」

空気を読まず膝を枕にするクロシエツト。適当に撫でる。どうすべきか思案する。

1 秘密裏に解決

2 エドガーに頼む

3 逃げる

3は土地買った今は無理、安定は2だな、ただあまり頼るのもあれだし、1で無理だった時に2に変更するプランにするか、そんな訳で下手人を召喚する。

「アリス、動きを封じろ。」

「わかりましたわー！」

暗い紫の茨が絡みつく。本来魔眼のような能力は見続ける必要があるため、瞬きの間に効果が解けてしまう。だがアリスは人形であるため瞬きは必要ない。あとは防音効果のある結界を部屋に展開すれば尋問に最適な空間の完成だ。

「さて、どう処理するかな？」

別にこいつらの事情だの聞く必要はない。まだ状況を理解できていないようで口を開くものはいない。ならば選ばせてやろう。

「二択だ、俺の言う通りの口実をして自首、もしくは俺のスキルの実験台になる。後者はいくら多くてもいいぞ」

「ふぎ……………」

「ケース1、寿命操作」

文句を言い切るより先に顔を掴み冒流を行使する。するとみるみ

るうちに髪は白くなり肌には皺やシミが浮かび、老人のような姿になる。周りの奴も逃げようとしたり、腰が抜かしたりしているが、防音と一緒にこいつらだけが外に出られない効果が付与されている。

「他は？自首するのは最悪一人でもいいけど？次は平均体温の書き換えに挑戦するか」

よし、うまくいった。自警団に引き渡してホッと一息、実際は寿命の書き換えなどしていない。見た目を偽装したのだ、ただ幻覚とは違う。実際に体が老いる。しかし、身体能力、寿命もそのまま、存在値の吸収ではなく、偽装、解除すれば元通り、引き渡す時は解除しておき、他の全員にも喋ったら（略）なので、あともしもの時の為にエドガーに頼んでおく。手土産にケーキを持って、

「……………」と、そんな訳だから、これとこれを届けて貰える。」

藤白と芦原さんに状況を説明、おつかいを頼む。ケーキ（手紙付き）だ。それと、

「……………」

怖がってしまった女の子の誤解を解くため、これから冒流を使った変装ショーからマジックやらをする予定。その後は材料の加工をするつもりだ。

家ができるまで

「ガアアアアア！」

ブン！

迫るオーガの拳に腕を添え、正面から受け止めずその軌道を逸らす、そこから前進、懐に飛び込み、双撞掌、勿論接触する際には冒流を使った存在値の吸収を行っている。刀を使えば簡単に勝てるのだが、刀をなしにしても勝てるか、ちよつとわからなかつたのと自分自身の格闘術のレベルアップとトレーニングを兼ねて行っている（それと魔石の収集）。…………おつと、たじろいて距離を取られるのはよろしくないな、相手の股下まで踏み込み、川掌、こうすると深く刺さるような突きが出せる。そこから腹を刺すように蹴り、そこを足場に、左足で顎を頭上にある顎を蹴り上げる。近い技のイメージとしては連環腿だが、バク転してまで蹴るものを連環腿とは呼ばないと思う（本来二段蹴り、振り子の容量で一度目に放つ蹴りを戻す勢いを利用して更に高い二発目の蹴りを放つ、通常頭部を狙う）。俺自身習ったことがあるのは居合だけだからな、八極拳は本を読んだり、某動画サイトの型やらを見たり、ゲームして覚えたからなー、使える技は少ない。その実、投げ技は居合の柔術に頼りきっている。蹴り技と言っても連環腿しか知らない。そもそも数が少ない。陸の船と形容されるほど動かない。敵の防御の上からでもダメージを通す大砲に例えられるその威力、それにはしつかりとした土台が必要なのだ。蹴り技の代わりに歩法が武器となる。かんたんに説明すると、

「ガアアアアアア！」

雄叫びを上げて、乱打を放ち突撃してくる。それを腕を回す動きで体の外側へと弾いていく。ゆつくり前に進み、

「グガ?!」

ここで梱鎖歩、相手の足に添えるように当て、体の内側から外側に押す。肘で胸部を攻撃し……………

「ガア？」

やっぱり見失ったか、本来はここから、鼻やら金的やら急所を攻撃



するのだが、体をホールド、そのままジャーマンスープレックス、俺には冒流があるのでしめ技やらフィニッシュホールドやらが絶大な威力になる。話を戻すと八極拳は半歩拳法とも呼ばれる。だが、相手との距離数センチで限界まで踏み込めば、一步で相手の背後や側面がとれる。意識外からの攻撃はダメーヅが大きくなる。現にオーガの意識は無いため、吸収がすぐ終わった(関係ないか)。さて、ステータスは、つと、

名前 北川 龍登

種族 #%5\* ; ■

パーソナルスキル 真理ノ瞳 万能結界 冒流

スキル 芸術10 指導8 鑑定5 武芸4 隠密1 雷撃魔法

5 火魔法5 水魔法2 土魔法3 錬金術1 人形作成10 義

体・義肢作成10 頑丈5 剛力2 体力自動回復3 魔力自動回復

2

耐性 炎熱無効 低温耐性7 雷撃・突風耐性6 衝撃耐性7 闇

魔法耐性5 聖光魔法攻撃耐性6 精神攻撃耐性6 毒耐性2 麻

痺耐性2 衰弱耐性4

称号 爆死 稀代の人形師 害虫ハンター

剣術7 体術8 棒術3 格闘術4 斧2

格闘術が少し上がったか、それとオーガからの剛力、腕力を強化するスキルだ。頑丈も同系で防御を強化する。周りを見ればオーガと一対一で戦っているのが目に入る。邪魔されたり逃げられたりしないように一定の範囲に結界をはってある。藤白はきつそうだな、相手のオーガも大分ボロボロだが、藤白の消耗が激しい。あと何回武器を振れるか、最初は良かったが、後半空振りが目立ったからな、芦原さんはそこらへんは大丈夫そうだが、どうも筋肉に阻まれて、斬撃が通らない。浅い傷をたくさん付けているが、決定打に欠けるようで長期戦になりそうだ。……………そう思っていると、

「じつと、せんかい！アース！」

その直後オーガの足元の地面が窪む。体制が崩れて倒れた所へ頭部に刀を突き立てる。

「またか、一番になかなかなれそうにないな」

そんな事を言いながらこつちに來る芦原さん、それは無理、クロシエットは一瞬だったし、向日葵やクロエも一撃で敵に風穴を開けている。アリスは相手の動きを封じて止めを刺している。俺はアリスより少し早い程度、刀を使えば早くなると思うが、クロシエットに勝つのは無理、アナスタシアは……もう片付いてるな、

「制御が難しい。」

アナスタシアが使ったのは魔法だ。昨日聖光魔法を進化させておいたのだ。その名も星輝魔法、

アナスタシア オートマタ

機構精霊 雪解けのエーデルワイス

パーソナルスキル 救恤 奇跡ノ使徒

スキル 星輝魔法5 精霊魔法10 自動修復3 読心7 家事

8 扇7

耐性 毒・酸無効

称号 生きた人形 良妻賢母? 舞姫

……読心レベル上がってる。精霊魔法は進化先がないので据え置きなのだが、舞姫ってなんぞ?

《一定時間舞い続けた女性に送られる称号です。広域に影響を与える魔法や儀式を強化します》

一定時間とは?

《24時間以上です》

うん、無理、同じ動きをサイクルするにしてもキツイわ、飯とか食えないじゃん、おっと、忘れてた、

星輝魔法 キュア

ライト

フラッシュ

ヒール

デイスペル

サンクチュアリ

ジャッチ

バイタルキュア

ロストリバーサル

シューティングスター

レーザー

「聖属性の魔法は種類が多い、そして魔法なのだが最近代行者に聞いて新たなことがわかった。それは位階の存在だ、なんでも一から五まであるらしく、火魔法や風魔法は第二位階に属し、第三位階は俺が持つてる雷撃魔法、聖光魔法、その上第四位階はクロシエットの雷光魔法と、進化させた星輝魔法だ。オーガを倒すのに使われたのはレーザーだ、オーガの体に複数の小さな穴が空いている。ついでに、バイタルキュア、ロストリバーサル、シューティングスターこの三つの効果は？」

《バイタルキュアは精神攻撃で受けたダメージを回復し、ロストリバーサルは欠損や失われた機能や感覚を再生し、シューティングスターは聖属性の魔力の塊を落とします。》

いや凄いな、雷光魔法は？

雷光魔法 ウインド

ライトニング

チャージ

ボルテクス

コンダクター

《ボルテクスは体に電気を纏い、コンダクターは電気の通り道を作る魔法です》

ふーん、使い方次第かな、それと魔法系のスキルを進化させるとレベルが半減するが、これはポイントを使った訳では無い。必要になるポイントが倍になるのだ。第一位階の魔法はスキルは不要で、生活魔法、黒魔法、白魔法、光魔法、影魔法、刻印魔法、そして、結界がここに含まれる。ちなみに錬金術や死霊術は第三位階。万能結界も効果は違えど第四位階にある。さて、

「そろそろ終わらせろよ、火魔法で焼いたらどうだ？」

ちなみにこの言葉は悪手である。ちゃんと自分で判断する能力を

身につけてもらわないと困る。オーガは炎熱耐性がある。ただ耐性なので俺のように効かない訳ではない。要するにオーガが決死の突撃をせざるを得なくなる。こういう危機は経験して覚える方が身に付く。当然後で講義もする。そして言葉に従い火魔法を使う藤白を見ながらどうすればより身に付くか思案する。……ギリギリで助けて講義できっちり絞るか、

「……………で、って、こんな時間か、そろそろ帰るか」

「あの……本当に大丈夫なんでしょうか？」

「ああ、ただ戦う分には大丈夫だろう。本格的に強さを身につけるにはまだ全然足りてないけどな。」

地力はほぼ完成しているが、経験、技術、精神面は不安しかない。狡猾、老獪な敵には対処法を仕込めていない。手っ取り早いのは圧倒的な力と技量の差を身に付けてもらうことだが、それこそ十年単位でやらなきゃ無理、芦原さんは応用力、経験は文句無しだが、我流故に、技術には偏りが見られる。精神面は実際窮地に立ってもらわないとわからない。……今の内に済ませとくか？

「よし、藤白、今更だが股割りするぞ、みんな手を貸してくれ、」

一ヶ月は地獄を見るが、柔軟性、可動域が拡がり、怪我をしにくくなる。損は無い、ただ暫く戦ったり出来無くなるが、筋力もつけとかないと、体の柔軟性だけではゴブリンから逃げることもできない。出会った頃はそのくらい地力低かった。

「初めは手伝うから、継続してやれよ。芦原さんもどうです？」

「え、遠慮しとくわ」

「あだだだだだ！」

大体の限界を調べ、引く、次にさっきの限界より少しだけ押す感じになるようにゆっくり押す。一分くらいかけて、無理やりやると筋肉が縮んで更に硬くなる。ゆっくり時間をかけてやるのがコツ、  
「いーったい！痛い！いだだだだ！」

慣れない内はどれだけ少しでも痛い。一人でやる方法も教えておく。

宿に戻ると二人共寝てた。例え怪我を回復したとしても衰弱で

失った体力まで回復できない。それに夜遅い、丁度いい。

「アナスタシア、ロストリバーサルを使ってみてくれないか？」

ウィルとキリエにかけてどのくらいの効果があるのか検証することにした。昨日の兄妹だ。

「わかった。ロストリバーサル」

首の傷が消えていった。腕の火傷も痛ましかったものが普通の手に戻っていく。が手首のあたりで止まる。

「……………しっばい、ロストリバーサル」

やっぱり上位の魔法は難しいみたいだな。手首から先の回復が再開される。後は目が覚めた時におかしなところがないかさり気なく聞か。前に位階について聞いた時に、一般的には第二が普通、第三は国で秘匿される程、第四なんかは英雄達の聖女達の領域で第五は存在するか否かも不明とされている。と代行者が言っていた。しかし、存在する事は確からしい。冒読と真理を併用して使ってみた所、第五位階は存在している（冒読で進化させるスキルを選び、真理で進化先を調べる）。しかし魔法は進化させるごとにレベルが上がりにくくなる。第三で二倍になった物が第四で四倍、第五位階になれば八倍、もしかしたらまだ上がある可能性も否定できない。

やっぱり朝は眠いわー、アナスタシアに負担が集中している事をあらためて認識した日から朝食を交代制にしたのだが、そのサイクルは俺とアナスタシアだけ、残りのメンバーは料理が壊滅的だった。俺なんてスキル無いけど料理できてる。味は普通だけど、あと少しすると料理のスキルが習得できそう。……………あまりアナスタシアの負担軽減になっていないのが実情だ。

「主様、どうか私達をお導き下さい」

ん？どこの宗教だ？朝っぱらから布教活動か？あつちは選挙カーとかがうるさかったがこっちは宗教関係か、……………うんざりしてくる。と、おもむろに塩を取ろうと振り返った時に、手を胸の前で合わせるように組み、祈るような姿勢で膝をついている兄妹が目に入った。……………えー、どゆこと？あれか？決まった時間に祈りを捧げる系のやつですか？聖地の方角に、だとしても共有の調理スペースの

さつきまでキャベツの芯（片付けた）が落ちてた床に膝ついてやるかねー。しかも、俺の真後ろ、それはそうと、こんな声だったのか、

「傷の方は問題ないのか？」

「はい！この通り喋れるようになりました。」

「風が当たただけでも痛かった腕が元通りになりました。」

そうか……おっと、同情なんてなんの足しにもならないよな、

「二人はこれからどうする？行く宛がないならうちに来ないか？」

……家は作ってる最中だが、これからも人数が増えると思うし、食事や洗濯で手が足りないんだ、衣食住は保証するよ。」

こんな事、元の世界で言えば誘拐犯だと思うが、はじめに合った段階で代行者に血縁者、引き取り手を探すように頼んだが、候補は三件、うち二件は経済的に無理、もう一件も似たようなものだ。孤児院も調べたが、この街には無いし、近くの街を見るとかなりギリギリか、名前だけで機能してないか、それにこっちも手が足りてないので、手伝って欲しいのは本音。俺が勝手に決めるのもあれだが、助けた人が不幸になるのは気分がよろしくない。十才に満たない子供なら尚更だ。なのでその三件と近くの孤児院の情報を紙に纏めて渡しておいた。答えは明日で構わない。出来上がった朝食を運んでもらう。勿論俺も運ぶ。食事をしながら色々考える。安定収入、どんな手があるだろう。経済的な破綻から救う方法の一つとしては物流関係、物と金を回せば、デフレとインフレのバランスがとれる。手段に関しては万能結界と千里眼で、もう一つは、エドガーの娘に作ったような人形を売る。義手や義足を売るのも悪くない。一応それ用の金属も買い込んでいる。後は短期的な方法は腐るほど思い付くが、5年の猶予が縮みそうなのもあるので、そこら辺はよく考える必要がある。今日は街の外に出てちゃんと組み立てられるか、加工した材木をチェックする。それが終わったら藤白のトレーニングだ。

## バウンティハンター

「カンチョー!」

「痛っ!.....またウィルか、」

ケツを突かれる藤白、そのまま芦原さんの背後に行き、

「カンチョー!」

「あだっ!.....またお前かこのクソガキイ!」

ゲンコツが頭の上に振り下ろされる。飽きないねー、二人の体力が回復してからはいつもこんな感じだ。芦原さんにカンチョーする度胸のある子だ。年相応の部分が見られるのは周りに馴染んだ証拠だと思ふ半面、

「おはよう。今日も元気そうだな」

「おはようございます。今日を生きられる喜びを噛み締め、日々励んで行く所存であります。」

.....俺への態度だけが仰々しい。カンチョーしてこいとまで言わんけど、もつと年相応の反応が欲しい。.....膝ついて拜むな!

「そんなにかしこまらなくていい、それより今日は軽く訓練だ。藤白打ってこい。何だったら二人でもいいぞ。俺は素手だ。」

「あの、武器持ってもいいので加減してください。」

「おう、今日こそ勝つで、」

やっぱり連携されると時間が掛かるな。伸びてる二人を尻目に休憩する。

「お前も何か教えようか?.....といっても教えられるほど身につけてるのは居合とあと二つぐらいなんだが、」

「居合は剣のことですよ?残り二つはどういうものなのでしょう?」

「一つは殺傷力の高い格闘術、もう一つは武器を用いた非殺傷の制圧、無力化に長ける棒術だな、まあ、どっちも使い手次第だがな、」

加減すれば殺傷力が高かろうと無力化する事は可能だし、棒でも達人が本気で頭を打てば人を殺せる。達人でなくとも手なんかを打たれば骨が折れることがある。俺が教えるのは戦い方、どう使うかは

習った者次第だ。

《調査が終了しました。報告します。》

該当するのがあったか。調べてもらったのは短期的な金策。高額  
の賞金が出る大会、賞金首、魔物討伐、それらを効率化し、最も多く  
稼ぐ方法を探してもらっていた。結果、

- 1 放火魔の捕獲
- 2 魔物討伐二件
- 3 隣町の格闘技大会
- 4 オートマタ、ゴーレムの大会（三部門）
- 5 魔物討伐三件と報告

となった。他にもあるがこれが効率がいいらしい。そう言われた  
この計画なのだが関所を通らず一周して戻ってくる一泊二日プラン  
だ。これで総額お幾ら万円？

《円に換算致しますと、約四千万相当になります。》

おうふ……………正直引いたわ。内訳は？

オートマタ、ゴーレムの大会優勝（一部門一千万）

格闘技大会（五百万）

魔物討伐等（総額三百円相当）

放火魔（二百万）

おいおいおい！大会総なめにする前提かよ！大丈夫なのか？

《三十分後に出発します。》

あーもう、わかったよ。出場する人選は？

《クロエ、アリス、クロシエツトがいいかと、格闘技大会については自  
分で参加してください。》

えー、投げやりなんですけどー、何で競うの？大会のルールは？

《それについては道中説明します》

そんな訳で放火犯を逮捕し、魔物を討伐をした。現在、隣町の前ま  
できてしまった。わかった事は武器魔法禁止、目潰し金的禁止。殺傷  
禁止（当たり前）、降参するかどちらかが動けなくなるまで勝負をする  
場所はボクシングやプロレスのリングみたいな所だ。格好に関して



は特になし、グローブを付けてる選手もいる。いつもの黒いコートは邪魔なのでクロエに預けようとしたところでアリスが間に入る。

「お預かりします。」

「あ、ああ、」

「……………」

漏れとる！漏れとる！赤黒い煙みたいなのが！

「おまえらも出るか？」

「そやな、お前さんに当たらんかったら勝てるやろ、決勝で会おうや、」  
「僕もどのくらい強くなったか知りたいですし、北川さん以外の人も戦っておきたいですしね」

ふーん、そっか、がんばれよ、……………俺？今バンテージ巻いてます。  
そこら辺で買いましたが何か？

さて……………二試合終わりました。そんな訳で伸びてる対戦者に一言、

「お前ら運ないな。」

一試合目

北川 v s 藤白

二試合目

北川 v s 芦原

もうね、全然負ける気しなかったわ。いつもの訓練と同じ感じ、と言ってもまだ二試合残っている。気を緩めるのはどうかと思う。そんな訳で支釣込足で投げる。足払いに見えなくもないだろうが、釣り手と引き手でバランスを崩し、踝に当てた足を支点に回転させるよう投げる。柔道の技の威力を決めるのは本人の受け身と地面の硬さである。リングの床ってめっちゃ固いのよ。そんな訳で、大外刈り、背負投げて倒した。掴まれた時は合気道で投げたりもしたが、なにより藤白や芦原さんより弱いのだ、残すは決勝戦。

二メートルの大男、クリフ、幼い頃にボクシングを教わり、喧嘩では負け無し、大会に出場してからも常勝無敗。慣れた手つきでグローブをはめ、打ち合わせる。会場に入れば割れんばかりの歓声が上がリ、四方八方から自分の名前を呼ぶ声が圧力となって届く。リングに

は軽装で手足にバンテージを巻いた男がいるだけ、

「ボコボコにされる前に棄権したらどうだ？」

笑いが止まらない、一発殴っただけでも終わるだろう。

「お前は来る場所を間違えてる。相手もな、ボクシングについて誰も教えてくれなかったのか？」

「ほう、よくわかったな、何がわかってないって？」

「……………もういい、授業料はお前の敗北ってどこか？」

『行けー！クリフ』『ひねり潰せ！』

品性の欠片もない言葉が飛び交う中、両耳に指を突っ込みながら相手を観察する。正面に構えられた拳、細かいステップ、典型的なボクサーだ。重量の差を勘案すると正面から撃ち合えば必敗、当たり前だ。ボクサーと正面からぶつかって勝てるのはボクサーぐらいなのだ。ただ、

「その強さはスポーツと殴り合いに限定されるけどな。」

「……………ぐうあ、」

取り敢えず下半身への蹴り、ボクシングは上半身正面、または側面を有効とするポイント制の拳のみで戦うスポーツだ。拳を避ける動作も小さなステップで最小限、避けられないし、攻撃されることを想定されていない。動きが鈍れば戦いやすくなる。すかさず撃ち抜くように腹パンチ、体重を乗せた重いやつだ。前屈みになったところに首を両手で抑えて顔面に膝、スポーツでは、肘や膝を攻撃で使わない。下手すりゃ死ぬからだ。これが俺が使う武術の特徴。殺傷力の高い格闘術、ムエタイだ。よくボクサーはキックボクサー（ムエタイ選手も含む）に勝てないと言われているが、絶対とは言わないが、現代のボクシングではまず勝てない。正面からの殴り合い、これに持ち込めば勝つ確率は格段に上がる。だが、

「まだ立ってるか」

鼻血が出てるな。唇も少し切れてるな、足にもダメージが出てるな、ステップにさつきまでの軽快さがない。……………捨て身で突っ込んでくるか、

「それでは勝てないぞ。」

正面からは受けない側面に避ける。すれ違いざまに回転を加えた肘での一撃を後頭部に叩き込む。駆け引きが大事なんだよな、だがここでも不利な要素があるのよ、ボクシングの攻撃は拳の殴打。打点は二箇所、対してムエタイは両手両足、加えて両肘両膝。八箇所から攻撃が来る可能性があるにも関わらず両手だけで有利に進めるのはかなり厳しい。そしてボクシングは正面から殴り合うポイント制の競技だ。後ろからの攻撃は反則とされていいる為に、攻撃を受けることが無い。必然的に死角になり対処は難しい。その上ボクシングのパンチは早い、正面に集中するため意識外からの攻撃となり、ダメージも増える。意識は朦朧としているはずだ。ムエタイの攻撃はエゲツないのだ、後頭部は後遺症が残る可能性があるためスポーツではまず攻撃しない。まあ、軍事武術なら普通に攻撃するんだが………しかしまだ立つか、ただもうサンドバッグ状態だな、立つのがやっつとだろう。できるなら倒れてほしい所だ。クリンチか、それ最大級の悪手だぞ。抑えられる寸前に抑えて膝を腹に叩き込む。唯一の攻撃手段を捨てているのだ。こうなる。そして一番の敗因だが、

「この試合のルールはボクシングより総合格闘技寄りたがらな」

頭を押さえ込み、腰のあたりを掴み、そのまま地面に頭を叩きつけるパイルドライバー（プロレス技）。何もムエタイだけで挑む必要もない。見た目の派手さに反して威力はないけどな、加減しないとこんな状態だと死にかねないし、指導受けたことがある武術は三つしかないが使うだけなら見たことのある技で原理や意味を理解できれば使える。要求される筋力や胆力が水準を超えているかどうかも大事な要素だが、

一方的な試合だったな、きっちり賞金も受け取り、オートマタ、ゴレムの大会こと、シャシカドルコンテストに参加するため受付に来ていた。頭のシャシカは街の名前だ。

「そう言えば俺のコートは？」

「こちらにー」

「ありがとな、………あと仲良く、」

クロエとアリスが引つ張りあっているコートを掴むと二人も流石

に手を離す。何してんだ、

「大会参加の方ですか？こちらにお名前と住所、出場する人形の種類と名前を記入してください。」

オートマタとゴーレムの欄があるのでオートマタの方にマルをす。そこからは代行者に任せる。さて部門だが、バトル、パワー（重量上げなもの）、最後にビジュアルの三つで一部門一体まででエントリーする。これはルールなので仕方ない。ただまあ、

「周りのオートマタがデカくないか？ゴーレムもだけど、」

《通常競う部門に特化した人形を作るためでしょう。パワー、バトルに出場するタイプです。》

……………え？勝てんのコレ？立つたら何メートルだよこいつ、踏み潰されたら終わるぞこれ。

《直立した場合、50メートルを超えます》

千里眼と真理の併用で調べてみたところパワーだな、うん、戦闘できないぞこいつ、立ち上がる、足元の物を持ち上げるしか出来ないみたいだし、立てるんこれ？バランス制御とか付いてないけど、……………もしかしたら楽勝？

そんな訳で見守る事にした。参加者用の席があるのでそこに座る。あ……………ヤベエ、誰がどの部門に出るか確認してない。とか思っていたらバトル部門から始まった。待機しているのを見るとやはりデカい、流石に50メートルだとかではないが、それでも5メートル程のものが多い。小さいものでも3メートルはある。大丈夫……………、あ、問題ないわ、一際小さな人影、クロシエツトだ。一応暴食で喰うのは禁止だと伝えてあるが、スピードはヤバくなったときだけ一瞬使っていいと言っている。そんなクロシエツトの初戦の相手はゴルドー子爵が収納してた戦車の足短めローラー付きの感じだった。

「応援よろしくにゃ」

この会場（屋外どころか街の外だが）にはマイクっぽいものが設置されている。意気込みを聞かれたクロシエツトそう答えた。俺は舞台には上がらないつもりだ。目立つし、自分の事は隠せるに越したことはない。相手側は嫌味っぽいことを言ってるけどクロシエツトは聞い

てない。猫のように両手をついて腰を引くように伸びをして、今度は立って人のように背伸びをしたり、軽く跳ねてみたり、……いろいろヤバイ、何がってクロシエツトはショートパンツと薄いシャツという露出の多さと体のラインがはつきり出る恰好なのだ（動きやすさ重視）。クロエと同じくらいの胸は床の間で潰されたり、無防備に強調されたり、弾んだりしている。

「おい、聞いているのか！」

「にやあに？」

全然聞いてないよ。俺も含めてだけど、まだ喋ろうとしたのでマイクを隔離してやった。時間を無駄にするな。あとそれ以上いらんことを言うとかクロエとかに射殺されるぞ。殺気だけがどこからともなく赤黒い霧に乗ってくる。マイクは司会兼審判の横のマイク立てに刺す。そんなことは知ってか知らずか、別のところから予備のマイクを出し、進行する司会。

「さあ、皆さんお待ちせ致しました。これよりシヤシカドルコンテストを開会します！司会進行を務めるリイラです。どうぞよろしくお願い致します。では………」

という感じでルール説明に入っていく。と言っても降参するか、行動不能かだが、

「それでは、バトルスタート！」

司会の合図とともに砲撃を打ってきた。だがすでに後ろだ。少なくともこの速度があれば負けはない。しかし攻撃の面では喰う以外では決定打に欠く。さてどうする？………ってそれは、

「てっざんこうにゃー、」

見た感じただの体当たりだが、スピード乗せなので吹っ飛んだ。クロシエツトに見せたとしても多分一回しか見せたことはないはずだが、相手が体制を整えたところに足の近くに接近して掴んで背負投げ、そこからのジャイアントスイング、無駄の無い連続攻撃だ。放おり投げると追撃に双撞掌のような技を出し、最後に踵落として砲身をへし折り、正面からの冲捶（拳種を拳に変えた川掌）、拳が装甲を突き破っている。一方的だったな、

「まだ遊びたいにや………」

若干不機嫌だが勝負はついた、そんな感じでスクラップを量産しながら無傷で優勝した。

## バウンティハンター 続

しばらくしてパワーの選手が入ってきた。どいつもこいつもでかい、真理を使つて構造なんかを覗くと、土ぼっかりはゴーレム（魔力を込めてある）、オートマタは燃料やらER流体が入っている。あつ、クロエだ。とここで予想外のことが起きた。運び込まれてきたのは複数のレンガのようなもの、

「これはまずいな」

「何がですか？」

藤白……もう復活したのか。芦原さんは……あつちで酒飲んでるな。クロシェットは袋（武器）から出したホルルのケーキにフオークを突き刺したまま、こつちを見て首を傾げていた。一つの物を持ち上げるならおそらく勝てるだか複数のものとなると、女性のか細い腕と、巨大な機械の腕では持ち上げられる量に差が出る。

「すみません。意気込みの方向つてもよろしいでしょうか？」

「えっ?!だだだ大丈夫れふ!」

うん、全然大丈夫じゃないね。

まあこの中で人と同じサイズのクロエは珍しいだろう。ただここにいる奴らなら質量とか問わずに蹴散らせると思うよ。クロエなら、そんなこんなでパワー部門が始まる。レンガを掬い上げるさまは重機を思わせる。ゴリゴリとか、ガダガタとか音がする。が次の瞬間轟音が響く。簡単に言うとはバランスを崩してオートマタが倒れた。それに続くように次々と倒れ、地響きをさせるゴーレムなんかは当たられた衝撃で粉々だ。立つと持ち上げるしかないのだ避ける選択は無い。ロボットの大会なんかではよくあることだが、本番で機械が動かない。コースが微妙に違ふとか、当日に問題が発生するなんてザラだ、まあ、これは教師になる前の経験だが、……しかしこの世界本当に滅亡に向かっているのだろうか？クロエの周りは瓦礫が降り積もり所々燃えているところもあり、この景色が世紀末じゃね?と思つた。まあ、クロエは動けるので避難もできる。残骸の雨が振り終わる

頃にはクロエを除くと残り二体になっていた。クロエはその中でレンガを地道に積み上げていた。あつ崩れた。

「チツ」

あれ？なんか舌打ちが聞こえたような、

「邪魔なんだよ、さつさと棄権しろよ。」

「帰れよオラ、潰されてえのか？」

「どうせビジュアルと間違えたんだろ、馬鹿な主人だな」

ぷちっ

あれ？クロエさん？なんか殺気が立ち込めてるんですけど？握られていたレンガが砕かれる。

「おい！何するつもりだ、あいつを止めろ！」

「放つとけ、何もできないだろ。」

クロエは残った二体のうちの一体に近付いていく。妨害は無しだよ。……………え？まさか、とか思ってる内にクロエはその巨体の足元に着いた。そして、持ち上げた。会場は一瞬にして静まりかえる。なんか揉めるかもしれないと思ったが、あつさりクロエの優勝だった。……………」

「おつかれ、よく諦めずに最後まで頑張ったな」

戻ってきたクロエの頭を撫でる。嬉しそう。

「クロシエは？クロシエは？」

「ああ、えらいえらい」

頭に手を置くと耳がペタンとする。さて、今度はビジュアルだ。他の出場者を見るとこれは負けないと思う。ゴーレムは完全に土の塊。フィギュアといたら聞こえはいいが、どつかの砂像を作る祭りを思わせる。移動もできない、なので台車がガラガラ行き交う音がする。うるせえ、オートマタはそもそもの造形に失敗している。……………負ける要素ないな。

《精神攻撃を確認しました。無効化します》

おう、頼む。やっぱり露骨な不正か。まあ無効化するだけにしておくが。予め頼んでおいて正解だった。審査員に作用するのが主体の物だ。そんな訳で特に予想外のことも無くアリスの優勝で幕を閉じ



た。

「ご主人様！ワタクシの晴れ姿見て頂けましたよね！」

黒っぽい色のドレスを纏うアリス、綺麗だ。艶やかと言ったほうがいいかな？周りはアレだったが、大会では一際輝きを放っていた。たが今こつちに向かつてきているのは親に目一杯褒めてほしい愛娘それ、受け止めて褒めるのが親の義務だろう。

「ああ、よく頑張ったな」

離れてその場で一回転してアピール、吸い込まれるように見入ってしまう。普段から美人なのだが、スーツなんかで身を固めると如何にもできる女の雰囲気が出そうなのだが、中身は言動共にかなり残念な感じ。戦闘は問題ないがそれ以外はあまり任せられない（脳筋）。頑張りは伝わってくるが空回りしている、もつと肩の力を抜けばいいはずなのだが、そんなこんなで宿に着く。

「おかえりなさいませ。ご主人殿！」

部屋に入ると向日葵が飛びついてきた。暫く顔を埋めたあと、フスンと鼻を鳴らしこつちを見上げエヘへと笑っている。宿の奥から和ロリの上から特注割烹着を着るアナスタシアが見える。調理の際は基本的にこの割烹着を着る。と言うかアナスタシアはいつの間にか服が増えているのだが、お金のカラクリがわからない。

「おつかい、行ってきた。」

「おう、ご苦労様」

この二人には食材よ買い出しと色々必要になりそうな物を頼んでおいたのだ。まあ主な目的は向日葵に付き添いをしてもらうことだが、そんな訳で買ったものをチェックして、美味しいご飯を食べて寝る。

実は……………

後日依頼をこなしてエドガーが治めるアスメシアに戻ってきた。オークの集落の調査（殲滅）とか道すがら依頼をこなしてまとめて報酬を受け取る。あとはそこに、格闘技大会の賞金と放火魔の懸賞金を含めて藤白に渡す。団体の運用資金として、一千万相当の金貨を渡す。コンテストで得た金はあの子達の頑張りで得た物だ。それを渡すのは良くないと思う。同じ金といえ金だが同じ金だし文句無いだろ。

「困ったことがあったらエドガーか、俺に相談しろよ。金はエドガーを介して渡すから、」

「は、はい」

「じゃ」

さつさと森に出発する。

「えー！もうちよつと何か……………これからどうしましょう」

「まあ、何とかなるやろ」

諦めに似た感情を抱きながらも、拠点となる場所を目指し足を進める。

征輝傀儡楼、その名を知るものは数える程しかない。そんな中この組織の最年長たる老人の記憶で二回目の全員招集の会議、円卓を囲む向かいの五人、ここにいる老人含めて六人がこの組織の中心人物である。

「二応今回の議題について教えてくれ、連絡で聞いておるが、おぬしの口から直接聞きたい。」

議題はコンテストに当日参加し、三部門全てで優勝した者のことだ。

「北の花園……………、製作者名じゃろうな、聞いたことのあるものは？」

反応を見る限り知るものはいないと見ていいだろう。話を続ける。

「バトルは猫獣人と思える姿をしていたが、毛が緑じゃ。対戦したオートマタやゴーレムを武装無しで瓦礫にな」

人型の物はほぼ戦闘に使われない。人型よりも多脚型の方が重い

武装も付けられるし、相手が大きい場合、人形で勝てるのはスピードのみ、馬力など言うまでもない。人に車が衝突するのと同じだ。馬力が出せない分を武装、火力で補うのが普通。しかし、武装無しでどうやって、そんな疑問が老人の周りからどよめきとなって上がるが、結論はほぼ出ている。ちなみに猫獣人の種族の中には白、茶、黒、金の毛の色を持つものはいても緑はいない。

「……………素手じゃよ、一度の攻撃も受けず優勝しおった、ビジュアルに出た人形の性能は分らんが、一番問題なのはパワーの部門じゃが……………」

「他の出場者の50メートル級のオートマタを持ち上げたよ、」

彼らにとつてこのコンテストは資金源でもあるが、最も一番の目的は有力な人材を集めることにある。コンテストに参加するにあたって三ヶ月前に資金が渡される。もう作っているもので参加する者は含まれないが、この資金の返済を枷に優秀な技士を彼らを手足とする。そして貴族側には、このコンテストに参加する事で権威を示せる等アピールし、競わせ、ありとあらゆる手で搾取する。この手足には優秀でない技士を使い、失敗したり、こつちの情報が漏れそうになれば切る。そしてそうやって作られたオートマタやゴーレムを戦争中の国に戦力として貸し付け、国の中枢に潜り込み、内側から思い通りになるよう変えていく。失敗しても金は請求できるし、弱みも握れる。少しずつ削り、国力が弱くなったところで手を差し伸べてもいい、だが資金を貸してもいない。それに腕が立つと言ってもそこそこのいいのだ。強過ぎると味方に引き入れれば心強い反面、目立つし、何より止められる者がいない場合がどうにもならない。

「やはり【世紀の人形師】か【稀代の人形師】の称号を持つものが現れたのでしょうか？」

「……………生きた人形、か」

この2つの称号を持つもの以外作れないとされる人形だ。と言っても【世紀の人形師】でも三体作れば一体と言う所だ。そしてこの称号には特徴がある。

「世紀の人形師は、百年に一度現れるものです。ですが……………」

「ここで言葉に詰まる女、そこに男の声が続く、  
「……………千年に一度の稀代の人形師、その可能性があると？」」

稀代の人形師が作る人形には必ず生きた人形の称号を得る。作つたものは成長しない。だが生きた人形は成長する。視界の隅で下卑た思考を働かせてる若造（この中では若い）を無視し、話を進める。「今回集まったのはこの者に対する対応をどうするか、じゃな、迂闊に手を出せばその手容易く斬れる故にな、」

利害の一致を計れるか、それとも敵対するか、接触についてを決める。それにあたって先行する者が出ないように釘を刺しておく。

「……………ふむ、とは言っても、接触はできんのじゃがの、」  
「……………それは？」

「関所を通つたという報告もないにも関わらず、もう街にはいないようじゃ、賞金はきつちり受け取っておるしな、」

「引き伸ばせなかったのか？」

「出来たらしておる。そこにおつた責任者……………主催者をわしが支持を回すより早く言い包めて、街の宿で宿泊し、門兵に発見される事なく姿を消しおる。移動手段も分からん、」

考え込む呻き声が支配する中、お茶が運ばれてくる。そのお茶を飲み落ち着き取り戻し会議を進めるも具体案は出ず、不干涉、現時点で言う保留に留まった。しかし、この会議が見られていたことは彼らは知らない。

征輝傀儡楼か、こつちに来た奴が立ち上げた団体、ギルドに注意を払っていたが、こつちの元からの組織や現住民の団体にも調査が必要そう。代行者に聞いたところ、疑っていた裏が取れた。パワー部門の参加者の物が大きいのは、貴族には権威、それ以外にはそのほうが有利だと吹聴しているようだ。スクラップなんかも処理費を払えば処理して貰えるそう。……………きつちり資源として再利用するみたいだな、

「そろそろつくぞ」

「はい」

「わかりました」

そんな訳で森に着いたのだが……………

「なんでこんなにアンデッド系の魔物が多いのかなー？」

半透明な人型の物にアイアンクロウをきめながらボソツ、と呟いてみる。……………これ？ゴーストで実体はないらしいが、なんか触れる。

《考えられる要因が複数あるので明確な理由はわかりかねます。可能性としては次の通りです。》

一、冒涇

二、存在値

三、神聖

へー……………としか言いようないな、何はともあれ掴めてる訳だし。冒涇で吸収する。周りを見ればクロシエツトが掃除機の如く実体のないゴーストを吸い込んでいる。暴食の能力だろう。

「すうー……………おっとと、もったいにやい、もったいにやい」

口元を抑え、悪戯な表情で無邪気に微笑む。明らかに人型の何かを吸い込んだ後でなければ惹き込まれていただろう。現在の状態はちよつと引き気味くらいだ。横に視線を動かせば舞ながらライトやフラッシュを使ってアンデッドを引き付け誘導するアナスタシアが目に入る。試す機会が無かったので実験に付き合っ貰ったのだ。

「アイシールドーム」

クロエが魔法で作った氷で囲むと、その縁にアリスが着地。黒ノ時の実験である。

「開け！」

氷で仕切られた空間の中心に歪みが生じ、次の瞬間に爆発、氷を穿つ、中に誘い込まれたアンデッドは足首ぐらいしか残ってない。きつちり球状に削り取られている。逆に球に当たる部分以外は何の効果もない。これは強力だが、使いどころが難しそうだな。最大効果を狙いに行くなら、準備が必要になりそうだし、避けられたら悲惨だ。ちなみに向日葵は非実体の物は強欲で捏ねくり回して、実体のあるアンデッドは拳で風穴を空ける。ただそれでは行動不能にならないので、続けざまに二〜四発打って上半身を丸ごと吹き飛ばしている。速度

はあまり無いが威力が……そう言えばさっきの触れられる可能性で思い出したが、こいつらに神聖使えばよくない？ 発動つと、………皮膚の内側から削られるような焼かれるようなピリピリ痛い。ただ得も言われぬ違和感のような喪失感のようなものがしたので効果を直ぐに解除する。

「「「なんかピリツと来た」」にや」

「?何」

アナスタシアだけが無反応。いや、この場合は……

「わっ……びつくりしました……」

「もう、いきなり大きな声出さないでよ。」

連れてきていた兄妹、ウイルとキリエこの二人も反応無し、周りに目を向けると、アンデッドは壊滅している。スゲー威力。

《北川 龍登は祓魔師になりました。》

あー、はいはい、アンデッド関係かな？ただそれよりさっきのピリッと感はこっちにも干渉しているという事だ。他の四名も同様アナスタシアだけが効果なし、俺とこの四名とアナスタシアの違いは悪魔系のスキルしかない。

《正解です。》

……お前、ほんと聞かないと答えないよな。どうでもいい眩きでも答える癖に、……あれ？悪魔？こっちが原因かも、……どうでもいいや、戦い始めてからしてた体のだるさもないし先を急ぐか、《先程までの精神汚染が原因かと、なお現在は神聖により、浄化されました》

そこ詳しく、五体ぐらいしか倒してない筈だけど。

《生きているゴブリン等とは異なり、アンデッドは死者がこの世に未練、後悔等の強い負の感情を持っている為かと》

それも吸収するから気分が悪くなるのか。選んだりは？

《無理です》

あんまり冒流を使わない方向でいくか、時間をかければ浄化はできるか？

《可能です》

じゃあ、その方向でお願いします。神聖は詳しい事がわかるまでは一旦保留、周りのが片付いたので目的地に足を進める。

暫く歩くと森が開けて湖が見えてくる。周りのみんなには霧で見えないかも知れないが、俺には真理や千里眼があるので霧や夜の闇くらいなら問題にならない。……まあ、俺は知ってるから驚かないけど、

「あれ？あの建物は？」

「ああ、あれが俺等の新しい拠点だ。」

……………ですよね。ポカーンってなるよね。

「い、今から作るのでは?！」

「完成してるのは外装だけだ、内装は俺が作る。」

「説明、求む。」

「わーい、いい匂いがするにやー」

「えーと、あれ?……ワタクシには難しくて理解が……」

兄妹は反応できずポカーン状態。向日葵はいつも通りの笑顔だな。

この家は代行者が万能結界、千里眼を使って作った物だ。要するに、

基本設計・建築 代行者

デザイン・内装・材木の加工 俺

代行者は俺が寝てる間も動くらしい。スキルは脳(体)ではなく、存在(魂)の中にあるため体の状態に関係なく動けるそうだ。輸送は隔離を使えば一瞬、作って放り込めば現場に届く。微調整もやりやすい。

「とりあえず、寛げる部屋だけ完成させるから。晩御飯を頼むわ。」

「何がいい?」

《ウサギの肉がよろしいかと》

……………それ言う?いやまだ隔離してあるけども。生きてるから!肉とか言わない!あの状態見た後だと食うのが忍びねよ。その上俺の隔離空間内だし、どれを選ぶとか罪悪感しかないのだが……………、解体もわからんし。お前の提案の軽さは冷蔵庫の余り物食

べる？って聞くオカン並みだし、……………いや、問題の先送り良くない。ウサギの肉とか食ったことないし。何のために捕まえたとか考えると……………、

「……………一人はウサギの解体とかした事ある？」

「はい、お任せください」

……………どうしよう。乗り気だ。

何匹か隔離から引っ張り出し、どれか選んでもらう。こんな時の自分のヘタレさや責任逃れはあっち現代人として仕方ないかも知れないが、大人として最低である。……………子供にみせる成ってはいけない大人の見本みたいな物だ。人やゴブは何の躊躇いもなく斬れるのに、そんな俺の自責の念を気にした様子も無く生贄が決まった。内装作りが手に付かない上の空のまま食事の時間を迎えた。

「どうぞ、自信作。」

……………忍びねー、何から何まで子供に任せ（調理は無理なのでアナスタシア尚更）、ウサギだったものは調理され、皿の上に野菜やタレに和えられ、細かく刻ま……………食べやすい一口サイズに、鼻腔を擦る香ばしい香りに目を閉じ、選ばれていたウサギの姿が、……………アカン思考がどんどん引っ張られる……………

頭でわかつてはいるが、スーパーで売ってる肉だって元は生物を殺し、その死体を斬り刻み、単価に従いその命に値段を付け、それが食卓に並んでいる。俺は肉は好きな方だ。だがそれを殺す時を見た者は数少ないだろう。

動物は人間より死に敏感だ。

保健所の犬や猫は預けられてから10日で処分される。処分する為の部屋は決まっている。一日一日部屋を横に移動していき、10分間の窒息死へ進んでいく。途中で掬い上げられる命もあるが、全体から見れば極僅かだ。その部屋に付くまでの段階、いや、保健所に連れてこられた段階から、普段は聞いたこともない声を上げる。言葉はわからない。だがそれは紛うこと無き死に対する恐怖だ。諦めるものや、死に怯えるもの、様々だろう。だが、ここで10日経てば、あるのは死だ。犬や猫自身にはどうしようもない。人の身勝手が諸悪の



根源と言えるだろう。それは保健所に限った話ではない。飲食店の食品廃棄物は約1700万tに及ぶ、世界の食糧援助量の約二倍の量が日本で廃棄されているというデータもある。この量には一体どれだけの命が含まれているやら。肉が全体のどのくらいなのかは知らんが、かなりの量になるだろう。これらが食糧支援に回されていれば何人助かるだろうか。そう考える人も少なくない筈だ。

……人間、追い詰められると妙に頭が回るものだな。ここで食べなければ、このウサギの命は文字通り無駄になる。感謝と供養の意味を込めて責任を持って食べよう。………最も後日、ウサギを森に放ったが、

《嘘ですね?》

喧しい。お前に言われると尚更だ。自分を騙して生きる。みんなやってる事だ。自覚の有無はあるが、俺にさつき述べた大層な理由などない。ウサギに罪も恨みも無い。かわいい小動物だから殺したくない。そんなところだ。まあ、本当に仕方なくなれば躊躇いなく生きる為に殺すだろう。それこそ自分のエゴだが、何処か忘れたがシー Shepard だったか、あれよりはマシだと思う。イルカは頭がいいから食べてはいけない、みたいな事を言っていたが、それは頭の悪い、イルカ以外の今まで食べられている牛や豚等を食えと言うことか?では聞いてみよう、

イルカより牛や豚の方が頭が良ければお前達はイルカを食うのか?  
?

もし人より頭のいい動物がいたらお前等はそいつに大人しく食われるということか?

どうせこつちが納得できる回答は期待できないのでどうでもいいが、一万年の牧畜の歴史の中で育て、殺し、積み上げられ、食い散らかして来た死体に「お前達は頭が悪いから食われたんだ」とでも言うのか?そこまで愚かではないぞ、俺は、

狩猟ならもつと前から始まっているし、………まあ、どこまで突き詰めても同じ人間である限り五十歩百歩のような気もする、不毛だ。最後に化けて出ませんようにとウィル君が持ってきたウサギの毛皮に

手を合わせてから寢床に着いた。南無。

## 団体さん

「朝です。ご主人殿。」

「ん……………ああ、向日葵か。」

体を起こして周りを見れば、壁紙が途中まで貼られているのが目に付く。なんやかんやあまり進まなかった。無論美味しく無駄無いくたできました。わかっているも出来ない事や納得できない事は多くある。……………わかっているつもりかも知れない。今日はある程度内装を作ってから、自分のスキルとも向き合ってみよう。

湖の前に立ち、ステータスつと、

名前 北川 龍登

種族 #%5\* ; ▪

パーソナルスキル 真理ノ瞳 万能結界 冒涇

スキル 芸術10 指導8 武芸5 隠密1 雷撃魔法6 火魔

法5 水魔法2 土魔法3 錬金術1 人形作成10 義体・義肢作

成10 頑丈5 剛力2 体力自動回復3 魔力自動回復2

耐性 炎熱無効 低温耐性7 雷撃・突風耐性6 衝撃耐性7 闇

魔法耐性5 聖光魔法攻撃耐性6 精神攻撃耐性7 毒耐性2 麻

痺耐性2 衰弱耐性4

称号 爆死 稀代の人形師 害虫ハンター

剣術7 体術8 棒術3 格闘術5 斧2

……………着実に上がる精神攻撃耐性、あと鑑定は冒涇で平等に分けた。俺は真理があるからいらぬし、余りは雷撃魔法につこつんで6になった。最近のことから行くか。昨日の祓魔師を取得して思ったが職業（ジョブ）をどうやって確認するのか。

《種族の欄に触れてください》

このバグってるの？これも気になるけど今は職業の確認。目の前に見える半透明な文字に触れる。……………大丈夫かな、えいつ、

種族 #%5\* ; ▪ ヒト あ? ※

職業 ø@?▽☒?& 教師 ∞∟才?▽θ LEGEND O

FHERESY WHO GRAB ALL THE STAR

S 人形師 祓魔師

……………止めて、俺のHPもメンタルもゼロだ。いや、HPは微動だにしてないが、精神の方はちよつとゲージが動いた。膝から崩れ落ちたもんorz

……………さて、お巫山戯はこのくらいにして、内容を確認していろいろと思うが、この文字化けなのかどうかも判断出来ない得体の知れないが増えた。読めるのは『オ』ぐらいだ。読めたら読めたで英語だし、職業じゃないだろこれ、まずはこっちから、

LEGEND OF HERESY

レジェンドは伝説だが、もう片方は邪道とかゆう意味があったような……………代行者これどうゆう意味？

《異端の伝説です。》

なんスツかそれ、

《元は邪道と生きる伝説のジョブだったのですが、死亡した際、生きる伝説は伝説となり、邪道と引き寄せ合い今のスキルになっています》  
滅茶苦茶や、もう一個も？

《元はREACH FOR THE STARSだったのですが、死亡した際にWHO GRAB ALL THE STARSに進化しました。》

星までの距離が全ての星を掴む者になったと、どちらも死んだ事が原因のようだな。文字化けもか？

《一部読めるものは元のスキルは、芸術家だったようですが、それ以上の事は分かりません》

そうか、じゃあ効果については？

《効果につきましては次の通りです》

∅ @? ▽ □? &

風魔法系統の魔力消費を0にする。

聖魔法適正、闇魔法適正を極限まで高める。

教師

指導、指揮が伝わりやすくなる。

∞ ∟オ? ▽θ

制作品の完成度補正 極大

印象操作補正 大

LEGEND OF HERESY

英雄の覇気を纏える。

魔王の覇気が纏える。

WHO GRAB ALL THE STARS

成長率、スキル習得率補正 大

スキル、職業取得制限解除

人形師

人形の完成度が上がる。

祓魔師

アンデッド等に与えるダメージが上がる。

……：oh、化物ですやん、ライトニングとか消費なしだった訳ね。壊れてるわ、英語のやつもエグい。成長促進と制限解除とか、……：現状使い道が無いのはLEGEND OF HERESYと祓魔師ぐらいだ。アンデッドは森から一掃したし、覇気とか分からんし、

《森に人が侵入しました》

え？今？まだ、種族が3つある事とか問い質したいんだけど、……：おっと、それで侵入者と言うのは？

《三つの団体です。それぞれ違う方位から進んでいます。このまま直進すると湖に出ます》

この森は周囲に山もなく、あるとしても小高い丘ぐらい。少し離れた所には街と言うより村といった方がしっくりくる開拓地が点在している。……：何故か森から距離を取っているが、その為森に入る場合、何処かで目撃できる。で？その団体さんは？

《映像、共有します》

ふむふむ一つは人の子供ばかり、栄養不足だろうか何人か衰弱が見られる。二つ、真理で確認したところ、エルフ、ドワーフ、様々な獣人の団体、見た目で判断し難いがこちらも子供だと思う。さっきの子供達より多い。あと傷などが目立つ者がちらほら、三つ、汚いおっさん選り取り見取り、話してる内容を読唇術で読むと、エルフ等の団体

を追ってきたのだろう。奴隷とか、楽しむだの知能の低い単語が並んでいる。ゴテゴテの成金デブも目に付く、荷車やら何やら……代行者さん、こんな怪しいの森を進路にしてる段階から教えて、この辺り開けてるからわかるでしょ？

《了解しました》

わかってているんだかないんだか……、湖の方まで来られたら家がバレる。十中八九緑な事にならない。汚物はきつちり森の肥料にするとしても、もう二つの団体さんはどうするか、間違いない話し合う必要がある。だとすると……、うーん、

傷付いた彼らの前に突如人影が現れた。害意が無いのが余計に反応が遅れた原因だが、片方は白い服（ナース姿）の子供、もう片方は袋を引き摺っている緑の猫獣人。

「取り敢えずヒール」

「甘い物あげるにゃ」

駆けつけ一杯の掛け声に似た言い方をして、アナスタシアは全体にヒールをかける。クロシエツトは次々に袋から食べ物を出す。

「後でマスターに状況を報告したい。誰か説明できる代表の人を決めて、貰える?」

もう一方では食糧を携帯し、子供たちの前に次々と配っていく。

「わっ、私の方はもう無いです〜!」

「ワタクシの方はまだありますわ。こちらに、」

「好きなものを取って行ってね。仲良く分けてよ。」

全員を隔離を使って送り、その様子を見て大丈夫そうだと確認すると、もたれていた木の影から獣道に出る。正面からガチャガチャと金属のぶつかったような音が聞こえる。

「生まれ! 貴様何者だ!」

無視して直進、早足に切り替える。それに遅れて剣を抜き放ち、何人かが迫ってくる。

「アース」

彼らの足元、地面を陥没させる。さてここから実験だ。

「スーパークーリングウォーター」

空からバケツをひっくり返したような勢いで水が地面の陥没を埋めるように叩きつけられ、凍り始める。スーパーをアンダーに変えても同じだと思うが、うまくいった。白い氷に覆われた中身を真理で確認する。今使ったのは元の世界でいうところの過冷却水をイメージして水魔法を使った。本来ここまでカチカチにならない（生き物ごとは）と思うが、その辺りは魔法のイメージできっちり凍るようイメージした。アイシクルでなくとも氷も使える。ただ根幹の水を出す部分は変えられないようだ。氷その物を出そうとしても発動しなかったからな、恐らく上の呪文程、自由度や特化性が上がるみたいだ。「二応、目的を聞いとこうか？」

氷の塊の横をすり抜け、刀に手を掛け、一步一步前に進む。だがその足取りは早足にしか見えないが、先頭がたじろぐぐらいの距離に入る、……あつ、こいつ鼻のホクロから毛生えてる。

スバツ！

上半身と下半身の境目を一閃、切断する。

「ふう、……念じるだけでも発動するな、」

血は一滴も落ちてない。代わりに残された下半身の断面から煙が上がっている。火魔法を刀に付与出来るか、エンチャントブレイズと念じたのだが効果は抜群、バターを切るように軽い手応えだった。……ただ独特の油の臭いがするのがちよつと、それに刀の方もベトベトだな、複数相手取る時は使わない方がいいな、刀を隔離して、細剣を出す。手近な奴二人の喉を素早く突き、後方に下がる。

「ウインドアシスト」

唱えたほうが効果が高いので唱える。これは、風で動きを補助する魔法で30秒程度だが身のこなしが少し早くなる。その短い効果時間をいっぱいまで使って敵陣を駆け抜ける。防御のない箇所から動脈に切れ込みを入れたり、肋骨の隙間を通し、心臓を一突きしたり、残りは魔法で殲滅、結界で周囲を覆っているので逃がす心配もない。もちろん音もカットする仕様。途中で掴んだ荷物を移動の勢いそのまま放ると、それに剣を突き付ける。

「質問1、ここに来た目的を答えろ」

燃えている荷車等を一瞥した後、質問を投げる。

「ば、化け……………」

逃げるな、結界で覆っているから逃げられんけど、足を切る。……………しかしこの剣切れ味や強度が凄いな。こんな細身でも、あの短い足を切り落とせるとは、普通突き特化の軽さ重視の剣なら切断出来ないし、折れるぞ、流石は異世界の武器。

「奴隷商だろ？この時期に食い扶持に困って捨てられる子供とかがここに捨てられるのを攫いに来てる。……………他にもこの辺りに追い込んでみたいだけだな。」

調べてわかったが、少し前に獣人の村落が攻撃され逃げ延びた、いや、逃された子供達（女性もいたようだが不明）か、ドワーフは隣国（ゴールドー子爵の領地）から流れてきた色々規制などが緩んだタイミングで出てきたみたいだな、最後はこいつに追われて長い距離を移動してきたエルフ四人、……………アレだな、今回の保護した団体全員揃えたら、40人のクラスが出来るぞ、あまり気乗りしないが開いた左手で顔を掴む。

「……………やっぱ、ジヨブは無理か」

これは冒険でも奪えないようだ。同じく称号も、……………要らんけども、実験だ。対象は奴隷商と（称号）人攫いを対象にした。こつちも忙しいので存在値にしてから抜け殻を火に焼べる、結界を張り、それに入って小枝を薙ぎ払いながら、アナスタシアとクロシエツトの方を目指す。

「マスター……………」

「あつ！お兄ちゃんにや！」

アナスタシア……………何故涙目、人見知りがキツ過ぎないか？そして安定の飛び付き×2、アナスタシアは駆け寄るように、クロシエツトは全力のダイブ、後ろに倒れそうになったので回転して衝撃を受け流し、堪えた。

「おお……………ははは、よく頑張った。偉いぞ、」

一旦二人を降ろして、周りに意識を向け直す。

「追っかけて来てたのは追い払ったけど君達はどうする？一応俺はこ



の先の湖の方に家を作って住んでるんだけど、……………あつ、代表はどれかな？」

マズツ、話す順間違えた、  
「わっ、私です。」

ふうー、大丈夫そうだな、代表とか聞いちゃったし、事情を聞く前に話しちゃったし、言い回し一つでもしつかりしないとイケないのに……………はい、反省終了、エルフ（十才前後）の最年長と思われる少女が前に出て来てからは聞き役に徹する。と言つても俺の説明と大差はない話に時折相槌を打ちながら静かに聞くだけだが、

そんな訳で内装を急ピッチで作っていく後からでも出来るところは放置して住める状態にする。それと同時に工房スペースも完成させておく。当然一日でできる訳が無いのでテント（布と生えてる木）を張つて、過ごしてもらった。万能結界もそれを覆うようにかけておいたが……………結果、ここ数日は寝てない。というか寝れない。半分朦朧とした意識の中、手に持った物に糸のように細い金属を縫う様に一本一本付けていく。

「はあ……………」

根詰めても仕方ない。一つため息を吐いて、凝り固まった部位を伸ばし、目頭を押さえる。何してるかと言われれば、人形作り、ただ、その中で俺が一番苦勞する作業、本来は適当に束ねたものを付けるのだが、より人に近付けるため、植毛みたいになちまちなちま……………、つむじや生え際には結構拘った。が、今植えてるのは目の前の棒状の物、前、クロシエツトで経験したが尻尾だ。ただ今回の毛は長くフサフサとした印象を受ける。が、それが三本、周りに完成品があり、尚且つ一本が中途半端なものがあることが、腕の疲労感を増加させる。魔力で動くというかミシンの傍らには椅子に少女が穏やかに眠っているよう見えるが、頭の上には柔らかそうな狐を思わせる耳が付いている。……………俺自身何を血迷ったか、九尾のような人形を作ろうと計画したのだ。止めようと思えば止められたが、一度思いついてしまったものはどうにならなかつた、何より妥協はしたくないし、するつもりも無い。

『…………お休みになってください。もし、私の体を作って…………』  
「大丈夫だ、問題ない、……………今日は一応休むつもりだ。ノルン」  
温かい色合いの茶色の光を放つランタン、その中の支配する琥珀、  
ノルン、作ると決めてからは予てから決めていた名前で読んでいる。  
とにかく作っている分を完成させ、床に就く。

## ノルン

……さて、今日まで頭を悩ませてきた問題に当たるとしよう。食糧だ。森の外からでもテキストウに隔離して持ってきたのを殺ればいいのだが、もしもの時の自給自足の方法が少ない。ウサギは勘弁してください。元からいたアンデットは食える訳がないし、あたりを調べても毒草の割合が高い。研究は捗るが腹は膨れない。そんな訳で、森の一角を木を根ごとを引き抜き土を起こし、畑にする。木は向日葵に抜いてもらい、こつちで隔離しておいた。ついでに家の周りも抜いて貰った。家に当たりそうになったのはあれだが……種は芦原さんの所からと街からの苗やらを買ってある（隔離を介してメモ帳と金を渡し、藤白にそれを買ってもらった）ので、それを使って軽く体験授業と行くか、

覚えてる限りの知識を教えたが不安だな、適した土、又は適した土地の作り方やアルカリ性と酸性のそれぞれに適した作物や、その土の見分け方、それと二毛作やら二期作（米は芦原さんから）、ノーフォーク農法等をまとめて紙に書いて見せたりしたが、所詮知っている限り、農業は専門外だし素人だ、リトマス試験紙なんかも無いので朝顔を使うつもり

だ。ヘブンリーブルーに近い品種があれば理想的だろう。効果が  
あるかは分からないがマリーゴールドのようなハーブ（虫除け）を植  
えるのも忘れない。と言ってもこれらは、今すぐ食糧にできる訳では  
……

《可能です》

……えっ？今なんと？

《一部の植物は明日には収穫可能です》

……何故？理由を伺っても？

《職業の中に特殊な権能を持つものがあるためかと、他にもこの近く  
にいる際に英雄の覇気を出せばより良い実りとなります》

それでいいのか……英雄の覇気、権能ってどんなのかわかる？一  
部とか言ってたし、……あつ、覇気出しとこつと、

《畑の作物の対象は米、麦、トウモロコシ、ジャガイモ、リンゴです》  
ん？ちよい待ち……………リンゴの苗が有ったのか？ヤバ、  
バキバキ!!

「キヤー、何?!」

「木が……………」

「見て！あれ！リンゴじゃない？」

……………な、

「なんじやこりやああー！（心の底からの叫び）」

対象はブドウ、リンゴ、サクランボ、ヤシ、米、麦、トウモロコシ、  
芋、リュウゼツラン……………根菜、果物、穀物等までも、最後のリュ  
ウゼツランでなんとなくわかったが、これは酒に関係した作物が対象  
なのではないか？現に大豆等酒にするには適さない豆類は全く成長  
してない。どの職業の権能なのか知る必要がある。この世界のシス  
テムは何かとおかしい。その際たるものが権能やパツシブで何かに  
働きかけるスキルの副産物、それに今度は職業まで……………

《∞∟オ？ソθの権能です。》

ソが追加で読めるようになったか、なんで知らんけど、食糧事情  
はある程度回復した。何せ主食となる物の成長が一日で行われてい  
る。……………シミレーシヨンゲームでもこうは行かないと思うぞ。土  
地大丈夫か？駄目だよなコレ、早速色んな農法が使えない現実に突き  
当たる。

《肥料を定期的に与えれば、安定した生産量が確保できます》

肥料って、そんなんで……………

《魔物の死体等を肥料にすれば、魔力を直接根から吸収し、即効性と成  
長や実りに必要な養分を確保できます。》

あー、はいはい、魔力ですな、現実問題俺の知ってる肥料で足りる  
気がしない。濃すぎるかと根腐りするけど、そのくらい与えても養分  
が足りないだろうし、ここは謎の魔力パワーに頑張ってもらおうしか  
無さそう。なので、森に放置してあるアンデット（肉体有り討伐済み）  
を隔離して木の根本に出す。するとりんごの根の下にゆっくりと穴  
が空き、そこに吸い込まれていき、最後には地面の下へ消えていった。

穴はもう無い、

「俺はあれがリングの木だとは断じて認めない。

というかこれ、近付く子供も危なくないか？いつの間にか誰かいな  
いとか冗談抜きで勘弁だぜ、

《それについては問題有りません。生物には反応しません》

絶対か？絶対だな？よし、食糧を確保し、家に戻る。これで暫く持  
つだろう。さてと、なんやかんや結構な日数が経ったが、何とか今日、  
完成しそうだ。ノルンの体が、複数の尻尾をきっちり繋げて、完成だ。  
「ノルン、完成したよ。」

『これが………思ったより小さい？これがお父様の理想とする姿？』

『それはまあ、この体に入ってみればわかると思うよ、』

『うーん………わかったよ！』

ランタンを開けると茶色の光が人形の体に吸い込まれていく(今回は  
は服を先に着せている)。あとはいつものように、能力を付与する。  
今回は

ノルン オートマタ

機構精霊 支配する琥珀

パーソナルスキル 怠惰 支配ノ使徒

スキル 火魔法3 時空間魔法5 月光魔法3 陰陽術1 自

動修復4 変幻自在1 無限回廊1 読心1

耐性 毒・酸無効

称号 生きた人形

………読心がある。1だけど、あとは魔法と特殊なスキルのオ  
ンパレード。月光魔法は目に使った月光獣の魔石、刻印を隙間なく描  
き、効果を強めてある。正面には時計に見える部分を向けてある。反  
対の目には霊碑結晶を埋めてある。これは魔石ではないが、陰陽術を  
使う上では大切になるそう使ってみた。習得もしたが、残りは  
………

怠惰 内訳

夢幻泡影 精神世界に干渉出来る。魔力の上限が取り払われ、動き  
をある程度止めると魔力の回復速度が上がるが、動くとも魔力が減少す

る。空間魔法を習得する。

罪源 美德系、天使系スキル保有者に攻撃が当たるようになる。

支配ノ使徒 内訳

幽閉スル支配者 無限回廊を習得し、回廊に收容した。生物のスキルやステータスを自分の物として引き出し、使うことができる。

永遠ヲ司ドル者 時間魔法を習得する。

当たり前の様に持っていた大罪系と俺が与えるブツ壊れ使徒系スキル、その中の時間魔法と空間魔法が合わさって、時空間魔法になったようだ。ちなみに第四位階に当るものだ、黒ノ時と同じだ。……まあ、少し想定外もあったが目当ての魔法も使えるようだ。

時空間魔法 ショートカット

クローゼット

クイツク

ムーブ

スロウ

ポイント

ストツプ

ゲート

「よし、早速で悪いけどゲートって魔法を使ってくれないか？」

「やってみます。……お父様、この魔法はどうやら行き先をポイントで登録しないといけないようです。」

うくん、最初からうまくは行かないか、ゲートは転移系の空間魔法だ、複数の人や物を短時間で移動させる事ができる。が、ポイントで指定した場所にしか行けないようで、指定するためにも街に行かなくてはならないようだ。仕方ないので家の一室にポイントを使ってもらい、実験する。森や別の部屋から移動できるか、実験は上手く行った。後は明日街に出発しようと思う。

保護した子供達に仲良くするように言い含めておくと、傍らにあった鞆を背負い、家を出る。

「じゃあ、頼めるか？」

「……………う、うん、」

「が、頑張りますう……………」

「任せるにやー」

……………ホント大丈夫かな?と言ってもこっちの方もなー、

「私達がご主人殿を守りましょう!おー!」

「ワタクシ一人で十分ですわ。」

「なにおー!もしもの時の為に私がいるんですよ!」

「二人共、マスターの前ですよ。」

微笑むクロエから二人に飛ぶ殺気。俺を避けるように赤いモヤが移動しているが、真理のある俺には見える。完全に裏から掌握してないか?クロエさん。しゃきつとする二人を見て視線を横にやるとノルンがいる。

「早く行きましょう。お父様」

「こら、引つ張るな、勝手にど……………つか、」

「ぜえー……………はあー……………ぜえー……………」

え?マジで?五歩よ、五歩、元気一杯の女の子が、それこそ久しぶりに運動したオツサンのように息が上がっている。顔色も良くないな(人形なのに)、

《魔力切れに近い状態になってます》

早っ!これでは近接戦闘は無理だろ、武器というより移動手段を作ったほうがいいな、

「お、お父様……………」

「動くな、じつとしてろ、今度移動用の乗り物を作ってやるから……………今はこれで我慢してくれ、」

ノルンを抱き上げる。いわゆるお姫様抱っこ、

「あー!あー!」

「……………先越された」

「ずるいですわ!ワタクシも!」

「あーもうほら、早く行くぞ。」

「あつ、待ってください。……………これ、おわっあー!」

盛大にコケるクロエ、宙を舞うバスケット、まずバスケットをキヤツチ、それからクロエを受け止める。……………と行きかけたんだ

が、ノルンを抱えた状態では無理。

「ストップ、ショートカット」

クロエを止めて、バスケットに飛びつくノルン、仕方ないので受け止められるように移動する。……………というか、回復早、

「……………あれ?……………マ、マママママスター! えっ!? なんで?!」

「ショートカット、はい」

クロエの前に出てバスケットを手渡すと、クロエを押し退け間を作ると、

「ん……………ショートカット、」

元の状態(お姫様抱っこ)に戻る。魔法の無駄使いじゃね? まあ、自分で動くとしてもない勢いで魔力が減るので仕方ないと言えば仕方ないか、回復ペースも早いようだが、

「「ブー……………」」

「「ジトーー(ΦωΦ) ……………」」

『『ヒソヒソ……………』』

……………視線が痛いッス。

「ほ、ほら行くぞ、」

「ああー! こちらをお持ちに」

バスケットをノルンに抱えさせ、結界で覆い出発する。移動中は魔法関係(国庫)の本を閲覧したり、貰ったバスケットの食事を楽しんだり、ノルンのスキルの確認をした。



そんなこんなで

おおー……左手が痛い、今後の事を考えて読んだ本の要点を纏めて写本を作ったのだが、俺自身も本を読みたかったので書き写しは代行者に任せたのだが、アイツ手が空いてるのをいい事に両手を使いやがった。聞き手の概念が無いらしく字も乱れなく写せているが、俺は右手でしか書けない。左手で字を書く機会なんぞ反対の手を骨折等しない限り無いと思う。当然その動きに対応する筋がズタズタ、写本は進んだが……、完成した本は隔離で家の本棚に飛ばす。子供達には読むのは自由だが、汚さないようにと伝えてある。内容は難しいかもしれないがそれで無理だと決め付けて取り上げるのはただのゴダ。勿論事故に繋がるような危険な事やは止めさせるが、その危険を把握する為にも知識がいる。魔法なんて元の世界には無かったものだしな、俺自身の為にも魔法の知識は必要になる。損にはならない筈だ。

「次の本を……お願いします。」

「おう、次は何がいい、水と土しかないけど」

「土でお願い致します。」

写せているのは聖、火、土、水だけ、時間や空間属性はそれに関する本すら見つけられていない。……もうそろそろ着くな、

「渡して置くけど読むのは後にしとけよ、ポイントも頼むな」

「はい、承りました」

後は……色々顔出して回るか。その後、実際に移動してしっかりと確認しないと。長距離になると何があるか分からんし、

「あ、……北川さん」

「元気がないな、どうした？」

「いや……平和な日々が終わりを告げるような……」

「ほう、お前には世間の付き合い方や本音と建前を教えてなかったな。

……口で言ってもなかなか憶えないし、コレも体に叩き込むか？」

「すいませんでした！」

実戦形式の訓練や武術の指南もそうだが、口で最初に説明や注意を

してもフェイントやら罠に簡単に引っ掛かる。それが同じ動作でもだ。応用も効かないのでそれこそ絡め手に劇弱、ちよつとした小細工くらいは力で捻じ伏せられるくらいにはなつて欲しいが、時間が無い。5年なんてあつという間だろう。

「はあ、ないない言つてても仕方ないし……、ノルン、ここにもポイントを頼む。それと芦原さんは？」

「多分ギルドの方ですね。」

「わかった」

「おう………あんたか」

あんたもか………同じ表情だな、藤白と、

「で、そつちはどうですか？」

「まあ、ぼちぼちやな、渡つてきた送られてきた言うもんはまだ来とらんけど、周りの冒険者？………まあその中で色んな話を聞いたりとかは出来てるで、」

まあ、俺らと同じ異世界人の接触はなしと、こつちは仕方ないな、あまり日も経つてないし、でも情報収集が出来る状態になっていることは僥倖だろう。

「それは良かったです。………それと二人にはこれを、」

「え？これって、」

「ケータイやな、使えるんか？」

見てくれ通り、携帯電話を渡す。最もこの三人の間でしか使えないが、今の所、それとケータイの番号を書いた紙も渡しておく。

「本物とは違つて魔法で通話する。使つてる間は魔力も消費するけど、魔力の妨害や遮断される環境以外なら何処でも繋がる筈だ、」

まあ、通じない時は紙を隔離して送りつけなければいいんだけどね。もし、情報伝達の方法を聞かれたときの為の言い訳用だな、匣やフェイクが目的だが、藤白達から連絡するための物の物でもある。………傍受は出来るが干渉は防ぐ仕様で作つてある。さてと、今度はエドガーの所に行くか、土産はケーキだ。そして例の如く応接間まであっさり通される。

「紹介して頂いた土地は静かでも良いところでした。」

…………アンデットいたけどな、

「いえいえ、とんでもない。こちらは色々世話になりっぱなしで、エリーの事は感謝してもしきれませんよ。私達にとって、命の恩人ですからね。」

うーん、……………何か引つ掛かるな。嘘無し、思う気持ちも本物が、蓋を開ければアンデットの大集合、……………代行者、エドガーの周辺にどっかの勢力のスパイ的な奴が混ざってないか？もしくは森限定で情報の流れを操作してる奴とか、

《今回の件には関係ありませんが、諜報員は一人確認できました。森については周囲の開拓地から口数減らしの為に、子供がそこにおいて行かれています。開拓地同士は黙認しあっています。》

……………なんか、とぼつちりですいません。情報が来てない事が原因か？ただ黙認という単語から言って、この領内では犯罪等として扱われるのだろうか。良心の呵責？何もしなければそれは無いのと同じだ。エドガーに俺が知っている限りの情報を話す。スパイについては後で使えそうなので黙つとく。

「ノルン、家まで頼むな、」

「わかりました」

一瞬にして、部屋に戻ってくる。便利だなー、俺も覚えようかな、空間魔法。どっちにしろ存在値を集めないといけないが、

「晩御飯、できた……………」

「わっ、私も一緒に作りました……………」

「とつても、美味しいにゃ、お兄ちゃんも一緒に食べるにゃー！」

あの、これ何肉？……………いや、わかるけど、高級な部類には入るけども、時期はどっちかと言えば秋から冬に掛けての間だね。もう直ぐ夏みたいなんだけど、

「……………熊の手か、これ？」

まあ、これ見たら他の部位何処に行ったとか疑問が尽きないんだけど、これが食卓に並んだ理由はなんとなくわかる。昨日、子供達に危険を及ぼす生き物をあらかた狩つといてくれと、クロエに頼んだと思う。……………思うけど、それがまさかその日の食卓に並ぶとはね。

《頭部は破碎された為使われておりません。それ以外についてはすべて使用されております》

ヘッドシヨットか……………、哀悼の意を込めて手を合わせる。ただ熊の手、臭かった。臭い消しに必要なワイン等が無かったから仕方ないか、それと表情から察するにこれを作ったのはクロエだ。……………さて、どうしたものか、

意外と食えたー、(はい、せーの)熊の手ー、……………珍味なので、人を選ぶと思います。私？暫くはいいです。まあ、猿の脳みそとかは即ごめんなさいしちやいそうだけどね(確信を持って言える)。……………こんな感じで何でも食わされるのは堪らないのでその辺りは、やっぱり伝えておいた。今日は魔法に関する授業だ。……………完全に写しに沿った内容と今読んでる本からの知識を織り交ぜながらやっているが、いかんせん自分自身でも理解できていないが、取り敢えずは不安などを表に出さず、自信を持って授業を進めていく。何せ……………

「魔法とは、可能性だ。自分と魔法の可能性を疑うな、どんな魔法でも成功すると信じ通せ、」

結局の所、イメージなのだ。その為、詠唱を教えず、キーとなる呪文だけを教える。それだけで、8人くらいは詠唱なしで魔法を使っている。……………いや、その子達は元々魔法に関する知識が無かった為だろう。実際、風や土に優れた魔法適正を持つ、エルフとドワーフからは出来たものがない。だが、得意と苦手以外(エルフなら火、ドワーフなら水)の場合は成功しやすい傾向だ。多分だが知識が邪魔をしている。柔軟な発送が求められるみたいだな、どちらにせよ本人達が望むなら出来るようになるまで一人一人でも、付き合うつもりだ。

「ねえ、先生？」

俺の呼び方は先生で統一している。でないとなの兄妹に様付で崇められる。

「何？」

「先生はどうして、オートマタを作っているの？」

「なんで、みんな女の子なの？」

「どうやったら上手くできるのー？おーしーえーてー」

「武器も先生が作ってるの？」

「「ワイワイ、ガヤガヤ、」」

「……………興味を持つてくれる好奇心は嬉しい反面、いつもこうなるのがなあー、……………歳を重ねれば、なんて後五年しかない、滅ぶのは文明、生物ではない。だが、人間は社会と共にある。家族は最初に所属する社会だ。その最初の社会から弾かれた子供達、理由は様々だろうが、ここを新たな自分達の居場所だと思つて貰えればいい。そうなつていけるよう俺は頑張るだけだ。」

ガラガラガラ……………

「お父様、そろそろ……………」

キヤスター付きの台車に乗せられてノエルが来る。押しているのはアナスタシア。こうして見ると見た目年齢は近い為、仲睦まじく遊んでいるようにしか見えないな。

「ん？ああ、もう、そんな時間か、ノエルまた頼む」

「承りました」

「……………ん、私も買い出し、行く」

「わかった。……………それじゃあ、行つてくるね」

「えー！」

「お土産買つてくるから、みんな仲良くするように、欲しいものがあるなら、ノートに書くように、次の時に買えるものなら買つてくる。」

ノートは勿論、芦原さんに出してもらつた。ただ、瓶のような円筒のカプセルに入れる形でしか出せないで暫くは丸くなる癖の付いたノートしか出せないが、後この方法ならタオルも出せる。タオルは便利だ、怪我をした時に止血、包帯代わり、患部の固定と何かと重宝する。

「じゃ、頼むぞ、ノエル」

ズパアアアン!!

「クロシエも行くにゃー」

……………地面が捲れ上がつてゐるのだが、遅れて砂がパラパラと降つてくる。

「……………もう少し静かに移動できないか？」

「うにゃー……………次やってみるにゃ、……………後でノエルちゃんも行きたい所があるにゃ。だから、付いていってもいいかにゃ？」

「それならいいが……………危ない事はするなよ。」

「わかったにゃー！」

「私の付き添いは……………？」

「……………クロエに頼め」

とにかく転移してからクロエを隔離で呼び出す。進化した氷水魔法に関する本を読んでいた。

「クロエ、アナスタシアの付き添い頼むぞ」

「えっ……………ひゃ、ひゃい！」

「で？二人は……………」

「いつてくるのにゃー！」

ジェット機がここから飛び立ったのかと言うくらいの暴風が吹き荒れる。クロシエットの速度は早い、跳躍が合わさればどれだけの速度か想像がつかない。……………ちなみにノルンは着物や巫女服のような格好（コスプレみたいな袴とかが短いヤツ）をしている。その襟を後ろから子猫のように咥えられ、何処か遠くに飛んでいった。……………方角さえわからん。各時解散したのを見送ると、冒険者ギルドを目指す。

「すいません。コレとコレを受けたんですけど、」

「薬草の採取と、害獣の調査、討伐の依頼ですね。」

両方とも日帰りできる距離だ。ちなみに依頼は達成すれば後から申告もできる。たまたま近くに盗賊の基地があり、それを殲滅してからも、首から上があれば懸賞金なんかは貰える。……………まあ被害とかが出てることが確認され、依頼があればもつと稼げるだろうが、それだと今から行く場所の規模、人数だと討伐隊を組まないといけない。それだと分前やら何やらで減る事を考慮すると、一人で行く方が取り分は多い。諍いも避けられる。目立つがもう諦めたよ、金がいる（即）↓冒険者ギルドの依頼くらいしか即金で手に入らない↓依頼達成↓この前ランクCになった。……………金無しスパイラルだな。

「安定した資金源を手に入れないとな……………」

ため息混じりに独り言が漏れる。食糧問題を解決したとしても、問題なんて山ほどある。何をするのにしても物資や、資源がいる。当然タダではない。……………それにアダマンタイトの在庫が少なくなっている。やっぱり俺以外でも加工、生産のできる者を引き込んだ方がいいか？それか下請け的な？

《では、作ってみては？》

簡単に言うなし、どうやって付与すんの生産系スキル。これは経験から来るものだから……………て、できるあてであるの？

《はい、スキル保有者、北川龍登の知識と経験をコピーして与え、存在値を与えれば可能かと》

……………話を聞く限り、確実性は無さそうだな、出来てなければ後で回収するでも行けるか、教えるのもありだな、

「おい、もう終わるかクソガキ」

路地の方に三人何かを取り囲むように立っているここからでは見えないので千里眼。……………はあー、何やってんだこのカス共、普通に歩いて近づくが、こちらに意識を向けようもしない、道も塞いでる。邪魔なのでその中心に踏み込み、正面のおっさんの首に貫手を放つ。そのうち死ぬだろ、貫手を放った腕を曲げ、肘で隣の男の顔を潰す。壁で挟めば威力も増す。最後に通り返した後ろのちっさいおっさんを貼山靠で壁と背中挟み、そのまま肘で肋骨を砕いていき、最後に顔面に一撃。カスは放って、囲まれていた子供を軽く触診する。蹴られたためか内臓がかなりのダメージを受けている。あまり猶予はないな、アナスタシアを探さないと、最短ルートで頼む。代行者、

《では、ルート案内を開始します。目標地点到達予測時間は1分26秒です。表示します》

……………つて、おい、いきなり屋根の上か！

……………だいぶ揺れたと思うが何とか合流出来た。買い物物の最中だった。その子は二人に預けて、依頼を達成すべく移動する。街の外では結界に乗り、なんとか目的地に着く。薬草は結界を使って採取済み、ゴブリンの集落の中心に着地する。それと同時に集落を覆うよう

に结界を張る。そこからは手近な奴から切り捨てていく。それと魔法の実験をしながら、数を減らしていく。最後の方は逃げるのが多いので结界は徐々に狭める仕様だ。そして散らばった死体を隔離して一箇所に集める。隔離空間内で討伐証明の耳を切り、あとはお馴染み、

「ライトニング」

魔石の回収。……よし、っと、次は盗賊のアジト、もとい洞窟に向かう。予め洞窟の奥に酒を撒き、火を着けて入り口を结界で塞ぎ、殲滅、死んでる所を回収する。その後依頼人と世間話をし、ゴブリン集落の方角に歩き、姿を隠し结界に乗って帰る。アスメシアの街に戻ってくると、ノルンがくでえ、とした。ベンチに布団のように干されているとも言うか、

「大丈夫か？」

「う、…………お父、様、…………世界がまわ、って、…………きつと、お役に、たてると、思いま、す…………」

声を掛けたときピンと立った尻尾が、喋り終わるとしなつ、と垂れ下がる。チーン、という効果音が自然と付きそうな感じ。そのベンチの横ではフルーツタルトにフォークを突き立てるクロシエツトが座っている。時より尻尾の先が左右に揺れている。

「何してたんだ？」

「ナイシヨだにやー、お楽しみなのにやー」

クロシエツトは感が鋭いが、頭も良い。…………普段の感じからは信じられないだろうが、一回見ただけの筈の俺の動きを実戦で使ったり、即座に非実体のアンデットを暴食で吸い込こむことを決めた判断力や発想。その上魔法に対する理解も高く、雷撃吸収を活し、本来の魔力なら持たない長時間の加速を実現している、その時間と速度は今尚伸びているようだ。これについては未来視を使った予測でしかないが…………限界まで使ってる所を見たことないしなー。

「にゃふふうー♪…………あむっ、お兄ちゃんも食べる？」

暴食の養分は回復にも回せる。その上ストツクもあるらしい。総合的に見ればかなりの魔力になると思う。



「にやあ？聞いてるー？」

「ああ、ごめんごめん、いただくよ」

「むふう、……もおー、ちゃんと聞いてほしいにやー、あーんするにや」

有無を言わず口元にフォークが来る。ちよつと不機嫌な様子。断りづらい空気を出している、結構恥ずかしいが、食べると、にぱつ、と笑うクロシエツトが……不機嫌なのは嘘だったようだ、ただいい笑顔は見られた。花も綻ぶとはこの事だろう。

「……………私は食べさせて欲しい。」

「ええつと、……………私はた、食べて欲しいかなー……………なんて」

いつの間に……………、アナスタシアとクロエが戻ってきた。ここでやらないと不平等なので、勿論やるつもりだが、結構恥ずかしいんだぞ、これ、ついでののでノルンにもあげる。いらなと言われるだろうと思ったが話を振ったら復活した。顔は赤いが、

「アナスタシア、あの子はどうなった？」

「大丈夫、教会で保護してもらってる」

「……………まあ、相談しとくか、決めるのは本人だし」

俺達のところに来れば、ある程度の生活は保証できる。できるなら保護したい。だが、それを決めるのは、俺じゃない。子供に任せるなんて言えば不安だの、任せられないという奴がいると思うが、本人の意思を蔑ろにして何か選べだ、中途半端なガキみたいな年齢だけの大人よりよっぽどしっかりしてる。来ないにしても、もし困ったことがあれば手を差し伸べられるように藤白達の建物を教えておくつもりだ。その後はギルドで報酬を受け取るのみ、……………あれ？あの団体名前なんだっけ？

異世界NGO・みんなのダークサイド・現在、最も能力的に信頼できると思っていた人形がとんでもない欠点を抱えていた件について『の三本でお送りします。』Kさん、正直引きました。ドン引きです。まさかあいつがド

「ノルン、寄り道してもいいか？」

「はい、お父様の身心のままに。」

どこで習ったその台詞……、目的地はあの建物だ。ポイントもあるので一瞬だ。付いた先では二人が某社のカップヌードルを食べた。何食ってんだ！俺にも寄越せや！ちなみに芦原さんはカレー味のやつ。詳しく聞くと、どうしても食べたくなり、筒状の認識で気合を入れてカップヌードルを出せる可能性を引き寄せたようだ。カップ焼きそばとか容器の形が変わると無理らしい。無念。今食べる分と隔離ストック分を大量に貰っておく。

「……………で、この団体の名前って何？」

「それ北川さんが決めるんじゃないんですか？」

ええ……………

「勝手につけてええもんかも、わからなかったしな」

……………それもそうか、じゃあ、テキトウに、

「異世界NGOアスメシア支店とか？」

「……………支店って、本店は？」

「そんなものは無い。キッパリ」

「えー……………」

「NGOってなんの略や？」

「非政府組織ですよ。赤十字の国境なき医師団とか、そんな感じの……………まあ、こっちはいろんな意味で超えちゃってますけど、」

「ほお、ええな、何より非政府組織つちゆう響きが気に入ったわ！」

あなたが言うとは何か物騒や感じがするんですけど、芦原さん

……

「ああ、あと、藤白にも用意してほしい物が二つある。片方は出来るか分かんないから、そっちはできなくてもいいよ」

「ええつと、……………それってどういう薬ですか？」

「片方は消毒と汚れの洗浄に使うやつのも二種類、消毒用エタノールは知ってるだろ、もう一つは毒だな。」

両方準備できるみたいだな、藤白の毒物・薬物効能操作・製造の能力で作れる範囲は結構広いみたいだな。しかも毒の方は錬金術の範囲に入るのでは？というものだったのだが、できるようだ。……………ただ魔力がすぐ無くなってしまうようだ、こっちは俺の方で作るとしよう。……………あ、土産がカップヌードルになりそうだな、ま、こっちは珍しいものなのでいいか、なんて周囲を見渡すと、

「うお、……………なんだあれ」

空間に歪みのようなものが、取り敢えず真理、

ポイント

こんなものまで見えるのか……………、千里眼を使い、移動前の場所を見るとここにも、歪みがあるので真理を使うと、

空間の歪み

空間系魔法によって生まれる歪み、転移魔法の使用痕跡、

うーん、これは奇襲とか潜入とかで痕跡が残りそうだな、これは後で実証実験が必要だな、

「ご主人殿！おかえりなさいませー！」

転移したら向日葵がいた件、お前、留守何かあった時は頼むつて言つといたよな?!……………はあ、これは増員が必要そうだな、ついでにこの家の増設も……………手が足りないな、色々と考えて内にアナスタシアとクロエは部屋から出ていった。多分食事の準備だろう。

「明日の朝は、飯は作らなくていいぞ、頼まれてた土産があるからな、」  
「わかった……………シユン」

「では私は周辺の安全確保を……………」

「そう言えばアリスは？」

《懸命に子供達の相手をしていたようですが、現在寝転がっています》

うーん、まあ仕方ないよな、結構体力いるし、……………うわー、目死んでない？服も乱れてるし、

「大丈夫か？土産を……………」

ガバツ！ゴツ！

痛ええ！……………頭突きくらった、頭が、

「あーすいません！ご主……………」

「……………退く、ロストリバーサル」

おい、それ現在持つてる最上位の回復だろ。そこまで深刻じゃないぞ。頭の痛みはスツと引いたけども、

「アリス」

「アリス、ちよつとこっちに、」

「アリスー、ちよつと付き合っしてほしいにや」

「アリス……………」

え？……………怖！それよりも、

「お前ら殺気抑えろ！死人が出る！」

俺は同じ悪魔系だし、アナスタシアはそれらを防ぐ天使系のスキルがあるか、保護してる子供達にそれは無い。混ぜた殺気は部屋の中を真っ黒に染め上げていた。が、瘴気とも思える霞はすぐに霧散する。……………と言うか目がヤバかった。クロエは眼鏡で見えなかったが、クロシエツトは肩に力を込めてた、笑顔だけ目が笑ってなかった。ノルンは蔑むような目をして、掌に炎を発生させた。一番ヤバかったのが向日葵、いつもと変わらない笑顔かと思ったが、その顔からは表情が抜け落ちていた。その目の奥には覗いても見通す事ができない闇が首を擡げている。

アリス、状況の変化に置いていかれる。

俺、ドン引き、

アナスタシア、回復魔法を使った後、まだ容態をみている。

「……………こんな事でキレるなよ、悪意があったわけでも、わざとでもないだろ、それにこっちの不注意でもあるしな、」

感情抑制は戦闘でも大事になってくる。熱くなるのはいいが、暴走するのはアウトだ、

「それにアナスタシア、この程度のことにも最上級の回復魔法使うな、すぐ魔力切れになるぞ」

「心配……………」

「心配してくれるのは有り難いが、使い過ぎて瀕死になってる時に使えないなんてことになるんじゃないようにしろよ」

「ん、気をつける」

いつになく真剣な表情のアナスタシア、凜とした、それでいて可憐、吸い込まれるような……………催淫使ってないよな、

「よし、……………さてと、お前らについては周りをよく見ることやらが欠ける。反省に少し組手だ、アナスタシアとアリスは無しな、」

「なんでですか!?!」

「なんでにや?」

「……………無理。」

当たり前だ、致死量の殺気垂れ流した罰なんだから。

「明日、湖の前な、ノルンは厳しいから、火球を作って維持だ。」

「私に合わせて……………ありがとうございます。お父様。」

「……………30個六時間維持だ。」

「え……………」

楽な課題じゃ、罰ならん。俺も徒手格闘の練習したいし、もし刀が無くなったりした時のためにやっておいて損はない。

「よし、動き易い服装……………に着替えたか?」

いや、何名かはわからんでもない。クロシエットはブルマに何処の学校のかは知らないが白の体操服上。……………目のやり場に困るな、向日葵はブカブカのジャージ上下（上は赤、下が緑で両側面に白いラインが入っている。）クロエは……………

「……………何故メイド服」

「ええつと、……………駄目でした?」

逆に聞こう、何故大丈夫だと思った?……………いや、普段からその格好だけど、

「まあいい、向日葵から来い。ノルン、ちゃんと見てるからな、」

「う……………」

代行者にも見てもらうので、そつちにはあまり意識を向けないようにしよう。今の相手は肉厚な脂肪に覆われたオークの腹に風穴を開けられるパンチを放てるのだ。気持ちを沈め、集中する。

「じゃあ、……………来い」

「で、では、……………行きますー!」

普段より格段に遅い攻撃が来た。姿勢を落として避け、突き出された腕を掴み一本背負い、

「……………それで敵が倒せるか、練習にならない。」

「は、はいー!」

取り敢えず後ろに飛びながら受けてみる。ぐっ……………三十メートルは飛んだな。手も痺れてる。ただ、この感じは殴られた所から先が血の通ってない感じ。神経の異常に近い。握り拳を作ったり、開いたりを繰り返す。……………動作は少し遅れるが動く。問題ない。

「行きますー!」

真つ直ぐ突っ込んできた所を手を取り、側面に回り込み押す。合気道の回転投げだ。面白いように転がるな。

「行きますー!」

「……………ほっ!いちいち言わなくていいぞ。」

速度が結構乗ってきたな。小手返しから一教、……………小手返しからの制圧とも言う。

「一旦終わりな、次はクロエ」

クロエにはあまり体術を教えていない。

「ええつと、……………お、お願いします。」

「形は気にしなくていい。向日葵もあんな感じたし、」  
初心者に毛が生えた程度の空手だからな、

「は、はいー……………で、では、いきます……………」

……………なんかもう、死にそうなぐらい顔色悪い、

「……………無理だけはするなよ」

死亡フラグが立たないといいが、……………取り敢えず四方投げて対処する。……………これ以上は止めといった方がいいな。多分吐く。……………いや、うーん、人形でも吐くのか?」

《次、入身投げをした場合、87.6%の確率で……………》

ちよつと黙ってもらえますか？

「お兄ちゃん、私はまだかにや？」

「あ、ああ、クロエは休んでろ、な」

「は、はい……………」

茂みの中に消えていったクロエの背を見送る。……………なんかダメっぽいな、

「アナスタシア、回復頼む。」

見学しているアナスタシアの方に腕をみせる。今回はロストリバーサルで頼んだ。

「さあ……………始めようか、最初はスピード抑えてくれよ」

「わかったにや！」

正面のクロシエツトに意識を集中する。が、次の瞬間、俺は横っ腹を抉るような掌底を受ける寸前で手首を掴んだ。

「みやつー！」

そのまま腰投げ、……………が、地面に背中か触れる事無く着地する。やっぱり対処してきたか。前八極拳の技を使っていたが、俺は誰にも教えていない。見ただけで覚え、それを使っている。対処に関しては投げ技を予想してその場で動きを決めているようだ。

「お兄ちゃんすごい！なんで分かったの?!」

……………お前スピード抑えてアレか、残存初めて見たわ、

「……………間合いだ。攻撃の届く範囲に入った物を反射で対処する技術だな。経験則、武術の基礎、修練の賜物ってところか」

とは言っても、横っ腹に当たる寸前まで間合いに進行してきているからな、本来、間合いに入るか否かで迎撃するのだが、速過ぎて対処が遅れてしまった。これより速度を上げられたら防御を抜かれてしまう。……………仕方ないか、未来視を使おう。それと刀も持とう。武器を持てば間合いは大きくなるため、対処も早くなる筈だ。感覚を鋭く研ぎ澄まし、構える。

「……………よし、来い」

「じゃあ、行きます」

……あれ？語尾は？嫌な予感しかし無いんだけど、直後に正面からくるイメージが伝わってくる。未来視の攻撃予告だ。受け流す為に手を前に出すと、同時に何かに触れる。その直後地面が爆ぜる、しかし、それ同時に手を掴まれる感覚がした。しかも掴み方からして小手返しだ。重心を動かすが、あっさり投げられる。その地面に着くまで刹那、制圧までの流れが未来視で伝わってくる。……これは避けられんな。あんまり使いたくない手だが仕方ない。着地するまでの時間に体を捻り、足を体が付くより早く降ろし、捻じれを俺の肘に集中させる。

コキッ！

負荷に耐えられなくなった関節が外れ、痛みが走る。開放された左腕は下手に力を入れると痛いので力を入れず、自然のままに任せている。クロシエツトは……ホントゴメン、普段の天真爛漫な表情が想像できないほど顔面蒼白になって固まっている。ただ固まってしまふのは良くないな、寸頸、

「……………」

無言で転がるクロシエツト。魂が抜けたみたいになつてるな……………

「ビックリしたか？手錠で拘束しても関節を外して抜ける奴もいるからな。」

身振り手振りを交えて周りの空気を解す。

……………あつ、手戻してねえや。

ブラブラしてた左手を掴み、前に少し前に出してから、一気に後ろに引く。

カコッ！

うん、違和感ないな、血が巡ってるのが分かるわー、

「さてと、続けるぞ」

「ご主人殿！もう休んだ方が……………」

「おいおい、これは罰だぞ、良いかどうかは俺が決めるし、クロシエツトはまだだろう。」

「……………へ!?は、はい!!」



今度は不意を付かれないように更に気を張る。すぐさま飛び込んできたクロシエットを刀で迎撃するが間に合いそうにない。なので柄頭を使って殴る。

「にゃー！」

が、直後に背後に回っている。鞘の小尻を使ってなんとか間に合った。少しづつ加速していくクロシエットとギリギリの綱渡りをしながら、少し余裕が出てきた頭で疑問を整理していた。……………まあ、まず何故余裕があるか、速度は上がっているが攻撃が単調になっているのだ。ほぼ直線軌道なので、来る方向が分れば迎撃は簡単だ。次だが、叩く度に出る声が……………

「みゃー！」

「いっ！」

「はひゃー！」

「おぼっ……………」

……………なんか、艶めかしくなってきた。

《クロシエットは称号 ドMを得ました》

……………いい、要らねえー。そして疑惑が確証に変わった。

「じゃあ、もう一回、向日葵からだ。」

爽やかな笑顔と共にクロシエットとの組手を打ち切る。因みに後で一個火球をケチっていたノルンは一時間時間を追加した。もうすぐ6時間になる手前にな、

## 選択授業 ベルナー観光のついでに

ふうー、やっと終わった。……………子供や犬猫を十分相手する体力があっても変態は別枠だ。今日初めて思い知った。あの恍惚とした表情は原因がアレでなければ男女を問わず引き寄せる魅力があっただろう。今日は作業の日だ。感覚的には日曜日だな、とは言っても結構忙しい。基本的に家から普段使う椅子や寝具、芦原さんが確保できる物以外は全部Made by 俺、新しく作ることは出来なくても管理できる人員は欲しい所だ。

『お困りの様ですねー、旦那様ー』

……………本棚の奥から出てくるなよ、動けないんだろう、多分、両端の本を横に避けると、本棚から勢いよく出てきた。

「で、なんかいい案でも？レア」

『レア？……………もしかして、それ、私の名前ですか？と言う事は、今は私の身体を……………』

「そうだな、今作ってる」

『マ、マジで！このイベもっと早く言ってよ。好感度爆上げだよ！超DSー』

……………DS？上下2画面の携帯型ゲーム機の？

『あれ？……………もしかして伝わってない？』

「……………と言うかどこで覚えた？」

『いろんな子達にー、若い女の子らしい喋り方を聞いたらこうだつてー』

「ちなみにDSって何の略？」

『そ、それはー……………そ、そんなことより、私の案、聞きたくないですかー？』

下手だな、誤魔化すの、後で教えた本人にでも聞けばいいし、話に乗っとく。

「で、どうするんだ。外から雇うのは止めといたほうがいいぞ。」

『それは旦那様がお作りになさったほうがいいですよー……………例えば私とかー』

あー、そう言うこと、

「それで良いのか？戦う方の能力は下がると思うけど」

『それは……、出来るならそうしたいですけど、他の側面から支えたいと思っただけですよ。料理はアナさん、クロエさん、クロシエが出来ますけど、他の家事はクロエさんには出来ませんし、ノエルは能力的にーねえ、アリスさんは一応、洗濯は出来ますけど、料理は向日葵さん含め生ゴミ製造機ですからー、実質アナさん一人でやる事も多いですが、一人で買い物には行けません。それだったら、専属で作った方が、と思っましてー』

………全員家事に問題あり過ぎるだろう！まあ、実際アナスタシアとクロシエツト、それと俺で何とかしているが、まだ、クロシエツト一人で料理をさせるのは危なっかしい。クロエも普通に料理できるが、料理のみだ。配膳で皿を持つと足が生まれたての子鹿のように震えている。棚の皿のトラウマだろう、………しかし、生ゴミ製造機って、

「………わかった。レアの現状を憂う気持ちも、覚悟もよくわかった。それに答えられるよう俺も頑張ろう。」

とは、言ったものの………どうしたものか。魔法は魔石や魔晶を使えば事足りるが、家事は明らかに技能、本来は経験を経て、身につくものだと思うのだが、こういう時は代行者ー、

《いくつか候補があります。一つは完成後に習得させる。二つ、記憶水晶に記憶をコピーし、それを人形に使う。三つ、冒険を使い習得させる、です。》

………んー、二番目だな。記憶水晶ってのは？作れる？

《錬金術で製造可能です。魔力を七割使えば最も良質な物が出来ます》

………七割か、俺の魔力は回復が遅い、前三割使った時も、回復に2日掛った。………まあ、だからといって特別な事もなかったが、

「早速、取り掛かるとするか」

ー1時間後

「どうするかな、これ、」

記憶については俺の芸術関係から銃やら戦争やらの知識を片っ端からと、アナスタシアの今までの家事炊事の記憶とを合わせて入れてみたんだが、水晶なので透明なのだ。それはいいが、所々金色の筋のようなものがあり、見てる分にはキレイなのだが、

「色塗りに影響しないといいが……………」

ぼやきながらも眼球に仕上げていく。削った分は髪に使う金属の炉に放り込む。残りの時間は髪の毛作りで終わりそうだな。完成は程遠いな、

今日はノートにリクエストに応えようと思う。あつ、カップヌードルは好評だった。

「今日は自由参加の授業だ。みんなからいろんな要望を貰ったんだけど、みんな興味あることが違ったから、ここから一週間の授業内容を張り出します。時間はいつも通りだけど、参加しない子達も悪い事やイタズラしちゃ駄目だからね。えーと、今日は裁縫をやります。」

材料はピンクの化物の店で買った。……………品質や品揃えいいのにあんまり行きたくない俺が思う店は数少ない。行く時は基本まとめ買いだ。はじめに作りたい物を聞く、後は型紙なんかを用意して制作開始。物によっては一日では無理なので、半分遊びみたいなものだ……………人形率高いな。

「じゃあ、今日は金属の加工、鍛冶をやってみよう。ただし、危険が伴うから。言うことを聞くこと、わかった？」

熱した金属は危険なのでしっかり管理できるように5人一組のグループを4つ作り、指導を行っていく。知識としては鍛造や鑄造が出るが、経験としては熱して半液状にした金属を素手で捏ねる方が早い。が、炎熱無効が無い子供達にそんな事をさせるつもりはない。今日の所は小さいイヤリングくらいにしとくか。

「天気がいいな、いい指導ができそうだ。今日は格闘術だ、まず、突き、蹴りの出し方とその反復練習、最後に俺が相手して直すところを言うからな」

丸太（クッションでカバー）を地面に突き立てておき、それを蹴ったり、殴ったりする。体格によつて向き不向きな攻撃もあるため、そ

の辺りも見回った時に気付いた事と共に教えておく。

「さて、そろそろいいか、ルールは素手のみ、俺は攻撃はしないが吹き飛ばしたり、足で捌いたりする。誰か一人でも一撃入れられればみんなにアイスを出そう。」

箱のファミリーサイズの奴だけど、芦原さんに提供してもらって隔離してある。それと家の地下にも魔力で動く冷蔵庫モドキの中にもある。………テキトウに刻印彫っただけの箱だけど、ただまあ、こう言うのって子供のやる気上がるからね。こっちでは珍しいし、氷も貴重だ。さて、間合いの基礎の技術の一つ、円圈を鍛える。太極拳の奴だ、

「時間は三時間だ。初めー!」

円を描くように、流れるように、人は意外と自分の体のことを知らない。………ホクロがどこにあるとか、そういう話じゃない。手の届く範囲と言うと、それ、わかんない奴いるのw、みたいに笑う奴がいるかもしれないが、その当たり前が難しい。例えば新体操の技を経験一つ無い者ができるか?という話だ。他にも絵、モデルの顔を書いてくれと言われてもその顔のバランスが整っているかとか、鏡で自分の顔なんていくらでも見てるからどこに鼻があり、目があり、口があり、なんて事は頭では理解できているだろうが、実際にやるのはそう簡単ではない。そもそも人の顔は左右非対称(アシンメトリー)だし、完璧に真似ればシンメトリーにはならない。そこをどうするかは、その人次第だし、絵の醍醐味とも言える。………まあ、だいたい言いたい事はわかってもらえたと思うが、

パシッ

間合いに入ってきた拳を、軌道を変えるよう手を添え、受け流す。その間に間合いの中に入ってきていた攻撃を肘で迎撃。足に来た攻撃は軽く飛んで回避、軽く肩を押して距離を取る。………結構序盤から容赦ないな、はたき落とししたり、受け流したりを繰り返している。変則的な攻撃や連携が混じりだす。ただ最初の型が崩れ始めている。工夫は大事だけど変な癖がつくのはアウトな、

ベシ、ベシ、

「あだっ!」「痛?!」

「動きはちゃんと意識してるか。型が崩れて変な癖が付くとなかなか直らないんだぞ」

「もらったー!」

「お前にも言ってるんだぞー」

ゴツ!

チョップ三連発、これは攻撃じゃないぞ。

「ほら、足元が疎かになってるぞ」

「今のは良かったぞ」

「ほら、もつと踏み込め。当たらんぞ」

「体重移動をもつと心掛ければいい突きが出せるぞ」

そんなこんなで三時間、何とか当たらずに済んだ。後半二十秒は走って逃げたくなった。汗が凄いな、

「さて……じゃあみんなに参加賞だ。当てられたらもつと増やしたんだけどな」

そんな訳でアイスを一本ずつ配る。隔離空間内は指定した物の時間を停止、倍速、普通の設定が選べる。アイスはもちろん停止、俺も食べるか、ラムネかソーダか知らんが青いアイスの包装をめくり、齧る。

「今日は雨が降ったので明日予定していた料理にします。アナスタシアもよろしく」

昨日は男子中心だったが、今日は女子中心のようだ。鍛冶はドワーフ全員参加してた。昨日も獣人は全員いた。種族ごとの考え方もあるのだろう。まあ、初めてだし簡単な物を2、3点くらいでいいか。そろそろレアの体も完成しそうだ。

………また雨か、後は魔法と武器、どっちも室内だと不安が、なんて事を思っていると、

《最終日の観光を前倒しにしては? 現在ベルナーは晴れです》

………いや、ベルナーって何処? 千里眼で景色を見る。………

おお、いいところだな、町並みも綺麗だ。でも遠い。

《前回クロシエツトが街を訪れた際、ノルンにポイントを設置させて

います》

……なんだと、あ！首根っこ啜えられてた時のか、クロシエツトの速度で移動すれば多分、分単位の距離だ。……そして他にもあるな？

《はい、42箇所の近隣の街付近にポイントが設けられています》

よし、後で二人を褒めてあげよう。

「今日は本来、七日目に予定していた観光をしようと思う。行き先はベルナーだ」

「い、今からですか?!」

「準備がく」

「大丈夫だ。移動は日帰りで行ける。クロシエツトとノルンのお陰でな。二人に拍手！」

パチパチパチ……

「じゃあ、頼むノルン」

「承りました」

一瞬で景色が切り替わる。……少し先に行けば海が見える。千里眼で確認済みだ、後ろを付いてきた子供達や人形からも声が上がる。落ち着いた所で話を切り出す。

「街の中でこの団体は目立つから、何グループかに別れよう。人数は6〜7人ぐらいかな。向日葵達が引率してくれ、何かあればすぐ行く」

「はーいー」×40人

「……分かりました」……

さてと、俺は俺で掘り出し物を探るか、それか描きたいと思える所を探すのもありだな。

15分後

早速問題発生。早くないかな？早いよなー？まだ店の情報も聞いてない段階なんだけど、アナスタシア達に絡んできた人攫いの五人組をボコって門の前の詰所に引き渡す。殺人未遂、強姦、脅迫等の選り取り見取りの罪状を添えて、

1詰所を出て30秒

今度はアリスの所か、魔眼とかあるので遅れは取らないが、急行してボコって、詰所に引きずる。罪状を添えて、

またか……………、クロエの所に湧いたので風魔法で壁などに叩きつけて、詰所に引きずる。罪状（以下略）

「お兄ちゃんー、これお願いにゃ」

詰め所にいたらクロシエツトが追加を持ってきた。後は流れで当直の人がやってくれた。

……………多いんだが、これまでも少なくない回数トラブルはあったが、いい加減潰したくなってきた。人の目があるからいちいち引きずらにやならんし、代行者、団体さんの情報頼むわ。

《現在、三つの組織が存在しています。頭、双斧、ゴールドアイ、その内ゴールドアイのみ接触がありません》

そうか、じゃ後その2つの組織の隠れ家なり、拠点なりを教えて、吹っ飛ばすから。麦茶のような物が入ったコップを暫く眺めてから、口に含んでみる。……………味は変わらん。

「あの、えっと、」

「ん？」

「ここで作業されるのはちよつと……………」

詰所の休憩室の一角に並べられた手足、傍目から見ればバラバラ殺人みたいなものだが、人形の部品だ。

「……………すみません。あと5分」

図太く粘る。もうね、ここにいた方が早いんだわ。色々と、掘り出し物探しは街の掃除を終えてからにするつもりだ。それとは別にやりたいこともある。

さてと、殲滅する前に情報を整理しよう。狙われたグループと狙われなかったグループの違いはエルフがいたか、いなかったかだ。なら、他に被害者がいる可能性がある。どうだ？

《合計でエルフの子供8人と、サラマンダーの子供4人、セイレーンの子供5人、アルラウネ1人です》

……………ちよつと、ボスと幹部連中何人いるか知らんが生け捕るわ。無理なら殺すけど、逃げられないように結界張るし、それと



代行者、監視と情報を頼む。

「じゃあ、行こうかレア・ギフト」

「あのあのく、私大丈夫でしようかー？」

清楚な印象を与える銀の髪とワンピース、あどけなさの中に何処か大人びた雰囲気を漂わせる顔立ち。そして頭のとっぺんから垂れるウサ耳。後ろに回れば尻尾もあるが今は、ワンピースの中。

「問題ない。これを持つとけ。今回はこれさえあれば事足りる、……ただあまり敵に近付き過ぎるなよ」

メタリックな液体の入ったガラス管を何本か渡す。

「なんですかー？これ、どうするものなんですかー？」

「それはな……」

「ふあー……はふ、数ばっかり多いな」

欠伸を一つして鞆に刀を戻すと、物がぶつかるドサツという音と不快な水音が複数耳に入ってくる。……流石に手入れが必要だろうな、刀を隔離して先を進む。物陰に隠れてる奴は千里眼で確認済みなので、火魔法で塵一つ残さず焼く。一瞬で焼き上がるので不快な臭いはしない。そこらじゅうで上がる火柱には目もくれず、断末魔が響く中カツカツと一定のペースで足を進めていく。すると、周りの廃れた印象とは明らかに違う扉が見えてきた。年季は入ってるが汚いと思わない。……ちよつと蹴り飛ばすのは躊躇われるな。仕方ないか、少し横にずれて腰を落として、息を吸い込み、そしてゆっくりと息を吐き、壁を撃ち抜く。

「うおー何だー！」

……おいおい、何してんのこいつら？結構派手にやってたのにここまで来るまで気づかなかったのか？机の上にはコーヒー（湯気付き）だと思える物がある。

「動くな」

お、銃か？……でもこの狭い部屋でアサルトライフルは取り回し悪くない？特に真ん中の円卓が邪魔、これがあるために拳銃でさえ微妙なのだ。素早く間合いを詰めて、壁を蹴り背後から後頭部を蹴り飛ばす。円卓に着地し、手近な奴から顔面を蹴っていく。後は隔離し

て、レアに合流する。

「あのあのく……これどうすればー？」

痙攣している大男を尻目にこちらに判断を仰いでくる。

「取り敢えず離れろ。あと今使ってるのも止めとけ」

「はいー」

双斧の生きてる似たような状態の奴を代行者の指定で隔離する。

この状態ではまともに喋れないと思うが、魔法もスキルもある。読心を使えば質問を投げかけるだけでいいし、無理そうならアナスタシアが治す。……これを治せるかは知らないのですが、実験も兼ねているのだが、集合時間が近いので帰るとするか、

S……………だと、

あーあ、疲れたー。今日もアイスが盛況だ。暑いし、俺も食ってる。あれから三日間ベルナーの冒険者ギルドに行っては依頼をこなしている。アスメシアは依頼が少なくなってきたので、他の街に移動できるのはありがたい。まあ、理由は他にもある。

「ノルン、次の角曲がる。何があっても攻撃はするなよ」

「分かりました」

ちなみにノルンは肩車している。歩幅を変えず、身構える事なく路地に入っていく。

「よう、敵対組織がいなくなつてのびのびいんな所に手が伸ばせる筈なのに何に怯えてるのかな？ゴールドアイの首領さん、」

「……………そうですね。いや、三日前の混乱に合わせて行った菓の荷から火が出ましてね？今朝も密輸しようとしていた動物が逃げたり、消えたり、今も不定期の会議をしようとしていたら、突如、街を訪れた凄腕冒険者に見つかってしまいますし、いやはや、参りましたな」

見た目四十代、格好も綺羅びやかな物とは対象的な、俺がこっちに来たとき買った農夫が来てそうな服を少し清潔にした感じの茶色の服に、その上から胸から膝上までを覆う濃い茶色エプロンを付けている。パン屋とか言われたら多分疑わないだろう。優しそうな微笑みを浮かべている。……………まあ、こいつの表の顔はパン屋なのだが、

「ゴールドアイの首領つてどこは否定しないんだな」

「今更否定してもねー……………手口とか色々分からないけど、全て君が来てから起こってることだしね。……………で、何の用だい？」

「新作の豆パンの試食、だろ？」

「……………全く、ほら、感想を聞かせてくれないか？世間話でもいいよ。」  
「……………塩が効いてるな。ちょうどいい塩梅だ。……………薬物からは手を引いてくれ、武器は自由だ、それと、奴隷関係だが……………」

「うちは手を出してないから、その辺りはちよつと苦手だね」

「だろ？」

「……………やっぱり君は凄いな。と言うことはあつちも知ってるのかな？」

「……………見世物か？別にそれは自己責任だし、好きにすればいい。それと薬分の補填は、食糧難の所や戦争準備中の国とかの情報と、運搬関係の支援をしよう。」

「なるほど、……………では、私はどうなるのかな？」

「どうもしないよ、強いて言うなら空いた時間は、息子の相手をしてやれよ、じゃ、豆パンうまかつたぞ、今度は甘く煮た豆を使ってみるのもいいと思う。……………それとパン屋の店主が毒ナイフ持つのは宜しくないよ。」

透明な液体の入った容器を見せつける。食らうつもりはないが、解毒薬だ。豆パン貰う時に擦ってみた。

「正直、僕もビックリしたよ。意識を逸らすのはプロだけど、手の動きに迷いがあつたからね、すぐ気付いたよ。……………隠し場所には自信があつただけだねー」

ダメ出しくらつた。……………まあ、犯罪だし、躊躇いますよ。躊躇わない時は基本やるかやられるの時だけだし、境界線はどんなに歪でも引くことに意味がある。今度からは隔離任せにしよう。ちなみに隠し場所はズボンのアツプリケの下。多分熊、馬鹿デカイ、

「ああ、それとそつちの方で処理して欲しいものがある。場合によっては金になると思う。お前らのアジトに送っとくな。」

「プレゼントかい？」

「プレゼントだとしたら、センスを疑われそうだしな、……………ま、今後とも頼むよ」

さてと、じゃあ行きますか。

「ボス、緊急事態です。アジトの方に……………」

「ここで要件はいいよ、……………死体だろ。頭と双斧の首魁の」  
「え……………ええ」

ゴールドアイのボス、モリソンは思考を纏める。報告に来た彼は幹部である。しかも顔色がかなり悪い。さっきの話だと処理して欲しい死体を置いておくだけのばず、人か？場所？はたまた状態か？思考

を巡らせても答えは出ないので自らの目で確認する事にした。

「ふむ、……………これは実験かな？」

「え?!……………一体、なんのですか？」

じつくり見たところ目的もなく切り刻んだ訳では無さそうだ。共通点は眼球が無い、手の平、足の裏は焼かれ、爪と歯は全て無い。それ以外は差をつけるようにバラバラ、いや、一度バラバラにしてから付け直した。切断痕はないが、腕の長さが左右違ったり、肘や膝があつたりなかったり、二の腕が異様に長かったりする。十三体の異形が転がる中をモリソンは一体ずつ観察して回る。開腹したままの物もあれば、縫合された物もある。見えないところは臓器を上下にずらし、違いを探る。

「なるほどね。解剖練習か、それと一部だけど、腎臓とか、肝臓とか摘出されてるのがあるね、こつちの頭部に至っては脳だけ抜いて、元通りにしてある。……………上達とかそんな言葉で片付く次元じゃないね。ほら」

モリソンは脳が抜き取られた頭を呼びに来た幹部に放る。

「うわーちよっ、……………やめてください！心臓に悪いですから！」

「……………全く、何故私が解剖医の真似事なんかを」

そう言いながら手を洗いに部屋の外に出ると胃酸の酸っぱい臭いが立ち込めていた。

「……………情けないね〜」

「お、お帰りなさいませ。マスター」

今日はクロエが出迎えてくれた。不安な気持ちになる。何故？理由は簡単、アナスタシアとノエルは街に行く時は必ず連れてくるから、料理を生ゴミ製造機ズの担当になるのではないか？という。それとアナスタシアの付き添いは当番制でサイクルしている(今日はクロシエツト)。

「食事の準備が出来ました。ご主人(様)」殿

……………迎えが来てしまった。

「お待ちしております、旦那様ー」

ウサ耳を生やした控えめな印象のメイド服(スカートとかが長い

オーソドックスな奴)で迎えてくれたのはレアだ。ちなみにギフトは毒という意味がある。それとこれはレアのステータスだ。

レア・ギフト オートマタ

機構精霊 真実の紫水晶

パーソナルスキル 真摯 啓示ノ使徒

スキル 家事7 医術6 技術6 跳躍4 自動修復3 探知2

耐性 毒・酸無効

称号 生きた人形 魔術師

家事 内略

料理6 掃除8 洗濯8 催淫8

技術 内略

罨・工作10 鍛冶6 裁縫4 解体4

啓示ノ使徒 内略

戦士ノ守護者 毒や呪いを退け、戦う味方を強化する。戦闘を中止したり、前線から後退すると強化が消えるが、支援や回復の効果が上がる。なお、支援や回復は受ける場合も上がる。

原初ノ秤 調合の量を測り間違えない。少し先の未来が見える。

真摯 内略

弛まぬ努力 技能系スキルの成長を早め、新しいスキルを習得し易くする。

絆の加護 人望や人間関係の繋がりの強さや多さに応じて妨害効果を防ぐ。

……………記憶のコピーを渡したただけのはずなのだが俺に無いスキルがある。攻撃スキルは罨くらいしか期待できなさそうだが、支援と防御に特化している。そしてしれっと家事の中に紛れ込んでいる催淫、それと魔術師、これ何？魔法系のスキルは持ってないのに何故付いた。

《それは魔法ではなく、器用さを向上する称号です》

あー、なるほどね。……………いや、何となく分かってたけどね、視線を横に逸らせば台車(配膳用、三段式)に乗ったクロッシユが目に入った。

……いや、中身見えないって怖い。この流れはレアが作ってくれたんだと思うけど、まだ見た訳じゃないからね。うん、とかいつ作ったクロツシュ、

「お席にどうぞ〜、」

「ああ、うん」

レアが引いてくれた椅子に座ると、目の前のクロツシュが開かれる。………ん？

「これは？」

………いやね、何かはわかるよ。でもこれクロツシュに入れる？作り方はわかるよ、でもどうやってこっちで作ったのこれ、

「メロンパンです」

そう言っただけで持ってこられたバスケットの中にはおかわり用と言わんばかりに、ドーナツや焼きそばパンのような惣菜、菓子パンが大集合。………ただ不安なのはまだクロツシュがある事と、メロンパンの横にスープがある事。間違えなく味噌汁（スープ用の平たい皿に入ってる）、

結果だけ言おう。レアは味覚音痴ではなかったが、アホだった。俺の記憶のコピーから好みを探し、完全再現するまでは良かったものの、これでは再現しているだけだと思い、オリジナルテイーを出そうと迷った挙句、美味しい+美味しい=超美味しいの理論で組み合わせ始め、こうなった。現在は合わせる前の段階で個々に食べている。なのでデザートで石焼きビビンバとシュークリームが一緒に出てきている。シュークリームはいいとして、石焼きビビンバはデザートじゃないだろ。

「まあ、知識と腕はあるんだ。………基礎から練習すればいいからな」  
一つ先のテクノロジーをなんのノウハウも無く導入すれば、それに至るまでに必要な基礎が足りず、丸ごと崩壊なんてパターンもありうる。一步一步進む事は大切だ。

あれからなんやかんやあって冒険者のランクがBになった。一人で自由に動けると思っているんなら依頼をこなしたらランクアップから一週間後に、Aランク昇級試験受けると言われた。………いや、

目的だけ考えて忘れてたが、デカイ牛（食料確保）を三匹程倒したり、ゴブリン2、オーク1、オーガー1の集落を潰したり、派手にやり過ぎた気がする。依頼ではないが二匹ほどドラゴンも狩っている。解体はレアに頼んでいるが一人なのでいつまで掛かるか、

「……………で、試験っていうのは？」

「来るまでに大半終わっておるんじゃないかな……………、まあよい、この者と戦ってもらおう」

……………道中は基本すっ飛ばしてる。ギルドに入った時の殺気のない（手抜きとも言う）奇襲ぐらいしか覚えないぞ。そうこうしていると、三メートルくらいの大男、いや、オーガよりがたいのいい巨漢と言った方がいいか？手足が木の幹のように太く、下から見上げれば飾りのようにポツンと頭が乗っかっている。

「戦闘試験を担当するウォーレンだ。条件としては、実力を示しせ……………では、いくぞ！」

いや、早い早い、迫る拳の軌道を手を添えて逸しながら懐に潜り込む、……………こいつ、速いな、正面から迫る膝を見ながらどうするか思案する。なんせこれは避けられん、両手で正面から受け止めるように手を前に突き出す。そのまま迫る攻撃に反発することなく受け止め、体に引き寄せ後ろに飛ぶ。それに合わせて膝に触れた手を押し返すように突き返し、空中で衝撃を殺す。代わりに結構後ろに飛ぶが、まともに喰らうよりはマシ、

「オラオラーどうした、打ってこいやー！」

……………当然、追撃が来る。さっきの方法では一定以上の質量が乗った攻撃は防げない。よりによって下からすくい上げるようなフック、受け流しにくい。着地と同時に上体を反らし、バク転の容量で肘を蹴り上げ、距離を取り直す。強制的に最大まで拳を突き出させられれば重心が崩れる。本人の意思なら制御できるだろうが、ただこの隙を逃してはならない。拳を振り上げ突撃する。

「らあっー！」

迫る拳を横に飛び避けると、回し蹴りで横っ腹を捉える。効果は薄そうだ。



「うーん……硬いな」

手応えとしては壁を蹴った感じ。トーキックでこれだ、普通に殴ってもダメージは期待できない。距離をとつても仕方ないので更に距離を詰め、超近接短打をメインにする八極拳に切り替え、まずは急所、と行きたいが金的以外の効果が薄そう。なので内側からの破壊を目的とする。発勁や鎧通し、投げや運動エネルギーを使った攻撃の方が有効だろう。様子見に横っ腹に寸勁をプレゼント、

「おわっ！」

効いてるようだ。捻りをもつと加えてみよう。後ろに回り込み貼山靠、……よろけはするが、まだ決定打に欠けるな。発勁には練習法から抜粋すると三つある。最もシンプルな移動、推力を威力に変える、当。捻り、震え、体のバネを利用し威力を増幅させる、震。呼吸と機、全てを最大効果に合わせ、脱力から放つまでの攻撃を整える、零。……まあ、それ以外にも武術別でいろんなのがあるのだが（正直知らん）、震は体の使い方が重要になってくるが、威力重視で体を使うと、予備動作が大きくなる傾向がある。ならどうするか、絶対当たるとタイミングを狙う。もしくはカモフラージュするだ。

「さて、終わりにしよう」

両手をペタリも付けるようにして、双撞掌を叩き込む。この技、防御しても半分はダメージが通る技なのだ。

「……ほら、Sランクのカードだ。無くすでないぞ」

………どうしてこうなった。いや、俺が悪いのか、少し考えればわかる事だ。Aランクに上がるだけの實力を持っている者をテストするのに、現Aランクの者を使う訳がない。ウォーレンは現役のSランク冒険者だった。そして、冒険者登録の際に剣を使うと書いていたのが災いした、俺の方は武器を使っても良かったらしいが、そんなもん後の祭りだ。

―要するに實力を見るだけで、勝てない相手と戦ってもらう予定が普段刀使ってる奴が素手で勝った。

「あの、Sですか？Aじゃなくて」

最終確認だ。多分どうやっても上げられるけど、

「当たり前だろ！俺に勝った奴をAランクにして置けるか！」

「……………勝った地点で、駄目だったか。なんか頑張ったのに損した気分。見届け人となった魔法使い（このギルマス）は、慰めるように教えられた。」

「何を気を落としているか知らんがの、ランクが上がれば、いい仕事も回ってくる。受けられる者も限られておるから、そうそう取られたりはせん」

まあ、メリットもあるがデメリットもある。俺が一番気にしているのは面倒くさい貴族だ、王族だのだ。このギルマスの話だと、強引な勧誘や、権力を振りかざす等には断固として対抗するそうだが、それ以外は個人の裁量に任せられるそうだ。やり過ぎなければどう料理してもいいそうなので、肩の力を抜く。

そのままさっさと帰ろうと思ったのだが、周囲の様子に違和感を感じたので、視線を走らせてみる。……………あれか、

「その依頼、僕も同行してもいいかな？」

朗らかな笑顔……………のように見えるだろうが、その内では冷徹に三人組（一人は女）の一挙手一投足、表情の機微を逃す事なく捉える。距離が近いと見逃すので、大きな身振り手振りを加えて近寄られないよう、不信心を持たれない位置と距離を保てる、もう一人のまだ少年と言える年齢の子供の少しに後ろに立って、

「誰だよ！」

早速噛み付いてきたな。でも君、騙されてるからね。そのまま付いていたら、攫われるからね。

「あ……………、これパーティーの集団行動に慣れる為の練習みたいなもので、討伐と採取はおまけなんですよ」

ふーん、そんなのあんの？やったこと無いな。俺が飛ばしてるだけかもしれないけど、まあ、歓迎してないのは隠せなくていいけど、目が泳いでる。が、それより話すペースが予め決めておいたという感じだな、最初のためより先がスラスラと出すぎている。

「それに分前が減るんだろ」

「この人数では、一日の飲み代にもなんねえしな」

「そっちの娘たちも来るの？くつついてるけど」

「ん？ああ、この子達かい？街に残ってもらうよ、ほら、これで帰ってくるまで遊んでなさい。あんまり買い食いすると晩御飯が食べられなくなるから程々にね。」

「はい」

金貨と一緒にメモを渡す。隔離空間内で代行者に書かせたものだ。この間に男の表情を千里眼で確認する（後ろ向いてるから）。あー、……これは黒だな。気持ち悪いよ、その下卑たスマイル。女の方は金の算用をしているようだ。何が楽しいのやら、

「子供に金貨一枚とか……、結構金持ち？」

「まあ、それなりには、飲み代くらいなら奢るよ、依頼の後にね……あ、君も好きな物を飲んだらいいよ、お酒以外で」

これでまあ、世間知らずの、またはカモに見えるだろう。

「……行つた」

「お父様も大変ですね。お父様の手を煩わせるお馬鹿さんは居なくなればいいのに」

「うん、……とここでそれは？」

「これですか？これはお父様が作ってくれた武器です。なんでもー、S&W M19をモデルにした。真理トウルースマッナムの銃だそうです」

「……う？」

首を傾げるアナスタシア。銃はクロエが使うので知っているが、何故ノルンには作った銃を与えたのか、

「……気になりますか？」

「……大体分かった」

読心ができる二人にとって言葉はいらなかった。ノルンは銃を時空間魔法のクローゼットに仕舞うと、行動を開始する。

さてと、どう出るかな？いくつか思いつく手は、戦闘で疲労した所を、信用を得てから不意打ち、人目のない場所で脅し、または実力行使、仲間を潜ませて奇襲なんてのもあるな、まあ、俺が警戒する必要のあるのは至近距離の不意打ちと、もう一人の連れてこられた獲物、この子をどう守るかだが、千里眼やら真理で調べたが、回収要員のよ

うなのがいる。信用を得てからの不意打ちをしようとすることまでは分かったので、未来視で仕掛けてくるポイントを探る。この先に落とし穴があるな。ここか、結界で穴を塞ぐ。ついでにや落とし穴の下を確認にして方法を決める。

「うわっ！」

少年が落とし穴に落ちる。下には柔らかかタイプの結界が貼つてある。俺は本来なら落ちる落とし穴の上に、……………まあ、結界の上なんだが。

「ギルドの冒険者でも無いのに、新人教育とは、頭が下がるね」

「……………なんだよ、バレてたのかよ」

「……………お前、何者だ」

「いや、なに、たまたま怪しい奴が目について、暇だし、捕まえようかなーと、丁度いい荷車もここに來るみたいだし」

木の棒を隔離空間から引つ張り出して、落とし穴の範囲から出ると同時に迫ってくる剣を弾き、短剣を叩き、一人に胸部の中心から腹部に一直線に三段突きを放ち、棒をクルクルと回して、二人の間を抜けるすれ違い様に後頭部に棒を当ててもう一人の意識を刈り取る。最後に距離が遠い女の喉元に棒を突き付けて終わりだ。その後、落とし穴の中の少年を引き上げて荷車を待つ間に状況の説明をする。

「何故、二人とも荷車に……………」

アリスが荷車を引いてきた。俺の人選なんだが……………、基本的な身体能力のスペックはアリスが一番高い。向日葵やクロエ、クロシエツトは身体能力は高いが、それはスキルの影響、クロエの攻撃力は今のところ際限無く上がっている。少しなら速度も上げられるが、防御力は据え置き、むしろ攻防のバランスが偏るので脆くなる傾向にある。向日葵は強欲系の特性で、腕力以外は強化されていない。クロシエツトは完全なスピード特化、しかし、スキルを抜きにした場合はアリスが最も高い身体能力を有している。そんな荷車には縛られた小汚い四人の男とそれを踏み、仁王立ちして風を切る二人の姿が、……………まあ、アナスタシアとノルンだな、

「よし、あとはこれ積んで……………よし、帰るぞ」

「あの、あなたはギルドの冒険者……ですよね」

……まあ、売り飛ばされそうになってた訳だしな、未遂だけど、少年の不安を解消するために、カードを渡す。

「S………ランク」

あつ、さつき上がつたんだった、Bのつもりで出していた。そこから少年は一言も発する事はなく、帰り荷車の上で固まっていた。こう言うのも突き出せば報酬とか出るのだろうか、なんて考えながらアリスの横を歩く。

## 朝ラーメンとダンジョン

熱気が立ち込める厨房、グツグツと煮え滾る鍋は水蒸気を上げる。  
「ふっふっふっ……………」

煮えたぎる鍋を見つめる一人の少女。飾り気の無い紺のメイド服を身に着け、頭からはうさ耳が垂れている。

「もうそろそろ良いですかね〜」

そんな事を言いながら灰汁を捨てる。それからラーメンどんぶりを用意すると、醤油（意外と出回っている）、牛骨と鶏ガラ（前、北川が討伐したデカイ牛とクロエがヘッドショットの的にしたコカトリスの骨、主にげんこつ）のスープ、残っていた小麦粉で作った麺を湯切りをして入れ、上から煮卵とチャーシュー（その辺のオーク肉を加工）を乗せる。……………まだ、トッピングや魚介スープ等足りないものがあるが、醤油ラーメンの完成だ。

「おっ、うまそうだな」

「ぴゃっ！」

あれ？脅かせてしまったようだ。耳がピンとしてる。

「旦那様は、いつからそこに？」

「灰汁取った時には厨房にいた。様子ならずと見てたが」

「むう……………、どうぞ」

何か言いたげな表情をしていたが、ラーメンを受け取る。

「熱っ！」

……………いや、熱ないわ、耐性があっても条件反射というかね、咄嗟に台の上に載せたのでちよつと汁が溢れた。視線が痛い、

「ごめん、箸もらえる？」

「あー、……………どうぞ〜」

うん、美味しい。昔作ってたのに似てるな。

「どうでしょうか〜？」

不安げな様子だが、その目には期待も混ざっている。

「美味しいよ、材料がない中でここまでいいものができてるんだ。もっと自信持っていよ」

久しぶりのラーメン（カップ麺はノーカン）を美味しく頂くと、今日の授業と腹ごなしを兼ねた格闘術の練習を始めるとしよう。

蹴り飛ばされる。何度も、何度も、だが、不思議な事にあまり痛くない。距離は飛ぶが上手く受け身を取ればダメージは殺せる。上体を素早く起こし、犬系の獣人ハルトは相手を見据える。同世代の他の仲間の攻撃を捌いたり、流れる様な動きで躲したりと一撃も当たっていない。一人で飛び込めばすぐに押し返される。ここにいる六人で連携しても、隙があれば弾き出される。もう少しで攻撃が当たるのではと思い始めると対処の速度が上がり、いつの間にか振り出しに戻され、今度はその速度に対応しなければならぬ。獣人であるハルトは鋭い感覚を持っている。それでもたまに目で追えない速度の動きがあつたりするし、何をされたのかわからない事まである。それでも向かうのは獣人の本能だろうか？少しづつ強くなっているのを実感しながらまた、先生に挑む。すると、すぐ横を風を纏った突きが横切る。「危ねー！」

エルフの身体能力は高くない。代わりに耳が良かったり、魔法の適性が高い。今の突きもギリギリで避けた筈なのに頬の辺りが切れている。多分風魔法で動きを補助している。しかし、先生にはかすり傷一つ付けることなく、それどころか、エルフの方が先生の避けた場所を狙うような異様な状態になっている。

「ロイ、魔法に意識を持っていかれすぎだ、重心や目の動きに出てるぞ」

すかさずハルトも飛び込む。が、そのまま投げられた。

「タイミングはいい、そのセンスを大事にしろよ」

そう言ってる間もエルフのロイの攻撃をいなしている。ロイの動きはさつきより速くなっているにも関わらず、………負けてられない！

「おっ、と」

「うおっ、邪魔するな！」

「協力しなきゃ、先生に当たるわけ無いだろ！」

「僕は一人でどこまで出来るか試したいんだ！」

「喧嘩するな」

スパパアン！

子気味のいい音が連続して響く、全然見えなかったが、頭を叩いたのは痛みでわかる。

「あだっ」「痛え……」

「個別に相手するなら、もう少し上の速度で相手するぞ、時間は短いけどな」

―もつと力があれば、ハルトの心の中にある声、盗賊に追いかけていたあの時、自分に力があれば逃げる途中で弱っていく仲間を見ずに済んだのでは無いだろうか。……弱っている者は売り物にならない。そう言う場合、周りの盗賊が処分を任せられる。実際に見た訳ではないが、追われていた時を思い出すと、怒りや恐怖が蘇ってくる。

「お願いします！」

隣のロイからも強い覚悟が感じられる。あの時、俺達はクロシエツトとアナスタシアにみんな保護されている間に先生が一人で全員片付けていた。その中に仲間の姿は無かったそうだ。……生きていたとしても、もう仲間だと思ってももらえないと思うが、それでも……

「まっ、取り敢えず今は訓練中だと言う事は忘れるなよ？敵は待つてくれないぞ」

その言葉の直後、背中の中あたりで二人共吹き飛ばされた。

「……………よし」

これで語学も大丈夫だろう。読んでいた本を勢い良く閉じる。……………と言っても、サラマンダー、セイレーン、アルラウネが増えたのでまた覚えなれないといけないのだが、代行者に同時翻訳してもらうため、俺はそこまで急ぐ必要はない。あいつ等はどうか知らんが、

《現状、向日葵とアリス以外は複数の種族の言葉で会話が出来ます》

……………すごいな、詳しく聞いてみると、アナスタシアとクロエは魔力に込められた意思の超演算によって意思疎通を測っているようだ。ノエルはまだコツを掴み損ねているが何人かに限定すればできるよ



うだ。ただ、魔力があまり無い獣人系の種族とは上手く会話が出来ない。レアは俺の記憶のコピーにある程度含ませてあるので、エルフ、獣人、ドワーフの三種族とは話せる。そして、クロシエツトだが、なんと全部勉強して習得したそうだ。それもここにいる種族以外にも、

「……………勉強する時は一緒にやったほうがいいか？」

……………いや、それより出来てない二人か、アリスは自己鍛錬の合間に必死に勉強（勉強だけの日も作っている）しているが、悲しいかな、努力に反して身についていない。向日葵に関してはやってない。いつも俺に付いてきている。……………まあ、自由にすればいいと思うが、「先生！リタが！」

リタ……………セイレーンの子か、状況からしてして何かあったんだろうな。

「すぐ行く、状況については移動しながら話そう」

そう言いながら代行者に場所を聞いて千里眼を使い、様子を確認、倒れてる。苦しんでるから一応意識はあるが、呼び掛けに反応出来るかは微妙、外傷は無し、となると……………

「レア、ちょっと来てくれ」

「はいー、わかりましたー」

千里眼を併用して、真理を使い抑えている腹の辺りを見る。……………デカ！寄生虫か、どのタイプだ。この苦しみ方から見て人を終宿主とするタイプではないだろう。腸にいる所から見て回虫かサナダムシの仲間か？他にもいるか？

ジャイアントパラサイト

サナダムシの事

蟻虫

そのまんま蟻虫

犬回虫

犬に寄生する回虫だが、人にも寄生する。

舌打ちしたい気持ちを抑えると解決法を模索する。別に上2つは増え過ぎなければ放つといっても大丈夫だが、犬回虫は別だ。前記の説明通り本来なら犬に寄生する線虫の仲間、犬の心臓やらに絡みつい

たりする。人間に寄生する場合は成体にならないがそれも問題とも言える。寄生されないのが最も理想的だが、回虫の名前の由来はまず口から卵で入って胃液で殻を溶かし、小腸から血管に入り、肺に移動し、そこから気管支を登って小腸を指すなんとも回りくどい体内巡りをするためだ、その過程において一番問題なのが血管を渡る所だ。こいつら迷惑な事に迷うのだ。その上犬と人では体が違いすぎる為、余計間違える。そしてこいつらが一番間違えて厄介なのが脳や目だ。そしてついた場合の対処法は無い。腹にいるのが全てか？他をよく探す必要もある。特にサナダムシの存在が邪魔だな。いろんな意味で、……………虫下しの薬で何とかなればいいが、内視鏡なんて無いしな、……………隔離でやってみるか？

障壁を張り、窓を開くその障壁に『寄生虫以外の透過』の条件を付ける。……………よし、これならどこに入り込もうとも取り除ける。

「レア、虫下しの薬を頼む」

それと現在保護している子供達もスキャンをして置く。選り取り見取りである。寄生虫の話したが、……………とは言っても暫くはみんなにも飲んでもらおう。虫下し（吐き気を誘う程の甘い味付けだよ）

「さて、と、大仕事に掛かりますか」

とは言っても一瞬なんだか、自分の正面にある湖との間に障壁を張り、『湖の透過』『有害物質等の隔離』『ゴミの隔離』を条件にして、向こう岸まで動かす。後は隔離からゴミを出し、子供達から取り除いた寄生虫共々火魔法で焼く。ちなみにこれらの作業は森の外でやっている。有害物質は一部焼いて、焼けない物は地面を結界で掘って埋めた。これでセイレーンの住処となる場所は完成した。後はサラマンダーなのだが、こいつは意外と問題なかった。本人達曰く、雨を凌げれば良いらしい。ただ寝具は石畳となる為、強制的に一階になるが……………、アルラウネは俺の付近によくいる。理由はわからんが畏れられている。……………一人だからと言う部分か、人族そのものにいい感情を抱いていないか、時間を掛けてゆっくり解決していく必要があるがうだ。そんな訳でランプマジックを披露している。

「どうしてこのカードさんだけが後ろを？」

「見てご覧」

このマジックは錯覚を利用したもので俺が持つてるトランプの山を逆さまにして、予めに引いてもらった一枚のカードを俺に見えないように戻してもらったものだ。後は俺の持つてるカードを戻せば、一枚だけ逆さまになると言うテクニクも要らないマジックだ。話術で意識を逸らせれば誰でも出来るマジックだ。

「……………同じです…なんで!…なんで!」

「ビックリした?」

首が千切れんばかりに首を縦に振る少女。短いワンピースに白のニーハイ、長い手袋、その所々には小さな黄色の花のワンポイントがあしらわれている。そして一際大きな黄色い花が頭の天辺のつむじの辺りに咲いている。この頭の天辺の花がアルラウネの特徴、後は人と同じ食事を必要とせず、水と日光があれば生きていけるそうだ。アルラウネの頭の花は健康状態も示している為(買われる時に影響)、捕まっている間も他の子たちよりも待遇等は良かったようだが、普通は森や山に住む者、精神的な負担はあったと思う。

「無理の無い範囲で時々顔を見せてくれ」

「うーう……………わかったです」

あんま、乗り気じゃない感じだな。

「興味があつたら授業も見てつてくれ、お前の好きなようにすればいい、アル」

そして、アルラウネには名前が無かった。なのでアルと呼んでいい。

「……………あ、明日から、見にいつても?」

「ああ、いつでもいいぞ」

ついでに似合いそうな帽子を隔離空間から取り出し、渡しておく。また、作業にかかるかな。ちよつとした事なら大概レアに出来るからな。

ある程度資金が集まったので、離れのような形で増築していこうと思う。後から通路だけを通路だけを伸ばす感じだ。最初から大きい建物を作る場合、設計をしっかりとしないといけないが俺一人でそれは

限界があるし、多分サクラダ・ファミリアみたいに何時までも完成しないなんて事に成り兼ねない。それよりは一つ一つ完成させて繋げだ方が無理も無いし、今の俺にあったやり方だろう。和風で行くか。代行者に欲しいスペースを伝えて間取りと設計案をいくつか出してもらう。

「うん、この間取りで行こう」

早速、予定地に杭を打ち、糸を張って仕切る。材木等はもう加工済みのものが多いので万能結界を代行者の制御の元、寸分の狂いなく家を建てていく。早送りみたいに尋常じゃない速度で完成した。ただ、「土壁は綺麗に塗れないみたいだな」

あとから全部塗った。基礎なんかは芦原さんから仕入れたコンクリートが流してある。……………別に変なもの混ぜてないからね？まあ、何かと便利なのだ、頑丈だし金塊からなので無料、外観は代行者に任せて、俺は内装関係の家具やら装飾やらをこなしていく。途中、モノ作りグループ（前の鍛冶に参加してたドワーフ中心のグループ）に見つかって組み木や継ぎ手なんかを教えながら過ごした。……………次の日、朝起きたら軒先がオブジェだらけになってたが、「すいません」

朝は大変だった。今度は何だというのだ。ギルドの壁際の椅子に腰掛けて何となくぼーつ、としていた。そんな所に受付の職員が話し掛けてきた。

「なんででしょう?」

「実は今、Bランク昇格の試験をやっているのですが、試験官の方がこられなくなっちゃいました……………」

えっ? Bって試験あったけ?……………ああ、あの試験官が行する奴か、何が起きるのか分からないため、ランクも高く、人数も必要だ。俺の時は他の候補がいなかったので、ワンツーマンでやり難かったのが記憶に残っている。

「同行する試験官の方は?」

「2パーティ同行します。受ける方は4パーティですね。報酬については、金貨10枚をお支払します。」

俺だけソロか………しかし、金貨10枚とは結構出るな、そう  
だ、あいつらの中から誰か連れて行くか、前、街の防衛戦に参加し、ギ  
ルマスのダインから登録を勧められた時に聞いたのだが、従者や、従  
魔、奴隷、そしてオートマタの様な自動人形、これらは持ち主や主人  
が冒険者として登録していれば、連れて行く事ができる。………だ  
が、まあ、確認は基本だ。(社会人のマナー)

「この依頼には、僕のオートマタを連れて行っても大丈夫ですか？」

「ええ、問題ありません」

「じゃあ、受けようと思います」

「では、明日の早朝をお願いします」

「………早すぎませんか？」

まだ五時だが？ 周り誰もいねえ、不安になったので受付の人に声を  
掛けたのだが、外には見慣れた朝特有の薄い霧が立ち込めている。子  
供達を保護してからは、比較的規則正しい生活を心掛けているからな  
(徹夜を除く)、仕方がないので、向日葵とアリスと雑談をしながら待つ  
事にした。

「アリス、最近どうだ？………あまり時間を作ってやれてないけど、寂  
しい思いとかはしてないか？」

「い、いえ！ご主人様にそのように思って頂けるだけでも、ワタクシは  
嬉しいです！」

「ご主人殿、私は？」

膝の上に向向日葵に滑り込んでくる。下から覗き込む上目遣い付き  
で、

「………悪かったよ、この依頼が終わったらどっか行きたい所、連れて  
行くからな、もちろんアリスも、」

最近は、色々とゴダゴタしてたからな、あまり構ってやれなかった  
自覚がある。………後あんまり膝の上で動き回らないで欲しい。ク  
ロエやクロシエツト程では無いが、胸が色んな所に当たってるんです  
よ。何処とか言えないトコロにも、

「ワ、ワタクシ、ご主人様がいない時は鍛錬をしているのですが………  
その、じ、時間がある時に見て頂いてもよろしいです、か？」

「うん、いつでもいいよ。よく頑張ってるな」

アリスの頭を優しく撫でる。

「私も撫でてください」

「はいはい、お前も頑張れよ」

仕方ないので撫でてやる。……手が疲れてきたなー、と思い始めたぐらいに、二パーティー程の姿が見えてきた。見た感じ試験官の方だろうな。

「あんた試験官か？朝っぱらからこんな調子でいいのかよ、………と  
言うより誰？」

「受付のに声掛けられてな、Sランクの北川だ。よろしく」

面倒事を避ける為にカードも見せる。

「Sって………筋肉戦車と一緒かよ」

誰だよ、筋肉戦車って、

《試験で戦ったウォーレンの二つ名です。数年前、傭兵だった頃に戦車の突撃を身一つで止めた事から呼ばれています。なお、現在なら押し返し、引つくり返す事もできるでしょう》

うへえ、バケモンじゃん、………俺それと同格なの？ちなみに戦車ってどんなの？馬とかが牽くチャリオットでも馬ごとになるんじゃないのか？

《戦車は戦車ですが、チャリオットではなく、タンクです》

………ガチやん、タンクってアレでしょ、モノホンの戦車や装甲車じゃねえの？へりがあるから、ないとは思ってなかったけどさあ、それ投げるって、

《へりと同じで魔法の要素が強いので、元の世界で使われていた戦車よりも二割ほど軽いです》

二割しか減つとらんやないかい！

「えーと、キタガワさんは何で戦うんだ？」

「主には刀かな、そっちは？」

持っていた刀を前に出すと、彼は自分の背中を指差す。………デカ

い剣だが、持て余してはいないな、我流の分、死角はありそうだが、  
「俺はこいつを使うな、木の盾ぐらいなら纏めて切れるしな、あと怪我  
したらあっちの……………」

「大丈夫だ。こつちもなんかあったら言えよ」

聖魔法の使い手もいるので困った時は頼らせてもらおう。

「……………で、そつちは？」

「俺の事を知らねえのか？」

「知らね」

「そいつは……………」

「俺様の名前は……………」

「前置きはいいい、短剣術6以外については黙つとくから下がれ」

「ぐつ……………」

こいつバレてないだけで、強姦が三件と窃盗で、称号にコソ泥と色情魔とかついてる。向日葵達を見る目の動きからもロクな事言わなさそうなので、牽制代わりに軽くジャブを入れといたがすぐ下がった。悪態はもう少し隠せ、殴りたくなるだろ。

あー、足辛い、明日筋肉痛かな、移動はほぼ結界に乗ってたから辛いわ、合計人数が（1パーティー4人）結構多いので移動はゆっくり目の筈だが、

「よし、ここで試験を行う。各自昼食を済ませてくれ」

ここで飯か、休憩にもなるしいいか、今朝準備して貰った。焼きそばパン（レア作）とコーンスープ（アナスタシア作）を出して素早く食べる。焼きそばパンはソースの味を俺好みに工夫してあったし、コーンスープは素材の味が生かされていて、どつちも美味かった。向日葵たちの分も出してあるのでその間に、試験の内容や予定を組むために相談に行く。

「今回の試験はどういう予定で行くつもりなんだ？」

「うおつ……………キタガワさん、なぜ背後から？」

「ちよつとした悪戯だよ、それよりどういう感じで試験をやるの？一  
気に纏めて？それともグループごとにな？」

「うーん……………今回は一気に纏めてここの30層のボスを討伐するま

でだな、様子を見てBに上がれるかを各自報告して、ギルドが最終的に決定する、らしい」

30層………？後半は記憶の片隅程度に記憶が残っていたのといとするが、目の前の、洞窟（地面に土を盛って穴掘った古墳にも見える。形は円墳）に冒険するほどの広さがあるとは思えないのが、気掛かりだ。不思議に思っていると、言葉の続きが耳に入ってくる。

「このメンバーでBランクに上がるには少し強めの魔物討伐をしないといけないが、丁度いい依頼が無い時は、ダンジョンのボスで代用するんだ、確実に戦えるが、移動が長くなる」

「………で、今回はこのダンジョンの30層が適当、という理解でいいか？………移動はどうするんだ？」

俺の試験時、丁度いいのがいて良かったわー、俺の場合蛇の駆除だったし、一応アナスタシアに控えてもらったが間合いに入った瞬間にクビちよんぱしたので、記憶にもあまり残っていなかったのだ、皮の値段が高かったことぐらいだな、

「そこも一応試験に入ってる。そこまでここは広くないが、魔物は強い部類に入るな、畏も少ないが、無い訳じゃない。………一番疲れるな、斥候が、」

「なるほどな」

ダンジョンについては代行者に調べてもらえばわかる。………ただ時間も掛かりそうなので千里眼を安全かつ最短ルートですぐに帰れるようにしておこう。

「………三時間は早すぎませんか？キタガワさん、三時間ですよ」

何を言う。千里眼が十層先までしか働かないだよ、他にも万能結界にも制限がついた。隔離が自分の近くでしか行えない。フロア内の宝箱は直接拾いに行かないと取れないので掻っ攫う事は出来ない。結界を張れる範囲も狭く、せいぜい自分と近くにいる一人程度、ただ何故か冒険は強化されてるそうで、吸収量が倍になってる（代行者曰く）。

「俺はさっさと帰りたいんだ。今日中に」

保護している子供（生徒）を一日以上放置できるわけ無いだろ。3



0層のボスがいる部屋の扉を蹴り飛ばす。

「あっ！中にいるのはサイクロプスだ。試験開始！」

ヤケクソだな……………。まあいい、見学と行こうか、

「弱いですね」

「すぐ片付けて欲しいですわ」

頬杖ついて俺の横で戦闘を観察してる二人からは辛辣な言葉しか出てこない。サイクロプスはデカイ。5メートルはあるな、魔法とかが弱点の目に飛んでいつているがまともにも当たってない。……………多分放つといたら負けるな、未来視では後二手で形成が引つ繰り返る。

「放つとくと負けるけど、どうする？」

「死にそうになったら助ける。それまでは極力手を出さない、……………そんな感じだな」

「……………じゃ、そろそろかな、このまま行くと全滅だな、と言うかこれ合格にできるか？明らかに能力不足な気がするが」

「そうだなー、これはどう見ても不合格だな」

グオオオオオー！

雄叫びをあげて大木のような棍棒を体制の崩れた前衛に振り下ろした。これが当たると死ぬので、素早く横から体当たりで棍棒の機動を逸らす、

「向日葵！アリス！姿勢を崩せ！」

足元に結界を張り、それを上に打ち上げ、飛び上がる。そこへサイクロプスの背後から膝裏に飛び蹴りを入れる二人（何故、膝カツクン）、あとはノーガードの目と脳を一直線に繋ぐように目に刀を刺し入れる。

「スタンエッジ」

ヒートエッジの風魔法バージョンだ。脳天まで電撃で焼けば流石に死ぬだろ。さっさと引っこ抜いて飛び退いて着地する。

「帰るぞ、……………って、ここからは各自解散か？」

崩れ落ちたサイクロプスが砂煙を舞い上げ倒れた。

## 気が向いたので異世界人探し（ウソ）

さてと、あのダンジョンは後でも行ってみたいな、財宝があるので稼げそうなのだ。そんな訳でクロシエットにノルンを連れてきて貰い、ポイントを設置してもらった。そのまま街でアナスタシアと合流して家に戻った。のだが……………

「家に穴空いてたかな？」

無論、空いてた訳ない。しかも工房の辺りとなると……………、原因は穴を塞ぐべく修理をしていた。

「レア、今日は手榴弾を作るって言ってたよな？」

ウサミミがピーンと立つと、ゆっくり振り返るレア、冷や汗タラタラ、

「えーと、あの……………一個だけピンが抜けてしまって、作ってた分が誘ばk」

レアについては簧巻にしてリンゴの木に逆さ吊りにしておいた。攻撃、白リン（焼夷）、破片、フラッシュバン、フレア類（ガス系）、クラストー（棘等各種）、後は応用と変わり種だな、軒並み爆発したが、白リン、フレア類、クラストー、応用と変わり種が無事なのは安心した。こいつらはガチでヤバイ奴らだ。変わり種は言ってしまうえば催涙の強化版だ。応用は複数の効果を合わせた対人殺傷力（ストツピングパワー）が高い仕様だ。こいつらが誘爆してたら、暫くこの辺りに住めなくなるどころか家が無くなりかねない。……………まあ、他は軒並み全滅だ。

「はあ……………、明日はダンジョン行くか」

ダンジョンの魔物は基本的に倒すと素材を残して他は消える。金目の物がある宝箱だけを最短ルートで回収して、道すがら倒した魔物の素材も回収しながら進んで行くが、

「ダンジョン深すぎ、今何層だ？」

《67層です》

……………ここから更に10層はある。救いがあるとすれば売値の高いものやら珍しい宝飾品やらが増えてることだ。今回はクロエとク

ロシエツト、ノルンを連れてきている。魔物はサイクルで相手しているが、今の所危険な敵には遭遇していない。一対多でも捌けているのだから余裕があるくらいだ。ただクロエとノルンの銃のせいかわけに魔物が集まってくる。なので後半はノルンは火魔法で、クロエは水魔法で倒していた。

「一回休憩にしよう」

ダンジョン内ではゲートは使えない。往復の事を考えるとこの辺りが最適だろう。それと意外とダンジョンは楽しい。罾がたまにあるので単調な戦いで眠くなってきた目を覚ますのに丁度いい、洞窟内なので暗いのだが、俺の真理は暗闇も見通すためか、昼間のようによく見える。こういう所では不意打ちが怖いのだがその辺りは千里眼で予め知る事ができるし、ゲームのボーナスステージみたいになっている。

「マスター、こちらをどうぞ」

クロエから差し出された紅茶を手に一服。……………うん、手間を惜しまず丁寧に淹れられたものだ。クロシエツトは袋からシユークリームを引っ張りだして食べているが、周囲に意識を向けて警戒している。ノルンは雲の上に寝そべっている。雲とは表現で実際は綿の塊、これがノルンに与えた武器だ。……………移動用の足でもあるが、余談ではあるがクロエからは殺気が出ており、俺たちを避け、通路を塞ぐように覆っている。邪魔をするものを排除すると言う意思表示だ。まあ、見えてるのだが、砂糖を入れてもう一口……………

「うげえっ！塩だこれ！」

「ふえっ?!もも、申し訳ありまつ!？」

盛大にコケるクロエ。その拍子に黒いものが見えたが、そこは触れないお約束、

《クロエがドジっ娘の称号を獲得しました》

……………そんな称号もあるのか、まあ、前見た奴にあつた犯罪関係の称号同様、マイナスというか不名誉な称号もあるようだし、あつて当たり前か、

ドジっ娘 砂糖と塩を間違え、よくコケる者が得る称号。運が少し

良くなる。

……：……なんと言うか割に合わない称号だな、黙っておこう。ここから3層分進んだがまだ終わりは見えそうに無い。ただ面白い物が見れた。

現状、この世界の経済は不安定である。例えば今手の中にある純金の指輪だが、この街で売ると、レートの二倍くらいになるが、ここから約50キロ、南南西の街では、レートの二割ほどの値段になる。俺達がいた世界では一グラムでも約5000円、高い理由はその希少性故だ、人類が保有(採掘したもの)している金を掻き集めても50メートルプールを2杯と半分程、海に含まれている金には到底及ばない。しかし、これは前世の話この世界には魔法があり、錬金術がある。それにダンジョンから金の装飾や宝飾の数々が見つかる。錬金術は金を作り放題、ダンジョンも財宝を作り、それも宝箱に入れて配置するようだ。市場のレートは需要と供給のバランスで決まる。が、だからと言ってここで大量に売り過ぎると、この街の市場から貨幣が消え兼ねない。個人で大袈裟な、と思うかも知れないが俺の前に渡った異世界の何人かはそれで街を壊している。……：……ただ、「金プー買い、って書いてあるな……：……」

何か見たことあるような無いような看板の店に入るのが何となく嫌で長々と考察していたが、多分いる。異世界人が、カランコロンカラン、

喫茶店か！つと心の中でツツコミを入れて、店の受付に行こうと思っただのだが、ゴテゴテの成金が座ってたので、思考がフリーズした。

名前 轡田 慎也

種族 人

パーソナルスキル 時は金なり 金欲

スキル 目利き10 鑑定8 強運8 水魔法6 槍術4

耐性 炎熱耐性2 毒耐性1 斬撃耐性1 生命力2

称号 一攫千金

初めて俺達以外の大罪系スキル持ちを見たな。

金欲 内約

亡者の蒐集 物にのみ触れられる触腕が伸ばせる。一定の範囲内の所有者がない物を回収できる。

大金庫 貨幣や金、宝石等を際限なく収納できる。

時は金なり 内約

自分とその支配下にある者の寿命を金に変えたり、金を寿命に変える。

予想はしていたが油断ならない相手だな、……………さて、どうやって引き込むか、幸い、交渉材料はあるしな、

「買い取りをお願いします。ダンジョンの物なんですが」

「おう、まず見してみい」

……………芦原さん連れて来たほうが話し早いかな？

「量が多いので、どうしましょう？場所変えますか？それとも少しずつ出した方がいいですか？ある分全部買い取って欲しいんですけど、」

適当に金の装飾品を台に積み重ねていく。鑑定対策で冒流でステータスは偽装してある。普段からしてるが、今回は幅広く低レベルから少数高レベルに変えている。

「あんさんは何もんや？」

「一応これもSランクの冒険者なんだ、」

「ほうー、そりゃあ凄いなあ」

身を乗り出してきたあたりから興味くらいは持つてもらえたか、

「で、いくらぐらいになりそうだ？」

「まだあるんとちやいますか？」

「あるけど、あんまり出してもかさ張るし、これくらいのが後……………」

《金の装飾品のみだと約256回分になります》

「……………軽く200回分あるけど、買い取れるか？宝石付きのは別にして、金だけなので」

暫くはポカーンとしてたが、

「がはははは、それは無理じゃな」

豪快に笑いだした。まあ、概ね上手くいったか、ここからが本題だな、

「で、代わりに情報とか伝手を教えてくれないか？色々欲しいものがあるんだが、どこにあるものかも解らなくてな」

まあ、俺のスキルがあれば何処とかそんな分かるが、紹介とかがいる所とかどうやっても無理だからな、これは長年こっちに居る奴しか持つてない。なら、街の顔役みたいな人に俺の事を憶えてもらうのが大事だろう。そして目的、冒険者の身分、そして見返り、基本となる要素は揃えたが後は俺の人となりを相手に知ってもらおう。

「また気になる物見つけたら来てえな、ほな、おおきに」

「いえ、こちらこそよろしくお願いします」

まあ、全部は買い取れないと言う事だが、俺は偽装した中に収納を入れておいたので、容量いっぱいだから預かって貰い、手元に欲しい分を受け取り、情報を差し引いた残りは藤白や芦原さんの方に寄付の形で送ってもらう事にした。受け取って貰う時、倉庫代は大金庫の事を仄めかして躲した。まあ、俺も大罪系のスキル持ちだと伝えて変な警戒を解くのも忘れない。パーソナルスキルは普通見えないのだ。だが、同系や対を成す天使系のスキル持ちは霧みたいなのが見えるから色で系統ぐらいはわかるからそこから予想することが出来る。ギリギリセーフだ。多分、……さて、アナスタシアを迎えに行くか、今日も教会で治療をしている。最近分かった事なのだが、教会での治療のお布施が食費足らずを賄っていた。足りないなら足そうかと思っていたが、アナスタシア曰く、

「余った分は一応取ってあります」

心を読まないで欲しい。と思う今日この頃だが、お布施で余るほど貰うの？教会の分は？とか色々思ったが、教会の分はしつかり納めているそうだ。……しかし、悪魔系スキル持ちの俺が入るのに問題とか無いのだろうかとか頭の片隅で考えてしまうのは心配し過ぎだろうか？教会の前で立ち止まっていると、

「教会に何か御用ですか？」

「あ、アナスタシアを迎えに」

「まあ！そうですか！こちらへどうぞ！」

手を勢い良く引かれながら教会に飛び込む、静かな空気には正面には

美しいステンドグラスから射し込む光が中央の台に優しく降り注ぐ、十字架が無かったりする所に違和感はあるが、いい場所だと思う。その台の前には幼い少女が目の前の怪我人を治療していた。(ちなみにこの台、説教台と言うらしい)

「暫く待つか」

魔法関係の本を読んで時間を潰していたが、結構捗る、一人で読書するならここが良いだろう。

「なんだい？うちは気に入った客にしか、刀は売らないよ」

「材料は持ちこむから、これと同じくらいの強度と切れ味の刀が打てるか聞きたいんだ、ここで無理なら……」

「おい、うちの工房はこの辺りでは一番の工房だ、見せろ」

釣れた、一見中学生くらいにしか見えないこの女性は父が異世界出身で、母がドワーフで刀にも興味を持ち研究しているため、代行者曰く、刀に関してはこの世界で彼女の右に出る者はいないそうだ、年齢は43歳、中学生ぐらいの身長でもドワーフとしては大きい方らしい。

「……ついでに研いで貰えるか？」

「これをか？手入れは行き届いているようだが……」

「簡単な手入れしかして無いからプロの目で見て貰いたかったんだよ、かなり使い込んでるし」

実際、解体して粉降って、拭って油付けて、戻すしかして無いしな、居合いは昔からやってたが、巻藁ぐらいしか斬ったこと無いし、生き物には骨がある。内臓に筋肉、皮膚もある。如何に刀が鋭くとも、容易くは斬れない。リザードマンなんかは鱗があるし、剥がして斬りますよー、という訳にはいかないし、なんやかんや酷使している。

「分かったよ、一応研いどく……結構時間が掛かるけどいいか？この刀と同等のものを何本だ」

「六本は欲しいな、……あと材料な、それと同じ材料を置いとくな」

アダマントタイトとオリハルコン、ついでにミスリルも置いとく、それと……

「これも使えたら使ってくれ」

前に倒したドラゴンの血だ。これも使えるらしいから置いてく、  
「ガンガンとんでもないのが出てくるな、……………しかし六本も何に使  
うんだ？」

「予備だな、一本は贈り物、あと代金はどうなる？」

「……………予備って、お前なあ、……………材料は貰ってるし、一本金貨  
30枚でどうだ」

「んー、やっぱり結構するな」

「材料費含めたらいくらになると思ってた、時間も掛かるし、かなり  
ギリギリだぞ」

確かにそうだろうな、でも、手持ちの金を大幅に減らすのは不安だ  
な、

「じゃあ、材料を多めに出すから買い取ってそれを代金に当ててくれ  
ないか？」

「おおお！それはいい、ドラゴンの血とアダマントをくれ！」

……………引くぐらい食い付いてきた。

ま、まあ、こっちの納得出来る条件になったし良しとしよう。ドラ  
ゴンの素材とか使い方が分からんし、隔離空間の肥やしになるよりは  
よっぽどいいだろう。

「何時ぐらいに取りに来ればいい？」

「取り敢えず一本目は一ヶ月ぐらいは欲しいな。その次からはもっと  
早くなると思うが」

「分かった、じゃあ、また来るよ」

さて、お次は、っと、

「……………っで、そっちも見つけたのか」

「二人程やけどな、……………にしてもなんで逃げるんや、手間かけさせ  
おってからに」

いや、あなたに追いかけて逃げるなと言う方が無理じゃね？顔  
を出してくれた方がいいが出迎えたのが芦原さんだったので見た目で  
ビビって逃げたのだ。もう一人は藤白が見つけたので逃げなかった



が、手続きでまごついてたみたいだが、

「えーとあなたは？」

「もしかして、ここの若頭的な？」

「誰が若頭だ……、俺は北川 龍登、森の中で孤児院兼学校をやっている。Sランク冒険者でもある」

「え？Sランクなんですか？」

「最近上がった」

「わしでもまだ、三日前にA上がったところやのになつとんね」

「………僕まだBですよ」

「まあ、取り敢えず二人のステータスを見せてもらおうよ」

一人は移動系のパーソナルスキル持ちで十メートルを高速で移動できると言うもので転移ではなく移動だ、ただ高速で動くだけなので体力を著しく消耗するようだ。スキル名は初めの一步、もう一人は………

「なぜターザンがこんな所に？」

「クエスト先の山に住んでたみたいで………」

腰巻き一枚の約2メートルの金髪ムキムキのどうやって街に入っただか気になるターザンだ。

名前 シリル クーパー

パーソナルスキル 森の守護者

スキル 投擲3 罨3

耐性 毒耐性7 雷撃耐性9 衝撃耐性7 環境適応7

称号 電撃を浴び高所から落下

称号がそのまま説明と化しているな、………木の上で雷に当たってそのまま落下つてところか？

「工事にハンタイする意思表示として、鉄塔に登ったンダゲケド、電線に………タッチしちゃって、そこからはチョットワカリマセン。」

カタコトながらも内容はしっかり伝わる。森の守護者か、森での優位と魔物や動物との対話できるという内容で、耐性も高いので藤白たちと行動してもらおう。もう一人は連絡係になってもらおう。今から鍛えて行くとしても、結構時間もかかるし、その間はこの役割で行

こう。せっかくだ、エドガーの所にも顔出すか、土産はシュークリームとモンブランだ、

相変わらぬいつもあつさり執務室に通される。出されたお茶に口をつけると、すぐにエドガーが来た。

「Sランクになったそうですね。おめでとうございます」

「はは………、なりたくてなった訳では無いんですけどね」

本来はAくらいで止めときたかったが、未だ安定した収入が無いものの、金払いのいい依頼が多いので、そっちに行きがちで、家も作ってる現状、どっちの時間も割けない。殆ど自転車操業みたいな状態だが、家関係の材料の買い入れを止めれば結構な額が手元に残るようになるし問題ない。土産のシュークリームを渡し、情報交換をした。いや、コネクションを作る為の交渉か、目的としては魔力に依存しない足が欲しい。問題はそこで俺が買えないという点だ。金は後で準備するにしても、門前払いにあえば金だけあっても意味が無い。俺の立場では行けない。紹介状でも無ければ、

「それと今回は、ちよつと特殊な物を用意しました」

「これは………何でしょう？」

「まだ試作みたいな物ですが、小さな近衛兵、と呼んでいます。モデルは長靴を履いた猫です」

「おお、前にエリーがネコが好きだと言っていたのを憶えてくださったんですね？」

「はい、気に入ってもらえると良いのですが………あと、今回は戦闘するタイプで喋ります。名前は持ち主がつける事で登録され、持ち主の危険を排除するのが目的ですね。命令もできますが、危険を伴う事は止めるようになってます」

最初はこう言う防衛重視の物を売るつもりだったが、市場価格的に貴族しか買えねえし、沢山は売れない。安く売れることは出来るが差があり過ぎて他の作り手が倒産してしまう可能性がある。特に性能面の違いが顕著に現れる。特に結界を貼るタイプよりも値段の設定が難しい。まあ、問題はそれ以外にもあるのだが、

「それと、この紙に魔力を通してください。こっちはエリーちゃんの

分ね。紙は魔力を通すと黒くなってしばらくすると燃えるので、黒く  
なったら離してください」

よし、二人共行つた通りにしてきてるな、紙はテーブル中央の灰  
皿に入れられると間を開けて燃え始めた。

「これは一体何でしょう？」

「これで二人共、収納が使えるようになったと思います」

「……………え？」

これは俺が冒流を使って作ったスキル付与アイテムだ。俺のスキ  
ルを隠すためにはその秘密を知る数は多くない方がいい。知ってる  
者は触れて直接でいいが、スキルの事は隠しておきたいが、協力関係  
を結びたい相手にスキルを付与したい、その時の為に作ったのだ。押  
借元はゴールドと偽冒険者三人組の一人からだ。それとお土産とは  
別に持っていたエクレアや母大福などを取り出す。

「収納がどの位入るかこれを入れて試してもらえますか？入った分は  
差し上げますので」

スイーツ詰め放題には意味がない訳ではない。……………しかし、親子  
揃って収納にせっせとスイーツを仕舞っていく姿はシンクロしてい  
た。代行者に計測してもらった所、魔力の最大保有量に容量は依存し  
ているようだ。ついでに大量に持って、誰かに自慢してくれる事を願  
おう。ケーキとかは食品なので市場の圧迫は避けられる。特にこの  
街には喫茶店があっても専門的にお菓子等を取り扱っている店が無  
い。新規参入する分大変だろうが、喫茶店にはケーキ類を卸してもい  
いし、そこらへんは大丈夫だろう。要するに種蒔き、後は……………

「お前も完成させないと、ルシア」

## ジエノサイドレイブンの殲滅

「先生！どうでしょうか!？」

「お願いします！」

「先生！少し見てほしい所が……」

今日は街の方に行かない日だ。人気なのはいいがなかなか大変だ。ドワーフと少数の人族グループ（通称、ものづくりチーム）は家が作りたいと言っていたが、いきなりは無理なので課題として倉庫の設計図を渡した。木はここで切った物を使ってもらった。一応干してはいたが、乾いてなかったら困るので冒険で水分を抜いて置いたものだけを渡したのが昨日、

「出来てるし……」

ワンツーマンの格闘術の訓練希望組はオーガと一対一なら勝負なら無傷で勝てるレベルだ（藤白は基本一撃粉碎）。特にウィルとキリエ、ハルトとロイは頭一つ抜けている。……と言ってもまだまだだが、それと獣人以外が幅広く参加する魔法研究組は、普段は静かだがこの日だけは質問のため集まってくる。他にも少数のチャレンジャーチームというのがあるのだが、長期的な準備が必要なので、今の所成果は無いが、試行錯誤している様が微笑ましい。勿論、助言もしているが、何分知識だけの事なので間違っではないと思うが正解でもないかもしれない。そこら辺が歯痒い、

「じゃあ、まず倉庫を見て、最後に組手をやろう」

倉庫については設計図に課題点を書き込んで、また別の倉庫の設計図を渡した。組手も日に日に良くなって。危険なこと（手榴弾制作等）以外はやりたければやらせるけど、なかなか身一つでは厳しいな、裁縫とかはレアにも見てもらってるし、料理や魔法はアナスシアとクロエ、最近はノルンも参加している。アリスは武器の指導をしているが、自分の修練優先だし、向日葵は実践の相手しかないし、クロシエットはいつの間にか居なくなっている事がある……ちやつかり飯時には帰ってくるが、

「……………今日中は無理そうかな」

今日は寝るか……

「……………やつと寝たにや、お兄ちゃんは頑張り過ぎなのにや」

窓からひよこつと覗く二つの猫耳、5徹は当たり前前のハードな生活リズムに多忙なスケジュール、その全てを把握し、今回の作戦を遂行する。

「3時間、にや」

タイムリミットを口にして、屈伸、背伸びと軽く準備運動すると音を消した跳躍で闇の中に消えていく。

「にやふにやふ、にやつにやつにやつにやにや」

レアに作ってもらった手錠を一人ずつつけられた一団を引き連れ森に戻ってきたクロシエツト(軽やかにスキップ)、それを適当な木に全員を繋いだ鎖を結ぶ。

「お兄ちゃんが起きるまでここでじつとして欲しいにや」

「大丈夫だ、もう起きたここに拠点に移そうとしてたのを尋問してアジトを突き止めたんだろ？」

「お兄ちゃんすごいにや、正解なのにや」

「……………行くにしても一言断ってから行け、心配するだろう。この手の調査や下見は俺の方が得意だし、ちゃんとさえ」

「?大丈夫なのにや、クロシエはお兄ちゃんの作った人形にや、お兄ちゃんや他の子以外に負けたり捕まったりするような子じゃないにや」

「ちゃんと自分にできる事かどうかは冷静に判断しろよ」

「わかってるのにや、行ってみて大丈夫だったのはすぐわかったし、全然問題ないにや」

……………あつ、しまったにや、そう言ってるかのような表情だ。

「おい、……………今、初見で行くかどうか決めた感じの言い方だったな、」

視線は横に逸れ、耳は伏せ、尻尾は太ももに巻き付くように張り付いている。下見をしていないとなると、これまでどこに行っていたのか、……………いや、可能性があるとするればあそこだけか、

「ダンジョンか？」

千里眼で捕捉できない場所なんてここしか知らない。

「……………」

返事は無いが死にそうな顔をしている。

「はあ……………何してるか聞いていいか？」

「……………欲しいものがあるにや、ただそれは作らないとないにや、レアちゃんに作ってもらうにしても材料がないと無理なのにや、でも、ギルドには登録できにやいし、懸賞金か、ダンジョンのキラキラしたのを売るしかできないのにやー」

「言ってくれば俺の作れるものなら準備するぞ」

「それは申し訳ないのにや、いつもいつも忙しいお兄ちゃんのやりた  
い事を止めてまでするこじやないのにや、……………それに、何か出来る  
事をした方がいいと思っただからやってるのにや、お兄ちゃんは強い  
し、器用だし、優しいし……………支えになれることが少なすぎるのにや  
！」

「気持ち是有り難いが……………まあ、お前ならいいか」

「お兄ちゃんはお金が多いにや、もしもの時、頼れる存在であ  
りたいのにや。駄目かにや？」

「いや、金に困ってるのは少し理由がある。」

この世界の人類は滅びに向かっている。経済は絶妙なバランスで  
成り立っているのだが、街一つ一つが閉鎖的すぎる為に誰かが外から  
来て大量に物を売ったり、買ったり、帰られると街の市場から金が一  
気に無くなったり、溢れてしまう。需要と供給の理論は物の値段の説  
明に用いられるが、理論は同じでも金はもつと悲惨だ。増え過ぎれば  
金の価値が下がり、インフレが起きる。ハイパーインフレーションがド  
イツで起きた時は街中に紙幣が捨てられ、札束で遊ぶ子供達、買い物  
カート一杯に札束を詰めて買い物に向かう男性、等印象的な映像とし  
て見たことのある人もいるだろう。最たる例は喫茶店でコーヒーを  
飲むのにもトランク一杯に札束を詰める必要があった。会計をする  
時にインフレが更に進んでもう一杯分トランクがいるようになる程  
だ。紙屑同然だ。デフレは逆で物を作る人間が悲鳴を上げる。市場

に出回る金が少なくなり、経済が低迷する。収入が減れば、支出も減り、貯蓄する人が増え、更に収入が減る。売る側も価格を安くしないと買ってもらえない為にどんどん土壺に嵌っていく。そうならない為に持ち直せるように、デフレの街で買い物をして、インフレの街には金品を持ち込んで換金しているのだが、いつの間にかまた傾いている。そうこうしているエドガーから団体に送ってもらう金を見繕うと手元には小遣いぐらいしか手元に残らない。

「まあ、少し勉強したら後は自分の好きなようにすればいい。もしかしたら貸してほしい時があるかもしれないけど、あんまり貯めるなよ？」

「わかったのにやー！じゃあ、これとー…これをお願いするのにやー」  
さっきの盗賊を指差してから袋の中から金やら宝石が出てくる。  
……………俺より集めてない？

《現在持っている宝飾品の三倍はあります》

……………マジかよ、売ったとは言っても結構あるぞ、六割くらい、  
……………まず、生物ナマモノから片付けよう。クロシエットの足元に転がっている血塗られた麻袋を拾う。

生物と生き物を詰め所に押し付けて、ギルドに行って手頃な依頼を受けて偽装のために街の外を目的地方向に歩いていた時だった。なんか聞こえる。千里眼で確認、最近多いのだ。新人冒険者か知らんがパーティーごと全滅する所が、見たところ一人は死んでる。立ってるのは後衛と思しき二人、残り鎧二人は伸びてる。結界を足元に出しそれに乗る。後はオーク×4を解体する。一瞬の出来事である。ついでにレア作のポーションと呼ばれるこの世界の魔法の回復薬を倒れてるのにかける。……………鎧まで再生したぞ、おい、

ブギヤアアア!!!

うお、びつくりした。死んだあとでも鳴くのな、色々やってたせいか斧以外の武芸のスキルが1つづつながら上がった。

「大丈夫か？そっちは動けなければ無理に体を動かさなくていいぞ」

「レミは……………」

「レミってのはあつちで倒れてるのか、あいつはもう死んでるよ」

「……………あの、あなたは？」

「ノースガーデン、Sランクの冒険者だ」

「はは……………、そりゃあ強いわ」

乾いた笑い声を漏らす鉄の鎧、動きや構えは素人どころか鎧を着て戦うことにも慣れてない感じだな、よくこれで戦えると思ったものだ。

「なあ……………、お前らのランクは？」

「Fだ」

「やつぱりか、オーク一体くらいならこのメンバーで相手取れるだろうが二体になったら逃げろ、それと自分の装備を使いこなせるようになれ、鎧だつてテキトウに身につけるだけならただの重りだ」

「いや、鎧も身に着けてないでしょ」

「じゃあ、お前らはなんでその鎧をまともに着ないんだ？俺は着込みなんだ」

実際は服やコートの刺繍に耐性と自己再生だけなんだけど、結果があるものでそれ以上いらぬのが現状だ。着込みと言うと鎖帷子（外国風に言うとかエインメール）だが、あれでも結構重いが、鎧との動きやすさは比較するまでもない。

「ま、オークなんていい素材ないと思うけど、いらぬなら燃やして行くし、どうする？」

「じゃ、じゃあお願いします」

おいおい、確認してよかったよ、

「討伐証明は？何処か分かるか？その部位持っていけないと金は受け取れないぞ」

「えっ、貰っていいんですか？」

「討伐証明？つてなんです？」

「冒険者に成り立てだろう？最低限でも必要な事は勉強しろー、蹄だ、左の蹄」

オークって足は蹄で、手は人と変わらんからな、二重取り防止の為に左限定なのだ。ここ重要、どんなに強くてもこういう所で取りつぱぐれるのが、意外という。何かとギルドのルールが細かく、保険の契



約の時並に確認作業がいる。ただ、ドラゴンだのは例外、鱗一枚だのは論外だが、素材すべてが使えるため持ち帰る事が多く（後からでも）、その部位が決まってない。証明のために傷つけるのを良しとしないのもあるが、まあ、ともかく蹄を取った豚を火魔法で焼き払う。「まっすぐ帰れよ」

久し振りに言ったな、これ、

あのグループから別れて、目標の山の上の更に上空を陣取っていた。理由は簡単、バカ正直に山を登る必要もないし、上を取られるとこつちが不利になる、それにこつちなら奇襲で数を減らせる。

「ライトニング×10」

一瞬で更地になるし、多少残ったけどこれで依頼完了でよくね？とか思ってたら残り数匹がこつちに突っ込んできた。大半は四方八方に蜘蛛の子を散らす様に逃げたが、証明には多少いるだろう。Sの依頼となると単独で危険排除とかあるので討伐証明とかは二の次になる物も多い。特に巣とか、コブリンの集落とか、静かに精神を研ぎ澄まし、一閃、烏ぽい鳥（サイズは鷹や鷲以上）の足を切り落とす、証明が足だし、こうすればいずれ出血で死ぬし、証明にはちようどいいだろう。さて他は？つと、さつきライトニングを落とした所に動くものがある。取った足は隔離して、山頂に降れる。

「……………そう言えば、ジェノサイドレイブンは子供を執拗に狙うんだったな」

自然の摂理と言ってしまえばそうだが、肉食動物は群れの中でも弱いものを狙う。確実に仕留めるために、そして食うのなら固いところより柔らかいところから、歯のある動物はだいたい腹から、鋭い嘴を持つ鳥なら目から、生死を問わずここにいる者たちは目が無かった。生きてる者は、アナスタシアに治せるか聞いてみよう。取り敢えず生きてる方は隔離、残りは焼いて、気持ちばかりだが石を置いて墓の代わりに、その前で手を合わせる。さて、早く帰らんな、隔離空間内では時間停止もできるが、生き物だけは適応外だ、ノエルを隔離で呼び出し、転移する。

「アナスタシア、いるか？」

「……………ん、んん」

「少しみてほしい、治せるなら治してほしい」

隔離から十人出す。人8、リザードマン2だ。所々肉を抉られているが、何より衰弱が激しい、初めの頃に頼んだ点滴がぶっつけで使うことになりそうだが、不意に服の裾を引っ張られた。

「だっっ……………」

えー……………、このタイミングで？

現在、ノエルを肩車しているため、正面で抱えるしか無い。頭上の重心を考えると俗に言うお姫様抱っこ一択になる……………これが狙いか。

「仕方ないか……………、何故ドヤ顔なんだ？」

「なんでもない」

視線が少し下に動いたな、多分ドヤ顔はノルンに向けたものだな、暴れるなノルン、そして煽るなアナスタシア、

「……………早く回復頼めるか？」

「わかった。はい」

テキトウだなー、がしっかかり魔法は発動し、傷が消えていく。

……………おい落ちるぞ、じつとしとけ、まあ、目が覚めたらどうするか聞か、後は報告してきて報酬を受け取ってゆっくりするか、

相変わらず、次の日になると完成している倉庫、早くないか？

……………なら課題の方向性を変えるか、

「この材料で倉庫を作ってくれ」

「……………柱の分はあっても、これだと梁の分が足りないです」

「ああ、普通にやれば無理だ。たがら組み木を教える。やり方はいくつかあるけどそれに適した方法を使って建ててみてくれ、はい、プリントに特徴と種類を纏めといたから」

「「はー」」

いい返事だ、今日はダンジョンに行こうか。

世間一般のダンジョンの認識は、ダンジョンは生き物と定義され、魔物や財宝を生み出し、無限の迷宮とされている。が、実際は100層を限度としているそうだ。魔物も財宝も際限なく作れる訳ではな

く、エネルギーを外部の生物から集め、土地から集め創り出されている(陰陽学、龍脈の記載から)。何故こんな事を知っているのかといえ  
ば……………」

「軍隊を壊滅させたこのダンジョンを……………まさか一パーティーに」

前、千里眼で見た先に、何か彷徨ってたので調べてみたのだ。魔物でもなく人でもない、だが形は人、実に面白いものだ。……………俺も人のこと言えないが、目の前で項垂れてるのに聞いたのだ。最初は会話が出来なかったので殺気をぶつけたら、そこからはスラスラ答えるようになった。

「……………そうか、じゃあ、一つ提案なんだけど、」

「な、なんでしょう……………」

「闘技場……………規模はそこまで無くていいからちよつとしたスペースを作ってくれるか?」

こいつはダンジョンそのもの、いわばコアだ。魔物も財宝もこいつが指定して出している。なら、丁度いい訓練場ができるのではと、練習だけでは身につかない事は多くある。変な癖が付かないように注意する必要があるが、あの四人だけなら大丈夫だろう。準備しといたアレもこれから使うつもりだし、何より対人(二足歩行)と対獣(四足歩行)では対処法が変わってくるし、格闘技は対人特化なので人以外を相手にする場合はやりにくい。大概はここで武器が必要になるが、動物によつては相性の悪い武器もある。こういう場合の最善は苦戦や失敗を経験して、それを糧にしてもらうのがいい。相性が悪いだけで勝てない訳ではないのだから、

「それと、危険な奴を見極める為に、一回お前が出せる魔物と全部戦うけどいいか?」

—3時間後

……………ああ、大方問題ありそうなのは熊とか蛇だな、あとデカイカマキリ、それ以外は楽勝の奴ばかりだな、しっかし、どんくらい戦ったか、

《1063体の各種魔物を討伐しています》

おお……………そんなか、集団戦を想定してゴブリンとか弱いのはダー

スで相手したしな、

「じゃあ、そろそろ帰るわ」

さて、あっちも大詰めだし、徹夜になるな、辛くとも自然と笑みが溢れる。

人はそれを勇者と呼ぶ。  
ルシア

「……………よし、随分待たせたな、ルシア」

『ルシア……………それが私の名前でありますか？』

「そうだ、よろしく頼む」

『い、いえ！こちゅら……………お願いします』

何故、噛む。

「……………今日からこれがルシアの身体だ」

ランタンを開け、小さな光が人形に吸い込まれて行ったのを見届ける。その後打ち震えるように、片膝を付いて礼をする。

「今この時より、私は殿下を守る盾、剣となりましょう。にやにぞど……………」

人形に宿っても噛む所は変わらなかつた。黙っていれば凜としたクールビューティー、喋ると噛み倒し、……………何かクロエとアリスを足して2で割ったような印象を受ける。

「殿下、指示をください」

「ん、ああ……………まあ、何ができて何が出来ないか把握する為にも一通り、家事をして貰えるか？方法はアナスタシアやレアに聞くように」

「了解であります！」

「意欲があるのは良いが、服を着てからにしろ」

「了解であります！」

目の前で置いてあつた服を着だすルシア、ただそれは、俺の洗濯から帰ってきた服だ。

「それは俺のだ……………」

「はっ！も、申し訳ありません！」

だからと言って、スポンと脱ぐな！そのすぐ脱ぐ奴は下着も巻き添えにする。途中苦戦していたので、着せるのを手伝った。

「御手を煩わせてしまい、申し訳ありません……………」

「気にしなくていいよ。ただズボンとかの方がいいなら用意して置く

よ?」

「で、では、お願いします。……………少し、恥ずかしいので」

あー、そこら辺あんまり考えた事なかったな、向日葵は半袖のブラウスとスカートを最近よく着ているが、クロエやアリスは長いスカートが多い、と言うよりあの二人がミニスカートを履いている所を見たことないな、レアなんかは作業に合わせてツナギや白衣を作ってた。

「いくつか準備しておくよ、戦闘面は最後に見る。頑張ってるね」  
頭に手を置いて審判ノ使徒を付与する。

ルシア オートマタ

機構精霊 忠誠の金剛石

パーソナルスキル 忠実 審判ノ使徒

スキル 音響魔法3 飛行4 自動修復8

耐性 毒・酸無効 魔法無効 物理攻撃耐性 絶

称号 生きた人形

……………もう、ここまで来るとどうにでもなれと思う。

忠実 内略

気高き御霊 魔法無効

忠義の志 物理攻撃耐性 絶

審判ノ使徒 内略

断罪処刑 結界を無効化し、直接攻撃できるようになるが、使用中は下記の権能を得られない。

無罪放免 どんな攻撃も防ぐ障壁を張れるが、発動中は使用者から攻撃はできなくなり、使用中は上記の権能を得られない。

攻撃力が高くなるようなものは無いが、結界を砕く権能と防御特化の印象だ。魔法無効とか結構えげつない。あと着替えを苦戦した理由は飛行のスキルがあるので分かってもらえるかもしれないが、羽根があるのだ。背中に、扱いとしては翼人となるそうだ。そろそろ昼飯も近いのでキッチンを目指す事にする。

「これー、味見してもらってもいいですか?」

「ラーメンか、いただくよ」

「はいー、また感想をお願いしますね?」

……ツナギエプロンとか斬新だが、そこはスルーさせてもらう。前のファスナーは全開になっっているが、同様にスルーしておく。少し鶏油が欲しいか？こっちでは見たことない物は色々と工夫しているが、なかなか難しそうだな、感想を伝えてルシアの様子を見に行こうとすると、

「あのあの、倉庫にあるウサギの毛皮って、使っても宜しいですか？」

「うん、いいと思うよ（即答）」

あの子達、狩りの練習するんだけどこの辺りはウサギしか出ない。熊とかはクロエがヘッドショットしたし、危険な奴は粗方、食卓に上った。狩れば解体の練習をする訳で、肉と毛皮がものづくりチームの作った倉庫に保管されているのだが、肉は食うが、毛皮は減らないのだ。使えるなら使って欲しい。なんと無く倉庫にも出入りし辛いし、気持ち的に、

「はいー、ありがとうございます………こういう時は『忍びねえな』って言えばいいんですかね？」

「……………構わんよ」

それ以外どう返せと……………

元の世界の知識を持つ者としか通じないネタのやり取りはさておき、ギルドに行つて、適当な依頼を受ける。大量繁殖したコカトリスの討伐だ。報酬はそこそこだが、食料の確保はできる。背伸びをして、上体を反らして、腕を回して、準備しておいたタグ付きのペンダントを首に点ける。このタグには石化無効の効果がある。このタグを交換すると他の状態異常にも対応できる仕様だ。前は足を石化させられたしな、

「鶏ガラ、鶏油になりたい奴から前に出るおー！」

来なければ呼ぶがな、千里眼で捕捉、隔離して引つ張つて来て……………シメる。血抜きと羽根むしりは怠らない。尾は適当に切り飛ばして、よく見るチキンの状態になったら袋へ（そこから隔離）、魔物とか向かってくるのは平気でシメられるんだが、やっぱり無抵抗と愛玩用の動物は躊躇われるな。何処かでブレーキがかかる。周辺の刎

ねられた鶏頭をいるのか要らないのか思案していた。犬の餌とかでは売ってる事があるんだよなー、缶詰めで、解剖の練習なんかにもいいか？迷うのはあとでも出来るし持って帰ってから決めよう。隔離、隔離つと、

ガサガサツ！

なんか来た、食える肉だといいいが、皆さん食べ盛りなので、量もあると有り難いです。

グオ、

残念、オーガでした。こいつ等の肉はドラゴン同様に硬くて食えたもんじゃない。が、狩る。魔石とか討伐報酬が多いので、因みに証明は角だ。

グオオオオオオー！！

オーガの叫び声が山にこだます。

「あ、あの……………」

「ん？どうかしましたか？」

「ひっ！なんでもありません！こ、こちら報酬です！おおお、お確かめを！」

なんでこんなに恐れられているのやら……………、別に変な事はしてない筈だが、可能性としては受付嬢が新人、もう一つはSランクとかか？あと俺が異世界人って事もか、後が支える前に、代行者に確認して、  
《銀貨が三枚足りません》

……………仕方ないが、数えるしかないな、でもって確かに足りないことを確認して申告する。

「すみません。銀貨三枚足りないんですけど」

「えっ?!申し訳ありません！ももも、戻って確認しますので、お、お預かりします！」

途中で柱に突撃していたが、袋の中身をばら撒く事は無かった。何気にすごい、暫く奥の方で大きな音や何かが割れる音が聞こえるが、大人しく待つ。

「……………申し訳ありません。ここのギルドマスターにあってもらっても宜しいでしょうか？」



……………なんで？

「ひつ！ええつと……………用事等があるのでしたら大丈夫……………です。はい」

もう、訳わからん、疑問に関しては顔に出てたと思うが、呼ばれてのに行かないのもあれだろ、面倒事じゃないと思うけど、

……………わからない。どうしてここまで歓待されているのだろうか？厄介事ならそろそろ本題を切り出しても可笑しくない頃だと言うのに、これなら厄介事の方がマシな気がする。精神的に疲れた。ただ、時よりこちらの機嫌を伺うような視線を向けてくるのが、答えに繋がるヒントのようだ。

「すみません。少々伺ってもよろしいですか？」

「はい、何でしょう？」

受付の方も返事したよ。丁度いいか、身を振って入り口の方にいるさっきの受付嬢に聞く。

「……………何故、怯えているのですか？」

推理は無理ではないが、時間が掛かるし何より無駄手間、

「それは……………」

「それについては、多分、あなたがSランク冒険者で渡来人だからです」

言葉に詰まる受付嬢の代わりにギルマスが答える。異世界人の使うスキルはどれも強力だ。特に戦闘に特化した者はすぐにSになる傾向がある。実績が分かりやすいというものもあるだろう。だが、所詮力は力、使う者が精神的に未熟、傍若無人な振る舞いをする者であれば多かれ少なかれ、傷付けられる人が出てくる。そんな中で一番狙われやすいのが受付嬢らしい。まあ、関わりも多いし納得だが、まさかと思うが、何かある度にこの応接室でご機嫌取りをするのか？

「この辺りだと、無銭飲食、娼婦への暴行、恐喝や脅迫が多いな」

この辺りにもいるのか、ただ、特定出来ていても逮捕とかできない事情がありそうだな、因みに代行者、この辺りを拠点にしているSランク（俺を除く）の冒険者は何人いる？

《1人です》

うわあー…………お巡りさん、こいつです。

「現行犯で見つけたら引つ張つて来て良いですか？こつちが手を出せられても黙っておく理由はないですし」

「そ、それは助かるがいいのか？」

「大丈夫ですよ、あつ、報酬はください。現金で」

「……………あんた、そういうタイプだったか、ならどの位出せばいい？」

「オーガ十体分ぐらいですから、金貨五枚ぐらいで、あと私の実力面はどうやって知ったのでしょうか？参考までに聞いても？」

「……………安くないか？いや、いい、実力だったよな、まあ、いろいろあるが決めてはこれかな」

取り出されたのはなんの変哲もない角、だが見覚えがある。なんせ俺が持つてきた奴だし、

「ここを見てくれ、頭蓋骨の一部が付いてきてる。これは刃物で切ろうとしてできるものじゃない。それこそ尋常ならざる力で引き抜いた、筆り取つたでないと説明が付かない」

あー、あれは何かカウロウした時、角が丁度いい持ち手になって渾身の膝が顔面に入ったとき、なんか取れた。ちょうど良かったのでそのまま持つてきたのは不味かったか、ただオーガの角はちゃんと骨らしい。鹿は角質、サイは毛と異なる動物も居たし、似たようなものもあるかもしれないな、

「見かけたら声を掛けてみます。一応同じ所から来たかもしれないですし」

「すいませくん。もしかして三嶋さんですか？」

千里眼がある俺にとつて人探し、ペット探しは全く難しくくない。見た目はヤンキーがそのまま二十歳ぐらいになった感じ、お前らどうやって染めてんの？頭髪は赤に一部金、ピアス多いな、こういうのを見ると指導したくなるが、これは俺の生徒でもないし、責任ある大人だ（年齢上は）。後は本人（中身の問題）がしっかりしていれば何も問題ない。

「ああ?!誰だオマエ?」

……………例え第一印象が悪くとも、それで決めてはいけない。(8

割は決まった）まだ……………

「あんたもしかして……………なあ、金貸してくれよ、今持つてるだ……………」

はいアウトー、返事代わりに半歩前に踏み込み、胸部の中央に貫手をくれてやる。ショートなのでほぼノーモーションで打てる。人間の弱点は体の中央に集中している。護身術なんかで説明を受けると思うが、頭頂部、額、鼻、口、顎、喉、そしてさっき突いた胸部に腹（男はこれに加え、金的が入る）、相手を倒せなくても逃げる一瞬のスキを作るには怯ませられる場所、力が弱くても当たればそれなりの効果期待できる場所として狙う。

ゴツツ、

「うろうろー……………痛ええ」

口から唾液が溢れ、胸を抑えて前屈みになっている。普段はカウロウからの病院行き確定のコンボに繋がるのだが、唾液が汚いので、踵落として、沈める。後は襟首を掴んでギルドまで連行する。

「ふうー……………色々できたな」

和風の内装の家と西洋風の内装の家の二軒を見ながら、一杯飲みたいたい気分だ、大きさは西洋風の方が大きい、和風の方は部屋数が多い。装飾は金が余っているのでそれを溶かして、贅沢に使用した。和風の方は応接向け、西洋風の方は芸術と子供たち向け、体育館みたいなものだ。今は縁側に座り、枯山水の岩の配置を調節している。微調整の時は近くまで行ってせつせと動かし、また縁側から見て確かめるを繰り返している。

「……………」

右か、左か……………いつその事、逆さまにして半分くらい埋めるか？そんな思考が行き交う中、服の袖を引っ張られている事になり遅れて気づいた。

「ノルンか、どうした？」

「お菓子の時間です。今日はチョコレートの気分です」

隔離から板チョコ出して、一欠片割って小さな口に人差し指で挿し込む。もう一欠片を自分の口に運び、もう一欠片が溶けると嫌なの

で、自分の口に運ぶ。……………何やかんや芦原さんの能力は生活を豊かにする方に特化している気がする。元が嗜好品（煙草）召喚のスキルだしな、戦闘に使えそうなものはあまりないが、一部すごく使えるものもある。（酒、殺虫スプレー、混ぜると危険な洗剤等）ただ食品も出せる（板チョコは雑誌の応用で出せるようになった）ので飢える心配は皆無、金がなくならない限りだが、次に行くときにはメニューが見えるようになるらしい。こっちも存在値集めを頑張るか、

「ご主人様、こちらでしたか」

「アリスか、どうした？」

「いえ、姿が見えないのでワタクシが勝手に探していただけですわ」

「食べるか？」

「はい、ありがとうございます」

「……………立ったまま食うなよ、ほら、横座れ」

「は、はい……………」

若干距離はあるものの近くに座るアリスそれを確認して膝に滑り込んでくる、ノルン、こうやってゆつくりと過ごすのもいいな、……………あれはもう少し左にやろう。

## ダンジョン特別実習と日頃の成果

今日はダンジョンに来ている。メンバーはクロシエツト、ノルン、レア、ルシアとウイル、キリエ、ハルト、ロイを連れている。戦闘訓練では事故が起きる可能性が高い。保護者が俺一人では対応できない可能性がある。

「じゅ、準備できてます。どど、どうぞ」

少年とも少女とも付かない中性的な印象を与えるコアの案内の元進む。普通の人と違う部分を上げるなら左腕にブロック体の数字があることぐらい(地味)。エレベーターか?これ、思っいきり岩に穴が空いてるだけだけど、動力とかどうなってんだ?それに乗り込むと案の定、床が移動し始める。それに伴ってコアを除く全員が俺に捕まる。…………ちよつとよろけた。

暫く、いや、結構な時間が経ったあと、やっと光が差してくる。身体を動かすには丁度いい開けた空間に出る。

「じゃあ、武器はこっちにあるから好きに使っていいぞ、あと最初はある程度の強さを一体、次はゴブリン×4その次が6で後は様子を見て決める」

「わ、わかった。じゃあ、最初のはトロールを」

「待て、デカ過ぎないか?」

「先生そんなに心配しなくても、俺達なら……………」

「いや、そうじゃなくて、この天井の高さ、立ったら無理だろ。サイクロプスより小さいとは言え度、5メートル以上はあるんじゃないか?」

「あつ、じゃあキングオーガにします」

「なんで俺か注意しなきゃならんのだ。」

お前、コアだろ、ダンジョンそのものやん、思ったが口に出さずに様子を見てみると地面に魔法陣のようなものが現れ、その中央に光が収束していき人の形をとる。光が収まるとキングオーガがいた。挨拶代わりに言わんばかりに雄叫びをあげた。四人の様子を見てみるとスイッチが入った感じた、確実に勝てるという自信を感じられる。

因みに人形の四人の方はそよ風同然、クロシエツトとレアは耳を押さえているが、煩いなー程度の物だし、ノルンは我間せず、ルシアは見守っているが、雄叫びを聞いても微動だにしなかった。

「準備はいいか？」

「僕は大丈夫です」

「私もお願いします」

「いつでも行けます」

「お、俺も、大丈夫です。先生」

キリエは鉄の棒、ロイはレイピアと、ハルトは最後まで悩んでいたが、刀六本に短刀四本、籠手、グリーブ、防御式刺繍付きコートで完全装備、ウィルは武器は選ばなかったが、防御式刺繍付きコート（魔法防御特化）を着込む、

「お前ズルいぞ！」

「……………何がしたいんだ」

「アホですね」

「う、うるさい！」

まあ、普通この歳の子がここまで装備を固めると動けなくなる。やはり獣人という部分のアドバンテージだろうが……………

「ロイも何か防御式付きの装備を着たらどうだ？それとハルト、背中の刀は抜けるのか？」

「そうですね。じゃあこのローブを」

「え？ふうっ……………抜けない」

案の定、背中の刀が抜けないハルト。装備重量をクリアできてもまだ、体が完成している訳ではない、身長がもう少し伸びないとただの重りだな、ローブのスペースを探りに行くロイ。残念そうに刀四本を戻すハルト。ロイは何故か、迷彩柄のローブを選んできたし、

「それじゃあ、開始するけど、問題ないか？」

「……はい！」

よし、いい返事だ。キングオーガは腰巻き一枚で武器は無し、安全に連携を組み立てていけば余裕を持って勝てるはずだ。まあ、うまい保証もないが、ヤバくなればこっちで救助する。

「オオオオオオオオオオ！」

初めに動いたのはキングオーガ、雄叫びとともに腕を振り上げ襲いかかるが、最も身軽なウィルが足元に入り、脚の骨を蹴り砕く。しかも真正面から、

「グオオ?!」

パキン、

短い悲鳴の後、何かが硬いものに当たって折れた音がする。頭に向けて飛び掛かっていた。ハルトの刀が姿勢が崩れた事が原因で角に当たって折れたようだ。まあ、なんでもない中古の刀だからな、無論、状態の良い物を選んだが、防具以外は俺が作ったものじゃないし、なんの変哲もない刀だし、当然だろう。が、気にせずもう一本抜刀、空中で姿勢を立て直し、目を横一文字に斬る。が距離が足りないのので、右眼を掠めたぐらいだ。暫くは開かないだろうが、こう言う時は額を斬って、血で目を潰す方がいい。集中力や戦意にも大きな影響を与える。これは後で教えてやろう。別に目でもいいし、もう一つの選択肢程度のものだ。

「おいしいい！刀が折れちゃっただろうが！」

「なっ！お前！主より借り受けた刀を折るとは……………」

ペチツ！

二人に迫る手の甲を鉄の棒が弾く。弾くと言っても痛みで引つ込めたようなものだが、何回も打たれば骨くらいは折れるだろう。因みにこの棒だけは俺作で、随分前、それこそ初めに武道を教えた時から頼まれていたものだ。

「敵の前で揉めるのは禁忌タブーだと先生に教えられたでしょう、兄さん」

それを言い終えた後に襲いかかるキングオーガの式の手、参の手を躲し弾く。そうこうしている間に意識が疎かになっていた横から、風魔法で作った球が飛ぶ。当たった球は弾ける様に膨張してオーガの巨体を一発で仰け反らせ、追加の球で体制を崩し、抑える。

「早くしてもらえますか？これ結構魔力消費するんで」

あー、思い出した、あの迷彩ローブ。防御式と透明になる効果を編み込んでいるのだった。俺には通じないし、俺が着ると透明化が

常時発動だし、俺以外なら使えるかもしれないので置いていた奴だ。

「わかった」

「そのまま、抑えてろ」

「……………カウントするから、それに合わせるまで打てる？」

「ええ、大丈夫ですよ」

「じゃあ、5……………4……………3……………2……………1……………Go！」

ハルトは準備していた火球を、ウィルは鋭い石の槍を、キリエは氷山を、それぞれ制御できる限界の魔法をぶつけた。なかなかエグい。途中はアレだが、最後は文句無しだ。多分止めは氷山だな。ぶつかって更に相手を凍らせている。俺が見せた過冷却水のイメージも入ってるな。魔法に関してはキリエとロイが上だな。ただ発動速度はロイが格段に早い。普段から使ってる影響もあるのだろう。キリエはもう少し実戦で使うには遅い。ハルトは刀より剣のほうが向いてるな。体のスペック的にも……………それとウィルは肉弾戦では藤白に並ぶ破壊力だな、なんて蹴りだ。

「ほら次行くぞ」

「いやいやいや！滅茶苦茶強くない?!この子ら！何したらこの歳で四人パーティーでキングオーガ倒せるの?!」

「本来ならどのくらいいるんだ？」

「ほぼ単体でいること無いからあんまり参考にならないけど、集落規模なら十以上のパーティーのレイドが組まれるよ。取り巻きと一緒に相手したらBランクのパーティーを三つぶつけて、被害は多少出るけど勝てる感じの強さ」

大体分かったけど、俺のチェックあんまり当てにならないかもな、ふと気づくと、出されたゴブリンが伸びてた。……………当たり前といえは当たり前か、

「ゴブリン増やしてまた出す？無駄な気がするけど」

「……………替えよう。オーク6に」

ウィルにはムエタイを、ハルトとロイには格闘術（生き残るための戦い方）、そしてキリエには杖術を教えた。それとあの棒は長さを変更できるギミック付きだ。ある場所から外れて、三節棍や収縮する槍



にも薙刀にもなる。数を増やしても、オークに変えても変化なしだな、ウィルが膝や顎を砕き、キリエが槍として棒を使い牽制、白兵戦で敵の隙間を縫いながら攻撃するロイ、一体ずつ確実に仕留めるハルト、多分この程度では連携は要らないみたいだ。なら……………

「一番弱い……………竜で行くか」

「ええ！竜か、あの子達にはまだ早いよ」

「嘘付け、力の消費を渋るな、それにやられそうになったら助けるしな」

「わ、わかったよ出せばいいんでしよう。出せば」

ドラゴンには幾つか種類がある。初めて遭遇したのは翼竜、飛竜と言われる物で、翼竜は脚と翼があり、飛竜は手足があり、背中に羽根のあるものを指す。そして竜は翼が無く四足の物を指す。そしてドラゴンの中でも珍しいのは龍、または属性龍と呼ばれるもので、翼が無くとも空を飛び、手足もないが属性付きのブレスは如何なるものも悉く破壊するそうだが、肉はかなり美味いらしい。鱗は魔法を防ぐが、効果が強いのはその属性のみで火は炉の素材等のように使われるが、高級品だし、あまり需要はない。が肉はとんでもない値段が付くそうだ。あまり可食部は無いようだが……………あと竜は薬の素材として一般的だ。少しお高い薬程度だ。……………んで、俺らが食べた飛竜は鱗は防具になる超頑丈な奴で、槍を弾き、少しの魔法程度ではビクともしない、当然鱗の下は皮と肉なのだが、そんな奴の肉が食用になる訳がない。あの受付知ってたなら止めてくれよ。

ギャオン！

そして竜登場。身は硬いので食用に向かない。あと泥臭い。内臓<sup>ホルモン</sup>も肝臓<sup>レバー</sup>しか使えない（まあ、結構デカイから何人分になるやら）。

「あ、ドラゴンだ」

……………反応薄くない？

「落ち着いて対処すれば勝てます」

「主が戦えというのなら私は戦うだけです」

「初めは私が」

水が凍りつき、足を捉える。捕まえられる時間は短いが、戦闘中と

考えれば十分過ぎる時間だ。ウイルとハルトが正面から突っ込みその影からロイが追う。

ゴオオオオオン！

唯一攻撃手段であるブレスを放つ竜。それをウイルとハルトは左右に別れて避ける。その時ロイは透明になり、ウイルの後ろに付く。そしてウイルは頭、ハルトとロイは前足を攻撃する。が、一撃決めたあたりで完全に氷から脱出されてる。咆哮をあげ、怯んだ所に少し身じろぎをただけ、それが竜側の思いだろう。しかし巨大な体軀は人の、それも子供の身体を吹き飛ばすには過剰なくらいだ。そのまま襲いかかろうとするところを、

「ただ見てる訳ねーだろ」

顔面を思いつきり蹴つ飛ばす。少しは時間を稼げるだろう。

「まあ、わかったと思うけど油断大敵、戦ってるのは自分より力の強い生き物だつてことだ。技術で渡り合えるようになっても、使えない状態にされたらひとたまりもない。過信せずに……………」

ガア！

邪魔すんな、教材が口出しすんな、噛み付こうとしていた口を回転しながら躲し、横からジャンプして落下の勢いを載せた肘で、首の骨を叩く。その直後に竜の足の関節を四発の弾丸が矢継ぎ早に撃ち抜くと大人しくなった。まあ、ノエルが転移しながら零距离で撃つたのだが、見事に貫通している。

「……………研鑽を積み、相手の実力の見極め、勝てない相手なら逃げるのもありだ、隠れて不意を付くのもいい、一番大事なのは引き際と諦めない事だ。――迫る死を避けるために思い付く限りの抵抗をしろ！受け入れるな！目を逸らすな！抗え！――強さは力だけじゃない」

どんなに強靱な肉体を持っても、首と胴が離れば人間は死ぬ。当たり前前の事だが、一瞬の油断で簡単に命は失われる。だからこそこの一回の敗北から多くの事を学んで欲しい。ヘンリー・フォードの残した言葉にこんな物がある。『唯一、本当の失敗とは、そこから何も学ばない事だ。』と、俺が守れるこの一回の敗北を余す事なく糧にしてみたい。

「さて、後はこれをどうするかだ」  
身動きの取れない教材をドラゴン一瞥すると、思案を始めた。

更にチートを！……………あつ、ケーキ屋初めました。  
(試験的に)

食欲の秋、読書の秋、スポーツの秋、他にもあるが前の世界ではよく聞いた言葉だ。俺としては芸術の秋だな、ただ、これは前の世界での話だ。

ブブブブブ……………

飛び回る黄色と黒の警戒色、ボーダーとも言うか？恵まれ余裕があるからこそ読書もスポーツも出来るのだ。冬眠する魔物からすればこの時期は蓄え、冬に備える季節だ。このあたりの危険な魔物はあらかた駆除したつもりだったが、それが災いしてか蜂型の魔物が大量発生した。ミツバチに近いやつだと有り難いのだが、残念ながらスズメバチ寄りだ(デカイ)。仕方ないので隔離空間越しに殺虫剤を撒きまくった(提供芦原さん)。最後は隔離で纏めて火魔法で駆除したが、ギルドに出る依頼も桁違いに増えたがあまり纏まった金になりそうなのは無い。でも、大丈夫！(通販風に)前から温め、準備していたものに取り掛かるとしよう。

「……………卵の補充、お願いします」

「おう、任せい」

芦原さんに足りない材料の情報を伝える。

「マスター、ゴミ箱が溢れそう」

「わかった」

ゴミ箱に山ほど入ったゴミを隔離、森の方で焼き、肥料として畑に蒔く。

「この注文はどうしたら?!」

「その家族連れだ、焦らなくていいから確実に頼むぞ」

パニック状態のクロエに客を教え、落ち着かせる。現段階で8回こけている。キャッチとフォローはしているが、なかなかキツイ。では何故、クロエにこの役割、もといフロアスタッフをさせているかと言えば人選の問題だ。

16時間前

場所は、異世界NGOアスメシア支店。

「ほうー、それで場所があるんか？準備でいるもんあったら、用意してくで」

「芦原さんには材料関係を頼みたいんだ。スキルをまた強化するので、それで卵とか材料を出してもらいます。主に補充ばかりになると思いますけど、足りなかつたら使ってください」

錬金術で作ってきた金塊をテーブルに置く。

「い、いやえて、ホンマに……………」

「いえいえ、予備みたいなものですよー(棒)」

「予備で……………こんな預かりたくないわ！」

「藤白、計算は出来るか？レジやってくれ」

「……………僕もですか？」

「あー、……………やっぱ、いい。ここのトップって事になってるのに働かせるのは不味い」

あつ、ターザンは戦力外だ。もう一人は今出てるみたいだ。手紙の配達依頼を受けたのでしばらく戻ってこない。それと向日葵とアリス、ルシアは居残りだ。あつちを完全に開ける訳には行かないし、不安もある。名目としては留守とルシアの事を頼んだのだが、

「アナスタシアとレアは厨房を頼む。ノルンはレジを、クロエとクロシエツトはフロア、俺は手の足りない所を埋める」

「……………これで、いいの、デスカ？」

「普通は無理ですよ。普通は、ですけど北川さんが足りない所を埋めると言ったら、どんな手段を用いても埋めるでしょうね……………」

何その表情、藤白はどこか遠くを見つめている。そんなに大変な事をするつもりはない。前に言ってたケーキやお菓子を売る店を(実験的に)ここに構える事にしたのだ。まあ、多少問題も発生する。クロシエツトの動きが速すぎて生クリームやイチゴが置き去りにされたり、壁に叩きつけられたりと、客に不気味がられたので、間に合っていないレジに早々に回ってもらったりした。ただそのせいで、フロアがクロエだけになってしまったので俺がそこを埋め、現在の状況に繋

がるのだが、

「おい！あんたじゃなくてあつちの嬢ちゃんが持つてきてくれねえと」

—とか露骨に言われる。男性の客はケーキなんかより美人の方が目当てだ。仕方ないので、ちよつと前に買っておいた。ローラブレードを履き、なんとか文句を減らせるようにパフォーマンスする。勿論仕事もするし、転けたクロエのフォローもする。某ネズミの遊園地のキャストのようにスタイリッシュに各テーブルを回る。危険が伴うので本家はやらないと思うが、……………俺も教師としてオススメしない。

「oh-if antastic!……………あ、あの人つて、hmm……………何シテル人なの？」

「……………何と言われても」

「aha、元々の……………職業のお話ネ」

「本人曰く教師だそうです。あ、ティーチャーです」

「teacher?ニッポンのteacherはスゴイネ！」

「……………多分あの人だけです」

「当たり前や、堅気の間人があんなばっかりやったら、たまったもんやないぞ」

「なんか聞こえるけど無視、今はそんな余裕はない。後で戦闘訓練をするからその時にゆっくり話そうか？」

「ひゃっー」

短い悲鳴、またか、滑り込んでクロエをキャッチして、持っていたお盆に落下するケーキを受け止める。逆さま向いているのが一個目で良かった。皿の方から触れて引っくり返してワン、ツウー、お盆が埋まったので紅茶の入ったカップを反対の手でキャッチ、続けて前腕、肘、……………うわ、ポットまであった。仕方ないので結界を解いて(あつたら確実に割れる)頭でキャッチ、痛え、……………取り敢えず表情から笑顔は絶やささないのは大事だ。目が開いてるかどうかわかんないとか言うなよっ。

「本当にすいません！さつきから転けてばかりで」

「気にしないの、クロエはもつと肩の力を抜く。そしたらいつも通り出来るよ。えーとこれは？」

「へ?! あっ、……えーと、ごめんなさい、忘れちゃいました」

「代行者ー? これ何処のテーブル?」

《13番のテーブルです》

「じゃあ、持っていとくよ。13番だろ」

「確か男の客しかいなかったとこだな、届けるのは問題なかったが、視線がなあー、

「おい! 砂糖が無いぞ!」

「は、はい! すぐ持ってきます」

パタパタと厨房に駆け込み、直ぐに替わりの砂糖を持っていくクロエ、砂糖は貴重だが、ここではセルフ、好きなだけ使えるのでたくさん使う人が多くて結構減りが早かったりする。その後13番テーブルの客は大量の塩を喰らうことになった。

「またのお越しをお待ちしておりますにやー」

後半はノルンが計算に疲れていたのでクロシエットがレジを打ち、その計算結果を言ってお代を受け取り、また計算してもらい、釣りを渡す感じだった。と言うか藤白(自主的に来た)もそれだった。まあ、その辺りはクロシエットが超速でレジを打っていた。自分の分も含めて、それと食い逃げ確保もクロシエットの仕事だったりする。現行犯を教えてくれるのは代行者なので俺は一言声をかけるだけで済む。大体直後に確保されている。ただ、レジから一瞬クロシエットが消えるのがネックだが、次の瞬間に戻ってくる。きっちり相手をしていた客の対応を終えてから、次の客がレジの前に来るまでに……えげつない技だ。

「ありがとな、これは給料だ、またやるからその時は頼むな」

「え!?! わ、私受け取れません!」

「ありがとにやー、管理はお兄ちゃんの方でお願いするから、持っっておいて欲しいにや」

「マスターは必要な物はみんなくれるから、大丈夫」

「私の保護者はお父様ですし、私はお金いりませんし」

「私もいらぬですね。頼まれ事でしつかり頂いてますし」  
「一応受け取つとけ、何かに使えるかも知れないし、もしもの時のためだ」

何か壊した時に弁償しろとか言われたとしよう。その場に俺がいなきや完全に無一文は駄目だろう。改めて思ったので、強制的に持たせるために個々に言いくるめる。それにそれぞれ自由に出来る事がある方がいいに決まっている。それと芦原さんにシヨバ代……：施設の利用料を渡し、材料費（芦原さん提供と錬金術以外）諸々を引いたが、かなり手元に残った。……：これはちよつとやつちまつたかも知れん、仕方ないので素早く市場に流すべく、宴会を催すことになったが、食料を芦原さんが提供してくれたので無意味になってしまふ。結局人形用の材料を買い足し、いつもの材木屋や石材を買い求めるべく走り回った。これで酒屋なりが2次的に潤ってくればいいが。

最近、なかなか布団から出られない。なんてことは無いが、倉庫ばかり増えてる。……：なんか他のものを作らせないといけない。

「先生ー！」

「先生ー！」

「主よー！」

「どうした？ウィルは主って言うのやめろ。何回目だ」

一人は倉庫を作つてたものづくりチームのドワーフ。覚えがいいし、技術もすぐ自分の物にしている子だ。見た目はちっさいおっさんだが、俺より若い。名前はエレク、もう一人はサラマンダーの少女、裁縫以外には精力的に顔を見せている子だ。裁縫に出ないのは糸を導火線の如く燃やした事があるため、名前は、タージャ、最後は俺を主と呼ぶ事でお馴染みのウィルだ、

「先生！僕たちに自動人形オートマタの作り方を教えて欲しいんです」

あー、遅かれ早かれ来ると思っていたが、来てしまったか、

「教えてやりたいのは山々なんだか、危険だから教えられないんだ、俺のやり方は」

「お願いします。教えてください」



「私達には到底及ばない神のみわざである事は重々承知しております。ですが……」

いや、そこまで大層なものじゃないから、前提として炎熱無効、それと加工に関するスキルがいる。人形作成と義体・義肢作成がこれに当たる。……はずだ。

「……………一回見てから、やるかどうかは決めてくれ、少し見せるから待っててくれ。」

最近手に入れた。金属を試すいい機会でもある。そうと決まれば炉に火を入れる。今回はミスリルと合金で作ろう。木目模様にも見える金属の塊をミスリルと一緒に入れ、最近作った二本の型に流し込む。後は型から取り出し、……なんか微妙な色合いになったな。茶銀？に球体の関節を用意、暫くは刻印を描く地味な作業となる。関節に關してはもとから刻印が施されているが、ここはアダマントイト製だ。その間にアダマントイトを溶かしておき、薄い膜のようにしておく。万能結界に炎熱無効を付与し、薄くする。後は補強の意味もあるが芯にアダマントイトとオリハルコンの合金で覆い、整形、仕上げにアダマントイト泊を巻き付けて熱で貼り付かせて完成。継ぎ目もないリアル（今は真つ黒だけ）な腕の完成。多少金属は変わったりするが、関節と表面のアダマントイトは一緒だ。ただ泊と言っても振ろうが押そうが、撓むことのない鉄板なんだよな。

「少なくとも炎熱無効と結界は必要になる。後は刻印を使う知識も必要になる。どうする？」

「あの……………」

「どうした？エレク」

「先生は他にもスキルがあるので無いですか？やっぱり職人として隠しおきたい事だと……………」

「ちよつと待ってくれ、どの辺りがそう思ったんだ？」

別に俺は何かを作為的に隠したつもりは無い。他の要因とは何か？自分の視点だけでは気づけないことがある。

《芸術10の影響です》

そうだね、お前も居たね。でも今は黙っといてくれる？代行者、

「まず、描かれた刻印の意味が解らないのと到底真似出来ない細かさ  
と正確さで書かれている所です。重複陣なのは確かですけど、それだ  
けでは無いですよ。……それと、いつも使っている魔法もそうで  
すけど、精密ですし、異常に発動が早いです。」

なるほど、では代行者説明頼む。

《魔法陣については、同じ部分を共有して複数の魔法陣を繋げて円柱  
状になるようにしました。それでも開いた箇所には魔法陣を複数重  
ねた重複陣を入れています。描く技術については芸術の絵画と彫刻  
の影響でしょう》

……え？もしかして、武芸と同じパターン？統合されてる感じ？  
ちよつと待って………10だよ。内約は？

芸術10 内約  
絵画10 色彩10 造形10 彫刻10 陶芸10 庭園10  
鍛冶10 工芸10 華道10 書道10 建築10 演劇10  
裁縫10 舞踏10 茶道10 作法10 医術10 料理10  
パティシエ10

《芸術に人形作成、義体・義肢作成が統合されました》

《北川 龍登は類稀なる表現者の称号を獲得しました》

「………」  
「先生？」

驚く気力もない。何か待ってましたとばかりに、増えたけど、嬉し  
くないし、何？類稀なる表現者って、

《芸術に関連するスキルを極めた者に贈られる称号です。芸術に連な  
るスキルの効果を大幅に向上させます》

更にか、次作ったらどうなる事やら。………はあ、わかった事  
を掻い摘んで説明したが、更に意欲を湧かせていたので必要なものだ  
けでも教えて行けばいいか、ただ芸術関係のスキルは全て完成度補正  
と言うものがあるらしいので同じようなものを作ろうとすると四つ  
のスキルとレベルを習得、カンストしないといけないそうだ。まあ、  
それ以上取っても完成度補正は限度一杯なので変わらないみたいだ、  
あとこれだけのスキルだ。日常生活や戦闘においても何らかの影響

を与えている可能性がある。その辺りも後々調べていかないといけないだろう。

……吐いたため息が白くなるにはまだ早いようだ。

人形師、パソコンを買う。

まあ、なんやかんや分かったことがある。俺が剣や刻印用の刃を使つて、攻撃、または加工をすると他の人よりも良く斬れたりする。他にもあるが、大雑把にあげると庭園、建築、鍛冶は筋力に補正、さつきさつきの切断攻撃、刻印に関する補正は、彫刻、工芸、裁縫だ。なんの関係があるのか知らないが調合に色彩、茶道、料理、パティシエが補正を掛けていたりする。

なんやかんやで麻醉が完成。あ、これも完成度補正が効くのか？前の点滴（生理食塩水）は別としても出来ちゃ駄目だろう。材料は山にあつたのでなんとなく作った。反省はしていない。何かのときには役に立つだろうし隔離空間に放り込む、

「旦那様ー、今日の朝食をお持ちしました〜」

そう言つてレアがテーブルの前に持つてきた料理からクロシユを開く（俺の記憶からか両手を使つて開く演出、本来は二人係らしい）。中身はキノコのスープ。パスタだ。香りがいい。見た目もいい。スプーンとフォークを手にくっくりと食事を楽しんだ。パンで皿を拭くように最後で味わつた。特にキノコは食感も良かったが、秋という季節もあつてか、美味かつた。

「ありがとう。ご馳走さま」

「いえいえ〜、お口に合つたようで何よりです〜」

耳がピコピコ動いてる。今日も頑張るか、

しつかし、銃は難しい。パーツの精度だ。個々に問題なくとも実際に組み立てるとガタついたり、入らなかつたりする。リボルバーは大きなパーツを作れば意外と簡単と言えば簡単だが、それは物を作ることに携わつた者の感覚だ。基本的なことだが、リボルバーには弾丸を込めるシリンダーとバレルに隙間（シリンダーギャップ）があり、そこがもしズレていたら、命中精度が格段に落ちるし、下手りや暴発もあり得る。……まあ、汎用工作機械があればそこまで苦労することはないと思うが、無いのだから苦労もするに決まっている。前のトゥルースマグナム真理の銃は時間を度外視して作った奴だ。一々あれがダメだ、これ

がダメだ気にするのが面倒くさくなって、全部削り出しにした。スキルの補正もあってか妙に上手く行ったが、俺が求めてる銃としてはリボルバー自体が合わないため、勿体無いしノルンなら使いこなせるだろうしと思いいあげたのだ。

「…………けど、整備が面倒くせえだろうな、これ」

M1911とにらめっこしながら、一人愚痴る。もう一つはSIG系の40S&Wが使えるオートマチックを選んだ。…………ガバはともかく、SIGは外見だけの物だ。中身とか詳しく知らないので適当だ。動く構造にはなってる。代行者設計なので、そこら編は大丈夫だろう。それとガバはインテグライプの消音器サブレッサーが装備されている。壊れない限り銃声はほぼしない。

「因みにM1911の愛称はハンド・キャノンですー」

「何してんだレア、と言うかいっつ入ってきた」

「ついさっきですよ？息抜きに紅茶はいかがですかー？」

流石に子供達に銃の作り方は教えるつもりは無い。なので地下に作った食料庫に併設する一角を板で遮り、そこを作業スペースにしているのだが、結構狭い。なので適度に休憩を入れないと腰が痛くなる。

「いただくよ」

愛称のある銃は大体長く愛用されてきた名銃が多い。(まあ中には不名誉なのや、敵からそう呼ばれて怖れられた物もあるが)他の例を上げるとコルトのシングルスアクションSアーミーAはピースメーカーと呼ばれる西部劇と言えばこの銃というぐらいの定番だ。強力な銃弾も打てるが、ソリッドフレームの為、リロードに時間がかかる事が最大にして唯一の弱点言える銃だ。…………あとはセーフティの観点から暴発くらいか、逆に言えはそれ以外の弱点はほぼ無いと言える。近距離戦ならグリップに詰められた鉛が鈍器になる。

「色々作ってるけど、いまいちこれってのが無いんだよな」

俺がりボルバーを嫌がるのは、さっきの銃身とシリンダーの隙間の事が大きい。まず発射ガスが漏れる。これによりエネルギーロスが発生、密閉性もクソもないので消音器も無意味、そしてロスしたガス

で手を火傷……はしないからいいか、まあ、一番はリロードだ。ソリッド（固定式）は基本一発ずつしか排出できないし、込める時もそれは同じ、トップブレイク（中折式）は接合部の強度の都合上、火薬を多く使えない。ロスするのにだ、スイングアウト（振出式）でスピードローダーを使っても排出の為に上を向け、ピンを押して、今度は下を向けて弾を込めるため、銃を動かすモーションがオートマチックと比べて多く、必然的に時間が掛かる。オートマチックはその点スライドを差し込み、次弾をスライドを引いて装填すれば準備完了だ。ただし、しっかりと作らないと排出した薬莖が挟まってジャムするのだが、

「あーもう、やだ」

どっちにしてもリスクが頭の中でチラつく。……よし、ロケットランチャーや無反動砲を作ろう。昼からは別のに取り掛かろう。

さてと、今回来たのはちよつとクロシエツト（ノルン付き）にもお願いして、ポイントを設置してもらった街がある。

「やっぱり自分の目で見ると違うな」

まず街の規模が違う。これは俺の千里眼の方が分かりやすいのだが、面積にするとエドガーが収める街の四倍、それと宿場や商店等の密集する区画が一点に纏められている。この位置からだと言われている商業区画のカジノの電飾だ。それぞれ頭を抑え合う様に高く作られているが他の区画からすれば迷惑だろう。……完全ミスだと思いが隣の宿泊関係の施設、あれじゃ安心も出来ないし、明るすぎて眠れないぞ。夜は夜で問題だが、昼は日照権の問題が出てきそう。こっちにこの手の法整備がされていないのが原因だろうが、まあ、今回ここに用はないのでスルーするが、この街を大まかに分けると五つの区画に分類される。今の電飾が派手な商業区画、隣の宿泊または居住区画、その隣が飲食関係の区画、それと最後に渡来人区画、この辺りだけ懐かしい空気が流れている気がする。まあ、字だけは違うのは違和感ありりだ。な、少し近未来感もあるか？なんか浮いてるし、

「なんと言うか……、懐かしいと思ってた気持ち薄れてきたな」

「どうかしましたか？ご主人殿」

「いや、何でもない」

某電気街にありそうなビルの一棟に慣れた足取りで進む。向かいの建物の天辺には何処かで見た事のあるペンギンのキャラクターとミゲル・デ・セルバンテスの小説の……止めておこう。いろいろ権利とか危険だわ、

「俺は四階に居るから、みんなは好きにしていよ。集合は店の前ね。それと……これは好きに使っていいよ」

「二」大丈夫です。前に受け取ったお金があります」よ」わ」にや」……おう、圧力が凄い。

とはいっても、俺も結構大きな買い物をする訳で、……なんと言うか、後ろめたい気持ちがある。因みに今日のメンバーは向日葵、アリス、クロシエツト、ノエルだ。

「あつ、先に言つとくけど俺に付いてくるは無しだ。近くなら買い食いしていいし」

特に向日葵とアリスは言っておかないとビルの中だけで行動したり、護衛と称してピツタリ付かれたりする。十中八九俺の予想通りなら向日葵が一番に集合場所にいる。何もせずに……

「じゃあ一時間後くらいになると思うけど、行ってくるよ」

完全再現されているエスカレーターに乗り、家電のテレビ等の液晶の商品がある所に辿り着いた。

「いらっしやいませ。今日はどの様な物をお探しでしょうか？」

早速店員に捕まる。従業員はこっちの世界の人みたいだな。髪青いし、目金色だし、……まあ、冷やかし防止の策でもある。下見と行きづらい事極まりない。……んん、ーでも大丈夫(通販風口調)、そんな時は千里眼を使えば、お店の下見、有力者の不正の証拠に、人探しいちいち足を運ぶ必要、無いんです。これで店員さんからの視線を気にせずに快適に買い物出来ます。それと世の中の汚れも綺麗に出来るので一石二鳥、……おっとそれよりも、

「パソコンありますか?一式揃えたいんですけど」

身分証明代わりに冒険者カードを出す。最初の頃は安っぽい紙だったが、今は光沢のある一枚のカードだ。あの頃の紙は土地の権利書並

に嵩張るサイズ感だったが、クレジットカードとは行かなくてもそれに近いサイズだ。

「……………もしかして、異世界からお越しでしょうか？もし、よろしければ後程店長の話し相手になってもらっていいですか？」

「ええ、それぐらいなら」

ちよつと引つかかる所があるな、蓋を開けるまでのお楽しみ、ならいいが、彼が店長とやりに親しいだけだとありがたい。

しっかし……………話していると店長は只者では無いのが伝わってくる。まだ店長には会っていないが、彼の懇切丁寧な説明と知識は脱帽だ。こつちの世界にはない知識だ。これを仕込む手腕は凄まじい。本人の努力もあるが、どういう物かから説明しなければいけない物をここまでとは……………例えば彼だけでも十分すごいことだ。俺自身教育者だしな、使用上の注意や気になった事を聞きながら、店長のいる部屋へ足を進める。それと電力何かはこの辺りでしか普及して無いので、魔力でも動くタイプの物にした。勿論電気でも動くので魔力を電力に変換し適切な電力に変える抵抗器も忘れない。それと電力を蓄える為の蓄電池も、総額は金貨にして873枚、前のケーキ屋の収入は全額（残りはもつと前から貯めてた分）、これでは経済的なバランスが崩れかねない。なのでこちらでも依頼をこなし、店長には商談を持ちかける、その予定だ。

「店長、お連れしました」

見た目普通のおっさん。ただ行動力やバイタリティーではそこら辺の青年くらいなら容易く超えるだろう。そんな静かでありながらも活発な印象がある。一部白髪の混じった頭を下げると、笑顔で応じてくれた。適切な表現としては破顔だろな、それ故、普段の表情が分からない。こつちは無難な反応として引き気味のぎこち無い愛想笑いで返す。そこらは世間話をしてお互いの腹を探り合う。あとは信用できると判断できれば商談に入る。……………三十分も使ってしまった。

「突然で申し訳ないんですが」

「何でしょう？」



気配が変わる。目元が少し鋭くなった。それと声の抑揚すこしも抑えられている。極わずかだが、その変化は大きかった。

「二つお話があるんですが、どっちもお互いに得のある話だと思っんですが、どちらから聞きます？片方は材料、もう片方は……元の世界の物とか」

近代産業には陸の資源が必至となる。半導体や、基盤にはレアメタルや金、銀、銅のような貴金属、特に採掘量の少ないレアメタルや金は喉から手が出るほど欲しい。金はダンジョン産の物を、レアメタルは錬金術で作れる事は確認済み、そしてもう片方が本命。芦原さんがスキルで色々取り寄せる。まだ家電サイズの物は無理だが、食糧は難なく準備できる。

「材料というのはどの様に？宛はあるのですか？」

「それはこの世界には魔法がありますからね、今の段階では教えられません、これを」

レアメタルのインゴットを机に置く。

「……一個でどのくらいになります？」

「これは……、失礼持つても良いですか？」

「いいですよ、触って減るものじゃないですし」

とりあえず選り取り見取り並べてみる。こうやって見ると如何に金や銀はきれいな光沢してるかわかるな。中には何色と表現したらいいのか分かんないのものもある。

「これを何処で？」

「まだ言えません。ただ手間は掛かりますが、魔力のある限りは」

「……………」

暫く無言の時間が流れた後、もう片方の話題に移った。

「それで元の世界の物とはなんでしよう？あなたが持ち込んだものですか？」

「いえ、取り寄せられる物にまだ制限がありますが、芦原さんが金銭、または金銭的価値のある者を対価に召喚できるんです……………これ、ちよつと前ですけど、収納に入れてあるんでよかつたら食べてください」

おにぎり（皿に乗ってるよ）をレアメタルを端に除けて、机の上に置く。確か右から梅、ツナマヨ、おかか、昆布だった筈だ。米は勿論、芦原さん提供のコシヒカリ（北海道産）だ。……………昆布に関してはコンビニの。ナイロン付き、この後、店長が号泣したり、滅茶苦茶感謝されたりしたが、商談が纏まる頃には約束の時間を20分過ぎてしまった。それと最後に確認しておかないとな、

「パソコン一式で金貨873枚な理由を聞いてもいいですか？」

「言い難い事なんです、部品の一つ一つから完全受注生産です。時間も手間も掛かりますし、何より品質を保つ為にもどうしても必要なんですよ」

「本音は？」

「……………他言無用でお願いしますね？この値段は簡単に買えるから困るからですね。この値段ならその辺の貴族では買えません。力のある地方領主でも難しいでしょうね。王族なら買えるでしょうが、値段に釣り合うかどうかは別です。使いこなせるかどうかも分かりません。説明に行くのは私ですし、その辺りは上手くやりますよ。あまり技術革新が進み過ぎて、足元から国が壊れても、私達の次の世代に尻拭いをさせる訳には行きません」

薬指の指輪は派手な装飾は無いものの大切されていることが分かる。……………それと別にダイヤのあしらわれた指輪がネックレスの様にチェーンを通して首から掛けられている。

「……………お子さんは？」

「一年ほど前に三女が生まれました。……………元の場所では一人娘はいましたが、あまり親らしい事はしてやれませんでした」

「……………そうですか。では、遅ればせながら娘さんにこちらを」

「これは？……………護符ですか？私達は貴族でもないのに受け取れませんか」

「まあまあ、試作品ですけど受け取ってください。まだ、人形師としてはまだ活動していないんですけどアスメシアのエドガーには名前を覚えてもらってるんですよ。それとこの人形は四体セットでブレームンの音楽隊の動物で構成されてるんで、連携して守ってくれますよ」

？」

「はあ、ですが……………」

ここは多少強引でも押し切る。値段は無料だからこそ滑り込める隙間がある。……………ただより高い物はないという諺はあるが、

「気にしないでください。それと役割を説明しておきますね。ロバはお子さんを乗せて退避したり、他の人形を乗せたり、体当たりくらいですね。ニワトリは警報、二種類の卵型術式弾を使います。煙幕と無属性魔力弾ですね。犬は敵の制圧の為に防御式と攫われた際の罨解除、破壊のギミックが搭載されてます。猫は防御式のみですが、お子さんを守る事に特化しています。……………まあ、もしもの時の保険みたいなものですし、使う機会がない方がいいのは確かですが、それと……………これは保管に注意してくださいね」

「……………これは」

テーブルの上に黒い拳銃が置かれる。

「いらなければ持って帰ります。ただ盗まれない様に誰にも渡さない様にお願ひします」

暫くの沈黙の後、吉川司郎は銃を手を取った。

「使い方を教えてもらえますか？」

確かな覚悟の宿った瞳で前を見据えながら言った。

パソコン一式を隔離空間に放り込んで、支払いをしようとしたら断られた。多分相手の人となり調べて値段を決めているのでは無いだろうか？決してレアメタル一式を祝儀として押し付けた事は無い筈だ。なんやかんや入り口につく頃には約束の時間を三十分オーバーしていた。

「ごめん、遅れた」

「いえ、主人殿が気にする事ではありません。私は何時までもここに居ますよっ。」

「ワ、ワタクシも同じですわ！」

「迎えに来てもらえるだけでも、私達は良かったと思えます」

「頭撫でてくれなきや、許さないにや」

「ははは、ごめん」

有無を言わず目の前に来る頭、その天辺から二つの耳が今は撫でるのを待つようにペタンと寝ている。怒るより、撫でてもらう方が目的なのは分かっているが、気付いたときには何気なく撫でている自分がある。案の定いい笑顔のクロシエツトが撫で終わった直後に顔を覗き込んでくる。

「焼き鳥売ってたからお兄ちゃんも食べるにや」

超速で動いてる訳ではない。流れるように間髪入れず、口元に焼き鳥が運ばれて来る。自然と口の中に入って来る。開けないと口に付きそうだったし……多分開けなかった時はギリで止めて、「あーんするにやー」とか言うと思う。

「……………」

……………背中に視線が刺さるんですけど、ここは敢えて振り返らない。クロシエツトへの対応を終えた後に一人ずつ頭を撫でてやるのが、摩擦を減らす最大の方法だ。

「ごめんな、ホントに待たせて」

「いえ、ご主人殿が謝る必要など」

「迷惑を掛けたら謝る、誰でもそれは当然のことだ。な、アリス」

「ご主人様がワタクシ達の事を気にする必要などありません」

「悪いな、ノエル、お前には移動の度に送ってもらってるのに」

「いえ、それが私に出来る事ですから……………でも、すこし二人きりの時間も過ごしたいです」

「ふふ、……………それはまた時間を作るよ」

後はみんなを労ってやるか、幸い遊ぶ金はある。飯ぐらい好きなかき食わしてやるか、……………人形を飯で釣るのもどうかと思ったが、今更考えるのはやめた。

人はそれを勇者（おろかもん）と呼ぶ。

昨日の中華は美味かったなあ、なんてパソコンの設置作業をしている最中にふと思った。そんな時、

《調査が終了しました。結果を報告してもよろしいですか？》

おう、長かったな、初めの頃に頼んだ事のはずなのだが、それだけ重大な事か、それとも無数と言えるほどあるのか、蓋を開けて見るまでわからないな、

《早急に対策が必要なものは三件です》

留守番のメッセージみたいな感じがするが、大事な話なので意識を切り替える。

《二件、召喚した勇者を使って戦争を始めようとしている国です。二件目、大型船舶を使った海洋資源の収奪や乱獲、主導者は異世界人と帝国国王です。三件目、農作物を大量に生産している勇者、尚、使用した土地はしばらく枯れ、草木が育たなくなるため、転々と移動しています》

………なあ、全員ブン殴って終わりでいいか？なあ、いいよなあ、ああ?!なんでここまで馬鹿ばかりなんだよ!!

「ああー………、もうヤダ」

嘆いた所で状況は好転しないが、その後代行者から詳細を聞いたが頭痛と目眩がした。

「………嫌です。帰ってください」

「分かりました。では、（土に）還ってください」  
バキッ、

散々長い言い訳と間違った使命感と迷惑な優越感を混ぜて、偽善でコーティングした猛毒なんぞ俺は飲みたくない。こっちは迂遠な言い方を避けて角が立たない様に、尚且つ改善案も出したにも関わらず、拒否、理解できてないのかと更に細かく説明したが、理解する気が無い上に、分かったかのような口を効き、尚且つ拒否、顔面に右ストレート一発ぐらい撃つ。時間は無駄にするわ。自分が正しいと信じて疑わず、人の意見を間違いと断じ、聞かず尚且つ、まだ、農地を

広げるだの抜かせば、蹴りの追撃だつて出る。

「俺の六時間返せ、マジで」

《正確には6時間3分38秒です》

暫く喋るな。な？冒流でスキルを回収、ゴミスキルなので分解して存在値に還元、掴んでいる勇者を障壁から窓を開き、そこに全力で投げ込む。まだストレスが残ってるな、風魔法で土を巻き上げ攪拌して、大量の売れ残りの野菜を刻んで枯れた農地に蒔く。追加で芦原さん所に寄って準備してもらった農薬、肥料も蒔く。まあ、これだけ売れ残っても、更に大量に作ろうとする奴の気がしれない。土地が枯れることも知っていないがらだ。しばらく傍目からは天変地異や世界の終わりに見える耕作を見ながら気分を落ち着かせる。

「マスター、お茶とお菓子」

「ありがとう」

「どういたしまして……………」

……………うん、美味しい。何より紅茶の香りは気持ち落ち着く。コーヒーではこうは行かない。それを知ってかあの子達も紅茶を煎れる事が多い。……………さて、今後について考えよう。あの勇者は孤児を何人が預かっているのですその子達はこつちに引き取ろう。問題は次、戦争を起こすまではまだ時間があるので放っておくと被害拡大する海の問題に掛かる、そこから取り掛かりたいが、

「海上なんだよな、いつそ船ごと制圧したほうが……………」

逃げられると鬱陶しいんだよな。海上だから逃げられないという保証もない。ノエルのように転移できる場合、面倒くさい追いかけてこしなければならなくなる。こちらの動きに気づいていない一回で捕まえたが帝国国王だのも別の場所にいる。出来るなら同時確保が望ましい。

「お兄ちゃん？……………ふふん、何考えてるのにや」

「うおっ……………今日は連れてきてない筈なんだが？」

「来ちゃったにやー」

移動手段は言わずもがな足ですわな……………まあ、クロシエツトがい

るなら作戦の幅も広がるな、それと、

「殿下、お願いがあります」

今回はルシアも連れてきている。実力を凶る意味もあるが、戦闘になった際に高い防御力のあるルシアが必要になると思う。帝国の城内と船の設備等を適当に目を通し、最良の作戦を模索する、候補は幾つかあるがどれで行くか悩んでいる最中なので意見は参考にしたい。

「私が帝国、クロシエツトが船の……………」

「却下だ」

「殿下……………」

俺が何もしないのは気色悪い。気分の問題だけどね。それに……………」

「俺の隔離にもルールがあるんだよな、異世界人限定みたいだけど」

藤白や芦原さんを前、隔離したことがあったので見落としていたが、手紙の配達に出ている。津瀬くん（津瀬 敬信）を一時的でも連れてこようと思って隔離しようとしたのだが、出来なかったのだ。シリルさんも同様で出来なかった。代行者に聞いたのだが、どうやら戦って勝った、倒した相手しか放り込めないのでは？との事。（はつきりとはわからん）そしてこの帝国国王、面倒くさいことに、初代が異世界人なのが原因か隔離出来ない。勝つのは楽勝、だが距離が問題だ。……………なんやかんや考えが纏まってきたな。このプランで行くか。

パアアン！

豪華客船と言っても通りそうなフェリー？クルーザー？どつちでもいいや、船の違いとかわからんし（多分エンジンかな？勝手な思い込みだけど）その船体に垂直に突き刺さっているのは結界で全身を防御している俺とルシア、クロシエツトは上を通過した。戦闘機がミサイル打つ感じで運ばれてきた。埃やチリでもあの速度だと凶器なので、運ばれている段階で結界は張っていたが、出発したと思ったら直後に刺さってた。速すぎる。辺りを確認すると狙い変わらず船長室だ。ツルンと滑り込み、ルシアを室内から引つ張る。いろんな証拠は既に隔離で抜いてある。後はここで本人を待つのみ、さっさと入り口側の

部屋の隅に寄る。入ってきた髭モジャを後ろから制圧。

「お前！俺さ…ブツ！」

「自分に様付とか、恥ずかしくないのか？様付で呼ぶ奴に会ったこと無かったから、ちよつと聞いてみたかんだけど」

と言いながら、その様を言い切る前に髪の毛を掴んで床に叩きつける。

※良い子のみんなは真似しないでね、先生との約束だよ☆

後は二度とこういう事をしないように罰として、髭とか髪を切れ味の悪くなったバリカンで斑に塗り取る。幸い、体毛は腐るほどあるみたいだしな。

※資源は大切にしましょう。

「あぎやあああああ!!」

船内に悲鳴が響き渡る。その音にブチブチと何かを引き千切る音は掻き消されていく。

「チツ」

上半身裸の白目を剥いて気絶したおっさんを冷たく一瞥すると自分の体に毛がついてないか心底鬱陶しそうに払う。おっさんの周辺には様々な抜け毛が散乱しており、縮れ、ストレート、剛毛、それを結界で集めて海に捨てる。本体は残す、この船は鹵獲するつもりなのでこの穴も塞がないとな。残りの船員は異世界人関係の人はいないのでまとめ隔離、後で詰め所に密漁などで付き出す予定だ。レアを隔離を介して呼び出す。

「レア、この船をこの場所に着けてくれ、…………クロシエツト！移動頼むぞ！」

レアに場所を書いた紙を渡して、結界を張ると、どこにいるか分からないクロシエツトを呼ぶ。

「あのー、だん…………」

レアの言葉を聞き終わる前に、一瞬の浮遊感の後、帝国の城壁に突き刺さった。声を掛ける前に結界は張つてある。それと覆面も被っている。(吉川さんの店の前のドンキのパーティーグッズ)

「あの？殿下？僭越ながらお聞きしたいのですが、…………私は必要な



のでしょうか？」

視線を横に向けると、心底不安そうな顔をしたルシアが俺と同じく突き刺さっている。アナスタシアとノルンは船に置いてきた（二人は転移で後から来た）。……………丁度、上半身と下半身の境目で止まるのは、クロシエツトの加減のなせる技なのだろうか？ ツルンと這い出すには丁度よかったりする。ルシアを前回と同じように室内に引つ張り込むと現在地を確認、周囲が騒がしくなるより前に部屋を早足で出て、ドアで一人迎撃、そのまま右に曲がり、謁見の間を通り過ぎ、皇帝の部屋に通じる廊下に差し掛かる。

「ルシア、この道の足止めを頼む」

「りよ、了解でありゆます」

……………囁んだ。

「通さなければいい、少し扉を破るのが一筋縄ではいなくなてな」

「はいー」

クールな美人なのだが、何とかというかクロエのような放って置けないドジツ子感があるんだよなー、前も思ったがクロエとアリスを足して2で割った感じなんだよな……………何かより不安になってきたので扉の解錠に掛かることにした。この扉はまず魔法を防ぐ式が裏面に彫られているため横からは行かない建物全体も結界がある。物理的にも厳しい。なので冒険で式に干渉する。ただ掘られた式に干渉するのは非常に難しかったりする。直接触れるならまだしも裏側、なので魔力のような物を流して作用するしかない。幸い千里眼で反対側から様子を見ることが出来るが、解錠には20秒は欲しい所だ。

「居たぞー！あそこだー！」

もう来たか、……………あと十秒あれば見つかるより早く開けられたのに、

「そこで止まれ！これより先は通すなどの命を受けている！」

あと五秒、通路を塞ぐようにルシアの前に障壁が現れた。殺到する攻撃を次々と防ぐ、……………おし、解錠出来たな。しかしドアを引くが開かない。……………おかしいな、千里眼で反対から見たときに原因は分

かったか、

「鍵か、3つも……………いけるかな？」

正直、鍵無くした時、ロッカーを手元のクリップで開けるくらいしかした事無いしな、開けられるレベルかどうかもわからん。

……………アレならいけるか？

ダメ元で万能結果を鍵穴に押し付け、それを垂直に離す。……………不定形でも行けるらしい。鍵穴が鍵の型を取り、その容量で三つとも解錠、……………まだ開かないか、……………他の原因は無さそうだ。

……………代行者は何か無いか？気付いたこととか？

《現在は真ん中錠のみ施錠されていますが、》

……………あー、あれか、防犯の奴であつたな、3つ錠をつけて真ん中の錠だけ反対になっている空き巣を防ぐ心理的な奴だ。解錠には手間三倍だし、一個自分で閉めてしまふ。真ん中の鍵穴に不定形の万能結界を押し当て、そのまま形を固定して回す。……………開いた。

「よう、帝王？……………いや、皇帝陛下って呼んだほうがいいか？」

「……………」

押し黙っている人物に気軽に敬いの感情の無い敬称をつけて呼んだが、まだ、黙りこくったままで、

「トラップなら無意味だぞ、自ら餌をやるのは最適解だが、相手は選んだ方がいい」

「……………最期にお主の名を聞いてもよいか？」

盛大にため息を一つついて、素早くM1911を抜く。

パスツ、パシユ、シユ、シユ

四方に皇帝の背後、四方に向けて引き金を引く。一人は透明化、残りはカーテンの中に居た。純白のカーテンが赤く染まり、その影から二人出て来た。もう一人はカーテンをレールから引き千切るように捕まりながら倒れる。

「呪いに関する魔道具も分かつてるからな」

天井の照明の一つに、照準を合わせて引き金を引く。

パリン、

割れたガラスに混じって落ちてきた。真つ黒な魔石（刻印済み）を撃ち抜けば目の前に守る者なき裸王（服は着てる）が完成する。この王手から逃れる術はもうない、投了<sup>つみ</sup>だ。

「さて最後に言い残すことは？」

「……………」

今度も黙りこくつたままだが、顔には焦燥と焦りが色濃く張り付き、止めどなく汗が吹き出していた。

「無いなら無理に言わなくていいぞ、……………じゃあな」

「ま、待てくー！」

パスツ、パス

心臓と脳を穿つ二発の弾丸を放つ、次の弾を寄越せと言うようにホールドオープン、スライドストッパーを解除して、スライドを引いて黙らせる。薬莢は隔離空間に片付け、部屋を出る。

「……………もういい、引き上げるぞ」

「了解であります」

噛まずに言えた……………珍しいな、内心テンションが高かったりするのだが、その前の様子を見て絶句した。それこそ日頃の訓練の賜物とも言える絶え間なく放たれる魔法の統制射撃……………集中砲火と表現した方がいいかもしれない。それがルシアに向けて放たれている。が、当のルシアは微動だにせず、現在はこちらに挨拶するため、敵には背中を向けているが、その間も魔法は放たれている為、現在は背中魔法を受けているが、まったく意に介していない。

「ク……………こっちでは合図決めてたな。」

空に向けてもう一丁の拳銃を空に向けて引き金を引く。

パンツ！

さて、カウント…3…2…1。

ヒュッ、

その音の後に前にも感じた事のある浮遊感を味わった直後、家の畑

にルシア共々突き刺さった。あの轟音の中で一発の銃声を聞き分けた事は称賛すべきことだと思いが、何処かに突き刺さないと気が済まないのだろうか?……問題は解決したしいいか。あつちは準備が入りそうだし、レアの帰りを待たないとな。ルシアを畑から引っこ抜く。幸い、スカート以外の服というやつで軍服モドキを着せていたので中身が見える心配は無かった。上半身は土まみれだが、

## 自動人形（オートマタ）のお仕事

15時間前、

森に忍び寄る複数の影、遮蔽物は無いので丸見えになるので匍匐前進してやつと草に隠れられる場所だ。

「本当にこんな所に金目のものがあるのか？」

「なんでもこの森に入ろうとした盗賊団は大小問わず、末端まで全滅してる。それでもここに来るやつがいるってことは、とんでもないお宝があるに決まってる！」

「…………でも、ここまでしなくてもいいんじゃないですか？もう腕がげ……………」

ポオン！

少し姿勢を高くした若手の頭が弾けた。

「おい……………チツ、駄目か」

「何だ今のは?! 新手の……………」

「頭下げろ！」

その後は全く音沙汰なし、彼等は誰一人として途中頭を上げることなく、森へ入っていた。

「チツ、一人か……………あんまりコレじゃあ、数は殺れないんだよなあ」

木の上で悪態をつくメイド服に身を包んだスナイパー、肩に担ぎ直して、木から飛び降りる。

ズベツ！

「痛い……………お尻があー」

しかも泥濘んでるので洗濯しないと綺麗にならない。思えばいつもこうだ、何かしようとしてもコケる。初めは朝食を作ってアピールしようと思ったのだが、食器棚に蹴躓き、まるごと……………塩と砂糖だって何故隣同士で並んでいるのか、ダンジョンでは、上手くお茶を淹れられたのに砂糖と塩を間違えてしまった。最近だと、スイカを食べるのに塩を持ってきてくれ、と言われ時は同じ赤い蓋の味の素を持っていつてしまった。マスターにはいつも迷惑をかけてばかりいるので何かすこしでも力になれることは無いだろうか？マスターは

いつも優しい人だ。何度コケても受け止めてくれる。そんなマスターに粗暴な言葉遣いの者が相応しい訳がない。仕える者に相応しい者にならなくては、それがクロエの心の中にある。……………アリスより上手くできている自身はある。

『首尾はどう?』

「チツ、最悪、ほぼ全部森に入った。」

『規模は分かる?』

「少なくとも見積もっても30人は超える。殆ど頭上げなかったけど、それ以上はいる」

『了解。じゃあ逃走したのがいたらそれ頼むから』

「おい、森に入ったのはお前がやるにしても、残ったのはどうするんだ?逃げないようになればこつちでやるけど?」

『そつちは私がやる。防衛はレアがやる』

「レアか……………大丈夫だろうな?」

『……………主人殿の判断に意見が?』

「マスターの意向なら私は遵守する」

『では、そつちはお願いしますね』

「……………チツ」

返事代わりに舌打ちをすると背中から黒い翼を出す。出てくるはずの無い逃走者の見張り、暫し空中で過ごす時間をクロエは鏡に向かい合って笑顔の練習をした。

「うわああああ!」

「なんだ!?この……………」

「おい!誰かあー!」

始まりは一本のボウガンの矢だった。後頭部を射抜かれた死体を確認し、その先を見たが誰もいなかった。そこから暫く先に進むと今度は先頭の一人が足を取られて、先に引きずられて行った。その後は散発的に四方八方からボウガンの矢が飛んでくる。お陰で一箇所に集まり、肉壁が出来るが、正直避けたり弾いたりした方がいいが、みっちり集まっているため身動きが取れない。その上の確に急所を撃たれているので一発一人のペースで減っている。残りが十人程になっ

た時、矢が来なくなつた。

「……………終わりか？」

警戒を解き、誰かは分からないが、仲間の一人から漏れた言葉を聞いた直後、彼等は突然浮遊感に襲われ天地が逆転し、地面に叩きつけられそうになるが、足を何かに引つ張られ衝突は免れる。

「何が？」

何かに引つ張られる足を見ると、今まで気付かなかつた木漏れ日に照らされる輝く赤い糸が、自分の体重を支えるには不安のある細い糸が他の仲間にも足や手の違いはあれど巻き付き、全員宙吊りにされていた。

「宇佐見さんががんばりましたねー、宇喜多くんと宇佐川さんはもつと積極的にお願ひしますね〜」

気の抜けた声が近付いてくる。足元を飛び回るウサギを見ながら、そしてそこに宣言される。明確な死を、

「今日ー、クロちゃんがアニコウみたいな魚を捕まえてきたので、解体の練習台になつてもらえませんか〜？それと手術と拷問と薬品の〜？」

そう言うとうサミミの生えた少女は、ポケットから小さな裁縫キツトを取り出す。その数三つ、

「まずはっ……………とー、お腹にお水を入れるんですけどね〜」

そう言うとう、手近な腕を拘束されている女性に持っていたホースを口に突っ込む。が、当然生きてる人間が無抵抗で水を飲み続けるなんてことは出来ない。一定の量からはポンプのように吐き出してしまふ。暫くはそれを繰り返す光景を見せられる彼等は自分達にもこの訳の分からない拷問が行われるのか、そんな風に考えていたその時。「ああーもうー、いいです。胃が膨らんでればokだ〜、って書いてあつたし」

彼女の手の中に握られていた裁縫キツトが蠢き、赤い液体が飛び出す。禍々しい大太刀を形作り、それが目の前の女性の腹を切り裂く。間があつて絶叫が響く、少し膨らんでいた腹を切り裂くとその傷口に間髪入れず腕を突っ込む。急な事にどうしていいか分からず固まっ

ている間も彼女の作業は黙々と続く。辺りにグチャグチャと水音をたてながら、当然もがいたりして抵抗するが、あまり影響はない。しかし、ふっと動きが止まる。

「そうでした。本番に忠実に行かないと、駄目ですよー、まずヒレを………無いですから腕は落ちちやいますから、足にしましょう」

大太刀を軽く横に一閃、女性とは言え、消して細くない二本の足を太腿で分離した。彼等は知らない。これがアンコウの吊るし切りの練習だと言う事を、

「皮はちよつとめくりにくいですし、やめておきましょう。」

そう言つて次々と内蔵を取り出し、並べる。時より何かを引き千切る音を立てて、何かを握った手が女性の腹から出てくる。大量の失血に臓器の喪失を伴つて弱つていく様をただ黙つて見ているしかなかった。最後のその瞬間までも、

「仕上げは三枚に卸す。でしたっけー?」

大太刀を肩口から地面に目掛けて振り下ろした。

「ふうー、終わりました」

『そつちはどうですか?』

『今日のアンコウはうまく捌ける気がします!』

『………そう、なの? 殲滅できたならいいけど、そつちから報告はない?』

『得にはー、ないですよ? ただ、片付けが大変だから誰か手の空いてる人をプリーズ』

『アリスを向かわせますね』

『ええ、良かったです。説明してる間に一人で片付けられます』

『………別に一箇所にまとめて置いてくれれば私が燃やしますよ?』

『いえ、クロちゃんに片付けてもらいます』

よく会うクロシエツトはクロちゃんと呼んでいる。クロエはクロエ、

『では、私も戦うので切りますね?』

『お気をつけてー』



そう言つて会話を打ち切り、片付けに入る。その前に服のポケットを叩く。その中には裁縫キットの箱が入っている。その直後赤い糸や地面に突き立てられていた大太刀が形を変え、ポケットに吸い込まれていく。

「はう、やっぱり旦那様は凄いですー。」

レアは戦う力より、支える能力を望んだ。そんな自分でも戦える武器を与えてくれたのだ。足元のウサギは自作の移動砲台のような物だ。口からボウガンが撃てるようになっていて、森でのカモフラージュは高い。まさかウサギから矢が撃たれてるなんて夢にも思わな

いだろう。自動と魔力を繋いで手動、声による命令式など複数の命令を受け付ける高性能な物なのだが、この主人より与えられた武器とは比べ物にならないだらう。名前を血糸・無形<sup>テイルフィング</sup>。ドラゴンの血とアダ

マンタイトの箱とシンプルなものだが、魔力を流せば中の血がイメージした形に変形する。それこそ大太刀から極細の糸まで、血の方は様々な龍の血を集めて混ぜた物でどんな属性にも高い耐性を持ち、極細になつても凍つたり、蒸発したりしない。ただ切断するような鋭さはない事を微妙な表情で語っていたのをよく覚えていた。箱の内側に掘られた制御式なんか絶対に真似出来ないレベルなのにそんなことを悔いる必要はないと思う。旦那様は自分に対する評価が低すぎ

るのでは？そんなことをよく考える。………実際、レア自身の身体は他の人形と大きく異なる所がある。体内に金属が仕込まれていない代わりに、他の子には無い機構やギミックが加えられていたりする。

「じゃあー、皆さんには敵が残つてないか索敵お願いしますね」

足元のウサギに声をかけると各々の方向に跳ねて行った。

「さて、後片付けを始めますー」  
その気の抜けた声とは裏腹に狂気と殺戮の現場に入つていき血塗られたその他の道具を丁寧に拭いて片付ける。その道具は主人から貰った知識にあつた拷問器具だ。こびり付いて剥がれた皮膚の成れの果てを食器用洗剤で洗い、細かい場所の血糊は丁寧に布巾で拭き取ると、クロシエットの合流を待つ。が、その直後にレアは船の上

にいた。

バキバキツ！グシャ、

「あああああああー！」

「に、逃げろー！」

「逃しませんよ？」

青黒い霞、だがそれは手の形をしており、形を保ったまま、足を掴んだ。だがそれは、彼等には見えない。そのまま引き寄せて、迎撃するように向日葵はそれを正面から砕く、

ヒュン………ビチャ、ドチャ

固形物は素早く直線状に飛び、一定の細胞の集まりは少し先で重力に従って地面にぶつかり水音を出す。それらが本来あった場所から向日葵の笑顔が人型の枠の穴から覗かせる。

「あまり離れるとクロエに取られので逃げないで貰えますか？」

向日葵は困った様に眉をひそめる。北川に作られたオートマタ達の一部は料理、家事、洗濯等の身の回りの世話を持ち回れる者も居るが向き不向きがある。実際加減が下手な向日葵とアリスは家事をさせてもらっていない。しかし、それは普段役に立たない事に他ならない。ならどこで役にたてるか？………最近はクロシエツトに瞬殺されていが、それまでは向日葵が侵入者を狩っていた。正義ノ使徒には他の使徒系スキルを与えられた者と思念による会話が出来る。ただし、繋ぐ権限は向日葵側にしか無い。………関係のない事だが、思えば言葉が伝わるのでクロエのように声に出す必要はない。周りからは大きな独り言にしか見えない。

「クソーこうなったらやられる前にやってやる！合わせろ！」

「おう！」

三人の男が飛びかかるが、

グシャ！ズチュ！ビチャ！

三人の胸部を穿つ青黒い霞、その手には一定の間隔で胎動する物が握られている。強欲により作られるこの手は触れられないものに触れるだけでなく、触れたい物と透過するものを選べる。心臓だけを指定すれば、抜きとる方以外は抉れない。当然心臓以外でも出来るが、

この霞は本人の腕力÷増やした腕の数÷2なのでかなりの腕力のあ  
る者でなければ、腕の数を増やすほど弱体化してしまう。だが強欲で  
強化された腕力でオークの腹に風穴を開け、正義ノ使徒の権能、裁ク  
者により今まで倒した侵入者の分だけ全体的な力が上がっている現  
在、人を紙クズ同然に貫いたり、粘土のように捏ね繰り回す事もでき  
るだろう。次々と心臓を取り出し、潰す。それを何度か繰り返し、全  
て片付けたら、一箇所に纏めて焼く。骨も残さず焼くのは時間がかか  
るし、高温を維持しないと主人や子供達が異臭を感じ取ってしまう。  
「私もあんなふうに一瞬で焼ければなー」

主人たる北川なら一瞬で骨さえ残さない。せいぜい何か焼けた  
匂いと焦げ跡くらいしか残さない。やっぱりご主人殿は凄い。向日  
葵の中の主人への感情は全てこれに帰結する。

そんな中頭の中で、さつき殺す間際に奪ったスキルを確認する。  
………良いものは無い。強奪系のスキルは強欲から見れば天と地程  
の差がある、いわば劣化版なので使わない。罫とか穴掘り、探知等が  
有用な所だが、役に立つ場面が限られてくるスキルばかりだ。………  
この際主人にスキルを整理してもらおうことも視野に入れたほうがい  
いかもしれない。と思考を巡らせながら炎を眺めていた。………ア  
リスよりは役に立てただろう。

アリスの朝は顔を洗うところから始まる。ご主人様もいつも冷た  
い水で洗っているのです、それに習ってみんな冷たい水を使っていま  
す。外で遊ぶ子供たちとすれ違いながら食事を取るため食堂に向か  
います。

「アリスお姉ちゃん、おはよう」

「おはよう、お姉ちゃん」

「お姉ちゃん、また特訓付き合ってよ」

いつものように子供達に声をかけ、アナスタシアの所に向かいま  
す。

「……………もう昼」

食堂に入ってきたアリスに、アナスタシアはいつも通り、呆れ混じ  
りのツツコミを入れた。ついでにアリスの背中には子供達のイタズ

ラで紙が貼られている。何枚も、

## 魔力？何それ、美味しいの？ 卒業編

「ではその状態を維持じゃ」

「はい」

こつちに来て初めてぶつかつた壁は、魔法の基礎、魔力操作だ。魔法の使い方は幾つかあるらしい。一般的な魔法は放出、聖職者や、精霊使いが使う魔法を委託、そして身体強化や、魔法の上級者が使う循環、周囲の魔力の動きを知る感知、とその動きを操る操作、生まれ持つた者以外は習得不能な魔力の視認……他にも技術や応用もあるのだが、視認は出来る。だが、身体の中の魔力とか、魔法が発動する原理とかさっぱりだ。本を読んで知識はあるのだが、言えば発動する訳で、魔力の使い方の説明ができないのだ。前、畑の類人猿が預かつてた子供の中に、魔力を視認できる子がいて、魔力は光って見えるらしいのだが（俺には空気中を彷徨う埃みたいに見える）、相当な量が漏れてるらしく眩しくて眠れないようだ。なので魔法の基礎の実技講習を受けている。最初はあの二人に聞いてみたが、

「そんなん、言うたらバァーなって、ドンや」

「魔法を使つたら、何か力が抜ける感覚があるだけでそれ以上は……」

芦原さんは意味不、藤白は引き落しで魔力が引かれるみたいだ。………ついでに代行者に聞いてみたのだが、俺は自然に出てる分でも分かつた。本来の形から離れ、事象に対する強い干渉を行う魔法を行使すると消費魔力が増える。逆に基本に忠実で、シンプルな魔法なら消費は少なくなる。お陰で少し体の中の魔力と言うのが理解できるようになって来た気がする。

「上手いの。じゃあ次は身体強化じゃ」

「よろしくお願いします」

「……………へタつて無いようじゃな」

「どうかしましたか？」

「いや、何でもない。結構魔力が多いと思っただけじゃよ」

「ははは………よく言われるんですけど実感無いんですよね」

笑って誤魔化す。俺の魔力は人より多い。それは漠然と感じている事だが、どの位か見当がつかない。

「まあ、練習できるならいい。方法の説明としてはいろんな言い方がある。一つ目は高速で循環させる。二つ目は体を器に見立てて魔力で満たす。三つ目は鎧のように表面に纏い、体の動きを補助、………知ってる限りではこれだけじゃ………それと技術は異なるが目や鼻、耳などに魔力を集中すると感覚が強化される」

その内、水の上に木の葉の浮いた入れ物持ってきたりしないよな？ そんな事が頭の中を過ぎったが、一つづつ試していく。まず高速循環、これは俺には向かない。動かねえわ、これ、全く動かんから視点を千里眼で三人称視点（ゲームで操作キャラを俯瞰する奴）で見てもたが、魔力が渋滞起こしてる。特に手足と指先、細くなる箇所がとにかく詰まる。代行者に原因を訪ねた所、

《魔力が多過ぎます。循環させる量を減らしてください。破裂します》

怖いこと言うな！仕方無いので充填にした。魔法とはイメージに左右される、なので体全身を意識する。骨や皮、血管、皮膚、細胞と人体模型や教科書を思い出しながら、全身に魔力を込める。まずは足、太腿、腹、胸部、背中に肩、それから腕、順番に魔力を込められるだけ込めていく。

「ふう、………中々疲れるな、これは」

………あれ？なんか声違くない？

「あ」

「あ」

魔力の使い方を教えてくれた、おっちゃん目があった。が、視点が高い。俺の、

「………なんだこれは」

体を見てわかった。どこのスーパーマンだこれ、俺は多少体を鍛えているが、それは精々細いが筋肉が付いているくらいだ。現在の状態は、100キロ超級のボクサーやレスラーのそれ、若干ぎこちないが自分の意思に従って動く手、髪の毛も少し逆立ってる。……………性能テストは別の所でやろう。代行者、これ解除できる？

《周囲に魔力を放出すれば可能です》

なら頼む。煙のように体から魔力を抜くと、視点の高さが元の位置に近づいていく。ちなみにさっきのでどのくらいの魔力が出た？

《約三割です。なお、先程の形態は3時間以上の使用は肉体の耐久力が持たないので使用しないでください》

これもリスク付きか、最後に表面に鎧……………結界でいい気もするが、できて損はないのでやってみる。うん、普段と変わらん。ただ防御の観点では普通に硬い。同時に発動出来るか？

《可能です》

おっちゃんは顎が外れそうな顔してるけど、まあ、このおっちゃんから教わることはすべて身につけよう。それと実験も、

ヤベエ、マジヤベエ、何がって身体強化だ。ギルドの依頼をやったのだが、前のデカイ牛のと増えてるなんちゃらタイガー（忘れた）の討伐依頼だったのだが、ワンパンだった。最初にタイガー行つて正解だった。飛びかかってきたのを殴り飛ばしたのだが、余波で近くの木が葉が拭き飛び、木が禿げた。タイガーは一部を残して霧散した。……………その後逃げるタイガーに実験手伝ってもらうのが忍びなかったが、討伐数の指定がある依頼だったので仕方無い。それでも、デカ牛の様子見で放ったテレホンパンチで気絶される。瞬間で視点を切り替えたらちよつと地面から浮いてたし、まず対人戦には使えない。殺す分には何ともないが、それ以外にも速度が遅くなってる気がする。

《現在の状態は通常時から比較して約1.5倍の体重があります》

うえーい、……………その割には速くない？昔測った時68kgだったから約102kgくらいか？というか見た目の変化なんとかできるの？

《込める魔力を減らせば可能ですが、それに従って筋力等は弱くなりますが、宜しいですか?》

要望としては見た目を変えず、速度を落とさず、できるだけ長期的に使える加減を教えてください、

《では、充填を32%、外部補助型を併用してください》

こう言うの数字で言われると難しいんですけど、こんな感じか?見た目変わってないし成功だろう。……たしかに速い、だがキレが悪い。外側のイメージも改良しよう。現在は表面をただ覆うイメージだが、これをサポーターやバンテージそれらで補強するイメージに変える。すると、突きが鋭くなり、更に速度が上がった。キレもいいが、防御力はさっきよりも下がっている。表面のイメージを変えるだけでも色々できそうだ。今日は牛肉を使った料理が食卓に並ぶだろう。

昨日は牛シチュだった。

「死ねえ!」

カッゴツ!

飛び掛かって来た男の握り方の成ってないナイフの柄を蹴り上げ、顔面が来る位置に軸足の回転を加えて肘を持って行き、迎撃する。

「……………鬱陶しい!」

残りをラリアットで纏めて倒す。交通事故とも言おう。ベシヤ、つとという音たてて壁にぶつかると白目を向いて気絶した。別に体格は変わってないが、威力が強過ぎるな、身体強化、死んではいないが確実に病院送りだ。

「ほら、大丈夫か?」

無言で頭を下げると直ぐにここを離れる兄弟を見送る。全部守れる訳ではないが、目の前で起きる防げることぐらいは助ける。戦争があるだけあって傭兵や犯罪者紛いの冒険者が仕事と金を求めて集まっている。当然血の気の多いのやら、頭のネジの飛んだ連中もいるし、戦争前だと知って集まって来ているのだ。一触即発のピリピリとした空気が流れるのも当然だが、人に当たるのは別問題だ。各々の思惑云々は邪魔にならなきや放置でいいが、目につく悪事なら適当に潰すし、邪魔なら動く前に潰す。今回は目立つのでノエル達は街の外に



待機してもらっている。もしもの時の救助部隊でもあるのだが、深く切り込む為には相応のリスクが付き纏う。勇者のいる教会へ足を踏み入れる。

「着きましたよ」

「えっ！あ、はい……………」

「……………やっぱり違和感がなあ」

ニツコリと笑顔で同行者二名を威圧する。

「どうかしましたか？」

「何でもない」です」

今回はアスメシアNGOの視察ついでの挨拶（建前）、俺はその護衛として同行している。……………多少、いや大分不安があるな、挨拶だけが、事前に言質を取る様な話には濁す事と下手に誤魔化さず、普通に話せばいいと言ってある。それと幾つかの重要事項は知らない、答えられないを使い分ける様に言っているが……………

はあー、無駄もいいところだった、反省会もやるぞ、まず勇者会えず、言質は取られなかった（ギリもギリ、今後の押しをしつかり断れないとアウトだ）藤白がチラチラこっち見るし（論外）、その点、芦原さんは問題ない。多少危ないが動じない姿勢は情報漏れを防げる。まあ、フォローは苦手で後半藤白に集中されたのだが、その辺りは『何無視しとんねん』と言わんばかりに、芦原さんがメンチ切つたのでこの場はうまく話を切り上げられた。……………空気は悪かったが、

「藤白は反省、芦原さんは……………今回は助かりましたけど、穏便な方向性の交渉も出来ればお願いします」

でもって、勇者だがダンジョンにいと教会は言っていたが、街中で遊び歩いているなんでもパーティーメンバーを募るのとか、女性限定で、明確に口にはしないが態度や採用者と他を比較すればわかる。追加で言うなら、女性限定でも、こいつの好み次第、話すのも面倒な層だ。わざわざこんな奴と同じ次元、土俵で話せと？人目に付かないところで気絶させて、隔離にinさせてやりたいが、周囲のパワーバランスやら、現在戦争前だと言う事もあるので、直接潰すと不味いことになる。

「何処の政治屋も馬鹿ばっかりだな」

政治家と呼べるのはおそらくほんの一握りだろう。政治家に必要な能力は詐欺師に必要な能力が大半を占める。一流の詐欺師は一流の政治家になれるだろう。二流、三流の政治家では詐欺師としても二、三流止まりだ。まあ、部署毎の得手、不得手は除く、追加で言うとなんて能力だけの話だ。目的と手段、金は天下の回りもの、なんて言うのが、実際は天下が金の回しものとは正しくその通りだろう。じゃあどうする。諦めるか？

なんで俺が諦める必要がある？

方法ならこの馬鹿共が使ってる方法がある。

折角俺がやるんだ。馬鹿と同じ次元でやる必要は無い。

「穢れ、汚くも伸ばしたその下賤な手を、俺はただ一方的に、徹底的に、圧倒的に、そして一切触れることなく破滅させてやろう」

纏めて片付けるにはちようどいい機会だ。クツクツと噛いながら、刀に手を掛ける。そしてカチン、と刀が鞘に収まる音を二人は聞いた。しばらく間があつてから後ろで何かが碎ける音がした。それは教会のシンボルとも言える救世主の像だった。

蛇の道は蛇、餅は餅屋、なんて言葉があるようにその道の事はその道の人間に聞くのが早い。

「遊びに来たよ、あつ、豆パン30個ね、焼けるまで待つよ？」

「はい、お待ち、今回はサービスしとくから二度と来るんじゃないぞ？」

「チツ、……………諦めろ」

「……………わかったよ、焼きたてが食べたいならそう言ってくれればいいのに」

「頼むぞ、出来た豆パンはこいつに出してくれ」

「お願いしますにゃー」

「……………本当に焼くんだね」

「まあ、代金だ、足りないかもしれないから計算してくれよ。なに帰るときに足りない分は請求してくれればいいし、気付いた時にでもいい」

「ああ、間違いが無いように数えるよ」

そう言うのと、茶色のエプロンで手を吹きながら店主は奥へ消えていった。その後すぐに戻ってきて、店の入り口の方に行き、開店中の札を閉店に裏返すと店内に戻ってきた。

「それで、今回はどの様な御用向きで？」

パン屋の店主からゴールドアイの首領としての顔が変わる。と言ってもこの室内にいないとこの空気の変化は分からないだろうが、「まあ、取りあえずベルトウッド教の勇者、生駒 翔について知ってる事はないか？」

「……………うーん、あまりいい噂は聞かないけど、彼がどうかしたのかい？」

「ここでは少し意表を突く方がいいか、情報量も安くできる可能性がある。」

「こいつを見てくれ」

名前 生駒 翔

種族 人

パーソナルスキル 超速回復 劣情

スキル 剣術3 投擲1 聖魔法2 闇魔法 5

称号 勇者 色情魔

「これは……………もしかして、勇者のスキルかい？」

「ああ」

「……………にしても、称号にこんな物が出るなんてね、しかも悪魔系のスキルか、まだ劣情くらいなら意思の強い者なら勝てると思うけど、仲間の場合によっては足を引っ張るかもね」

「ああ、あれ洗脳の類のスキルか」

「言葉と身体的接触で効果を発揮するそうだよ。ちなみにこの紙に書かれてる事は」

「相手国に売ってもいいぞ。俺はどうやってそれで金を集めるか方法

がわからないからな。一割貰えばいいさ」

「それでいいのかい？」

「お互い着かず離れずで行きましょうよ、その方がどっちにとっても得でしょう？」

「それはそうなんだけどね………まあいい、次は何かな、戦争の相手国？それとも周辺諸国の方針かな？」

困った表情をする首領、まあ組織の存亡を握れる相手だ。少しでも有利な立場を模索したいのだろう。

「やつぱり耳が早い。まずは周辺諸国の勇者の対応とスタンス、その次が周りの軍事力、兵糧の観点で勇者を除いた場合の戦力比較の順で頼む」

分かったことをまとめると、まず勇者側は戦力が少ない。勇者本人も大した戦力じゃないが、攻め方を間違えると自国の戦力を盗られる。そこまで万能な能力では無いが、悪魔系である事と実態が掴めていないことが二の足を踏ませている。それと周辺諸国同士も味方では無いので、お互い牽制しているが飛び抜けた戦力を持つ国も無いため、自国の防衛を疎かにすることも出来ないが、かと言って中途半端な手勢を送っても相手の戦力が増えるだけ、無い物は逆立ちしても出てこない。

「他に聞きたいことはないかな？」

「そっち側の情勢は？何時ぐらいからキナ臭い匂いがしてた？」

「………あそこは基本的にずっとだよ。落ち着いてる時が珍しい、僕はあまり手を伸ばしたい所じゃないかな」

「そうか」

「まあ、最低限情報は集めてるけどね」

「おいおい、足りないなら直接額を言ってくれ、あとで釣りが面倒だろう？」

金貨五枚ほどを机に積み、付き出す。

「しがないパン屋に、そんな大金を預かれませんかよ」

「まあまあ、多かつたらあとで返してくればいい」

そこからは根掘り葉掘り、細かい所も知らない所以外の情報を揃え

て、計画を練り直す。大体、調べた通りだな、情報が違う箇所には偽情報があるため、そこから相手の目的と方法を探る。

「うにゃく……………他のパンも食べていいにゃ？」

「……………流石に飽きるよな、ごめん。好きなのを食べたらいいいし、食べきれなかったパンは収納しとけばいいから」

律儀に豆パンだけを食べてたクロシエツト。言っておかないとこういう事が良くあるんだよな、向日葵やアリス程では無いにしてもだ、その手にはいつの間にか別のパンが握られてた。

「パンのお代はこつちで引いとくから……………」

「大丈夫にゃ、パンのお代はおじさんのポケットに入れといたのにゃ」

「……………何故執拗に右ポケット？重いんだけど、しかもギチギチで銅貨一枚も取れ無いんだけど、むしろポケットが取れそうなんだけど？」

……………凄い歩きにくそう。とか思ったが、周りを見ると周囲の籠のパンが全て空になってた。

「すまん」

「ん？ああ、いいよ、このくらいの事なら……………次注意してくれれば」

「じゃ、そろそろお暇させてもらうよ、勘定」

「お釣りは？」

「付けといてくれ」

「……………そこはいらないうって言うところじゃ」

「そこは着かず離れずって事で」

「次来る時はモリソンと呼んでくれ、この辺りではそれで通ってるからね」

さてあとは帰るか、……………っとその前にギルドの依頼と掘り出し物探しもするか、

t r o u b l e s h o o t (トラブルシュート)

今俺は複数の問題にぶつかっている。まず、前に勇者のところで保護されてた子の中に吸血鬼がいた。

「先生！」

駆け寄ってくる瓜二つな二人の少女の首からはタグがぶら下がっている。このタグで朝日の元でも自由に活動できるようになってい。さて、では何故こっちに走ってきているのか？血目<sup>俺</sup>当てだ。なんやかんや味比べされて、俺が魔力的に一番良かったそう。隔離空間を使って手に着いている土等を隔離してから指を差し出しておく。暫く吸い付いているので、休憩にするか、

「ふえんせういはあ、まにすえたも？」

「人の指咥えたまま喋るんじゃない、……………何してたか、だよな？ブドウの木を植えてた」

前に見つけた掘り出し物だ。謎のジョブのせいで待つてる間に花が……………受粉させとくか。

やって来ました。テストラ帝国、近代的な町並みの中を時より、油臭そうな人型ロボットが移動店舗を牽いている。この辺りは魔法より科学で発展した街のようだ。ここに来たのは他でもない。打倒……………なんだっけ？

《聖国ベルトワードです》

聖国ねえ、隅々まで見させてもらったけど、あの国の政<sup>まつりごと</sup>はもう末期だ。政治と軍事が水と油なら、政治と宗教は混ぜるな危険の洗剤だ(どっちが塩素とかはこの際置いとく)。政治と軍事の摩擦は途轍もない。政治の立場が軍事より弱いと、暴走し兼ねないし、その皺寄せは政治にも来る。何よりそんな状態では軍ではなくただの暴徒だ。逆は表向きは効率的に見えるが、結局のところ上に立つものが駄目ならろくな事にならない。特に政治が軍事に干渉してそれまで有利だった戦場で負けたなんてことは多々ある。大義を失えばただの暴力集団、しかし、大義に縛られれば、勝てる戦いに負ける。その対価は戦場の兵士の血と命で贖われる。そこに精神の隙間に入り込んで

くるような宗教は盲信者をねずみ算式に増やす。その人数に足を引つ張られたらと思うとげんなりしてくる。

「結局、人間の問題なんだよな」

《スタンフォード監獄実験と神風特別攻撃隊のデータを呼び出します》

……おまえ、そんな事もできたのか、まあ、思い出す手間も省けていいか、

スタンフォード監獄実験の方から行くとこの実験は本来、看守の役割を与えた人間は看守らしくなり、囚人は囚人らしい行動を取るようになるかという実験で、中止されたはされたが、実験自体は驚く程上手く行った。ただ問題なのはそこじゃない。彼らの、特に看守側の様子だ、まず、彼らは誰に命じられるでもなく、囚人役に懲罰を与え始めたそうさ。その内、精神を錯乱させ、離脱する者が囚人側に現れ始めたが実験は続き、素手でトイレ掃除や靴磨きをさせたそうさ。バケツへの排泄なんかもある。そして、予め禁止事項として伝えていた。暴力を振るう者が出始めたが、指導をしていた学者自身が吞まれていたため、実験を続行、最後は被験者の親が弁護士を引き連れてやって来た。6日で中止されたが、看守役は「話が違う」と続行を希望したと言う。囚人役は何か法を犯したわけでもない事を知っているにも関わらずだ。

それで、こっちは俺が居た日本の話だが、「戦局打開のためには敵艦船に対する体当たり攻撃以外になし」として神風特別攻撃隊の臨時編成を命じた」つと、約4400人の命が人間爆弾として消費された。しかし命中率に関しては16.5%、突撃用の量産機なんかも作られていたが、船を沈めるには貫通力が足りない。回天なんて言う爆弾と一番近くで同居ができ、最後の瞬間まで共にできること以外利点の無い人間魚雷もあるが、こっちは威力が高くとも更に命中率が低いらしい(はつきり分からん)。追いつめられた人間は何をするか分からない。その典型例だろう。表向きは志願者を募っていたが、殆ど強制的な徴兵だ。

……まあ、あれだ、人の精神なんて不安定で脆いものだ。力を持

つこと自体に問題はないが、その力に振り回され、呑まれ、狂気の沼に足を踏み入れる為政者とともにある道は破滅だけだ。とは言っても権力とかに関係なく、狂気に身を落とす者もいる。自分は関係ないとかは思わないほうがいい。自分の良き隣人が人の皮を被った殺人鬼、なんてのは犯罪史に結構多く残っている。ステイルメイトでも現実の人間は動く。可能性はすべて潰さなければ、本当の意味で詰みにはならない。

「……………長いな」

この街では結構、生産職の地位が高いため、国も募集がしやすいらしく、ここから俺の作った物を買込みやすい。それにこの国なら間接的に手を出せる。ただ当然だが、この機に新規参入とか、自分の技術を売り込むべく、この国にやってきた夢追い人や、中小企業が大通りを埋め尽くしていた。仕方ないので後ろに並び、割り込み防止に障壁を地面から数ミリ上に浮かせて張り、その上にブルーシートをひいて、その中央で作業をしたり、魔法に関する知識を蓄えたりして過ぐす。

16時間半

ケツが痛い……………まだか、前の荷車が何台も連なっているのだから何人待っているのか分からない。あつ、一気に進んだ。それから少し身体をほぐして順番を待つ。背伸びをしていると先客が叫びながら、多分金の入った袋を投げつける様子が見えた。『こんな端金いるか！』という態度だな、肩で風を切って歩く神経質そうな男の裏を迫りかけるように空の荷車が出てくる。

「次の方……………お、入りください……………」

なんか尻すぼみに小さくなってるね？声が、まあ入ってから考えるか、体育館のような空間に二人ほど審査員らしき人物がポツンと立っている。

「では、早速審査には……………いりたいので、すが……………審査する兵器は、どちらに？」

「ああ、今出しますね」

隔離空間から引つ張り出す。微妙な反応はそのせいかな、人形作成の



適応範囲の実験機も出しておく。因みに実験結果なのだが、基本何でもありだ。手足があり、頭があり、猫耳やうさ耳、尻尾などの追加もOK、で手足を増やしたのだが、そこから適応されなくなった。逆に減らす方向だと問題なかった。そこで法則性が分からなくなって、試しに蜘蛛っぽい奴を作って、その上に人形を取り付けた所、これに適応された。で船の船首、家の天辺なんかにつけてみた所適応された。で大きさも変幻自在、ストラップみたいにして護符にも出来た。それを踏まえて色々改良を加えた量産機を作った。大きさも形違う二十機の中に、白と黒のマネキンが大量に並んでいる。

「では、少し機能を、チェンジ、モードナイト起動」

ガシャン！ガチャガチャガチャ、

その言葉の後マネキンが、一斉に動き出し近くの物と白と黒のペアを作る。その直後、黒い方が馬に変形した。白い方は体から長い武器を取り出し、馬の背に乗った。人形作成、あのスキルぶっちゃけた話、最初人型なら後で変形しようが、付属品や飾りみたいな扱いだろうが、効果を発動させるのだ。難点は俺が全て自作でなくてはならないところか、

「これは……………何製なのですか？」

「鉄製ですけど？ 刻印で防御式も彫ってあるので、ただの鉄製よりは硬いですよ。……………耐久テストをするなら形態変えますね。チェンジ、モードルーク起動」

ズン！ガシヤガシヤン！

馬がしやがみ込むと、今度は白い方を覆うように鎧になり、盾を分離、白い方は武器を仕舞い縦を持つ、そして体の内側に掘られていた防御式が表に出てくる……………と言っても黒い鎧の下だが、この手の式は表に出ると壊されやすいが、表から遠いと効果が薄い。なので鎧の下まで持ってきて魔法的にも防御力を上げた仕様だ。まあ、モードの内容を聞いてわかる人もいると思うが、このモードはチェスの駒から取っている。初期状態をポーンで数重視、ナイトは機動力重視、ルークは防御特化、ビショップは魔法特化（主に支援）、クイーンはシンプルに強い。時間は掛かるが広域魔法も使う、防御はこれらの形態の中

で最も脆いが、それとキングは俺が持つてる操作端末だ。この中には分隊を編成出来る子機も入っているが、上位の命令権はこの駒にあるので反乱は起こせない。それとこのキングの駒の下面にあるボタンを押すと全機を合体させてカイザーモードなんてのもある。奥の手だが、自爆もする。

「何故、貴方は……………失礼、お名前を」

「ノースガーデンです」

「……………ノースガーデン、ですか」

「では、貴方は何故この国に兵器を？」

理由か、当然聴かれるよな。面接なんかでも志望動機は絶対聞く。準備もしてある。被っていた帽子を取り、黒髪と黒の瞳を見せる。普段別に隠してないが、こう言え時にとると何か秘密を打ち明けた感じにできる。

「……………あの国が嫌いなだけですよ、勇者も」

後は勝手に、国から召喚された勇者の一人だとか、前の世界から勇者と因縁があるとか、自分の納得できる理由で勝手に納得してくれるだろう。さて、セールストークの続きをするか、

「こちらをお受け取りください」

両手で差し出された袋を受け取る。枚数は少ないが持った時の重さに、違和感がある。

「ありがとう」

「ノースガーデン殿、もし良ければですが……………」

「僕はあまりじつとしてるのは性に合わないのので」

遠くを見つめる。帰りたいたんだ察してくれ。あと勧誘はお断りです。

「そうですか……………」

受け取った袋の中身は白金貨だった。白金貨は一枚、金貨十枚分に相当する。それが5枚、正直な話あのマネキンとかには手間賃引いて金貨20枚分程しか掛かっていない。まあ、別で寄付として、ダンジョン産の金の装飾品と金100%の延べ棒を北川の名前で送っていた。まあ、戦争は金がいるし、丁度いいだろう。そんなことより、最

後の問題を片付けねばならない。まあ、最近勇者の所の子供も保護したのだが、年齢が今までの子より小さいのだ。紙オムツの交換もしたこと無い奴が、保育園の園児丸ごと世話できるか？無理。

「僕無理ですよ」

「私もやったこと無いですね」

「久し振りやから上手くできるとは限らへんで？」

「ナント力なるんじゃないかなー？」

アスメシアNGOから誰か手を貸してもらえる人員を手配したかったのだ。外からは不安があるし、場所の事もある。一人でも経験者を見つけれられたのは僥倖と言えるだろう。あつ、そうだ、

「これ、二人にも渡しとくよ」

「ケ、ケータイ……………」

「oh、アリガトウゴザイマス」

まあ、使っていないけどもしもの為だ。備えれば憂いなし、万が一はないに越したことはないが……………

「二人も何か困ったことがあったら言ってくれ、俺にできる事ならやるよ」

「おう、それやったらまたケーキの売り出しを何時するか聞かれとらんやけど、するもんなんかも分からんから返しようがないんや、追いつ返してもしよつちゆう来るし困つとるんや」

評判はいいみたいだな、まあ、千里眼とかで確認してるんだが、

「それは……………四日後くらいにやろうと思う」

「おう、助かるわ……………」

若干、落ち着いた雰囲気が出たので誰かに迫られていたのだろうか？この人どっちかと言えば迫る側の気がする。

「あの、社長をき……………」

「他あるか？他？」

藤白のは却下で、他は今の所なさそうなので帰るとしよう。

「じゃあノエル、頼む」

「ちよつと待つてく……………」

無事帰還、いつもの部屋に戻ってきた。ちなみに四日後は抜き打ち

の組手をやるつもりだ。

「お帰りなさいませ、ご主人殿」

「おかえり、向日葵」

転移で戻ってくる時はこの部屋のポイントを使うので外に出ると、ほぼ何時もここを出迎えてくれる。すると、廊下から足音が、多分複数、あつ、一人コケた。

「おかえり！お兄ちゃん」

「おかりなさいませ！ご主人様」

「無事の帰還、心よりお待ちしておりました。殿下」

「お、おかえりなさいませ！マスつ、ういあ！」

扉が開いた瞬間にクロシエツト、しっかりと扉が相手からアリスとルシア、そして、駆け込みながら出迎えの挨拶の最中に転ける。クロエ、まあ、目の前なのでキャッチするが、

「ストップ」

待て、と言われたのかと思ったが停止の魔法だ。クロエの動きは空中で止まっている。何かと万能そうな魔法だが、停止中は攻撃してもダメージを与えられない。時間停止はその状態で止めるという魔法なのだが、同時にその状態を維持する魔法でもあるので干渉できないのは道理だろう。ただ、ストップは時間系の魔法なので対象の時間を止めるだけ、空間に固定する訳では無いので、腕等、一部を動かす事はできないが、丸ごと止めてる対象をオブジェクトとして動かすことはできる。

「直して」

「直したにゃ」

「解除」

「……………あれ？」

目を閉じて来たるべき衝撃に備える姿はめっちゃ可愛かった。悪いなーとは思いながらも、

「まあ、こけなくてよかったよ、今日は誰が晩御飯を？」

「今日はアナスタシアが作ってますよ、ご主人殿」

それは楽しみだ。いつものように他愛のない会話をしながら、今日

あつた事を競うように俺に報告してくる。掛け替えの無い時間だと思ふ。問題がないからこそ楽しめることだが、後日、シリルさんからのメールが全文英語で来るので何とかしてほしいと初の助けを求められた。

空中都市 With GvsG、課題もあるよ？（ポロリはない）

「最初は違和感だった。キリエは、ふと後ろを振り返った。

「きやあああー！」

「どうした！」

「何があった」

廊下を走る足音の後、兄のウィルと先生が駆けつける。彼女はその名を呼ぶ事なく、その漆黒の悪魔を指差した。

「これはまたデカデカと、……………飛ぶよなこのサイズは」

俺は悪魔と対峙していた。一都二府四十三県の方々が一度は遭遇した事がある。台所裏、冷蔵庫の下を根城にする悪魔だ。

「忌々しいGめ」

手近なスリッパを右手に装備しながら呟く。とある道民の方には馴染みのない話だろうが、尻のあたりに突起が2つ出ていて、これで迫るスリッパを検知、回避する。背後からの奇襲を通じ難いのはコレのせいだ。が、正面はもつと危険だ。飛んでくる可能性が高い。Gの体表は何とも言えない臭い油のようなもので覆われているので触れるとその箇所G亡き後も存在感を主張してくる。だが、何より厄介なのは逃亡された場合だ。その存在に暫くは怯えながら生活する事になる。こいつ等の潜<sup>スニーク</sup>入スキルは厄介極まりない。気配を探るにはあの独特の足音に意識を集中する他ない。この状況からの最善手は……………

「よし、いける。ダイシヨウブダ」

殆ど自分に言い聞かせたような物だが、スリッパを左手に持ち替えて、洗剤をGを囲うように床に垂らす。トドメに上からかける。動いたゴキ……………Gがひっくり返るので、腹に洗剤をかける。弱点は腹なので殺虫剤でも背中では効果が薄い。狙うなら進行方向を読んで前か、脚だ。床からでも効果があるし、脚伝いに腹に行くし、どちらでもいい。が今回飛びそうだったので洗剤で羽を封じさせてもらった。脱

衣所だからこそ使える手だ。敵の沈黙を確認する。

「……………任務完了」

ただ害虫か、こいつ等は菌を運ぶ厄介な運び屋だ。早々に対策が必要だろう。……………一日の最後の大仕事が終わった。

早朝、叫び声とともに目覚めるのは久し振りだった。眠い目を擦りながら脱衣所に顔を洗いに足を進めていると、叫び声の原因となるだろう記憶がふと、再生された。死骸処理してないな、朝食前に嫌なものを処理することになった。この恨みを晴らすべく、駆除に乗り出すとしよう。

―三十分後

……………うん、驚くほど順調、そして驚く程気分悪い。もうね、吐きそう、索敵を千里眼にしたのが良くなかった、ずっとGを見てる。誰が好き好んで見たいんだ、バルサン使うか？いや、あの手で行くか、……………気乗りはしないが漆黒の成体に遭遇しなくて済む手段だ。全体サイズも下がるし、遭遇率も下がる。しかし、今気分の悪い俺がこの方法を取れば、吐くかもしれない。こんな時は、代行者―！

《嫌です》

ナレーシヨン（お好きな声でどうぞ（脳内再生で））

弱肉強食、自然界に生きる動物に共通するこのルールは強い者が弱い者を喰い、その強い者を更に強いものが喰う、その連鎖を食物連鎖と呼び、そこに生態系のヒエラルキーが集約される。それは当然、台所裏にも存在する。だがそのヒエラルキーは歪だ。その理由はそこに居る者だけで構成されるためだ。その為、何処にでも入れるゴキブリはその家庭内に限定して上位に入ることが多い。成体のものが多く見られる家庭はこれに当てはまる。だが、彼らが住むのに適している湿気屋敷でも、小型のもの、尚且つほぼ見つけることが無い場所がある。その場所には必ずと言っていいほど奴がいる。そう、Gを喰らうGが、

ムカデ綱ゲジ目ゲジ科ゲジ、ムカデの仲間だが、攻撃性、毒性はともに弱い、見た目はアレだが、列記とした益虫、……………見た目から不快害虫と呼ばれ、殺虫剤のイラストにも書かれてるが、そんな訳で、適

当にGのいる場所にGを放つ（後ろのがゲジ）。これで大分減るだろう。それと蜘蛛なんかは見かけても殺さないように言っている。あれも食うからな、Gを、当然だがGを食う奴でもムカデは駆除だ。カエルは……………縁の下にでも放り込むか、ここからは経過観察だな、つと、まあ、無難に目には目を、歯には歯を、GにはGだ。M○手術のモデルにも使えば良かったのではと思っただが、絶対嫌だわ、ゲジの遺伝子の移植とか、正気の沙汰じゃねえわ、

「さて、今日四人を集めたのは、重要な試練を与えるためだ、……………この試練は死のリスクが高い、俺が全力でお前らと戦う。そこで暫く、お前らの戦う目的を見つめ直し、闘志を絶やさぬように準備をする。簡単に言うと、生への執着、折れない闘志、死を恐れぬ強い意思、だな」

「全力……………」

「まあ、イメージし辛いと思うから少し見せとく、少し距離を開けてくれ」

実際、目安がわからないと覚悟は固めづらい。意識を沈め、集中し、脱力、攻撃軌道と敵を倒すイメージを固め、後はひたすら無心。逆手に取った刀を一瞬で抜き放つ。……………ちよい失敗か、鞘に刀をゆっくり納める。

「……………」

四人は言葉を発することなく固まっていた。右からハルト、ロイ、ウイル、キリエ……………うん、何か反応してほしい。

「……………まあ、これが俺の居合の到達点だな、実際に間合いの中にあるともつと違う感覚を感じると思う」

逆手で握ることで抜刀の速度は上がるが、片手なので力はあまり乗らない。それとリーチが格段に短くなる。守りは固いが攻撃に転じるのは難しい、正面から戦うより、奇襲向きの持ち方だ。ただ、それが相手に速ければ決まるため、逆手で白鞘の状態の刀を使う人物がよく映画等でも登場する。白鞘というのはまあ、……………昔の刀は武家社会のステータスだったというのは知られているが、それは中身が名刀と言うだけではない。今でいうところ車を改造するのに近いと



いうのだろうか？例えば鰐を家紋を模した物にしたりとか、刀のパーツは複数あるので、自分だけの刀を作れるのだ。で、その改造前の状態が白鞘だ。絵的には芦原さんが肩から担いでそうな奴で鰐などが無く、ただ、木と言う感じのやつだ。飾り気はないがその分軽く、素早く振ることが出来る。その分、鰐迫り合い等の弱点のカバーは出来ないが、

《職業に剣士が追加されました》

《職業に刀士が追加されました》

《職業に剣鬼が追加されました》

《職業に剣聖が追加されました》

《職業に刀王が追加されました》

《職業に剣帝が追加されました》

《職業に刀神が追加されました》

《下位の職業は刀神に統合されました。》

《北川 龍登は天賦の才の称号を獲得しました》

うわ、一気に来た。刀神？天賦の才はなんとなく分かるけど、両方説明してくれ、

天賦の才 スキルの成長が早くなる。

刀神 刀を使い戦う者の秘奥にして、最終到達点、ここに辿り着いた者に切れない物はないとされている。

……いやいや、俺なんてまだまだ、刀の扱いが少し上手いくらいであって、そんな秘奥だの極めた人間の領域に踏み込めるような腕ではないのだが？と言うかステータス全チェックだ、

名前 北川 龍登

種族 #%5\* ; ■

パーソナルスキル 真理ノ瞳 万能結界 冒流 次元切断

スキル 芸術10 指導8 武芸5 隠密1 雷光魔法3 火魔法8

水魔法4 土魔法8 錬金術1 人形作成10 頑丈5 剛力3

体力自動回復3 魔力自動回復2 鎌鼬1

耐性 炎熱無効 低温耐性8 雷撃・突風耐性6 衝撃耐性7 闇

魔法耐性5 聖光魔法攻撃耐性6 精神攻撃耐性7 毒耐性4 麻痺耐性2 衰弱耐性5

称号 爆死 稀代の人形師 害虫ハンター 一騎当千 類稀なる表現者 天賦の才

剣術10 体術10 棒術5 格闘術7 斧3

絵画10 色彩10 造形10 彫刻10 陶芸10 庭園10

鍛冶10 工芸10 華道10 書道10 建築10 演劇10

裁縫10 舞踏10 茶道10 作法10 医術10 料理10

パティシエ10 人形作成10 義体・義肢作成10

種族 #%5\* ; ■ あ?マ

職業 ケ@?ウ?ス 教師 デ<オ?ソス LEGEND OF

HERESY WHO GRAB ALL THE STARS

人形師 祓魔師 刀神

何気にヒトが消えてる……。人間辞めるとか言われたら、結構

シヨックなんだけど、あと次元切断と鎌鼬が増えてる。説明カモン、

《効果は以下の通りです》

次元切断 内略

異空間、亜空間を斬る。

鎌鼬 物を振り、発生した風を前方に飛ばせる。

雑っ！またか、亜空間と異空間に真理

異空間 冥界、天界等の別世界や位階の違う空間を指す。

亜空間 作られた特殊な空間を指す。収納等はこれに含まれる。

はい、意味不、もう放置でいい気がしてきた。代行者が理解してるならいいよ、もう、後で魔法にも手を加えとくか、進化先で使える魔法は変わるしな、……そして、もうちよつとで読めるところまでジョブの文字化けが解消されている。相変わらず種族欄の奴は戻る気配がない。多分片方はディオニソスか？芸術や演劇、酒等の農作物の豊作を司る豊穰神だ。

《<デ<オ?ソスの解明が終了しました。》

《美と豊穰の柱神を習得》

ほう、解けるとこうなるのか、

《職業が完全定着しました。》

美と豊穡の柱神 内略

制作品の完成度補正 極大

印象操作補正 極大

酒類作成期間短縮

作物成長促進【酒】 極大

表示が増えた。と言うことは他の職業にも隠された効果があるかもしれないな、……とは言え、もう片方は俺の記憶に引っかかるものが無い。保留になりそうなので引き続き代行者に解析してもらおう。

「……………」

……………まだ固まつてるな、長くない？手を叩くと四人ともはつ、とした感じで戻ってきた。

「まあ、明日じゃなくても準備できた人からでいいから、しつかり準備してくれ、正直、最終課題みたいなものだしな、じゃ今日はここまで、聞きたい事があつたら聞いてくれ、」

「それで今日はどちらに？」

綿でできた雲に寝そべるノルンにいつもの様に転移先を聞かれる。

「今日は少し特殊な場所だから、近くの街でいい、クロエとルシアを連れていくから心配ない」

「はい、承りました。では今後も移動できるようにする為にポイントの設置は何処にしましょう？」

「それはしなくていい、多分意味が無い、そこは何せ空中にあるからな」

「では尚更、必要なのでは？」

「……………動いてなきや、頼んだんだけどな」

ポイントは空間魔法で、場所そのものでは無く、予め設定した座標へ飛ぶ魔法の準備段階だ。例えばだが俺達が利用しているポイント設置箇所が家が建ったとしよう。そこでポイントを使うとどうなるか？答えはそのまま設置したところに出る。壁とかどうなるのか知らんけど、トイレだったらトイレに出るし、キッチンならキッチン

……この例えはわかりにくいな、まあ、あれだ、俺達が帰ってくるポイント部屋は二階にある。もし家を取り壊すと、その二階の部屋の位置に出てきて、空中に放り出されることになる。コレのほうがいいな、

「そんじゃあ、テストラ帝国から西に30kmくらいの場所にある街に頼む」

「はい」

ギヤア、ギヤア、ギヤアギヤア……

わんさかいるな、あの移動空中都市は主に、翼人、鳥人（手が翼になつて鳥型の獣人）、それと天使（背中じゃなくて腰あたりに翼がある。飛ぶときはどっちかと言えば魔力頼り）みたいな飛べる種族中心に住んでる。もちろん、人もいるが、富裕層の保養地としてで、住んでるのは10人程度、その中に異世界からの人もいるので少し会いに行くことにした。能力的にも味方になってくれるといいが、そこに辿り着くまでに当然の問題に当たった。要はこの都市を守る為に放たれる飛ぶ魔物に行く手を阻まれている。

スカイフィッシュ

いろんな意味でネタの魚、寿司や刺し身になると美味しいが翼は生臭いので食用には向かない。

飛行2

ガンツ！カシャ、

クロエのショットガンによって纏めて撃ち落とされる鳥の羽の生えた魚達、隔離しとくか、海産物はいっ振りだろうか？異世界人が持つ特殊なスキルをこの世界の外側という意味でアウトサイダースキルと呼ばれている。俺の場合は真理ノ瞳、馴染みが深い所を言えば、芦原さんの最期の一服だ。……まあ、なんだ、原形無いけど、この魚はそう言ったスキルから生み出されたキメラみたいなものだ。空飛ぶ魚を撃ち落としたり、避けたりしながら結界を足場に上昇する。ルシアは唯一の攻撃手段の音響魔法で撃ち落としたり、魚群の動きを乱したりしている。

「ノイズ・モスキート！」

音響魔法は風魔法の第四位階魔法で、名前の通り音に関する魔法だ。

音響魔法 ウインド

スラツシユ

ブラスト

コンプレツション

ノイズ

ヴォイス

現段階ではあまりできることは無い。元々盾と妨害役なのだ。人選の理由にしても、もし結界から落ちてても自前の翼で復帰できるためだ。俺は結界を出せば行けるが、もしもの時に備えての俺の救助要員でもある。視界を横に振ると見たことあるのが羽生えて飛んできた。

フライシャーク

いろんな意味でネタの魚、油で揚げたり、練り物にすると美味しいが翼はアンモニア臭いので食用には向かない。

飛行3

……臭いのか、翼、まあ、本体に影響されるようだし仕方ないことだが、そんなことより、

「これは俺がやる。周りのは任せる」

代行者、クロエが撃ち落とした奴の回収を頼む。

「お任せください」

《わかりました》

まあ、身とかどうでもいいが、高級食材は見過ごせないよな、  
フライシャークくん、……って逃げるな！ズボンの横に下がっている羽の装飾を取り魔力を流して投げつけ、撃ち落とす。そして隔離、戻ってきた羽の装飾を取り付け直し、目的地との距離を見る。

「キリがないし、突破するか、一気に行くからこっちに集合」

「はい」

「了解であります……」

この時、俺は忘れていた。こいつらは天然でやらかす奴だと言う事を、返事に気を取られて魚の体当たりで落下するルシア、すぐ飛んで

戻ってくると思ったがなかなか飛ばない。あたふたしてる。……飛べるの忘れてるのか？そんなことを考えてたら、ルシア目掛けて、クロエが飛び込もうとした。が、そこは結界の床だ。普通に顔面強打。動かなくなった。

「何やってるんだ……」

仕方ないので結界で隔離してルシアを回収。クロエの近くに行つて、その周囲を結界で覆い、一直線に空中都市に乗り込む。そして隔離空間からルシアを出す。

「着いたぞ」

「え？あつ、地面……」

「……痛いれえす」

もうね、不安しかないね、……とはいえ、ここまで来たのだ。行くしかない。街中はカラフルな屋根の住居が目立つ。緑も多いな、暫く進んで目的地の家のドアをノックする。

「……はい」

中から女性の声とともにローブを被った人物が扉から顔を覗かせる。

「突然で申し訳ありません。私は北川 龍登と申します。ここに私と同郷の方がいらつしやると聞いたので会つてみたいと思い、お伺いした次第です」

ここの防衛に関わる人物の可能性がある。対応はできるだけ丁寧であることが望ましい。物腰は柔らかく、ほのかな笑みを浮かべる。

「そう、ですか、……ここでは何ですから、どうぞ中に」

「……ん？」

「いえ、ただこちらにいらつしやると聞いたので挨拶だけでもと……」

「いえ、……あの、こちらの都合で悪いのですが……」

そう言う彼女の視線は俺の肩越しに外を彷徨う。……このあたりの人には言えないことか、

「では、お言葉に甘えて、……お邪魔します」

「失礼いたします」

「ルシア、入室します！」

「……………ルシア、声が大きい」

誰がそんな家全体に響く様な大声出せと、音響魔法は広域の索敵にも使える。まあ、合図を見る限り、この部屋に潜んでいる者はいないと言うことみたいだ。……………正直な所隠れて指示をだせるようにサインを複数決めているのだが、まともにこなせるのはアナスタシア、クロシエツト、ノルン、レアだけだ。向日葵やアリスはサインを見逃さないが、サインの意味をよく忘れるので、的外れな行動をとる。でクロエとルシアなのだが、こっちはサインを覚えているが、サインを見逃す。音響魔法による索敵は右肩を二回叩くのだが、合計8回は叩いた。さり気なさとかはどこに行ったのか、不自然さが際立つ。

「……………お茶を」

「あ、いえ、お構いなく、それより何かお困りなのですか？私にできることなら力になりますよ」

「え?!あ、はい……………実は海水が必要なんです！お願いします！お金は……………」

「あ、いいですよ」

「……………あまり無いですし、こんな所で無茶を……………え?」

「僕のスキルなら必要な量を直接持つて来られるので定期的に届ける事もできますよ?」

代行者がな、

「そんなー!そこまでして頂いても私に出せるものが……………」

「いえいえ、海水なんてタダですし、ちなみにどれくらいいらいますか?」

ちなみに海水はキメラ作りに必要な材料の様だ。錬金術にも近い要素があるが、錬金術は無機物の枠に囚われる。まあ、作ること自体は無理ではないのだが、分かりやすい例を挙げると塩と砂糖では魔力の消費が全く異なる。まず無機物と有機物の違いだが、炭素を含むかそうでないかだ、砂糖を焼けば炭化するが、塩は炭化しない。ゼロから創り出すクリエーターの錬成には幾つかのルールがある。まず、物質の上位下位、有機物の錬成、それと求める結果の分かりやすさだ、物

質関係は長くなるので置いてくが、有機物、特に生物の錬成は神の領域に云々……の話だ。まあ、植物はそこら辺緩いので砂糖なんかは作っても周りから忌避される事もないが、技量や魔力と求められる能力と労力に対して得るものが少ないため、あまり使われない。……まあ、実際問題、歴史でも錬金術(科学の元)は貴族のステータスだった。娯楽だのと、作れるかどうかと言う所を見せたりして、研究者達は出資を募っていたり、貴族側も研究者を囲い込んだりとか、まあ、いろいろだ。最後の分かりやすさについてだが、鉄のインゴットと鉄砲と言われてどっちが完璧にイメージしやすい。まあ鉄のインゴットだ。ただの鉄の塊だし、鉄砲と言われてもライフルなのか拳銃なのか、分からないし、構造が簡単に可動部の少ないリボルバーでも、いや、リボルバーだからこそか、パーツを正しく取り付ける工作精度が要求される。多少(素人の加減だと暴発コース)カタついても撃てるだろうが、弾道はかなりズレる。まともに真っ直ぐ飛んだりはしない。俺も実際ベルナーで銃の現物入手しなければ作ろうとも思わなかっただろう。

……話を戻すと、クリエイターの場合は作りたい物を語りかける際、出来るだけ初めの状態を錬成する(鉄鉱石とか)方が世界の法則云々の都合で消費魔力が抑えられるらしい。で、その反対、要はキメラを作るスキルは有機物で生物に囚われるのではと思っただ。なんせあの魚の元は、海水と鳥の羽根だ。……食料不足か?もしかして、

《近い内に陥っていた可能性はあります》

……まあ、これだけ高ければ外敵だのの危険は無いが食料は問題になるよな、温度や気圧、酸素の濃度、地上と違う環境では農耕も牧畜も上手くいかないだろう。それこそそこに適応した動植物以外は、ならいつそ一から環境に合わせた動植物を作ってたのが早い。元の世界でもここまで自由は効かないが品種改良だとか、遺伝子組換えだのはやってるし、

「これ、困ったことがあったら連絡してください。魔力で動く以外は普通の携帯電話なんで」



「ええ?!……ケータイ、ですね……………」

…………… 呆然というか、啞然というか、状況に頭が追い付いてないな、  
「それと、これは僕の知り合いの番号です。同年代だと、津瀬くんかな  
?……………あと芦原さんは元の世界の物をお金と交換するスキルがあ  
るけど……………」

《こちらに豪雪龍が接近しています》

なんすつか、その豪雪龍って?その事を目の前の人物に告げるべき  
か、迷ったが倒せば問題ないか、っと思考を切り替えて部屋の外に出  
た。

## ケーキとバトルと魔改造

ヒュウウー………

ナニコレ、辺り一面、雪の絨毯が広がっている。この辺りは中心部に近いので風は比較的弱い、今は風自体は弱いままなのだが四方八方から吹く風が雪を高く舞い上げている。冬はまだ先の筈だが

《気候龍の特徴です。周囲に漏れる魔力が天候に影響を与えています》

だいぶ強力な奴みたいだ。とにかく敵さんの様子を見ますか。まだ到着してはいないんだよな？

《はい、現在西南西から接近しています》

隔離空間から防寒目的のマフラーを3つ出して、後ろの二人に2つ、自分の首に1つ巻く、このマフラーは防寒の刻印を真似たものを糸状の緋緋色金とミスリルで編み込んでいる。この距離でこの温度だ、近付いただけで凍死もあり得る。

《マフラーがない場合、パフォーマンス30%低下、また、戦闘継続可能時間は30分でしよう》

まあ、戦えたからと言って十全に動けないのはなかなか痛い、それに長引けばどんどん動きは鈍くなるだろうし、自力で飛べないし、何が致命傷に繋がるか分かったもんじやない。だが、龍というものには興味がある。こっちの世界では最上級生き物、自分の力がどのくらいか計る目安としてはこれ以上大きな定規は無いだろう。無理なら逃げればいいし、追い返すだけなら、魔法乱発でも十分な筈だ、周りに目をやると雪にはしゃぐ子供と対象的に血相を変えた親と思わしき人物がバタバタしていた。………少々遅過ぎないか？

《それについてはこの辺りの合成獣<sup>キメラ</sup>を減少させたためでしょう》

………何としても守るしかないな、体の筋を伸ばして入念に準備する。………代行者、ふと思ったのだが、あんなしよぼい奴で龍みたいな奴を止められるのか？あれで何とかなるとは思えないんだが、

《戦力ではなく撒き餌、囷に近いものと考えられます》

えー………撒き餌？囷？………なんか忍びねえな、要はあれで

すか？うまい餌を撒けば食料を求めてやって来る魔物はそつちに群がるからその隙に逃げると、

《そして、食料難に陥った際は、住民の食卓に並びます》

……………ですよねー。合理的に行けばそうだな、まあ、人間なんぞより魚の方が旨いのは事実だし、アレルギー体質とか魚嫌いとかじゃない限りは、そんなことを考えながら刀の状態を確認すると、鞘に刀を戻す。

「あつ、今回の龍は氷や水系の魔法主体だから銃は使い物にならなくなると思う」

銃器にはかなり厳しいな、魔法と物理法則の関係を把握するのは諦めているが、凍りついて撃てなくなる可能性が高い。特に自動拳銃オートマチックや機関銃のような細かい（可動部）パーツの多い物は特に……………グロツクみたいなのも欲しいところだな、さて、そろそろ行きましようか。

結界の上に立ち、龍の様子を見る。見た目は蛇の胴体に手足のある、某まんが日本昔話でお馴染みのアレと形の構成は一緒、ただ、

「これは……………凄いな」

凜々しい顔に威厳を象徴するかのような逞しい角。全体的には青というより黒に近い、色合いとしては鱗等の根本は濃い蒼で尾の方にかけて黒くなる。後ろを見るとその圧倒的な存在感に二人も気圧さされているように思える。まあ、俺も今は若干浮足立っているというか、何というか、若干落ち着かないのだ。だが、これでは全力で戦えない、気迫に対抗するには気迫だ。その形はなんでもいい。

「……………北川 龍登、押して参る」

無駄に殺気に向けても気取られるので纏うのは純粋な闘気、英雄の覇気も併用する。刀を抜き放ち、構える。すると遠くに魔法陣のようなものが複数見える。それに続くように俺とクロエとルシアの足元にも魔法陣が現れた。クロエは魔法陣の外に出ると飛びながら銃撃を加える。俺は取り敢えず冒険で干渉する為に魔法陣を踏み砕く。ルシアは魔法無効で防ぐ。傍目からは直撃だが、効果は全くない。

「ルシア、正面から来るのも頼めるか？浮いてる都市ごと落とされたら意味が無い」

「了解でありゆ……………あります」

「……………頼む」

こういうのは触れない方がいい事がある。しかしこの距離は遠いな、クロエはライフルがあるからあまり気にしなくて済むが、弾が予め作っておいた分しかない。地上なら土からでも作れるが、空中では氷くらいしか選べないが、強度的に撃てない。多分粉々だ、それにもし撃てても相手は氷魔法を使う龍だ。到底通じない。俺も取り付いて能力を欲しい所だが、確実に凍死する。有用そうなスキルだけを選び抜いてちよつぱり拝借する位にしておこう。

豪雪龍ブリード

種族 蒼龍

パーソナルスキル 龍王の威厳 賢龍の眼

スキル 絶対零度の吐息8 自己再生7 体力自動回復6 魔力

自動回復7 結界1 凍結魔法6 旋風魔法5

耐性 炎熱耐性2 低温耐性9 風圧耐性6 衝撃耐性4 毒耐

性6

称号 魔導の探求者 氷の覇者

いろいろ厄介そうだが、低温は無効になるまで欲しい。これさえ取れば戦況は一変する。弾幕の如く飛んでくる魔法を掻い潜りながら接近する。あつ、ヤバイ口開けてる。足元の結界を解除して未来視で見た加害範囲から逃れる。それと真逆にそのド真ん中に移動するルシア、空中都市にも射線が被っている為だ。……………ん？

「おい！それブレスだぞー！」

ゴオオオオ……………！

寒！避けたのにこの温度か、俺自身の耐性とマフラーありきでコレだ。直撃したら間違えなく死ぬ。後ろを千里眼で確認するとルシアの前には障壁が貼られていた。なんとか間に合ったか、まあ、こつちも見ながら移動しているのでなんとか刀の届く距離まで来た。挨拶代わりに下顎の裏に一閃、が結界に阻まれた。まあ、固くなさそうな所や急所は警戒するわな、反撃として迫る牙を躲し、目を狙って動きに合わせて添えるように刀を置いたが、結界のせいで外側に弾かれ

た。なら探すのと反応できない速度を試すために刀を逆手に持ち、龍の頭から尾を目掛けて全身を駆ける。……………手応えはない。

《対象は全身を結界で覆っているようです》

……………今言われてもねえ、さてどうしたものか、つと思案していると空中か数発の弾丸が結界に穴を開けて爆発した。……………なにアレ、クロエに火魔法は使えなかった筈だ。となると……………

《レアが開発した銃弾です》

そうか、作り置きは別に今の分以外もあるか、今のは指図め徹甲榴弾か、ただ、結界は貫通しているが鱗まで辿り着く頃には貫通力が無くなっているのが致命傷を与えられない。爆発力も小さくないが、相手が大き過ぎる、俺なら結界を侵食して突破できるが、時間掛かりそうだな、まあ、尻尾のあたりに取り付いてるんだが、普通の人なら爆風の煽りを受けるが、俺には炎熱無効がある。火そのものは魔法であろうと何とも無い。風圧の耐性も多少あるので問題ない。

《低温無効を獲得しました》

おし、これでよしつと、マフラーを外して投げる（隔離で回収）。……………あつ、バレた。尾から手を離し、流れに身を任せ、距離をとる。他にも幾つか拝借させて貰ったが、まだスキルは残っている。粗方有用そうなスキルは貰ったが、まあ、止めでいいか、

「クロエ！さっきの徹甲榴弾と予備の弾をくれ！」

「は、はいー！」

二発の弾丸が放り投げられる。それを……………軌道が違うので隔離して手元に出す。

「ルシア！注意をそっちに引いてくれ！クロエは止めの一発を撃つ準備をしてくれ！」

意識がルシアに向いたのを確認して、足元に結界を出し、そこに腰を据える。弾丸に刻まれた刻印を分析する。緻密な刻印は高い技術が要求される。使い捨ての一発の弾丸に刻まれるには勿体無いと思える程だ。ただ所詮一発の弾丸、刻める面は狭い上に曲面だ。正確に刻むのも難しい。特徴としては弾体の先端に結界が貼られる刻印と残りは爆発。弾体の先端に軽金属等の物で覆う事で弾体の保護と食

い付きを良くして貫通力を維持する、先端の結界はそのための物だと考えられる。代行者、刻印の案を頼む。

《分かりました………完了しました》

仕事が早いね。そのイメージを読み取り、素早く書き込む。ここなんか空いてるから薔薇でも彫つとくか、隔離してクロエにパス、クロエの狙撃の腕なら当てるのは問題無い筈だ。上空に発射炎マズルフラッシュを確認した直後爆発が起きる。龍の真下で、すごい爆発。当たったら真つ二つに出来たはずだ。

「クロエ！もう一ぱ………」

『おぬし！待つのだ！』

ん？

『一体何者じゃ?!そのステータス偽装は傲慢に属するスキルを持つておるな、しかもさっきの魂を直接侵食するのは………冒流じゃな?』  
「なんだ、話通じるのか、流石賢龍の眼を持つだけあって頭は良いらしいな」

『なんだ、ではないわ！死ぬじやろ！あんなもの！貫通したからいいものを身体の中で爆発しとつたら千切れ飛ぶわ!』

あつ、当たってたんだ、少し結界を強くし過ぎたか、当たったと思わしき場所を見ると再生で塞がっていたが、鱗に微妙なズレがあった、それと自己再生とか持つてる敵には銃はあまり有効的ではないかもしれないな。何か他の手を考えないと、

『おぬし、聞いておるのか?』

「いや?それよりなんであの街に向かつてたんだ」

『聞いとらんのか?!………はあ、ただ美味しいものがたくさんあるらしいから来てみたのじゃ』

威厳もクソもねえな、と思っただがそれは口に出さないで置いてやろう。

「ああ、それはこの街を防衛する為の罠だな、トカゲの尻尾切りみたいなものだ。人間なんぞより美味しいものがあればそっちに行くだろう?」

『うむ、そうだな』

おい！コイツ人食ったことあるのか?!疑いの眼差しを向けていると、

『……………わしは人は食わんぞ』

と言われた、まあいいか、

「飯が食いたいだけなら食ったら帰れよ」

『ぬう、仕方あるまい』

ふう、物分りのいい奴で助かった。結界から要らなそうな魚を出してあと都市周辺から見繕ったのを混ぜて龍の前に出してやると、暫く食事をした後、反対方向に飛んでいった。……………さて、帰りますか、

昨日はよく寝た。一応大事をとって授業だけに済ませた、なにせ今日はまたケーキを売り出す日だ。昨日はアナスタシアとレアが作り置き分を準備してたし、材料は足りなければ芦原さんに調達してもらう。まあ昨日は昨日でちよつとした実験をしたので魔力が少なくなっている。まあ、それを見越して魔力自動回復を10になるまで吸収したのだが、まだまだ魔力が足りない。

『おはようございます。ご主人様』

魔力が制御出来るようになってから改めてランタンを改良して、新たな機構精霊を作った。それで魔力を二つの機構精霊に半分づつ魔力を与えた。代行者曰く、俺の魔力の半分が機構精霊を作れる限界の量らしいので、魔力切れ時の実験も合わせて行った。魔力切れになると頭痛、吐き気、倦怠感に襲われ、暫く、身動きが取れなくなる。ついで魔力切れが落ち着いて来た時に出来た機構精霊を確認するといったもの眩い光がしっかりとした形を持っていた。片方はひし形のクリスタルを思わせる赤とキラキラの粒子のようなものを周りに放出しているように見える。もう片方は剣の形しており、淡い青の光とこちらの光の粒子はスノードームの雪を思わせるように狭いランタンの中を彷徨っている。そこで昨日要望を聞いたのだが……………

『姫は身長は向日葵やレアくらいで、胸は……………クロエやクロシエツトより少し、少しだけ小さいくらいで』

『小生は……………アナスタシアやノルンくらいの身長で、クロエやクロシエツトくらいの胸で』

…………お前ら滅茶苦茶バランス悪いな。

「朝日はともかく、月夜はバランス悪いから、胸少し小さくか、身長伸ばすか選べ」

『……………じゃあ身長』

といった感じで胸にはかなりの執着が見られる。他にも細かい要望を詰めていると、

「あの…………休憩に紅茶はいかがですか？」

クロエが紅茶を持ってきてくれた。有り難い、アナスタシアとレアは店の準備に追われているので二人の手が空いてないときは大概クロエが身の回りのことをしてくれる。向日葵とアリスは俺が絡むと思考が斜め上に行くので何かとやり過ぎる。…………うん、落ち着く。

『やっぱり、姫も同じ大きさにしてもいいですか？』

「……………わかった」

このタイミングで言われるとクロエの胸元にチラツと向いた視線を読まれた気がする。男だから仕方ないでしょうに、

『やっぱり大きい方がいいと小生も思った。ペタン娘は無い』

「あのあのー、なんかくデイスられてる気がしたんですけど、気のせいですかー？」

ゆらりとした動きで部屋の入り口に現れたレアがばあ、と言う笑顔とは裏腹に天使系とかに関係無く殺気を出してる。だが、部屋の入り口に留まるのは良くなかった。廊下に響く足音がこちらに向かってきている為だ。

「お兄ちゃんー！助けてほしいにゃー！」

ドン！ズザー…………

正しく跳んできたクロシエットの胸がレアの顔面に当たった。柔らかさ故に衝突時の衝撃は少なかっただろうが（スローで見たら水風船みたいだった）、反発力も合わさった総合的な運動エネルギーで廊下から玄関までぶつ飛ばされた。吐血する辺りがやたら芸が細かい。ちなみにこの血は血系・無形テイルフィンと同じ物だ。レアの内部に少量だが使用されている。床に吐いた血も本人の意思でも回収できるし、一定距



離れると回収される仕様だ。駆け寄ってやりたいが、多分駆け寄ると死ぬ前に〇〇したかった、みたいな要望を言われそうなので安定のスルー、少し間があつて、クロシエットに続いてアナスタシアが入ってきた。

「マスター……………ちょうど良かった、聞いて」

アナスタシア曰く玄関、風呂場、キッチン等のマットで寝られるのがかなり迷惑らしい。クロシエットのスピードだと検知出来ないし、さっきまで居なかったのに次の瞬間にいる事があるので回避が難しい。……………という話をしている間、クロシエットはと言うと……………

シユバババ……………

……………部屋の中を縦横無尽に駆け回っている。

「クロシエット」

「にゃー！」

俺の前に止まるクロシエット。

「迷惑になるようなところで寝るなよ、眠くなったら部屋にベットだつてあるんだし」

寝る必要とか無いのだが、部屋は各々あり、その部屋に何も無いのは味気ないのでベットを置いている。後は本人の好みでいろんなものを飾っている。

「わかったにゃー！」

「もうやめてよ」

「ごめんなさいにゃ」

「……………何のマネ？私の方がお姉さん」

「にゃー？頭が撫でやすい位置にあつたからつい、にゃは」

「……………もげろ」

クロシエットの胸にアナスタシアが飛びついた。ガツシリと双丘を両手で掴んでぶら下がっている。微笑ましく見ると、入り口付近からウサ耳が見えた。

「ひっ」

すごい殺気、多分俺の知識をコピーしてるから、素で出せる経験は持つてる。主に殺気はクロエの胸に向かつてる。短い悲鳴をあげた

クロエは逃げ道を探すが、この部屋にそんなものは無い。がその空気を完全に無視した言葉聞こえる。ヒソヒソとだが、

『こわーい、姫あんなふうになりたくくない』

『小生も右に同じ』

まあ、レアにはヒソヒソ話の意味は無いのだが、あのウサ耳は飾りじゃない。殺気が俺の左隣に向く。

「聴こえていますよ〜?」

ニコオ……、という擬音が合いそうな笑顔で嗤う。こわーい、部屋から飛び出していく2つの光とウサ耳を見送ると、後ろでクロエがほっ、と胸を撫で下ろしていた。

ーてな、訳でね、全く準備が出来てねえのよ。

「……………いや、無言で見られても分かりませんよ」

目は口ほどに物を言う。なんて諺があるが、自分が伝えたくない事ばかり語り、肝心なときに黙るんだよな、解せね、

シヤカシヤカシヤカ……………

「あの、無言で生クリーム作らないでくれなす?」

まあ、俺にも料理とパティシエのスキルがある。なんとかなるだろう。というか……………

「パティシエって職業だろ」

《職業に菓子職人が追加されました》

この世界大丈夫か? まあ、残念神達あんなが統べる世界だ。忘れてたとか今作ったとかありそうだ。

「そっちの飴は少し色が変わったら言ってくれ、時間との勝負だからな」

ケーキにつけるのに普通の飴は硬い。なので糸飴用に溶かしてもらってる。あと芦原さんにキッチンペーパー、割り箸、麵棒その他諸々いろいろ用意してもらった。あっちにいた頃よりも道具が充実しているのは皮肉な話だ。

「芦原さん、ベースに業務用アイス出してください。バニラで三つ、それとラズベリー、さくらんぼ、あとナッツを追加でお願いします」

レアはあつちの方でチョコの湯煎をしている。あれ以降スイーツ関連の店がこの街に来てるらしいのでその牽制も兼ねて、俺が大きなスイーツを作ることにした。

「飴、変わってきた」

「お、ありがとう」

小さめの容器に入れて、麵棒に垂らす。暫くしてからそれを引っこ抜くと飴のトンネルが出来る。残りは箸に垂らしとく、

「あのあのー、チョコも多分いい感じ〜?っになってきましたー」

「そつちは一回見本見せるからあとはその通りにやって冷蔵庫に、残りは俺が書く」

「はいー」

前もって膨らましておいた小さい風船(ちゃんと洗いました)を結び目を持って、適当なところまでチョコに沈める。風船が見えなくなるまで沈めてはいけない。次はキッチンペーパーに網目状にチョコを垂らして、あとは適当に……

「………結界って型に使えるかもな」

イメージで作った結界にチョコを入れて………冷蔵庫に入れて待つてる間ずつと使いつぱなしは面倒なので前に会った豪雪龍から拝借した。凍結魔法で一気に凍らせる。これで後からドライヤーとかで溶かして付けるみたいな事はしなくて済むな、後は生クリームを量産する。………あつ、ドライヤーだが苜原さんのスキルを強化して知ってる物だけの制約を取り払った。そんなもって発電機を買った。ただ、初めはスキルを使う際に使う魔力が完全にオーバーして失敗した。なのでそのあたりを弄って、金額が増える方向にした。ルールとしては体積、重量に左右されるようだが、結構無理やり弄ったのでイマイチ全容が掴めていない。総合的に金塊を30本位使った。………騒音がなんとも言えない。さてと、後は一気に仕上げるか、

「すつごーいー!」

「あれ、全部お菓子なの?」

「………大きい」

ふうー、キツイわ、もう少し飴で遊びたかったが、土台は業務用ア

イスだがらな、生クリームやフルーツなんかで四角いのを誤魔化しているが、なんかこう……こういうのは1から作らないとモヤモヤする。上にはチョコの装飾を高く塔のようにした。網は適当にそこら辺にブツ刺す。結界のお陰で曲線も美しい艶が出ている。飴は透明感が神秘的な印象を作り出している。余った分は纏めて菓子として、風船チョコと一緒にケーキの上に配置した。風船についてはチョコを凍らせてから針で風船を割って取り出してある。これでドーム型の空洞チョコが出来る。後は表面に（風船を割る前に）スプレーなんかで色を付けたら、粉砂糖を眩したり、後は好みで配置する。でムースでチョコの根本付近に池っぽいものを作る。食べるのが勿体無いと思える位には装飾は完璧だ。

「これは………凄いいじゃないですか！」

………あれ、この声は、

「これはこれは、エドガーさ………」

丁寧に應對すべく、挨拶をしたのだが、俺の挨拶を最後まで聞くことなくエドガーは俺の手を掴んだ。

「この素晴らしいケーキは何方が!？」

………まず落ち着くか？

後ろのエリーはケーキに釘付けた。まあ、みんなケーキを見てるんだが、客寄せ目的なので目的は達成している。今回は店頭で売るスタイルに変えた。プリンは準備した分しかないので数量限定にしていた。エドガーは………応接室を借りるか、

貴族の話は長い。要約すると、あのケーキは素晴らしい。今度のパーティーにケーキを作って欲しいとか、主にはこんな感じだ。その間切り分けたケーキを親子でつついていた。まあ、気軽な感じなので、ただケーキを食べに来ただけだろう。なので、

「あ、プリン作ってきますね。それとここの代表の藤白も支援して頂いているお礼を言いたいでしょうし、私はこれで」

親睦を深めるのも仕事だ。それにプリンは俺の能力で時短できる

筈だ。まずプリン液を準備して、小型の容器に入れる。次に液体から熱を冒流で奪い、凍結魔法で少し冷やす。ここから隔離して時間を経過を早める。完成予定時間は？

《2分です》

12分後

チヨイ凍りすぎだな、次は途中で出だして様子見……いや、未来視で狙った結果を探るか、

15分後

「これ、応接室に持っていってくれ」

「わかりました」

クロエの持っているお盆にプリンをちよこんと乗せる。……お盆の殆どは胸に占領されていたので当たらないようにするのに苦労した。その背中をコケないか心配しながら見送ると、冷蔵庫を開ける。

「芦原さん、卵とチョコ、砂糖の補給を」

「おう」

向日葵は複数の手を伸ばして泡立て器を使って生クリームを量産している。アリスは接客を任せだが、計算がまだ駄目なのでクロシエットに計算結果を耳打ちして貰っている。この状態なら姿勢は全く問題にならない辺りはビジュアル部門一位は伊達ではないということか、

「さて、俺も落ち着いたし取り掛かりますか」

なんて言いながら各種金属を隔離空間から取り出した。

## 個別指導

今回はアダマンタイトとミスリル、オリハルコンと青生生魂の組み合わせで手や顔なんかを作っていく、

「他に要望とかあるか？」

『姫の髪を明るい赤系の色にできませんか？そっちの方が姫には似合うと思うんです』

「……………赤か」

金属で赤は中々無い。実際見つからないし、見つかってない。戦闘も考慮する必要があるので強度はもちろんの事、魔力の要素が大きく関わる。いろんな本を読んでいるのでどの本かは忘れたが、魔力は電気のような物で、よく通す物や抵抗が強い物とは他に適する物と適さない物がある。鉄の剣を例に上げると、魔力はあまり通さないが貯める性質は強く、魔力によって変質しやすい。よく使うアダマンタイトと比較するところだ、

アダマンタイト

伝導率（魔力を通す） 100%

蓄積（魔力を貯める） 4%

硬度（加工難易度と頑丈さ）めっちゃ硬い

意思憑依適正 93%

変質しない

鉄

伝導率 26%

蓄積 30%

硬度 加工しやすい

意思憑依適正 16%

変質する

まあ、真理ノ瞳がある俺ぐらいしか見えないと思うがこんなものか、意思憑依適正（機構精霊等を宿すオートマタを作る際の精神、魂の安定性、操作性を指す）と伝導率が低いと動きがぎこちなくなるらしい。また伝導率が低いと魔法の制御にも支障をきたす、こっちは剣

での話だが魔力を纏わせる場合、アダマンタイトは発動速度が早く、安定して使いやすいが、魔力は凄く速度で抜けていくため、それ相應の魔力の持ち主出ないと、満足に戦う事もできない。鉄の剣の場合は魔力の消費は少なめだが、安定させるにはコツを掴む必要があるのと、最大出力がアダマンタイトに遠く及ばない。あと魔力のロスが大きいため、運用効率が悪く、魔力の割に威力が出ない。ただ変質があるので鉄からよく使う魔法属性に適した鉱石に変わる。ただその変質を踏まえても赤になる鉱石は無かったのだ。代行者よ、何か人形作りに適した材料で赤い物無いか？

《世界樹の柾目材はどうでしょうか？》

……………、世界樹の……………え？ちよつと待って、それ切つていいの？

《世界樹は10本あり、一本を除き等間隔で植えられ、龍脈、空気中の魔力の調整をしている樹です》

で、その内の一本を切られたと、等間隔とか何か作為的物を感じる。《切られたのは三本です。文献によりますとベヒモスと言う魔物と認識されています》

……………おい、これヤバくないか、誰の意志かは知らないが、目論見外れまくりだぞ、世界樹を見てわかったが、この規模は個人にできるような事じゃない。それこそ人ならざる者の……………

「はあ……………」

脳裏にあの残念神の半泣きの顔が過ぎった。頭が痛いな、魔力が増えすぎた場合や世界樹の再生または植樹と社会への世界樹の役割の説明、俺が考える部分と、代行者が考える部分を分担して思案する。[……………何にしても材料を入手してからだな]

それと世界樹の特徴、性質なんかも移動中に教えてくれ、

《了解しました》

「悪いな、どうしても手が必要だな」

「いえ、ご主人様のお力になれたのなら、ワタクシ達には光栄な事ですわ」

「そうにや！お兄ちゃんは基本的に一人で何でもやり過ぎなのによ！

もつと頼ってくれにやいと、作ってもらった意味がないにや」

「……………私もそう思う」

「そうですねよ、移動で頼られなくなったら私、引き篋もつてると思いますが」

「私、最近はお主人殿と外出した記憶がないですよ？」

「いや、買い物には出てきただろ」

今回はクロエ、レア、ルシアにお留守番をしてもらった。子供達は俺が外に出る時は芦原さんも追加でさらに幼い子の面倒を見てもらっている。

「まあ、掻き集めて足りて良かったよ」

世界樹の材料は高い、柱目材は尚更だ。だが、そんな高額をそのまま移動させると影響もある。その上、街がインフレを起こしているのでその解決も兼ねて行こう。まず、回っていない金を回収（ギルドの依頼をこなす）、街の全体にある金や分布を確認して、上手く回るように適度に買い物、そのついでに世界樹の材料も買う。……………面倒くさい。代行者に丸投げしたいのだが、こいつ人の行動を読むのが下手で、急激的に解決しようとする、金額的に問題なくとも、後から破産するものが出る。それだと本末転倒だ、

「……………材料も手に入った方がいいか」

ただ、いちいち会って話しないとその操作はできない。何せ精神誘導だしな、まあ、こういうのは得手不得手を把握して、適材適所が望ましい。

「じゃ、この街にもポイントを設置してくれ」

「承りました……………お父様すみません。ポイントは設置できる数に限があるみたいです」

「そうか」

《50箇所登録されています。設置してある物を解除すれば、新たに設置できます》

「……………わかった、じゃあ、使っていない所のポイントを解除して新しいポイントを設置してくれ」

「承りました」



「しっかし、よく50も覚えてるな」

「それが、お父様の為にできる事ですから」

「お、おう」

「……………みんなの信頼が重い。まあ、やれる事をやるだけだな、帰ってくるよ芦原さんとクロエ、レア、ルシアが伸びてた。」

「……………体力ありすぎやろ」

「不覚……………」

「ぜえ……………はあ……………ぜえ……………はあ……………」

向日葵やアリスは留守場が多いので子守には慣れてるみたいだな、お、

「ウィル達も手伝ってくれてたのか？」

「はい先生」

「おう！どうやれば先生の課題を達成できるか考えてただけけど、全然わかんないし、部屋でじっとしてるのは性に合わないから、いつもやってる事に先生の強さのヒントがあるかもしれないって思って」

「そっか、頑張ってる所悪いがあんまり無いぞ」

「あんまり、ですか？」

「そうなのですか?! 斯様な私では主の……………」

「はいはい、兄さんそれはやめてって言われてるでしょ」

まあ、ウィルに関しては諦めた。

「危ない事しないかとか、目を配っただろ、戦う時も敵が一人とも限らないし、周りに目を向ける必要がある。そういう時は倒せなくても生存重視だ。連携とか一人では躲しきれないものもあるし……………その辺りはまた明日教えるよ」

「えっと、課題は？」

「あれはクリアできなくても良い。俺は強いだけ言われても具体的にどのくらいとかわかんないだろ、武道を習う時も鍛えればこんな技が使えるとか分かった方がいいだろうし」

護身には事欠かないレベルだしな、中堅冒険者には負けるがそんなじよそこらの駆け出し冒険者には負けない筈だ。だが

「……………と言っても今見てる子の中で頭一つ抜けてるだけだ、どれだ

け強くなりたいたのか、それにもよるが俺に近い所までなら引つ張って行けるぞ」

油断や迷い、慢心はすぐ様死に繋がりがねない。その辺りはしつかり釘を刺す。さて明日は結構大変な気がするな、金は手元に結構あるし、教育に力を入れていくか、

「今日は授業に入る前に聞きたいことがある。ウイル、キリエ、ハルト、ロイ」

「二「はい！」二」

「お前達はまだ強くなりたいか？」

「二「はい！」二」

軍隊式で育てたつもり無いんだけどなあー、

「今日は総当りの組手を予定しているが、四人は準備運動の後こっちに來てくれ、向日葵、アリス、ルシア……あとクロシエツトで他の子たちを危険なことがあった時は止めてくれ、アナスタシアはそこで待機」

「二「はい！」二にや」

「了解であります」

よし、何時もより入念にやるか、準備運動、

「さて、今回はどうして強くなりたいたいか、聞いていいか？まずハルトから」

「え?!俺からですか？」

ハルトは一番分かりやすい。強くなるという思いが他三人より強い。

「一つじゃなくていいぞ」

「えっと、……………俺は、初めは襲ってくる奴を倒せる力が欲しかった。でも、先生に戦い方や勉強を教えてもらって、落ち着いて考えてわかったんだ。俺は弱っていく仲間を見捨てなくてもいい力が欲しかったんだ。諦めたく、ないんだ」

「わかった。いい覚悟だ。お前はそれを忘れるなよ。ハルト、お前には才能もある。いつかは俺より強くなれるはずだ」

この年でここまで精神的に完成していれば、このままだと俺が抜か

れるな。うかうかしてられないな。

「主よ、今こんな事を言っても、愚かだと思いいになると思いますが、私は貴方を守る程の力が欲しいのです」

「志を笑うなんてことはしない、ただ、俺なんか護衛しなくていいぞ、あいつ等もいるしな」

「ですが……」

「兄さん、静かに、私は今の力じゃ足りない気がします。それに強過ぎて困ることなんてないと思いますし、戦えないより戦えた方がいいです。なのでお願いします」

「僕は、種族から見ても力は弱いです。先生に合う前は戦いなんて魔法だけだと思っていました。武器を使うこと自体を野蛮だと、出来ないことから目を逸らしていました。でも、ここに来てからは……ここなら僕でも魔法以外でも強くなれると思うんです！ですから、お願いします！」

「ここからは更に厳しいぞ、それでもいいか？」

それぞれの想いを胸にお互いに目配せをして声を揃えた。

「二「よろしくお願いします」」

「………よし、今日から少し個別授業とそれを見て課題を出す。まずはロイからだ………それと予め言うておくが、ゴールは一緒だ、ただそれぞれの得意な所を伸ばすから、教えてる事が真逆でも心配しない事、アプローチが違うだけだ、お互い話してて不安になるなよ、わかったか？」

「はいー」

「ウイルとハルトは筋トレと持久走だ。このスケジュールで5セット、時間が許す限りだ」

「はいー」

「キリエは南の三番目の部屋で瞑想だ。あそこなら静かだ、ロイも明日は瞑想してくれ」

「はい」

「………さて、初めにお前が自分の事をどれくらい理解してるか、だな」

「先生、僕は何を……」

「初めにお前には課題の全容を話そうと思う。ロイの次はキリエ、ウイル、ハルトの順で指導していく。ゴールは格上との戦い方を身に着けてもらう。ついで、格上の敵の中には直感的にヤバいと思う奴がいる。そういう奴は大概、気迫を使う」

「はい？」

「気迫ってのは3種類ある。一つ目は気迫、格下を気圧す、一番分かりやすい基礎系の奴だ。次が殺気、殺す、殺せるの意思の発現、強い弱いはあるが、虫を認識して潰す時だつて出てるぞ、まあ、このレベルだと微妙だから向けられた奴でも気付きにくい、不意を付いてぶつければ一瞬だが敵を硬直させることもできる。三つ目が闘気、敵を気圧すのとは違つて盾ともなるし、己の力を上げたりとかな、これはちよつと上級者向けだ、そんでだ、四人に見せたあの一太刀はそういう技術の応用だ」

「そ、それで、僕はどれを習うんですか？」

不安そうな面持ちで俺の話聞いてるロイが質問した。ただ、気が重いな、

「いや、ロイに教えるのはこのどれでもない。むしろ逆の技術だ、」

「え？」

「ロイ、お前は確かに種族的に体格に恵まれていない。魔法も魔力が切れれば使えなくなる。そんな時、仲間を除けば、お前を一番助けてくれる技術になるだろう。だが……」

「まだ、理解が足りてないところがある」

「え？……えーとあの」

「だからまずロイ、お前の考え方を変える事と、お前に合った戦い方を教える。前使ったレイピアは持つてるな？」

「は、はい……」

ロイがレイピアを構えたのに合わせて、俺は体に込められる限界の魔力を込める。

「お前が鍛えるべき力を見極めるんだ。それと……始める前に言っておくが、加減はするが直撃すると死ぬ可能性がある」

「……………覚悟はしています」

「分っている。ルールを説明する。とにかく俺に一撃当てろ、レイピアでも拳でも蹴りでもいい。俺に有効と言える攻撃を当てる。弱すぎる攻撃はカウントしない。場所はこの森全域だ使える物は何を使ってもいい」

「はい、お願いします」

「まずはロイなりのやり方で来い」

静かにレイピアを構えると、風がロイの足元の草だけを不自然に揺らす。その直後一瞬で距離を詰めて一突き、それを余裕を持って躲す。

「魔法は何かしらに干渉するから、次何をするかが丸わかりだ」

瞬間的な速度ならハルトを超えるが、それは今の話だ。魔法のアシストは身体の限界以上の効果は得られない。その上、風の補助なんてたかが知れてるし、俺と同じように魔力を込めて戦うとしても、魔力は足りても、ロイの体の頑丈さでは、込められる魔力が少ない。わざと大きく拳を振りかぶる。少し気迫を出して、するとすかさず回避行動をとるロイ。

「ロイ、お前の観察力は高い。相手の気の検知が上手い、それとお前の体は打たれ弱い、筋肉が少ない分、素早く踏み込んだり、引いたりできる」

ヒットアンドアウェイと魔法による遊撃はなかなか無視できないものになるだろう。そこにアレを教えれば……………と言ってもまだ、圧倒的に経験が足りない。大振りな攻撃は当たらないが、モーシヨンの小さい短打なら当てやすい、しかし、さっきも言った通り、ロイの体は丈夫じゃない。それとまだ認識が甘い部分があるので、当たらないようにして拳圧で吹き飛ばす。

「うわっ！」

……………予想より飛んだな、10メートルくらいか？

《正確には13メートル20ミリです》

はいはい、すかさずロイの顔の横を拳で打つ。まあ、これで理解できると思う。ロイはいかに体を鍛えようこの強烈な拳圧の煽りに

耐える術は無い。だから、当たらないための技術を鍛えなければならぬ。

「さて……………今から教える技術は習得は簡単だ。だが、極めるのは一生掛かるとも言えるものだ、研鑽を怠るなよ」

俺は体に込めた魔力を放出する。

「キリエは武器の反復練習。ただし、複数の武器と合気道と剣と詠春拳だ、これらを中心に教える」

「え？ 一気にですか？」

キリエの強みは他の子よりも技術を物にする能力が高い。俺も詠春拳なんて使ったこと無いが、芦原さんから本も貰って、一通り技は使ったので基礎に忠実に教える分には問題ない。

「まずは、詠春拳と合気道からだ」

「……………二つなんですね？」

「合気道は少し教えてるし、大丈夫だ」

キリエの弱点は素手で弱い事だ。女の子だから仕方ない事だが、魔物相手にそれは通じない。むしろ、狙われる可能性が高い。乱戦中に武器を失った時、自分の身を守る術が無いのは非常に困る。それと、そこらへんの棒でも剣術の心得があれば勝てなくても、逃げる時間くらいは稼げるだろう。

「キリエには相手を倒せる、という自信を持てるようにしてくれ」

「は、はあ」

「それと魔物との戦闘も数こなす事になる筈だ、その為にキリエにあげた棒に刻印を入れる、この指導の最中は代わりの棒を使う事、困った時は手近な物、石や皿、食器に硬貨……………何でも使えばいい。ある程度できるようになって来たら実戦をやる」

「はい」

キリエには多様性と殺気を身につけてもらうつもりだ。それと、

「魔法についても勉強していく、水系統の魔法を第三位階まであげる」

「マ、マジですか……………？」

「ああ、実際ロイは旋風魔法を使える。土魔法も、もう少して植物魔法を習得する」

「あのヒョロヒョロ、どんだけ魔法凄いのよ……………」

土魔法は礫魔法、衝撃魔法、そして植物魔法に分岐する。エルフは植物魔法に分岐しやすい。火魔法はさっぱりだが、時間があればロイなら水魔法にも手をつけるだろう。

「さて、始めようか」

「お願いします」

木の棒がぶつかり合う音がしばらく響いた。

「ウイル、お前には聖魔法の習得をして欲しい。適性はあるから問題ない」

「ではすぐさま……………」

「いや、ウイルには使える様になるのは問題無い、それよりどんな状況でも発動できるようにしておいてくれ、それともう一つ戦ってればわかると思うが、受けていい攻撃か、受けてはいけない攻撃かを見極める経験を詰むこと、相手が有利な時でも逃げ出したくなるような気迫を身につけてほしい」

魔物との戦闘もこなして貰う予定だ。理想としては継戦能力の高い前衛のヒーラーだ。完全にバーサーカールートだと言う事が気がかりだが、

「並行して打たれ強さも身につけてもらうからへばるなよ」

「全身全霊答えてみせます」

……………そこまで本気でなくてもいいけど、まあ、ウイルは体格には恵まれているのだろう。かなり筋力ついている、

「あと身体強化もな、魔力の限界量も増やす必要があるから一気に行くぞ」

「まあ、一日目なんて説明ばかりだよ、お前には指導に入る前に決めてもらう事がある。」

「先生、俺難しい事は分かんないぞ」

「大丈夫だ、そこまで難しい事じゃない。お前自身の強いのが方向性だ。筋肉ってのは重いんだ、付ければ威力は増すが速度は死ぬ。体重をしなければ筋力と威力は落ちるが、体が軽くなる分速くなる、付け方を間違えるとキレが悪くなる。一撃の重みか、手数で戦うか、ハルトの素

養ならどちらも選べる」

「先生……俺どっちの戦い方も使ってるのよく見たことあるんですけど」

「……まあ、なんだ、俺のはちよつと特殊なんだ。武術ってのは一つだけというルールはない。八極拳が分かりやすい例で短打で超至近距離の防御突破、又は無効化にコンセプトを置いてるが、当然至近距離まで行かないとリーチが足りない。武器を持つてる相手には接近できれば容易く倒せるだろうが、それまでが大変だ。で、昔の達人と言える人達は槍の名手が多かったらしい」

戦争でものを言うのは生存能力だ。槍はリーチが長い分、距離を取って戦うことができる他、牽制や横に避ける場所がない通路での戦い等ではかなり役に立つ。が、刃は先端にしか無い上に突きに特化したものだ。間合いの内側に入られた場合、殺傷力は皆無だ。お互い丸腰なら棒一本でも差になるが、完全武装してる人間に木の棒はまず効果がない。乱戦時は長物なので邪魔になる。それに槍は案外脆い。折れた時や乱戦時、武器が無い時、身を守る術さえ無い人間は生き残れない。継戦能力等の面で見れば、槍と八極拳はお互いの弱点を埋め合う、最適な組み合わせと言えるだろう。……まあ、素手なので状況次第だが、

「なんだ……生きてりゃ勝手に付いてくるものがあるんだ。それに武道は繋がってるんだよ、剣の使い手は剣だけが上手くなるわけじゃない。並行して伸びる能力もあるし、似た技を使う流派とか、色々自分の糧にしていったら、その内自分の中で形になるんだよ」

自由とは最も迷うものだ。大概得手不得手で行けない方向があるので、選択肢から選ぶのだが、何でもいいと言われても、何が選べるか分からないのでは選ぶようが無い。俺は居合から入って色々齧ってこんな感じだ。出来るならこんな戦い方は真似てほしくない。ただ、それ故に提案できる手札は多くある。

「幾つか候補を上げるからその中で気になるのがあったら言ってくれ」

カタカタカタカ……



暗闇の中に光る薄明かり、そこに向き合う人物、……うん、俺だな、キーボードを打ち、保護している子供たちの名簿を管理して、設計図や案を纏めていく。

「旦那様……体に障りますよ」

「……まだ、6 徹だ」

「私達はー、眠りを必要としないですけど旦那様は……」

「それより武装のアイディア無いか？ネタ切れなんだよ」

「……旦那様が行き詰まるような物、私には荷が重いと重んですが」

「見てもらわないと話にならないの肩越しに見せる。……こういう時クロエだどがつつり胸が肩に乗る。そして無自覚なのだ。」

「なにか？」

肩に置かれた手が妙に冷たく感じる。気のせいだ。

「……アホなんですかー？と言うか誰に使わせるつもりなんですか？」

「ネタだけでいいから、頼む」

「分かりましたー。でも……ちゃんと休んでくださいねー」

冷たい手が襟から胸元に入ってくる。何してんの？

「イーヤ、ネムレナインダッタラ、イイ抱キ枕アリマスヨ」

何故片言、絶対何かやましいことがある。又はこれからしようとしていのか、

「……マスターから離れる」

「あ痛っだ！……お、お尻が」

さっきの声はアナスタシアか……助かった。ただ何をしたんだ、見えなかったけどなんか衝撃が伝わってきたぞ。

《前にウイルが芦原と藤白に行っていた事だと推測します》

……まさかのカンチョウ？

まあ、アナスタシアじゃ頭叩こうにも手が届かない、にしても情け容赦の無い攻撃だな。あとそろそろ、尻ばかり擦ってないでパンツを隠せーレア！

「その汚い尻隠す。マスターの前」

ちよつ！言い方！誤解を招くわ、レアはバツとスカートを戻すと顔を赤くしながらこつちを見ている。

「……………俺は明日の夜寝るから今日はこれのアイディアをくれ」

「わかった。明日は布団暖めとく」

頬を仄かに朱に染めるアナスタシア。

……………アナスタシア、お前もか、

その日は案より明日どうやってアナスタシアを躲すか、頭を捻るところになった。

まったり、まったり

バキバキ、パキツ、

「ああ……………」

体が硬い。寝て起きてから無茶の代償を知る。だが、今日はやけに体が重い。特に左手が痺れている。こんな時はまどろみに身を任せるのがいい、幸い今日は休みだ。姿勢を変えなるべく寝返りを打とうとしたが、全く体動かない。

「ん？」

これは疲れて体が重いんじゃないな。痺れている左腕を動く範囲で動かす、何かに当たったが、痺れているので何かわからない。

「……………みや、う……………」

枕を挟んで反対側何があるのかは知らないが、やけに重い、引き抜こうと思えば引き抜けるので、手を開放すべく少し強引に引っかく。

「にや……………あふ……………」

……………、ゆつくり枕を退かす。そこには布団から出た下半身とその後ろでせわしなく動く緑の尻尾が、聞こえにくかったが、さつき布団の中から呻き声みたいなのが聞こえたからな。……………さつき俺は何を触ったのだろうか？とにかく現状を把握すべく首を降るがどうにもならないので千里眼で視点を切り替えて見る。布団を挟んで俺の上に向日葵、クロシエットの俺を挟んで反対側にノルン、ルシアは壁とベットの隙間に挟まっている。レアは何故かパンツ一枚で扉の前にアヒル座りでもたれている（廊下にレアの服が）。アナスタシアとクロエ、アリスはざっと見た感じ見つからない。とにかく起きる為に結界を使って起こさない様に退かす。

「あれ、……………まさかな」

布団を捲ってみるとアナスタシアがいた。こっちもやんわり退かす。……………しかし、今日の朝食はどうするのだろうか。みんなここにいるので、作り置きでもない限りは朝食が食べられない。自分だけならまだしもあの子達も食べられないのは良くない。たまにはみんなを

休めるのもいいだろう。そんなことを考えながらカーテンを開けた。

「……………」

クロエが亀甲縛りで吊るされてた。取り敢えず救助、  
「……………」なあ、早々で悪いんだけどアリスどこにいるか知らないか？」

「ベットの underside……………まさか集中攻撃にあうとは」

「……………」

「……………アリス」

クロエも所々服がボロボロ担っていたが、アリスはお見せ出来ない状態と言うか、女の子なら見られたくない姿だろうな、……………自然と目が覚めるのを待とう。

「クロエ、朝食を作るから手伝ってくれるか？」

「はい！マスター！」

「吊るされてたのに悪いな、休めてないだろ」

服はボロボロだが、その内再生する。クロエみたいにメイド服以外をあまり身に着けない子はその服に自動修復系の刺繍がしてある。丸ごと消失していれば機能しないが、刺繍は無事だ。

「……………」

レアを壁際に避けて、部屋を出る。

手の混んだものは時間が掛かるので、適当にサラダとトースト、あと、デザートでいいだろう。……………ゆで卵なんかもあるといいな。

「サラダとゆで卵頼むな、トーストは最後でいい。俺はデザートを作る」

この森、栗が多いんだよな。決まった範囲だが結構危ない。代行者に回収させているんだが、隔離の肥やしになっている。たまに魔物の足元に出したり、頭の上に落としたりくらいしか使ってない。中身を鍋に出して茹でる。

「渋皮つてとりにくけど、この世界だと器用さ補正があるから簡単に剥けるな」

機械でもこうはいかないだろうな、暫く剥き栗マシンになりながら、今度は鍋に水と砂糖を入れて煮る。落し蓋をして沸騰したら目を

弱めて、待つてる間に次の栗を茹でる。煮てる栗がいい塩梅になったら、栗を潰して、裏ごしする。マッシュヤーがあればそれを使う所だが、ないので木ベラで潰して、裏ごしも木ベラでいく。それと前に余って隔離してあった生クリームを混ぜ、ロールケーキの端を適度に切って丸めて、スポンジの土台を作り、その上に味を調整し直した生クリームとその他諸々、最後に栗クリームをビニール状にした結界で糸状にして載せて粉砂糖をまぶし、完成。……………なんやかんや結構手間がかかったな、一回できてしまえば量産は簡単なだが、余った分は隔離していくつかはクロシエットにあげるか、

「さてと……………まあこの際だ、昼の肉料理でも作るか」

尻糸で肉を縛り、あるものは鍋に、あるもの燻製窯に、昼食にのぼるものはフライパンの上に乗せられじっくり火を通されている。前持ってフォークで万遍なく穴を開けて、ニンニク、オリーブオイル、胡椒等をすり込んである。ソースは醤油や酒何かを調理後のフライパンに入れて作る予定なのですり込みとは別にスライスニンニクも用意してあつたりする。これだけあれば暫くはゆっくり出来るだろう。

「せ、先生！わ、私達に料理を教えていただけじゃないでしょうか?！」

「……………達？他にいるの?！」

「あつーいえ、……………すいません。つい癖で」

確かこの子は梟の獣人だ。獣人と言ってもみんな同じではない。各々個体差があるのだ、ハルトは犬耳と尻尾がある一番オーソドックスなタイプだ、それぞれの特徴がどこかに出るのだが、稀にそれが出ない子がいたり、本来より人寄りの部分が多い子がいるのだ。この子もその一人。彼女は翼が無い代わりに人の腕がついている。その為鳥系の獣人からは差別を受けていたようだ。

まあ、目を見ない限りは獣人だと気づく要素が無い。あとは鑑定ぐらいだろう。因みに獣人は人寄り以外にも動物寄りの子もいる。本能の制御が大変だが、感覚が鋭いとか。

「何が作りたいかにもよるけど、俺以外にも料理を作ってる子ならいるし、みんなにも聞いてみるといいよ、もちろん教えるけど」

包丁とか火とか危ないし、何よりこの子は勇者のところで保護され

ていた子なので料理は完全に素人、いつも注意しているが更に注意しなくてはならない。

「お肉の料理についてお願いします」

視線は手元より肉にいつてるな、

「……………これは昼食べる奴だから、やらんぞ」

トングで挟んで右へ左へ動かすと視線も右へ左へ、気にせず調理を続けることは出来るがこのまま放置はちよつと……………人数分は確保できてるし、残りは薫製にするか、

「ローストビーフを切り分けるから、少し摘むか？」

「ぜひー」

切れ端とか見た目が少し悪いのは食べてしまう。クロシエツトがよく近くにいるのであげたりしているが、俺も少しは摘む、

「ウイル達もいるか？」

「二「頂きます」」

「うわー」

が、量が量なので今いるメンバーでつまみ食いする。勿体無いし、味は変わらない。

まだ太陽が高い位置にいる内から作業するのは何時ぶりかなー、と思いつながらいつもの様に炉に火を入れる。……………チャーシューも結構作ったから、炒飯もいいな、つと、身体は概ね完成したが、付与するスキルとかが決まってる、と言うか無い。そこで代行者にリクエストして作ってもらった。優先で作って貰ってる二つの進捗は？意識の一割ほどを代行者の方に向ける。

《二つは問題ありませんが、もう一つは明日になるかと》

なら、この際完成させとくか、まあ、いつもの事だが最後に残るのはこの植毛作業だ。気が向いた時にこまめにやってるのだがそれでも最後にやることになる。ただ今回は事情が異なる。まず木と言う物は同じ部分はない。それは色合いも同じで微妙に差がある。この世界樹の表面はオリハルコンでコーティングしており、光の反射でピシク（赤強め）にも見えるようになってるが、そこを調整しないと仕上がった時に違和感が生まれる。つむじから薄め、毛先に行くほう

が濃い目になるようにする事で違和感なく均一、色ムラはないように見える。さてと、こっちは完成、もう片方はミスリルと青生武魂（ミスリル多め）で作った毛を植えていく。……………流石に二体は無理があるな、ここまで手がプルプルしていると暫く手は使えないだろう。

「マスター、紅茶 ―ミサツ」

こんな時に限って行っちゃった、早っ、……………休憩した方がいいのは確かなんだが手がこれでは飲めない。

「（ド）チラッ……………」

「あーあー、これじゃあ休憩できないなー（棒）」

……………絶対、俺の心読んでやってるよな？これ、

入り口の影から期待の眼差しを向けるアナスタシアを見る。

……………千里眼でローアングル。

ガバッ！

……………うん、絶対読んでるわ、スカート押さえただけど、今の俺見えない。思っただけだから、あっ、ほっぺた膨らましてこっち見てる。……………というか読めるんだったらストレートに来てほしい。

「アナスタシア、手が使えないんだ」

「そうなのですかー（棒）では、私はどうすれば宜しいですか？」

あーはいはい、

「棒読みはやめて」

「くっ、……………悪いんだけど、食べさせてくれないか？」

「……………マスターはM？それとも肉食系？」

何その二択？Mはテンプレだろ。「何が食べたいのか言ってくれなきやわかんない」みたいなアレ、……………別に卑猥なこと無いよな？クッキーだし、もう片方は？

「え、私？そんなー！いきなりこんなところで……………、いやーん……………的なの」

「……………レアには、あとでお話があると伝えといてくれ」

吹き込んだのあいっだろ？

「はい、レアです」

「あっさり売ったな、……………とにかく食べさせてくれ」

「はい、マスター……………あーん」

「むぐ、……………、ありがとう」

「紅茶はいかがですか？」

ちよつと危険な気がするけど、

「悪いな、いただくよ」

「仕方ないですね」

そういうアナスタシアは嬉しそうだ。

「あたり前」

はは、可愛い可愛い、頭を撫でてやりたいが、生憎手が……………

「じゃあ、ぎゅつてする」

まあ、いいか、

「やったー」

ぽふっ、と服に顔を埋めるアナスタシア。……………最近心を読まれるのも慣れてきたな、そういうえばギルドにもあんまり顔出してないし、行つとくか、エドガーの家、

ついでと思つて寄つたギルドが賑わつてる件。

この時期金払いのいい依頼は少ないはずだが、イベントか何かか？となると、また芦原さんが酒を？適当に近くの人に話を聞く。

「すいません」

「ひやわっ……………な、なに!？」

また、脅かしてしまつたみたいだ、後ろから話しかけるぐらいよくあるだろ、冒険者あるあるなのか？

「賑やかですけど何かあつたんですか？」

「……………この時期はいつもこうよ、知らない？あと斥候職の人に後ろから声を掛けるのは辞めたほうがいいわよ」

「ああ、よくびっくりされるのはそのせいかな、で、なんの」

改めて聞こうとしたら人だかりの中心から独特な声が聞こえてきた。……………競りか？

「今日の目玉ね、ある渡来人が最高の鍋を作る為に作り出したとされるポットピッグ」

「ポットピッグ？」



ここから見えないので千里眼と真理、

ポットピツグ

異世界からやってきた。丸山 銀路が作り出した豚、どんな鍋にも合うとされるが、ポン酢で食すのを最も好んだ。

うん、俺も好きだけどポン酢で食べるの、ただ豚が可哀想だ。食べるのがとかじゃなくて、見た目が、まず全身銀色でなおかつ額に鍋用の文字、……産まれた段階から調理方法が額に書かれてるのが忍びねえよ。ただ、結構な値がついたっぽいな、幾らかは知らんが周りの反応からそれぐらいの事はわかる。競りに参加してるのも大半が料理人みたいだし、改めて依頼表に目を通す。

「戦闘力は低いけど厄介なのが多いな」

依頼内容に目を通すと依頼の殆どが助っ人要請や目撃情報だ。危険性の高いのは金払いがいいので俺がやる。厄介と言うのは例をあげて説明すると、とある鳥型の魔物(ダチョウ)なのだが、飛べないがとにかく脚が速い。なのでどこかに追い込んだり困り込んだりする必要があるのだが、その際に必要な能力を持つ人がパーティー内にいない為の募集のようだ。募集については実力不足、ならせめて情報を買ったという感じのだ。ただまあ、この辺りが平和なのはいいが、報酬は下がり気味、冒険者は目に見えて減ったが、商人はよく来るようになった。魔物があまり出ない道と魔物がよく出る道、どっちを行くかなんて聞くまでもないだろう。

「あ、鮒の依頼がある」

泥を吐かせるので生け捕り限定か、隔離すれば出来なくは無いか、色々めんどくさそう。収納系のスキルは生き物入らないんだよ、どうやっても言い訳に困るし、手掴みは効率が悪い。ここは安定のスキルだ。

「少しスキルの実験も兼ねて、ステータスの高い魔物を捕まえたいですか、何か無いですか?」

捕まえる? 頭の上からするノルンの声に疑問を感じた。

《ノルンには無限回廊のスキルがあります。無限回廊は隔離のように物や生物を仕舞う事が出来ます。内部には時間停止等の作用はあり

ません》

トウルースマダグナム

「真理の銃は無限回廊に入ってるのか？」

「いえクローゼット、空間魔法で管理してます。無限回廊だと手を入れないと持ち出せないのです」

前の時は手の中にいつの間にか出現していたが、確かに奇襲された時に、異空間に手を突っ込んで武器探してるのは間抜けだな、まあ、ノルンなら魔力回復速度が早いので、空間魔法を使えばなしでも、消費は気にならないだろう。その点俺の隔離の方が便利だな。

「希望あるか？」

「足用が一匹、あと魔法使うのと、防御力の高い魔物がいいです」

足用ね、まあ、5歩で息切れだもんね。街中でも騒ぎにならないの  
がいいな、調教するのだろうな、多分、代行者今のリクエストに最適  
なのと、あと高く売れそうな食材魔物を討伐する依頼をピックアップ  
してくれ、こっちで食う分以外は卸す。

《了解しました》

ギユツギユツ、とゴム手袋を嵌めて、月と書かれた甲羅を掴む。た  
またま見つけた奴も旨いらしいので隔離しとく、意外性もなくすつぽ  
んだな、うん、……………なんと言うかこっちに来たやつ食料として品  
種改良する奴に字書き過ぎだろう。流行ってんのか？

《一番簡単にできるからでは無いでしょうか？》

作ったことないからそこら辺はシラネ、辺りを見渡すとダチヨウミ  
たいに飛べない鳥を逃さないように短距離転移で先回りしてる。し  
かし、

「ノルン、……………それはやめとけ、確かに乗れるだろうが、色々怖い」

ドタドタと走っていく背中を見送る。足には最適だろう。ただ

……………

「あれFFでお馴染みのだな」

ダチヨウの仲間かどうかは知らんが、黄色い羽毛がフワフワの奴  
だ。この辺りの生態系の情報は少し聞きたくないな、

「適当な狼がいいか、頭もそれなりに良いし」

水辺から離れて、周囲に人がいない事を確認して、千里眼で手頃な

魔物を探す。ボロ布を纏った杖持ちのスケルトン、それとお馴染みりザードマン、赤毛の狼を隔離して順番に出す。

「実験だし、こんなもんでいいだろう」

「ありがとうございます。お父様」

そう言うといつも乗ってる綿に手を突っ込み。取り出した黒い物を三体の前に放った。黒い塊は地面についた瞬間に蔦を伸ばし三体を捉えた。あれは寄植・合成百草樹、ベースはヤドリギだが、冒険なんかで色々改造しまくって作ったノルンの武器だ。魔力を込める事により、急速に成長させることができ、その際にどういう目的があるかを魔力に乗せる事でその目的にあった遺伝子が強くなる。捕まえる事に重点を置いたために今は蔦だが、刺し貫くだったら竹になるだろう。動けなくなった三体の前にショートカットで移動するノルン。すると三体の足元に空間を開き、それぞれの蔦が緩み、重力に従って落ちていった。

「それが無限回廊か」

「はいお父様、入れるのも出すのも私から一定距離内では行なえませんが」

「そうか、あつ、あんなところにバードランナー」

隔離から取り出した手榴弾のピンを抜いて、隔離を介してバードランナーの足元に出す、  
パアアアン！

煤けた羽根をしたダチョウみたいなのを隔離しておく、こういう事は無限回廊では出来ない。俺には代行者もあるので中身はある程度管理されてる。ただ、微妙に違うのは、こっちはただ物をしまう収納スペースだが、無限回廊はいわばダンジョン。物の出し入れが少し融通が利かないだけで、人も暮らせるし、動物も飼える。管理は大変だろうが、俺は代行者任せにしてるのでさっきの手榴弾もだが、レアが起爆までの時間をそれぞれ調整したものが隔離空間内にゴロゴロ転がっているが、見た目でわかる訳がない。なのでそこら編の管理は丸投げしてある。なのでピンを抜いてから時間を測れば正確に相手の頭上で爆発させることもできるし、届かないところに逃げられたら、

相手の背後なり足元なりに隔離を介して飛ばす事もできる。……まあ、どちらも長所と短所がある。それぞれ使い分ければいいと思う。

「あの子達はどうか？他のみんなに付いてもらってるけど」

ウイル達にも狩猟のを経験して貰うべく、向日葵、クロエ、アリス、ルシアにそれぞれ引率して貰い、代行者に危険が無いか監視して貰っている。危なくなったらクロシエツトが行く。レスキュー要請がない間は……

「にやはーにやーあゝ？……にや！」

バシャバシャ……パシャ

……川で遊んでるな、うん、クロシエツトは基本的に薄着でTシャツ短パンくらいのラフな格好が多い。なので靴を脱げば浅い川ぐらいなら気軽に入れる。

「お兄ちゃんゝみてみて！」

そう言いながらこつちに手を振るクロシエツト。ん？その姿勢は、ボボボボオン！

川の水が爆ぜる。複数の水柱が爆破音を伴って遠ざかっていく、まあ、何をしたのかは姿勢でわかる。クラウチングスタートだったし、これを起こした張本人であるクロシエツトは俺の後ろから抱きついてくる。こんなの見せられてもコメントに困るわ、

「あれ？」

昨日は何事も無く狩猟を終え、今日はあの子達に身体とスキルをあげようと作っておいた身体を見に来たのだが……少し想定が甘かったか、

『髪の毛が短くなってる？ピンクのほう』

「いや、短くなってる訳じゃない」

オリハルコンで薄くコーティングしたのは世界樹。つまり木材だ。柾目材は変形しにくいのだが、全くしないと云う訳ではないし、こんなことを言う元も子もないが木材に熱した金属をかけて燃えなかった時点で、予想できる訳が無い。もちろん燃えないかは実験したが、水分による変形はノータッチだった。

「パーマでもかけるか、……………取り敢えずこれは朝日の身体な、あつちは月夜」

『身体に慣れたら、小生は刀の使い方を見せてほしい』

『もうっ、ちゃんと可愛くしてよねっ。じゃないと姫、拗ねちゃうんだから』

「わかった、わかった」

一先ずランタンから出して二体の人形に移し、二人の頭に手を置き、それぞれのスキルを与える。それぞれ要望があった服を側においてあるのでそれに着替え終わってから、手招きをする。

「朝日、髪の毛にパーマあてるからこっち」

まあ、何をするにしても初めはストレートの状態のほうがいい。クロエやレアなんかは常にストレートだが、アリスは髪飾りをよく飾っているし、アナスタシアは偶にツインテールにしたりしてる。ルシアは後ろで纏めてポニーテールにしている。姫と呼ぶに相応しい髪型にするか。服装もドレスだし、目標としては気品と無垢さが活かせる髪型にしよう。となると巻髪カールは気品が強くなりそう、……………一部を三つ編みにするあれでいくか。両サイドから三つ編みを黙々と作っていく後頭部辺りで前作ってたミスリルのバレッタで止める。あとは後ろ髪に慣らし、完成、簡単なのならこれでいいだろう。

「よし、できたぞ」

「ああ、それと、これは朝日の武器と、月夜の武器だ」

一本の刀とバトンのような短杖、仮面を渡す。あとそれぞれのステータスはこれ、

朝日 オートマタ

機構精霊 秘られた日長石

パーソナルスキル 黎明 終焉 神秘<sup>ラ</sup>ノ使徒<sup>エ</sup>

スキル 火魔法5 水魔法5 風魔法5 土魔法5 付与魔法5

聖光魔法5 時間魔法3 空間魔法3 自動修復3 催淫10

耐性 毒・酸無効 魔法耐性 絶 精神攻撃無効

称号 生きた人形

月夜 オートマタ

機構精霊 純白の月長石

パーソナルスキル 忍耐 狡猾 信頼イフディエルノ使徒

スキル 完全再生― 読心10 催淫10 魅了10

耐性 毒・酸無効 不壊

称号 生きた人形

まあ、なんだ……もう驚かないつもりだったんだけどな、悪魔系と天使系を一つずつとか誰が予想できるんだよ。

黎明 内略

すべての始まり 精神攻撃や妨害効果を防ぎ、魔法を原初の域に上げる。

新しい夜明け 如何なる物にも命を吹き込む事ができる。

終焉 内略

すべての終わり 魔法の適正が上昇し、魔法耐性 絶を得る。アンデッド等を回復させる瘴気や毒を発生させる事ができる。

開けること無き夜 能力圏内での自分以外の魔法が機能しなくなる。

神秘ノ使徒 内略

セフアー・ラジエール 魔法技能の習熟を早め、どんな言語も読めるようになる。

見エザル者 不可視になれる。

忍耐 内略

不滅の信心 不壊の獲得。体力が尽きても、魔力等を代わり消費し、生き残れる。

神秘 大罪系、悪魔系の威圧や毒、呪いを退ける。

狡猾 内略

篡奪手 物を掴み、動かす手を作り出し、倒した敵や死体から知識や経験を抜き取る事ができる。

甘美な罨 魅了を習得する。

信頼ノ使徒 内略

真ノ友 使徒系のスキルを持つ者と自分の場所を瞬時に入れ替える。

一蓮托生 心を通わせる者の力の一部を模倣した能力が使用できる。

全部ブツ飛んでるけど、……………ブツ飛んでるけど、どっから湧いて出た催淫！

「……………」

ズイツ、と前に出てくる月夜。肉薄する褐色の肌が腕に吸い付くように絡んでくる。

「ご主人様……………、小生は斯様な身ではありますが、貴方様に尽くす事が至上の喜びです。精一杯、ご奉仕致しますので、満足していただければ幸いです……………なにぶん初め……………」

小生という一人称を除けば健気で献身的、腕に当たる微かな呼吸に、伏し目がちに頬を染めて、だが、確実にこちらに顔を近付けて、それに合わせるように目は少しずつ不安そうに見上げてくる。が、その前、こちらに詰めてくる時に舌なめずりをしたのを俺は見逃さなかった。しかし、視線を固定されたように動けない。後20センチという距離になった時、

「むう……………！姫もご主人様にホウシするのー」

そう言っただけで月夜の反対から飛びかかって来た。打撃という意味では無だが、衝撃と言う意味では反発力を持つ朝日の胸が当たった結果、その衝撃の全てを額から額に月夜に伝える事になる。要するにヘッドバット頭突きだ。

「……………ああああ」

「痛い……………」

「あつ、まだ髪の毛直してもらってなかった」

……………朝日は今までに無いパターンだな。大概催淫持ちは計算高い子やあざとい子が多いのだが、この子は無自覚で天然、ある意味一番油断ならないかもしれない。

「ご飯できました〜」

遠くでレアの声が聞こえる。こっちも早く仕度しないとな。

## 終わりの飾り方

はあくあ、っと、今日は今日でゆったり過ごそうと思っていたのだが、そうはいかなくなった。テストラ帝国が優勢なのは変わらないが最後に悪足掻きをしようなので急遽頭を落とす事にした。千里眼で見える限り戦況は一方的だな、最前列に俺の作った奴がルーク形態で盾構えてる。取り敢えずまあ、派手に暴れて誘き出すか、適当に固まつてる所にウインドとフレイムを組み合わせて放つ。ウインドの方は過剰に魔力を流すイメージにしてフレイムは不足気味に、実際ウインドは何も消費しないが、魔力多めはきっちり反映される。不足気味の魔力を求めて炎は燃え広がりがやがて炎の竜巻になる。魔法を使った火災旋風の再現だ。場所は確保したのでそこに降りる。両手には短剣を握って、密集している場所に走っていき、矢を躲し、

「背中借りるよ」

斬りかかってきた敵の剣を躲し、踏み台にして集団の上を駆ける。兜の隙間から喉に短剣を刺し入れたりしながら四方八方へ予測されないように翻弄する。その間にもルークはゆっくりながらも進行する。こちらから意識が逸れた隙に透明化のペンダントに魔力を通し、結界に乗り、退避して手榴弾をプレゼントする。あとは少し高い場所に上がり、マシンガンを出して構える。なに、スコープがなくとも、千里眼と未来視があれば目を瞑って撃っても当たる（マジ）。狙うのは見える範囲にいる政治犯罪者だけだ。撃てるだけ撃ち込んでやるでしょう。千里眼があれば観測手も不要だ。

ガガガガガッ！

……よし、後は自分の顔の上に黒いモヤを上書きして、マシンガンから拳銃に持ち替え、ボロボロのガラス窓に突撃する。

パリン！

おお………梓が意外と硬かった。腕が……、っと、そんなことをしている場合ではない。千里眼で勇者の位置を確認するところっちに向かってくる筈なのに逃げてるし、………仕方ないな、プランBだ。手榴弾のピンを引っこ抜いて、隔離を介して人のいない所に出す。



ただ、使うのは非殺傷性のフラッシュバン。それとカメモシエキスを  
行ってほしくない方向に散布。いくら戦争中でも無辜の民にまで危  
害を加える気は無いのでまあ、勇者を追い立てる陽動だ。本命の合図  
として、戦場に一条の稲光を落とした。

「マスターからの合図、確認しました。」

―漆黒の翼をこの街の人々の不安を表すように重い雲の掛かった  
空に広げ、クロエは水魔法のスコープを作り出し、銃を構える。

ガンツ！

弾丸は延髄から貫通して、体と頭を分離した。あとはその死体を隔  
離して、俺は暫く侵入者の痕跡作りをして帰るとしよう。教会には  
さっきの政犯（政治犯罪者）の横領、着服金がある。ご丁寧に分け  
にしてあるので、一箇所分は迷惑料として頂いておこう。これで複数  
犯の偽証拠もできる。……はあ、しっかし結局最後まで戦ったな、  
この国、

聖国は宗教諸共滅びた。当たり前だ。徹底抗戦の姿勢で戦い抜く  
のは勝ったときはいいが、負けたときは講和条約なんかも当然厳しい  
ものになる。帝国がどういうふうに扱うのか知らんが植民地や属国、  
統合されて領土になるか、

俺が殺さなかった幹部連中から王族やその親族諸々は、雁首揃えて  
見事に飛んだ（首が物理的に）。勇者については懸賞金が掛けられた。  
DEAD OR ALIVEでな、まあ、それは後で持っていくとし  
て、だ。

「月夜、出来そうか？」

「大丈夫………多分」

俺も想定外だったのは首がと胴体が離れようが、脳天に穴あけよう  
が、勇者コレが生きてることだ。なので水瓶に顔を沈めて死んだ状態に  
して、狡猾の効果を確かめる。ちなみに水から顔を出させると生き返  
るのは確認している。なんで生きてるかと言えば、パーソナルの超速  
回復が原因だろう。だが、このスキルは吸収出来ない。

「ご主人様ー？小生にはこの外道を生かしておく理由が見つかりませ  
ん」

かなり不快という感じの表情だな、眉間に皺を寄せながら、目で殺らないの？と聞いてくる。知識は記憶も含むので、前々から観察していて知っているのこの子の言いたい事はわかる。こつちなら権力だ何だで揉み消せるけど、疑いの余地なく性犯罪者だ。

「懸賞金が出るからな、まあ、頭取って持っていつて、生えてくるようならこつちは隔離に放り込んでく」

元は残念な神達が悪いのだ。捕まえる所までは達成してるし、

「了解です」

「じゃ、頭と体は分けて保存するか」

冒険でスキルポイントを回収して、刀に手を掛ける。

面倒事は片付いた。だが、最近金銭的に心許なくなってきたのでいつもとは別のダンジョンに行く事にした。そんな中少し気になるダンジョンがあったので来てみた。

「高いビルだなく、てかこれダンジョンなのか？」

《扱いとしては塔になります》

あー、なるほどね、ダンジョンと言っても色々ある。今までの所は下に潜る洞窟タイプだったが、ここは登るタイプのような。……ただ、荒野のド真ん中に塔があるのと近代的なビルがあるのは違和感が、まあ、前で何時までも考察していても仕方がない。そんな訳でお邪魔します。

ビル内部は違和感の塊だった。所々、天井が落ちてる荒廃具合だ。にも関わらず間仕切りボードは真新しい。

《ボードはダンジョンの壁のようです》

わかってるよ。隔離しようとしてみたけど無理だったからな。小突いても微動だにしないし、追加で言うと天井が落ちてる所は付近に罠が多く完全に誘い出す為の物だ。通ったら矢が飛んできたし、穴を見つけては登りを繰り返し、50階に差し掛かった。

「周囲が真新しくなったな、天井も落ちてないし、……何かいるし」

この階は床に穴はあるが、光源がない。最も真理のある俺には昼間のように敵の姿を捉える事ができる。それと、

「次の階に行く階段が障壁みたいなので塞がれてるな」

階層ボスの物を倒さなきゃ進めないとか、有るらしいからな、バクツ！

噛み付く動作を躲し、観察する。今のは声に反応したのか、見た目を説明するとゴリラを思わせる前傾姿勢に上半身を基点に発達した巨躯、目が無く、顔に当たる部分の大半は口が占めている。追加で言うところの胸の辺りにも口らしきものがあるのと、何かヌメヌメしてそう。指は4本で水かきがある。……………既存の生物からモデルを探すのは諦めよう。

フガフガ……………

臭いの可能性もあるな、喰らえカメスプレー！（要結界）

ドサツ

どうやら嗅覚が何倍も優れていたようだ。……………今の内に仕留めるか。どつかの団体とかは殺すなら苦痛なくとか色々あるけど、狩猟なんかを否定するところもある（詳しく知らん）。一撃で人想いに言うのは分かるが、何分それが難しい。

まず、自ら自分の意思で死ぬ動物なんて人間くらいだ。これこそ人間の傲慢の極みと言ったものだが、逆にその他の動物には厳しい環境で生き残る為の生存本能が必ず備わっている。殺されそうになったら抵抗する。ここは人も同じことだ。急所を一突きして楽にしてやろうとしてもその寸前で暴れて逸らされたらその分苦しめることになる。まあ、そこら辺は上手くできるようなしかないな、まあ、自殺とは違うが群れを生かすために個を犠牲にする動物は意外と多い。ハダカデバネズミ、バクダンアリ、あと名前忘れたけどシカっぽい奴とかな、……………元も子もない事を言えば何を基準に最も苦がない死かなんて分かりようがないのだが、

「まあ、安らかに逝かせてやれるのはお互いいい事だしな」

狩猟の場合、罾で捕まえたのならともかく、生きる為に全力で逃げる物を捕まえないといけないのだ。致命傷を与えて弱るまで待つくらいよく使われる手の一つだろう。当然悪戯に傷つける虐待行為は狩猟にカウントしない。狩るのならその命の責任はキツチリ持たなければいけない。

経済的に豊かになった結果生まれた問題としては主義思想を金を集める為だけに世間を掻き回す団体が多くなった事か、前のイルカで出てきたアレもそうだ。とは言ってもそんな寄生虫やバクテリアみたいな団体ばかりではない。罪は無知から生まれるとは誰の言葉だったか、それを見極める事こそ重要なのだ。……………いらぬ奴だけジャンプしたら離れてくれるといいのだが、

「はあ、……………カルト教団ぐらいしかいかなかった頃が昔に思えてくるとはな」

胸の口らしき所から心臓目掛けて一突き、一瞬ビクツとしたが、その後は動かなくなつた。死体を隔離して階段を登ると風景が一気に変わった。さつきまでは罨主体だったが、魔物が多くいる。それと建物自体が新しくなり天井に穴が空いている場所は無い。この辺りなら大丈夫かな？

「そろそろ昼食にしよう」

「……………わかつた、治療する？」

そんな事を言いながら、桃色の花の装飾をあしらえた白のチャイナドレスに身を包み、前垂れを指で摘んで細い太腿を扇情的に見せつけると、その視線の間に悪戯な微笑みを割り込ませてくる。

「アナスタシア……………」

「どうかした？マスター……………」

顔立ちが整っている事もあるが、あどけない容姿が尚の事その表情を妖艶にする。ツインテールにしていることもあどけなさに拍車を掛けている。……………油断ならぬんだよな。催淫とか精神攻撃って本人の心次第だから、耐性は有無を言わさずに吞まれるのを防ぐ程度でしかない。

「ご主人様、失礼しますわ」

「あのー！こちらを……………どうぞ」

……………美女がまあまあ大きめテーブル持つてくる。飾らない感じ(残念感)がアリスらしい。その上に用意したカップに飲み物を注いでいくクロエ。緑茶か？向日葵は隔離から出した位置から動いてないな、キヨロキヨロはしてるけど、

「和食」

俺の心を読んだ回答だな、まあ聞きたかったんだけど、しかしまあ、こうして料理とかしていると寄ってくるんだよね、魔物類が、クロエの殺気のお陰で襲われたことないけど……

「……………集まってきたくないか?」

「ふえ?!ほ、本当ですか?」

殺気は強くなったが効果はなさそうだ。

「どつちですか?」

「囲まれる前に倒したほうが良い。筋力だけは強そうだから群がられると抜けられなくなるぞ、あつちはクロエとアリス、向日葵は俺とこつち、アナスタシアは安全領域の保持の為に魔法で聖域を作つてくれ」

「「はい!」」

「死ね!クソが!」

ドガガガガ!パアアン!パアアン!パアアン!……………グチャ、ドチャ、

「……………もう少しスマートに出来ませんか?」

「ああ!?!」

「ひい!」

クロエの機嫌は最悪の一言に尽きる。素手で敵を殴りまくったり、足を掴んで地面に叩き付けて、その勢いのまま柱に投げつけるあたりから完全に憂き晴らしだ。このスイッチが入ったらまともな方法では止められない事を知っているアリスは、唯一知っている方法で止める。

「ご主人様はこの後食事をとる予定なんですよ、……………そんな腐敗臭のついた体でいる事が相応しいとお思いですの?」

アンデッド系やゴレムに殺気や威圧の効果は無い。簡単な話、命があるから感じる危機感を命の無いものが感じ取る事は難しい。

「チツ……………」

ボン!

足元に転がっていたアンデッドの頭をアリスの方に蹴り飛ばす。

千切れ飛んだ首はゴーレムの胸部を貫通し、柱で不快な水音たてて潰れる。

「ほら、さっさと片付けんぞ」

「言われなくても……分かっていきますわー！」

縦横無尽に振るわれる刃が硬いゴーレムも、腐った死体も紙切れ同然に切り裂き、怒るのも仕方が無いと納得する。休憩中の敵の追い払いという役割を引き受けていたそれを潰されたのだ。その傍らで氷水魔法で冷気を放ち、アンデッドだけを凍らせるクロエは、襲い掛かってくるゴーレムの拳を受け止め、回して凍らせたアンデッドやゴーレムを纏めて掃討する。アンデッドを凍らせたのは消臭目的だ。しかし、

「……数が減った気がしませんわね」

「うるせえ！口より手を動かせ！」

「仕方ありませんわね。少し距離を取りましょう」

「邪魔だ！砕けろ！」

翼を展開し、クロエが突っ込む。敵を粉碎しその後には一本の道ができた。

「いちいち刀で斬ってたら埒が明かないな、近くに来るのは向日葵に任せろ」

「分かりました」

「……………」

任せようと思って、向日葵の方を見たら強欲で伸ばした腕でゾンビを真っ二つに力技で裂いていた。

実際問題、俺の見える10フロア先までゾンビとゴーレム軍団、最初はそこまで大量にいなかったので問題無いと思っていたが、どこからともなく湧いて出て、気づけば階一杯に見える範囲は埋め尽くされていた、下がるか殲滅しかないが、それより飯だ。とはいえ、放置すれば圧殺されるし、アナスタシアのところに戻っても、聖属性ではアンデッドには効果的でもゴーレムには効果が低いし、手っ取り早い方法はいくつかしかない。代行者、俺の魔力を7割くらい使えば凍結魔法でどのくらいの範囲を凍らせられる？

《見える範囲を超えますが?》

じゃ、10階分凍らせる量にして、それで一気に敵ごと凍らせる。入り口は氷で固めてくれ、俺はアナスタシアやクロエたちの付近を凍らないように調整する。

《了解しました》

「向日葵、こっちに」

「はい」

「いくぞ! フリーズ!」

ただ唱えただけだと正面から一直線にある物を諸共凍らせるだけの魔法だが、その性質を利用して凍らない箇所を指定し、残りすべてを凍らせる用途で放ったのだ、……………しかし、全力使用は試してなかったなので、天井までびつちり氷の壁がそり立った。

「水晶の壁のようで壮観だが、中身を鑑賞目的ディスプレイの物だと思われたら趣味を疑われそうだ」

何というか……………一級品の額縁に安物の絵や写真が入っているよな、辛うじて人型をした土塊と腐乱死体の詰め合わせ、ゴーレムとか動いてなければただの土だし、飾る価値無し、ゾンビのリアリティーはいいが、となるとゴーレムが……………ま、どうでもいいか、

「向日葵、入り口方向に掘削してくれ、方法は任せる」

「分かりました。時間が掛かると思いますがるので休憩して待っていてくださいね?」

そう言うのと手の形をした青黒い霞が氷の壁を殴りながら前に進んでいく。

結構時間は掛かったが、凍らせた階はなんとか抜けた。

「向日葵、ありがとな」

「はい!」

「疲れてないか?」

「大丈夫です!」

「そ、そうか……………」

軽く両手を握る向日葵、元気だな、問題なさそうで何よりだ。ただ抜けた先からは大群がいると言うわけではないが、このフロアは吹き

抜け6階分の天井高。先にも似たフロアがある。

しかしそれより気になるのは階層のルールだな、今現在吹き抜けの階にいるが、千里眼を使えばこの先の10階先が見える。仮説はいくつか立てていたが、ダンジョンと言うのは一階一階、亜空間として独立しているのでは無いか？と言う事、

まずフロア事に広さや階段の位置関係、外から見たビルの見え目から、それぐらいの事は推測できる。下の階はビルの大きさを超えてかなり広がったが、今はビル同等より僅かに狭い。上に行くほど狭くなっていくが、ビルは歪な形をしている訳でもなく真っ直ぐだ。このフロアの階段も本来なら6階分登る階段が必要なのに1階分しかない。しかしなんの問題も無く次のフロアにいける。

「ああ………まだ大物がいるんだよな」

このフロアには通常だと頭が天井にめり込んでしまうトロールが居た。もちろんやったが、この先にも同じ様なフロアがある。ただこの先、かなり厄介なのがいる。蛇がとぐろを巻くように距離だけは長い一本道なのだが………

「一回みんな隔離に入ってくれ」

「い」「や………」「です。」「………ワタクシの台詞は?!」

アリスには優しくしよう、そう心に誓うと同時にごねられてもしようがない事なのでアリスに申し訳ないと思いつながも隔離、入念に準備運動をして、フロアに入る前の踊り場で深呼吸。意を決して飛び出す。すると後方で轟音が響き、通路いっぱいのが圧力が迫ってくる。確認していた事なので後ろを振り返らず全力疾走だ。

「チツ、このフロアだけ広く作りやがって！」

毒づいたところで速度はこれ以上上がらない。時間稼ぎになるか知らんが、ピンを抜いた手榴弾を虚空に放る。

ボコオ！ボオ！バズッ！

………駄目か、このままじゃ追いつかれる。効果はなさそうだしここは使い方を変えよう。取り出した手榴弾のピンを抜きふんわりと前に放り、それに追いこすと同時に跳んだ。

パアアアン！



爆風の煽りを受けてゴムボールのように飛ぶ。受け身をとって、その勢いのまま、やっと着いた突き当りの角を横に跳ぶ。炎熱無効無かったら死んでるけどな、その直後轟音をたてて壁にぶつかるものが、詳しくは見えてられないので走りながら説明しよう。あれは肉食ワーム、壁ギチギチ大口を開けて突撃してくるのは飲み込む力が無いため勢いで奥に送るためだ。厄介なのは重要器官が体の後方に集中しており、残りは口以外はすべて消化管になる。一番長い直線の通路にすべて伸ばしても急所が直線状に現れない。万能結界は能力が下がるので止められないし、移動に支障をきたすだけだ。……にしてはも階とか考えるとエグい罠だ。頂上まで半分を越えてから、あのゾンビ、ゴレムの混成軍団を倒すには万全の準備や装備が必要になる筈、当然役割分担をするだろうが、後衛の有無はともかく、防御を受け持つ者が必要になる。盾や鎧は重い、俺みたいに先のフロアを覗ける者ならまだしも初見対処は無理だし、装備重量的に間違い無く食われる。

先に進めたとしても役割分担をしつかりしてる所ほど欠員の影響が大きくなるだろう。……帰り道どうすんだよこれ、なら何故進んだと言われれば俺一人なら帰る方法があるからだ。とにかく俺も食われない為に走るか、次の突き当りを曲がると同時にまた轟音が響く。

「動くなよ」

前方に立ち塞がるゾンビの壁を側面の壁を走り躲す。その後グチャという音と何かの拉げる音が聞こえた。巻き込まれたら俺もあなると言うことだろう。……背筋が凍りそうな思いを純粹なスリルとして楽しむ他ない。身が縮こまりそうだからこそ、顔には不敵な笑みを浮かべる。

「心が体に影響を与えるように、体も心に影響する」

ー心は軽く、気持ちは軽やかに、

ー己を縛る制約を容易く振り切り、

ーただ前だけ見て進む。

身を焼く焦燥感と風吹く爽快感、それをもつと謳歌すべく夢中で走

る。立ち塞がる者は躲し斬り捨てまた走る。

「ビヤツホウオ！」

手榴弾を追い越して加速、ゾンビに飛び掛かり、バラバラにする。通路を塞ぐゴーレムは魔力が無くならない程度に身体に込めて殴って砕く。

「失せろ！」

ゾンビの壁を飛び越え、ゴーレムに一撃入れて、姿勢が崩れたゴーレムをそのまま踏み台にしてフロアの外に続く階段に飛び付くと、一気に駆け上がる。

「ハア、ハア……………ハア……………」

うわあ……………、どつと疲れるわー。ちよつと間動けそうにないな、大の字に寝そべると床が冷たく気持ちいい。コンクリートかタイルか知らんが、

「やっぱ……………向いてないな」

体の使い方は人それぞれ同じようで違う。何かを手に取る動作一つとっても、周りから同じに見えても、重心、負荷のかかる場所、持ち方等、微妙だがある。それは体格や筋肉、骨格、普段の生活、姿勢、癖、他にも様々な理由から生じるもので、そこから当然得手不得手も生まれる。

しかし、苦手だからといって出来ない訳ではない。向いてないだけなのだから、戦い方なんかもいろいろある。静と動、陰と陽の様に反対の事柄は大概不得意になりやすい。俺はあんまり動き回って戦うのが得意じゃないんだ、

身長を例にあげると物を取る際、自分では手が届かない程高い所にある物を取るの自分より背の高い人なら容易く取れるだろう。だが、低い場所にあるもの場合は、その背の高い人物には身を屈めなないといけない為、腰に負担が掛かる。

「出て来ていいぞ」

隔離から向日葵達を出す。暫くは文句言われるけどいいか、

「ご主人殿ー！」

「ヒール……………」

「な、何か冷たいお飲み物をお持ちしますので！アリス！タオルを！」  
「わ、わかりましたわ！」

「落ち着け」

バタバタすると床に寝そべってるから振動がね……

「もう少し静かにしてくれよ」

「ご主人様、あれが原因ではと思いますわ」

ん？

こんにちは。肉食ワーム。……………つておい！フロア超えてくるのかよ！

「アリス！魔眼で動きを止めろ！」

「わかりましたわ！」

アリスが止めた一瞬に合わせて前のフロアの出口とワームの体を凍結魔法で固める。ここは通路じゃない。口以外はが露出しているのだ、恨みはキツチり返させてもらおう。ギリギリまで魔力その他諸々を吸収してからタコ殴りにしてやるか。

「すいませんでした！」

背中にゴシック体の数字の付いたゴーレムが出てきた。……………土下座してる姿がシユールだな、

「あの、それ一応うちのダンジョンでは、強い部類に入る魔物なので相応の見返りを準備させてもらいますし、頼んでる立場で……………」

「あー、わかったわかった、お前コアだろ？このダンジョンに関して聞きたい事があったから来たただけだ」

「……………外観のこと、ですよね？」

「ああ」

「インターホンを押さなかったのは？」

「真下が落とし穴のトラップになってただろうが、ご丁寧にボタンを押したら床が開く奴」

俺の千里眼で見通せないくらいには深い様だしな、

「ここは叛逆者の墓標、そう呼ばれるダンジョンです」

詳しく話を聞くと、このダンジョンが生まれたばかり頃にある勇者が訪れたそう。彼は帰るすべを探していたそうだが見つからない

かったそうだが、だが見つかる事なく最期に、このビルになれないか？と聞かれたそう。ダンジョンは宝物等を配置し、人などを誘い込み、そこで殺す事でその魂、肉体のすべてを吸収して成長する。……この辺りはまだ学者達の間では物議を醸しているが、コアから聞いたのでこれで合ってる。彼は『たとえこの世界で死ぬとしても魂は、心は、未だあの場所にある。だからこそ、この世界ではない場所で死にたい』そう言ったそう。コアも強い者が死ねば多くを得られる為にこの姿になった、と言う事らしい。それからここに自らの意思で死ぬ為に異世界人が訪れる事から、何時しか叛逆者の墓標と呼ばれるようになったそう。

「はっー勝手にこっちに呼んでおいて、その言い草か？……あーあ」  
「ここ自殺名所みたいになってんな、いくつか腑に落ちない点はあるが、

「なあ、なんでダンジョン内だと悪魔系のスキルは強くなって、天使系は弱くなるんだ？」

「え？そうなの？」

「……………」

「こいつが俺の求める答えを持っているとは限らない。聞いてわかるなら苦労しないか、

「僕はスキルを習得出来ませんし、スキルに関しては、ここに来る人達を使うー、って印象しか無いですね」

「どれどれ……………本当に無いな。名前の欄に背中の番号と同じ26、とあるだけで他は種族さえ無い。」

「……………聴きたいことは聴けたし、俺等は帰るわ」

「どこで死んだのか知らんが手ぐらいは合わせておこうか……………」

## 救済と根絶とパーティーと摩耗したおじさん

今思えばどうしてこうなったのか。土地に余裕があるからと、好きにさせてたのが駄目だった。倉庫だらけ、

「これ何軒あるんだ？」

「129軒にや」

《129軒です》

一瞬姿が掻き消えたと思ったたら数えてきたのか？そんなクロシエツト本人はどこ吹く風とシユークリームに齧り付いている。

「順序が逆だけど、ミニチュアをやってもらうか」

それとダンジョンから出てきた宝石の原石はかなりあるし、これを使つて宝石加工の授業をやるか、幸い、あんまり状態が良くないものもあるし、練習するにはちようどいいだろう。今回はいろんな魔物素材を持ち込んで金にするつもりだし、その中に混ぜるくらい問題ないだろう。しかし、出来てしまった倉庫をどうするか？市場を操作するために要らないものも買つてるし、それを入れとくか？

《半分以上が余ると思われれます》

……………いくつかアイディアが無いでもないけど、社会勉強にはなるが、ルールをしっかりと決めないと行けないことばかりだ。とはいえ、それも含めて勉強とも言えるが、果たしてあの子達にそれが適切なのか？……………一回試験的にやってみるか？結局それしかない。

「レア、ちよつと手伝つてくれ」

「はいー」

「それとものづくり組も集めてくれ」

「はいー、分かりました」

さて、今日はエドガーのところでケーキを作る。ちよつと前に約束したことだし、……………要望はチョコレートケーキだったな、ベースはチョコで上をどうするか。高さを要求される場合は下がスポンジだと不味い。上を重い飴の塊にでもしなきゃ問題ないだろうが、アイス系にすれば硬いが温度管理がめんどいのと長持ちしない。果物選びもちよいムズだし、結構大変。

「無難なところ、バナナ、イチゴ、リンゴ、後はケーキ次第でキウイ、ブルーベリー、ラズベリー……」

例を揚げてもキリがないな、香り付けとかでオレンジの皮だっとうだろーうし、酒も何が良いか……

「まあ、なんにせよ、準備してから完成させるまでの時間との勝負になるよな」

溶けたら見た目も悪くなるしな。完成をイメージしながら、形を作っていく。……三段ケーキにして脇にデカイチョコのオブジェを添えるか。いや、でも、……作りながら決めるか。

「いや、でも、……これは外せないか」

試行錯誤しながら大体の完成のイメージを固めて、それぞれ冷やしたり、溶かしたりしながら準備を整える。えーと他には、つと……「公爵様本日はお招きいた……」

「いえいえ、お礼を言うのはこちらですよ、来て頂いただけでも……」

「いえいえーそんな……」

貴族の挨拶なんてみてて楽しいものでもないが、そこら中で行われていけば自然と目にする事になる。だがこれもコネクションを作る機会であり、疎かにはできない。それも公爵ともなれば、誰でもお近づきになりたいものだ。何せ彼は国防の最大責任者でもある。それ故に忠臣と呼ばれながらも、彼の領地は都から遠く危険な国境にある。

「エドガー、できたから持ってきていいか、時間との勝負なんだ」

「おお！出来ましたか！……ううん、お願いしますね、キタガワさん」

「おっと、……差し出がましい真似をしてしまい、申し訳ありませんでした。準備の方が出来次第、お持ち致します。引き続き、パーティーをお楽しみください。……では、私は失礼します」

「キタガワさん?!」

話しかけた時はそれこそ気軽に友人に声を掛けるようなものだったが、去る時はそれこそ上級使用人を思わせるような指先までしっか

り揃った見事な礼をみせた。エドガーの動搖にパーティーの参加者が注目した頃には彼の姿は消えていた。

あつぶねえー……誰とかいろいろ聞かれる前に撤退できてよかったー。正直、頭の中にはチョココが溶けるということしか頭になかった。もつと注意しないと、はあくあ、つと………

「運び入れた後はみんなでラテアートするから、補充はレアとアナスタシア、空いた皿はクロエとアリスにさげてもらう。クロシエツトは空いてる所に手を回してくれ、何もなさそうなら俺の手伝いで」

「キタガワさん、ありがとうございます」

「いや、僕も楽しませてもらいました。ありがとうございます」

「そう言って頂けると私も嬉しいですが………あんなことで釣り合うのですか?」

「はい」

世界樹を切るやつがいなきやこんな事しなくて済むんだけどな、

「そういうえば、あの子は俺があげた護符フル装備だったけど、まだ、怖がつてる?」

「いえ、あれは家の力を見せつけるのに一役買ってますよ」

「よかった」

忘れない内に隔離から取り出した世界樹の苗を目的地に埋める。トラウマになってなければ安心だ。ケーキやラテアートは評判良かったし、

「それともう一つの件は話をつけておきましたから、大丈夫ですよ」

「ありがとうございます」

さて、あつちも掛かるか、

場所を変えてテストラ帝国、昨日兵士達が凱旋し、今日は国を上げての祝勝祭が開かれている。聖国は属国となり、領土と名前は取り上げられたが、王はそのままだ。連なる貴族たちは財産をすべて没収されたが、まあ、王が生かされてるのは、損害賠償の責任をすっかり果たさせる為だ。

……でだ、俺はギルドを介して国のお偉いさんが集まるパーティーに招待されている。では、ここで質問、もし、能力の-highがま

だ信頼できない人がいたとして、その人が大きな貢献や功績をあげた  
としよう。信賞必罰は世の常、活躍した者を評価する事は末端の兵士  
の士気にも繋がる。

「帝国は能力主義なんだよな」

ただ、元からいる古参の人からはいろいろ言われそうだし、功績を  
与えると言っても多過ぎず、少な過ぎない量でなければならぬ。上  
に立つ者の苦勞は計り知れない。んで、俺ならどうするかというと、  
「近過ぎず遠すぎない、国境付近の敵領地を含む、辺境領と爵位だろ  
うな」

優秀な人材は手放したくない。俺が送った汎用型80体は攻撃陣  
形を作る上で崩れない前衛となっていた。あと予想外だったのが透  
明化できる蜘蛛型人形が敵陣で大活躍してたみたいで殺傷力は低い  
が、酸を撒く事で装備を脆くしたり、目潰しとかで戦力を大幅に削つ  
てたそう。俺からすれば見えるし、ガチャガチャうるさいし、脚の  
強度枝だから一番に潰れるじゃないかと思ってたが、まさか敵勢の三  
割以上をコイツが戦線復帰不能にするとは思ってなかった。……  
ここら辺は分析してみないと、

「私には過ぎた事です。私には子供達の世話もあります。……森の  
奥ですが、私はあの子達の成長を見守るのが生き甲斐なんです」

誘いを断り、自分の場所を教えておく。さてと、今度は……

「ノルン、芦原さんの所に用があるから転移頼む」

「はい」

人目の無い場所に移動してノルンに転移してもらう。

「芦原さん……」

「ああ……」

「はじめまして、久米 義人と申します」

いかにも幸薄そうな、くたびれたサラリーマン、芦原さんと俺がこ  
んな感じの反応なのは彼がこの世界に来る6時間前に遡る。芦原さ  
んはいつもの様にギルドに行くために広場を通った時、噴水から水柱  
が上がった。そこにいたのが久米さんだ。久米さんは俺と芦原さん  
の合わせ技で送られてた。もう分かってもらえたと思うが、全裸で上



空に放り出されたのだ。幸い噴水があつたので死ななかつたが、少しズレてたら間違いなく死んでる。その場に芦原さんが居なかつたら連行されてる。更に言うところ……

名前 久米 義人

種族 人

パーソナルスキル ローン

スキル 家事Ⅰ

耐性 精神攻撃耐性 絶 不眠不休

称号 擦り減った魂 過労死

ローン 内略

期限を設定し、習得課程を飛ばしてスキルを得る事ができる。ただし期限内に熟練度を貯めないと、足りない分の寿命を消費する。なお、自分の寿命を超える条件は設定できない。設定した期限に応じて必要熟練度が増える。

擦り減った魂 内略

精神的な負荷によって存在値が減少した者、精神攻撃耐性 絶を得る。

不眠不休 内略

疲労、衰弱に強くなる。普通の人より休憩や睡眠をとる頻度を必要としなくなるが、睡眠等が不要になる訳ではない。

全体的に微妙なものと称号がね。纏っている哀愁という意味ではこの街では最強なんじゃないだろうか？

「私は北川といいます。前は……まあ、今も教師をしています」

「わしは芦原や、……まあ、見ての通りやな」

「えーと、私はこれからどうすればいいでしょうか？」

なんていうか親父狩りにあつた人ってこんな感じなんじゃないだろうか？とか、ふつと頭をよぎった。

「と、取り敢えず、食事にしましょう。何か嫌いな物や食べられないものってありますか？」

何とか空気を変えるべく手を打ち合わせて、体の前でパンツ、と音をたててみたが、反応は芳しくない。……少し重い空気が瞬間的に

軽くなったただけだが、すぐに元に戻るだろう。

「特には……………」

「よかった、準備しながら情報を擦り合わせていきましょう。久米さんはイーゼルって神様（笑）に会いました?」

「あつ、会いました」

「そうですか、という事は満足な説明は受けてないですね。僕も似たような感じで高所に放り出されまして」

「わしは真っ裸で町中に放り出されたわ」

「それは……………お互い災難ですね」

「全部アレが悪いんや」ですよ」

「ここからはスムーズに話が進んだ。この世界の事や、5年後の事とか、いろいろ話した。」

「それで僕たちの活動に協力してくれませんか?」

「私に何が出来るか分かりませんが、よろしくお願いします……………」

「あんたは敵に回したらあかんな」

「何か?」

交渉とはテーブルに付く前に終わっている物なのだよ。俺はただリスクについても説明しただけだよ。ねー、

「やりたい事ってあります? 私が持つてるスキルなら指導で熟練度補正がかかるから、習得しやすくなりますよ」

俺のスキル指導は自分が持つスキルを相手に指導すると成長を早める事ができる。但し、伸びやすいレベルは俺のスキルを超えないのと俺の指導のレベルを超えないのが特徴だ。指導が8でもそれ以下のスキルはそのレベルまで、10のスキルを教えようとしても8までしか成長を早める効果はない。……………と言ってもレベルの無いスキルは適応外になる。

「まあ、ゆっくり休んでください。僕はちよつと犯罪者を捕まえてきます」

「えっ?」

「おう、気いつけや」

「あつ、藤白はどうしてる? 最近見ないけど」

「A昇級の為にダンジョンいっとるわ」

「じゃ、帰ってきたら結果はどうあれ、お疲れって言つといてくれる？」

「覚えてたら言うわ」

「ははは、じゃ」

まあ、何やかんやこのアスメシア支部も賑やかになって来ている。イーゼルから送られた人には直接会うようにしているが、学習能力が無いのか、いっつもこんな感じだ。

「ノルン、エンドリバーに頼む」

「承りました」

人々が運河の果てと呼ぶ。大陸の最南端にある街だ。貿易港も開かれている。ここに来るのは非常に簡単で、船に乗ってれば遠くでも一日二日で着く。逆にこの街から出る場合は鉄道か貿易船しかない。しかしこの街治安が最悪なものも相まってならず者やゴロツキがいっぱい、大量に商人も乗り込むので、貨物船に紛れ込まれたり、船頭は賄賂受け取るし、多くの商人が来るので手続きが多い為、簡略化されたチェックも緩い。信用もへったくれも無い。ただ、入る者がそんな感じなので列車や貿易船のチェックは厳重でよく捕まってる。さしずめ犯罪者の牢獄か、はたまた理想郷か、

しかし、このチェックを自由に抜けられる者がいたとしたら、というのが今回の問題だ。手口については解明済みなので下準備と実益と暇潰しと掃除を兼ねた行動を開始する。

「さて、…………ケツの毛まで糞り取るなんて言葉はあるが、俺は無いし糞られる心配はしなくていいか」

手の中で弄んでいた金貨を一枚弾くとそれを掴み、建物の一角に進んでいく。

「…………さてと、払えるなら結構だが、そろそろこの店にある金の量を超えないか？」

「……………」

テーブルを挟んだ対面には脂汗を垂れ流す女性がいる。胸元や背中が大きく開いた赤のドレスは薄い生地が汗でくっついて体のライ

ンどころか下着の形もはつきり分かる状態だが、それを気にしている余裕は全くない。少し汗ばむくらいなら相手が男なら籠絡したりする事もできるだろうが、度を越えたその量は体調を心配されるレベルだ。汗と言うよりバケツ一杯の水を頭から被ってきたと言われた方が納得できるかも知れない。

「まあ、できるだけ早く戻せるようにしてくれよ？……次がつかえてるんだ」

原因は俺の手元で山積みになったチップだ。元は金貨一枚だが、スロットである程度増やして、その額をルーレットで番号に全額賭ける。未来視は限られた可能性の中ではその絶対性が強い。1から36までくらいだ（0もあるから要注意）。五年後の未来を予測するより簡単だろう。スロットは予想でもなんでもないただのビタ押し、ロールごとの絵柄を記憶して自分が揃えたい絵柄の前の特徴を覚えてタイミングを計り、揃えるだけ、後は一周する度に押すだけの作業と化す。後は裏から台を操作されたら移動するを繰り返してた。ルーレットでいきなりシングルナンバーとか勝負師の方から怒られそうだけど、これが一番倍率高い、なんと36倍、これなら一夜で億万長者になるものが居ても可笑しくない。黒か赤かでも2倍、勝ち続ければ相当な額になる。でいつの間にかオーナーが出てきていた。のだが、プロのディーラーはポケットを大体だを選べる。

しかし、如何にポーカーフェイスを貫こうと無意識に動く視線を讀んで未来視を使えばポケットは分かる。狙えるのを逆手にとつてやればミスらない限り未来視なしでも当たる。一時間もあればこのあこぎなカジノから有り金すべて塗り取れる、という訳だ。

「まあ、現金化はできる分だけしてくれ、……残りはまた来るよ」

通路にいつぱい伸びてるけどそれを避けながら、次のカジノを狙う。汚れた金だ、遠慮はしない。

きつちり巻き上げたった。次は不当に奴隷にされた者の開放とそれらを行う奴隷商の解体、大量の書類をカバンにまとめて七三にスーツ、サングラスを掛けて変装、喋り方も変える。次々摘発して、その日は街に泊まる。差し向けられた刺客は捕まえて、権力者（摘発した

所の後ろ盾)に呼ばれば相手の弱みをちらつかせ、動きを封じ、こちらも後ろ盾を持つ事をちらつかせる。あとはあちらの動きに合わせて決定的証拠を初動で掴み、終わりだ。後は夜を待って仕上げと行こう。

「ふえー……くしゅ」

……人形でも寒さを感じるのかな?なんて考えながらも、防寒の式の編まれたマフラーを向日葵とアリスに巻く。クロエは元から巻いている。

船と陸路以外、この世界では魔法も含まれるが、元の世界では残りには限られてくる。ただこういう事は一気に潰さないと後でしらみ潰しに一つ一つ叩く必要が出てくるので一気にかたをつける。一つのルートには朝日と月夜を、もう一つにはレアとルシアを送ってある。アナスタシアとクロシェットは拠点防衛に置いてきた、ノルンは寄植・合成百草樹の綿で包まりフワフワしてる。

「……動きがあったぞ、準備できてるな?」

「いつでもいけます」

「ふえっ!は、はい!」

「さて、二十秒後に降下する、……ショウタイムの始まりだ!」

そんな訳で真下の目標目掛けて落ちるように足元の結界を解除、宵闇に紛れて一直線に飛竜の背中に着地した。

「向日葵、カウント2」

逆手で刀を握り、敵が動揺している一瞬で決める。その後は翼の方に走り、跳ぶ。その直後に反対の翼が石化、クロエの銃弾で砕かれ、バランスが崩れ失速したところに、降りてきた向日葵が強欲で作り出した腕で飛竜の頭を潰した。この間、俺が呼びかけてからジャスト2秒。足元に出した結界で一気に浮上し、宿泊している宿に移す。

「アリバイ作りをしとくからみんなは一応待機で頼む」

別ルートの方は心配にはなるがここでアリバイ作りを疎かにすれば本末転倒だ。危なければ代行者に隔離してもらおうつもりだし、問題は起きないはずだ。

「行く手を阻め、血の牢獄」

「な、何だ?!」

「閉所や通路ほど罾が強力なところってありませんね」

「ここからは私がやろう。少しは陛下に良い所を見てもらわねば」

「ジツとしてくださいねー、攻撃が来たら盾になつてください」

「む、私もちゃんと戦えるのだぞ」

「いえいえ、私は戦闘用に作られたわけじゃ無いですからあんまり戦えませんしー、そもそも戦う必要が無いんですー」

ガシャン

閉じられた通路からする異音、真つ赤なその壁はただ、レアとルシアの方に迫つて来る。彼らを押しながら、

ガゴツ!

「あ、足がああああ!」

「初めは虎挟みです。」

大型の動物、虎や熊等の力の強い者を対象もするこの罾は人間が踏めば肉は当然、骨まで粉々にする。そして罾は窪んだ位置にあり、後ろから迫る壁は調味料をするきる様に脆くなつた足を引き千切つて行く。

「この十五メートルは、結構いろいろ仕掛けましたからねー、楽しんで行つてくださいねー?」

強制的にゆっくりと壁に押されながら、だがその壁は止まらず、壁が止まるまで叫び声が止むことはなかった。

## 逆位置の塔

先生、魔王になったよ。

小鳥のさえずりを聴きながら、背伸びをすると、硬くなった肩や腰を椅子に座ったまま解す、……もう朝か、いや、昼過ぎか、

「……………流石に腹が減ったな」

ちよつと様子見ついでに、何か見ていくか、という感じで部屋のドアノブを掴んだ。その時、

《職業 魔王を得ました》

《称号 魔王を獲得しました》

「……………？」

人は本当に驚くと声が出ないものなのだ。そして何からツツコも  
うか、

「誰が魔王だあああ！」

椅子に座って冷静になったところでステータスチェック、

名前 北川 龍登

種族 #%3\*t・Γ

パーソナルスキル 真理ノ瞳 万能結界 冒瀆 次元切断

スキル 芸術10 指導8 武芸6 隠密2 雷光魔法4 火炎

魔法5 凍結魔法4 土魔法8 錬金術1 頑丈5 剛力3 体力

自動回復5 魔力自動回復10 鎌鼬1 煉獄魔法8

耐性 炎熱無効 低温無効 雷撃・突風耐性7 衝撃耐性8 闇魔

法耐性5 聖光魔法攻撃耐性6 精神攻撃耐性7 毒耐性5 麻痺

耐性2 衰弱耐性5

称号 爆死 稀代の人形師 害虫ハンター 一騎当千 類稀なる

表現者 天賦の才 求道者 救世主 魔王

種族 #%3\*t・Γ

職業 ケ@?ウ?ス 教師

美と豊穡の柱神 LEGEND OF HERESY WHO G

RAB ALL THE STARS 人形師 聖者 刀神 菓子

職人 英雄 天魔を統べる王 魔王

求道者

その道を極めなお、上を目指す者の称号。戦闘系、技能系スキルの成長限界を超えた力を得る。

救世主

国単位の危機を救った者の称号。

魔王

魔や悪しきものを統べる素養を持つ者に与えられる称号。煉獄魔法を習得する。

聖者

人に手を差し伸べ、教え導く者に与えられる。死後その遺体は聖遺物になる。

英雄

厄災に挑み、打ち勝った者のみが得られる。

天魔を統べる王

複数の天使と悪魔を従える者。

魔王

魔や悪しきものを統べる素養を持つ者。魔王の覇気を使えるようになる。

……重複もあるが、効果とかが詳しく書いてないのが不気味だな。あと聖遺物？死に方も気を付けないとなんかヤバそう。どうやバいのかわからんけど、それと魔王は英雄と相殺で良くないか？

《英雄は勇者の上位職です。ちなみにウィル、キリエ、ハルト、ロイの四名は勇者の称号と職業を得ました》

……大丈夫なの？というか、原因は？

《おそらくは今朝行われた勇者召喚が失敗したことが原因では無いでしょうか？》

あー、あれね、放つといいたらまた30人も増えるんだろ、特に今回は厄介な事にツアーバスごとこっちに来るらしく、三人くらいは車体の下敷きになるし、バスジャック犯を除き、後は余生を謳歌するご老人達と添乗員と運転手、なのでバスジャック犯をこっちに引き寄せ、



潰れる予定の人達と共にバスの下敷きになるように魔法陣とかを弄った。まあ元から下敷きになる人達も彼らを潰さなければまた召喚するからだ（こつちに来たのはバスとバスジャック犯）。……………んで、この話がどう関係あるんだ？

《どうやら30人呼んだことになってるようです。ですがこちらの世界には一人しか来ていないので、29人のこちらの原住民の者に勇者の称号と職業が与えられたようです》

もう次見つけられた発動前に潰そう。それしかねえわ、……………なんで俺魔王？

《勇者の数が一定を超えた為に第九の魔王が指名された為です》

それが俺だと、……………はあ、

「いや、それよりも……………」

代行者、その言い方だと俺は第九の魔王って事になるのか？

《はい》

あつ、これ文明の崩壊だけ止めても意味ねえわ、残り八人の魔王も確認しとかないとせつかく、救っても人類殲滅スプラッタールートのパッドエンドだわ、

「ご主人殿、どうかしましたか？」

「食べないんですから、お粥作りますよー」

「食べないにやら、……………貰ってもいいにや？」

「……………陛下のものだぞ。」

おっと、ホットドッグを持ったまま物思いに耽っていたのは良くないな。齧り付く前に、

「クロシエツトも食べたいならレアに頼んだらどうだ？」

「いいにや?!」

言葉だけだと判断し辛いけど、反応的には『え、いいの?!ありがとう』の感じだな、レアの背中を押しながら（手を引くと速度の加減を間違えるので）、クロシエツトは家の中へと消えていった。……………うん、パリッとしてる。マスタードやケチャップも足さなくても丁度いい量になってるな、この辺りはレアにしかできない絶妙な加減だ。

「あの子達が勇者、ね」

取り敢えずのステータスチェック、

名前 ウイル

種族 人

スキル 格闘術10 体術7 礫魔法3 聖魔法3 人形作成5

体力自動回復1 解体3 剛力2

耐性 炎熱耐性8 衰弱耐性4

称号 勇者

職業 拳王 魔法使い 人形師 修行僧 勇者

名前 キリエ

種族 人

スキル 棒術10 体術10 格闘術4 氷礫魔法4 剣術2

魔力自動回復2 解体3

耐性 衰弱耐性3

称号 勇者

職業 魔法士 棒使い 料理人 勇者

名前 ハルト

種族 獣人(赤狼)

スキル 格闘術10 格闘術10 体術6 火炎魔法4 剣術5

解体4 剛力2 料理1 体力自動回復2 魔力自動回復1

耐性 衰弱耐性2

称号 勇者

職業 拳闘士 剣士 魔法士 獣戦士 勇者

名前 ロイ

種族 エルフ

スキル 旋風魔法7 植物魔法3 魔力自動回復4 体術5 格

闘術9 剣術4 解体2 医術2 隠密1 俊敏3

称号 勇者 植物博士

職業 魔法騎士 拳闘士 森の守護者 勇者

各々の研鑽や努力の成果がしっかり実を結んでいる。もちろん挑戦して駄目だったこともあるだろうが、それでも折れなかったあの子達の成果だ。いろんなギルドを見て回ったが、そこら辺のギルマスよ

り強い。……………能力的な話だから、経験が足りない事を踏まえると実際戦うとどうなるか分からん、……………ん？揉め事か？あっちの方が騒がしいな、

「ああー、……………まっつ、仕方ないか」

人という生き物が優れている能力は限定的だがいくつかがある。思考能力は誰でも思い付くが、再生能力、それと環境適応能力も高い。流石にプラナリアやネズミに勝てるとは言わないが、ただ、環境の違いというのは結構大きいもので、例を挙げるならネズミは何処にでもいる（北極だろうと南極だろうと砂漠だろうと）、ただそこにいるのはその環境に合わせた種だ。人は種というものは変わらないが、社会、身の回りの人間、自分の体格や顔立ち、立場、知識……………、それらの数えきれない要因で考え方や性格は決まり、変わったりする。

俺が奴隷商に追われてたのを保護した子、魔物から保護した子、アホ（勇者）が保護してた子、エンドリバーで不当に奴隷にされてた子＋身寄りの無い子、問題が起きない理由の方が無いのではなからうか。

「どうした？」

「あ、先生だ」

「先生？ほんとだー」

「先生！」

今までの子たちは結構仲良く和気あいあいとしてる子が多いのだが……………取り敢えずカンチョーされる前に振り返る。

「どうかした？」

「なあ、先生よおー、こんなのとへ口へ口と一緒に暮らさなきゃいけないだよ、いっぱい建物も空いてるし、俺専用のを貰うけどいいよなあー、なあー」

「それは出来ませんよ、生活能力を培ってもらうのと、一人だけ特別扱いも駄目です。……………それと既に一軒無断で、使おうとしてますよね？」

「あ、何だ知ってるなら……………」

「話は早くないですし、終わってないですよ」

まあ、身寄りの無い子、あの場所で一人で生きてきたストリートチルドレンが手強くない訳がない。名前は無かったのだが、ここに来てからは、キングと名乗っている。

取り巻きを数人連れて行動しており、上がってくる報告（子供達の苦情）は手伝いをしない。配膳等の列を守らないと配膳した食事を取られたとか、数学等の半義務化している授業の欠席、この短い期間で一回脱走しようとしたりもした。あだ名はミニオーク、

「おーい、水運ぶからそこ退いてくれよー」

「ハルトか、丁度いい、水は俺が運んどくから、キングの相手をしてやってくれ、お前も加減を覚えるいい練習になるだろう？」

「…………俺、一応自主鍛錬も兼ねて運んでるですけど」

「何だよ、先生よおー、Sランクなんだろう？俺に負けるかもしれないからクソ獣じ…………」

「それ以上言ってみろ、お前の頭の上にある手が…………」

「先生」

あつ、あれスイッチ入ってるな、ハルトの奴

「俺なりに考えたんだけど、このミニオークにしっかり自分の立場を分からせた方がいいんじゃないですか？」

「ミニオーク？まさか俺のことか？」

「他に誰がいるんだよ？」

「お前、…………いい、今なら許…………」

「よし、水置いたぞ、掛かってこいや、ミニオーク」

あーあ、キレてるよ、ここで本来仲裁するのが教師の仕事なのだが、ここは日本の学校でも無いし、まあ、命を危険に晒す行為以外は止めないつもりだ。荒いけどこれが早いしな、怒鳴りながら拳を振り上げるキング、しかし、ハルトに焦りの色は見られない。

バコツ！

「ゴフツ、うええー…………」

言うまでもないが実力には隔絶した差がある。キングの大振りな一撃がゆっくり見えるように見ていたらハルトの拳は一瞬で腹を射抜いたように見えた一撃だろう。蹲ってるキングをハルトは一瞥

もくれずに、

「先生に迷惑かけるな、俺より強い先生がお前より弱い訳がないだろう」

背を向けて喋りながら水を持ち直してどこかに消えていった。水はこの世界だと魔法で出せるから、本当に自己鍛錬の割合が高いのだが、あの量の水はどこで使うのか？

「なんで、なんで………」

「勝てない理由は非常に簡単だ。まず、ハルトよりキングは弱い。その二、君自身の体に付いた脂肪はウエイトという意味では威力を高めてくれるだろうが、絞った体に比べると大きく動きを阻害、制限される。それと……まあ、戦う素養はあるから鍛えれば対等に渡り合えるようになると思うけど」

何もせずに努力している人間に勝つのは難しい。特に心血を注いでいる事なら当然とも言える。

しかし、彼を伸ばしたいなら悪い所ばかり言ってもいけないが、良いところばかり言っても駄目だ。作物に水をやり過ぎれば腐るとの同じだが、時に水を減らして根を深く張らせることも風や病気に負けないようにする為にも必要なもの、厳しさも優しさもバランス良くそれぞれに合わせて与えなければならぬ。

……ウイルやハルト、ロイは正直、ストイック過ぎる所があるので適度な休憩を勧める必要があるのだが、キリエは要領良く休んでいる。この四人は知識を教えるだけでも、今の強さまで来るのは簡単なのではないかと思っているくらいだ。ただキングの場合は多分、自分に甘いタイプだ。

「さて、キング、ちよつと外に魔物討伐の依頼があるからついてきてくれるか？」

散歩に出る感覚でキングに告げる。

森の茂みから少し開けた場所にある住居を覗き込む。複数立ち並ぶみすぼらしい藁と土壁の住居は遠目には以上があるようには見えないが近付けば人の住居にしては小さい事がよくわかる。お馴染みのゴブリン集落だ。

「さて、キング少し勝負をしないか？」

「な！声が大きい……………」

「最弱の魔物ゴブリンをどっちが多く狩れるかだな、この集落には上位個体はいないからがんばれよ、多く狩ったらこの依頼の金はお前にやる」

「……………負けた時は？」

……………ここらへはしつかりしてるけど、

「やるのか？武器は貸してやるけど、……………これだけじゃあ、面白くないから俺は武器は使わない。魔法もな、お前は俺の妨害以外は自由だ、負けた時は一週間自炊」

「自炊？……………おお、受けてやるよ」

無理すんな、声震えてるぞ、

「おし、じゃあ武器はこれがいいか、準備できたら始めるぞ」

トゲトゲハンマー、通称ガンダムハンマー、元い、モーニングスター、

刃物って何やかんやハードル高いんだよね（奪われる可能性もあるし）。当てれば斬れると思ってる人もいるが、なかなかそうも行かない。打撃武器の方が初めて武器を持つ人には無難なのだ。剣なら持ち上げる力があればある程度使えるだが、刀のように重さで斬るタイプじゃない物は抵抗を減らす為に薄くなってるものが多いので、案外あっさり折れる。

「おらあー」

力任せに振りかぶった一撃は三体ほどをまとめて吹き飛ばした。かなりパワフルだな。

「どうだ！」

そう言いながらキングは俺が今居た場所に声を掛ける。

「1ダース、と……………どうしたあの三体はまだ死んでないぞ」

「なんで武器より拳のほうが強いんだよ!？」

「別に、鍛えればいいだろう?」

魔力を少しだけ体に込めた状態でゴブリンを一発ずつ殴っただけだが、殴られた順にゴブリンの頭が弾け飛ぶ。間合いに入ってきたの

を短打で迎撃しただけでも、技量のあるなしは大きな差が生まれる。さっきの刀の話の続きだが刀は難しいのだ。特に生き物を斬るとなると骨と油、血糊には注意が必要だ。粗悪な刀だと、いくら使い手の腕が良くても骨に当たると折れる事がある。油や血糊できるだけ付着させないようにしても、いずれかは切れ味が落ちていく原因となる。特に数斬れば尚更だ。一振り一振り神経も擦り減るし、ずっと集中できる人なんていない。刀で骨ごと生き物を斬るのは技量とそれなりの刀が必要になる。あと筋力も、

袈裟斬りはよく知られている技だが、これも結構大変な技で逆袈裟斬りなんかはまともに当てたら劍豪と呼べる人物しか振り抜く事はできないのでは？と思える程だ。

生麦事件で斬られた人の検死記録とかには『肋骨を切断し、そこから肺や胃の一部をのぞかせ、16インチの長さの大腸、小腸がはみ出ている。』とか書かれている傷もある。記録だけなので定かではないが、一太刀でここまで斬り込むのはどれだけの力があるか全く想像できない（その上、対象は馬の上だったと言う）。

……………まあ、今素手だけど、

「くそっ……………寄るなー」

キングがゴブリンに集られてる。結界は張ってるが、抑えられると動けなくなる。コーティング程度の膜みたいな物だしな、

「邪魔、だな」

適当に払い除け、撚る。それだけでもゴ布林程度なら即死に近い状態になる。まだキングは0だ。

「大丈夫か？そろそろこの辺りから出られない奴が混乱して……………」

ザザツ、

「……………さて、ここからが本番だぜ、キング」

あー、終わった終わったー、体がゴブの血だらけで臭い。背負ったキングを汚れても困らないように隔離から出したタオルの上に下ろす。

「ヒュウ……………ヒイ……………」

「さて、今日から自炊だ。食材は準備するけど食事療法もとるから作

る物はこつちで指示するぞ、ただその前に風呂に入る」

「いい……………別に、死なねえ、だろ」

「入りなさい。風呂が嫌いなのか、水が怖いのか知らんが」

俺もすぐにゴブの血を落としたいんだよ。刀なら返り血を浴びずに済むんだけど、魔力で動く洗濯機のような箱型の魔道具に洗い物を押し込むと、今晚の献立を考えながら頭を洗う。

「なあ、……………あんたはなんでこんなことしてるんだ？」

「こんな事ってなんだ？もつと具体的に言ってくれ」

「魔物の集団に突っ込んだり、俺みたいなのを拾ったり……………」

「別に理由はないぞ？強いて言うなら生きる為だ、飯食って寝て起きて働いて……………十分だと思うけど、俺はそれだけじゃつまらないと思ってるし、自分がなんの為に生きてるのか自分らしくある為にとか俺の勝手な理由と、……………あと、責任つてのは親だ大人が果たすモンだ。誰のせいでも無いなら俺のできる範囲で助けて、原因があるならそいつにケツ拭かせる。……………少なくとも次代を担う子供達が背負うものじゃないからな」

俺一人で出来ることなんて限りがあるけど、何もしなければ変わる可能性も手の中を容易く溢れ落ちていく。初めから掴めない可能性かもしれないけど手の中にある内は託す事もできる。たとえ僅かであろうとも、たとえ僅かになろうとも、

人間はどこまでも傲慢だ。例を挙げるときりが無いくらいには、この世界のスキルで見られる。七つの大罪、傲慢、憤怒、暴食、嫉妬、強欲、怠惰、色欲、歴史上にはこれらの罪を象徴するような出来事が複数存在するが、これらの原因を分かりやすく示した言葉としてはマハトマ・ガンディーが雑誌で『七つの社会的罪』と挙げた次の七つだろう。

理念なき政治

労働なき富

良心なき快樂

人格なき学識

道徳なき商業



## 人間性なき科学

### 献身なき信仰

これらの言葉から共通して感じられるのは、人との関わりを蔑ろにしてはいけないう事だろうか。世界は広い、確かに広いがそれを狭めている人間がいる。既得権益で利益を得る拝金主義なら大好きな金を数えてる背中を喧嘩キックで蹴る。椅子に何時までもしがみつくなら、その椅子を壊す事も辞さない。末期かその手前か微妙な所だが…………

「おい?!」

「ん? ああ、大丈夫だよ」

俺自身も傲慢だしな、冒険なんてスキルを得るくらいだし、

見える範囲なんてこの世界のほぼすべてが見えている。助けられる人間に制限があるのを理由に選んでいるのだ。それを傲慢と言わずして何というのだ。

世界の可能性は残酷なまでには限られている。何十億という人間が一つの当たりクジを競い、誰かが引けば残りは等しくハズレクジだ。しかし最も問題なのはルールが不明瞭なのとまかり通る不正だろう。ないと言い切る人は必ずハズレを引く。何故なら最初の一人が当たりが出るまで居座ればそいつが必ずあたりを引くからだ。そしてその初めの一人が予め決まっているなら茶番も良いところだろう。蹴られて当然だ、しかもこの手の事って大概、高度な駆け引きも、頭も使わない。身内のなあなあとか、アホの会話が繰り広げられるので蹴られる回数は一発以上を覚悟しておいて欲しい所だ。

……………害悪への怒りは一度出ると止まらん、排水溝にペツ、つとつばを吐くと、思考を切り替える。自問自答していても答えが出そうにないので代行者と情報の擦り合わせでもするか、……………そうだ、炭水化物抜き牛肉を使った料理を決めるんだった。

## 死（XIII）の先へ

はあー、とうとう降ったよ、雪、……………しかし暖冬なのか？本来ならもつと前だろうに、その答えにはいつものように代行者が忌々しい回答をくれた。

《約270キロ西北西の工事から排出されるガスの影響です》

この雪大丈夫か？調べてあるけど確認、

《水蒸気のみなので問題ありません。ただ雨は多くなるでしょう》

まあ、あんまり寒いと湖で暮らしてるセイレーンに良くない影響があるかもしれないし、少し今までの生活の聴き取りをしておこう。……………ただ今日は少し予定が立て込んでいる。

「先生！今日雨振りますか？」

「タージャか？……………ああ、大丈夫だと思うけど」

「ありがとう！」

サラマンダーも雨は注意だな、うん、……………いやそれよりもだ、深夜急ピッチで完成させた医療区画に足を進める。

「旦那様ー、仮眠はしっかりとりました〜？」

「大丈夫だよ。眠気はない」

奴隷にされていた人の中には体の不自由な人もいた。大人は主に怪我による欠損や壊死、病気だったのでアナスタシアが治した後には金貨を十枚ずつ渡してそれぞれ望む場所に送り届けたが（家族丸ごとの場合は人数分より多めに渡してある）、

口数減らして奴隷された子や両親を戦争で亡くした子は何処にも送れない。だが、ここで問題が起きた。アナスタシアでも治療できない子が出てきたのだ。その子達に問診をするとある共通点があった。治った子との違い、それは外傷等の先天性以外という点だ。治療魔法なのだ、元から異常など無いのに効果を発揮する訳が無い。しかし、問診をしている時、やはり感じてしまうのだ、

見たいという願いを、

元の世界の知識を巡らせるが俺は医者じゃないし、当然良い方法も思い付かなかった。それでも視神経の状態とか脳とかいろいろ調べ

た。手詰まりになって代行者にも相談した。

《可能かと思われませう》

……この回答である。代行者曰く、状態はそれぞれ違うので義眼や義耳、義手義足を刻印をして作る。信号をキャッチする方だけなら筋電と魔力の両方で動く義手義足を作り、逆に脳に情報を送る場合は魔力で映像や音を直接送受信する様になっている。ただそんな魔法は無いので一から作る事になったが試行錯誤している時間はとても楽しかった。脳に近いのでロスは少ないはずだが、悪影響が無いかどうかは入念に調べた。そして今日移植する為の手術をするつもりだ。と言っても主に整形手術が主体だ。義眼等をつける上でどうしても邪魔になる、機能していない眼球等の摘出等はするが、それ以外は極力メスを入れない。

「あのあのく、大丈夫なんですかー?」

「大丈夫だ、盗賊だって人だ。練習台には事欠かなかったろ?」

初めはデカ牛、鶏（コカトリス）なんかを使って解剖の練習をしていたんだが、丁度盗賊が来たので使いました。皆でできるだけ傷つけずに捕縛して様々なパターンを検証してデータをとった。……結果、俺とレアはマッドサイエンティストの称号が付いた。それと俺の職業に衛生兵と神医、レアに調剤師と薬剤師、外科医が付いて、統合されて天才外科医に落ち着いた。俺の衛生兵も神医に統合された。  
フラックジャツ……

「2 1!」

「やめろおおおー!」

「グヘアー……がはあ」

……早速無駄な体力使ったわ。アッパーを受けたレアは空中で5回転きりもみ飛行をした後地面に倒れ伏して血を吐いた。それと人の知識を引っ張り出さないで欲しい。……しっかしこいつ完全にギャグ要員だな、

「目は五人、耳は三人、手足は七人分やるんだ早く起きろ」

雑菌も生き物と定義されるので冒流で殺菌すると、その上からゴム手袋を嵌める。一人目は左目だけの子だ。ただ反対の右側は全体的に窪んで見える。実際骨も全体的に窪んでいる。頭蓋骨と聞くと一

つの骨だと思っっている人が多いが、産まれたばかりの赤ん坊は頭の天辺を触ると柔らかい。それこそ内側に蓋があるような、そんな感じだ、これは本来産道を通る時に通り易い形にする為だ。一つの骨だと硬いがそれ故に融通がきかないし、頭はその他の動物と比べ物にならないくらいで、全体から見ても大きめ、逆子で産まれてきて頭が抜けなかった時が悲惨だ。首が座るといふ言葉は誰もが耳にした事があると思うがこれは頭骸骨も含めて、全身の骨が繋がっていない。首が座るといふのはそれらが成長に合わせて繋がるという事だ。

……たしか、な、

……そのために繋がる際、無いものや異常があればその形が少し変わってしまう事があるのだ。これが義眼などを入れる際に必ずしもでは無いが邪魔になつてしまふ、機能していない眼球の摘出等でも骨が近い為に削つたり、一時的に取り外したり、しなければならなくなる場合もあるし、手術の所要時間も限られている。できる事を全力でやるしか無い。

「……………メス」

まず麻酔の効果を確認、そして様子を見ながら髪の毛の生え際からメスを入れる。次に皮膚を捲り、状態を確認、やっぱり骨が問題あるので決めておいた手順で部位を切り離し、盗賊の骨を冒流で分解して、足りない分を継ぎ足し邪魔になる分を削り、後処理をして位置調節して戻す。

「……………汗」

次に整形、に入る前に殆ど癒着している瞼を切開して整形していく。併せて眼窩の中も整形。…………裏から見ると緻密な構造が見られる義眼を入れる。あとは、

「ヒール」

ロストリーバサルだと元に戻ろうとする力が働く為にアナスタシアにはヒールを使つてもらつた。それ一つでメスを入れた場所が綺麗に繋がる。整形した箇所も義眼を型に再生する。顔の形は未来視で違和感が無いように回復できる様にしてある。

「よし終わったぞ、見えるか？何か違和感があったらすぐに言つてく

れ、それとしつかり休むように」

「こつちの目よりよく見える！」

「それは良かった。義眼にはいろんな機能が付いてるから慣れてきたらそれも使ってみてくれ、……………あんまりはしやぎすぎないように」

パタパタと走り去る背中を見送る。向日葵やアリスに様子見を頼むか、

「さてレア……………次だ」

俺が集中し直すのに合わせてレアの雰囲気が変わる。集中しているのがビリビリと伝わってくる。

「あのあの、次は右手の義手でーす」

「……………その凜とした表情で声そのままは締まらん、それとアナスタシアには暫くここにいてくれ」

「ん、マスター」

若干気が抜けたが、ゴム手袋をゴミ箱に捨てて、新しい物を嵌める時には気持ちは整っていた。

「二先生（主よ）二三」

いつも通りに戦闘訓練を始めようとした時に四人から声が掛かった。

「なんだ？四人同時に来るのは珍しいな」

最初の頃の徒手格闘の時からだろうな、最近はいろんな武器や武術、魔法なんかを個々に教えることが増えたからな、自己鍛錬の合間なんかでそれぞれ得意な分野を他の子に教えたりしてくれているので、最近は質問を受ける事も減っていたのだ。

「ギルドに登録したいのですけど、いいですか？」

「ん？ああ、別に俺に断りを入れる必要は無いけど、何かに必要なのかわかる？」

「実は薬草の……………」

「キリエ、ロイ、主には気持ちをしつかり伝えるのが……………」

「兄さん、そんなだから影で脳筋と呼ばれるんですよ？」

「ははは！バーカバーカ！」

「ハルト、……………お前に関しては加減のできないバカだと言われている

ぞ」

「はあ!? お前だつて魔法キチつて呼ばれてるだろうが!」

「主の前だぞ! やめろ」

「……………俺としては主つて呼ぶのやめて欲しいけどね」

「すいません。先生、……………これだけは聞かなくて」

保護者と化しているキリエ、取り敢えず本題に戻ろう。

「で? 薬草以外には何をするんだ?」

「先生程は無理でも、俺等にでも倒せる魔物は少くないだろう?」

「実戦も兼ねて出てみたいんです。今の僕達がどのくらい戦えるのかを」

「先生!」

「……………仕方ないか、出る前に大事な事を教えとく、ちよつとあつちに来てくれ」

「はい、分かりました」

さて、一番大事な事は非常に簡単だ。正面戦闘ならかなりの者に勝てるが、

「……………あれ、先生は?」

「……………さつきまで目の前に……………」

『これから教える事はある意味一番大事な事だ。自分自身が敵のテリトリー、庭に入るといふ事は奇襲に万全であるか、それらを見破れるか、地形の特徴をしつかり把握できてるか、お前等と正面から戦えば勝てない奴は少なくは無いが、生きてる以上命は一つだ』

「先生、もつとわかりやすくお願いします」

「……………反響して場所がわからない」

『簡単な話、いきなり背後から心臓を一突きにされたり、首を搔つ切られたりしたら、すぐ死ぬつてことだ。それは俺も一緒だが……………』

「「え?」」

……………おい、何だその反応は、

『……………奇襲は誰だつて受ける可能性がある。待ち伏せなんて、人間も魔物も使う。不意を突かれると脆いものだ「こんな風に」』

「つーウィル後ろに!」

「遅過ぎだ」

ウイルの後頭部にチョップを入れる。

「あつ」

「俺はお前らに歩いて近付いたけど全く気づかなかつたな、ロイも散らしてた声を戻すまで気づかなかつたみたいだし」

「い、今のは？」

「隠密行動の基本、まず見つからない。次に音に注意、それと気配を感じさせない事、そして最後に痕跡を残さない。……これはロイに教えただけこれには複数の方法がある。まず見つからないは？」

「物陰に隠れる、とか？」

「魔法で透明化、でしょうか？」

「周りの景色や夜の闇に紛れるも使えませんか？」

「やっぱ、見てない時や見えない所から近づくとじゃないか？」

よし、一通りでたな、

「次は音だ」

「さっきの声の様に発生源を特定されない用にする」

「……音を断って移動する、としか、」

「別の所に注意を引く様に石とかを投げるとかかなー？」

「待ち伏せの時に動かない、くらいしか」

「じゃあ次、最後だが」

「気配……と言われても」

「殺気を向けない」

「気迫を出さない」

「戦意を消すとか？」

じゃあ答え合わせと行こうか、

「初めのだけど、魔法で透明化以外は概ね正解だな、それだけに頼りきりになると普段の隠密行動にも粗が出やすくなる。魔力も使うし、場所や状況は選んだほうが良いだろうな」

空中で使うときの有用性は計り知れない。視えなければだが、

「音だけ……音を断つてのは無理。服を身に着けていけば当然擦れて音も出るし、体を動かせば筋肉や骨が軋んだりするし、完全に

音がしない方法と言うのは無い。だから最小にしたり、周囲の音に紛れさせたり、同化させたり、石を匳に、動かないとかは場合によるけど正解、それで……………」

最後だが、上手く説明できるか？そんな不安が漠然と浮き上がってきたが、それはすぐに沈んでいった。

「気配だけど、これは気持ちを隠すって事だな。狙う場所を意識すると鋭い奴だところちの大体の位置までそれで把握できる奴もいるから用心するに越した事はない。……………かなり距離があれば早々気づかれなとおもうが、訓練の時も相手より有利に動く為に駆け引きするだろ？」

弱点を探ったり、間違った情報を信じ込ませたり、実力差の無い者同士の戦いだこの要素が勝敗に大きく関わってくる。

「……………ま、相手や場所、勝利条件によって変わってくるだろうから、その辺りは自分で判断するしかないな、それに身を隠せば逃げ切れない敵や追いつめられた時にやり過ごせるし、……………んでだな、さっきの話から今日の授業をかくれんぼに変更する」

まあ、これが一番無難だ。発見能力、危機回避能力、隠密性も鍛えられるからな。……………もつとも、隠れんぼは良くやっているので、次のステップとなるシュミレーション施設が無いがための時間稼ぎなのだ、

「危ないことはするなよ……………予定が少し早まったな」

I s h o t    私    は    お    前    を    殺    す  
k i l l    y o u .

最近何となく多用する動作に名前を付けてみた。技という程のものでもないが、

パンツ！

ほぼ零距离で盗賊の眉間に穴を開ける。これは10メートル以内の対個人だ。

「や、やりあが……………」

パンツ！

心理的な要素が大きいので観察力が必要になる。隙を見つけて近



付いてもう一人にも鉛球をプレゼントする。

「おいーきつさと囲んでやっちまえー!」

三人くらいが同時に飛び掛かってきたので銃を体の後ろで刀に隔離を使って入れ替える。

「……………これで全員だな」

木陰に隠れてたの含めて十人程を斬る。辺りに血溜まりが足元にできつつあるので結界に乗って必要なものだけ隔離、ポケットから単語帳を取り出して、一枚千切ってそれに魔力を通す。たまには一人で動きたい、そう思ってた帰還用の使い捨ての転移札。場所はノルのポイントあつてのものなので行き先はポイントのある所だけ、それと場所毎に描く式も変わってくるので、拠点限定で量産している。

「陛下、ぐ無事の帰還、何よりもお喜び申し上げます」

「ああ……………」

いつからここ軍隊になったの? ルシアは基本軍服っぽい服装をしている。そんなのに敬礼しながら迎えられたら場所間違えたかと思うわ、

「……………それで希望者は?」

「既に待機しております」

「待たせてしまったか、

「じゃあ、すぐに行くよ」

昨日、冒険者に登録したい者を募ったところ、それなりの人数が揃ったので今日纏めて連れて行こうと思っただ。それとさつき使った単語帳はもしもの時のお守りで、各自一つ持たせている。緊急事態に備えて、拠点となる家に帰還できるようにしている。安全を確保するのは保護者兼教師の仕事だ。

「……………それでは、職業ジョブの付与をおこないたいと思います」

「え?」

咄嗟の事で間抜けな声が出た。と言うか付与? 俺が登録した所ではそういうの無かったけど?

「あつ、ノースガーデン様……………実は最近、占い師を雇いました」

受付のおばちゃんから職業と占い師の説明を受ける。最近、雇った

ばかりということもあつてカンペを見ながらだったが、職業の説明は  
代行者の説明と概ね一致している。まあ一応確認しておきたかった。  
「職業の能力補正は強力だからね。それと自分がなれる職業なんかも  
分かるらしいわよ」

おばちゃんも魔道士の職業ジョブがあるしな、元は冒険者だったのだから。  
う。占い師の付与する職業はタロットの大アルカナに関する物のよ  
うだ。一度付与すると一年はカードをひけない。出るカードも選べ  
ないそうだが、付与するかどうかは本人が決められる。効果持続期間  
は次のカードをひいて、変更するまでだそうよ。

「変更を行わない場合は付与職はそのままだけど、次ひくのは一年後  
だからよく考えるんだよ。カードは本人の素養で決まるそうよ」

暇だし俺もひくか、最後の方で、

説明を受けてから子供たちを連れて隅の方に移動する。そこには  
水晶とカードの山を置いたテーブルを挟んで向かいに入れ歯の爺さ  
んがいた。格好は如何にもという感じで失礼だが率直な感想を言  
うと胡散臭い。

「また、ゾロゾロと……最初は誰じゃ？」

……げんなりしてるな、まあ、関係ないけど、

「はいはいはい！」

「喧しいわー！」

「ははは……、すいません。ハルトから見てもらつていいですか？」

「……では、そのカードに触れなさい。さすれば、お主に呼応する星  
が現れるじやろう」

「えー………選べる訳じゃないのかー」

「お主さっきの説明を聞いとらなんだな！後がつかえとるんじや！  
さっさとせんか！」

………あー、あれか、新しく雇つたつて言つてしな、付与すればそ  
れだけで強くなれんるだ。冒険者稼業に身を置く者なら誰でも来る  
だろう。まして今まで無かつたのだ。多分、この街を拠点にしている  
冒険者を捌くと言うデスマーチを一人で受け持った為だろうと推測  
できる。実際街にいる冒険者の殆が何らかの大アルカナの名を関し

た付与職を持っているしな、

「わかったよ、はい」

血走った目で怒鳴る爺さんに気圧される様子もなく、カードに手に触れた。すると三枚のカードが舞い上がり、白紙のカードに『愚者』『星』『世界』と焼き跡が付いた。だだこれは……………

「はい、次行こうか」

「待たぬか!」

あー、やっぱそうなっちゃいます？

「なんだよー、後がつかえてるんじゃないのかよー」

アルカナとは旅だ。気付き、一步踏み出した所から始まり、出会いと別れが様々な可能性を手繰り寄せ、死をも乗り越え、最後己の立つ場所へと辿り着く。……………まあ、あれだ。人によつてどう捉えるかは違うが、成長や円環と俺は捉えている。でだ、その円(輪は紛らわしいので使わない)の始まりと終着点がある。それと星……………あー、もう、俺は一つ一つの意味はある程度知っても組み合わせまでは分からん、漫画とかで興味持って軽く調べただけだからな、

「お主……………、何を極めたのじゃ」

「ああ?何を……………」

そうこうしているとテーブルのカードが一瞬で燃え尽きた。ただあの三枚はハルトの強さと成長性を表したようなカードだったな。

「……………もういい、次じゃ」

「なんだよ、気になるじゃねえかよー」

「はいはい、それは最後に聞いて、先生次私が見てもらってもいいですか?」

「ああ」

ハルトを押し退け、そつとカードに手を乗せるときつきと同じ様に三枚のカードが舞い上がり、そこには『女教皇』『力』『審判』の三つの文字が焼き付いていた。

「お主等……………」

なんかこう、恨みにも似た……………なんて言うだろう呆れたような、疲れたような、微妙な表情をしている。キリエの多才さや賢さを感じ

る。女教皇は知性や期待、力は強い意思や実行力、審判は成功や祝福を示す。

「先生、これってどういう意味なんですか？」

「力ってシンプルでいいな」

「ハルト、お前の三枚はかなり力強いカードで成長する感じだけど、キリエのカードは力強い意思、頭脳明晰さが出る」

「お主、分かっておるならかもっと驚かんか！」

「いや、なんとなくて……………」

喋ってる最中にまた同じ様にカードが燃え尽きた。

「……………次じゃ、次」

「主よ、私が行ってもいいですか？」

「おう……………」

ウィルが触れた瞬間に三枚のカードが飛び出す。『教皇』『戦車』『正義』の三枚か、ウィルらしい真つ直ぐな性格が出るな。教皇は信頼や法の遵守、戦車は行動力や積極性、正義は公平や平等を示す。

「正義……………ですか」

「戦車とか、またかつこいいのが出たなあ、俺も戦車のカードひきたかったなー」

「……………引く前に聞きたいでも良いですか？」

「どうした。ロイ」

「カードは何種類あるんですか？」

「俺が知ってる通りなら大アルカナ22種、小アルカナ56の76枚、ただ50も無いから大アルカナだけだろう」

小アルカナとかで出て来ても意味わからんし、トランプの元になったという事と、杖、剣、硬貨、聖杯、あと人物札に小姓がある事ぐらいしか知らない。

「では、強力なカードはどう言う物がありますか？」

「力という意味では世界や審判、物事の成功を暗示するカードだしな。ただ、愚者や魔術師は高い成長性を示すカードだから、一概にどれが強いのと言われてもな」

「でしたら……………良くないカードは？」

「うーん……………正位置だけでいうなら『死』『悪魔』『塔』『月』って所か？と言つてもどれも解釈があるからな、そういう意味でいうと『運命の輪』も含まれると俺は考えてる」

変化を示すカードはこれからに備える事を暗示するカードであつて、これからどうするかで変わる。良くなるかもしれないし、悪くなるかもしれない。諦めるか進むべきか、決めるのは自分だ。

「はよお、次ひかんか?!」

いつの間にか、カードも燃え尽きていたようだ。

「ロイ、行ってこい」

「分かりました」

ひいたのは四枚『魔術師』『皇帝』『隠者』『吊るされた男』、魔術師は可能性や起源、皇帝は支配と強い責任、隠者は精神性や内なる対話、吊るされた男には修行や忍耐、自己研鑽の努力を指す。

「ふむ」

さつきまでとは違った落ち着いた反応だな、

「じゃあ次は誰が見てもらおう?」

「二はいはいはい!」

元氣一杯な子供達の声を聞くと占い師の爺さんは心底疲れたようにため息をついた。

「ちよつと待つとれ……………、カードを足すからの」

そう言うとう白紙のカードを山札の下に追加する。他の子達は二枚だったり、一枚だったりで、ガツカリした様子だが、どれも悪い意味に直結するカードはひいてない。……………とは言つても本来の解釈も曖昧なのに、そのままの意味で受け取つても良いものなのか、そんな疑問がチラついた時、絶対いい意味じゃないカードが出た。

「し、『死』と『運命の輪』が出た……………」

―誰にそんな組み合わせが出た!

「ほえ?」

「アル……………」

最悪だ!いや、嘆くな、……………死は終わりを示す13番のカード。死の予兆、すべての終わり、別れ、新たな始まり……………、運命の輪が

厄介だな、こいつがどう言う意味なのか、意味合いとしてはチャンスや運の巡り合わせ、そして一時的な幸運、運気の絶頂を指す。そして根幹に自らの力で変えられないという点がある。一番最悪な解釈は抗えない死の運命だな、いい意味でも心機一転最高の門出か、俺の手から逃れるようにカードは触れる直前に燃え尽きた。

「強い光で変えるしかない、か」

「どうかしましたか?……先生?」

「なあ、……俺のも見えてくれるか?カード足しといってくれ」

「……わかったわい」

俺がひくべきカードは世界や審判の様な強いカードが必要になるはずだ。しかし、俺は完璧に忘れていた。アルカナの訳は星であると言ふ事を、

ボオウ!

俺が触れると共に一瞬、火柱があがる。それにより舞い上げられた全てのカードは紙とは思えない動きと速度で順番に机に並んだ。その文字はテーブルの木目が見えるほど焼き付いていた。そこにはご丁寧に空白分まで取って、こう書かれていた。

『WHO GRAB ALL THE STARS』

その文字を確認するや否や燃え尽きて消えた。だが、この力なら運命を変えられるだろう。

《職業 占い師を頂きました》

《職業 占星術師を頂きました》

《職業 皇帝を頂きました。下位の職業は統合されました。》

《称号 Rebellion Heart を獲得しました》

《パーソナルスキルに叛逆が追加されました》

ーまだ、足りない。なら……

《#@)?%!:/€ {※}√(『!!》

《パーソナルスキル 叛逆の消失を確認……さ、さ……築に……ります。》

……気持ち悪い。しかしこれで変わる、変えられる。だがいきなりやるような事じゃない。あくまでも最終手段、確認も怠らないよう

にしなくては、な。

## 運命の歯車（輪）を切り裂いて

夕食を終えた後、今日は定期的に行っている資料作りをしていた。……キーボードで打ってコピーした方が腕の負荷も少なくて済むし、文字も手書きだと整えても限度がある。パソコンとプリンター（魔力で動く）は俺の味方だ。ただあの辺りは技術面の遅れが何とも深刻で俺から見たらノスタルジックを通り越して、アンティークなタ イプライターが現役で売られている。魔法関係が進んだ弊害とも言えるだろう。その反対に科学が進んだ街では魔法の技術が廃れていたりする。

「あーあ、今日も疲れた……………」

パソコンを触る理由は基本的に資料作りが多いが子供を引き取った時も触る。今回は後者だ。少し前にエドガーに申告したが、変わらずといった感じだ。

しかし下手に手を貸せんのかなー、一時的に助けられてもそこから自分達だけでという方法で安定する方法が無い。農業は気候の影響をモロに受けるので、不作が続くことだってある。俺が伝えられる事は伝えていくつもりだが、新しい事は失敗が付き物、現状首の皮一枚と言う所だ。破綻に追い込みかねない。……………難しい所だ。もう手が無いと言うなら話は別だが、

「お茶をお持ちしました」

「ありがとうございます」

……………渋い。かなり長い時間茶葉が浸かってたみたいだな、多分これは……………」

「ルシアだな、これ淹れたの」

「すごいです。どうして分かったんですか？マスター」

持つて来たのはクロエだが、お茶がクロエが淹れたものでは無い為だ。日々の努力が現れてるからな、

「……………二回目に頼んだ時淹れた紅茶が、これに近かったからな」

「お、美味しくなかつたですか？」

「今のクロエのお茶と比べるとね。まあ、誰だって最初は上手くでき



ないし、どんどん上達してるしね」

「はあ……………、少し自信があつたんですけど」

……………なんでそっち行くの？部屋の隅になんか置いといたほうがいいかな、行けないようにする為に、

「クロエは色んな事に挑戦して出来ることを増やしてるし、気を落とさなくてもいいんだよ？」

「いいんです……………。アナスタシアやレアが淹れた紅茶には勝てませんから」

……………三角座りで小さくならないでください。

「お茶は奥が深いんだよ。みんなが淹れてくれたお茶を一番飲んでから分かることだけど、みんなそれぞれの個性がある。アナスタシアが淹れてくれたお茶は渋みがほぼ無いけど、レアはいろんな茶葉をブレンドして出してくれる。クロエのお茶は疲れてる時とか落ち着きたい時に飲むとリラックス出来るんだよ」

まあ、向日葵とアリスはあんまり上達してないんだよなー、クロシエツトは意見を聞いてよく試行錯誤している。こちらも日々の頑張りが伝わってくる。ノルンはまあ……………普通だ。朝日と月夜は二人で淹れるため手際よく早いけど、色付きの白湯みたいなのが出てくるが多々ある。……………俺も少し振りに淹れてみるか、

「20分後くらいにみんなを共有スペースに集めてくれるか？クロエ」

「わかりました」

俺はパソコンに向き直る前に紅茶を飲み干す。

では、まずティーセットを暖めながら説明しよう。水は軟水で酸素含有量が多い方がいい。茶葉は細かく切られたものより大きい物、ティーパックなんかに細かいのが入ってるのは早くお茶を抽出する為だが、一緒に渋みの原因も出やすくなる。ただ茶葉が大きいと抽出には時間が掛かるが、適切なタイミングで引き上げれば、渋みは残らない。それと酸素含有量とか言われてもこっちは無理なので隔離空間内でいろいろしてるが、別に普通の水道水でも某刑事ドラマの方の様に高い位置から注ぐ事で空気を含ませることが出来る。

「……………まあ、それぞれに合わせるしかないけどな」

酸素含有量が多い水の場合は沸騰手前、100以下90以上がいい、普通の水なら沸騰させてから高い位置がちょうどいいだろう。後は三分蒸らす。ミルクとかも温めておくといい。

「どうだ？不味くはないと思うが……………」

「ふあ……………、落ち着く」

茶葉はありふれた（こっちでは）ものだが満足してもらえたみたいだな、……………これで向日葵とアリスのお茶が美味しくなればいいのだが、

「……………フツ、は！」

「職業を付与してから、動きがさらに良くなったな」

四人同時はキツイからな、連携も上手くなってるし、一撃も受けないというのはもう無理、牽制目的の攻撃は急所を外して、わざと受けて距離を詰めたりしてた。だが、四人で試行錯誤している事あって、もう勝つのは連携ミスが生じた時のみだ。後は負けないけど勝てない膠着状態に陥るのみだ。もうそれぞれの連携は十分と判断して個々の能力を高める方に集中する事にしたのだ。……………と言うのは建前で、

名前 ハルト

種族 獣人（赤狼）

パーソナルスキル 二秒支配

スキル 格闘術10 体術6 火炎魔法4 剣術5 解体4 剛

力2 料理1 体力自動回復2 魔力自動回復1

耐性 衰弱耐性2 時空間制御

称号 勇者 天賦の才 英雄の弟子 魔王候補

終わりにして始まりの環 刀神の弟子 龍騎士の素養

職業 拳闘士 剣士 魔法士 獣戦士 勇者 0愚者 XVII星

XI世界

二秒支配 内約

二秒だけ時間の操作を行い、巻き戻しや停止を一日三回まで使える。

こんなスキルや称号が増えた状態で戦ったら、俺の身も危ないが、連携する側ももしもの事故が発生する可能性がある。まあ要するに慣らしていこうって事なだけどさ……………

「せやあー」

ギリギリまで引きつけて、躲す。行きがけの駄賃に剣の腹に肘を叩き込んで折る。前に踏み込んで腹に膝、続けて、後頭部に遠心力を味方に肘を後頭部に叩き込む。

「や、やっぱりすごいな……………先生は」

「いやいやいやいや、俺は確かに二秒間巻き戻せる能力があるとは説明したよ？ただ一日三回であって、それ8回目の巻き戻し」

終わりにして始まりの環、これが原因だという事は分かっている。この称号の権能は終わりを始まりに戻す、という事で……………まあ、回数制限付きのスキルを使い切ったとしても三回なら三回に戻るし、一回ならまた一回に戻る。しかし、美味い話ばかりではない筈だ。だからこそ実際に使ってしばらく様子を見ることになった。

「やっぱり魔力が消費されてるな」

「たまに滅茶苦茶魔力が減るときがあるけど？」

「全体から見ると……………4割か、少なくとも無いが魔力回復薬との兼ね合いを考えると多用は出来ないが、計画的に使えば問題ない筈だ。ただ今日は終わりにしておいたほうが良いだろうな。それとあと一回は、三時間開けるまでは使うなよ」

「わかったよ、先生」

ハルトは元通りになった剣を鞘に戻す。時間の巻き戻しによって、剣を元の状態、折れる前に戻した剣を担いでそのまま筋トレいいで手伝い回りに行った。二秒過ぎると元に戻らないが、二秒以内なら自分の外傷や毒なども消せるし、治せる。ただ痛みなどによって受けた精神的負荷は消えない。多少の無茶をしても戦闘経験を積めるようにはなったが、危機感が薄れないかが心配だ。

「僕の調整はまだかな」

「あ、悪いロザリー」

「もう、仕方ないなあ」

車椅子に座る少女、髪は緋緋色金とオリハルコン、体は青生生魂とオリハルコン、それとアダマンタイトで表面を覆っている。それと目隠しをする様に巻かれた包帯。あの下にも……………

「もしもしー、……………もう、僕達のお父様は急に耳が遠くなるね」

「ごめん、いろいろともう少しの筈、なんだけど、……………足動くか?」

「……………うん、大丈夫だけど、ここからだよね?」

「ああ」

目元に巻かれた包帯を取り、目を入れる。

「……………どうだ?」

「うご、かない、……………ふー」

やっぱり無理か、頭に手を置き念じる。

「あつ、うごこつ……………!」

「おっと」

スキル付与なしでも動かせるようにしたかった。元々付与ありきもののだが、それに一人で歩くには力が足りない。

「取り敢えずはこれに座れ」

抱き上げたロザリーを車椅子に戻す。

「僕はもつとお父様の近くに居たいのに……………」

「わかってるよ、ちよつと動くなよ」

ロザリーには前もって作っておいた十字架付きをあしらったチョーカーをつける。それとさつき付けたスキルは寵愛<sup>ハ</sup>ノ使徒<sup>エ</sup>、内約は見ル者、我が下ニ栄光アレ、この2つだ。他は複数の属性魔法だけ、  
「……………ありがとうございます、ごさい、ます。」

「あつ、そうそう、これひいてみてくれないか?」

差し出したカードにロザリーが触れると、一枚のカードが飛び出す。……………絵柄までついてるな、

「……………節制か」

『TEMPERACS』って焼き付いてるしな、このカードは意外と簡単に出来ることがわかったのでいくらか作ったついでに、人形でもひけるのか?という実験で見てもらったのだ。

「僕にも見せて、ね?」

といつても暫くすれば燃え尽きて消える……………渡す。

「お父様？このカードにはどん……………ひゃい!？」

「ぶっ……………ははは」

びつくりした表情で固まってるな、上手く行つた。少しするとむくれているので頭を撫でてやろうと……………

「この髪型は潰さないですよ?」

リクエストにインテークと言われた時はなんと事かと思つたが、パソコンで髪型だと知ってどれだけ苦労したか、流行りを知つた父の気持ちとはこんな感じなのだろうか？

天辺に癖をつける為に世界樹の柾目材を使っている、ただ全部同じ素材だと朝日の様に癖がキツくなり過ぎるので、苦肉の策だが、重りとして毛先を緋緋色金と青生生魂、オリハルコンをまぜて、世界樹の柾目材を芯に薄く塗る様に付けたので……………髪型は維持できてるが、全体的に紫、天辺赤紫になった。

「じゃあ撫でなくて良いか?」

「くくっ!意地悪だあ!」

「喧しいわ!」

ドカツ!

「おい……………、人がボイトレやつてる横で騒いでんじゃねえよ、集……………」

「……………すまん」

同時期に作っていたこの子はアリア、壁を突き破るくらいの力はあるが、本領は妨害と支援にある。

「……………」

「どうかした、アリア?」

「ロ、ロザリー!だだ、だ旦那様がいる、いやいや、いらっしやるならオレ、じゃない!ワタクシ!……………」

「言葉遣いは気にしなくていい……………それより壁」

「もう、仕方がないな、ほら直つたよ」

壊れた壁がビデオの逆再生のように元の状態に戻っていく。アリアの見た目は何処のロツカーだよといった感じだな、左のこめかみ辺

りから伸びた茶髪は三つ編みにされている。革やベルト、指輪などかなり尖った感じだが、声や時より見せる仕草はとても可愛らしい。

「次から気を付けなさい」

「はいっすー」

素直な返事である。……さて、今日は外から来客があるようだし、丁度いい魔物も来ている。掃除ついで実践練習と行きますか、積もる程ではないがちらちらと降る雪の中、シロクマが木々の間を縫うように走っている。

「獣の相手をした事がある者は知ってると思うが、体毛に覆われているっていうのは結構厄介だ」

特に刃物はキツイ。だが銃で仕留めるのも難しい。キツチリ仕留めるなら熊相手に9ミリ弾は心許ない。それに絶命するまでに意外と時間があるのだ。距離によつては一撃貫うこともあるだろう（あつたら何針か縫う）。

「クロエ、支援は任せた」

「はいー」

「……それと四人とも、無茶はしちや駄目だからね」

「……はい！」

近接戦闘は前世なら即、死である。全力で逃げればいいと考える人もいるかもしれないがそれこそアウト、背を向ける者を追っかけてくる。時速60キロくらいで、自動車と競争するようなものだ。体が大きいから遅いと言うのは当てはまらない。むしろ熊は大きいほど速いと考えたほうが良いだろうな、心構えとして、まあ、実際遭遇したら背を見せずジリジリ後退が正解らしいが、100%助かる保証はない。

「……そう考えるとステータスの恩恵は大きいな」

不本意ながらSに昇格する時に相手をしてくれた筋肉さん（ウォーレン）は戦車をその肉体をもつて砕いたり、持ち上げたりしたそうだし……基本は回避してたが、戦闘中に受け流しとか最小に抑えたが、防御もしてた。んで、入念に検証した結果、

「この世界の人間は猛獣でも素手でねじ伏せる奴が結構いる」

そんな訳で試してみた所。シロクマと握手（爪全開）、もといお手（フルスイング）ができてしまった。……………なんといかアレだ、全然嬉しくない。立ち上がった状態なので腹部にトーキック、そこを足場に反対の足で顎を蹴り上げ、1回転（連環腿モドキ）でひっくり返す。間髪入れずに真上に隔離で開いた窓に銃を突っ込み、熊の口の中に銃口ねじ込み三発、

「旦那様えげつねえー……………」

そう言ったレアのウサミミとウサミミの間を弾丸が通過、弾丸は近くの岩で跳弾して熊の脳天を穿つ。

「くくくくエくさくん……………無言で人の付近撃たないで……………怖いよ、漏れちゃったよ」

殆ど絞り出すような感じだったな、ガクガク震えてるし、目や鼻からも液体、口元からは血が垂れてる。……………下は大丈夫だと信じよう。

「レア」

「ううー……………はいー」

レアはティルフィンゲ血系・無形を投げる。六個の箱が開き、飛び出した血は赤い糸となり、木々の間を縫うように張り巡らされていく。何本かはレアの周辺を囲い、漂っている。

「さて、みんな一応嚴重に注意はするけど怪我のないように」

……………と、言っただけは良かったが、

「……………ありのまま、今起こった事を正直に話すぜ、何を言っているかわからないかもしれないが、あいつらの前に立った熊が瞬殺されたんだ」

俺は千里眼を持っている。これの応用で瞼を透視する事で一瞬の隙も消す事ができる（戦ってる時だけにしないと疲れる）。観えた事をそのまま説明するだけで済むが、それが滅茶苦茶だ。

ハルトにはセカンドオンリークロック秒針だけの懐中時計と言う時計を渡した、ハルトは少しづつだが時魔法を習得している。だが本人に操作できる時間は極僅かな為に魔力を込め、一秒の停止の効果を与える魔法のアイテムを作った。貯められる魔力の限界は60秒分、残量に応じて針が動くよ

うになつてゐる。そして時間というルールは最も上位の物理法則とも言えるだろう。

ハルトがまずやったことは三本のナイフを投げた。そしてそれに続く様に走り、敵の目前で止めたナイフを足場に熊の視線振り切ると、多方向から斬りつけ、止まっていたナイフが動き、熊の背中に刺さったその隙を付き火炎魔法で燃やした。火炎魔法は火を付ける魔法だ。ブレイズとかは確かに燃えてるが、熱の塊をぶつけるだけで、衝撃の方が強いし、紙とか燃料とか燃えやすい物にしか火がつかない。逆に火炎魔法で習得する、フレイムは纏わりつく炎だ、その代わり射程が短い。

次にウィル、聖魔法で回復しながら熊と殴り合いをしてた。ウィルが15発目に踵落としを打つてとどめとなった。この間2秒だ、

キリエは魔法で凍らせてからの滅多打ち、エグい。………一番敵に回したら怖いタイプだな、

ロイは植物魔法で足を引っ掛けて、目から細剣を差し込んで脳を掻き混ぜて、ウインドで距離をとる。

残りのシロクマは一目散に逃げ出したが、レアの糸とクロエの狙撃を逃れられるものはいなかった。死体は隔離に収納、あとで解体する。掃除が終わる頃には一団も森の外からなら見える位置にいるだろう。

「旦那様ー、お見えになりました〜」

「ああ、今行く、じゃあみんなは戻っててくれるか？」

「「「はい」」」

「はいー」

「な、何か必要なものはありますか？」

「大丈夫だ、ありがとう」

街から出てくるところから見てるから知ってるけどテストトラの軍だ。用意しておいた白のコートを羽織り、身嗜みを整える。

「あっ、ロイとキリエは型の茶碗乗せ維持、ウィルとハルトは腕立て、腹筋、背筋十回と二十メートル五往復ダッシュの繰り返し、俺が戻ってきたら実戦練習」



兵士達は最初のうちは戸惑っていたが、食事を振る舞ってからは緊張とほぐれ、各々仲間と談笑している。軍の編成としては機動部隊という感じで車両とかは森の茂みに隠してある。多少木を斬らなければならなかったが、少し前に森一帯を買い上げておいて良かった。

「……………と言う訳で、この辺りにも戦火が飛び火するかも知れないと言うことと、何卒お力添えを賜りたく、お伺いした次第であります」  
……………全く分からんが、とんでもないのが二人程いる事はわかった。どうも遠征をしたのだが、砦に籠もられて、攻めきれない所があるらしい、なんとか取り囲んで、補給線と退路を断つたにも関わらず、だ。しかもこちらの経済状態、市場がいきなり苦しくなってきた。ただその前後で同じ物を売り買いを繰り返している者がいたそう。前者は運搬に関するスキルだな。後者はかなり迷惑なスキルで悪意があるので早急にやる。

「少し席を外します。15分程で帰ってきますので……………ノルン」  
「承りました」

部屋を出でて即テストラのポイントにゲートで飛んで即確保、剣を抜いたので避けるギリギリまで惹きつけて回避、もう少しで当たりそうと言う認識で焦らせて粗が出た所でその場で踏み込んで飛び蹴り、片手を地面に付いて逆さまのまま左手で銃を抜く。

「動くなよ？お前の値下げ値上げ交渉は街の経済に大打撃を与える、その意味は分かっているだろ？」  
デイスカウント&プライスアップ

値下げ値上げ交渉 内略

複数購入の際に最大五割引きに持ち込める。また、複数売却時にも最大五割値上げできる。

人の計算や思考に干渉するスキルで、単品では効果を発揮しない。ただこれだけ減れば怪しまれるのは当然、だがそこらへんを闇系魔法の催眠状態にするマインドを使う事によって曖昧にしているのだ。ここまでやっておいて偶然だ悪気は無かったとかが通る訳がないよな？何か言えや、

「……………ステイルメイト、だろ？ほらチェックメイト」

回転して姿勢を戻したら銃口をグリグリしてみる。

「やめろ！危ないだろうが！」

「じゃあ、俺の目を見ろ」

一回目があったのを確認してから切り出す。別に制約は無いが何でもお見通しと言うのは逆に気味が悪いし、間違った情報ならいくらでもくれてやる。保険を掛けとくに越した事はないしな、

「…………事情は把握した。上着を脱げ」

契約魔法、奴隷なんかを服従させたりする闇系魔法、その式に冒流で干渉して消す。掛けた相手の魔力を使えば正規の解除ができるが、この程度なら冒流で魔力として分解したほうが速い。どっちにしても冒流ありきでないと出来ないが、

「帝国側には俺の方から掛け合ってみる。どういう扱いになるかは分からんが、どうする？」

「佐田……………」

「お前を縛ってた奴の名前か」

「頼む、あの……………悪魔を……………殺してくれ」

隔離して金や物は元に戻してさっさと戻り、部屋に入るとクロエが対応していた。

「砦の攻略に協力したいのですが、提案があります」

物分りの良いだけの隠者（愚者）にはなるな

テストラの陣地に付いた俺達はまず怪我人の治療から始めた。クロシエツトとレア、月夜、アリアが居残り組だ。トラブルが発生した場合、月夜が朝日と入れ替わり、連絡してくれることになっている。それと今回はウィル達を連れてきている。

「みんなは見学の予定だけど、もしもの時は自分の身を守れるようにしておくんだよ。向日葵達は各々所定の配置で頼む」

兵士達の士気が下がらぬように鼓舞する定時の集会、そこで登壇していた上官の頭が水風船の様に呆気なく爆ぜた。

「狙撃・スナイパーだ！」

その言葉の後、渡来人や勇者が地面に伏せ、周りを見渡す。それに遅れてガチャガチャと統一感の無い音をたてながらも周りの兵士たちも頭を伏せる。しかし、次に起こったのは今まで敵に開けられることの無かった鉄の城門が、本来開く筈のない内側に抉じ開けられ拉げる悲鳴のような音が響いた。

クロエは彼らの真上から頭を射抜いた発泡音さえ聞こえない上空からだ。それをやるのは、風を考慮するとかかなり難しい。調和ノ使徒の演算能力無しではまず当たらない。対して地上の向日葵がやった事は非常にシンプル。強欲で作り出した巨大な霞の腕を城門目掛けて目一杯叩き付けた。さてと、

カチン

逃げてくるであろう。反対の城門をバラバラにして隔離、通るスペースを作る。一瞬で隔離するとなると大きい物は面倒くさいし、壁とくつついてるので何かと都合が悪い。城壁も丸ごと消そうと思えば消せるが、わざわざ逃走経路を増やすこともないだろう。………見えてきたな、

「そこで止まれ」

………アラア？全然止まらないね。突っ切るつもりなのだろうな、仕方ないし、ダンジョンでやったのと同じ要領で彼らの両サイドを氷で固める。しかし更に加速するだけで止まる気なし、それどころか三

人ほど剣を抜いて先行してきた。

「さっさと畳んじまえ！」

はあ………、あれですか？反撃を、死ぬ事を想定していない。自分が攻撃される事はないと盲信する甘ったれ、相手が躊躇することが前提の突撃に反撃を躊躇う必要は無い。恐らくこの手の事は何度もやっていると仮定すると、正々堂々はないな、話が通じない上に危害を加えようと言うのなら、それ相応を対応がある。

バコ、

俺を中心に半径3メートルの範囲の地面を土魔法を使って陥没させる。息の揃った連携はタイミングだけではない。踏み込みやリズム、呼吸も揃う。その瞬間に地面が窪めばたたらを踏む事になる。尤も、俺が求めたものは、本人達の意図しない僅かな対空時間だ。土魔法で窪ませた範囲は俺が一步踏み込めばギリギリ刃が届く間合いだ。三人纏めて一閃する。鎧を身に着けているのでこれで問題ない。一人が後続集団に突っ込み、残りは左右の氷の壁にぶつかる。

「代表者の佐田さん、前にどうぞ」

「あははははー！」

『クロエ！ちよ、乱射やめてよー！』

「あははははー！死ね！死ね！ほら死ねよ！」

「………駄目、みたい？」

「完全暴れてます」

クロエは上空を飛行しながら銃を乱射している。地上組は各々で身を守ったり守れる者の所に集まっていた。向日葵の頭上には傘のように手の形をした霞が銃弾を止めていた。付近にはノルンとロザリーがいる。アリスは頭上に傘のように回転しながら飛ぶ獄鋏・十三枚刃を盾にしながら、錆びた大剣を振り回している。ルシアと月夜は銃弾を物ともせず、戦っている。アナスタシアは治療の為にいたので居ない。そのせいで安全地帯を求めるように兵士が殺到するが、向日葵は空いた手で強欲を行使して薙ぎ払う。ノルンは銃で撃っているがリボルバーの6発では、すぐに撃ち尽くしてしまうこともあって、リロードしている時間のほうが長い。

「ノルンお姉様、僕に魔力を借して貰っても良いですか？」

「ん？……いいよ？」

「何に使うの？ロザリー」

お姉様と呼ばれて機嫌のいいノルンが快く了承すると手を重ねる。同じ魔力で作られた機構精霊を使っているオートマタ同士なら同質の魔力なので簡単に受け渡しができる。

「僕の武器を使おうかと、ただ大きいのと魔力の消費が多くてまだ使えてないんですよ」

「まだいる？」

「もう少し欲しいです」

「………うん」

「武器ってどれなの？」

「これです。魔力はこれで足りると思います」

「ん」

「………？」

首につけられたチョーカーの十字架に触れるロザリー、

「お父様が作り上げた多目的広域魔導制圧兵器。来たれ！

災禍枢匣・666！」

「………何も起きない？」

「最初の攻撃はその巨大さを利用した。プレスですから、一分は掛らないと思うんですけど、少し時間は掛かりますよ？もちろんすぐ後ろにも出せますけど、ちようどいいスペースがあるので……、」

辺り一帯が微かだが陰り始める。

『みんな！ちよつとこつちに戻ってきて』

「わかりましたわ！」

「了解！」

『ん………』

集合する頃には影の正体はつきりと確認できるようになっていたが、もう既に遅い。

バアアアアン！

地響きとともに強い揺れを受けて何かが崩れる音がそこかしこか

ら聞こえる。砂煙が晴れるとそこにあつたのは黒曜石のような艶のある立方体の人工物だ。僅かだが両端に避けた兵士の怯えた声が聞こえる。

「そういえばクロエは？」

「上にはいないにやよ？」

「じゃあ、起動しますね、えい」

兵士たちの方に向けて両端の一部が開き、ガシヤガシヤと音をたてながら何かが出てくる。

「蹂躪舞踏……今回はこれだけで十分ですね」

全長5メートルくらいの二足歩行ロボットといった感じだが、上半身は無い。この体で敵陣に駆け込み、その質量を利用して人を虫の如く踏み潰し、歩いた跡に残るのは拉げた鎧の肉詰めだけだ。

「………んにや？なにか聞こえないかにやー？」

「………あの中から、みたいですよ」

フェイマリーステップの歩く衝撃の間隔より速く、そして力強い地鳴り様な破壊音、目の前の人工物の中から響く音はここからは見えな  
いが天辺から衝撃と共に抜け、遙か上から怒号を叩き付ける。

「ふざけじゃねえぞ！どこのどいつだ！出てきあがれ！」

「巻き込まれてたんだ………」

「かなり怒ってますわね」

「意識を引き付けるからその間に貴様はあれを片付けろ」

「わ、わかったよ」

「………あんな音がした後だし、ご主人様も見てると思うよ、クロパ  
ン」

「クロパツ！………ちよ、月夜そんなところから見えるの!？」

「下から覗き込む形になるからばつちり、それに小生には能力やスキルを借りる力がある。本人の能力には劣りますが、元から強力なご主人様のスキルなら見えない訳が無いでしょう。視覚の位置は変えられないけど、透視はできるし、目も良くなるからレースの縫い目の一つ一つまでしつかり見える」

クロエの意識が逸れている間にフェイマリーステップの収納と共に

に災禍<sup>パ</sup>枢<sup>ン</sup>匣<sup>ド</sup>・666をロザリーが元の場所に返した。

「それじゃあご主人殿の元々に合流しましょう」

「おー」「…………おー」「はい」「了解した」

「あー……………えーとね、出てきてもらえないですかね」

いつまで経っても出て来ない。あつちは片付いたみたいだが、さつきから身代わりばかりを偽って出してくる。当然背中についての契約魔法の効果を消すと態度が一転するので、いい加減叩きのめしたほうが良いかと思っただが、ある程度人数が減ってからだんまりを決め込んで動かなくなった。……………さて、まあ、そこまで期待してなかったが、この程度の事もわからない馬鹿でなかった事が少し残念でならない。

「まあ、もう姿が見えるくらいには減ったけどな」

冒流では触らなければ契約魔法の式を消せない。最初の人数でまとめて押し寄せられたら、波に攫われる様に容易く流されていただろう。そこまで馬鹿では無かったようだが、それほど賢い訳でもないって所だな、

「さて、……………今から対人戦の基本を説明しよう」

適当に刀を抜くとあつちから一人飛び出してきたと同時に斬りかかってきたので避けて蹴り飛ばす、

「人同士では相当体格が違わない限り筋力とかに大きな差は生まれない。もちろん鍛えた者と病弱な人とは当然差が出るが、ある程度鍛えた者同士ならその差は然程無い。だからこそ技があるんだ」

まあ、ステータスがあるから見た目で判断出来ないけどな、俺も熊と握手できたし、見た目を下回ることには無いはずだし、弱い分には問題ない。次の一撃を躲して、鳳凰双展翔で背中合わせになった瞬間に冒流を使って式を消す。

「自分を知り、相手を知り、地形を把握、状況に合わせた戦術を組み立てて、最善、有利に、または全力を出せるようにする事」

槍の突きを躲し、腰を落として胸部に肘を叩き込む。数歩たじろいた所に即座に飛び蹴り、迫っていたもう一人を巻き添えにする形で蹴っ飛ばす。

「一对多数の場合は立ち回りが重要になってくるからな」

転がっている二人の地面に接している箇所を魔法で凍らせて動きを封じ、次に飛びかかろうとしている四人の片足を踏み込む前に凍らせて、転がしておく。……しかし氷結魔法便利だな、

「さて、もうお前しかいないぞ」

「俺は………！」

「誰かのふりなんかで逃げられると思うなよ？」  
「ぐっ」

しょうもない馬鹿だな、一人づつ開放していつていたのは何の為に？なんて頭の片隅で疑ってたのだが、ただの時間稼ぎ、考える時間を建前に思考を放棄したやり方だな。

「次は契約魔法を俺の後ろの子供たちに飛ばそうとしてないか？」  
「………！」

この手はもつと早期に打つのが正解だが、自分が見つかる事を恐れて、今使おうとしている。開き直ってこちらに手を翳して来たが、魔法は発動しない。

「このなんなんだよ！クソ！」

ヤケになって手近な石を投げてきたが、キャッチして投げ返す。当てる気は無いので後ろの氷の壁にぶつける。

「危ないだろう。人に石投げるな………、さて、どうしてくれようかな？」

「はあ？人殺しの癖になに正義感出してんだよ、殺しただろ？殺さなくてもその刀でいろんなもん斬ってんだろう？ウゼエんだよ！お前になんの権利があるんだよ！何様のつもりだ！ああ！」

一切目を離さずまっすぐ見つめたまま、ゆっくり言葉を紡ぐ。

「………言いたい事は終わったか？なら、餞別代わりに教えてやろう。人間は傲慢な生き物だ、正義だ悪だと声高らかにほざき宣う愚物も、耳触りのいい言葉に踊り踊らされ、言われたものを差し出し、従うだけの愚物も、所詮どっちも愚物だ。どっちも深く考えず流し流され掻き乱す、数字や言葉、常識、普通とかと一緒でたかが概念なんなんだよ。正義も悪も違いは無い。お前がどう信じようがそれはお前



の中での正義だ。……自覚の有無はどうでもいいが、曖昧な物に縋ろうが自分本位にねじ曲げ盾にしようが、俺がお前を斬る事を変えるには全く足らんのだわ、一つかどうでもいい」

「どうでも……?」

「うん、どうでもいい。それとこの世に生を受けて生きる権利を使う以上は誰も傷つけないなんてことはないぞ? 見えないだけで無数にいる。権利はお互いに侵害し合う用になってるし、権利は責任と表裏一体だ。例えば10本中一本のみ当たりのくじ引きをしたとして、お前が幸運にもあたりを引いたとしよう。その時に後からくじを引く者のあたりを引く権利を奪ってるんだよ。だから恨まれても妬まれても可笑しく無い」

「なんだよそれ! おかしいだろ!」

「人間は理屈だけでは動かないけど、自分の気持ちや欲には従順だよねー、お前みたいに、……サバイバル・ロツタリーって知ってる?」

哲学者のジョン・ハリスが提案した思考実験である。そのまま臓器くじなんて呼ばれてる。まあ、日本語圏でサバイバル・ロツタリーと言う表示が多いようだが、『人を殺してそれより多くの人を助けるのはよいことだろうか?』という倫理的問題だ。

大雑把に言うとかじ引きして当たった人を解体バラしてその臓器を移植を必要としている人に移植する。それをどう見るかって奴、

しかし、サバイバル・ロツタリーと言う思考実験は、社会全体の利益を最大化すべきであるという功利主義を人間の肉体に適用すると言うもので、功利主義の立場に立つなら、この制度は富の再分配と同程度には善である、とされているらしい。ツツコみたい事は山ほどあるけど、

「お前が生きてる場合の俺の利益はなんだ? お前が今までやってきたことの損益を埋めるほどのものはあるか? 無いんだよ、俺が助けるのはお前らが住んでた国の住人だ。臓器の提供者はお前らのリーダー、……で駄目になった臓器はお前だ。じゃあな」

首や手首など動脈が皮膚から近い場所に切りこみを入れる。

「後悔する時間はやるよ」

血溜まりに背を向け歩く。死んだかどうかは後で確認するし、あの子達がこの光景をどう捉えるか、それはそれぞれだろうけど見たくないものから目を逸らせばその対価高い。ただ横を向いただけのつもりでも、心は無意識の内に自分から離れていくものなのだ。無自覚のうち離れていたなら心だと思っっているそれは何なのか？心があった場所を埋めるようにみすばらしく過剰に飾り建てられた、寂しくも痛々しい虚飾だと俺は思う。

「わかってると思うけどどうしようもないことなんか星の数程ある。ただ己の都合の良いように曲げるな、分からないことがあつたら考えななり、相談するなりして答えを求めらんだ。行動が伴わなくてもいい、あつた事はそのまま受け止めろ、心の中だけでも真っ直ぐであれ、それぞれが信じるものを通せばいい、それと目的と手段を混ぜるなよ？」

月（ツキ）を反転させる方法と適度な掃除（節制）の仕方

リベラーズ共和国、二ヶ月前に建国されたこの国は、とある異世界人が王になっている。町並みを行き交う人から悲壮感のようなものは無く活気さえ感じるが、お先は真つ暗だ。白鷺充は七年ほど前に冒険者になり、半年程でSランクに上がった実力者で現共和国領を転々とし、街の防衛や凶暴な魔物の討伐をこなし、国民からの人望もある。当然そんな人物を放っておく訳もなく国も勧誘していたのだが、白鷺は応じなかった。それに腹を立てた木っ端の貴族が暗殺者を差し向けたのだが……………

「返り討ちにする所までは良かったが、斬る相手を選べよな、国の土台たる文官や外交を一手に担っていた伯爵、果ては屋台骨たる宰相<sup>さいしやう</sup>まで、……………残ったのは国の運営から外され、廃れるのを待つだけの無能貴族共、はあ」

事ここに至って気付いた彼は何とか問題の先延ばしとも言える侵略を開始、政治関係の特例法案も通しやすい、何より自分が離れられるからな、王であると同時に最大戦力なのだから、銃の弾倉を引き抜き、スライドを引いて装填されている弾を出して、まとめて隔離に仕舞って別の弾丸を装填する。

「マスター、今回は生け捕りですか？」

「半分正解だな」

「わかりましたわ！半殺……………」

「はい、そこ！口に出すんじゃない」

「……………小生としては、やらないと否定する場面なのではないですか？」

「やることはさほど変わらんよ、ただ戦場に飛び込んで横槍が入らないように補助してもらえばいい」

対生物ならホローポイント弾の拡張型を装填するが殺すことが目的ではないのを見極める目的もあるため今回はゴム弾を装填したの

だが、きつちり罰の意味もある、取り敢えず相手のステータスとかを説明しておこう。

名前 白鷺 充  
種族 人

パーソナルスキル 遠距離恋愛

スキル 剣術8 体術6 格闘術3 隠密1 重力魔法2 激龍

強化1 鑑定3

耐性 衝撃耐性3 痛覚鈍化4 龍鱗

称号 龍殺し 巨人殺し

遠距離恋愛 内約

想いは傍に 想い人の距離によって効果が変わる。近いと攻撃力と防御力、遠いと移動速度が強化される。

……前ドラゴン倒したけどあれはノーカンですか？飛竜じゃ駄目なのか？

《龍限定です》

別に種族特攻だし、いらんか、……まあ、それは置いてくがこのスキルが厄介だ。問題点は二つある、一つは常時発動でノリスクの強化、彼の想い人は元の世界にいたのでスピードが振り切れている。もう一つが想い人の対象人数が一人と限定されてないと言うこと、近い方は限度が分かりやすい。

《検証の結果、三十メートルを堺に変化、距離？身体能力？想い人の数、なお、これは移動速度の例です。攻撃力と防御力の場合は三十メートルで2倍となり、一メートル圏内から大きく倍率に変化、最大80倍になります》

接触がある場合はそうなるのか、手を繋いだりとか、まあ、勝てることないけど、速度より力がある方が厄介だ。ちなみに人数は6人。「さて、そろそろ頃合いかな」

俺が使える四つの魔法を意識しながら結界の端から飛び降りる。最初は氷と火、彼らに当たらないように巨大な氷の柱を落とす。これで外側に白鷺を誘導して距離を離す。

次に火で彼女たちの周辺広範囲を火を絶やさず焼く。これで三十

メートル以内には近づけない。それと風で彼女たちを熱気から守るのは忘れない。

最後に土で俺の着地地点と誘導した白鷺を囲う様に壁を作る。もちろん燃やしてあるので駆け上がる事はできない。熱は換気してあるし、遠赤外線でこんがりつてことも無い。直接接触ったりしなければ、な、

「リーベラス国王陛下……って呼んだほうがいいか？」

「あなたは？」

「剣を携えた吟遊詩人、真実の語り部、ただの剣客、短い付き合いですのをご自由にどうぞ」

「……魔道士では無いのですか？」

「さあ、どうでしょうね。俺は説明をしに来ただけだ、剣を交えてな」  
隔離から刀と銃を取り出し、刀は鞘から抜き、銃はスライドを引いて安全装置を解除、

「ヒートエッジ、ウィンドアシスト、フレイムブースト、インパクトカウンタ」

適当に既製の魔法とオリジナルの魔法を掛けて自分に効果をつける。ウィンドアシストは動きの補助、ロイのよく使ってる風魔法を少し改造して初動を速める仕様にしてある。フレイムブーストはその加速、インパクトカウンタは一回限りの使い捨てで、体に触れた物に衝撃を与える。攻撃をくらったときの保険だ。

「準備はいいか？」

「何とか話し合いで解決できないものですか？」

「手遅れですね……殺す気は無いので、あしからず、……いつでもいいですよっ」

「では……行かせてもらいます！」

白鷺は真正面から来た。俺はそれを受け止め押し返す。次の瞬間に来た背後の攻撃を跳ね上げ、左手の銃を振り返らず後方に三発撃つ、当たったのは一発、次に左、右、上の順に斬りかかってきた剣を弾く、

「すごいですね、最後のは今の最高速度なんですけ……」

隙を見逃さず距離を詰めて一閃、腹部を掠める。追撃に残弾を撃ち尽くし、次の弾倉を入れる。命中ゼロ、

「あなたも速度を……」

牽制に一発発砲、正面から来た攻撃を受け流し、カウンター、左腿に有効確認、眉間に突き、左耳を掠める。距離を取るところに二発牽制、

「い、今の確実に殺す気だったでしょー!」

距離を詰めて銃口を眉間に押し当ててる。

「殺す気ならとつくにやってる」

……ふう、カウンターフルオートモード・ディフェンス反射迎撃静自動戦闘は余計な思考を廃し、脳を介さ

ぬ反射を使い、最速最善の防御を行う。間合いに入ってきた攻撃を迎撃するが何分全身から余分な力を抜き、あまり何も考えていない。目に見えない攻撃もいつの間にか迎撃していることもあるので、不可抗力や事故にも容赦が無い。常備この状態はよろしくない、一意専心というのがこのスタイルに最も合う言葉だろう。

銃口をずらして肩に接射する。殺傷力のある弾丸と言われると硬く重いスナイパーライフル用の弾なんかを想像するだろうが、あれは徹甲弾や対物ライフルアンチマテリアルライフルのようなヘルメットや防弾装備を貫く貫通力だ。なので正確に急所や重要器官を狙う腕が無ければ致命傷には繋がり難い、殺傷力が高い弾、それは柔らかい弾なのだ。ホローポイント弾、ソフトポイント弾のような先端が潰れた、または潰れる砕ける弾丸は貫通力や、射程が少ない代わりに衝撃を余す事なく伝えるし、特に治療や手術の際に違いが出る。傷口を大きく穿つ物やバラバラになり体中に散る物、貫通していない物は摘出しなければならぬ。先が丸いタイプの物でも骨などで体内で跳弾すればその軌道上にある臓器に少なくない損傷を与える。(前提として不幸中の幸いだが)急所を逸れて弾丸が身体を抜けるのは銃弾を受ける中では最も運がいいと言えるだろう。

「ゴム弾は別だけどな」

当たりどころが悪いと死ぬが、肩なら骨折と多少肉に食い込むぐらいだろうな、戦闘継続は難しいと思う。さて……

反射迎撃静自動戦闘は相手の攻撃に反応する防御向きのスタンスだ。真逆のスタンスに一合理退捨動先読戦闘《コールドリーディングノーガード・オフエンス》がある。

「まだ戦う気みたいだな……………はー！」

「ぶっ！」

右から来る。分かった瞬間に銃を上に向けて一撃、左後方上段からの振り下ろしを半歩下がりで腰を落として肘を叩き込む。そこから回り込んで背後への振り下ろしを真っ直ぐ正面が開いたと同時に拳を握り、剣を受けない様に一直線に顔面を殴り、その一撃を引つ張って殴り飛ばす。なかなか戦意が削げないので、追撃に目の下、涙袋にあたる位置に刃を入れ、落ちてきた銃で両手の甲、両腿をゴム弾で撃ち砕く。

カラン、

「ぐああああー！」

地面に剣が落ちた直後に叫び声を挙げる。ゴム弾はめっちゃ痛いと思う。が、涙袋の下は長期的に見ればほぼ詰みだ。特に汗をかくと染みて痛い上、まばたき一つするたびに意識を割かれる。ストレス等で技からは精細を無くしていくし、集中も出来ない。常識外れの速度で動き回る白鷺にとっては致命傷に等しい傷になる。

「人が全力で集中できる時間は十分程度、速度を上げて感覚を鋭くする上に、ストレスで体感時間も長く感じるだろうから……………」

銃を軽く投げ、迫る拳を躲して袖口を掴んで投げる。今までより遅い上に思考も纏まりにくくなった為か動きも直線的で読みやすい、正面から来た攻撃にフェイントを入れて真正面から迎撃する。

「勝利に妄執するな、目的をよく見ろ、気付いた時にお前の手の中の大事な物が無くなったり握り潰してたり、虚しく黄昏たいのか？そろそろやめと……………」

正面から発砲されたゴム弾を刀の腹を使って逸らす、銃が落ちてくるタイミングできたのはその為か、だが、

「使い方次第だぞ」

残り一発が発砲される前に距離を詰めて、焦って発砲したのを確

認、弾切れに戸惑った一瞬について思いつきり殴る。……………あつ、二本歯が折れた。

「お前が戦う理由はなんだ？俺には逃げてるようにしか見えない」  
「……………で…、あがつ……………ぐうー！」

……………この不穏な空気の流れ、魔力か、となると重力魔法、ただ、ここまで量は制御が怪しいな、歪みが生じている。仕方ないか暴走してブラックホールみたいになってるし、

「取り返しがつかないなら謝れ、辞する事は責任を取ることじゃない。国単位になれば……………尚更な！」

重力の塊から剥がすように蹴り込み、冒流で握り潰す。少し抵抗があったが更に力を込めて両手を合わせて潰した。あつちは……………指を数本を逝かれたか、魔力切れで青い顔をしてのびてる。魔力供給を断ち、周囲の火等の魔法を消す。

暫くするとテストラの兵士と作戦の為に作った汎用型、王無き兵団<sup>ポーンオンリー</sup>が走ってくる。十六体一組でチェスのコマ以外の形態を追加した物だ。なんでこんなもん作ったかって言うとかイザーの形態を見て、二体合体以外にも四体合体とかもつと細かく分けられないのか？と聞かれたのだ。あつちは大きな括りでは八十体一組だ。それを指揮権四つに分けて運用できることを含めて考えると、多様性に富んでいるとは言えそうになかった。カイザーに至っては一体欠けるだけで使えなくなるし、分隊してる時もだ。なので追加可能で更に多様性に富んだ物を作ったのだ。形態はモンスターを模した物が多いのと、指示ワードをチェスの駒をプロモーション、モンスターの方をダイグレイデイツドを頭に着けて形態を指示する。前の汎用型も対応出来るように改造してある。それと今回は白鷺を誘き寄せる際に犠牲が出ないように配置したのだ、壊れず残っているものは寄付する文言を着けて協力してもらった。周囲の火は温度はたいしたものじゃないが、内側からどれだけの範囲が燃えてるのか分かりはしない。その内に生物では無い王無き兵団<sup>ポーンオンリー</sup>を火の中に逃がせばタイマンに持ち込める。もし追い詰められても俺自身火の中に逃げるなり、火で体を覆うように燃やせば身は守れる。取り敢えず、拘束した白鷺を使って婚約者や



らも捕虜として、テストラの兵に引き渡す。

「さてと、お前は国をどうしたい？」

「……………」

「随分と暇な国人だな、お前は選ばなければならぬ……………この一分一秒の間にすり潰される命を俺なら数えられるぞ？」

「……………何が、言いたいのですか？」

手足を同じロープで縛られて海老反り状態で床に転がっている白鷺は白目を剥く限界まで上、こちらを見上げている。

「お前は国王でもあるが一番大きな戦力でもある。……………指揮も最大戦力も失った国土の兵がどこまで戦える？」

「この……………うっ！」

動こうとするも兵士に棒で抑えられる。

「ヒントをやろう……………為政者の仕事は選ぶ事だ。多を活かす為に少を殺す事も、国の行く末を見守る事も、そして、その血や灰を負う事もな、お前が取れる選択はなんだ？ どうしたいのかすぐに答えろ、己の手で守るのか、誰かに託すのか、この戦争に降伏するか、交戦するか、負けたなら条約を結ぶか、属国になるかとか、……………衝突まで10秒ある」

「そんな事急に……………」

「9……………8……………7……………」

「ま、待って……………」

「6……………5……………4……………3……………2」

「こ、降伏する！」

「……………何とか衝突は免れた、というか止めたが、……………ここで俺から提案があるんだけど」

そこから暫く誰かに押さえられた訳でもないのに白鷺は頭を地面に擦りつけたまま、一切動かなくなった。

「はぁーあ、っと、一仕事終わった。っん、あぁー……………、おお、これ返しとくな」

背伸びをした時にふと思いついた。ハルトに懐中時計、ロイに銀の首飾り、キリエに棒（縮小可）、ウイルに籠手と鉢巻き、キングに盾を

返した。魔法の道具はサイズ調整もあるので便利だ。ただ元のサイズより大きな人が着ると少し性能が下がるらしい。装飾品や武器はあまり関係ないが、防具は影響が大きい。

「元々先生に貰った物だし気にしなくてもいいよ」

「主より賜つ……………」

「はいはい」

「ウイルもこれが無ければ……………」

「武器くれよ、盾じゃなくてよー」

「それぞれ欲しい物とか無かったか？」

待つてもらおう間小遣い握らせて、テストラに居てもらったのだが、ハルトとキングは買い食い（ハルトは一部）、キリエは洋服を見たり、ロイは兵士の鍛錬の見学（無料）、ウイルは貧しそうな兄弟に貰った小遣いをあげた。

「また帰ったら特訓だけど、ちよつと忘れてた事があるからもうちよつと時間潰してくれるか？」

「えー、特訓まだかよ」

「はい、もう少し見ていたいで」

「構いません」

「御心のままに」

「俺昼寝したいから帰っていい？」

「……………分かった。じゃあ走り込みから始め……………」

「やっぱりもうちよつといようなー！」

露骨に焦った様に掌を返すキング。呆れた目を向ける四人、それとさっきの小遣いと同額をウイルに握らせる。

「今度は自分のことに使えよ？」

移植とは臓器を移し替えて終わりではない。どれだけ正常に移植してもその臓器が機能しなければ意味がない。技術の進歩によって減ってはいるが無くなってはいない。元々自分の臓器では無いのだし、時間の制約は冷凍技術に支えられる部分が大きい。腹腔鏡手術で出来る手術では無い、開腹すれば負担も時間も掛かる。様々な戦いを乗り越え、また変わらぬ日常を送れるのは正しく奇跡と言えるだろ

う。最も人体の神秘に比べれば、国の運営はまだ楽なものだろう。「どつから金を持つてくるか、説明をどうするか、罰は？………やつぱ面倒くさいわ」

金に關してだけではないが無から有は生まれぬ。あるだけで上手くやりくりするしかない。説明は多くの時間を要するはずだ。ルールを破ったものをどう効率的に罰するか。体制は？税は？前の基盤をどれだけうまく使えるか、それが新しい体制や政策を作る上で重要になってくる。………代行者の草案に目を通して、修正を加えて白鷺に渡したが、俺自身もリベラス国内で噂を流したりとか、サクラ（一番目のお試し）になったり、やれることはやった。指示は定期的に出すようにしているので舵取りを間違える事は恐らくはないだろう。………簡単に傀儡国家に収まったな、

「さてと………」

ゴム弾の入った弾倉を取り除き、硬い弾丸を詰める。当然弾丸に合わせてバレルは交換してあるので問題無く撃てる。

パン、パン、パパン！

石や地面、木に当たった弾丸が跳弾して、敵の急所に吸い込まれる。千里眼と未来視を併せて、代行者に跳弾が当たる着弾地点を可視化させ、その箇所を撃てば俺自身の目で直視してなくても敵に当たる。見晴らしが効く平地なら狙撃も有利なのだが、この辺り一帯山だ。なので山頂から森の外に出た敵はクロエの狙撃で仕留めてもらう。初撃はロザリーの災禍枢匣・666で一番逃げられると面倒なところを更地にしてもらい、それぞれこつちに誘き出してもらった。逃走経路の多さも去ることながら数も多い。

魔法と言うものはかくも偉大な物だが、土系魔法を使う英雄は街を囲い込むほどの壁を築く、では盗賊は？というのがこの地下の隠れ家だ。………しかし逃走経路がやたら多いし、待ち伏せをしようにも頭数が足りずに使えない。なので森の中で戦う組と逃げて来たのを倒すグループに分けている。で、俺は隠れてやり過ぎそうとする奴や近くの敵を適当に間引く。全滅させられそうならやるが、

「こういうの風潰しっていうだろうな」

そこら中を彷徨うフェイマリーステップを見ながら、次の敵を探  
す。

「斥候職の方は捕まりにくいですねー」

レアは山中に罫を仕掛けながら戦っていた。レアには魔法を使う  
ための魔石が仕込まれていない。もつとも生きた人形は成長出来る  
ので頑張れば習得できるのだが、レアの目は魔石では無く記憶水晶、  
魔法全般にあまり適正がないのが相まって勉強はしているものの全  
く使えるようにならなかった。しかし、レアは悲観してなかった。

「さて、つとー……ここからは、ノルンとアリスに任せますねー  
？」

「何をするんですの？」

「………何故わかんないの？馬鹿なの？」

「な！誰か馬鹿ですって！」

黙って指を指すノルン、左袖で口元を隠しているが、目を見る限り  
確実に馬鹿にしている。

「まあまあまあー、アリスさんが馬鹿かどうかはこの際置いといて、  
私が出準備を整えた作戦を実行して貰いたいのですー！」

否定はしないレア、そして誤魔化されるアリス、二人がアリスが馬  
鹿なのを改めて認識すると暫く謎の間をおいてちよつと面倒くさそ  
うに作戦の説明に入るレア、多分ノルンは何をするか知っているのだ  
ろうが、確認の意味もあつてかしつかり聞いていた。

逃げ惑う多くの足音がバタバタと響く。道と言えなくもない細い  
獣道を我先にと言わんばかりに走る彼らの跡には、皮肉にもしつかり  
道と言えるものができていた。

そんな絶賛舗装中の彼等の前に人の背中が見えた。

「お、おい！無事か？」

先陣を切る男が話しかける。しかし彼は背を向けたまま黙ってい  
る。

「先がどうなってるか知らないか？敵は？」

「お………おい！」

振り向かせる為に男は肩に手を置いたとき気付いた。服の上から

でもわかる程冷たく、固い。少し見えた肌も土気色をしていて、肌も心無しかザラザラしているような気がする。滑らかではないと言いか……まるで生きていない様な、そこまで気付いたその瞬間、いきなり肩に置いていた手にガバツと齧り付いた。慌てて引つ張ったが、薬指はぎりぎり繋がっているものの小指は口の中に、ゆっくりと咀嚼するように動く口元を呆けた様子で尻もちついたまま小指を食い千切られた事も忘れてその後ろ姿を見る。男に続いていた者達は後退る。この距離が男と彼等の明暗を分けた。

ゴクン、

飲み込んだ。それが分かった後に間をおいて何かが地面に落ちた。だが、彼等はそれに気付かない。何故ならその人物が振り返ろうとしていたからだ、

肌は生気を失ったように土気色、目は濁り、虚ろで何かを恨んでいるかのようにも見える。腹は縦に大きく切り開かれ、その暗闇の中心には薄っすらと白い背骨や肋骨が見えた。

「ひいいいー！」

誰からとも無く出た悲鳴に弾かれるように走り出す、

「助けてくれえー！」

悲痛な叫びが反響して、後ろと前からしている様な気がする。だがそれが大きな勘違いだ。

「頼むう………」

我先にと逃げていた彼等の耳元で一瞬だが誰かがあげたうめき声を耳にした、背中に氷を詰められたように動けなくなつた彼等は辛うじて動く首で声のする方を見た。もう殆ど木に飲み込まれた人の顔が泣いていた。これが彼らが見た最期の記憶だ。ヒュンという空を切ると同時にした下顎から上が吹き飛んだ。

「……………めでたしめでたしく、パチパチー」

パラパラ……

紙芝居を持つレア、その目の前にいるのは小指の無い男と体中に古傷のある大男とその周りを複数の顔が付いた人面樹がレアの方を除いて半円に囲んでいる。

「……………なんなんだ、何なんだお前らは！滅茶苦茶過ぎるだろう！」  
「もう、大きな声出さないでくださいー」

ヒュン、と風を切る音がすると男の左手の肘から下が消える。

「あ、あああーやめろーやめ……」

声がした方を見ると無くなった男の腕は一本の幹に絡め取られて、人面樹の顔の一つの口に押し込まれている最中だった。今にも吐きそうな呻き声あげ、顎の骨の弾けるような音を最後に腕は綺麗に口の中に収まった。

「……………化物が」

「化物じゃないですよー、寄植・合成百草樹の本来の力ですよー？」

神話に出てくる武器は文献によって形が違うものがあるのだが、ミストルテインはヤドリギ（槍とも）言われている。冒流を使って作られたこの植物は魔力で成長の方向性を示すことで様々な形になるのだが、ベースとなるヤドリギは血や養分、魔力、果ては電力等も吸収して成長する度を超えた魔改造が施されており、どんな物にも植え付けて操る事ができる。

ただ命令は口頭でしか出来ないのと、あまり複雑な指示はできないのが難点だ。さっきのも予め手を一本もぎ取ることを指示してあったからだ。ただもぎ取った後は指示していないので、吸収効率のいい人の身体から吸収する為に細かくする事なく口に押し込んだのだ。

「叫ぶともう一本行きますよー？」

「……………ッ！わかった、……………俺達はどうなる、こいつ等は生きてるのか？」

「……………待つてる間暇ですし、お話しても良いですよー、まあ、あんまりお勧めしませんけどねえー」

一つ咳払いをして牛乳瓶の底のような眼鏡をかける。

「ミストルテインは遺伝子弄った種が本体で、それを敵、地面なんかに撃ち込んだり、発芽させて刺したりして、エネルギーを吸収させて成長させます。ただ成長はエネルギーのある限りしか出来ないのので予め魔力を込めないと地面とかではあんまり成長しないんですよー、生物に刺した場合は対象のエネルギーを吸い尽くす事も、神

経をハックしてそのまま操る事もー、植物に取り込む事もー、対象の体を作り変えることもできますよー？例えばあれとかー」

さつき腕を収めた口から白い煙が上がり、ボコボコと湯の湧く様な音がする。

「さつきの顔はウツボカズラとかの遺伝子を使って改造してー、普通は胃袋で溶かせない骨もなんでも溶かせるよー？」

最も、改造と言うより強度を顧みない使い捨て改修に当たる。それを証明するように唇は小さくなりながら爛れて罅割れ、白目を剥いて小刻みに顔を震わせている。

「あともう一回は使えそうですねー……あ、そろそろ旦那様がいらしゃいますね、このあたりを掃除してくださいー……あー」

レアの背中にどこからともなく集まってきた赤い水滴が鎌と死神を作り上げる。そんな死神の頭上には The Bloody Death という血で作られた文字が漂っている。鎌が振られるとしばらく間があってから、レアの手の中に大男の首が落ち、それを確認する様に残された体から勢い良く血を噴き出す。

「あとそれは首から下はもう要らないので好きにしてくださいよー？」

「……………で、レア、お前は何をしてるんだ？」

「あのあの……………お、降ろしてくださいー」

蔦に絡まり逆さ吊りにされているレア、レアはメイド服を二種類持っている。外向きにはオーソドックスな飾り気の無い紺色の物を着るが、動き回ったり、私的な予定や俺の所に来る時等は、丈の短い物を着ている（今はこれ）。……………作業中だとツナギ、白衣、エプロン等が混沌とした組み合わせの着こなしとなるが、

「覗いても……………いいですよー」

内股でモジモジしながら頬を紅くして視線を彷徨わせる。

カチン

「……………あだっ！」

……………さつきと蔦を斬る。頭から落ちたレアが悲鳴をあげると、頭

頂部を押さえながら不機嫌そうな、避難するような視線をこちらに向けている。

「……………悪かったよ、でどうだった？」

「物証は無かったですねー」

「……………それだけか、やっぱり」

レアの足元の生首を一瞥して隔離に仕舞う。

「……………逃げた奴をクロシエツトとノルンにやってもらおうか、帰るぞ」



## 星々（希望）の輝きは

小鳥の囀り、爆発音、飛び立つ羽音……、俺が頭を抱えるまでのルーティンとなっている。だいたい一秒前後で目元を抑える。そこから千里眼。……あー、うん、キングだな、あいつは一つ生まれ持ちのパーソナルスキルというのがある。決して戦闘向きじゃないが、条件がかなり限定されている分強力だ。

「……………自分の望み通りのパンを作る能力」

自分で作ったパンを望み通りの物にできると言うものだ。みみでもケーキの生地ほど柔らかくすることもできるし、食う事を考慮しなければ剣さえ防げるカツチカチのパンも焼ける。なので与えた盾は焼き窯兼戦盾なのである。他にもいろいろ兼用されてるのだが、

話を戻すとパンの製作工程にもスキル適応範囲が及んでいるので、パン生地の発酵はやり過ぎるともはや爆弾と化す、今回のパン型は見事に展開されているので測れば表面積が求められるだろう。

《12×25×12のりっ……………》

いいから、もともなくて、……………肝心のパンは空気中をふわふわと漂っている。俺が作った盾、窯オープンフロートの要塞は暫くすると落ちてきた。展開状態ならキングを中に入れて守る事も出来る。まあ、今回は家に備付けられてる窯を使ったので防御できたのだろうが、これで焼いてる時に事故ったらどうするつもりなのか、

ガンツ！

中からくたびれたキングが出てきた。守れるというだけで中には緩衝材も何も無い。

「外でやれって前も注意したろ、危ないし」

「うっ……………」

オロロロ……………」

※しばらくお待ちください。

「……………落ち着いたか」

水を渡すとそれを飲み干す。ちよつと前は飲んでくれなかったけど、その頃から見たら信用はしてもらえてるんだろうな、たぶん、

「……………こんなスキル役に立つのかよ」

「出なきや作らんど、こんな装備、まあ、パン本体は水魔法に弱いんだよなー、どうしても」

濡れると重くなるのは当然の事としてよく水を吸う。耳や表面に当たる箇所は吸いにくい方だが、パンの領域を越える硬さの物ほど凍らせられると一番脆い。水分が少なくなることが原因だろう。油で揚げてラスクとかにする感じと同じか、

「えあばっぐ？……………だっけ、あれと同じ容量で防御する奴、試した時キリエに水かけられて死ぬかと思っただぞ」

タイミング良く膨張させて防ぐあれな、生地を柔らかくするとさらに水を吸う。通販の吸水スポンジ並だ。意外と他の属性魔法は防げるのが不思議、多少手を施す必要のある物もあるが、

「水と能力の制御に注意だな、上手く使えよ？」

「お、丁度揃ってるな」

ウイルにキリエにハルトにロイ、この四人が揃ってる時は連携確認と模擬戦だ。この前四人同時に相手したら結構余裕がなくて焦った。特訓で全力はまだ出すほどでは無いにしても、もう二段ギアを上げていったほうがいいのかもしれないな、他の子のグループは全体的に上がってるがこのメンバーよりはゆっくりだ、

「先生！また特訓してくれよ」

「今日は特訓なしだろ？冒険者の仕事受けるにしても正装って程でなくても見綺麗な方がいいだろう？他と違う特徴とかは覚えが良くなくなるしな、……………悪い事はするなよ、」

「誓います」

「はあ……………、そうならない様に面倒見ますね」

「大変ですね」

「はいはい、そろそろ渡すよ、これハルトな」

黒いスーツは動き易さ重視して軽く薄い。伸縮性がネックだったが、サイズ調整の式の応用で動きを阻害しない物になった。七分丈になってるのは袖をよく汚すので腕まくり等が必要ないようにする為だ。後は帽子、手袋二種類、アクセサリーチェーン、革靴、それと

これは全員共通で渡す。空間魔法の刺繍入りの袋、

「次はウイル」

「はいー」

なんやかんやあったが、はいの一言に落ち着いて良かった。うん、ホント、服は聖職者風道着（デザインは結構練った）にしてみた。鉢巻はアレなので額あてと、十字架のネックレスとバンテージ、ナツクル、メリケンサック、カンフーシューズ

「キリエとロイは用意した中から服を選んでくれ」

「わかりました」

「ありがとうございます」

「多めに持つとけ、必要になるだろうからな」

キリエは女の子だし、ロイは様々な環境に併せて服装を変えていく必要がある。それぞれのスタイルにあったものが要求される。まず身代わりの護符、拘束器具切断用のキーホルダー風カッターとオリハルコン製の糸鋸……まあ、その他諸々のアイテムや道具とキリエには水魔法威力向上の腕輪、ロイには魔法全般向上のイヤリング（耳に穴開けなくていい奴）を渡す。

「ギルドとかで困った事があったら俺の名前を出してくれ、何も無いに越した事はないが……」

ギルドは国や街の枠組みに囚われない中立機関である。だが法的にはいろいろと複雑に絡み合っていて完璧な中立と言えるかどうかはそのギルドによる。エドガーの所は密接な協力関係を築いて、持ちつ持たれつのいい関係だと思うが、場所によっては土地の貴族との対立があったり、ズツブズブに癒着してて膿が溜まっていたり、様々だ。

土地は領主や貴族が提供し、職員はギルドの本部から（現地採用もする）、……この当たりで分かると思うが、揉めるのは上物、国によつて費用を負担してくれる所もある様だが、その金を着服する者や、金はギルド側で負担しろだの言う者、土地に関しては持ち主側で決めるので多額の税を請求したり、土地が滅茶苦茶狭かったりなんて事もあったみたいだ。ただギルドの方も派遣している職員に権限が与えられているので、運営出来ないと判断された場所は撤退する。た

だ街の人達や冒険者には必要だと声はあがるのでいろいろと法整備をしたそうだが、それでもすべての問題が解決する訳ではない。

「特に冒険者がな」

まあ、頭を使うのは無理だが、体だけは丈夫なんてのが大金を手にする為に甘い考えで入って行ってはその過酷さに腐る、結果ギルドの受付付近がどこの世紀末だといった感じになる所もある。その目にある感情は大きく括れば嫉妬や強欲、怠惰だ。要するに難しいルールを作っても理解できない守れないでは意味が無い。なので大まかなルールしかない。

「殺人、窃盗の様な犯罪は言うに及ばずアウト、ギルド内での喧嘩、器物損壊は罰金または一時資格停止、もしくは両方、依頼を達成できない場合は違約金、で怪我等は自己責任、とまあ大雑把にはこんなだったか?」

「?.....だ、だいたい分かった」

「怪我したら回復薬使えよ? 収納袋に入れてあるからな」

「そうなんですか?」

「ああ、無くなったり欲しかったら言ってくれ」

「普通の薬草でもくあれば出来ますよー」

レアが作った奴だし、今の所使うような怪我はしてないしな、効果は確認しとかないとな、

「じゃあ、あっちでいい依頼がないか見てくる。お前らも出来そうな依頼を取れよ珍しい魔物を討伐する場合は探すのも仕事だからな、もし無理なら相談しろ、魔物自体が存在するなら俺のスキルで探せる」  
「お父様、僕はノルンお姉様とその辺りを見て回ってくるよ、膝に乗ってもらえば何の遜色もなく動けます」

「.....嫌です」

「.....二人で仲良く使えよ。金はノルンに預ける。お姉ちゃんとして妹の面倒を見るのは大事だぞ」

「.....承ります」

複雑そうな表情をしていたが納得したようなので肩車していたノルンをロザリーの膝の上に降ろす。.....まあ、見て廻って面白い物

はあんまり無いと思うが、

「あのあのく、良かったんですかー?」

「大丈夫だ。問題ありそうなのはいるが、一人でも対処できる」

「あつちはどうでしょう?」

視線をレアが示した方に向けるとハルト達がなんか絡まれてる。

……Cの依頼か、まあクリア出来るだろうが、ランク一番下の子供が持っていていけば、いろいろ言われるわな、つと、……さて、チキンも掛かったことだし、締めるか、殴り掛かる動作を確認して間に入る。今回はわざと受けとく、

「あれ?あんたが保護者?」

思ったより痛くない。これで効果が確認できるのか疑問だったが、レアの作った回復薬を飲む。違和感は全くないな、

「無視?おいおい子供がこれならお……」

また殴り掛かる動作に入ったのでカウロウで顔面を潰す。そして回復薬。……すごい効き目と即効性だな、

「先生……揉め事はいけないのでは?」

……そんな顔するなよ、ルールとは破るものでも遵守するものでも無い。掻い潜り、利用し、守らせるものだ。腰のベルトを掴んでギルドの外にブン投げる。

ビシヤ!

「……何やってんだ」

「いえーい、回復薬の実験をー」

……敷地出てると言えど、玄関口でスプラッターはなあ、視界の端から俺が投げたものに喰らいついた赤い塊は、さながらfrisビーを追いかける犬のようでもあった。……絶え間なく何かが折れ軋む音が聞こえるけど大丈夫なんだろうか?大丈夫だよな?

「多少の粉砕骨折程度や、壊死にー、機能不全まで治りますよー、何だったら六分の五殺しにする前より健康体になりますよ?」

……それは多少の範囲に入るのか?粉砕骨折とか、機能不全とか、……あと六分の五殺しってなんだ、半分超えて殆ど死んでないか?

「六分の五を超えるとき、後遺症が残る可能性があるのです」  
「……………そろそろ止めにしますねー」

……………何その間、

冒険者ギルド入り口前の20歳未満お断りの赤に回復薬 をかける。ブリンブリンとあつちこつちに関節が回り、人の形に戻っている。なお、子供達や近隣住民の方々には見えないように万能結界モザイク仕様で覆ってる。

「ルールには無くても、迷惑行為は駄目だからな」

「あつらく、もしかしてノースガーデン君じゃないのー」

ピンクの化け物の知り合いが来てしまった。後ろを振り返るとゴリツゴリのオネエ、右手はゴツイ機械の義手が付いており、右耳も少し焼け爛れていた。手の方はそのままだが、耳の方はアナスタシアが治したそうだ。なんでも顔半分近くにも及んでいたそうで前は鉄仮面をしていたらしい（俺はその姿を見てない）。

「サイボーグオネエ、か……………」

そんな時いいアイディアが浮かんだ。この状況を手っ取り早くなんとかする方法が、

「……………忙しい時に悪いんだが、彼を介抱してあげてくれないか？」

「別に忙しくなんてないし、あなた達からの頼み事は最優先でして・

あ・げ・る・わよ☆」

「……………ああ」

ズルズルと引きずられて行く姿を見送る。……………サイボーグオネエとは体格の変化に合わせて身体能力が変化するスキルを持っている。S(ランクと性格)の冒険者で気に入った人の肉体も改造する。……………改造前の体よりキレが良くなるからタチが悪い。後処理はした、うん、ギルドにどうこう言われても仲間に任せただ通す。

「おしやああ！倒した！」

「危なげなく倒したな、いつも通りに出来てたけど、もう少し周りに気を付けような」

「先生！」「うお！」「しゅ、主よ！い、いつから……………」

「最初からな、ほらくんくらいなら収納袋に入るし持って帰って解体

してもらえ」

まあ、初めくらいは直接見といった方がいいだろう。この辺りは隠密に長けた強い魔物はいないが、弱い魔物は遠くから見ただしな、この手の魔物を狩るとなると索敵能力や追跡等が必要になる。別に強い魔物以外でも薬の素材になる草食魔物や固定の住処を持たない珍獣とか確実に仕留められる時まで粘る為にも必要になってくる。……まあそこら辺は自分の能力と要相談だな、

「先生、少し先に美味しいウサ……………」

「俺がとつてきてやるよ」

ハルトが立候補した。方法によっては捕まえられると思うけど結構賭けになると思う。ロイなら半々か、

「あ、ああ……………どうする?」

「足で追い掛け回して捕まえられるなら先生に相談しません」

「なんだと!」

「静かにしてハルト」

「はい……………」

「ハハハ!ハルトはもう少し落ち……………」

「うるさい、兄」

「はい……………」

省略されたよ、ウィル、……………まあ、キリエはウサギ好きだからな、食べるのが、手袋を嵌めてさっさと草むらの方に行く。少しずつ距離を詰めて……………ここから匍匐に切り替え、蜥蜴のように距離を詰める。200メートル地点から25メートル、ここからは猫の様に姿勢を高く、ゆつくりしなやかに10メートル地点を目標に移動、後はタイミング……………一気に距離を詰めてラグビーボールのように抱えて抑え込む。

「う、……………よつと」

改めて観察すると、可食部があるのか少し不安になる大きさのウサギ、正直愛玩用と言われたほうが納得できるんだが、代行者曰く、こいつ以上に美味しいウサギは無いとの事、あいつ味覚あんの?と思ったけど、真理で辺りの魔物を虱つぶしに見たようだ。

《シユートスターと呼ばれており、小柄な見た目に反してその体当たりはオーガの腕さえ千切れ飛びます》

怖！先言えよ！こちとら素手だぞ！

《最大速度で接触した場合ですので、加速前なら問題ありません。習性として臆病なウサギが向かってくる心配はありません。》

※このウサギは揚げ物以外なら何でも美味しくいただけるそうです。……………私は遠慮します。

適当に縛ってキリエに渡しておいた。背負っている姿はナツプサックやリユクのように見えるが、活きてる。たまにあげるせつない鳴き声を聞くと脳裏でドナドナが流れる。

「解体はギルドでやるんですか？」

「見学とか出来ねえかな？魔物の急所とか勉強できるだろう」

「そうね」

「キユ！」

はは……………、俺は遠慮しとく、十分見てるし、こういう面倒なのはプロに任せる。時間無いし、

「毛皮は先生に返しますね」

「……………要らない。売るなり装備に使うなり好きにすればいいから」

「なあなあ、俺、戦技習いたい！」

「それは……………先生の許可なく誰かの」

戦技、ねー、利点もあるけど……………

「あ……………別にいい、俺は戦技使う気ないし、判断は任せる」

「私は習いたいのでー、行ってきても良いですか？」

レアには利点大きい。戦技というのは反復練習した動きを技名をトリガーにして発動させる物だ。威力や速さは桁違いに高いが強引に剣に引つ張られる形になると言うか……………初歩にスラッシュという技があるのだが、これは反復した動きのまましか使えない。例えば横に一閃を連続させていたなら横に一閃、袈裟斬りなら袈裟斬りといった感じに固定される。ならいろいろな動きをやればいかと言えばそれをやると戦技として習得できない。見切られると直後に大きな隙が生まれるし、自分のスラッシュを知られていれば対人戦で



は致命的な弱点になりかねない。まあ、戦技は使い込むと速度も威力もどんどん上がるので力押しで倒せる相手なら問題無いが、基本は身体的能力に応じたものになる。

「戦技はリミッターを振り切った攻撃、身体にも負荷がかかるし、外部干渉がキツイ」

魔法なんてものがある世界だ。当然戦技もこの世界のシステムの一部だ。戦技を使うと魔力が減るし、剣を速く動かしたいというイメージでも速くなるが、『剣を速く』∥『腕を速く』では無い。戦技は剣にシステムが干渉する。最悪途中で手を離してもその軌道の通り動く。なら腕を速くにすればいいと思うだろうが、それは出来ない、ロイの風魔法による補助や俺の魔力強化が限界だ。まあ、それ故の戦技とも言える。対魔物という意味では心強いものだが、

「まあ、技つてのは難しい物ほど合理的で鮮やかだが、技だけに寄りかかると、それで倒せない敵に会った時、どうしていいか分からなくなる、基本は何より大事、って事だな」

「より精進したいと思います！」

《職業を成長させる事でワードの省略が可能になり、最上位に至ることで戦技を編み出す事ができるようになります》

……………そっか、そういう事が、若干そんな気がしてた。銃の動作に技名をつけた後によく使う正面から介錯（首の皮一枚残す）に名前をつけた所その名前が戦技になった。

「落椿……………」

椿の散る様を首の落ち方に重ねたのだが、返り血を浴びなくて済むのが最大の特徴。

「先生！」

……………キリエが走ってきた。生肉を持って、

「耳や毛は装飾品の材料になるそうです。これは買取金とお肉です」

……………ですよねえー、よくこういう状態の鶏肉見るけど、……………さっきまでアレだったと思うとね。うん、

「金は4等分して分ければいいよ。……………肉はアナスタシアに渡しといてくれ、ノルン」

今日はもう帰……チツ、ロイが絡まれてるし、まあ大丈夫だろうけど危なかったら間に入ればいいし、ハルトは強力な一つのスキルを発現したが、ロイは複数のスキルを得た。ロイがひいたカードは『魔術師』『皇帝』『隠者』『吊るされた男』

名前 ロイ

種族 ハイエルフ

パーソナルスキル 破天荒魔術師 皇帝の威光 賢者の処世術

スキル 旋風魔法7 植物魔法3 魔力自動回復4 体術5 格

闘術9 剣術4 解体2 医術2 隠密2 俊敏3

称号 勇者 植物博士 森の修練者

職業 魔法騎士 拳闘士 森の守護者 勇者

魔術師I 皇帝IV 隠者IX 吊るされた男XII

破天荒魔術師 内約

攻撃等の魔法の妨害を無効化し、並列して複数の属性魔法を同時に行使できる。

皇帝の威光 内約

指揮下においた者を強化する。

賢者の処世術 内約

無属性の魔力で紐状の物が作りだせる。

森の修練者 森での活動に補正と成長率を上昇させる。

賢者の処世術、これが結構ミソなんだよなあ、冒流を使えば魔力で糸自体は作れるが、長さは10メートルが限度、しかし俺を中心に半径二メートルより外に出す事は出来ない。多分この距離が冒流の権能が及ぶ限界の距離なのだろう。正直形の維持に力をかけるなら球状にして投げた方がまだ保つ。でロイが作った糸はロイを中心に半径50メートル伸びる。球状にして投げるのはもちろん、自由に動かせる。ただ強度や動かし際のイメージがしつかりしてないと切れる。それと魔力の量が少なくても切れる。多く込めると太くなり視認はしやすくなるが、そもそも魔力を見える者があんまりない。

「はっー」

「ぐえ」

丁重にギルドの外に放り出された。隔離を使つてサイボーグオ  
ネエの所に飛ばす。とりあえずギルドの職員に介抱はサイボーグオ  
ネエに頼んだと伝えて、もち米、クコの実、ニンニク、高麗人参を芦  
原さん所で受け取り、ウサギ肉の横に置いといた。

## 唄う悪魔（デーモン）

パキッ！

痛っ！……………肘が、ああ、……………長い事同じ姿勢でいたからな、

「旦那様、アリアっす！」

扉越しに僅かにあつ、という声が聞こえてからノック音が響く。よくあるんだよな、なんて微笑ましく思っていたが、扉の奥から白塗りの悪魔が出てきた。

「……………お、おい、何だその格好は？」

「じ、自分気合入れてきたっす！」

誰がそんな方に気合入れろと……………

「うん、もうちよつと女の子っぽい感じにしてきて」

可愛らしい感じで作ったこつちとしては複雑だったりするんですよ。その白塗りは、

「わかりました！」

パタパタと走る去る悪魔、シニールだ。

ー5分後

「どうっすか?!」

……………どう、って言われてもねえ、高度な技術が要求される事から犯人は奴<sup>レダ</sup>、……………足元から見ている。フリル付きの白の靴下、ピンクと白のアイドル衣装に白の手袋、そしてそのまま悪魔メイク、「メイクやり直してこい！」

ビクツとするアリア、ドアの隙間からウサミミが生えてきた。

「クライアアントの意向で……………グフツ、メイクは残した、……………いつもの事で〜」

笑つとるやない。

「もうちよつとこう、大人っぽさ……………エレガントさも足してくれないか、次」

「わかりました〜、……………ククツ」

ー1分後

「お待たせしたっす！」

眉間に血管が浮き出てきた気がするが、取り敢えず足元から見ている。黒い光沢のブーツ、背中の開いたキラキラのドレスとそれに合わせた手袋、そして白を貴重に紅の隈取……

「おいしいiiiiii！隈取?!俺エレガントとは言ったよ、メイク以外はちゃんと出来てたよ！最後なんでエドモンド!?○○○○（↑英語で街）ファイター知らない奴ポカーンだよ！よく一分でこれだけ変えてきたな！」

「頑張りました〜」

「メイクを落とせ、ナチュラルまで許可する」

「はいー」

ー10分後

……意外とかかったな（大方洗顔）、エナメル靴に白の靴下、青のワンピース……よし、オチは無いな、あとリボン。まあ、この格好なら問題は起きないだろう。アナスタシア、ノルン、レアを加えて藤白の所へ行く。ちよつと前に契約魔法で酷使されてた人達の治療やケアをする為だ。

「最近、お兄ちゃんと一緒じゃないときが多いにや！連れてくにや！」  
……との事でクロシエツトも引っ付いてきた。あとウイル達には合同の課題を与えた。ペイントナイフ（木製塗料付き）で模擬戦をしてもらったが出かける前には既にハルトとウイルは塗料だらけになってた。……当然と言えば当然だが、ナイフの様にリーチの短い武器は考え方や心理戦、技術、工夫に発想、リーチの差を埋めるに足るだけの物があるが、それらが有る程度あれば長物より強い。

……まあ、長物はリーチや重量があるのでスピードで負けたり、通路の様に狭い場所では十全に振りまかせなかったり、襲撃する人間は人目を避けるし、そうなるも必然的に、ね、

まあ、自衛が出来れば問題無いけど、もしもの為だ。

「芦原さん、最近どう？」

「ああ？……ああ、あんたか」

酒瓶だらけだな、と思ったらギルドにたむろしてる酒飲み（冒険者とも言う）が呑みまくってた。……何人かケア予定の人が混じって

るが、元気だしいいか、

「いろいろ情報は集まるようになったんやけど、……まあこの通りや、こつちにおる奴らは今は元気にしとるけど、あっちの部屋はいつつも葬式みたいな辛気臭い空気しとるからなあ、部屋におるだけでも気が滅入ってくるわ」

「北川さーあん！」

「昼間から酒臭いぞ、代表」

一教（合気道固め技）から背中に座る。

「それと、……無駄に筋肉付け過ぎだ。絞れ」

「きだえろっていったのはギタガワさんじゃ……」

「洗練を怠れと言った？」

「こつちまでつけると固め技とか食らうと痛いから分かんと思うが、しなやかさが欠片もない。ただゴツいだけ、多少の攻撃からはダメーじを軽減できても、敏捷も柔軟性も失われてしまう。腕を回せばわかる。」

「いでででー！」

もう少し行くと2、3本繊維が切れるな、このギリギリが暫く痛いし、反省にはちようどいいだろう。……そろそろ戦闘センスを磨いたほうがいいのではないだろうか？

「そつちはどうやった、最近この辺りには来とらんようやったけど？」

「まあ、こちらにも在庫をたっぷり持ってましたし、補充もお願いします」

「おう！任しとけや」

「藤白、投げるから受け身とれ」

邪魔になる物を退かして隔離内で組んでおいたセットを出す。

「補充なんですけど、このメモを……どうかしましたか？」

「いや、あれ投げるか？」

「一定の重さからはコツですよ？もちろんそれに合わせた筋力はいりますけど」

体格がデカくなった所で藤白だ。予想より簡単に投げられたしな、  
「お、おう……ああ！それとな、店の件な、他の街でもできへんか

ちゆう、要望が山程きとる」

「エドガーに聞いてくれ、綿密な擦り合わせもいるだろうからな」

真実とは、嘘ではない。故に残酷であり、凄惨だ。中身に詰め込まれるものは様々で合理性や悪意、時に狂気と温もりが混在し、思わず目を逸らしたくなる悲劇や定められた必然ように手練り寄せられた奇跡、探し求めた真実に憤る者や無気力に黄昏る者、笑顔で迎えらるる物は多く無いのではないだろうか？

何が悪い？世界？国家？それとも顔も名もしれない誰か？結局、人間が悪いのだ。惨状に繋がった過去と許し諦めた今と平和や中立を謳いながら差し伸べる手と裏腹に相手を殴る為に拳を握る者、権利を傍若無人に振りかざし、責任は投げ出す者、性善説では人は元々善であると言われている。俺にとって善悪の違いなんぞ無価値な物だ、勿論人の本質を善だとも悪だとも思っていない。俺は人の本質は愚かである事だと思っている。

「……………なればこそ、どんな愚か者ありたいか」

「にや？なにか言ったにや？お兄ちゃん」

「何でもない」

殆どの人を隔離に入れて、家に帰る。同時に食品やらも回収したが、まあ、整理は代行者がやる。俺の目も隔離内には届かない。窓を開いて覗けば別だが、わざわざそんなことをする理由がないしな、

「さてと……………これは？」

土下座する三名、ウィルとタージャにエレク人形作りチームの三名だ。話は一応聴いところ。知ってるけど、

「私達で作った人形です」

見た目は良くできてるが、内部の刻印にミス二点、効率は俺も代行者ありきなので採点から省く、始めて作ったものとしては非常に良く出来ている。

「始めて作ったものとしては上出来だと思うけど、……………炉の事だろう」

「「すいませんでした！」」

「申し訳ありません！」

「…………それより火傷を治療してこい、灼はすぐ直すし、今後は俺が見てる時にやること、わかった?」

「「はい……………」」

他の方法を先にいろいろ教えといたのが不味かったか、灼を隔離から出したレンガでさっさと直し、様子を見に行く。

「マスター、終わった、褒める」

…………廊下で頭を差し出してくるアナスタシアを撫でながら部屋に入る。まあ、お説教はここからなんだけど、

「なあ、お前らずっと前から炎熱耐性上げてるよな?」

ビクツ、として目を逸らす。…………分かりやす過ぎる。

「タージャはさっきので炎熱無効を習得、ウィルとエレクはまだ耐性、だな」

耐性を鍛えるのはスキルと訳が違う。身体に負った外傷、スキルは魂に付くものである為、反映されづらく無効まで上げるとなるとどこかしらに障害などが出る程のものになる。俺は冒険を持ってる都合、上げやすいんだが、普通は体にダメージを加える必要がある。それに耐性が上がれば上がる程、耐性が作用してより上げづらい。ただ身体側、種族によつて取得しやすい耐性と習得しづらい耐性がある。サラマンダーの様に火との結び付きの強い種族は火魔法の適性も高いが、同時に炎熱耐性も上がりやすい。逆に低温耐性は習得しづらい。人の場合は適正魔法はバラバラだが、耐性は全般的に上がりやすい。上がりにくい耐性が無いだけでも言うが、

…………話が逸れたが、普通にやったら身体がボロボロになるから出来ない。例え魔物からの攻撃や炉の熱を無効化出来ても、満身に戦えない動けないでは本末転倒、逆に言えばその状態でも生きてれば元通りに出来る回復手段があれば問題ない訳で…………

「命は一つだ。あんまり無茶するなよ。…………あとレアとアナスタシアは暫く謹慎」

「?」

「…………居ないよー、だから聴いてないよー」

小首を傾げるアナスタシア、ドアの影で耳を押さえるレア、そして



催淫、

「反省してなさい。用事以外では連れて行かないからね。あと三人も、人形作り禁止、耐性上げも、課題は刻印にミスが二点ある。それを自力で探して直す。それが出来るまでは禁止は解きません、わかっただ？」

「はいー」

すぐ見つけそうだけど、刻印に求められるのは正確さと均一さ、形や位置は勿論の事、刻む深さも誤差範囲に抑えないと、浅い箇所には魔力不足に、深い箇所は魔力が多くなり、周りに必要な魔力が欠乏したり、魔力が刻印を壊したりで慣れるまで大変だった。代行者のチエックがあるから幾らか楽ではあったが、

「さ………つてと、今度はテストラに行くか」

テストラ帝国、この国ではオートマタの様な異世界特有の物が作られている傍らで様々な近代兵器も作られている。なのでこの国では銃や家電等は人々の概念に深く浸透している。当然銃弾も、

「こつちがクロエの分、………これがノルンの分、んでこつちがレアから頼まれた分、つと」

クロエの12.7(本当は13mm)、ノルンのマグナム弾、それとレアからホローポイント弾と徹甲弾、ゴム弾、麻酔弾一式、ノルンは備蓄、クロエは魔力切れした時の為の予備弾薬、レアは最適な銃を作るための研究用、俺も研究する予定だが、

まあ、あいつが作る銃はアサルトライフルかハンドガンの類いになるだろうな、アンダーバレルやナイフみたいにカスタムが出来る武器を作るだろうな。

「………全部で金貨六枚と銀貨七枚、銅貨六枚だ」

「釣り貰える？」

「ああ………そういや今日は連れが見えねえな」

銀貨を一枚多めに渡し、銅貨を四枚受け取る。

「あー………今日はこつちに興味の無い子ばかりだったからな」

「メイド服の子たちは仲が良さそうだが、その繋がりが」

「まあ、術式弾をあいつが作ってるからな、細かいオーダーを出してる

うちに仲良くもなるだろう」

「まあ、そんなもんか……注意しな、この店にはいろんなやつが来るからな、鼻真にしてくれるのは有り難いが、店に来る時誰か足りねえだの……そう言うのは困るぜ」

「ふ、心配しなくていいさ、一応Sの冒険者だ。……それでも手を出してくるならこっちのやり方でやらせてもらうよ」

「ははーそりゃ怖えーなーだいたい失敗する奴はSだから手を出してくる奴はいねえとタカをくくる。心配するだけ無駄か？」

「ハッ、この帝国でホローポイント弾を扱ってるのはこの店だけだろ」  
「おう、品揃えには自信があるからな」

なんて言いながら店の奥に繋がる暖簾を捲る。普通の人には真つ暗闇にしか見えないだろうが、ランチャーやライフルなんかはずらりと並んでいる。しかも術式弾にも対応したものまである。……何故かあまり普及してないんだよね、

「また来るよ」

「おう、また来い」

芦原さんと同じような厳つい見た目だが、こちらの事も気にかけてくれる信用の置ける人物だ。品質がいいのもここを選んだ理由の一つだ。店を出ると少し先でコートを脱ぎ、隔離の窓に放り、ズボンのポケットからループタイを取り、反対の手をカーデイガンの袖に通し、歩きながら整えていく。

「待ちやがれえー今日こそしよ……」

ズボッ

最近、土魔法の練習機会には事欠かないな、

「見つけたぞー……ここであつ……」

ズボッ

この街ではしつこく付きまとわれている。一人なら幾許か楽なのだが、結構人数が多いので精度を上げるのには一役買っている。

「あっちだーまっ……」

ズボッ

何をしているかって？土魔法の練習ですよ？

「ああ…………、またあんたかい、ウチの息子も悪いのは承知してるけど、埋めるのは止めてくれないかね。ご近所さんの迷惑にもなるし、何より掘り起こすのも一苦勞なんだよ」

「はあ…………と言われましてもね、埋めないと着いてくるんですよ」

初めの頃は凍らせた。凍傷にならない様に手枷や服と壁、靴と地面なんかを合わせて凍らせた。が靴とか服とか脱いで追っかけてきた。で現在の垂直沼化の落とし穴、浅いと出てくるが深いと死ぬ。沼化するのは一瞬なのでその後はほぼ普通の土、肩まで入れれば誰かの手を借りる必要がある。風は防音ぐらいにしかならんし、火は街中で使うものじゃない。この辺りは舗装とかしてないから簡単にできる。

「俺は諦めんからな！お、おい待てー！」

「ごつちかーい……………」

ズボッ

「ちよつと、ウチの家の前に埋めないでよ」

「あ、すいません。つい…………でも言っといってくださいね？あの娘たちを譲る気は無いと、では、私はこれで」

護衛依頼の準備は出来たちよつと物が物だし、良くない事も起きるので受けた依頼なのだが、

## 墜ちた太陽（象徴）

圧縮された空気が抜ける音と金属同士が噛み合う音、それを掻き消すように人々の喧騒が聞こえる。

「魔導機関車、名前通りの見た目だな」

……………その割にペンタグラムと電線が付いてるのだが、煙突もある。

《魔法で動力を得ていますが、ロスが大きく、電線と思われる箇所から魔力を供給し、煙突から熱を放出します。こちらの住人が見よう見真似で作ったものです》

ノウハウも無いのによく動く物まで完成させたな。魔力は相当使うみたいで、煙突を避けて両サイドに電線（供給しているのは魔力）が通ってる。

「ご主人殿〜！荷物積みました！」

「ありがとう、つとアリア武器はちゃんと使えそうか？」

「はいっす！……………弓と琴はまだ自信ないっすけど」

返事は良かったんだけど、尻すぼみに小さくなったな、後半、

「銃なら私が教えられますが、すみませんマスター」

「いや、クロエが謝る事じゃないだろう……………」

「ご主人様、ご主人様」

「ん？」

「昔こういうポーズが流行ってたらしいんですけど、知ってます？」

……………うん、知ってる。世代じゃないけど、だっちゅーの

「おい！誰だ教えた奴！」

と思ったら、NGOから連れてきた通訳係と付近数名が鼻血出して倒れてた、漫画か！

「……………お前らか」

「わが生涯に……………」

「一片の……………」

「……………雛ポーズ」

「意味わからんわ」

中年三人借りてきたのは失敗だったかもな、まあ、書類や引き継ぎは出来てるし、問題ないか、隔離を介してお帰り頂いた。用があれば呼ぶのだが、

「そろそろ出発するし、乗るぞ」

列車、飛行機、客船……………元の世界だとテロ対策や密入国、密輸防止とかで厳正なチェックを行う訳だが、こつちだと更に厳しいチェックを行うが、

「根本的に意味ないんだよなあ、これ」

無数の問題点がある。まず収納や魔法等、取り上げようも無ければ、隠して持ち込み放題、テロもある程度腕に覚えがあれば誰でも出てしまう。飛行機でも外から侵入してくる奴がいるほど、……………もつとも乗り込む所まで成功するのは稀だが、中には離陸から着地まで翼に掴まり続けた強者もいる。ここで分かって貰えると思うが、乗る側の知識の不足、元の世界でやったら確実に死ぬし、大体の人がそのことを知っている。それ以外にも法整備も出来てないのでトラブルも多発してるし……………

「マスター、紅茶はいかがですか？」

「いただくよ」

そのティーセット何処から出したとかそんな野暮な事はつつこまない。クロエが淹れてくれた紅茶に視線を落とす。……………この一杯を飲み終わる頃には来るだろうな、香りを楽しみ、一息に飲み干す。

「もう一杯いかがですか？」

「そうしたいところだけど、後にするよ」

ティーセットを隔離に仕舞い、刀を手に取る。後はそれぞれの持ち場に移動を開始する。

暫くすると異音と共に魔導機関車が停止する。それに合わせて左側の斜面から右側の茂みから如何にも盗賊な方々が飛び出してくる。

「フレ임エンチャントくサンダーエンハンス！フレ임ジェイルくシャドウバインド！……………それからく、アイスエディット・ランスー！」

各々付与魔法の効果を受け取り、敵に拘束を掛ける朝日、

「襲撃するところが分かっているなら待ち伏せできますものねー、えげつない手ですわねー、流石は旦那様〜」

パン！パン！パパパパパン！

「あらー、弾切れですわね〜」

「い、今だ！抑え込めえ！」

彼らの攻撃は届かない。地面から飛び出した赤い刃によって貫かれる。

「罨でした〜」

悠々とリロードをすると、レアは目に付いた敵に向けて気まぐれに引き金を引く。

パチパチイ！バリツ！

僅かに聞こえる電気の走る音の後、周囲の敵が絶命する。ある者は首を拗じられ、ある者は感電死、喉を喰い千切られた跡のある者や、ただの血溜まりになった者や骨と僅かな肉片だけになった物まで様々、「にゃ〜…………ちよつと速すぎたにゃ」

袋を担いだ緑の猫耳、袋の中では何かが蠢いている。それが突然何も無い場所に現れる。

「この女は俺が貰うぜえ！」

整った顔立ちと屈託の無い笑顔が魅力的で豊満な胸にしなやかな胸、両手のひらで抱えることができそうな細いくびれに折れそうな程華奢な手足、街中で見かければ誰でも印象に残るだろう。しかしここは山の中で戦場になりつつり、戦えない者に成す術はない。そして弱い者は強い者に淘汰される。クロシエットは袋を担ぎなおす。

「ペレットショットにゃー！」

袋の口が開き弾丸の様に白い物体が男の体に突き刺さる。そこまで勢いは無いので即座に死ぬようなものではないが、飛んできた白い物に空気が凍る。細かくなった物は判別が付かないが、一際大きな物は刺さった方の反対が膨らんでおり、青紫の血管のような物が数本貼り付いている。

「…………骨、？」

骨だ。そう、……………では何の？

山の中で活動していると持ち込んだ食料とかだけでは足りない事だ。その分は狩りをするなりして調達する。しかしそのままだでは食べられないため精肉する。解体も街に持ち込むのは時間の無駄になるので自分でする。そんな彼らも見ただことの無い物、

「うにゃ？……………そういえば排出が主目的だから威力は期待するなあー、つてお兄ちゃんが言ってたような気がするにゃ……………そうにゃ！一回全部出せばいいにゃ！」

そう言うときクロシエツトは地面に袋を叩き付ける。

「<sup>ヘカトンケイル</sup>包槌・千枚歯！リバーシブル！」

それと同時に袋から勢い良く大量の物が空に向かって打ち上げられる。

「お、お菓子が！デザートがー！やっちゃたにゃあー！」

シユツ！

クロシエツトの姿が一瞬消えるが、すぐに戻ってきた。違いは口元や頬に生クリームや粉砂糖が付いている事だ。

「もしもの時の為の練習としてやっておいた方がいいかもしれないしやっておくかにやくぺろっ、……………バトルモード起動」

頬に付いたクリームを指で、口の周りの粉砂糖を舌で舐め取ると、電気を身体に纏い、左手に鋭い爪の籠手、右手に細剣を作り出した。見た目の変化としては僅かだが、髪が少し伸び、生え際から金色になり毛先が元の緑をしている。

「まずは剣から……………」

手近な三人のみが目の前の彼女を認識することができた。だが認識できたとしても動けないし、残像だ。攻撃の瞬間、つまりここに留まっている時間を切り取った刹那、脳が彼等に起きた事実を補完した。幻、何故なら彼等はそれぞれ目の前にいるクロシエツトに同じ瞬間に攻撃を受けているのだから。

ドサ、ボテボトボト、

バケツに溜めた生ゴミをひっくり返した音にも似た水音を立てて、人の形を失う三つの影、

「爪……………」

一言呟くと細剣は爪に形を変える。

「う、あああー!!」

「お、俺はもう辞めるー!」

何人かが逃げ出すのに合わせて我先に逃げ出そうとする盗賊、

「逃亡阻止……………役目」

落ちていた袋を盗賊の逃げる方に蹴り飛ばす。飛んで行った袋からは無数の首が飛び出す。

ヘカトンケイルとは百本の腕という意味だ。だが、ただ腕が百本なのでは無い。五十頭百手の巨人だ。

それぞれの頭がそれぞれの獲物に喰らいつく。目も鼻も耳も皮膚も無いのつぺりとした顔に口だけが、獲物を認識して追いついていく。そして森の前に降り立った時に全体が袋から出た。百本の腕は植物の葉の様に袋を中心に花が咲くように死角を埋める。そしてその上にゼンマイを思わせるように複数の頭がさつき捉えた獲物を咀嚼している。

「二カ、カダイイシイ、グザイジイイ、……………マズ、イイイイ!」

それぞれの頭が同じ事を言う耳障りな合唱。と何かが砕ける音が混じり合う。それに必要最低限の言葉で答える。

「異議却下、命令優先」

「二ハラ、ヘッダアア!グツデモ!グツデモ!ダリナイイイ!」

手を足の代わりに使い、体を持ち上げ、時折手を滑らせながら獲物を求めて這い回る。もし逃げてもクロシエツトに速度で逃げ切る事はできない。

「盗賊の死体は、お金になりませんからー撃退した事実だけあればいいので死体はあれにあげていいですか?……………あつ、弾だけは戻してくださいねえ?」

もつとも生きてままだれに収まるか、生ゴミとして処理されるのかのくらいの違いしかないが、



## 戦車（勝利）と審判（罪と罰）と

……さて、つと、ここではざっくりと状況とこれから起きる事を混せて説明しよう。積荷の護衛は俺達だけではない。他にも4両目の座席もない所で各々固まっていたのだが、5チーム中、3チームが盗賊と内通しています。んで、この時間の運転担当者の補助は盗賊と冒険者（チンピラ）を利用する事を事前に知っている。こいつがこの機関車の動力炉に異物を放り込んだ。でチンピラ（冒険者）は3両目に行き、研究者達を制圧して、輸送機で2両目を丸々占領しているミサイルを持ってくというプラン、それと入れ替わる様に来る爆撃機で協力者も口封じ、研究者達は無力化させた後、全員で見張られて言われるから車両ごと粉々になる。

「んじゃあ、まあ……輸送機からバラすか、クロエ」

「はいっ」

「パアーン！」

しばらく間があつて左エンジンが火を吹くと機体が傾き、崖の上に消えていった。……あんまり損傷してないがすぐに脱出しないとエンジンが爆発する。

《爆発まで1分6秒です》

……だ、そうだと、言つても途中で飛び降りたのもいるので、そつちを対処しないといけないが、

ドン！

崖の方から飛んできた影が隣の車両の屋根に着地する。背丈の高い男の肩には二人の男女が乗せられているが、男の方は透明になるスキル、女の方は紙に物を収納するスキルを、担いできた背丈の高い男は攻撃対象を脆くするスキルをそれぞれ持っている。

「……で、三人の目的はアレか？」

後ろのミサイルを指差す。見えてますと言う警告も出しとく、

「ちよ……バレてる、不味くないですか？」

「見破られるのは初めてだな……」

「気にしたって仕方ないだろ。……打ち合ってから決めればいいだ

ろ！」

一人が突っ込んできた。見切って回し蹴りをくれてやる。

「……………もしかして俺の能力も知ってるのか？」

「だとしたら読心系か、解析系になる」

「なら……………」

「何とかなると思うか？……………お前は紙に物を収納出来るが紙の大きさによって仕舞える物の大きさが決まってる。それと生物は仕舞えない。そっちは自分含めて三つの物を透明に出来る。ただし触った事のある物でないと透明には出来ない。物体脆弱化は武器に付与出来ないから直接殴った時以外は効果を発揮しない、行けそうか？」

「……………全員で畳み掛けるぞ！」

「ちよつと遅いがその判断は正解だ、ただ戦力比較は基本中の基本だぞ？」

飛びついて首を捻って気絶させる。まず一人、横から繰り出された拳を躲し、背負い投げから背中と車両の屋根を魔法で凍らせる。ついでに残った女の足も凍らせておいたので額にデコピン、

「痛っ、……………うわっ！足が！」

倒れた所を追加で肩の辺りも凍らせる。凍結魔法便利だな、遠くで爆発音がする。代行者よ、脱出した奴はいるか？

《いません》

爆撃機は？

《止まる様子はありません》

あつ、そう。予定通りか、

「お前らは爆撃機の事は知ってるよな？」

「……………どこまで知ってるんですか？」

「この計画が立案された時から全部、依頼主も利用目的も強奪後の運搬ルートも……………ついでに君らの知らないプランBもCも」

「……………」

「んで、物は相談何だけどアスメシアにちよつとした団体を作ってるんだ。そこに来てくれないかな？」

「……………断ったらどうなりますっ？」

「ロケットの届け先で引き渡すよ?」

「……………ですよねえ!」

「なあ、……………背中痛えんだけど、暴れねえから解いてくれ」

「ああ、じゃ、送るわ」

「は?」

隔離を介して予め決めておいた部屋に出す。さて、車内はどうだ?

……………てか一両減ってね?

一太刀で4両目と敵冒険者とそれ以外の冒険者を分けてバラバラにした月夜、その手には絶剣・六式が握られている。その大きな刀身はこの狭い車内でどうやって振るったとか、どこから出した疑問が絶えないが、争いを始めていた彼等には彼女が味方で良かったと思ういだ。

「ご主人様のご所望に沿う事ができました。小生は嬉しく思います」

爆発霧散した肉片や血溜まりを放置してそのまま3両目に戻ろうとした時だ。

「動くんじゃないやねえ!」

「?」

普通に振り返る月夜、ただそれだけでも先程の戦闘とは言えない程の虐殺を見ていた男を逆上させるには十分だった。

「ああああ!!動くなっつてんだろうがあ!」

「落ち着いて下さい。大丈夫ですから」

サクツ

僅かな音の後、短剣を手にしていた男が後ろに倒れる。その眉間には短剣が突き刺さっていた。

「申し訳ありませんでした。小生はご主人様に敵を全て倒せたか確認してきますので警戒を怠らない様にして頂けますか?」

「あ、ああ」

まばらな返事を聞いた後、彼女は再び3両目に戻るべく足を進めていく。暫くしてゆっくりする為に死体を処理を始めた彼等は簡単に死体を一箇所にとどめた。ただ、上の空だった彼らは気付かない、その短剣にはガード(刀で言う鍰つば)があつた筈だが、それが目で見える

範囲では確認できない事を、

「申し訳ありませんが、この車内に斬撃耐性 絶をお持ちの方はいらつしやいませんか？」

「居たとしても答えるか？普通」

「う、こういう頭を使う事はワタクシ得意ではありませんのに……と言つてもワタクシにしか倒せないですから、仕方の無いことですわ」

「……つて事は他の人じゃ勝てない。つてことですか？」

「ご主人様なら、そんな事は無いと思いますが、他の方だと……」

考える仕草だけでも絵になるアリス、周りの反応には気付いていないが、

「あつ！思い出しましたわ、確か顔にホクロがある人を探せと言われていましたわ！」

「いや俺あるけど、違うよ」

「俺もあるよ」

「私も」「俺も」「儂も」……あれ？お前そんなところにホクロあつたけ？」

「……あれ？でも違った様な？えーと……いえ、あー、そうでしたわ！顔にホクロがある人を探せと言つて嘘をついてる人を見つければ……誰が嘘をついているのでしょうか？」

暫くの沈黙と共に彼等の視線は一人に集まる。

「仕方ないか……こうなつては」

「何がでしょう？」

今度はアリスに視線が集まる。さつきとは違う意味でだが、「ご主人様なら嘘をついた瞬間に首を飛ばせると思うのですが、ワタクシでは無理ですわね……どうかしましたか？」

「いや……」

「僕だ。もういい、こいつが見えるか？」

「……球？」

「術式砲弾?!何処にそんなものを！」

「僕は石化の耐性もあるからね。この中には石化させる魔力を込めた

粉塵が詰まってる。この車内くらいならみんな効果範囲内だ」

「石化が効かないのは聞いていますわ……………開け！」

砲弾を持つている方の手を黒ノ時で砲弾ごと消し飛ばす。黒ノ時には距離的制約が無い。一回しか使えないと言う所は変わらないが、球体の大きさを小さくする事は出来る。その分、一瞬より長持ちする。ただそこに存在するだけでも破壊を巻き起こす、空気さえも破壊するのでブラックホールの様に周囲の物を引きずり込む。今は拳まですり込んでいるが肘辺りまでその中に吸い込まれると球体は唐突に消える。それと同時に僅かに血が天井に飛び散る。

「う、腕があああー！」

床でのたうち回りながら辺りに血を撒き散らす。傷口は鋭利な刃物で斬られた用にもなっているが球状の断面の中心辺りから絶え間なく流血する。このままの状態が続けば二分と待たずに意識を失い死に至るだろう。

「いや……………だ、ぐううー！」

震える左手でポケットの中身を床に撒き散らすと目当ての小瓶を掴み、歯で栓を抜いて腕の傷口にかける。すると出血が止まり、剥き出しだった傷口が塞がり皮膚に覆われる。

「回復薬ですか？」

「上級だ、これなら傷は一発で塞がる。……………再生はあんまりしないけど」

「あんまり治りませんね……………」

「けど、奥の手は使った、だろ？」

「そうですね」

黒ノ時はスキルの力である為、魔力を消費しない。その為魔力の少ないアリスには奥の手であるが、使いどころの難しさ故に本人は扱いかねている。森での狩りに使うと獲物も消し飛ばすので毛皮も肉も残らない。こういう敵の排除や後始末が面倒な害虫、害獣駆除ぐらいしか使う時がないと言う現状だ。

「……………では、失礼しますわ」

アリスは一瞬で距離を詰めて一発殴った。彼は様々耐性を有して

いる。低い麻痺耐性でも4、衝撃耐性は7もある。クロエや向日葵なら無効にでもしない限り首がもげる事になるだが、アリスの悪魔系嫉妬では腕力は強化されない。しかし、それ等を計算から外し、人形の基礎的な能力で見た場合、アリスは平均的に高い水準の能力を持つ。普通の人が殴られたなら総入れ歯が必要になる位には、

ベキツ！

「づえーあ、おう……………」

「魔装グレイプニル、この機能は他の子、ワタクシ以外にもあと三人は同じ事が出来ますわ」

アリスの手には黒い蔦の刺青が絡みついている。所々小さな花を付けている様に見えるのは魔法陣、今見える範囲でも七つあるがどれも肉眼では小さ過ぎて読めない。全身になればもつとその数は多い。「効果は主に耐性の無効化、魔法一部スキルの封印と無効化、おわかりいただけましたか？」

耐性を無効化した一撃、床に血と唾液に白い物混ぜて吐き出しながらアリスを見上げる。先程と変わらぬ様子で気負いも無く、さも当然の様にこちらを見ている。

「終わりですわ」

そうあつさりと告げるアリスの脚に黒い蔦が絡み付き花を付ける。次の瞬間力なく前のめりに倒れた彼が最後に見たのは僅かに血で汚れた天井と彼を見下ろすアリスだった。

ジュワアアア！

「あああああー！」

「ふうー、後はご主人殿に報告すれば終わり、だったかな？」

「ひいひい」

列車を停めた犯人は向日葵の手によって動力炉に焼べられた。無関係な乗組員は自分も焼べられるのではないかと気がでない様子だが、そんな事はどうでもいいと言わんばかりに彼の横をすり抜けていくと、ミサイルの上を両手を水平に伸ばしてバランスを取りながら歩き、3両目の車両の屋根に飛び乗る。

「ご主人様殿、終わりましたあー！」

「ああ、…………クロエ！そろそろ見えてくると思うからやってくれ！  
外しても俺がやるから外しても気にするな！」

「は、はいっ！」

…………自分で言つといてなんだかフラグな気がする。

三機中二機来たよ。爆撃機、一機を土魔法を強化して手に入れた物理魔法で重力を増やして叩き落とす。もう一機は万能結界を足場に移動し、最後の一つに乗った時に斥力を使って体を爆撃機に飛ばす。終わったら結界に着地、

カチン、

戦闘機が斬った通りに空中分解する。残骸は機関車を飛び越えていく計算を代行者に任せたので問題ない。そのまま結界に乗ったまま向日葵の所に戻る。みんな集合してるな、

ピシツ、

結界を止め、構える。周りからは手を掛けただけに見えるかもしれないが、

《未来視の結果が変わりました》

「お兄ちゃんの目が…………開いてるにや」

「あのあのく気を抜かない様にしましょうー」

「うん」「ははいっ！」「分かりましたわ！」

…………お前らなあ、人のどこを見て状況判断してるんだ、まあ、すぐに伝わるという点ではいい事か？

《上です》

名前 瀬戸原 來莉朱

種族 人

パーソナルスキル ブラッドホール 血の排水溝 鉄 血の温もり 雨 解れる血肉 蛋白質 生と

絶頂 死 背教

スキル 不死 危機感知10

耐性 風圧無効 衰弱耐性8 痛覚倍加 痛覚変換・快樂

称号 絞死 被虐待好 D S D M

…………マジか！よりもよって！

「レアー！それとクロエとアリス、ノルンと朝日はそれぞれで距離を取れ！半円に囲む形ですぐにカバーしあえる距離だ」

なんだこの統一感の無いバタバタ、距離バラバラなんだけど？  
ちよつと心配になってきたな、

「あははははー！」

遙か上空から落ちてくる彼女は狂ったように狂喜していた。

ドチャツッ！

鈍い音と僅かな砂煙を巻き上げ、地面に叩きつけられる。彼女はこういう子だ、砂煙が晴れたあとには破れた水風船の様に血を撒き散らして地面にへばりついている。左足や指の数本は本来曲がらない方向に曲がっている。しかし、

「……………ははは」

乾いたような微かな声、うめき声にも聴こえるこの声は彼女が体を起こす事で否定される。笑っているのだ、顔は潰れていても口元だけでわかる。そこからは一瞬だった。辺りに飛び散った血が彼女に集まっけいき、血が徐々に集まり体が再生して行く。頬を紅潮させ恍惚とした表情で熱にうかされた様に天を仰ぐ、

「あはっ、少々はしたない姿をお見せしてしまい申し訳ありません。

北川先生」

「ああ、お世辞はいいぞ瀬戸原、どうせ気にもしてないだろ？すぐに襲い掛かって来なかったあたりは、お前にしては大分我慢強くなったな」

「お褒め頂き光栄ですわ、……………では」

するりと距離を詰めると自然な動作で鋏を突き立てようと迫ってくる。それを刀で掬い上げるように弾く。上体がここまで反っていれば普通立て直しのために間合いを取り直す。まして様子見程度の攻撃なら尚更、しかしこいつは無理やりでも追撃する。左手に持っていた剃刀を倒れる様に振りかざして来た。横に躲して腹に膝を叩き込むと追撃に後頭部にもエルボー、加減したとしても危険極まりないコンボなので殺す場合しか使わない。

「らああー！」



足の下に結界を作り出し、それを上に動かすのを利用して、不足を物理魔法で補填、無理やり打ち上げ、手から着地、空かさず地面を凍らせて氷の槍を魔法で作り返して貫く。

「……………ふふ、いいですー最高ですーこの快感！この死がすぐ側にある焦燥感と恐怖……………愛おしくて堪らない。この感覚がずっと続くなんて可笑しくなってますー！もうそうですわあ〜」

血は地面に落ちるより早くビデオの逆再生の様に彼女の体に戻っていく。その他の液体は足を伝ってポトポト、口からはポタポタと地面に落ちる。

……………厄介さに磨きがかかったな、不死や複数のパーソナルスキル、真正面から戦うメリツトが無いと言える。

鮮血の排水溝 内約

三十メートル内の血を集め、操る。

血鉄の温雨もり 内約

浴びた血の量に応じて身体能力を向上させ、スキル保有者の体液を浴びた者は能力が下がる。

解れる血肉蛋白質 内約

血や肉を体内に入れる事で体の欠損や体力を回復する。

生退屈と死絶頂 内約

生命の危機に瀕する事で身体能力を向上させ、快楽に応じて魔力を回復させる。

背教 内約

破戒 スキルの制約を取り払ったり、反転させる等の変化を及ぼすが、本来のスキルからかけ離れる程使用者に負担がかかる。

地獄の楔 指定した対象一人に楔を刺し、存在値を吸収するが、五十メートル以上互いに離れられなくなる。ただし、存在値がスキル保有者より多い場合は吸収は出来ない。(この権能は上記の権能の対象外)

……………覚える事も何気にも多いな、背教があるせいでどういふふうに使ってくるか絞りにくい。それにこの辺り一面には死体は処理した後だが血は残ってる。実際引き寄せられてるようだ。じりじりと俺

の足元にも、

ゴオウ！パチパチ……………

先手を打って足ごと魔法で燃やす。

「先生のそういうト・コ・ロ、結構好きですよ♡」

クスクス笑いながら、されど油断なくこちらを見据える目は獲物を逃がすまいと狩りに集中する獣のそれだ。

「……………はあ」

頭が痛いなあ。こいつの性格を勘案するなら確実な勝利条件は一つに絞られる。地面を蹴る動作と共に魔法を発動し、地面を動かす。

「おまえらは距離を取れ……………六十メートルだ、ミストルティンは使うな！」

最低限の言葉で伝えるべき事を伝えるとエスカレーターに乗るように動く地面に乗る。

「あはっ、先生が一对一で見ってくれるなんて、これ以上の贅沢はありませんわねえ……………欠伸が出る様な円舞曲は幕引きにして、楽しいクイツクステップで私を退屈しない場所にいっっぱいエスコート<sup>連</sup>行つてくれませんか？」

手を差し伸べる彼女の所作はそれこそ何処かのお姫様といった感じだが、反対の手に錆びた鍔を持っている。そんなお姫様いねえわ、十中八九刺す気だろ、それで、

「<sup>荒唐無稽で血なまぐさい</sup>グラン・ギニョル劇に出て来そうなお前をエスコートするのは荷が重いし、俺はダンス得意じゃないしな」

そう言いながらもその手を上から取り、引き寄せる。とそれに合わせる様に突き出された鍔を避けて、肘で叩き落とすと、勢いのままこつちに来ていた彼女の喉に一撃入れて、ブレーンバスター、スカートだとかピンクのが見えたとかそんなもん関係ない。距離を取って刀に手を掛ける。

「あはは、楽しいよ先生、でも当たらなかつたのは少し残念」

茂みの方から血が集まり、彼女の体に纏わりついて消えていく。……………どうやら打撲等も回復できるらしい。集めた血はどっかに隠してるみたいで、チラッと見ただけでは見つかかりそうにない。見つけ

たとしてもそこから遠ざける他は燃やすしかないし、間違ひなく妨害してくるだろうが、千里眼で探しながら片手間で相手してたらこつちがやられる。

「ふう……………」

型には攻撃の型と防御の型、それと攻防一体の型がある。型とは技に繋ぐための準備、より速く効果的に正確に動作を行う為の一種のルーティーンだ。俺が得意な技は主に攻防一体、攻撃が苦手と言う訳では無いが割と偏りがあると思っている。防御に関しては弾いたり牽制、受け流しが基本で、力で押し合う状況にはならないようにしている。

んで、彼女は戦闘素人だ。間合いもクソへったくれもないし、どれだけ攻撃されても避けないし距離をとったりもしない。こつちの間合いとか無視、攻撃一辺倒で攻撃を防がないし、受け身も取らない。でかいガラス片が刺さった時でも平気で抜いて、辺りを血の海にしたことがあった、……………こいつ普段から手負いの獣や狂戦士みたいなのがある。嫌いな事は退屈と同じ行動を繰り返す事、好きな物は血と快樂、そして死に至る苦痛、あとグレイプフルーツのジュースとラズベリーの入ったクレープ、……………つとそれどころじゃないな、相変わらずどこに持ってたんだその鋏、次々出してくるな、

「先生って、よく考え事してて隙だらけに見えますけど、一回しか攻撃当たった所見たことないですよね、どうなってるんですか？」

「お前は殺気が強過ぎるんだよ。あと欲望に忠実過ぎ……………るー！」

咄嗟に投げつけられた鋏を首を横に逸らして回避、危ねえー、その隙に鋏と剃刀を持って距離を詰め、連続で振り回してくる。もちろん回避、回転しながら鋏の間を滑らせながら打ち上げると、間髪入れずに向きを変えて下に押さえつけ、回転の勢いをそのまま利用した後ろ回し蹴りを放つ、

「がっ、はふぁ……………」

首の骨を砕かれ、絞り出した様な空気が微かに漏れたような声を出し、そのまま後ろに倒れる。

ボキボキ、パキッ！

「最っ高……！」

フラフラと立ち上がると首の骨を元の位置に戻す。血は集まっていき、表向きは治ったように見えるが骨の再生はうまくいってない。治っていない訳ではないが、今までの外傷に比べるとかなり遅い。

《不死には肉体を正常な状態の維持、戻そうとする作用があります。その影響です》

そっちか、出血を強要する逆手の居合では相性が悪いが、防御や間合いの維持が不安だな……なら、

「銃刀法違反だあく、銃の方の♡」

「……なんで嬉しそうなんだよ」

どうせ新しい痛みが<sup>快樂</sup>楽しみなんだろう。今回はリボルバー、二丁はスイングアウトソリッドフレーム振り出し式だが、一丁は固定式、それをお手玉の様にジャグリングする。

「やっぱり器用ですね」

と言いながらじりじり近寄ってくる。……ジャグリングの合間に撃つ。

「……避けるよ」

寸分違わず眉間に命中、赤い花が咲いた。が構わず迫ってくる。

……某ゾンビゲームでもここまで怖くないぞ、ゲームならヘッドショットすれば大概死ぬし、近距離戦を想定したスタイルに自動拳銃オートマチックは使えない。結構荒い扱いをするし、回転を付けて投げているため、動作不良（ジャム）を起しやすくなる。その点リボルバーは丈夫さや発砲の確実さは申し分ない。ただ、弾数とリロードの手間は致命的なので、いかにリロードを素早くスタイリッシュにこなすかが鍵となる。銃を躲して横から肋骨の隙間を縫い、1発、背後に回って蹴り、残り1発を適当に撃ち、薬莖を排出、隔離から位置を調整して出した弾をスピンドローダーの様にそのまま装填する。

「……先生、まだ銃隠し持ってますよね？」

「どうだろな？」

「何が狙いなのかは分かりませんが、先生の事ですから、まず安全策ですよね、それとスキル見えますよね？私の」

「…………お前らしくないな、俺の知ってるお前なら死んでも獲物に喰らいついて離さないよな?」

「小夜時雨さよしぐれさん程臆病なつもりは無いですわよ?」

「……………いつ調べた。次の赴任先で受け持った生徒だぞ」

油断も隙もねえな、何も無いといいが、……………こいつが動いた地点で何かは起きる。

「なかなか遊んでくれませんでしたけど、迷いを振り切った彼女のー撃は凄かったですわ、……………とっつてもお♡」

「全く、いい性格してるよ。埜々ののに何したんだ」

あの子は臆病だつてのに……………あれだけ才能に溢れた子は目の前のこいつを除くと肩を並べられる者がいない。

「檜野さんはつまらなかつたですね」

「貴光か、懐かしな」

「……………あの考え方、先生でもどうにも出来なかつたんですわね、本当にウンザリしますわ、チツ……………死ねばいいのに」

……………酷い言われようだな、

「……………さて、そろそろ行きましようか。」

「……………来い」

「いえ、来てください」

……………ツ!なんだ!いきなり手足から力が、しかも引き寄せられる。る。

「……………あは」

足を凍らせて固定式ソリッドの銃を抜き、連射する。……………目眩はするし、全然当たってない、辛うじて一発当たった瞬間に、引き寄せられる感覚が無くなったので魔法で風をぶつけて吹き飛ばす。しかし一定距離から俺が引つ張られ始める。もう既に地獄の楔はつけられているみたいだな、千里眼で体を見てみたら背中にしき黒い靄が刺さっている。……………スキルを使って来ないから、すべてを把握していないと考えていたが、ここからが本番になりそうだ。今のはおそらく鮮血ブラッディの排水溝を破戒を使って体内にある血まで操作したのだろう。ただ操作と言っても俺の体を引き寄せるのと血の流れを滞らせるの

が限度、今は傷がないから血を引き出せないが僅かな傷でもつけられれば干乾びるまで血抜かれんど、これ、予想より自由度が高けえし、  
「…………魔導教本には、体に宿る魔力に干渉するには身体接触か表皮より内側に斬り込んだり、撃ち込んだりしないと無理、まして血は魔力の伝導性が高く、体の主の魔力が多く含まれている。出来てもやろうと思わないほど労力がかかるしな」

「はあ、はあ……………う、あ」

うわ、瀬戸原がヤバイことになってる。多分血涙と鼻血なんだけど真つ黒、静脈血とかも黒っぽいがそれなんかより黒い。

《破戒の負担によるものです》

んなもんわかつとるわ、俺の冒流には負担云々の文言は無かったが精神汚染の負担があった。書いてあるなら言うに及ばずそうなんだろうが、おそらく体その物に直接負荷が掛かるタイプだ。血なら集められるのに集まっていけないと言う事は、この黒いのは最早血では無く、老廃物と同じ扱いなのだろう。……………なら、ここは勝負に出るべきだろう。銃一丁以外をすべて仕舞うと、冒流でスキルの干渉を防ぎ、魔力を体に僅かづつ込めていく。

「合計37%」

速さを増やせる最適な配分、代行者はもう少しいける的な事を言っていたが、これより上げると動きのしなやかさに影響するし、肩とか回した時に筋が引つ張れる感じがする。代行者が言う量は理論的な限界である場合が多い。ある程度余裕を持っておかないとホントギリギリだったりする。増えた筋力で凍った足を剥がし、靴に付いた氷を火魔法で融かす。

「ヒートエッジ」

刀を取り出し、熱を付与し、腰を落として構える。

「……………先生さあ、私のスキル見えてるよねえ」

「……………」

「否定しないって事はそうだよねえ、普通パーソナルスキルは見れないって聴いたのに、……………そろそろ楽しい時間も終わりかな」

「……………生きてる限り終りじゃない。お前に死なれたら俺の負けだろ

？」

「ぶつ……、先生はそういう人、でしたわね。……昨日までの常識が明日も通じる保障はない、塗り変えたその瞬間、ただ歴史になる。塗り変えていくのは君達だ、若人、でしたっけ」

「よく覚えてたな、なら続きを言うとな、その変革を受け入れる強者であり続けたい。ただ恐れ、抑圧し、立つ場を汚して託す老害や過去の遺物にならない者でありたい。かな」

始めた時は革新的な方法も時代の流れと共に因習や弊害になる。政治に完成は無い。動く世の中においては常に新しい風か水を滞り淀ませること無く適切な方に流す必要がある。自分がそんな淀みにならない為の努力が最低限はある。人に教える立場なら尚の事だ。……まあ、当然間違えた方向に水を傾けると大変な事になるのだが、

「……どうやって勝つのか分からないなら、いつそこは単純に楽しませてもらいますわ！あははは！」

「まだ続きがあるぞ？」

迫る鋏を一刀の下に切り裂く。

「あうっ！……見た目は似てますが刀身は別の刀ですわね」

「……不本意ながら似せなければならなかったんだよ、こういう時のためにな」

影打ちもまとめて買う価値も道理も分からない客に見られただろうが、相手の虚を突くには役立つ。……似たようなのがあと三本ある。今振ったのは真打、今までののは簡単に折れはしないが、物を斬るには何かと気を遣う古い刀だ。色々注文つけたので結構金が掛かった。

「変革を受け入れるって事は次を継ぐものがある。生きてる内は間違いは正させてもらおうし、穴があるようなら掻い潜る。まだまだ老害どもには負けるが、悪ガキ程度なら多少クレバーな手で十分さ」

笑みを浮かべながら語りかけると……なんか微妙な顔してるな。

「……そんなあくどい顔で唾う人初めて見ましたよ」

失礼な、笑みだよ、えーみ、につ、つて笑う奴だよ？誰があくどい

んじゃあコラア!

「こら、人を悪人面最上級みたいな言い方すんな」

「怒られてしまいましたわ」

なんて言いながら鋏と直刀を手取る。どっから出してるんだよ、

「その直刀、銃刀法違反だろ」

6センチでアウト（鋏や折りたたみナイフは例外で8センチ）、

……まあ、他の法律でそれ以下でも罰則を受ける場合もあるが、俺の刀は言うに及ばず、40センチの直刀もアウト（薙刀等と同じ分類で15センチ以上はアウト）、完全に護身目的の刀だ。

「……………先生く、今更いいっこなしですよ？早く始めましょう?」

「……………悪いがもう終わったぞ?」

「えく」

「俺のパーソナルスキルには未来を見る権能がある。……………元はそれだけだったがな」

俺がただ真理ノ瞳を持つだけの者なら、もつと勝利を暗中模索しなければならなかっただろうが、

ヴォルテックアトラクション  
「引力の渦、ストライカー、起動」

少し間があつてから彼女の意思に関係なく腕が曲がり始め、可動域を外れるのにそこまで時間を必要としなかった。だがそれでも動き続ける。そして倒れると同時に彼女を中心に地面が沈み、亀裂が入る。後者はシンプルに重量を増やす目的の物、前者は力の渦を作くる物、変化が生じるのは銃弾を受けた箇所だ。頭と左半身を重くして、肘、膝、肩に渦を、それぞれ撃ち込んだのだ。

「術式弾だから起動さえすれば撃ち込まれた側の魔力で維持出来るし楽だが、一発ずつ作るから勿体なくてバカバカ撃てないんだよなあ」

こういうところ貧乏性なんだよな。手間考えればアレなんだけど、……………まあ、無駄遣いは良くない。うん、

「これどんな風に映るのかしらね?」

「人形劇イメージのアニメーションで出てくる関節クルクル回る登場人物仮?」

……………魔力の制御の上手い者なら体内に作用する物でも止められ



るが、止められなきやねじ切れるまで回る。そんなに回転速度は速くないがブチブチいいだすのは時間の問題だろう。というかもう既に2〜3発挟ってるし、……チツ、もう少しだったんだが、左手が使える状態になってる。

「先生、……そろそろ限界なので絶頂イクしましょう？」

「はあ……、たまには痛い目見たほうがいいか」

手に取ったアンプルの先端を割って啜える。あつちも血で体を治しているが、全ては治っていない。血が足りないのか、負担の影響か、どっちにしろ、必要なのは……

拘束、嫌い。快樂、好き。停滞、嫌い。苦痛、好き。我慢嫌々、大嫌い！血、大好き！

甘い物は好きだけどただ甘いだけのものは嫌い。綺麗事、嫌い。法律ルールはゴミ。退屈も同じくらい嫌い。先生……好き。

ああ、真つ赤な飾り付けデコレーションと愛おしい身体キャンパスを引き裂く鋭利な鋏絵筆、焦らす様に付いては離れる演舞ステップ……思い馳せると弱りゆく様も、一手たりとも間違えられない焦燥感もその一瞬の為なら如何なる犠牲も厭わない。例えこの先、これ以上楽しいことの無いつまらない人生を送る事になったとしても、

「ふふ……先生♡」

死はもどかしい。首を吊ると死ぬ。でも一定で切れるようにしておけば、暫くは愉しいが、落ち着けばまた欲しくなる。……後始末は少し惨めだ。嫌いじゃないけど、

死は一回限りだ。服毒は少し物足りない。失血は意識がすぐ無くなる。火や切り傷は苦しみが足りない。凍傷は痛いのは初めだけで感覚が無くなる。銃もいきなり力が抜ける感覚があるが物足りない。……死ぬなら先生に絞め殺してもらいたいな、そのほうが気持ちいいと思う。最期に苦悩する顔も見られそう。あの優しい手で、繊細で細い指を使って、暴れてもびくともしない程、強く、

「……負けなければいい。勝利は、退屈、愉しくないなら、それは負け……そろそろ限界なので絶頂イクしましょう」

死を見据える事で生を実感する。歪で、愚かで、狂おしい。陶醉し

た意識の中で、自分の体から意識が離れた様に息をする音が遠く、しかし速く止めることもできず、吸い込み吐き出し続ける。ひり付く焦燥、背や首筋を伝う冷たい少しの汗、体が幾ら逃れようと藻掻いても、心は求めて止まない。

「これからお前が一番嫌がるであろう事をする。罰でもあり、俺の能力不足からくる問題でもある。なあに、措置に関しては学校にいた頃と変わらない」

わからない事は嬉しい。それが先生の考えなら尚更笑いが止まらない。

「…………俺はこんな笑い方する奴にあくどい顔って言われたのな」

「やあん♡ひつどお〜い私だつてえ〜、女の子なんだからあ、そんな言い方ないんじゃないのですの？先生」

「さっきの仕返しだ」

より腰を落として勢いを付けられるようにして刀も背中に隠すように後ろに引く。頭に撃ち込んだ一発は重量を増やす効果がある方の物、頭という物は約5キロもある。それを脊椎で地面から垂直に支えているが、脊椎がS字に曲がっているのは体重の8%に当たる負荷を分散させる為だ。重量が増せば全身に負荷が掛かり、支えきれなければ倒れるし、バランスも崩しやすくなる。流石に頭の銃弾を鋏や短刀では取り出せないし、俺が確実に当てたかった一発だという事は気づいてるだろう。

瞬きの一瞬、十メートルはそんなに遠い距離では無い。流れるように地を滑る様に踏み込み、豪快で大胆に、だが華麗に魅せるように放たれる手本の様な大振りだが効率的な一閃、…………と見せかけて隔離ですり替えておいたショットガンを突き付け胴体に向けて発砲、が、これは地面を転がって横に回避、それと同時に俺の膝裏に蹴りを放ってきた。姿勢が崩れた所に飛び掛かって来そうなのでショットガンを撃って牽制、その間に姿勢を戻し、隔離で細剣と入れ替え、連続で突きを放つも血を操り盾にして防がれる。絡め取ろうとして来た（変な方から力が加わる感じがした）ので手を離し、飛び退きながらショットガンを撃つ、しかし血が複数の弾体を包む様に防いだ。間

髪入れずに鋏、鋏、短刀の順に振りかざされる攻撃を躲し、背後から後頭部を押してあしらう。振り返りざまに振られた短刀を首を捻り躲すと、

ズガアン！……ガチャン、ぼとつ、

鋏を持つている方の肘にショットガンを撃ち込み鋏ごと吹き飛ばす。しかし何事も無かったように、寧ろ笑みを浮かべながら斬りかかってくる。怖え、予想通りだけど怖え、

ミシッ！

ショットガンと入れ替えで刀を出し、鞘で止める。

「えっ！これ……！」

戸惑うよな、本来刀が入ってる位置よりも短刀の刃が食い込んでいる。これはあの子達の実戦練習なんかの相手になる時、あんまり丸腰のままだと何かとプライドを傷付け兼ねないので飾りで持つてる……

「良くできてるだろう？見た目一緒だけど、俺が一から削り出した木刀だ」

腕を捻り、短刀を絡め取る様に投げ、姿勢が崩れた所を確実に押える。片腕を吹き飛ばしたのと頭の重みが増していることも相まってまともに立てなくなっているので取り押さえるのは簡単だった。口に啜えていたアンプルの中身を腕の傷口にかけると新たに失われた腕が生えてくる。

「……………はい、終わり」

「……………え？」

子供に注射を打ち終わった医者ぐらいの感じであっさり告げる。

「痛覚変換・快楽を痛覚無効に書き換えさせてもらった」

手に冒流を発動させて、黒い霧を見せびらかす。

「おうう……………、お揃いなのは嬉しいけど、嫌な予感が……………」

「どっちも悪魔系で傲慢スベルヒアだしな、お前のは背教で俺のは冒流だ」

「こっちのが先生に効かない訳ね」

「そのスキルは多い方から引つ張れないだけだ、それと対象が一つに絞られるから一対多数向きじゃない。使い方次第だが」

相手の存在値が多い場合は距離制限を掛けるだけになるし、多いと一人ずつになるから、時間も掛かる。攻守においてはどれだけ自分に有利な戦いができるかに掛かっている、……まあ、俺のは接触だから遠距離の対象には何の効果もないが、触れると言うのは防御にも使えるので、こつちに不利にならないように立ち回ればそれ程バランスの悪いものでも無かったりする。ぶつちやけ破戒が鍵だな、

「公序良俗に反するので没収です」

「えー……先生が慰めてく……」

「公序良俗に反するので却下です」

「うーん……じゃあ、先生を……」

「却下です」

「早いく！ だったらボロ雑巾みたいにしていいから……」

「そういう事、言うもんじゃあくありません」

「じゃあ……見てて」

そう言うのと地面についていた右手を見せつける様に膝から内腿へ這わせていき……

「待て待て待てえ！ おいしいっ！」

腕を掴んで止める。どうせ右手だけ掴んでも次は左手が動くので両手を掴む。この変態を野に放つてはいけない、そう心から思ったが、芹原さんや藤白には荷が重い。……こつちで引き受ける他無いなあ。

「はあああ……仕方ねえか、仕方ねえよなあ……」

「そ、その反応はあんまりではありません？」

「……お前の行いをすこし振り返ってみれば分かるんじゃないか？ まあ、立場なんかは追々決めるとして俺のどこに来てもらえるか？ 学校、というより孤児院なんだが」

「そこって愉しいところ？」

「……問題起こしたら軟禁して懇切丁寧に世話するからな」

「うえ」

心底嫌そうな声を出す瀬戸原、SとMの両方を持っているので、罰は与えられないが、平穩で何も無い事が、飽き性で刺激を求める性格

上唯一無二の罰となる。

「ノルン！すまないが、コイツを先に送るから転移してくれ！」

指と手首に結束バンド（芦原さんから仕入れた）を付けて固定しておく、後ろを振り返るとノルンがショートカットを連発して移動いるのが目に入るだろう。

「拠点の方で頼む」

「承りました」

すぐにノルンと瀬戸原が消えるとほぼ同時に背中から抱き着かれる。

「お兄ーちゃん！お迎え行ってくるにや？」

「入れ違いになると困るから前の街のポイントで見つからなかったら、届け先の街のポイントを見てくれ」

「わかったにや〜」

ノルンとは違う方法でクロシエットの姿が掻き消えるの確認すると空を見る。雲がやけに多い。……まあ、色々墜したのが燃えてるからな、こういう時、煙草を吸う奴は吸うんだろうがどんな気持ちで吸うのか？喫煙者の気持ちは分からない。ただ鈍痛を訴えかけて来る箇所を押さえながらため息をつくだけだ、

「代行者、鎮静剤か精神安定剤、どっちか寄越せ」

## 不正の魔術師（挑戦）と皇帝（ロイ）の決断

シャツ！

あーあ……………つと、よく寝た。精神的に疲れきっていたので寝ていたのだが、目覚めはと言うと常に最悪だ。カーテンを全開にして朝の日差しと共に眠気を身体から追い出す。……………あと、忍び込んできた元生徒（ヘッドロックで落とされた）を縛って袋に入れた物を担いで食堂に向かう。……………さて、どうしたもんか、

「帰るところがないとの事で今日からここに住む瀬戸原だ。俺が元いた世界から来たから、知識とかには偏りがあるから、ここの事も教えてやって欲しい。扱いとしては……………一応生徒だ」

「一応って……………」

「……………問題行動が目立ちます。これも課題だな、俺の口からは以上だ。それぞれの目で見極めてくれ、コイツの揉め事は即相談だ」

……………取り敢えず問題児である事を仄めかしておくだけにしたが、監視は付けよう。

「起きろ、流石にそこ寒くないか？」

「平気じゃ〜」

玄関前の絨毯を占拠しているクロシエツト、俺の行く先々でこうやって待つてることが多いので、絨毯は良いもの買っている。猫のように伸びをすると、床に押し当てられた谷間と突き出した臀部が強調される。

……………つておい、動くんじゃないのか、また寝る姿勢になつてないか？

「……………クーちゃんんの監視、なのじゃ？」

「クーちゃんつて、……………瀬戸原のことか？」

「そうじゃあー！友達になつたにやー、話がよく合うのじゃ」

「……………主に何の話かは言わなくていいぞ」

DMで意気投合かいいい……………

「……………だから隠れてていうのはあんまり気持ちのいいことじゃないにや」

「監視で付いてるって言うのは言っても問題無いぞ、別に」

「そうにや？………それならいいにや」

………いいのか？自分で言つといてなんだが、

「まあ、監視を気にするような奴じゃないからな、交代制でやってもらうから向日葵と………」

と、ここまで口にした方がいいがメンバーをどうするかで言葉が詰まる。監視にはそれ相応の強さも要求されるが、咄嗟の判断が出来る者である必要がある。向日葵は基準をギリギリクリアしている。が、他だ。クロシエツトは文句無し、アナスタシアやノルン、レアは他で忙しいし、前衛向きでは無いので取り押さえるとき不安が残る。とクロエやアリス、ルシアは取り押さえる点で問題は無いが咄嗟の判断は出来そうにない。それどころか何かやらかしそう。ロザリーは移動に難があるし、アリアはまだ分からない部分があるが、なんとなくクロエと同じグループに入りそうな、

………残るは朝日と月夜、月夜は万能型の信頼イフデイエルノ使徒があるし、適しているが魔法関係は全く駄目、武器に刻んだ空間魔法を使った攻撃はしっかりと使いこなしているのだが、まだ洗練されている感じではない。朝日はスキルが全般魔法に偏っている上に、その他トリッキーなスキルが多く使いこなせていないのが現状、正直、俺でも使い道の分からないスキルがある。………そもそも前後衛の二人一組を想定して作ったのだ、別けて役割を与えても互いに補い合う形を取っているのであまり意味が無い………取り敢えずはまあ、二人共付けて様子を見るのがいいだろう。

「ご飯、出来た………」

今日はアナスタシアが当番か、

「もうみんな揃ってる。冷める」

「行くにやー」

「先生？……一緒にしても？」

食後のティータイム（勿論紅茶）を楽しみながら、まったりしていると全くまったり出来ない人物が同席を求めて来た。由緒正しい家の子なので所作は綺麗なものだが、たまにスプーンやフォークで眼球

を狙ってくる最悪のオプシヨンが付いてくる。

「……………どうぞ」

「そんなに嫌そうな顔しなくても……………」

誰が優雅にお茶してる時に食事の中の修行がしたいんだ？しかもこつちが一方的に狙われるし、普通の皿の物を奪い合う（そもそも陣取りの練習みたいな物）はずなのに直接攻撃、

「先生と同じ物を」

「……………わかりました」

……………クロエ、笑顔だけど殺気出てるよ？

「……………丁度いい機会だし話すか、瀬戸原はあの時からこの世界に来たんだよな？」

運ばれてきた紅茶の香りを楽しむ姿は深窓の令嬢、中身はあれだが、

「ええ、そうですね、確か……………ヴェダって言う祭儀を取り仕切る神らしいですわ、あと破壊も」

祭儀……………ね、どのくらいが対象範囲かわからんな、アナスタシアの舞姫とか俺の芸術の一部のスキルとか関係があるのか、そもそもスキルと神は関係あるのか？そんな考えても仕方の無い事を考えてるとお茶請けの……………クッキーが出てきた。

「あれ？今日はケーキ系じゃないのか」

「ふえ……………申し訳ありません！アリスが食べてしまったみたいで……………」

アナスタシアはケーキとか洋菓子を中心に作るので、よくアリスのつまみ食いのターゲットになる。……………ただ全部食べる様なことはまず無い。それともし全部食ったら多分クロエに相当怒られるだろうが、怒りを感じない。多分食器は何だを渡すのも危ないと判断して要らないものにしたか、それにクッキーはいろんな所の収納に突っ込んであるので便利だし、芦原さんのスキルでも買える。

「じゃあ、先生……………あーん♡」

「……………一人で食べるし、そのクッキーの下に隠した乾燥剤ごと俺の口に入れる気か？」



「うえっ！と、取り忘れてま……………」

また転けそうになったのでクロエの手を引いて支える。

「大丈夫か？落ち着いてやれば出来るよ、クロエになら」

期待を乗せるとプレッシャーになり、動きが硬くなる。が少しでも悪い方に取りられるよりマシだ。目に見えて落ち込むし、気が付くと部屋の隅に行ったりする。慌ただしく新しいお茶請けを準備すべく走り去るクロエ、入れ替わるように口の周りにチョコを付けたアリスが護衛についた。本人には悪いが不安しか無いな、

「……………口の周り、付いてるぞ？」

「……………はっ！ワタクシですか!?ゴシゴシ」

服の袖ー！ちよ、それ……………

ガンツ！

お茶請け（ラムネの菓子とかバームクーヘン小分け等盛り合わせ）を持ってきたクロエに拳骨を貰った。結構いい音がしたな、目に入りそうになっているスプーンを持つ手を箸で掴む。

「……………痛くないと言うのは物足りないですわ」

「わっ！箸さげ忘れてました！」

「いや、ちようど良かった」

「……………それより先生については聞かせてもらえないのですか？」

箸で指挟まれてる状態で言うことか？

「神様の間では空に放り出すのは流行ってんのかねえ、俺も空に放り出された。貰ったスキルでなんとかしたが、……………俺のパーソナルスキルは簡単に説明すると目だ。真偽解析、透視、演算補助、未来予知、それと悪魔系で接触型侵食系、それと迷惑な自爆テロでお陀仏したから炎熱無効、目立つのはこれぐらいだな」

「まあ、それだけあれば何でもできますわね」

「茶化すな、鋏とかはなんで持ってた？」

「欲しいものを聞かれたので、その時に」

俺が耐性或魔法を貰ったのと同じか、さして、

「……………なんで死んだ」

「ギリギリを求めて首を吊っていた所、気が付いたら死んでました」

「あつそう」

一番可能性の高い死に方だが、こんなでも一応生きることへの執着はある。……もつともより快樂を貪るためだが、一番あるのは縄、もしくは縄を切る鉄ないし、短刀を切れない物へのすり替えか、ただ、依然として本人が言ってる理由の方がしつくりくるな、

「それより先生、最後の方は何をしたんですか？」

「なんの事だ？」

「……先生の黒靄が所々モザイクみたいになっていたんですが？」

「………はあ」

「生きてる内は間違いは正させてもらうし、穴があるようなら掻い潜る。パーソナルスキルには未来を見る権能がある。元はそれだけだった、……ここまで聞いていれば未来予知のスキルに関係する事までは分かりますわ」

ふむ……、駄目そうだな、誤魔化してもいずれ分かる。

「………故障グリッチスキル、所謂バグ技みたいな奴だ」

「バランスブレイカー、みたいですね」

「事実そうだよ、魔法やスキルのあるこの世界のシステムを把握しないと作れないしな」

前提としては悪魔系でも傲慢ないし、それに連なるスキルが必要になるが、

「………クラッキングみたいな感じになるんですかねえ？」

「いや、ちよつと違う。か？………ん？、ちよつと待てよ」

説明すんのは難しいのよなあ、これ、あくまでバグ、不具合を起すという点ではゴールは一緒だが、過程が少々異なる。

「例えとしては、ゾンビを自作するようなものかな？こつちの世界には魂というものが明確にあるとされている。そして俺はそれを侵食、分配、変換ができる。まず生きて人間には肉体と魂、それと寿命がある。寿命が尽きると肉体から魂は離れるが、別にそれが全てでは無い。魂の残滓と肉体にある記憶が動かし、魂の不足を補おうとする。エラーを自動的に治そうとするんだ。………さて作り出すとしたらどうやる？」

……まあ、今のところなぜ心臓が動いていないのに身体が動くのかは研究中だが、恐らく法則の上位下位が影響していると考えられる。

「魂の不足を補うと言うのは生きている者を襲うことですか？」

「そうだ、どうやっても人の魂を取り込む事はできないが、目も耳も聞こえない状態で、魂や存在値のある方に動く。魔力を込めただけのゴーレムは基本無視だが」

魔力で魂モドキを作ってデコイにすることもできるから、それをゴーレムに付与すれば人に偽装もできる。………あつ、普通は無理ね、冒険で魔力をそれっぽく認識出来る様にしないと出来ない。これだけ説明すれば瀬戸原なら分かるだろ。

「……死体を用意してそれに適量、魂と定義される物を入れる、ぐらいしか思いつきませんわ」

「まあ、俺ならそうだな、じゃあ魂や存在値を扱えない場合は？」

「………死体を用意するぐらいですかね？それこそたくさん集めて、たくさん殺して、………その中に作った身体を混ぜて増やせないか？とかいくつか仮説を立てて実験しながら」

「……まあそうだな、100%はないだろうが、0%でもない。正直、この力を形にするには51948回、俺のスキルの未来予知に叛逆をピンポイントでぶつけ続けて、今の力になった」

結果、未来視は天啓になった。代行者に丸投げしたが、未来の可能性をある程度操作出来るようになった。30%加算したり減らしたりだが、

「殿下、しよろしよ……そろそろ次の授業の時間が近付いています、準備を」

「そうか？よつ、と………お前は どうする？」

ルシアが囁んだ事はスルーしながらも授業に行く前に武器を取り出す。

「北川先生？こっちに来てからは重い武器も使うんですか？」

「ああ、これは試しに作ってみた奴だ。俺のじゃないが使いこなせそうな子がいる」

「これを……う？授業を見学させて頂いても？」

まあ、興味湧くだろうな、本来欠陥武器とも言えるが、出力だけは高い。あと調整した武器も使用感に合わせて仕上げていくつもりだ。「ほれ、これはハルト、こっちはキリエの、それとこっちは前にはアイデア貫つたのを元に作った奴だ。試しだから合わなかつたら言ってくれ、……ただ特訓とかでは使うなよ？どれも殺傷力高いからな」

ウイルからは防具ぐらいしか頼まれないからな、ハルトは武器が増え過ぎてないか気になる所だが、……まあ、一番壊してもいる。

「今回ののは丈夫さ重視だからちよつと重いが、使いこなせば速さも破壊力も桁違いだ」

ハルトには悪いが、刀を使うのは向いていない。中古を強化した刀も剣でさえ叩き折るため、形は刀っぽさを残して(要望)、片刃の剣にさせてもらった、お陰で強度も改造もいろいろ出来たがやたら重い。

「今のハルトならデメリットは気にならない筈だ、ほら説明書」

最大火力を引き出そうとすると扱いも難しかったりする。……まあ、この辺りは自分にあつたやり方を本人が探していく他ないだろう。

「ロイ、……これマジで危ないからな、一回使ったらここに魔力を流す感じでもう一回使用可能になる。キリエのはここを開けて付属カートリッジを入れるそれぞれ対応する能力があるから確認しておいてくれ」

「北川先生く、私にも素敵プレゼントな武器をくれませんか？」

「………はい」

俗に言う十徳ナイフを差し出された手の上に置く。

「え、これですか？」

「刃を手の平に突き立てられなかっただけでも良かったと思えよ」

「………私は先生の目にどう映っているのかしら？」

冗談に決まってるだろうが、

「さて、時間も無いし、特訓を開始するぞ」

そう言ってから模擬戦用の木刀が無い事を思い出した。仕方ない

のでペイント弾を入れた銃を取り出す。

「塗料は蛍光だから最後にいくら当たったか見るからちやんと躲せよ？」

一時間後

台車に載せられた四人は倉庫の方消えていった。屋根の下に入ると………ほんのり光ってるな、全身が、

「素敵、みんな強いですわね、………次の子たちは」

「さっきの四人にはまだ届かないけど、他の子から比べると頭一つ抜けてる子かな？」

「よしっ、いくぞ！あんな水鉄砲当たるかあ！」

「あたしはいつでもオツケーだ！にしっ」

「あつつい………！もうちよい離れてくんないとわたし本当に焼き魚になっちゃうからね！」

「………集中したいの」

「………キング、お前のパン水弱点だろ」

塗料は防げるが当たる度に重くなると思うぞ、

「あの子達は？」

「………あの火を纏ってるのが、ター ज्याの姉、サラマンダーのシマシマ、隣の人魚がエミル、であっちの静かな子がミネルヴァ、んで、自称キング」

シマシマのグローブは火を付与することができ、燃えない素材（なんかの革、忘れた）で出来ている。効果は防御の一点張りで、一般的な剣では搦んでも傷一つ付かない。エミルの車椅子はアルミ等の軽い素材で出来ているが、意志によってのみ動くため、旋回なども滑るように縦横無尽に動かすことが可能、悪路で無ければだが、ミネルヴァは軽さと丈夫さを両立したシンプルなナイフ、使い手の技量が最も問われる物だ。

「じゃあ始めようか」

「うしっ………まずはあたしのうおーみんなぐあっぷ？に付き合ってもらうぜ」

「んなもん実戦にはないがな、怪我しないように入念にやっつけよ、怠

ると柔軟性は急には無いけど徐々にだが、確実に下がるからな、始め！」

このチームには厄介な所がある。キングとシマシマが前衛、エミルが後衛、そしてミネルヴァの遊撃と伏兵だ、理屈はよくわからんが、ミネルヴァは梟の獣人だが、その特徴は目ぐらいにしかない。フクロウの羽根は羽音も風切りの音もしない、だが彼女には羽根もない。しかし音がしないのだ、足音に至るまでもとても静かなので目で追わなければ気配が辿り難く見失ってしまう。……ただ、前衛が脆い。体制を崩したように見せて誘い出した所に最大効果の発勁をキングとシマシマにプレゼントする。

「ぐへえあー！」

「うえあつ?!」

隙と見せかけて次に繋ぐための震、このあたりの駆け引きを間違えると今のように手痛いしっぺ返しを食らう事になる。

……しよっちゆう使ってる手の筈だが、相変わらずよく飛ぶな、しかも手応えから言って完全に無防備などこに入った。呻いてはいるがぴくりとも動かないし、

「うわあ……………一撃w」

いや、笑つとるやないかい、エミルに向けて発砲すると、難なく命中、

「……………んー！」

あぶね……………ふい、セーフ、間に合った。ミネルヴァの突き出されたナイフを防ぎ、追撃を防ぐ為に一閃、これを掻い潜られたり、凌がれるとキツイ、

カンッ！

引かずに防ぐのはいいが、まだ次が繋がらないな、姿勢が崩れた所に追撃を掛け、三手目で足払いで倒れた所にペイント弾を当てる。

パスツ、パスツ、パスツ、

「わっ…ちよ……………ペツ、ペツ、そこは突きつけるだけでいいんじゃないですか?!」

「一人だけ当てないのは不公平だろ？」

取り敢えずは全員に一発、……………まあ、みんな一発当たったぐらいで終わったなら、塗料まみれになったりしないんだがな、そう思いながらも発破を掛ける。

「さあ、来い！」

「……………そこまで言うのなら、彼女を賭けて勝負しよう」

「望むと……………」

「人を勝手に賭けるな！アホ！」

ハルトの脳天に六角形の棒が命中する。この手のアホは相手するだけ無駄である。ただ、全力でブツ叩いたら駄目だろ。……………ハルトが伸びてるのをいい事にまだしっこ絡んでいるな、あいつ等の目には棍棒にべっとり付着する血痕が視えないのだろうか？受付に行くついでに後ろから手刀で意識を刈り取り、手頃な椅子のある方に転がして置く。無論座るように……………なんか何処ぞの名探偵が時計型麻酔銃で眠らせられてるようにも見えるな、取り敢えずハルトの頭に回復薬を垂らす。

「……………まだズキズキする」

「あの手のアホはまともに相手するな、こつちに損しかない勝負をうけるな、買っても得る物が無い。後々面倒くさそうな奴なら徹底的に潰したほうがいいけどな」

「じゃあ、ああすれば良いのか？」

「……………あれも違うでしょ」

「そうだな」

視線の先にはロイがいるが、攻撃すべてを回避しながら、完全無視で進んでいる。邪魔なので集団の数人に椅子を蹴り込み、膝カツクンで座らせる。まだ暴れてる奴は意識を刈り取りさつきと同じ様に椅子に座らせる。仕上げに最初に座らせた彼等の肩に手を置き、殺気を乗せて威圧する。

「次は、ありませんよ？」

「先生、どうするのが良かったのでしょうか？」

「揉め事が全て駄目とは言っていないぞ、衆目のある所で片付けるならばれないようにやるか、ギルドとかに任せるか、どの方法を使うかは

自分で決めればいい、どうすればいいか分からない時は俺に相談する。わかったか？」

「心強いです。先生」

特にロイの場合、異性からの好意もある為、拗れたりすると大変だ。………もつともアドバイス程度で本人が悩んで出した結論と意志のほうが大事なので、ストーカー化したりする場合はこつちからの対応がいりそうだ。

「さて………」

持つて行きそびれていた依頼を手に受付に………

ガラガラ………

「お父様！」

「マスター………」

ノルンが乗った台車を押すアナスタシアがギルドに突撃してきた。ただこの辺りは椅子がある事からわかるように酒や簡単なつまみも提供している。

ガッ！

「痛でえ！」

………小回りが効かないからまあ、当たるよな、台車に乗ってたノルンは前方に放り出され、地面に熱烈なキスを決めた。

「ごめんなさい………」

「おおおう………じよ、嬢ちゃん達は、何ともないか？」

「大丈夫、ノープロブレム………」

「それ、私が答える所では？」

「それより、………ヒール」

まあ、みんながみんな絡んでくる訳じゃない。アナスタシアはおつちちゃんの足にヒールをかけている。ノルンを心配してるのは本心だろうし、

「連れが迷惑をかけた、申し訳ない」

「い、いや礼を言うのはこつちの方だ、回復魔法までかけてもらったしな、元気なのはいい事だぜ」

悪い事をした時は謝る。先生として教えた事を守れないようでは



生徒に示しがつかない。

「そう言ってもらえると助かる。……………おい、全員集合！今日は俺と一緒に討伐をやるからな」

湿地は長期間いると消耗が激しい。体力もそうだが、精神面の負担が侮れない。討伐対象は表皮が厚く生半可な攻撃を受け付けられない。傷を追わせても致命傷に至るには深くまで届かせないといつまで経っても倒せない。

「今回は同じパーティーとして動く」

「そ、それほど相手なのですか？」

「いや、テストも兼ねて実力も見ようと思ってな、今回の魔物はちよつと前のお前達では倒せないと思つてた奴だから、多分今のペースで強くなつてるなら勝てると思つうの見繕つたんだ」

「先生が一緒なら何でも楽勝だぜ」

「まあ、俺一人でも勝てる、……………要は、競争だ。勿論、焦つたり無理せず堅実に、な」

「……………そろそろ来ます。大きい！」

真理と千里眼を併用し、討伐対象を確認する。

キングスケイルスパイダー

スパイダーと付いているが、大きいタラバガニ、なおタラバガニはカニの仲間ではなく、ヤドカリの仲間である。

……………異世界でもこの辺りは一緒なのか？

そんな事を考えながら振り降ろされた爪を躲し、弾き掻い潜り、関節に浅く切り込みを入れる。しかし、色合いが見事に茹で上がつてる感じなんだが、

「いいいいあつ！」

ウイルの拳が甲羅を捉える。……………うお、こいつ前進出来るのかよ。

《スパイダーですから》

やかましいわ！なんでそんなとこだけ取つてつけたように持ち出してくるんだよ、

「くらええええ！」

ハルトは高速で回転しながら爪を躲し、剣をド真ん中に叩き込む。  
「おおおらあー！」

少し時間差があつてからカニの巨体を吹き飛ばす。

「ちゃんと使いこなしてるみたいだな」

「アクセルブレードBB、……………これ凄いな」

あまり多くの魔力を運用するのが得意じゃないハルトには外部でチャージして開放する方がいいと思つたのだ。モードは二つあり前者は爆発による直接攻撃、もう一つは推進力に変換してさっきのように回転しながら爪を躲して、間合いの内側に一気にとびこんだりも出来る。パワーが足りない時や強引にでも振り抜きたい時にはこつちが役に立つ。ただ、使用者を焼く高い熱を発するが故にこれを使うには炎熱無効のような高い耐性が必要になる。そしてハルトは赤狼か<sup>フレアディザスターウルフロード</sup>ら灼炎狼帝になつたことで炎熱無効と炎熱吸収を獲得、再吸収により効率的にこの武器を扱えるようになった。

「オラオラオラー！」

欠点は魔力を再充填しなければ次を使えない。貯めてある魔力が空になってからは殻に傷一つもつけられてない、魔力を込めながら戦うのは少々コツがいるんだよなあ、そこら辺は追々できるようになつてもらうとして、「ハサミが来てるぞー！捕まるな！」

「……………わかつてるってえの！」

クイックで魔力を込めて、それを撃発して起こした爆発で後ろに飛ぶ。あの剣には充填可能な容量は決まっており、段階にして6段式でブースター、バスター、三点バースト、フルバースト、クイックの5つのモードがある。三点バーストは3段回分を開放して攻撃する。フルバースト溜まっている魔力の全放出、そしてクイックは強制的に一発分を吸い上げ、次の攻撃で放つ。その為込める時間がない時は便利だが、強制的に取られるので一回使うと直後に力が抜けて隙になりやすい。

「モードがいっぱいあると機能的じゃないし美しくないからな、グリップセーフティ兼安全装置がブースター、人差し指辺りにセーフティの上に取り付けたボタンがクイックだから素早く切り替えられ

る」

「バスターとかは？」

「……………大変だったよ、そこが、バイクのアクセルみたいに捻れば切り替わる。ポジションとしては一回使うと必ずバスターに戻る」

「ばいく？」

ああ……………バイクが伝わらないのか、強度を維持しながらこの構造を実現するのは大変だった。燃るとグリップセーフティが段階的に沈むので加減も分かりやすく、握った状態を維持すればそのモードで止める事もできる。……………その為フルバーストでクイックを押す場合は貯蔵分と加えた魔力の全放出、いわゆる手動モードになるため、フルバーストで火力不足な場合はこれを使う他ない。

「はっ！」

キリエが棒を使つて叩く。……………ただ、キリエの武器は対人向けなので大型の魔物には効果が薄い。対魔物用の武器も作るべきだな、ロイの風魔法も体制を崩せるもののダメージにはなっていないな、植物を絡ませても千切られてるし、……………ダメージになるような攻撃はハルトぐらいしか入れられていない。ウィルの攻撃は届いて入るようだがダメージが少な過ぎる。

「Welcome to Fear」

カニの関節を弾丸で撃ち抜き、動きを止めて解体す。

「ふうう……………」

カチン、バラバラバラ……………

上手にできました、と、

「課題点も見えた来たし、改善しないとな」

ハルト以外は対人重視だったから、そこら辺見落としていたので、武器を増やさないといけないな、

「やはり防御の硬い魔物は攻めきれませんね。弱点がわかりにくいですし」

「ロイの場合は経験を積んで養って行くものだからな、今はそれで良い……………ただ予想より武器の火力を増やさないと真正面からは厳しいな」

「なあ、先生はどうやってアレを斬ったんだ？ 甲羅とかヒビは入るけど、全然斬れねえし」

「甲殻で覆われてる生き物全般に言える事だが可動部、関節の可動域の外側は固い殻で守られているが内側は動かす為に殻がない。少なくとも外側より内側の方が殻が薄いことが多いからそこから刃を入れたんだ」

「先生、魔物が逃げ出しました!」

「……………え？ マジで？ 足全部斬ったけど？」

《自己再生を持つているため二十秒あれば移動できる程度の足を再生する事ができます。》

油断も隙きもねえなあ、おい、と言っても動ける最低限なので簡単に追いつける。

「Now, it is cooking time!」

土魔法で作った調理台の上に点火するだけなので技でも何でもない。空砲で、

順番は逆だが日本酒もブチ込み、蓋をして酒蒸しでいただく事にする。

「喰えそうだし、ここで飯も済ませて次に行こう」

「……………食べてしまつて良いのですか？」

「これは討伐依頼だ、死体や素材はこっちの自由にできる依頼だったから、遠慮しなくていい。喰えるかどうかはスキルで確認したから大丈夫だ、毒も無い」

追加でさつき斬つた足も追加で入れとく。流石に即席で生やした足は食うところなさそうだしポイツ、させてもらった。出汁とりといてもこの量ではたかが知れてるし、見てくればかりで中身はほぼ空だ、

「次つて、何の討伐依頼になるんでしょう?」

「先生これで鎧とか作れない?」

……………頑丈、かもしれないけど重いし、俺が式を書いた服の方が強度はある。……………それに丸ごと酒蒸しにしたし、頃合いをみて蓋を開けると綺麗な……………元からこういう色か、臭そうだし、見た目ふざ

けてるようにしか見えんだろうな、その上魔物の素材ってやたら相性にうるさい上に部位毎の強度も違う。金属はその辺は均等だ。材料を溶かし、削って留めたり、繋いだりすれば良い。

「そこら辺の魔物の素材では買い集めてる金属を超える素材があまり無いんだよ」

一つの属性に耐えるなら超えられるものは多いが、総合力で大幅に劣る。

「ほれ、早く喰うぞ」

《警告：本拠点に侵入者が接近しています》

「……………キリエ、これ」

「これは？依頼表？」

「少し予定外の事が起きたから、行ってくる」

付箋を千切り、拠点へ帰ると西向きの壁を切り拓く。それと同時に空中に舞った丸太を敵の眼前に蹴り込む。

「用件はこのまま聞こうか」

「待ってくれ！俺達は争うつもりは無い！ただ……………」

「迷い込んだだけ、か？背中の獲物に手を掛けながら言われてもなあ？それと付くならもうちよつとマシな嘘を付け、そうやって近付いて首筋に一太刀毒付きの短剣で斬り付けるのがいつものパターンだろ？」

「……………」

「無言は肯定と受け取る。爛旋迅」

拠点として開いた場所を囲う森林を炎の竜巻で焼く。これでお仲間が再起不能だ。この炎は死体も残さず焼くといった高温の類では無い。通り過ぎたなら呼吸困難に皮膚に重篤な火傷、付近を通るだけでも遠赤外線が満遍なく皮膚が爛れる上に風魔法で擬似的な上昇気流を作り、火力を上げている為、吸い寄せられる効果もある。前やった火災旋風を起こす魔法を対人向けに効率を上げた物だ。

「俺は未来を見るスキルと嘘や隠し事を見破るスキルがある。後は言わずとも分かるよな？」

「この……………、化物が！」

「ここに来た段階でお前らは詰んでる。」

「……………俺も殺すのか?」

「ああ、生徒を守るのは教師の……………仕事だ。お前の行いは生徒の安全を脅かす、命に関わる行為だ。残された者に伝えて欲しい言葉はあるか?」

「……………すまなかったと、伝えてくれ」

「分かった。……………葬却塵」

男の体は一瞬で消し炭になり、その灰を風が攫っていく。

「カモンベイビー!!」

「カモンベイビー!!」

「アーユーレディ?!」

「Let's rock!!」

「Goodbye to the boring day today!」

「Now, let's dance like crazy?」

「And to satisfy me with your blood……………」

「にやあー!」

早速お礼参りに来た訳だ。魔力で動くバイクを使ってドアを破って突撃した訳だが、……………おまげが多いな、喋った順に俺、レア、ルシア、アリア、月夜、朝日、瀬戸原、最後にクロシエツトと、はつきり言って過剰戦力だ。見学と言いつけてあるが、置いていくと何するかわからんし、仕方なく瀬戸原もいる。正面にいた見張りをウイリーで壁とタイヤで顔面をサンドイッチしてやる。

「な、何だ今の音は!」

向かいの扉から仲間が出てきたか、タイヤの向きを直してエンジンを蒸し、アクスル全開でドアごと吹き飛ばす。

バン!

「おいどう……………」

パンパン!ババン!

ガキゴキバキバキパキツ!

ヒュン、ボタボタバビチャ!ドシヤ、

ピシツ!パリン!

扉を開けて入ってきた瞬間に痛みを感じる間もなく瞬殺される。ある者は眉間を撃たれ、ある者は首が二回転半して崩れ、またある者は空を斬る音共に人の形を留めることなく床を染め、そして凍らせられ砕かれる者、

「一瞬だな………とりあえずここに設置」

「はいー」

「じゃあ、小生はこっちから刻む」

「姫は、姫はくこっちから、萌え萌えさせちゃうの〜」

「それは………放火じゃないのか？あ、殿下、指示は何かありますか、みよちろん、………勿論私に出来る事でしたら」

「惜しかったすっね」

「噛んだにゃ」

「ふふっ、何だか楽しいわあ」

騒々しい上に緊張感も無いがなぜか安心出来るんだよな。

カチン、

「ふうう………、さて、全員付箋は持つてるな、帰るぞ」

一瞬にして見慣れた部屋に帰ってくると、千里眼で後を確認する。

………見たままの結果になったな。と言っても、天啓の結果なので見たと言うよりシミュレーション通りといったほうがいいか、

「北川先生、今回はだいたいぶアツサリしてますね。こういう時、どんな手でも最後はほとんど直接手を下すのに」

「殺すと後が面倒だからな、次は無いと言う警告と嫌がらせだな、保証は半壊までしか受けられない程度に壊したからな」

まあ、半壊は半壊でも立て直した方がいい半壊なのだが、住めるけど自己責任のレベルまでしか直せないからな、あれ、

「そういう事ですか、先生らしいと言えば先生らしいですね。回りくどいけど一番嫌な手でしょうね」

喧しいわ。半壊と一部損壊、この基準は結構いい加減だ。壁、モルタルが大幅に剥がれる地盤沈下からは半壊、亀裂程度では一部損壊になるのだが、外見から自治体の職員が判断する。地盤沈下等分かりやすい物は簡単に半壊の認定を受けられるのだが、亀裂と言うのはかな

り危険な物をあれば比較的軽度の物もある。この辺りは専門的な知識がなければ見分けはつかない。一部損壊と半壊なんてどっちでもいいと思っっている人もいるかも知れないが、これが保険や国からの支援金になると全く違う。当然半壊と大規模半壊も、

「一部損壊、半壊、大規模半壊、全壊の4段階で評価される。それはこつちにも持ち込まれてるからな」

勿論街や国ごとに違ったりするが、損壊具合によっては判断が適正では無い事がある。大概災害時の基準だからな、市町村の職員を総動員しても何日かかるやら、だからこそ再度見てもらうことも可能だ。当然短い期間内に状態が悪化した等のケースに対応する為のものだが、……………この世界では一回限りだったな、精度はこつちのが低いのが、賄賂という切り札があるのがね、

「……………そのときはそのときか、藤白のとこ見てくる」

「……………サボってたな、へっぴり腰、重心が不安定、……………その振り方は手首に負荷が掛るからやめろと言っつたはずだ」

崩撃雲身双虎掌、バーチャのコンポがガッツリ決まった。壁画の如く壁にめり込んだ藤白を見ながら直前に隔離した刀を引っ張り出す。重い武器を苦し紛れに振ると当たってもたいした威力にならないのは構わないとしても、余計な負荷が掛かるのは見過ごせない問題だ。身体を絞れ、とは言ったが怠けるとは言っつてない。洗練が必要なのだ。ルーティンや素振りは無駄無く行わなければ必殺の一撃も致命的な隙になる。

「お前の振り下ろしは十分仕上がってる。後は機を観る事とその型を自分のものにして効率化する事だ」

前者は戦闘経験を積んで、後者は徹底的に素振りと自分の動き等の見つめ直し、戦闘経験は……………、

「ウィル、相手をしてやってくれ」

「はいー」

「ええ!!大丈夫なんですか?!」

「二人とも丈夫だ。なんとかなる。ヤバかったらコレ使え」

回復薬をキリエに預けとくと芦原さんのほうに向き直る。



「いつ見ても勝てる気せんのお……………」

「芦原さんは我流ですからね、ひたすら実戦の方がいいので…………ハルト」

「凄い嫌そうな顔されたのでハルトに相手をしてもらう。ハルトも実戦で大きく成長するタイプだし、ちょうどいいだろ。」

「先生、お時間よろしいですか？」

「ロイか、ああ、いいぞ」

「実は…………暫く故郷に戻ろうかと、勝手なことを言ってい……………」

「お前のやりたいようにやれ、ここに戻りたい時に遠慮はいらない。」

「…………それと、お前がやりたい事は俺がやりたい事かもしれないぞ？」

「それから、ロイ、それはお前がやらなきゃいけないことか？それともお前だけでやり遂げたい事か？」

「…………出来るならやり遂げたい、です。一人で」

「…………ほら、ただのエルフだった頃には使えこなせない銃だ。こつ

ちがチエスカー・ズブロヨフカ75（Cz75）とベレッタ92、後

はインパクトコントローラと消臭剤、催涙缶、フラッシュバン、一年

そこそこでハイエルフになったんだ、錦を飾るには十分だろう。後は

錦そのものがあるが…………そこら辺は俺じゃない奴に見繕ってもら

え、何分機能美も兼ね備えた物じゃないとてんで疎くてな」

「……………ハイエルフですか？」

「言ってなかったか？」

「……………はい」

「もう少しでエンシエントだぞ？」

「そ、そうなんですか……………」

「ああ、先祖返りでは3人目になれるぞ？」

「この世界の人以外の種は進化する。それはエルフや獣人も含まれ

るがいずれも進化には方向性がある。ハルトは火に加えて土と闇寄

り、ロイは風と聖、植物に電気の魔法適正を得る。適正以外にも特殊

な耐性を得る場合もある。そして進化に至るには途方も無い努力が

必要になる。」

「僕、ハイエルフになってたんですね…………あの！」

「方針は決まったか？」

「いえ、その前にいくつか聞いても？」

「答えられる範囲で答える」

ロイの質問に答えながら、特訓の方にも意識を向ける。……生徒の方が優勢だな、ウィルは攻撃を躲し、攻撃しているが時々弾いている。弾かれてもすぐ立て直せばいいが、藤白は仰け反り身を躲すこと防ぐことも無くモロに重い一撃を貰っている。アレを貰って戦えていると言う事は頑丈さとタフネスは鍛えられているようだがセンスの方はからつきしだ、ハルトの方は……

ブン、パアアン！ゴウツ！フン！

空を切る音、爆発、急加速、息をつく間もない追撃に芦原さんがついて行けてないな、ギリギリの所で捌いてはいるが、長くは保たないだろう。……あつ、それはブラフ、

ゴツ！……ガシャン！

あーあ、結構高いんだよね、この世界のガラス、弾いた際に姿勢を崩したフリをしたハルトに、追撃をかけようとしたのだが、威力を絞った爆発で煙幕を作って飛び込んだ所を峰の向きにしてからフルスイングで振り抜かれた。芦原さんに隔離を介して回復薬をかけておく。変則的な攻撃に容易くは押し返せない力と重量を兼ね備えたコンボをすべて凌ぐのはかなり難しい。最悪弾かれそうになったら爆発やブーストでゴリ押し出来るしな。

「よっしーか……っただけど……」

「やり過ぎだこのアホ！」

「ははは……また金貨四枚」

「……はあ、全くあいつは」

「加減は良かったと思うぞ、あと少し上だったら肋骨が折れて肺に刺さってただろうし、場所も考えられるようになれよ、戦いを有利に進められる物もあるからな、壊したくない物にも注意な」

「あたた……、そうやで坊主、おじさんは回復薬では治せん体のガタがあんねん、そんな馬力でやられたポッキリいつてまうで」

「芦原さん……それは姿勢が原因ですよ。ハルト、二分待つてくれ」

「うげえ！ちよつ、待てて、体もたんて！」

にくがくさん！

「まず、デスクワークが原因の腰痛、続いて肩こり、左右の調整に……」

「あだ、いつ！タンマ！」

「仕上げに針……こんなもんでいいか、コレをだいたい二分後に抜けば良い。あ……抜き忘れだけ注意な、28本数えてあればいい」

「わかったぜ！先生」

「さて……ロイ、さつきの計画の方向性はそのまま、細かい所を詰めていつてくれるか？」

「はい！」

「結構は三日後以降で頼む。ちよつと約束しちやつたことがあつてな」

「構いません。先生が居なくてはうまく行かないでしょうし」

「……あの、なぜ海に？」

「苦情があつてな、湖ばつかりでほぼ外に出られないし、どつか連れて行って、ずつと我慢して貰う訳にも行かないしな」

……実際、ベルナー観光の時ぐらいしか連れて行けてないしな、あの頃より人数も増えたのもあるが、

「エラ呼吸とか肺呼吸も淡水、海水も関係ないが乾きが大敵だからな」

セイレーンは自分で水系の魔法を使い、乾かないようにする事も出来るが魔力も使うし、体力やら色々消耗するのだ、自分で歩ければそこまで消費することも無いのだが、人魚の様に上半身は人だが、脚は魚のようにヒレがあり鱗に覆われている。跳ねることは出来ても歩く事は出来ないし、地面の状態によっては鱗が傷だらけになるし、元々泳ぐためのものだしそこを考慮すれば水球を作りだし、浮かせてその水球ごと移動するのが最善なのだ、……よつて魔法の難易度や消費魔力が跳ね上がるので長時間は厳しいのだ。

「あの……前見た車椅子とかは？」

「あー……うん、試してもらったんだけどね」

保湿性の高い素材は座り心地が悪いと不評(現在こつちを採用)、座

り心地がいい素材を使うと今度は水分を弾いて、周りがビチャビチャになり、それを踏んで車輪が滑ったり、接している箇所が部分的に乾くという問題が出てきた。

「……………最近では活魚を纏めて入れるアレに入ってもらってらるからな」

あの、体育館でバレーボールとか入れてる軽いビニールの奴に似たのに入ってもらっている。なんやかんや楽しそうだが、安全面がな、

「お前も遊んでこい。テントの方になんか来てないで、ほら」

「いや……………あれに混ざるんですか!？」

「……………ああ、いやうん、無理、だね」

……………海でやることじゃないと思うけど、足がつかない沖の方で水球してる。水球?だよな、その、速度がね、テレビで見たのと比べ物にならないほど速く激しい。右往左往するボールと目まぐるしく変化する状況がそれを物語る。深いし、速いし、到底ついていけない。それと……………

「わあ!それ取って!」

「ちがつ!ちよつ!引つかかっているから!」

「待つて解けてる!」

接触と言うか揉み合いになるのだが、乾きは大敵のセイレーンは体の表面を水分で覆われている。なので布の服のような物を身に着けるとそこから水分が抜けてしまう。なおかつ陸地に殆ど出ていかないため、貝殻やら綺麗な石とか海藻、漂流物で身を飾る。セイレーンは力の強い種族ではないし、女性のみ、あまり多くの物を身に着けると泳ぐ速度が遅くなるので、身に危険が迫った際逃げ切れなくなる。……………まあ、これだけ長つたらしく説明したのは、種族によって体の成長スピードが大きく違う。例えばエルフは少年、青年の期間が長く、長い寿命から見れば老人と言える期間は短いのだが、同時に少年と言える期間も人と比べて長く、ロイは19才だが、中学生くらいにしか見えない。だがセイレーンは少女と言える期間が短く、成長が早い。一番幼い10才の Emil は20歳と言われても納得できる。……………もうね、目のやり場に困るんだよ。見た目セーフなロイでも精神年齢で言えばアウトな訳で、その上唯一とも言える水着がはだけ

る。流される。ぶん取られる。同性以外入っていけないだろう。それでキヤツキヤツ言ってるんだがら、あつ、こら、そのまま泳ぎ回るんじゃない!

ピー!

「ちゃんと着けてから泳ぐにゃ!」

クロシエットが海面を走りながら追いかけている。……審判任せといてよかったよ。

「キヤツキヤツウフフな上に弾んでますね……まあ、私は弾むほど無いんですけどね」

いきなりの自虐、……どうした?

「……あのあのく私の胸を見て分かりませんかね? 複雑な乙女心が」

「あ、うん」

「反応薄くないですか? だ・ん・な・さ・ま?」

……なんか圧迫感があるな。

「俺が見た目や作業で手を抜くと思うか? それぞれが完成なんだ。ただ美しさや可憐さの様に目指す向きが違うだけだ」

「私はなんでしょう?」

「……確か清潔感や清楚さ」

「間は気になりますが一、ただただギヤグキヤラではないんでね」

「お前の言動のせいだからな? 思い出せてもそれがしつくり来なかったんだよ」

ギヤグキヤラのほうがしつくりくるんだよね。……よくふざけ、ネタ発言をする奴だが、気も効くし、細やかな配慮も出来る。客の対応に全く心配がいらぬのはレアくらいだ。他だところはいかない。普段は当たり障りが無いが、地雷を複数所持しているクロエパターン。そもそも対応、礼節の面で問題があるアリスパターン。俺以外にはまともに対応しない向日葵パターン。対応そのものは完璧だが、見た目が話し合いの場にそぐわないアナスタシアパターン。これらに該当しないのはレアだけだ。

「あ、飲み物ながいいですか?」

「コーラで、ロイは？」

「お、同じものを」

「……………オススメはジンジャーエールと果樹100%ジュースです。」

妙な間に違和感を覚えたので思考働かせる。まずコーラについて無いと言わなかった。無かったとして二種類程度なら選択肢を用意する筈、その上、ジンジャーエールは人気が無い。余っているだけの可能性もあるが……………ん？入れ物は？服の収納か？

「……………まさかとは思うけど、ここでも悪ふざけする気か？」

「ワア……………サスガスルドイダンナサマー（棒）」

砂の上に出現する容器、その中にはコーラが入っているが、その容器がメスシリンダー、……………出現場所はレアのスカートの真下、  
「……………お前、やって良いことと悪いことの区別はついてるよな？」

「な、なんのことでしよう〜」

「先生？僕にも分かるように……………」

「わからんでいい！わかったところで得するものでも無いしな?!」

「そ、そうですか……………?」

「あー、それとなんですけど〜、バーベキューの準備ができたのでみんなを集めてもらえますかー？」

千里眼のスキルがあるお陰で目の届かない所はない。……………元の世界でこのスキルがあればどれほど引率で付いていた時、苦勞しなくて済むか、それを感じなかった日は無いな。それでも昔と変わらず、呼びかける為にコーラで喉を潤す。

## 吊るされた男（修練者）の目指す境地

あく、揺れる揺れる。上下に揺れる。

ガン、ガタンー……………ゴトツ！

「のお、坊主、ほんまにこの道でないとかあんのかあ?!」

『注意しないと舌噛みますよ?!』

『この道で合ってる。オーバー』

「べっ！べん……………つり！なスキルでつ、すねえ！」

念話というスキルを習得できたのは久米さんのお陰だ。ローンのスキルで念話を習得して貰い、それを俺が冒険で貰って存在値を交換して返却、そして指導で俺が教える形を取り、前借り分の経験を積んでもらったのだ。ちなみに久米さんは別の車を運転してもらっている。こっちは芦原さん、車はエドガーの紹介（この前のパーティーのお礼）で買わせてもらった。

『……………ここまで揺れると作業できないな』

「あんたまだ人形作るつもりなんかい?!」

やべ、漏れてた。

『念話って結構難しいですよ。特に特定の一人に伝えるとなると……………ですよ。』

念話には結構欠点がある。まず距離。車間距離が少し空いただけで届かなくなった。これはスキルを鍛えればなんとかなるが、交互に伝達しないと、強い思念の方が弱い思念を掻き消してしまう。そして消されたかどうかは相手の反応からしかわからない。練習中いきなり無言になったりすることが多々あった。これはまあ、俺が掻き消してたんだが、不便な点ばかりではない。例えば―

『ロイ、あっちのメンツともやり取りするか？ハルト、久米さんの背中に手を置いてくれ、ロイは俺の背中に』

『おっちゃん、ごめんよつと、これでどう……………』

『そうすれば思った事が伝わる』

『……………ハルト、聴こえてますか？』

『おお！すげえ！』

触れている相手の思念を飛ばす事で会話する事もできる。……  
まあ、大したことでは無いがこういふことの説明とかないんだよね。  
ついでに言うとなぜ道がガタガタなのかは今走ってるのが木の上だ  
からだ。

『舌噛むと大変だからこれでやりとりをしよう』

芦原さんは運転中なので俺が肩に手を置く形を取る。

『これで聞こえるようになったんか?』

『はい、大丈夫です』

『ほお、便利なもんやのう』

『道についてなんですけど、決められた道以外だと自然の罨が多いの  
と、他は獣道ぐらいいしか無いので車は通れないんです。』

『決められた道ってなんや?』

『自然の罨、だろ? オーバー』

『はい』

『どういうこっちゃ?』

『運転中なんでアレですけど……』

ケタケタケタツ!!

シャンシャンシャン……

「おい……なんやあれ?」

『喋ると危ないですよ。さっきの笑ってたのはシザーズマンティス、  
密林の首狩り族とも呼ばれていますね。さっき飛んでったのはブー  
メランフルーツの種ですね。刺さった動植物から養分や水分を吸い  
取ってまた実をつけます。……』

ボンツ! ガツ!

「お、おい! なんかわからんもん轢いたど!」

『……キメラプランターですね。動く者に取り付いて養分を吸い上  
げる植物で寄生する対象を決めるとそこに根をはる特徴があります。  
まあ、宿主がそれでも動ける場合はそのままですけど、それと魔物で  
は無いです。間違えられがちですが、オーバー』

『そうなのか?』

『魔石がありませんからね』



『このタイプ苦手ですね』

ハルトの後にウィルとキリエからの意見もあったが、ただの動物と魔物の違いこれぐらいだ。見つかってないだけで持つてる奴もいるが、ただこの違いは結構めんどうい。ギルドってのは色々あるが、魔物の討伐、駆除は冒険者ギルドが担当しているが、動物、害獣は傭兵ギルドの管轄だ。昔はこうじゃなかったようだが、滅多やたらに組織が出来た為に役所並にたらい回しにされる。街によってはアバウトなのだが、厳しい所は刑罰があったり、組織同士が対立していると仕事の取り合いや妨害にあつたりと、ホント面倒くさい。

バンツ！

「おい！屋根は不味いやろう！」

『あゝ……………すいません。それはクロシエツトですね。オーバー』

そういえばクロシエツトに役割を言っていなかった。今日は瀬戸原担当じゃないし、特に振る役割も無い。好きにして良いと言えば必ず付いてくるが、……………というより役割を振られていないのを大義名分に付いてきている気がするが、

「みやく、みやく、今日は何するにやー」

『あのあのこつち開けますよー』

後ろに座っていたレアが車の扉（走行中）を開ける。一瞬空いた僅かなスペースに空中で体を捻りレアやロイを躲しながらクロシエツトは車内に入る。

「あれクロシエツトさんは？」

「むふう……………」

まあ、見えないだろうな。俺は分かるが、

『……………クロシエツト、何故に俺の膝の上にいる？オーバー』

「座る所が無かったからにやー♪」

しかも前向きに抱きつく様に座っている。向き合う形になる上に密着している。気付かない訳ないだろ。ワゴン車の様に天井が高くなかったら、シートに膝立ちは出来ないしな。そしてこれが俺の移動中の最後の記憶となる。

「……………死ぬかと思つたぞ」

「それはこっちもやな。まあ、意味ちやうけどな、そっちの方が幸せそうやし」

「そうでもないですよ。一瞬で視界を塞がれかなりの質量を持つ物を顔に押し当てられて窒息するのは」

「丁度息を吐いた直後だったのも相まって窒息した。胸で、

「にやう……………、ごめんなさいにや」

「あのあの、勝手に付いてきて何やってるんですかー？このバカ猫は〜？」

「加減を知らないんですよ。私も散々引つ張り回されましたよ。」

「反省……………しなさい。」

「姫も、やりたかったな〜」

「……………」

語気は変わらないが言葉の節々に棘があるレアから、転移先を設置する際に連れ回されたノルン、ジト目のアナスタシア、あとそういう話じゃないと思う朝日、一番怖い笑顔のクロエ（無言の圧すげえ）の順に文句を言われる。

「まあ、そろそろ行こう。まず、宿を取って車を預ける。空いてるのは……………ここから30分の所だな、暫く道なり」

『コスパと距離を総合し、再検索……………空室がある宿では現在候補の宿が最適でしょう』

「代行者さん、久し振り。解析とか計算終わった？」

『大半は終わりました。』

「……………ちよつと用が出来た。レアだけ来い」

「はい、なんでしよう〜？」

ガチャ

「んじや」

「ちよ、待てえやあ！」

レアを隔離して歩道に着地、レアを隔離から出して、横道に入る。勿論扉は結界で締めました。

「あのあの、私は何をすればいいのでしょうか？」

「それに入る前に、そこで土産を買っておこう。」

そこというの『本格スパイス』とか『フライドポテト』と書かれたのぼりが目立つ店だ。

「すいません。スパイシーポテトを20個下さい」

「毎度！お代はここに」

カウンターのの上に銀貨三枚を置き、店員がレジ袋に……………

「その袋は？」

「ああ、これはコンビニ袋と言うもので何年か前に召喚された勇者が技術を残したものだよ」

今回の問題はコレだ。自然に分解されないゴミ、エルフの街はあまり貿易は盛んでは無い。が、森の中には複数の街があり、その間での物のやり取りが盛んだ。……………昔は隠れて暮らしてたそうだが、街は何処その電気街（自然に囲まれてるけどな）屋上のでかい木は周囲の木々に同化させられ街を隠しているが、夜は電飾で場所がモロバレなのだ。

「そんなに頼んでどうするんですか？」

女に荷物をもたせるの？？みたいな目をしているが、隔離で芦原さんの方に飛ばす土産なのだ。いつくかはこっちで食べるが、……………うん、美味しい。味付けは塩と香辛料とシンプルだが、粒の大きさ単位で拘るだけの事はある。特に香辛料は細かく挽かれているため香りも飛びやすい。ホールスパイスの状態から一日三度も挽く徹底したクオリティ維持。ピリツと辛いのが、次に手が出るあと引く旨さだ。

「おお、これはいいですねー」

エルフは長命だからな、経験を積んできた時間が違う。千里眼でここを見てるといろいろ勉強になる。それ故、この問題は取り分け深刻とも言えるだろう。

「……………もうないな」

「食べますか？」

「ん？ああ、悪いな」

レアの方に手を伸ばすと引っ込められた。解せぬ、

「っんふうー」

口に揚げた芋を啜え、目を閉じてこちらに近づいてきた。

「んふう〜」

「……………何してるんだ？」

一分ぐらい言葉を交わすことなく、白けた目を向け続けると、流石に諦めた。

「もおー、乗り悪いですよ〜？折角、キスするチャンスだったのにー、そんなんだと〜フラグ折れちゃいますよおー？」

「……………そういう事油物ですか？」

「え〜、そういうこといいますかー、キスした後〜、グロスの様な照りも付けられるしー、…………唇舐めても自然じゃないですか〜」

「……………」

「なんですかー、その冷たい目〜」

「……………」

「あのあの〜、私をもつと色々使う為に…………私の初めてを旦那様が貰ってくれませんか〜？」

レアは他のオートマタとはかなり違う。簡単に言うとは代行者によつて合理性を追求された構造は既存の物とは大きく異なる。個々に違いはあるものの、そんな中で最も既存のオートマタに近いのがレアだ。

「……………分かったよ」

「よつしやあ〜！ポテト無しでいいですね？ほつぺとかおでこは無しですよおー！」

捲し立てるように早口になったな。普段のゆったり口調はどこいった。

「おい……………」

「……………ちよつと、屈んでくれませんか。旦那様？」

……………この野郎、きつちり逃げ道塞ぎやがった。目開けてるし、もし違う所にしようとしたら唇に補正する気だ。

「何ですか〜？その引き攣った顔、……………ここにお願いしま〜すっ！」

普段よりコロコロと表情が変わる。正直可愛い。覗き込む様にしやがんだ瞬間だった。

ガバツ！

抱き着く様にと言った甘い物ではなく、それこそ格闘技の絞め技の様に正面から首にぶら下がるように掴まり……………

ちゅっ、べろ、れろっ、あふっ……………

おいっ！ぐおおお……………離せええ！声が出たなら言えただろうが、言えたなら多分離れてくる。プラトニックなキスで良かったろうが！流石に首にガツチリ掴まれた状態で逃れるのは無理だ……………というか長いな！

ちゅぱっ！

「ふはあく！我、至福の境地に至るー。」

「……………おい、言いたい事はそれだけか？」

「……………ええくく、嫌ですねぇー、キスはキスじゃないですか？」

なんて言いながら口元を手で隠し、ニヤニヤしている。

「街中ですか？デイーブな方を」

「……………もしかしてー、マジおこですか、キスした女の子に拳が炸裂する系ですかあー……………流石にないですよねぇく？」

「さて、覚悟はいいか？」

助走を付けるため距離を取る。後は一気に詰める。

「うえっ！待ってくださいー！」

普段より圧力を掛けたお陰で狙い通り目を閉じたな。目前で静かに止まり、前髪を持ち上げてレアのおでこに優しくキスをする。

「ふあく……………」

「どうだ、俺からの気持ちは？」

「……………完璧な不意打ちですね、ドキドキの意味が変わりましたー。えへへく」

「そうだな、俺は不意打ちするのは好きだが、不意打ちされるのは嫌いだ。」

油の切れたロボットみたいにぎこちない動きで首だけが正面から逸らされていく。当然逃さん、

「……………やるんですか。この流れでやるんですかあー？」

「やる（怒）」

にっこり微笑んで見せる。

「ま、街中ですよ……」

「今まで気にした事あったか？」

「……そうでしたねー」

「呼吸は力の増幅と調整、歩法は効率と運用、そして積み重ねて来た経験と知識が技になる。そして……これはクリリンの分のだ！」

このアツパーも大分打ってきたからな。顎を芯捉えた。高く打ち上げられたレアは僅かな空の旅を終えると物理法則に従い、地面に落下した。

「がは……それは、フリーザ様をお願いします」

……何ていうかお前の芸人魂は、凄いな。宙に舞ったポテトを入れ物に受ける。あまりに遠い物は隔離する。細かいスパイスについてはご愛嬌だ。レアに近寄るとすくつ、と何事も無かったかのように立ち上がった。

「それでは行動を実行に移しましょうー」

いつもの抑揚の無い声にコミカルな動きを添えてそう言った。

「ただい……って、何してんだ？」

帰ってきたらクロシエットが蓑虫の様に吊るされていた。

「フライドポテト強奪事件……絶許」

「先読みされた……orz」

「もう、姫怒っちゃうんだから！」

「許したれや、……それより目がまだ慣れんのやけど」

「？目がどう……」

「ヒール」

「」「……」

「……セーフ」

どこが?!強力なフラッシュ使ったな?!オートマタであれば目は魔石なので焼けないが、魔力を認識の要にしている為、魔力を飽和させ、尚かつ効果の広い魔法を放たれると、周りの情報が分からなくなる。まあ、そこら編は対策とつてあるので、個体差はあるが完全に見えなくなるという事はないな。……最も魔力を飽和させた魔法は制御

が難しいのだが、多少暴走させても効果はある。

「あのつ、ええつと、マスター、私達はどこで何をすれば？」

今回の問題は一つじゃない。この役割は作戦の要だ。

「明日、陽動をやってもraitたい。みんなでな？」

隔離から取り出した服をそれぞれの前に出す。そして手元にメイクセットとタトウーシールやキズシールにエクステを出す。

「あの……………先生、それは？」

向き直ってニヤリと笑って、……………周りから言われる感じだと嗤うか？俺そんなにあくどい顔してるか？

「君たちには俺が指定した場所でコスプレをしてもらう！」

……………意外とデカイ声が出たな、

俺の持つ方法論に座右の銘と言うものがあるなら、勝つべき時のみ勝つだな、負けも引き分けも必要な勝利の準備、ダメージコントロールは常識だ。無駄な争いはせず、ただ息を潜め、必勝の機会を待つ。……………要するに絡んでくる連中を畳むのは簡単だが、それが元でこちらに損害または支障が出るなら落とす所を探す。しかし、損害等の割合が看過できるものでない場合は可及的速やかに畳むだけだ。宙に舞ったヤンキー風エルフ（もちろん峰打ち）がドサドサと通り過ぎた路地に落ちていく。路地を出る前にばばきを鯉口にあわせて、腰に差し直す。

カチツ……………

人混みの中から放たれた突きを腰から鞘ごと引き抜いた刀の鏢と柄を使い、軌道逸して投げ技の要領で背中の方に誘い込み、貼山靠で壁に挟む。

「ぐはあ……………」

危ねえー、咄嗟に対処しちまったが、こいつは何だ？腕が立ち過ぎる。それに全力じゃないから実力の全体がわからない。何というか試す様な感じだな。今の突きは、刀を腰に差し直してっ……………

「待てえ……………」

……………足を掴まないで欲しい。さっきの手応えだと気絶しなくて

も暫くは動けなくなる筈だ。

「まさか体術でやられるとは……………この私が、ははは……………」

「あの急いでるんで、手短かに5秒で」

「お供す……………」

「結構です」

「何卒！私を……………」

長そうだな、見た目路地に転がってるのと年は変わらなさそうだが、エルフの歳なんて見た目でわからんし、それにさっきの一撃は数年単位で身につけられるものではない。

「……………要件は私達が取っている宿で聞きます。すぐに戻りますので、では」

足を振りほども、人ごみに溶け込むように撒く。コツは自然体である事だ。急がず焦らずまず視覚で撒いて、次に痕跡。……………うしつ、作業に入りますから、千里眼で警備の動きを確認しながら、潜入していく。

「所定のポイントに到着、つと」

後は諸々設置して……………砲弾よくし、角度よくし、未来視よくし、ポンツ！

間拔けな音共に空高く打ち上げられた砲弾は垂直に目標地点に落下。カプサイシン豊富な赤い煙を巻き上げる。あとは諸々の仕掛けを崩さないようにしながら、簡易の迫撃砲を片付ける。

「居たぞー！追えー！」

よし。目標達成。撤退。さっさと走って撒いたら脱出前に変えていた髪色を冒流で戻しと顔のシールを剥がして、ゆつくり宿を指す。

「……………うっわあ、大変な事になってる。」

打つ手を間違えたか、明日にでも宿変えるしかないな。宿の前に来た人混みをスルリと抜けると、部屋に移動する。

「入るぞ」

コンコン、ガチャ

「マ、マスターー！」



「お待ちしておりました。お父様」

「おかえり！お兄ちゃん」

「「おかえりなさいませー！ご主人様！」」

「旦那様、お風呂にしますー。ご飯にしますー。……………それと。もー、ワタシ〜？」

……………みんなそのままか、婦警クロエ、和ロリノルン、ナースクロシエツト、双子メイド朝日&月夜、そのままのレア（見慣れたメイド服）

「わしらも大変やったでえ、なんせ元知らんし、気風のええ兄いの真似するくらいしかでけへんかったけど、二度と御免やわ」

「俺は楽しかったぞ？」

「主より……………」

「はいはい、いいです。それより先生、私達はお役に立てましたか？」  
「勿論、助かったよ」

ロイと久米さんは宿で待機してもらった。ロイは顔見知りを避けるためだが、久米さんはまともに戦うスキルも無いし、……………見た目も中年のオジサンだ。俺の知識と技術を総動員しても正直厳しかった。久米さんの精神面からも、それと芦原さんは勿論、任侠者のキャラにした。ハルトは某ゲームの剣士（剣は飾りの大剣）、ウィルはド○クエの僧侶、……………キリエはとりあえずドレス着せといた。

「どうでしたか？」

「まあ、そこは反応次第だからな……………今出来るのは様子見くらいだ」  
「そうですか……………」

不安そうだな、まあ、ロイの立てた計画を少し俺が触っただけだしな、動き出しは不安なものだ。ただ自分で考えて行動するというのは色々必要な力だし、今後もその経験が役に立つだろう。……………つと、

「ロイ、少しそっちの部屋に行つててくれ、久米さんと芦原さんも」  
「おう、……………それよりタバコ吸えるところ無いか？」

実はエルフの街、いや森か？どっちでもいいが、火の取扱いは厳重に管理されている。喫煙者は犯罪者並みの扱いを受ける（目とかが厳しいだけだが、火災等を起こした者は極刑に処される）。……………一応

喫煙所はあるが、トイレの横とかなんか気分的に嫌な場所が多い。仕方ないので万能結界で区切って吸ってもらおう。外から色付けて遮って、中からは閉塞感の無いように見えない感じで、

「吸う時はそこでもお願いしますね?」

「すみません。私も貰っていいですか?」

「なんや、あんたも吸えるんかい。どれがええ、ああ、番号やのうて種類言うてや、コンビニとちやうからな」

「ああ、あれ面倒ですよ。店舗で違って」

「そうやで、種類やのうて番号で言えいうてしつつかいのが……」

吸わない俺には分からない会話をしながら隣の部屋に行った。煙はロイに迷惑だろうからこっさり隔離しよう。んで、そろそろかな、代行者さん?」

《階段をあと二段登ればこの階に来ます。》

「あの……私達は」

「俺、そろそろ着替えたい。この服貼り付いて……」

「すまんが、もう少し後にしてくれるか?そろそろ……」

「頼もう!!」

声がデカイ……、道場や大きな家屋敷ならともかく、ここ宿だぞ?借りてるへくや、わかる?

「こちらが師範のいる宿だとお聞きした!どう……」

「……声がデカイんだよ。さっさと入れ。」

「失礼した!私は!……」

「だからさっさと入れ!あと声のボリュームを抑えろ!」

「承知!」

……仕方ない。万能結界で遮断するか、さっきよりは遥かにマシになったがそれでも声が大きいし、

「それで?なんのようでしょう?」

「私を弟子にしてもらえないだろうか!」

閉所は響くなあ……。耳がクワンクワンなってる。

「何故、私に師事を?」

「今まで会ってきた人物の中であれ程隔絶した実力の持ち主は他にい

ない！自分で言うのは恥ずかしい話なのだが、同族の中では相手になる物がいないが故に、教える立場に回るばかりでな、最近ではエルフ最強と言われている。このままでは駄目だと思い、勇者や冒険者の指南役等をやって強者を探してみたものの、冒険者は弱い者が多く、強い者はあまり指南の方には来ないし、勇者はステータス任せに武器を降るばかりで力が強かったり、素早い、人形の魔物と戦っているようなものだった。」

勇者の評価酷いな。……………まあ、言わんとすることがわかるんだよな、これが、

「どうするか、悩みながら日々を過ごしていた折、鮮やかな美技が目に入った！」

「うん、だからと言っていきなり人に突きを放つな」

「それも軽くないなしてしまったではないか」

愉快そうに笑っているが、やられる身としてはたまったものじゃない。やった当の本人が心底愉快そうに笑っているのを見ると腹立つわ。

パチン、

指を鳴らすことに意味は無い。ただ俺のスキルを誤魔化すには何かしたほうが良い。ハルトの服を隔離でいつもの服に取り替えた。

「まあ、……………あなたの名前は？」

「グライダーです！よろしくお願いします！」

「……………ハルト、兄弟子として相手してやってくれるか？加減は知らない。お前の訓練相手にも不足は無いはずだ。」

互いに三つずつ回復薬（レア作）入りの瓶を渡しておく。それと、最初の師事と意趣返し、

「グライダーの実力はだいたい分かってる。もっと強くなるには素振りが大事そうだしな。」

ハルトの戦い方を一言で表すなら獣人の強みを前面に出した正面突破だ。優れた知覚に身体能力、野生の勘とでも言うべき咄嗟の判断力、真正面からの戦いなら負け無しと言えるだろう。グライダーの戦い方も質実剛健、振り翳される一撃は速く、重い、ハルトの攻撃を堅

実に受け止めたり、回避したりしている。ハルトが使っているアクセルブレードBB、これを全身全霊全力で振ったなら、それこそ大剣と言える剣でなければほぼ折れてしまう。ただ爆発を使って高速で軌道を変えたり、移動するハルトに対応するには大き過ぎる剣ではいずれ追い付かなくなる。その為一撃、一撃を武器に合わせた方法で捌く必要がある。

「バーストスラッシュユ2！」

「剛毅の構え！」

戦技の応酬……かと思つたが、なんだあれ？あのまま受けたら折れる筈の剣が受け止めた。代行者、今の何だ？

《恐らく防御の戦技なのでは無いでしょうか？》

……いや、あの、構えてるだけだよ？なにを反復練習するの？しかし、出来ているのは事実……手持ちの情報で判断出来るかは、定かでは無いがまとめてみよう。

- 1、反復練習（同じ動作しか取れない。剣が同じ軌道を取る）
- 2、技の名を言う。思い浮かべる必要がある（ワードの紐づけ）
- 3、一定以上の職業につくと戦技を作れる。（俺の刀神とか）
- 4、……

代行者ー！前見た奴、……ええつと、槍術戦技大全、の目次！

《表示します》

項目3投槍、241、……から246、

《こちらです》

……うくん、無いな。ちよつと違うな、欲しい情報と、

「実際にやった方がいいか……落椿」

ガチャ、

地面に落ちた刀を確認して今ある情報から仮説を立て、理論を構築していく。

- 1、戦技は魔法である。
- 2、特定の職業をステータスに追加する必要がある。

何属性の魔法か、恐らく空間魔法の下位にあたる移動魔法と呼ばれるものだと思う。移動魔法はその名の通り移動する魔法。ただ位階が低くスキルに記載されず、空間魔法のように一瞬で移動しない。移動する速度が肝で速すぎると身体に大きな負荷が掛かる。

物理魔法との違いは人には使えず、物にしかかけられない。ただ剛毅の構えは空間魔法寄りだ。しかし水魔法のウォーターから氷を作り出せるように決まった法則の中なら自由だ。法則に逆らえば逆らうほど消費魔力は増えるが、レーザーの魔力は普通の戦技と同程度、なら移動の逆、停止、座標固定…………

ちなみに何故魔法だと思ったのかといえ、戦技を使った後の刀が勢いそのまま飛んでいくのではなく、そのまま重力に従って垂直に落下したからだ。先に投槍を確認したが、射程を超えるとこれも垂直に落ちる。さて…………最後に真理で確認、あつてるな。

「退、上……………下つ、昇！旋、閃、潜！」

うん、さて……………できるかな？

「昇・旋・退！」

切り上げの勢いを利用して回転斬り。滞空が長いので隙が多いのだが、最後の動作、さつき作った戦技の『退』、これで後ろに飛ぶのだが、空中でも後ろに動けた。

……………まあ、後ろに引つ張られる感じなので着地のバランスがイマイチだが、

「二人とも止まってるぞ？終わるか？」

「先生こそ、なにしてるだよ？」

「さつきの後ろに飛ぶのは戦技ですか！」

「それより二人共、戦った感想はどうだ？」

「全方位から攻撃が来るようにも感じた！攻撃もなかなか当たらない！…この歳でここまでの戦士になるとは、先が楽しみだ！」

「攻撃が重かったな、一撃一撃、隙がありそうな所に打ち込んで見ただけで弾かれたし、防御が堅え、バーストで押し切ろうとしても流されたし」

まあ、受け流しは俺もする。まともに受けると刀は折れるし、刃溢

れもするだろう。

「ハルトとグラザーの共通点は高い攻撃力を活かして押しきる所だな、真正面から実直に攻める。一言で言えば質実剛健って奴だな。俺は主に弱点を突く、まず観察や様子見から入り、機を見て仕留める。無ければ綻びを作っていく。一言で言えば積水成淵……かな？さて……お互いの戦い方は分かっただろうし、二人で連携して来なさい。」

「宜しくお願いします！」

「ええ……」

案の定乗り気なグラザー、対象的に予想通り嫌そうなハルト、まあ、基礎の連携は使えるだろうが密な連携は使えない。この二人が連携するならシンプルな足し算でも問題無い。ただ、それは相手次第だ。

連携とは計算だ。基礎を足し算、防衛や護衛は引き算、割り算、個々の能力を活かした連携を掛け算、攻撃、防御、奇襲に遠距離攻撃、時間差攻撃、その他諸々、今日に至るまで築き上げられてきた技や技術、戦術と言うものには定石と言うものがある。それは攻める側にも守る側にもあるものであり、必勝法などというものは無い。

ガギイ！……シャリン！

少しの間だけ、受け止めたグラザーの剣を受け流して、すれ違わざまに足を引っ掛ける。すると背後から全速力で突っ込んできたハルトに当たる。……寸前で身を捻ってグラザーを躲した。ここにかさず突きを放つと剣の爆風で距離を取った。

「おっ、躲したな」

「あつぶねえ……」

遮蔽物越しの一撃を躲したか、何度も打ち合ってるからその経験で予測したか、或いは直感か、死角から攻撃に対処するのは難しい。……あんまり直感に優れる方じゃないんだよな、俺は、

「やっぱりこうなった……先生、どうしたら終われるんだ？」

「服なり髪の毛を掠めたり、有効的な攻撃でなくても触るか、武器を当てるか、もう一個はシークレットな」

まあ、服や髪の毛を武器が掠める事はよくある。最近はこのことを特訓のクリア条件にしている。たまに変えてはいるが、基本はさっきの条件、円の中（直径2メートルぐらい）から出させるとかはあまり訓練にならなくなってきている。もつともそれはハルト、ロイ、キリエ、ウィルの四人で連携した場合だが、

爆炎を巻き上げながら振りかざされる剣を受け流し、そこから爆発の加速ありと無しで緩急をつけながら連続攻撃を放つハルト。時に遠心力を使った重い一撃を混ぜ、角度を変えたり、急旋回して背後から攻撃したり、思い付く限りの全力の攻撃打ち込んで行く。剣を打ち合わせる音と爆音だけが響く。レーザーは考えた。剣に関してはエルフでは最強と言われていても、今は攻撃する機会を伺うばかりか、踏み出せずにいた。

『隙……隙などあるのか？』

あれだけの猛攻を受けて尚、間合いを維持し、ほぼその場から動く事なく対処している。死角から来る攻撃であっても、見ることなく的確な対処を行っている。自分でも経験則である程度なら捌けるだろう。ただあの領域レベルの剣士をその場に留まり反撃、牽制を行うことなく、余裕を持った防御を維持できる自身は無い。恐らく同じ事をやろうとすれば五手ないし、十手以内で防御が綻びる。勝利条件を満たせる気がしない。だが、ここでなら自分を更に鍛えることができる。確信を持つことができた。初心に帰って、愚直に挑む覚悟を固めながらも、何故か軽やかな気持ちで、剣をいつもより強く握った。

ボン！バアン！

『全然崩せないな、やっぱり凄いな』

四人で連携すればある程度は崩せるようになったが、全力で仕掛けたも糸口も掴めない。元から四人で連携しているときも全力だったが、

『あれを使えば良いところまでは行けると思うけど……』

あれは連携に向かない。付近にいる者に被害を及ぼす、連携に参加できるのはウィルと北川のみに限られる。そしてはじめに北川に言

われた『連携して来い』と言ったことから見て使うと間違ひなく怒られる。ただ……………

『来ないな、でもゆっくりにしたり、大振りになると先生にやられるし』

こうしてまだ考える間があるのも、加減してもらっているからだ。粗が出たり、誘い込み以外で姿勢を崩すと指導という反撃が来る。

『……………つても、本気の一撃は実力の一端として見せてもらったあれには、足元にも及ばないしな、はあ』

それぞれに合わせた指導を行われているが、未だ基礎から抜けられていない気さえするレベルなのである。何とか距離を取って考える。

さて、ハルトも成長著しいな、もう一段階ギアを上げていかないとこつちが持たないな、と言つてもハルトが距離を取つたことに間髪入れずにグラッザーが突つ込んできた。今まで見た中で一番速いな。速さも去ることながら手数も多い。しかし、あまりに単調でさつきより実直で読みやすい。ハルトの攻撃は防ぐ必要があったが、これなら避けるだけで十分だな。……………ハルトは驚いてるけど、

「清々しいほど実直、ただそれでは俺に防がせる事は出来ない」

「おおおおおー！」

全体重を掛けた一振りを側面に回つて躲すと

そのままグラッザーが前回りした。が、そんな事を気にせずすぐに立ち上がると、すかさず斬りかかってきた。体制が整っていない為、威力も速度も大したことはない。軽い体当たりで十分だ。

「ぐっー！」

土台もとい、足元、体幹、グラッザーの戦い方に必要な粘り強さや踏ん張りが足りない。まあ、素人から鍛える訳では無いのですこしだが、それに簡単に倒す方法なら柔道の当身や釣り手引き手、の知識があればある程度応用が効く。釣り手引き手は技に入る前の崩しと、どの技を使うかの駆け引きとかもあるが、その辺技の種類を多く知らないので、俺はストレートに崩す他無い。ただ当身に関しては問題なく使える。当て身は……………まあ、崩しだ、ただ投げる掴むに繋ぐ、……………のか？運用については詳しくないので、アレだが、大雑把に行くところ



んなものか、

1

人体にはどう鍛えても鍛える事のできない部分（筋肉、骨、内蔵の配置もあるが主に鍛えられるのは筋肉のみ）があり、それが急所だ、東洋医学の「経絡秘孔」（突いても内側からは爆発しない）のツボやら、人体の構造上の弱点、痛覚の多い場所その他諸々、多くの急所を知っている方が有利だ。

2

当て身は技を掛けやすくするためのものだ。次に繋げるために場所と角度も重要になる。それこそ達人ならば、指先ひとつで倒せる。（爆発しません）

3

体重差があれば、腕力では重い方が有利だ、腕力が無いならその他で補う他無い。速さもそうだが技術、撓りをつけ、鞭のように攻撃すれば力を乗せた突きより手数も増やせるが、それは別の話になるかな？

4

筋肉の弛緩、筋肉が緩む際に当て身を入れる。力んでいる所を小突いても効果は少ないが、緩んでいるからこそ、相手の想定を上回る痛みやダメージが入る。意表を突けるなら突け、という所かな、

個人的に三年殺しに興味があったのだが、これは空手の技だったと知ったのは奇しくも三年立った頃だったと記憶している。………実態がわからないのだから仕方なからうが、説明するのはかなり感覚的な物が多いので省略すると肝臓を指定の角度から突く。

「三年殺しは三年後にダメージが表面化するらしい」

内蔵にじわじわ蝕み、ゆつくり悪化三年後に大ダメージな技、ホントに肝臓なのかは実際よくわからない。近く脾臓もある、胃で無いことは確かだが、………何かは忘れたが千年殺しとか言う技もあったな、教育実習の時、尻守るの大変だった、

ゴウツ！

余計な事を考えていたら、ハルトが急速接近していた。上体を逸し

て回避すると過ぎ去り際に横に剣を振ってきた。ので身体を捻って攻撃が来た反対方向に逃れる。ハルトは無理な追撃のせいで着地に失敗した。腰打ったな、間髪入れずにグラazerが飛び込んでくる。が、太刀筋は変わらず、……………ただなあ、ちよつとだよ、ちよつとだけど、さっきの追撃ね、服の裾に当たったんだよなあ、ハルトの、本人はあんな感じて落下したから納得してないだろうけどさ、うくん……………

「仕方ないか……………グラazer、一応俺の業を見せる」

「むっ！それは……………」

「だから気絶するなよ？」

居合に置いて攻撃する際に大事な事は虚を突く事にある。初めから斬るつもりなら色々やりようがあるわけだが、動作を何処まで隠せるか、意思気（殺気）を何処まで隠せるか、そしてどれだけ速く鞘から出し、対象を斬れるか、鏢迫り合いや力なら両手で持つ相手が強い。だが攻撃可能な角度の数、速さや攻撃の柔軟性で負けない。それに刀を持つのは片手でも鞘はもう片方の手で持つのだ。

それ故、剣道には無い技術形態が存在する。

「がは、……………速っ、い」

結局鍛えた達人たちの速度は同じような物だ。せいぜい誤差程度のもので、鍛え方や筋肉の付け方等の肉体改造は同じ人間のポテンシャルで言えばあまり大きな差を生まない。身長が同じくらいと仮定して話を進めれば筋肉は脂肪より重い。筋肉をつければ付ける程力は上がるが、それに伴って重くなり、付け過ぎた筋力が動きを遅くする。掴んで押さえつけられれば恐らく無敵だろうが、必要最小限の筋力を身に着けたものに比べ、遅くなりがちなのと代謝が良くなり過ぎて必要な食料が増え、燃費が悪くなり、持久力が決定的な弱点となる。

しかしだ、それだけでも得られるアドバンテージは力においても速さにおいても絶大な差にはならない。故に第二の段階としてその基礎の上に技術と言う上物を築く。……………まあ、元の世界基準で、ステータスやスキルのあるこの世界ではあまり当てにならないが、

「ただ、それぞれの目的の為に、極める為に手を伸ばすのは何処でも変

「わからないな」

まだ目線のはつきりしないグラマーザーに眩く。後ろに回って一閃したのだがわかつているだろうか？聴こえているかどうかは定かでは無いが、気絶している訳でもないらしい。

「さて……………ハルト、練習してたアレを試してもいいぞ」

理想（世界）は果てなく遠い

「先生の目が普通に開いてる……………」

おい、いつも開いてるっつーうの、と心の中でツツコミを入れると、

「それとさっきの何か教えて欲しいですけど？」

グラザーのに入れた一撃が気になるらしい。まあ、さっきまで攻めきれなかった相手を一瞬で倒されれば気になるだろうけど、最後の方は我武者羅に剣振り回してただけだぞ？

「あく、あれか？ハルトに教えた歩法と対人戦術の合わせ技」

ぎりぎりまで上体を残して攻撃を引き付けて、予め足を運んだ方に体を逃し、側面に回り込む。徒手格闘では基本的な動作に含まれるのだが、経験者と達人の差はこういう所に程顕著に現れる。身体能力で劣っていたとしても、それを補うに足る経験や技術を正しく磨いていれば、早々簡単に負けることはない。力の強い相手は陣取りの要領で躲し、素早さで負けているなら経験則と間合い、防御の硬い相手は観察と弱点の予測、これらは精神要因で、もう一つは生物学的要因、こっちは割とハルトに合っている。直感が役にたっているのだと思う。何せこっちは反応速度や瞬発力が高くないと中々うまく行かないし、身体能力だけで何とかなるものではない。……………その辺りはどっちも実行するとなれば同じ事か、

「ハルトの勘は鋭いがそればかりに偏る戦い方は良くない。それとハルトは力や速度どちらかに特化した鍛え方をして無いからな」

ウィルは筋肉の密度が高いので筋力特化、ロイとキリエはあまり筋力が上がらないのとウィルよりしなやかさや柔軟性があるので素早さを磨いている。

でハルトは獣人の高い身体能力を表す様に、柔軟性やしなやかさもあり、筋力も申し分ない。正直どっちも目指せる。そのまま相手によって切り替える戦い方もあるが、器用貧乏になりがちだ。故にシンプルな強さが求められる。

「なら遠慮なく……………行くぜ！」

剣を地面に突き刺して魔力流して加速を掛けていく。筋肉の付け方の話をさつきもしていたが、刀にも同じことが言える。剣は硬くすればその分頑丈になると言えるが、刀は硬ければ硬いほどいいものは無い。刀は玉鋼からできているが、刃に使われる部分は硬く、それ故脆い、それを補う為にその刃になる部分を芯に峰の方から衝撃を逃がす柔らかい玉鋼で覆うように叩き上げていく。ただだからといって芯を硬くすればするほど良いというものではない。逃せる負荷も決まっているので許容を超えればどんな達人が使おうとあつさり折れるのだ。良い刀はその許容範囲にどう仕上げていくかにある、とも言える。洗練された刀は薄い刀身特有の鋭さとそれに反する驚異的な強度持つ。ただ、強度の側面は使い手に恵まれなければどんな業物でも一瞬でポツキリ折れる。

強度がある⇨硬度が高いではない。驚異的な強度を発揮するのは縦のみで、他はアツサリ折れる。……………まあ刀身の薄い刀剣全般そうなんだが、

バアアアアーン！

ハルトを中心に爆発が起こる。直感か否か、現状での最適解を導き出した。ただ、周りは何も知らんからごちゃごちゃうるさい。

「おい！あれ大丈夫なんか?！」

「ぐつ、……………犬の少年」

「水！誰か水を！」

拡がっていた炎は不自然な動きをして中心に集まり始める。ハルトの姿が見え始める。当然無傷、ハルトには炎熱吸収がある。

ここで説明させて貰うとしよう。炎熱無効は火魔法や熱、炎で傷を負わなくなる物で、炎熱吸収は文字通り、自分に取り込んでいくのだが、

「ハルトは炎熱吸収を持つてる。吸収した炎や熱は自分の身体能力に上乗せすることも出来るし、体力の回復にも魔力に戻す事もできる。それと自分の周囲の熱や炎を意のままに操る力でもある」

炎を身に纏い、羽織のようにはためく炎は眩い光と熱を放ち、他者を寄せ付けない。

「炎陣羽織ノ装」

あの技唯一の欠点は高熱を放つがゆえ、炎熱無効持ちで無い物とは前衛で連携が出来なくなる事だ。

「カウンターフルオートモード・デیفフェンス反射迎撃静自動戦闘が最低でも必要になるな………」

思考を切り替え、更に二段階程ギアを上へ上げ斬り掛かる。それを予想通り防いたハルト。驚異度上方修正、背後からの一撃を一次受け止め前にスピンの、並行して受け流し、

「先生の背中はずいぶん、まだまだ」

「そんな事はない」

刀は納めず、正面逆手に持って構える。

「剣道と居合には対極と言える側面がある。両手で刀を振る為に力は乗るが、両手で握るが故に軌道やプロセスに制限が付く。居合は刀と鞘を持つ事で速さを追求する。力で勝てずとも軌道の自由度と速さで柔軟に対応する。ハルト、力と速さの両方を鍛えて行くのは大変だ。この鍛え方を続けていけば格下なら手も足も出なくなるが、上や同格の相手には苦戦を強いられる……だからこそ、聞くぞ、誰よりも強くなる覚悟は？」

「……………お願いします!!」

「……………よし、こい。終わったらその技の諸注意や有用な運用方法を教える。弱点もな」

暫く打ち合ってわかったことは、羽織は速度を特化で振り分けていくようだ。

「炎鎧煌備ノ装」

さつきまで羽織を形度っていた炎がハルトの体を覆い、赤熱した鎧を作り上げる。この状態だと速度はそこまで早くないが、力は強くなり、直接的な防御力は無いが、これだけ光ると目立つが遠距離攻撃の狙いは付けにくくなる。聖光魔法耐性がなかったら、直視は難しいくらいには光ってる。

「魔狼炎纏ノ技」

今度は炎を武器に集中させ、一振りでも辺り一帯を焦土に変える。一掃できる波状攻撃は魅力的だが、大振り、遅い、消耗が激しいと三拍

子揃っている。使う局面を間違えれば一気に窮地に追い込まれかねない。

「あまりこれは良くなさそうだな」

「一気に間合いを詰めて一撃、全方位攻撃検知、なるほど、

「誘い込み、か」

「違うよ、逃げられない前提だったのに……………」

バツが悪そうに頭を掻くハルト、普通に全身燃えてる。完璧には防げないが脱出できない程でも無い。そもそも炎熱無効なので防ぐ必要もないが、ただ炎の形が結構デフォルメされてる。

「飢狼突撃ノ技」

ハルトはそのまま突撃してきた。躲す。ブラインドか、受けて滑りこませて、懐に入り、小さなモーシヨンで投げる。

「いいなあ、諸々含めて満点だ」

「一個もまともに入って無いだけ……………」

「まともに入ったら大怪我だろうが、もつと上に行くためのヒントをいくつか教える。己を磨く、技を磨く、これはある程度達成されている。経験はまだもう少しだが、そこまで大きな差を生む程ではない。地形の利用、相手ごとの対処、これも冒険者になっていろいろなのと戦ってれば達成される。まあ、苦手な事もあるだろうが、大事なものは瞬時に最適化できるかどうかだ。それが出来れば何が出来るか、それは見せてやる」

「見せるって何を？」

「先に説明するより見てから説明するほうが早いからだ。つと云つても一回は見せたが、前よりはよく見えるようになってる筈だ」

目安としてみせた奴だ。結構前だし忘れたか、対象の有無であれも変わる。

「……………もしかして、あの、滅茶苦茶速い奴」

「まあ、俺の最高到達点かな、ただ、先に言つとくとよく見えるってのは動体視力の話じゃないぞ？全体が、技がよく見える。って意味だからな？取り敢えず剣を前に構えて動かさない事、全力で持つ事、分かったか？ウィル達は後でな」

「え？無理無理！」

「大丈夫だ、反応しろとは言っていない。剣に当てるから、剣を落とすなよ」

さて、腰を落とし、一息つくくと、鯉口を切る。柄を握り、姿勢を前に傾け、更に身を屈める。鞘走りの音を聞きながら、血の巡りを感じながら、最も肉体が充実した瞬間に筋肉を軋ませ、引き絞られた弓から放たれる矢の如く、鋭く疾き一刀を放つ。

キイイイイン！

響く金属の震える甲高い音、剣はハルトの手から消えている。

「どうだ？よく見えたか？他にも出来る事が増えるからあと何回か、パターンを変えて見せるからな？」

「……………」

ハルトには全く見えていなかった。攻撃に万全で備えていたにも関わらず、だ。

「……………そうだな、もう一回やろう。さっきとの違いを見極めて欲しい。速度はそのままでもこれは見える筈だ」

「っ！分かった！」

準備が出来てからもう一度振るう。ただ一つの違いのある一刀はハルトが両手で持った剣を吹き飛ばすには至らなかった。

「……………速度緩めて無かった？」

「周りに聞けば分かるぞ？違いが無いのがな、……………ただ体感速度が違うんだ」

「えつと……………」

「誰でもそうだが、集中するのはずっとできるものじゃない。全力で集中出来るのは10分程度、せいぜい猿の二倍だ。それでも均一に意識を集中出来る訳じゃなくてな、波打つ様に集中の低い、高いがある。低い所を狙われると目の前の敵から不意打ちを受けた感じになる。逆に高いと簡単に捉えられる筈だ。」

首をひねって考え込んでいるが、こういう時は大体答えが出ないのがハルトだ。

「……………つまりどうゆう事？」



「誰が戦い方を教えたと思ってるんだ？手に取る用にわかるぞ、……まあ、この辺は観察する力を磨けば大丈夫だ。ヒントは癖だな、本人も気付いていない癖、無意識は虚実と違つてはつきりしてる。当然隠そうとする者もいるから見落とすなよ。目で観える物が全てじゃないからな」

「えー、……うーん？」

まあ、すつと呑み込めと言うのは難しいからな、

「目だけじゃなくて、耳も鼻も毛の一本に至るまで使つてけ、つてところかな？」

特に難しいのは実際にやってみる事だ。必要な要素が多い為、全ての極意、と言うと大げさだが、コツはしつかり覚えなければならぬ。そこから必要な要素だけをその都度取捨選択して最適化された攻撃を繰り出せる様になるまでどれほど時間が掛かるだろうか、集積した経験と鍛錬が物を言う。同じ領域にいる者にとってそれらはあくまで前提条件に過ぎないのだから、

「それと……気の読み合いには4人に教えた技術全ての体得が必要なんだよ。闘気は心技体を一つにする要素、限界を超える方法等、殺気は相手の隙を作ったり、虚実や牽制に使う。気迫は周囲を探ったり、牽制したり、弱い相手を気圧したりかな、最後に隠密、これは読まれるのを防止、誤認させたり、まあ、全部使い方次第だから混ぜたり、独自のやり方で変えることもできる」

「何故、それぞれに別けたのですか？」

……割とこの四人でもある程度の所まで持つていくには時間掛かったのよ（それでもかなり早い方）。他までとなると一人ずつ手取り足取り教えるのは時間がかかるし、この際指導役に回す為にみっちり教える方針に途中から切り換えたんだ。

「……まあ、おさらいの意味もあるが、自分の覚えた物をより深く理解するには外からの視点や自分自身を見つめ直す事で更に良くなる筈だ。おかしな方に行きそうだったら、俺が言うけど、それぞれが先生になる経験もしておいた方がいいかなと……」

「先生……ですか？」

「先生……………」

「希望者が入れば教えてもいいよ。シマシマやミネルヴァはあと一歩、つて所だけど、キングは堅実に鍛錬を積んでないせいで腐りかけてるし、エミルは闘気は押さえたが、他には手を出さないしな、」

ついでに指導する相手も教えとく、キングはキリエにこつてり（脂を）絞られる事になるだろう。エミルは闘気を魔法に應用しており、水球の維持もかなり上達している。まあ、魔法はイメージが大事なので、応用すれば効率的に魔法を使える様になるのだが、ここは後で説明しよう。火と水なのもあって互いにいい戦いになるだろうと思うが、エミルは逃げに徹する可能性があるのが難点、ハルト相手に逃げられる気はしないが、湖に行かれると引つ張り出さないといけなくなる。シマシマとウイルはまあ、ウイルが高い炎熱耐性持ちなので火傷を気にせず、相手の出来るいい相手になるだろう。ミネルヴァはロイにとつても刺激になるだろう。僅かな音を聞き取るエルフと風切りの音を出さない梟獣人のミネルヴァ、技術以外にも種族的に見ても対を成しているような感じだ。お互い刺激を与え合えば良くなつていくだろう。先生という教える立場だからこそ言えない事とかあるだろうし、共に研鑽している相手だからこそ話せることもあるだろう。ま、これは帰ってからか、

「起きろー、グララーザー」

「おはようございませすー！」

無駄にうるさい。

「……………うん、おはよう」

耳鳴りが治まってから、会話を切り出す事にした。

「まさか宿を変えるだけでこんな重労働になるとはな……………」

芦原さんや藤白に収納偽装用の手荷物（軽い）を持ってもらい、クロエやクロシエツトは隔離に入ってもらったが、人に、いやエルフに囲まれていた。原因はグララーザーとロイだ。ロイの方は顔を隠せるフードを被っていたが、どうにも注目を集めてしまった。グララーザーは元々有名人だし、初めは何故気付かれたのか分からなかったが、傍から会話を聴いていると原因はわかって来た。

「ねえ、あなたハイエルフでしょ?!」

「鍛えて進化したの?それとも生まれ付き?」

「グララーザーさんのお弟子さん?なのかな?」

「私は……………ムグウ」

ここで目立つのは良くないんだよ、このくらいなら、難なくすり抜けられるが、芦原さんやグララーザー達を置いていく事になる。取り敢えずロイの口を喋る前に塞ぐ。

「いや、私も彼と同じ師を仰ぐ者だ。私は素晴らしい師に巡り会えた!」

……………よし、撒こう。現地集合、

「あれ、先生は?」

「……………嫌な予感が」

「主よ、何故おか、ぐぼお!」

「北川さああああん!」

「逃げおったぞ!やばい!逃げられへん!」

「皆さん、すいません」

「はっはっはっ、皆元気だな」

背後で何か聞こえたが、知ったことか、時間は無駄に出来ないんだよ。

「師よ、只今戻りました。」

……………耳がイカれてるのか?こいつは、と思いながらも、こいつが一番乗るか、なんて考えていたら階段の方からこちらに向けて廊下を走る音がする。

「主よ!先生!置いていかないでくださいよ!」

「せめて一声掛けてくださいよ!」

ハルト、ウィル、キリエが同時に合流、後からトボトボという感じでボロボロのロイが部屋に顔を覗かせた。

「先生……………」

「……………まあ、入れ」

取り敢えずこうなった理由を突き止めないと、移動の度にこうで

はロイが窶れる。

理由は2つ、エルフは総じて整った容姿を持つ者が多い、と言うより全てがそうだ。例外になるのは老人くらいだが、それでも歳の重ね方次第と言うか、そもそも素材がいいのでそこまで崩れない。……何が言いたいかと言うと恋愛の基準に容姿はあまり影響しない。美形は見飽きてるのと、見慣れてるので容姿で選ぶと必然的にハードルが高過ぎ、相手が見つからないのだ。エルフ同士なら尚の事、なので内面や能力が最も大きな要素を占める。

……ちなみに美形のハードルは高いが、可愛い系のハードルはその分かなり低いとか、

……でもう一つは、種族的な事で特に女性にはナイーブな問題だ。まずエルフは魔法に優れるが身体が頑丈ではない。生まれ付き病弱な人なのでは、というレベルで筋肉や脂肪が無い。肌ハリのある老人みみたいな感じで、ハイエルフになるとこれが人並みになる。実際、グラマーも剣士と言えるガツチリとした身体付きをしているし、ロイも身体を絞って仕上げている。女性の場合、脂肪が問題なのだ。太った人のスリーサイズの数字の変化が少ない事をドラム缶に例える事があるが、

……エルフの場合、マッチ棒だろうな、

……ぶつちやけると、エルフではBカップでも巨乳の部類に入る。しかし、男性がハイエルフになればがっしりとした筋肉が付くように、女性も女性らしい身体付きになる。物凄く不謹慎なことを言うと、エルフのままだと性別が判別しづらい。極めて、服装以外ヒントが無い。声とかも高く差異がほとんどない。外から来た他種族(人含む)がナンパして声かけたが同性と言う事がよくあるとか……、そして外から来た者たちはエルフの女性よりは出る所は出ている。気にするなと言われて無視できるなら気にならない訳で、男なら必然的に視線も集まる訳で、他の種族からは整った容姿を羨まれてるのだが、結局、隣の芝生は青いと言う奴で、

ある者は劣等感を拭うため、またある者は渴望する。エルフの長い寿命から見るとハイエルフはそんなに遠い目標ではない。当然手を

伸ばすものが多い。さりとて、あまりハイエルフがいないのは、

「長命種故の時間の感覚か、或いは……………」

……………いや、止めておこう。そろそろ目的の方に思考を戻そう。まずここに来たのは、ロイの為であるが、実際それ以外にも目的は沢山ある。はじめにゴミ問題、ここにいる勇者にとんでもないのが居る。戦闘能力皆無なパーソナルスキルだが、後始末が致命的だ。エルフの時間の感覚だと手遅れになる。その二、預かってる子供達の世話が限界近いので、教員なり、世話役なり人手が欲しい。……………80人くらいで、数えるのを止めて名前を覚える方に専念していたが、一週間程前にアルから人の名前を覚えるコツを聞かれた時に発覚した。数えてみたら312人、後でパソコンの表と照らし合わせた数と同じで、ちよつとホツとしたが、現状の確認が急がれた、で俺の留守中はかなりギリギリだった。特にアナスタシアとレア、クロシエツトを誰か一人連れて行くだけでも大変そうだった。……………作り置きフル活躍前提である。

ただ人材採用は難しいもので、まず拠点が森の中で帰りはともかく、移動手段が徒歩以外無く、近くは物々交換主体の開拓村ばかり、アスメシアは結構遠い。車とか使えれば片道三時間程度だが、森という環境に慣れていて、なおかつ、高い教養や生活能力等が要求され、そして、最も大事な信用、次にこちらが提供出来る報酬、諸々の条件を踏まえて千里眼でリサーチを掛けて合致する者が何人かいたのがエルフのこの街である。それにエルフなら然程外に興味を持たない。問題点はその外に興味を持たないと言う所だが、……………ここは報酬で解決する他無い。

「お茶は……………えっと、いいかがでしょうか？」

「ありがとう、クロエ……………うん、良い香りだ」

クロエの淹れてくれた紅茶を愉しみ、リフレッシュした所で今後の動きに思考を切り替えていく。

「グラザー、まず俺達はアスメシアの森で孤児院?……………みたいな物をやっている。本職は冒険者で、たまに商人の真似事をしている。ただ最近孤児院の人手が足りなくてな、森での生活が苦でなく、有望

な人材と言うとなかなか居ないだろう？だから、ここに人材発掘しにきたんだ。どうする？」

「どう、と言われても、な………無論、私は稽古を付けてもらえるならどこへでも付いていくつもりだが、他の心当たりなど早々………」

「それは俺のスキルで予め調べてある。候補は6人でお前も入ってる。全員こっちから会いに行くつもりだったんだがな………まさか町中でつかかってくるとは」

「はっはっはっ！いや、申し訳ないっ！」

「………何したんだよ、こいつ」

「………噂の絶えない人ですからね」

「まっ、取り敢えず」

「えっ、それで済ませるんですか」

「御心のままに」

だって、この話掘り下げても何にもないし、バツサリ行くよ？

「俺達は今日の晩に帰るけどそれまでに残り二人に会わなきゃならんのよ」

「他の三人は？」

返事の代わりに手帳の破れたページを見せる。初めての人はちよつと式が複雑化するので付箋サイズでは収まらないのだ。と言うのも前に、侵入者があつた時から対策のレベルを上げたのだ。元は隔離を使って正しい道以外を森の外に出す（生徒を例外にしてある）という感じにしていたのだが、そもそもここに来た頃以外、この付箋一枚で自由に帰ってこられるようにしたので、正しい道と言う物がそもそも要らない。拠点から出る方は別にルートを気にする必要もない。で、外から来る方法を無くした（代行者に認証無しには入れなかった）のだが、転移の対策もしなくてはならない。でいろいろやったのだが、この場所を目で見て知っている者以外の転移を阻止とかで、………まあ、細かい所は省くが初めて入る者はその手の式を正しくパスしないと行けないのだ、

「じゃ、行ってくるわあ」

「うむ、しかし、こう言つては何だかエルフは長く生きている者ほど知

識や技術も高いが、早々欲しがらる物など無くなって来ているはずでは？」

「長く生きてるからこそ飢えているものもある。って所かな。変化を嫌う者も多いエルフだが、退屈や刺激の無い生に飽きてる奴だっている俺が必要としている人材はそっち側だ」

「何を置いて行つとくれとんねん！断りの一つくらい入れんかあい！」

芦原さんも到着したみたいだ。余談だが、藤白は最後までたどり着けず、彷徨っていたので、残り二人に会った後、ついでに拾った。

## 力（意思） 無き正義（最適化）

コールドリーディング、読心術と似たような物と捉えられがちだが、実際は違う。読心術はマインドリーディングと言われ、コールドリーディングは読心術の技術の一つで話術である。下調べ無しの下調べ等準備をして行う物をホットリーディングと言う。といってもそれだけで成立する相手ばかりではない。もう一つが相手の思い通りになっていると錯覚させる、マルチプルアウト。複数の逃げ道という意味があるが、広域的な解釈ができ、断言はせず、yesともnoともどちらにも解釈できるように、隠したい事や意識を逸したいことはミスリードやミスディレクションの様なマジックの身振り手振りを交えたり、……………分かりやすいかどうかは厳しいところだが、クラツカーがどこの畑から来たか当てるような物か、

……………分かりにくくなってるな、

結論を先に言うと言つて読心術とハッキングは似ている所が多い。違う所があるとすればハッキングは自然と身に付くものではないという事ぐらいか、結果を引き出すのは皆同じだが、読心術は占い師、マジシャン、詐欺師に政治家やら、ハッキングはプログラマー、IT系にハッカーとデバッカー（ホワイトハッカー）等の様に畑が違えばそこに至る道筋（ハッカーはコード）が違う。求める物や求められる技能の違いだな、ハッキングなら構成言語や、システム、数学にコンピューターウイルス……………まあ、こっちはあんまり詳しくないから知ってる範囲こんなもんかな、読心術は今上げた以外のテクニクもあるがどれも一つで成立するものではない。磨く技能が違えば伸びる技能も変わるし、個々の得手不得手もある。

……………長い事、冒頭から長文を要したが、言いたい事は唯一だ。

二つの事を極めたからと言つて終わりじゃないんだ。身体能力、武器の戦闘技術、知識に、観察力……………複数の要素をバランス良く養つ



て行けばより多くの手段が取れる」

「……………ですが、」

「……………一点特化も悪い事じゃないが、そこまで装備で速度に傾けると壊された時に、呆気ないものだ、それと、制御できるのか？」

連れてきたエルフの中に一人、スピード狂がいて、その説得に割と手間取っていた。

「疾風の靴、雅鳥の羽飾り、風神の帯、加速の指輪に倍速の首飾り……………本来の4・25倍の速度が常備するのはやはり魅力的です」

……………うん、違う。そうじゃ無い。

あんまり言いたくないけど、倍率が違う。装備と言うのは作り手によつて差がある。鑑定では見えないこの増減幅をクオリティ完成度と呼ぶ。平均というか、市場に出回る基準で考えればその倍率だが、俺が自作してない疾風の靴と雅鳥の羽飾り以外はその認識では不味いほど乖離している。特にヤバイのが倍速の首飾り、素材は普通の代物だが、一般1・5倍から出来がよくて1・8倍、しかし、こいつは8・3倍、最も問題なのは通常の場合、基礎身体能力を倍化するのに対して、総合的敏捷性を8・3倍するのでこれ単体でも十分過ぎる程速くする。天啓のシミュレーション結果を見るまでも無く悲惨な事になる。それに普段から奥の手や捨て身みたいなものを選ぶのは違うと思う。装備は色々あるのだ、自分の弱点を放置するのは危険だ。あと何事もやり過ぎ良くない。

「問題ありませんよ、ほつ……………」

ゴガア!

凄まじい音を立てて近くの倉庫の壁にあたった。普通に歩こうとしただけでこれだ。ゲームなら苦情殺到のバランスなのが、あの愚神の世界だ。ゲームのステータスに置き換えて説明すると、こんな感じか、

非戦闘職平均基礎値（人）ステラ基礎値

str	35	str	23
vit	52	vit	26
int	16	int	109
men	22	nen	46
dex	42	dex	60
agl	34	agl	141

装備抜きがこんな感じでここに疾風の靴agl+29、雅鳥の羽飾りagl+68、加速の指輪agl+1206と初動の減速半減、風神の帯agl+2061と追い風（前方に進む際1.3倍）に倍速の首飾りで総合aglを8.3倍、前方に進んだ場合23682、靴と羽飾りは元々彼女の物なのでそこから比較すると普段の約100倍の敏捷性（agl）をいきなり得る事になった。寧ろ制御できる方がおかしい。取り敢えず壁に付いた血を洗い流すように回復薬を多めにかけ、首飾りは回収しておく。

………んで、後ろを振り返ると、ただの風魔法で広域の木が粉微塵に弾け飛んでいる。

「これは仕事の前に座学だな」

帰宅早々の大仕事にため息をついてからエルフ達を集める。ステータスはスキルを中心に自分の能力を確認できる。鑑定ではパーソナルスキルは見られないが、他は偽装されていなければ確認出来る。そして鑑定とは別の分岐である目利き、このスキルは物の価値を見るスキルとして知られているが、人にも使える。その際スキルは表示されないが攻撃力等が数値として表示されるのだ。真理でも表示しようと思えば出来るが、あまり使わない。この説明は瀬戸原以外の生徒には全員教えてある。これから言う事もだ。

「staは攻撃力だけに影響する訳じゃない。他も同じだ。それぞれの能力をバランスよく上げないと十全には使いこなせない。」

素早く動くといっても筋力も無しには成立しない。筋力が足りなければ武器（物による）を持ち上げることも叶わない。要は攻撃力以外の要素もあると言うこと、vitは体力やスタミナにも連動してい

るし、それぞれの目的に合わせた伸ばし方をしないと鍛えなかった能力に足を引つ張られる事もある。ただ、鍛え方は多岐に渡るので、鍛え方次第では様々な能力向上が期待できる事もある。

「……………と言ってもその前に、必ず向き不向きに向き合ってもらわないがな」

期待できることが分かっても、苦手な事は成長しづらい。それはステータスの伸びしろにも言えるし、伸ばす能力が本人に合っていないければやる意味が無い。a g iで例えると短距離なら問題なくても、長距離はv i tで鍛えたスタミナが無ければ続かない。長く武器を振り続けるにもスタミナはある。と言う訳で今、走りまくってもらっている。

ちなみに先頭はσ(。▽。 )オレ、  
ピッ!ピッ!、ピッ!ピッ!……………

そして、その2

型矯正を行い、正しい姿勢の素振り、これで筋トレと正確さを身につけて、s t rとd e xを効率的に上げていく。この辺りは生徒にも教えていた分然程苦労しない。……………ただ長く生きてる分、染み付いた癖の年季が違う。これの短所を補うか、癖を抜くかは、判断の難しい所だ。長い時間使ってきた分洗練されているし、長所が無い訳でもないし、

そして、その3

成果が最も得にくい、i n tとm e n、座学と演劇、見てもやってもいいが、思考と心を動かす事が大事なので効果にも個々の差が大きい。

「……………でもって、これで一応一通りやった訳だが、ここから測定」

ハンドホール投げとか、50メートル走とか、学校の体力測定をやってもらった。来てもらった時、一番初めにやったのが体力測定だ。……………まあ、ついさっきやったばかりとも言いが、結果を纏めると全体的なステータスが向上した事でさっきあまり出来なかった事を中心に大きく伸びた。

「さて、っと、じゃ、仕事の話に入るぞ」

水汲み容器（50リットル）を担いで走るハルトに両手に一つづつ容器（10リットル×2）を持つロイも競う様に走っている。キリエは棒の両端にロイと同じ容器の取っ手を引っ掛けて歩いて来ている。ウイルは歩きだが、貯水槽と言われたほうが納得出来る容器を担いでいる。

「……………最近、自主鍛錬で運ばれる水の量が多くて使い切れない件」

「あれ、自主鍛錬なんですね？」

「よく間違えられるけど、罰じゃないからな？」

これだけ運ばれてればウォータースライダー作ってセイレーン用の移動ルートが作れそうだな。ちよつと前から図面作ってるけど、……………と言っても全てを賄える訳ではないので、他の供給源もあるが、

呼んだエルフ六人は戦闘指導に一人（グラザー）座学魔法指導に二人、生活指導（食事や世話）が三人だ。現状昼が近いので、まず、三人に仕事を説明する。……………と言っても不在時は、アナスタシアかレアが中心に厨房を回すのでその手伝いが主体となる。量作るのに設備は拡充したが、シンプルに人手が足りなかったのだ。

「……………一人で何台も動かす人がいるとこないで大違い」

「ちよつど良かった。アナスタシア、……………主にアナスタシアとレアが厨房を回している。他にも手伝いをする子達もいるけど、その辺りはレアが覚えてるから気にしなくて良い、それぞれ一箇所づつ作業台を受け持って持ってもらえると助かる」

「えくと、そちらがアナスタシアで、……………」

「私は子供じゃない。……………マスターの二番目のオートマタにして、一心に寵愛を受ける存在、むふー」

読心で心を読んで質問を先に答えると、俺の背中に隠れながらも自慢げに胸を張る。表情の方はそこはかとなく硬いが、

「今日は何を作るんだ？」

「パスタを中心にほうれん草のクリームパスタ、ポロネーゼ、アラビアータ、グラタン、リゾット、……………きのこの醤油炒め、サラダと、パンと飲み物は有り合わせ、それと昨日の煮物と鯖の生姜煮……………あ

と、豚の生姜焼き？」

「……………じゃあ配分は」

『パスタ400、挽肉180、ほうれん草80、アラビアータ140、グラタン200、きのこ50、サラダ40、豚360、有り合わせは逐一調整しますか？』

今や代行者の毎日ライフワークの仕事となった量の打ち分け計算。俺の計算は足りないと言うことが無いように少し多めにしており、コスパより労力を減らす為に代行者に任せている。計算に若干粗があるが、精度ははじめよりはマシになった。保管庫と隔離からそれぞれの食材を隔離に集めてから出す。……………多くの仕事を見ると、人間、気が重くなるものだ。毎日やってれば慣れるし、呆けている暇は無い事を知っている。アナスタシアはパスタを鍋で茹ではじめる。

「……………魚捌ける？」

「無理ならこつちで教える」

「レアは？」

「連れてくる」

「魚は触った事無いです……………」

「切り身からなら……………」

「私も……………」

「じゃあこつち」

「……………到着〜！あのあのー、何を……………」

「具材下処理、やる」

「……………はい〜」

会話は最小限の単語に抑えられ、それぞれがそれぞれの役割を全うしていく。しかし、アナスタシアは内面を読んで、レアはさり気なくエルフ三人の補助を行っていた。

「あのっ！わたっ……………うおああ！」

厨房と廊下の境目の段差（約2ミリ）に躓くクロエを受け止めに行く。……………まあ、クロエは何も無くても躓く。

「大丈夫か、クロエ」

「……………どこでも転けられる美少女」

「ぶつ……………くく……………」

「……………私の仕事はあのウサギの始末ですか？」

「それは昼食が出来てからな」

「あのあの、助けて欲しいです旦那様ー」

恨みがましい目でこつちを見てくるレアをスルーして、クロエを立たせるとちやつちやと作業台の方に戻る。それと……………

「アナスタシア、俺の心を読むのは良いが、人を傷つけるようなことは言うなよ」

「……………(?!?) bグツ！」

分かってんのか？これ？たまに使う顔文字、もとい空気中に現れるこれ、どうなってんだ？

『「精霊魔法」です』

俺の中で見事に代行者とハモったな、……………無駄遣いじゃね？

「精霊は見える者にしか見えない。あっちのエルフも一人は見えてない」

ふーん、なるほどね、この感じだとクロエにも見えてないんだろうな、多分、

「さて、早くしないと昼になるぞ！」

「美味しい！楽しい！みんゝな、お楽しみのお昼ご飯だにやー！」

「……………ほら、伸びてないで食え、まだ晩飯も作るんだぞ？」

「二はい……………」

ま、そのうち慣れるだろ、座学魔法指導の二人は書庫（写本の保管庫）にずっと籠もってる。教える前に学んで置くのはいい事だし止めないが、飯は食わんとな、食事を終えて、献立から適当に見繕ってトレーに乗せて持って行ってやる。

「二つ言つとくが、書庫で飲食はするなよ、それと食事はちゃんと取る事、隣に談話室があるからそこに置いとくぞ」

「……………」

……………返事が無い。ただの屍のようだ。

「……………食事をちゃんと取らないようなら、書庫の使用を禁止するかな？」

ガバツ！

おうつ……………、怖えよ、いきなりこの世の終わりみたいな顔してこつち見るなよ、目えバツキバキじゃねえか、

「しかし、区切りが……………」

「ええつと……………ここか、属性理論だな」

「主に魔法の属性は火、水、風、土、光、闇の6つの……………」

「ああ、それか、スキルとしての割り振りはそうだが、扱いで行くと闇は分岐が多い所から、さつき言ってた属性から闇を除いた5つが基本となる属性だ。闇は扱的にその他だな、……………あとは飯食つてからにしろ」

持ってきた食事を隣の部屋に置くために部屋を出る。彼らの報酬は魔法に関する知識や情報が大半を締めている。権利として認めざる負えないが、こつちも授業をしてもらうのだから、倒れられたり健康を損なうような事はあつてはならない。……………たしかあの続きは闇属性の付与魔法の観点から考察するものだったはず、

足で扉を閉め、立ち去る背中を見送る驚愕の表情を貼り付け、固まった美少女と美青年が質問攻めに殺到する未来はそう遠くない。

「グラザー、ちよつと課外授業だ、付いてくるか」

「ぜひー！」

二文字でそれだけ大声を……………

「……………まあいい、ハルト、ロイ、キリエ、ミネルヴァが主に見学者をまとめるけど、その上にお前を引率に据える。目的としては俺の戦いとその他のいろんな人の戦い方を見てもらう。質問は無いか？」

「無いー！」

……………そっかあ、無いかあー、

「よし！各自固まってバラバラに行動しないように！」

「……………耳が痛え」

「同感……………」

「もう少し抑えられませんか？」

「……………」

「いや、すまん！」

教師として基本的な集団行動の整列くらいは全員出来るようにしてあるのだが、比較的、先頭に来るハルトとロイは感覚が鋭い種族、人であるキリエでも煩いのだ。かなり堪えるはずだ。ミネルヴァに至っては明らかに不満がありそうな顔をしている。

『お待たせしましたあー！これより始まる血湧き肉躍る力と力のぶつかり合い！新たな英雄の誕生を目撃する歴史の立会人になるのはあ！あなた達だ！』

熱の入ったアナウンス（風魔法）が響き渡る中、ハルト達の動きは早かった、そそくさと空いている見通しのいい場所に腰を下ろす。

「む?!何処か空いてないか?!」

前の方は高めに落下防止と攻撃を防ぐ石の壁がある少し高めで遠すぎない場所取れたハルト達と少し前になって見にくい場所に座ったグラザー、前に行けばいいだろうと思うだろうが、ここは後ろから見る人達から邪魔になる為、売りの子の通路を名目に荷物を置く事も禁止されている。そして売り子側にもポイントしていいと言う旨の指示がされている。

『北門から登場するのは正体不明のSランク冒険者ノースガーデン、対するはAランク破砕のマーク！』

赤いコートに袖を通すと刀を手に持ち、さっさと控室を出る。暫く進むと会場に出る。予め千里眼で場所を確認していたのでグラザー達のいる方を見る。相手の武器はファルシオンの様な片刃の大



剣、その一撃は鎧ごと断ち切る。

「……………Sランクらしいが、武器を見る限り相性が悪いんじゃないか？大怪我する前に降参しといたらどうだ？」

「そうか、俺は相性いいと思うぞ？」

「そうかい、じゃ遠慮なく……………」

剣を構えるマークを横目で見ながら、開始の合図を待つ。

「……………おい、早く構えろよ」

「ん？いや、俺は……………」

『意気揚々と構えるマーク！対してまだ心の準備が出来ていないのか！それとも降参なのか！』

アナウンスが煽ってくる。構えなんぞあるか、普段から奇襲に備える居合に構えがあるとしたら、座（正座）の状態くらいか、俺にとつては抜刀状態から始まるのは不利なんだよなあ、不意打ちが得意な身としては、たださっさと剣を抜けと促してくるので仕方なく鞘から刀を抜く。

『両者、準備が出来たようです！これより闘技大会の開催をここに宣言します！』

形式的な初戦の挨拶だと思いたいが、ただここにマイクとか便利な物は無いし、降参とかを宣言する際は手を上げると言ったように、遠くから見て分かる事でないと思いが確認できない。要はこつからいちいち刀を抜く必要がある。鞘で隠した速度を活かした奇襲、急襲がやり難くなる。が……………」

「……………教材や見本としてはいい機会か」

「んあ？なにいつてんだ？」

「こつちの話だ、始めよう」

鞘を隔離に捨てて、両手で刀を握る。

「……………まずは両手攻防一体型大立回<sup>タテマ</sup>から、か、」

「これは……………何を見せられているんだ？」

「先生の技術は一挙手一投足、全てにあるけど、……………その分、速くて見えなかったり、連続する動作の中に自然に隠されていたり、かなり多

かったりで、傍から見て盗むのも至難の技なんだよ。予備知識ありきでだぜ？」

グラーザーの質問に視線を動かすことなくハルトが答える。ハルトは現在の種族に進化した事で超感覚と言うスキルを習得しており、他の生徒よりもよく見えている。超感覚は感覚の100倍化、その使い方によっては知覚の加速も出来るためだが、それでも分からない物は分からないのだ、そんな苦情が集まった為に今回の見学の場が用意された。しかし、ただ見学と言うのは時間が勿体無いので、設備が整っており、見学する生徒達の安全、稼げる額、諸々を考慮してここに来た。

「この闘技場は時の揺り籠と言われる魔道具が使われている。内から外の攻撃を通さないのを始めに、外から戦闘が速すぎて見えないという苦情に対応した魔道具だ。それと重症、生命維持に支障のある怪我を負った場合はそれ等の攻撃を受ける前に戻すそうです」

「……………まあ、街の実力者が興行で再起不能は洒落にならないからその位はするわよね」

「……………神の御技」

「剣を躲していると言うより、剣が避けている？」

口々に感想が飛び出しているが、それは会話と言うよりも、それぞれが思考をまとめる為に口に出して情報を整理しているようにも見える。

「対戦者の速度が遅くなる瞬間は、攻撃を打つ前と攻撃が先生に近づいた時、それと先生が攻撃する時は止まって見える……………」

速すぎて見えない。その苦情のもと、様々な工夫と改修がなされたのだが、対戦者の速度差が激しい場合、速い方は普通に見えるが、もう片方がスローモーションのように見えてしまう。その性質を逆手に取り、素早く動いている瞬間を割り出したロイ、「攻撃される前に相手の横を通り過ぎる様、

予測して体や足を動かしている。そして……………」

「通り過ぎる際に刃を当てたり、攻撃を捌いて斬り返したり、鏢迫り合いになりそうになった時は体を逃して斬り、刀を滑り込ませて刺した

り……………」

「あつ、すご、攻撃を躲しながら斬りつけてる」

「しかも連続」

「うむ、相手も対応している様だが、ついていくのが精一杯で掠りもしていないな！」

「……………脇を通り抜けた後に振ってるけどな」

「あれだけスムーズに次の攻撃の姿勢に入るにはどれだけの……………」

「終わったみたい」

倒れ込む対戦者は光に包まれ、入ってきた門の前に移動している。

『決まったあああー！紙一重で優雅に躲しながら、文字通り一撃も受ける事なく完全勝利をおさめたあー！』

「『おおおおー！』」

割れんばかりの歓声上がる中、ぼそつと闘技場の中心で呟く。

「いや、当たったら死ぬだろ、真つ二つ」

「意外と元気そうだな。寝転がってるから、そこまで完璧に戻らないのかと思っただぞ？」

「……………精神面はボロボロだよ。というか、わからないのにあれだけ斬りまくってくれたのかよっ！」

「指とか耳とか落としてないだろう？もし戻らなかったら、その時点で訳にはいかないだろ」

対戦者のマークの様子からどういう効果なのか確かめに来たんだが、大丈夫そうだ。次軽く削いでみるか、うちの訓練施設にでも付けるか、割と刻印簡単だし、

「……………最悪死んだとしても戻るよ、ただ記憶やら戦った事は事実として残るから、滅多斬りにされれば斬られたところが痛い気がするし、手足に力が入りにくく感じがするし」

「大丈夫、気のせいだ」

「労る心はねえのか?! テメエは！」

確か身体の時間のみを戻してるらしいが、なる程、装備は戻らないからその辺りは刻印の一部と定義される様にして……………代行者、そ

の刃改造頼むわ、  
《了解しました》

「じゃ次があるから行くわ」

西洋風の薙刀……………確かグレイブだったか？はあ、また長物か、戦闘スタイルを変えづらいな、さっきのソードマスターは対長物、初動の遅い重め長めの武器に真正面から挑む事に特化した戦闘思考だ。突き主体なら……………まあ、対槍の虚実と遠心力で攻撃力を上乘せするアレがいいか、

フルツオプ、フィクシヨネスオーバーチュア  
「序円舞曲虚構軌道でいいか……………」

回転しながら斬りかかるその動きは流麗、刀の煌めく様は淀みなく流れる川のようなうだ。

「あんな戦い方が……………」

攻撃を誘い、回転しながら逃れ、その勢いで斬る。時に回転の最中に刀を左手に持ち変えて斬りつけたりと、防御を掻い潜る連続攻撃を受け、否応なく慎重になり、相手の手数も目に見えて減った。最後の一撃は受け止めたかのように見えたが、その刃はすり抜けて相手を斬った。

「あれは？」

「多分影抜き、だと思う。あれは両手で剣を持たなきゃできないからあんまり見たことないけど、フェイントみたいなもの、って言ってたけどあの速度じゃすり抜けてるように見えるし」

「ゆっくりになってもそう見える訳だし、うん」

「……………」

黙っている全員の共通認識は自分があれをされた時どうするかについて考えるが、結局結論は出ない。主に会話に参加する者は今考えても無駄だと悟っているものだけだ。

「縮地走法は怖いですよね」

「分かる。発見イコール即アウト……………」

「速いのもあるが、何より静かなのも……………」

「実際にされて対処できるかどうかで言えば初見は確実に無理だな！」

闘技場の中心に一人残された彼は、というと、

「……………はあ、動き回ると疲れるな、初見対処出来ないならどんな相手の動きにも対応出来るようになるか、初見殺しの手管を複数知って置くことだ。たとえ違っていても予測や勘を組み立てる材料になるしな、結局煮詰めたら行き着く所はどんな武道でも一緒だ。効率化が進んでいる物ほど顕著にその傾向がある」

こう言うのはゲームに当てはめた方が説明しやすいか、PVPと対エネミー対エネミーPVEに当てはめて説明すると、プレイヤー同士のキャラのポテンシャルはほぼ同じである。レベル制のないものなら他はアビリティやスキル、装備で相手より優位に立つ他無い。が、そこに読み合いや操作方の様なプレイヤースキルが挟まる。ターン制かアクション系かによっても変わるが、どちらも異なる形態の読み合いの要素は外せない。馬鹿正直に殴って勝てるならそれでいいが、それでなんとかなる相手ばかりじゃない。ポテンシャルが同じでも相性があるし、特化型なのか万能型なのか、指定の条件下で発動するスキルや複数のスキルの相乗効果を狙った物等、知っている事は、ゲームに置いてはアドバンテージと言うより基本条件なのだが、知らないと負けることがある。故に各自の工夫やその場の判断に先読みが大切なのだ。でこの戦い方がエネミーにも応用できるかと言うと違う。

プレイヤーとプレイヤー同士のキャラはポテンシャルが同じでも、エネミーは同じじゃない。ボスは総じて体力が多い。難易度によつては一撃死もある。ソシャゲなのかコンシューマなのかによつても違う所だが、無難な作りの体力お化け、プログラマーからの挑戦的な物、状態異常を撒き散らす特殊スキル持ちや強化効果を付けた瞬間剥がしに来る物や特殊演出で体力が1で止まって猛反撃して来る物等、まあ、情報を集めながら戦うだけだ。しかしこの世界でゲームを知っている人間はいない。と言うかゲーム自体がpcについてるブロック崩しやスパイダーとかしかないので。他は発見出来ない。

「……………さて、どう説明したものか」

次の相手は短剣使い、二刀流で魔法も使い、素早い動きで攪乱しながら戦う。はつきり言つて一番俺が得意な相手とも言えるだろう。いろいろ見せるには最適だ、……………つと思つていたのだが、

「棄権します……………」

……………これである。

そもでもつて決勝戦、ドワーフだ。近接は大槌、土と火の魔法を得意とする種族だ。これまでの試合は相手を防具、または盾諸とも一撃で叩きのめしている。魔法は主に相手の退路を塞ぐ為に使っている。そろそろスキル使うかな？

「ブン、今までの試合を見ていたが、ちよろちよろ動き回つて斬りつけるだけで勝てる相手ばかりで良かったな」

「理解して煽つてきている、と期待していますが、私に当たつたとしても倒せませんので、土魔法で直接狙う事をおすすめします」

「なら、遠慮はいらんなあ！」

轟音と共に砂煙と衝撃が迫る。さつきまで居た場所には鉄の塊が深々と撃ち込まれている。結構速かつたな、

「……………結局避けるのか」

「避けられるので避けただけです？」

返事の代わりに火魔法が飛んでくる。第三位階の焼夷、燃焼に優れる方だな、普通はこれで退路を塞げるが、俺には炎熱無効があるので、適当に避ける。何だつたらたまに突つ込む。

「言い忘れてましたが、火は効きません」

返事は無かったが、背後と側面から地面が隆起し、こちらの動きを封じてくる。なので前に出て斬る。

「ぐう……………」

脇を抜けて、もう一度追撃、がこれは壁を作られ阻止される。……………壁ごと振り抜いて来るか、攻撃が来る左に姿勢を低くしながら背後に回る。がこれは回転して来るな、攻撃は出来るが、攻撃後の追撃を避けられない。刀を上放り投げて、掌底で姿勢を崩し、半歩後ろに引く。

ブンッ！

止まれず、苦し紛れに振り抜いたが、目の前で空を斬るだけ、落ちて来た刀を逆手で持ち浅く速い追撃で押し切りにかかる。

「…………アースバレット!」

複数の礫が飛んでくる。気になっていたこともあるので受ける。

「…………痛いな、これは」

考え事に気を回していたのが悪かったか、地面が陥没して身動きが取れなくなった所に大槌を振り下ろしてきた。

ドガツ、

必殺の一撃、されど振り下ろした本人は手応えの無さに言い表せぬ不安を覚えた。何故なら地面に到達するにはまだ遠く、対戦者の身長より少し下まで行ったかどうか、そして敵を打った時にする音は金属のぶつかる音か、敵を砕く音か、その音は奇しくも最初に避けられた一撃で打った地面の音と同じだ。

「上手く行った、か」

大槌の下から声がする。避けている可能性は無い訳で、確認のためだろう。素早く武器を戻すと、こつちも重さから開放される。身体の方は…………異常なし、だな、

「お前……………いい、一体どうゆうステータスしてるんだ!」

「筋力<sup>STR</sup>と耐久力<sup>VIT</sup>は少し高め、学力<sup>INT</sup>と敏捷<sup>AGL</sup>は結構高め、んで精神力<sup>MEN</sup>と技量<sup>DEX</sup>は分かんらん」

偽装後も前もこんな感じ、なのだがMENとDEXは測定不能、でもって冒流でこのステータスもある程度操作できる。ただスキルのようにしっかり留まらない為か、1時間経つと元に戻る。最も動かせるのは総合1000くらい。勿論持ってきた方は増えるが持つていかれた方は減る。まあ測定不能の二項目から持つてくることが多いと思うが、

そしてさつきのはちよつと裏技、ステータス項目の数字を操作するのは1000程度になると言ったが、そもそも冒流は書き換えや振り分けが主な能力、なのでゴツソリ根幹からVITとMENを交換する様に書き換えたのだ。…………ただこつちは本当にすぐ戻る。1分程度、その上途中で解除とかも出来ないなので、よく考えてから使う必要

がある。それともう一つ問題点があり、DEXは動かせない。……いや、変えられないわけではないよ、ただ、大きな力は制御が大変なのだ、VITに防御目的でやるなら問題無いが、AGLと入れ替えたなら、今朝の壁衝突事故の二の舞いになる。DEXは生産職に必至なのだが、それ以外にも制御や調整にも関わってくる。VIT以外は結構気を使う訳だ、

「さて……………そろそろ戻るかな」

《残り16秒です》

「……………じゃあ終わらせようかゆうきゆうるてんあでたわやめのしらべ悠久流転艶手弱女調」

ドワーフは手先が器用で力が強い、が身長は低く、見た目小さいムキムキのオッサン、ハイドワーフの彼は身長は2メートルあり、多少老け気味くらい、そして筋骨隆々といった感じで身体的には俺に軍配が上がることはない。ただ日本の武術の多くは体格に恵まれない者が体格の大きな相手を制すると言う物が結構多い。柔よく剛を制す、なんて言葉もある。このスタイルは相手の力の大ききこそが威力を決める。そしてこのスタイルには破壊力と言うものが無いが、最も劇的な変化のあるスタイルだ。

スパアーン！

「あの……………、先生最後のあれは？」

ミネルヴァか、……………殺傷力は無いけど、バリバリ死に至らしめる技だから教えてなかったな、しかし確実性も無いし……………あ、

「もしかしたら向いてるかもしれないな」

「本当ですか?！」

「ああ、……………理論上は、けどどな、実際にやってみないと分からないから帰ったら教えるよ」

完成形になれば俺より上手くなるだろうな、多分、

「あれ、俺にもできる?先生」

「……………すまん、やってみないと分からないが、ハルトは難しいと思う」

「うーん、……………じゃあ、どんな相手に有効かだけ聞いていいかな?」

「基本は万人に効く、ボディビルダーや一部の修行者には効きにくい



だろうな、痛みにどれだけ強いか、攻撃対象箇所をどれだけ鍛えているか、だな」

まあ、鍛え方は本当に効果あるのか微妙な奴だし、結構毎日やらないと駄目な面倒なものだ、

結局、武道は色々ある。編み出された背景、辿った歴史、コンセプト、そして目標……：挙げだせばきりが無いが、戦場にそれを置けば幾分か分かりやすくなる。武器を使って効率的に倒す方法、武器を失くした時の方法、己の肉体を武器にする方法、大まかに分けるとこんな物かな、武器を使う方法は剣道や槍術、弓道、武器に関する物がここに入る。武器を失くした時の場合は、杖術や柔道、と言ったものが入る。己の肉体を武器にする方法は空手やムエタイ、中国拳法が、これに入る。

……：まあ、中国拳法は多いため、分類不能とも言えるが、ちなみに居合は武器を使うと武器を失くした時の間に位置すると思う。

前置きが長くなったが、己の肉体を武器にする方法と言うのが、拳や握力等を鍛え上げるのだ、鍛えた人の手はかなりゴツくなる。ただこれが俺にとっては大問題で、工作精度や動作性というのが下がるのだ、その為、拳は鍛えていない。否、鍛えられないのだ。なので、その辺りは鍛錬は完全に素人。ただ知識としてはある程度網羅しているので、向き不向きはどれでもだいたい判断が付く。

「……：獣人の身体の構造って種類で違いがありすぎるんだよなあ」

興味深くもあるが頭を悩ませる要素でもある。可能性は無限に広がっている。

## 恋人（好機） 来たれり

辺りを見渡しても、砂ばかりで遠くに見える地平線も、蜃気楼で土と空の境界線も曖昧だ。…………千里眼で上から俯瞰すればあまり関係ないが、

「主人殿、今日は何方に？」

「散歩……………」

障壁を魔法の絨毯の如く飛ばしながら、正面からぶつかる砂を隔離しながら飛ぶ。…………こいつ、ほっとくと本当に外でないんだよな、閉じ込めてるつもりは無いが、周りの誤解がなかなか解けなくなってきた。

「……………ついでに掃除、終わったらなんか美味しい物食おう」

「はい、…………一緒にしますね」

―5分経過

……………向日葵の特徴を上げるとかなり特殊なのがこれ、こちらから話さなければ無言になる。ニコニコしてるのはいいがなんか言え、間が持たない。俺の後頭部ずっと見ててそんなに楽しいか？

「……………」

そして30分後、目的地が見えてきた。砂漠の真ん中に街が見えてきた。ボロ布の屋根に木の柱、即興テントみたいな街並みだ、そして一際目を引く中央のデカイ城、城周辺は石造りの建物も多いが、この街の貧困層は9割強、貧富の差があり過ぎる。こんな場所なので水を巡って争いが起きるが、それは最日常の一部と化している。ただ命の危機に瀕した者があまりに多すぎる。泥水の様な汚れた水でも流血沙汰になる。しかしこの世界には魔法がある、…………あるのだが、僅かながらいる水魔法の使い手はその魔力すべてを王族の為に使わされている。砂漠のオアシスを中心に発展したこの街には水が無いと言うことはおかしいのだ、水自体はある。何故か、ただいつも為政者の不正や失策の答えと言う奴は、得てして一番くだらなくてつまらないものだ。

「湧くより沢山使ってるんだよな、水浴びに、小汚いおっさんの体洗った排水で争いが起きてるんだから」

もう、死人が看過できない量になってきている。ただ、こいつも異世界から来た勇者の末裔とかで隔離できない。なのできっちり殺して利用する事にした。取り敢えず、刀を隔離から取り出す。初めて使うからどうなるか分からんな。代行者、距離とポイント指定。

《対象までの距離、20キロ前方、水平時から0.0971度上方補正》

腰を落として構える。……細かい注文だな、狙う場所を指定したからか、

「遍断ち」

その場で素早く刀を抜刀、横薙に振り抜き、城を背に鞘に刀を収める。

……その頃、城の中で王族は水浴びをしていた、朝は政務の予定を聴きながら涼んでいるが、政務と言っても内容は代わり映えしない。気になる事、もとい、興味のあること以外は聞き流される。立場の違いもあり、説明する方も聞かれなければ具申も出来ない。今の王になってからは彼の前任が二人いたとだけ付け加えておこう。

朝は王位継承権を持つといってもまだ幼い子供、眠っているためここには居ない。今の王と妃の馴れ初めがこの朝の水浴びなら次第と……といのが政務を読み上げる彼の目の前に広がる光景が日常である。早口にならないよう心掛けながら目の前の光景から目を逸らすべく、手持ちの書類を目で追う。

ドポンツ、バシヤ!

何かが水に落ちた音がしたので音のした方に目を向けると、そこにあったのは先程までプールサイド堺の階段で唇を重ねていた王と妃の首の無い身体だった。

さて……人が、国家が、人類が、組織が、規模は違えどそれらが破滅する理由は存外一つだ。破滅とは何か、それは死と同様身の周りにポツカリと開いた穴の如く、存在している。自分から飛び込むには相応の理由や覚悟が必要となってくる。嵌まる理由としては誰かに

突き落とされるか、知らなかったかだ、あともう一つは？

他者に苦痛や恐怖を強いる（もたらす）者は破滅する？

これは半分正解、完全回答は呆れる程たちが悪く、国だろうが、会社のトップだろうが失望と侮蔑を一身に受ける事となるだろう。

―経緯はどうあれ忘れることだ。

まっ、知らないのと同じ事ではあるが、社会的に恵まれた立場や役に付けば、それ相応の生活を送っていくことができる。ただそれは周りとの乖離でもある。政治家の問題発言だとかが表に出てくるから分かりやすいが、……挙げ出すとキリがないのでやめとく、立場や役職が上になるという事は下が出来ると言う事だ。そして上と下が逆方向に進もうとしたなら、バラバラになる。統制も規制やルールを掲げ振りかざすだけでは意味は無い、状況に合わせた物でなければならぬ。規制やルールに従わない者を排除しても、根本的な問題を解決しなければ意味はない。しかし、価値観の乖離、現状との乖離、乖離、乖離、乖離、乖離、乖離……

掛け離れた分だけ破滅という墓穴は大きく、深くなる。そして、今度は自分が排除される。道徳の授業でも言われる『あなたの代わりは居ない』という言葉、ただこれを社会に当て嵌めて表現するなら『あなた個人の代わりは居ないが、役割なら幾らでも代わりがある』というのが適切な表現だ。そもそも学校でやる道徳が完璧ではない。道徳とはその二文字がそれぞれ意味を持っているが、その実、習う内容は道のみなのだ。国語、算数、理科、社会、英語、体育、図画工作、家庭科、道、である。で徳が何かと問われれば老害共には邪魔な物であつたと断言しよう。

「自浄作用が生きてる事が何より尊い、限界はあれど極力手を入れる必要のない物は美しい」

枯山水の傍らに作った盆栽を眺めながら、剪定忘れが無いか確認する。野次は国会の花と言われていた時代もあつたが、今の花ラフレスアだろ、虫媒花の対象が蠅だからか、臭えわ汚えわ、最小限の品性と思わず吹き出すような皮肉とユーモア、NHKとかの国会答弁とか見るとどつちもセンスの欠片も無えと断言できる、勉強出来る！賢い

もこれを見せれば否定できる気がしてならない。うまいこと言えないなら黙つとけ、それがズレてるとわからないなら尚更、一発も当たらない糞芸人共が、

「……………それと会議で寝てる議員はクビにした方がいい、会議によるが参加毎に一人、50万か100万が支払われている。寝ててもな、……………地方と国会だったかな？忘れたわ、

どこから切るか？その後どう育つか？剪定を上手くやらないと盆栽は枯れる。当たり前だが、生きてる木なのだ。雑菌にやられる事もあるし、場所が悪ければ普通に枯れる。しかし、しっかり手間を惜しまず、世話をすれば美しく力強く育つ。ここで言う美とは生命力だ。小さく世界を切り取る。ジオラマや箱庭のような……………

「ご主人殿」

「マスター……………」

「お父様……………」

「……………ん、もうそんな時間か、向日葵、また後でな」

「いつてらつしやいませ」

ガタツ！ガタ、ゴン！ガタガタガタ……………

「……………砂利の所はケツ痛いだろ」

「私は平気……………」

「それは台車に乗ってる私が言う事ですわよ！」

「……………すまん、ちよつと藤白の所にところに転移してくれ」

「承りました。お父様」

行動が速くて助かるな、付いてすぐに目的の人混みに入っていく。

「ちよつとどけ、……………漂流か遭難かまではわからないが、栄養失調と極度の水分不足の状態だ。」

「なら、水を……………」

「直接飲ませるな！筋力も体力も落ちてるから誤嚥する可能性が高い！それに今は体が水分を吸収しやすくなってる。急激的に水分を吸収すれば血中の水分の割合が一気に増すし、血管への負荷も危険だ。栄養剤の分もある。濡れたタオルで唇を湿らせながら、医療施設で適切な処置をするんだ。摂取させた水分の量は記録してるか？空いて

る容器分でいい。それを医師に伝えろ、濡れタオルの分は別で分けろ、わかつたらさっさとやれ！」

「「「はいい!!」」」

「でこれは医者代だ！使え！」

「「「サアイエツサアア」」」

「……………なあ、なんでお前らまともな医療知識持っていないの？応急処置レベルは押さえとけよ。芦原さん、サバイバル基礎の上下巻、遭難時に生存率を上げる10の法則、身の回りのもので出来る応急処置法1〜10巻、備えてガツチリ防災グッズと心得その1〜3巻、後で出して読むように言っといてくれ」

「お、おう……………」

はあくく、危ない危ない。授業に戻らないとあの子達が待ってる。

「ノルン、用事は終わったから帰るぞ」

「指揮をとられるお父様、素敵でした」

「……………いつも格好いい(？ー?) bグツ！」

「ありがとう、じゃ、また明日」

「ちよお、まちい！こっちは一冊づつしか……………」

……………メモ隔離で送つとくわ、ごめん、

魔法関係の授業はたまに見に行けば大丈夫だが、現在の授業より上を目指す子はどのジャンルでも大変だ。やりたい事別で大雑把に分けられてはいるものの、結構多い。初めの頃はものづくりチームとかだった人数も増えたため、少し手を加えた。しかしどうなっても俺は身一つ、なのでローテーションで回るようにして、行けない時はそれぞれの場所で優秀な生徒やアナスタシアやレア達が手隙な時に代表として見る様になっている。……………で一番大変なのが、言わずもがな戦闘技術コース、ここに来る時は大体みんな集まる。ハルトはずっとこのコースにいるが、ウィルとミネルヴァ、シマシマは生産・技術職コースと掛け持ち、ロイとキリエ、エミルは魔法習得コースと掛け持ち、キングはサボリ気味だが、戦闘技術コースに俺が来た時は欠かさず顔を出している。

前記のコース以外にも座学中心の商業・歴史学コース、種族語学

コースや不定期開催のコース等もある。座学は主にクロエ、クロシエツト、朝日が持ち回りで担当している。

……で問題は戦闘技術コースに俺が来ると他のコースの代表がほぼ居なくなる事だ。周りも良く出来る子だらけだが、ウィルやハルト達は頭一つどころか、二つ三つ飛び抜けている。成長速度に合わせるカリキュラムを組んでいたのもあるが、一緒に行動する事が多かったのも一因だろう。訓練でも10人掛かりでギリギリ瓦解しないレベルだ。一人でも脱落させられればあとは時間の問題という感じだ。まあ、代表に関しては俺の方から順番を指定して課題を出す形にしている。……他のコース全員巻き込みでの授業になるときもあったが、今はこれでやっていける。が……

「先生♡」

ひらりと身を躲す、

「ふふっ、女性を受け止めるのがいい男性と言うものではありませんか？」

「………缺仕舞えや」

普通は受け止めるわ、お前完全に刺しに来てるだろ、瀬戸原、「こいつ以上に割り振りに苦労する奴は無いな、………はあ」

まず何かの制作コース、同じ作業を嫌い、飽きる性格から短期間に限られる。次に語学や魔法系、ここには多数の種族がいるが日常会話には困ってなさそうな所から俺の持っていない自動翻訳持ち、暇な時に魔法関連の本を読んでいるから結構理解している。唯一駄目なのが、戦闘技術……持たせると危険なものもあるが、

こいつはそもそも拷問狂いのド変態だ。目の前に立った敵さえ初めから斬り刻むつもりでいる。例えるなら、一般的に牧場の牛を見て美味しそうとはあまり思わない筈だ。それこそ畜産に関わる知識や経験を持つプロくらいしか言わない。大体の人は精肉されたブロツクの肉か、鉄板で焼いてある牛肉を見て美味しそうと言うだろう。精肉には牛を屠殺する必要がある様に、拷問なり尋問するにも拘束する必要がある。

………要は逆なのだ。精肉の過程で屠殺、拷問の過程で殺害、瀬戸

原にとって拷問Ⅱ戦闘、拘束はおまけ。拷問以外はどうでもいいらしく、拷問とⅡで結んだが、戦闘という概念は持ち合わせていない。まあ、いろいろ言ったが一言に纏めると、

「…………お前の獣みたいない戦い方なんかならないか？」

技と言えるものが無い。刺したり斬ったりと言ったただの動作、故に読みにくくあるが、さりとて防御が脆い点は否めない。不死のような生存性の高いスキルを持っているからといって防御をしなくていいという訳でもないし、形勢が少し傾いただけでも一気に覆される事は戦いに置いては少なくはない。そうなった時、地力や経験がどれだけあるかが物を言う。無理な時は無理だけど、瀬戸際で踏ん張れるかどうかには掛かってくる？

「ふふつ、私、愉しい時間は頭を空っぽにして過ごす様にしてるの」

「そうか、空いてる所があるならそこにモラル詰めるのが先生の仕事だな」

「先生の仕事はあく、私を愉しませる事、…………だから駄・目♡」

ただこの素人殺法も馬鹿に出来ない。何人かでなら抑えられるが、一対一だと生徒の中に抑えられる者がいない。…………勝率は安定しないが、

「自信を持たせるには一役かつてると言えばそうなんだが…………」

勢いや威圧感に圧されるといった。精神面を鍛えなければならぬ生徒にはなかなか辛いのと、トラウマにならないかが心配だ。

「まず、瀬戸原と特訓するか」

「お誘い謹んでお受けしますわ」

さて、まず瀬戸原のスキルは生存性の高い物が多い。いくら攻撃してもダメージを与えられてるかどうかがわからないゾンビみたいな奴だが、大量に血が流れている場所ならともかくそれ以外なら自分の身さえ守れば堅実に削っている。筈だが、かすり傷一つ許さない点はなかなかきつい。…………弱点が無い訳ではない。無いのだが、如何せん見た目が悪い戦い方になる。

「先生、刀は？」

「素手でいい」



「じゃあ〜……………私はこれで」

当然のように鋏を取り出す瀬戸原、その内専用の武器は作るつもりだったんだが……………もう鋏でいいな、うん、大振りの一撃を躲し、片手で手を掴み、その手を引きながら横に回り込み、引き手の反対の肘を伸ばした肘に叩き込む。

パキッ！ゴツ、

折れた音とは違う音、長い間同じ姿勢でいた時、急に動くとも関節がパキッと言う音を出す但其の大きい版だと思ってもらえれば良い。膝は外すより砕く方が簡単なので近い方を撓りをつけて両膝を蹴り砕く、最後に背中から頸椎に向けて肘を叩き込む、暫くこれで伸びてる筈だ、

……………確実に半身不随の再起不能フルコースコンボだが、暫くしか保たないんだよな、それとこいつにカードを引かせたら7枚も出てきた。ただ、いろいろなスキルの文字と兼ね合いが悪いらしくまだスキルとしての形を持っていない（代行者曰く）。死あたりが文字被りしてる影響のようだ、

……………それで職業は虐殺王、処刑王、拷問王、最後に申し訳程度に学生、

……………うんざりする気力さえ起きない。

「……………ああ、もう嫌だ」

職業も一定以上、王から上（王を含む）は特異な付与が出来るようになる。今朝使った遍絶ちは刀神を持つもの以外は使えない。

職業別にいろいろあるが、王と付く職業を持つものは原初の破碎グラウンドゼロインブルーワンウォールセカンドアフストラクトサードスラト始まりの切断第二の貫通叡智の毒朽ち逝く終焉の五つのうちどれかが使える。

職業次第だが、二つ使える物もある。切断と貫通は俺も使える。で、具体的にどうゆう能力かと言うと不壊を持つ者にダメージを与えられるというものだ。ただ、あくまでダメージが与えられるだけであって、ダメージは30%くらいになるし、大きなダメージは与え辛い。ただ不壊を持たない物は威力強化もあって紙屑同然に壊せる。……………単純な魔力消費は大きい、最高クラスの物理攻撃になる。

……ここまでが前置きになるのだが、職業を集めると当然この特異な付与能力も被る物が多くなる（5種類しかないし）。

しかし、この使用権限（代行者曰く）を三つ集めると、絶対攻撃フルブエンブを使える様になる。こっちは不壊であれど容易く斬れる。刀神に統合されてはいるが王以上は剣王、刀王、剣帝に刀神と四つもある。似たような物ばかりなので中身を省略すると切断4貫通3、とその他2、でその他なのだが、

#### 対象選択

攻撃対象を指定出来る。

#### 射程拡張

攻撃射程を伸ばす。

前者はちよつと分かりにくい、後者はシンプル、刀身の先端から延長線上に光が出る。ただ伸ばせる距離は上限無し、そしてまあ、こんな物ブンブン振り回したら敵味方どころか伸ばした射程内の生き物全てに死をばら撒くだけだ。

でもう一つの能力が肝となる。今朝遍断ちで斬った王族、とその居城たる城の柱や外壁、が斬れたのは前者のみ、非攻撃対象を設定できるのだ、鎧を着た者を斬ればまず鎧に当たる。非攻撃対象に鎧を設定すると、鎧を擦り抜け中の人のみを斬る事ができる。王族以外を非攻撃対象に設定して振ったからこそ王族以外は斬れなかったのであるが……問題点が多い。遠距離から暗殺するには極めて向かない。

#### 問題点

- 1 射程拡張の燃費が悪い。（この世界の能力全般）
- 2 離れる程、精度を出すのが難しい。
- 3 刀の反りがある関係上、伸びる射程分もその反りの影響を受ける。
- 4 万能結界の方が便利。

……利点が無い訳ではないが、遠距離攻撃の手段としては今更いらない感がある。それに当てる為には、代行者や千里眼で計算してやる必要がある。この二つが無ければまとも当たる気がしないし、計算したからと言って楽に当たる様になる訳でも無いし、

「……………先生、今日は打ち込みですか」

「いや、かくれんぼ、俺を見つけて一撃入れる。こつちが鬼だから不意打ちに注意する事わかったか」

「……………武器は？」

「使用可、こつちはこの塗料をよく吸ったスポンジ棒、……………柄を見ての通り中身は木刀だ。」

いつもはこれをベチャつとつけてやってたが、今回は対象選択の実験がてらいろいろやってみようと思う。軽めの確認はしているので危険は無い。こんなんでも中身が木刀、当たれば骨折もあるので今まで寸止めでやってきたが、それでは最近限界が来ている。追加で言うと臨場感も欠けているため、生徒の危機感が薄い。塗料以外は透過するのでいい練習になるはずだ。

「なあ、先生、大人ってなんだろう？」

……………大人と子供の差、教師としてあまりいい答えではないだろうが、この手の質問はよく受けていた、だが答え方は変わらない。

「子供は大人になる者だ。大人が子供になることはできない。社会的な自立、精神面、生物学的側面……………いろいろ挙げたところでどれもこれもしつくりこない。基準足り得ない。大人だろうが、子供だろうが、個人であり、人でありの大きなくくりが正解。不正解は子供でいられなくなった大人と言う奴とその概念に囚われる者だ。俺としては大人になるべくしてなったと言える様な人間になりたい、かな、……………まあ、お前がどうなりたいかで考えればいい。ハルト」

「……………どうすれば先生みたいになれる？」

「……………俺なんか目指してもいいことないぞ、俺に言える事は正解は無いが、不正解はある。精神論だけだな、時間が解決する問題に向き合う時は時間に流される事は不正解だ。忘れる事もな、ただ、待つ事が必ずしも正解でも無い。後悔先に立たず、……………後悔の少ない選択をするもよし、欲しい物、護りたい者の為にすべてを掛けるもよし、逃げるもよし、暗躍するもよし、何でもいいが自分で決める事が一番の解決策だよ」

…………自分で考えて答えを出す他無いんだよな。誰かの一生の責任なんて先立たれでもしなければ全う出来ない。しかしなんでこんな事、急に聞いてきたんだ？もうちょつと兆候がある筈な…………

「先生はどれなんですか？……………いろんな人に会ってきましたけど、先生みたいな人を見たこと無い、です……………なんて言うのかな、雰囲気じゃないし、えつと、……………」

……………ようわからん、獣人は全般的に勘が鋭い。クラスに一人くらいはいるだろうが、まあ、体感して理解したことを言語化するの難しい。それが表層心理でない事なら尚更、

「目的に至る道筋、選択肢とその決定、もしくは人生の歩き方……………か」

「うーん？多分そんな感じ、なのかな……………」

世渡りは誰かが教えてくれる事じゃない。教えられても、それこそ一朝一夕に身につくものじゃない。要は普段の歩き方の違いを聴くようなものだ。普通に歩くと言っても重心が利き手や軸足方向に傾いていたり、すり足気味、踵を踏む、猫背、生活習慣に由来するものや、持病、負傷に後遺症、最後に縮地のような特殊な歩法や体捌きが染み付いたもの……………言いたいのはこの辺りか？

「俺は目の届く……………いや、手の届く範囲にあるものはすべて守りたただけだ。力が足りなきや鍛えた、分からないことがあれば学んだ、知らねばならぬ事から目を逸らさないし、出来ない事は出来る様になるまでやった。知ってる範囲で、……………そういうバランスの悪い詰め合わせが俺だ、今出来ないことに衝突しても持てるすべてを持って、直線では無い。紆余曲折、出来る事、知ってる事を継ぎ接ぎで合わせた自分なりの勝ちを描くだけだ。……………そのせいで、極めた先に見える境地が見えない」

居合と芸術、しかも芸術は絵なら絵、という感じに集中するのでは無く、手当たり次第に手を出しまくっている。居合も居合で延長に柔道も手を出しているし、合気道まで齧っているので尚おかしなことになっている。……………戦うとなるとゲームで見た技さえ飛び出す始末で、昔やった自己暗示の実験も絡んで、勝手に体が反射で反撃する事

さえある。

※自己暗示はシンプルに力を強くとか単純なのにしようね。先生との約束だ！

……まあ、それはさておき、答えとしてはこんな感じかな、概念や精神論ばかりで分かりにくいと思うけど、言語化するのが難しいのだ、

「何事も積み重ねが大事だな、失敗でも成功でも……」

さて、成功でも失敗でも価値があると言ったが、その道筋は最も価値を左右する。道筋と言ったが、精神的な面や思考回路の面だ。まず、成功しかしない人間と失敗しかしない人間がいたとしよう。そんな二人に10回ゲームをして勝敗を競ってもらおう。当然10体0になるが、この勝利の価値を決められるのは失敗しかしない人間にある。棄権したり、適当に相手をされるのと、全力で倒しに来る相手を負かすのは、達成感にも違いがある筈だ。なんせ、勝ったからといって何もないしな、達成感、万能感、多幸感………こういった幸せも、何も無い状態で発生し続けると人間は壊れる。エラーを起こすと言ったほうがいいかな、思考実験にも禁止される物が多い様に禁止される物にはそれ相応の理由がある。

「さあ、やって来ましたエンドリバー、いつ来てもシケた街ですね」

「お父様、ここでは何を？」

「……マスター、抱っこ」

「旦那様の為に頑張るっすよ！」

「ご主人殿の為に頑張るぞ！おー！」

連れてきたのはレア、ノルン、アナスタシア、アリア、向日葵だ。

……相変わらず平坦な調子で辛辣な言葉を並べるレア、

「……この時期になると麻薬がよく出回るんだと、そこでその治療だな、放っておくと他にも影響が及ぶし、ここで食い止める」

元の世界を基準に考えると、乱用する薬物によっては完治しない物もある。が、それは元の世界での話である。………と言っても、三方

面からアプローチする必要がある訳だ、それも最上位クラスの、

「……………予想より酷いな、取り敢えずグループ分けだな、身体機能、脳の萎縮とか物理的に欠けてるのはアナスタシアの所に、衰弱、毒性の激しい者はレアの所に、依存性や幻覚作用、刺激が強いのは……………」

「……………ロストリバーサル」

「消毒お願いしますー」

「ん……………デイスペル」

「……………何で私ごとー？」

「不浄だから？」

「あのあのく何処が汚れてるとー？」

「あなたの心です（ ー、ー、ー、）フツ」

「……………それ使い方が違うんですけどー？」

まあ、読心でも断片的に読むところという事はよくある。多分言ってみたいセリフみたいなの作ってたのが頭の隅にあっただらう。

「次の患者さんどうぞー」

「これですね……………持ってきましたよ」

「……………持って来ましたねえー」

暴れたりされると面倒なので向日葵が強欲で作り出した手で文字通り持ってきた。レアはカルテを照らし合わせて、準備した薬をそのまま打つ。

「ちなみに何打ったの？」

「取り敢えずはー、コカインですねー、ベットで縛つといて下さいー、それと下剤諸々と栄養剤の点滴とー……………その前に二リットル程採血をー」

「それ、瀉血……………」

「……………？場所無いから天井に固定しておくね？」

「あつちは？」

「アリアの方ですかー？」

「あつちは部屋に入れば大人しくなるから大丈夫」

「あのあのく麻薬全般依存性があるのに一人で足りるんですかー？」

「魔力をご主人殿とノルンで補完すれば大丈夫だそうです。……………が

いぶしゆつりよくたんし？もあるから大丈夫だそうです。」

「あー、この前作ったアレですね〜」

轟音が響く一室、虚ろな目で呻き声を出し、よだれ垂らしながら手を突き上げる様は……洗脳してるみたいだ。治療に見えねえ、芦原さんのスキルで買ってもらったベースをかき鳴らしながら、頭の片隅で思考する。

「二二」あああ〜おあ〜あああ〜二二二二」

吐きそうな表情でよれよれの歌声？を披露するアリア、でステータスがこちら、

アリア オートマタ

機構精霊 幻死の朝顔

パーソナルスキル 黄昏 醜聞 <sup>アルシエル</sup>黒陽ノ使徒 月夜の歌姫

スキル 分身1 幻覚魔法6 超克魔法2 自動修復5 剣術2

槍術3 体術3 演奏6 輪唱1 ユニゾン1 指揮者1

耐性 毒・酸無効 精神攻撃反射 精神攻撃倍化

称号 生きた人形 災疫の歌姫

XVIIII 月

黄昏 内約

在りし日を想い 周囲の対象に精神系状態異常を掛ける。または解除する。

過ぎ去りし過去を求めて 超克魔法を習得。

醜聞 内約

話題の渦中 受ける精神攻撃が倍になるが、声が届く範囲の対象者の耐性を下げる瘴気を出せる。

期待の写し 精神攻撃反射

<sup>アルシエル</sup>黒陽ノ使徒 内約

終着点ニシテ出発点 対価に応じて能力を強化し、一時的に限界を破棄する。

一八全、全ニシテ一 魔力で分身を作れる。

ベースは俺が弾いてるが、他は分身してアリアが弾いたり、叩いたりしている。ボーカルが下手だが、緊張のせいだろう。たまに練習してるの見るけどこんな感じじゃないし、……俺も恥かかない程度の腕だし、人の事はあまり言えんが、なら何故弾いているかと言えば魔力供給のついで、ベースの端子が刺さったアンプ（レア作）はアリアのスカートの下から伸びる端子も繋がっており、このアンプを介して魔力を送っている。

「……………ありがとうございました」

ユニゾンや輪唱で歌に乗せた幻覚魔法は増幅され高い効果を出す。尚かつ精神面から様々な揺さぶりをかけているので精神系状態異常も難なく入る。……………何でゴスペルにベースがいるのかは最後まで分からなかったがな、

「あつ、殺人的なりフ捌きつ、すね」

「……………レアか、それ言えつったの？」

「あのあのく、ライブの……………」

下十下前十前・P、このコマンドで繰り出される技は知る人ぞ知るあの技だ。

「昇く竜拳！」

「うおわあ、うおわあ……………（エコーから地面に倒れる音まで再現）」

……………これがしたかったのだろうか？やたら芸細かい。最後のオプシヨンの吐血を見届ける。

「ω・、（ちらつ）」

「全員つ、終わりました！」

「うーん……………ああ、終わった、の？」

「みんなお疲れ様、……………久し振りに弾くと疲れるな」

「そんなマスターに心の癒し……………チラッ」

そう言うときスカートをたくしあげる。……………ギリギリ見えない領域まで、

「……………続きは帰ってから」

「気持ちだけ貰っとく」



「お父様、帰りますか？」

「……………明らかに待ち疲れた感があるな、まあ、ノルンは魔力を貸す以外はやる事なかったしな、

「向日葵とレア、アリアは残ってくれ、あとアリスとルシア、ロザリーを連れて来てくれ」

「……………私だけ帰る？マスター」

「すまん、美味しいもの作って待っていてくれ、あっちが限界だ」

「ん、わかった。帰ってから可愛がってくれ……………」

「迎えに行つて参ります」

催淫を使う前に連れていかれたな……………、前もって伝えていたからすぐにノルンが二人を連れて戻ってきた。転移のポイントが遠いのでの合流には少し時間が掛かったが、

「じゃあ、やるか、麻薬組織潰し」

と言う訳で殲滅を開始する訳だが、その前に千里眼で麻薬の位置を特定、隔離する。大麻やアヘンは麻酔にも使える。他も同様で医薬品として使える物のみ回収し、乱用目的の合成麻薬や加工前の幻覚作用の強いキノコ等、この世界特有の魔力に作用するヤヴァイ奴を分別する。その魔力に作用する奴はこの世界でもまやくと呼ばれている。字が違うんだけど、魔薬、

「ロザリー、御挨拶と行こうか？」

「分かってるよ……………来い！」

辺りに影が指すと暫く間を置いて轟音と砂煙を舞い上げる。vipルームや上客向けの応接間と客室、首魁に幹部からその直属は丸ごと灰燼と帰したが、末端はまだ残っている。……………馬鹿デカイ蜘蛛を踏んだら靴の下から（蜘蛛の）脚がはみ出てる感じだ。大体逃げるだろうが、今回はほつとく。全滅させるより確実に刈っておかないとならない物もある。ほつといてもこの辺の治安が特別悪くなる訳でもない。元が劣悪と言ってしまうえば元も子もないが、それが事実だし、一時的に荒れるだろうがそれだけだ。なら問題は何かと言われるれば作爲的にその期間を伸ばされる事と首謀者を逃がす事だ。潰れた建物から呻き声やガサガサと蠢く音や無事だった者は走って逃げる

者やら誰かを助けようとしている者やら、それらを無視して黒い塊（パンドーラ）に近づいて行く。

「よし、退かしてくれ」

ロザリーが呼び出したパンドーラを戻す。それに合わせて出来た僅かな地面との隙間、そこから薄く鋭い物が一番近くにいたロザリーに向かってきたので、間に入って攻撃を逸らしてやる。まあ、予め能力は見ていたから攻撃手段は予想通り、どうやったのかは分からないが視界は確保できているらしい。大雑把に影に向けて攻撃してきた可能性も高いが、

名前 久道 仁

パーソナルスキル ペーパークラフト

スキル 鑑定7 索敵5 格闘術8 体術7 投擲4 体力自動

回復6 自己再生8

耐性 電撃耐性6 苦痛耐性6

称号 勇者

ペーパークラフト 内約

触れた物や自分を紙のよう変形させるが、燃えやすくなる。

……中古の研ぎ直しでは無理そうだ。見た感じは大丈夫そうだが、次は折れるだろうな、隔離に仕舞って別の刀を出す。あまり使いたくないが仕方ない。……透く水・七式の名前を無名刀に偽装して手に取る。

「作戦通りに行くぞ」

## 教皇（真実）の探求

体の各部を変化させながら放つ攻撃は間合いも変わるし、揺らめく軌道から予想も立てづらい。鞭とか鎖鎌とか、武器なら手や目線、重心やらの動きを見て先読み出来るが、如何せん体の一部となると判断材料が減る。手が変形してるからな、遠心力による威力の増加は恩恵が少ないようだが、鞭は打撃、鎌なら刺突と言ったように攻撃方法は固定されているが、こっちは突くも斬るも選べる。しかも、2本以上なら回避も厳しくなって来る。割と早いし、………ただ何より問題なのは

「……………ふう」

隙を見つけて懐に飛び込んで切りつけようとしても、体が変形して攻撃を避けるのだ。厄介なのはこいつの意識とは無関係なのでこっちの動きを見切れていなくても避けられる点だ。……………あつ気づいた。

ジャキ！

ハリネズミの様に全身から棘のような物が飛び出してくる。気づいた時に後ろに飛んでるので当たりはしないが、面倒臭い。

追撃で伸びてきた複数の針状のものを斬り落としながら、躲しなから着地する。針の先はすぐに再生するなあ、やっぱり、で代行者、どうだ？

《予想通りです》

まあ、この辺はそこまで心配して無かったが、確認は大事だ。

「……………これはお前らの仕業か？」

えっ……………それ今聞くの？と思っただけど、地面を這うように脚の辺りから、少し遠回りに変形させた体の一部をこちらに伸ばしてきている。

「それが？」

テキトウに相槌を打ちながら本体と伸ばしてきた一部に意識を向

ける。

「それが、じゃねえよ！あそこに一体どれだけの人間がいたと思ってるんだよ！関係無い奴だっっていたんだぜ？」

ああ、居たな、給仕とか攻撃前に隔離したけど？なにか？本人は揺さぶったつもりらしく背後から迫ってきた針状の物を間合いに入った瞬間に斬り落とす。見なくても十分対処可能だ。

「チツ」

「どうやら吐き溜めの王様の機嫌を損ねたらしいな。心配しなくてもその辺で救助に参加してるよ。悪事を主導してる奴はお前と同じく様に平等に潰したから、お前と同じように生き残れるのがいればわかるだろ？」

テキトウに炎を翻しながら、煽って見る。

「鑑定持ちか」

「ふっ……………その程度は分かるか」

言わなくてもいいだろ？こっちに来た人間なんだし、分からなかったら相当のアホだ。まあ、情報を引き出すつもりだったんだろうが、それに乗ってやるメリットが無いので、作戦を進める。刀に炎を纏わせ斬りかかる、まあ、取り敢えず、回避できない程速く斬りかかることにするが……………手数重視では意味ないな、ただ纏わせた炎は追撃する様に刀の軌道を追いかけてるだけなので当たってない。刀に溜まった熱の方は通っているかもしれないが……………

「無し、次」

炎を消し、射程を伸ばして確実に切断する。如何せん避けるから無理矢理巻き込む形出切らねばならないし、あっちの再生ペースが上だな、やっぱりこれはもつと無いな。

「次！ライトニング！」

空を割る一閃、……………ちっ避けたか。

「……………お前まさか」

「こっちも手札は伏せておきたかったんだよ、面倒くさい」

こいつに負ける心配は無いけど、逃げられたり、捕まえるとなると難しいのだ。だから、こいつの偽装ステータスを見て、相手の流れに

乗ったまま、不意を付いて仕留めるつもりだった。でこれが正しいこいつのステータスだ。

名前 久道 仁

パーソナルスキル 篡奪 虚構遊戯ストーリーテラー 自動回避

スキル 鑑定7 格闘術8 体術7 投擲4 体力自動回復6

魔力自動回復6 自己再生10 変幻自在1 剛力6 空間認識1

暗視1 熱源感知1

耐性 炎熱耐性9 低温耐性9 風圧耐性7 衝撃耐性8 衰

弱耐性9 麻痺耐性7 精神攻撃耐性2 聖光魔法攻撃耐性9 闇

魔法攻撃耐性8 魔法攻撃耐性7 物理攻撃耐性5 苦痛耐性6

とにかく耐性が凄まじい。唯一耐性が無いのがあるように見せていた電撃、あとは毒と、耐性が低い精神攻撃、やり取りの直後、レアが隙を付いて、背後からサプレッサー内蔵の銃で何発か撃ち込むも変形して避けられた。反撃で手を伸ばしたが、それは液体の様にレアの一定距離から変形して逸れていく。見えない壁があるかのように、

「あー、これも駄目みたいですね〜」

「名前の通り、本人の意思に関係ない回避みたいだな」

「……………何しやがった」

レアにも他の近接系人形の娘と同じようにアダマントタイトの膜一枚下には体の数ヶ所に穴が開けられている。ただレアは金属で武器を出すことは無い。ティルフィングの血を繋ぐ事が主であるが、別にそれだけの物では無い。体内に取り入れた毒物を霧状に散布する事もできるのだ。気付かずに近づけば大変な事になる。あと酸も撒ける。さっきの銃も麻酔銃だ、まあダメ元だが、射てれば大分違う筈だ。

「無尽連結・鱗針三段突き！」

なんて事は無い。ただの連続突きだ。実験用に戦技を途切れる事なく使う為の連結用の戦技だ。……………疲れる。

「チッ」

体を変形させながらも、後ろに飛び退き、間合いから逃がれた。少

し早く攻撃し過ぎたせいで結構当たったが、目的が違うので次はもう少し速度を落とそう。

「無尽連結・鱗針三段突き×3（棒）」

「テキトウに追撃を掛けて情報収集、……………まあこんな物か、

「へっ、……………かなりの速さだけど、当たらなきゃ意味ないぞ?」

「俺はお前と戦うつもりは無い」

「あ?」

今度は最速で踏み込み、突き、斬り上げ、振り下ろしの順で行い、腕を切り落としてやる。

「俺はお前のスキルを相手にしてるだけだ、スキルの付属品」

腕を切り落としてやってからはすぐ回復したが、そこからは人の形では無い状態に変形、面積を増やして四方八方から襲いかかってくる。……………予想通りだな、こうならないのが理想的だったんだが、プランCに食い込まなければいいか、

「せえ〜の!」

「はあああ!」

瓦礫を投げる向日葵、それを蹴り碎くアリス、変形して避けなければ蜂の巣になる礫の雨を降らせる。……………この二人にあまり器用なことは出来ないで降らせる範囲を予め指定してある。なので一心不乱に投げて碎いてを繰り返している。レアは毒を放出して俺の万能結界と合わせて退路を遮断、本人は暇なので攻撃のタイミングに麻酔弾を撃ち込んで回避させる事で姿勢を崩している。毒の比重が重いので上空の届かない箇所はルシアにカバーしてもらおう。こつちも暇なので、レアが作った兵器の類いを乱射している。……………無差別である。

キンツ

「すいません!マスター!」

「気にするな!こつちが範囲に入ったんだ、絶やさず頼む!」

一粒を弾いて体を置くスペースを確保しただけだが、連携に声掛けは大事な事だ。精神面の影響が大きいし、余裕があるうちは放置しない方がいい。ちなみに余裕があるのは自動回避のパターンを解析し

たからだ。散々突きまくったからな、遅い攻撃で誘導して細くしてから本命で斬ると楽に落とせる。まあこの辺は変幻自在の欠点かな、

自動回避と合わせると無敵に思える便利なスキルだが、元がスライムとか構造が単純な魔物のスキルだ。人の身体は筋肉が無ければ動かせないし、動力となる養分や酸素を送る血管に血液も通す必要がある。出す力に比例して両者を大きくする必要があるので、スライムの身体はほぼ水分で空気中の魔力を取り込み生きているらしいが、人は空気も吸わねばならないし、食べ物も水も摂取し、体温の維持……と生命維持のリソースは確保し続ける必要がある。どれか一つ断つだけでも意識を保つのも厳しくなってくる。それと地形に適応したスライム（この世界のスライムは弱くないむしろ強い）もそうだが、水分やその属性に合わせた魔力やらを浴びると体積が増える。まあ、攻撃運用はその辺りが前提になつているから、最初の一撃で確認したが失った分を回復するだけの自己再生では体積は増えない。そして、思考する為には脳もいるし、心臓もいる。消化器系はある程度無視出来ても内容物となると簡単では無い。排出するなら問題ないが、……まあ、逃げるなら兎も角、攻撃向きでも無いし、人間に扱えるスキルでは無い。回避させるだけでも臓器やらに穴は開く。

「何処まで息が続くか根比べ、かな」

まあ、他の熱源感知や、空間認識とか目の代わりになりそうなスキルもあるから感覚器官は必要なさそうなので、急所となる脳や心臓を探すのに苦労しそうだが、その辺は視えるので問題ない訳だが……逃げるのよな、脳が、

さつき試しに心臓を真つ二つにしたけど、もう一個心臓を体内で複製しやがった、ただ脳は複製しても中身のデータまではコピー出来ない筈だろうからそっちを追い掛けるが、面倒くさいのだ。で周りから範囲攻撃で経路を絞って追い込みも掛けて、対処項目を増やして行けばその内、ボロを出るだろうが、

「勿体ないな、………なんか」

「何がでしょう？お父様」

「………ああ、その手があるか」

一気に距離を詰めて掌底で心臓を圧迫、しながら冒流を使う。鞭のように撓る攻撃を躲し、距離を取り直し今度は踏み潰す。複製したら次を追い回すのを繰り返した。

「……………よし、下準備はできたな、ノルン、アリア、頼むぞ」

「……………あの、マスター、これ何の時間ですか？」

「今か？幻覚を見せて調子に乗らせてる最中だ。」

冒流で耐性をちよつと貰うついでに空間認識も貰っておいた。便利そうだし、隔離の障壁をジリジリと狭めながら、アリアの幻覚でノルンの無限回廊に誘導している。カップ麺に湯を入れて待つ間に空間認識の確認をしよう。取り敢えず発動させる。……………思ったより便利な能力では無さそうだ。目を閉じて集中すると、周囲の風の動きが分かるくらいだ。範囲にすると俺を中心に直径30メートル程か、多分熱源感知と併用するのが肝らしい。

《千里眼との併用はどうでしょう？》

……………俺が併用出来そうなスキルはそれしか無いな、ただし視覚と考えると相性が良い気がしないな、用途は狭そうだ。……………となると精度を上げる必要があるか、

「ふう……………」

試しに空間認識の範囲を絞ってみると足元のカップ麺や瓦礫のシルエットが、さつきよりくつきりとした。後は複数の視点を連動させて……………代行者が情報処理、人には2つしか目がないのにそれ以上の視覚情報は処理出来ないからな、10メートル圏内の情報を死角無く網羅することが出来そうだ。他にも使えそうなパターンが無いか探りながら調整する。

「……………マスター？伸びますよ？」

「悪い……………新しいの準備してくれ、それは食べていいから、……………あと、ヨダレ？拭け」

何が垂れてるのかまでは分からないが、口元から垂れてる、あと食べたそうだし、軽く把握するのも、もう少し掛かりそう……………

「……………」



「……………」

ルシアも食べたそうなのと、このまま立ったままにしておくのも落ち着かないので向日葵とルシアの分のカップ麺を出す。

「お父様、入りましたよ」

「ん……………そうか、せっかくだし、みんなで食うか」

「帰ってからの方が宜しいのでは？」

「帰ってからカップ麺食う意味が無いからな、そんなに時間も掛からないし良いだろう。アリアが幻覚で周りは誤魔化し……………」

ズルツ、ズルズル……………」

我、感せずなのか、空気が読めないだけなのか、はたまた大物なのか、……………アリスはただ、麺を啜る。

「……………ゴミは隔離に入れておくから渡してくれ」

異世界でもゴミ処理問題は起きてる。法やら団体やらがあつての制限は無いので、諸々高火力で焼く。倒せなくは無いが、面倒くさいので無限回廊に封印したが、ガチで戦うのは消耗が激しいし、隔離しようにも負けを認めさせなければならぬ。この手の奴は生きてる限り負けを認めない。それに、俺のスキルや能力は自己強化がほぼ無い。理想は戦う前から勝負が決しているくらいが良いし、逃したら面倒な事になる。……………無いなら無いなりにやるしか無いが、

ただ、物事には限界がある。しかし、それは片方の方向に対してのみだ。温度が分かりやすい話で、水の沸騰する100cを基準に設定されているが、氷点下、つまりマイナスは-273.15cより下が無い。理屈としては小学校でも習う状態変化にもあったが、気体はよく動くのに対して固体は殆ど動かない。……………要は分子の動きが止まるからこれ以上下がないのだ。人の頭の良さをIQを基準にする場合は賢さの方に限界があるが、

「……………そんなもので決まるなら苦労しないよな」

「いつでも帰れますよ、お父様」

……………片付けも終わったか、まあ、IQはそこまで宛にしてないが、賢さに限界があるという点は確かだと思う。まず何を持って賢いの

かを明確にする事はできないが、IQを図る試験や面接等では愚かさ  
は測れないからな。それに基準があるという事は上限には人が理解  
できる範囲で限界はある、と言うことだ。歴史に残った愚行や悪政を  
数値化出来るなら変わってくるだろうが、今の所、図る術は無い。  
……道徳的に今後も出てくることは無いだろうが、

「こらあああ！私のダンジョンは遊び場じゃないぞ！」

「アハハハハ!!」

楽しそうな声が聞こえるな、聞きたいことがあって来たのだから、ま  
あ、少し近況も聞いてみるか。

「……………うええ、グスツ、私のダンジョンはなあ！アスレチックじゃ  
ないんだよ！冒険者達が恐れる魔窟なんだよ！タイムアタックって  
何!?そもそも踏破出来ない様にしてるのに当たり前のように……………  
うええ〜」

……………生徒達は思ったよりみんな成長しているようだ。飲むかど  
うかはともかく人生の潤滑剤(酒)を置いておく。ついでにこっちの  
聞きたい事も色々喋ってくれるといいが、

「ダンジョンの異界なんて特殊も特殊な奴でしょう?そんなの聞いて  
どうするだよ〜えへえ〜」

大分酔いが回ってきたな……………

「特徴とか踏破する方法とかは無いのか？」

一度、偵察に行ってきたが、正直よく分からない。まず、一階層が  
広い影響か、千里眼が次の階層まで影響しない。それでも次の階層に  
繋がる階段を見つけたが、そこに行くための道がダンジョン側の力で  
閉じられている。表向きそうは見えないが先に階段あるので色々  
やってみたが、こじ開けるには至らなかった。唯一、絶対切断を発動  
させて切った時は階段も見えたがすぐに塞がってしまった。

「ひっく、……………ダンジョンの仕掛けは難易度があるけど、異界はその  
階層全てが仕掛けになってるんだよねえ〜私達は踏破不可能な条件  
を設定できないからさあ〜……………うえへへえ、ああ〜、条件を満たせ  
ば開くよお？」

そうか、不可能な条件は設定できないか、

「じゃあ、事実上不可能な条件は可能性なのか？」

「……………例えば？」

「……………先に進む者の心臓置いてけとか？一層で生物の進行禁止にして、二層で非生物の進行禁止なやつとか？」

「そう言うルールじゃないし……………、あと異界は一層だけだからそういうのは無理だね。それに制約として条件は示さないといけないから……………まあ、ダンジョン領域なら何処にどんな言語で書いてもいいらしいけど」

領域……………かあ、まあ、千里眼が無ければくまなく調べるなんて真似は出来ない訳だが、それっぽい物は無かった、ただ領域と言った、しかもダンジョンとくつつけて

「そのダンジョン領域の定義は？見分け方とかあるか？」

「……………塔型はその内部と外壁建物全体だけど、洞窟型は分かんないよお……………同じ領域を共有は出来ないし、隣接してれば干渉するから分かるけどさあ、ダンジョンの入り口から領域ある程度伸ばせるじゃないかな？意味ないから伸ばしたことはないけど、なんでそんなこと聞く……………？」

「……………コップが空いてるな、入れるぞ」

「へへへ、ありがとなあ〜」

テキトウに誤魔化しながら続きを聞く。酒が入っている影響もあって結構聞けたと思う。千里眼と代行者を駆使して調査した結果、多分ダンジョンの入り口から正面に30キロ、森の一本の木に書いてあるのがそれだろうという結論に至った。

## 女教皇／女帝（異なる表裏）

「色違いの童話種、姥捨山とぶんぶく茶釜、北風と太陽を魔法を使わず完全討伐と書いてある訳だが……………」

まず、童話種について説明すると異界には魔物が居ない。代わりにこの童話種がいる訳だが、これらは自然発生するので無い。魔物は生物と魔物の違いは、魔物が魔石を持つが動物は持たないと言うものだが、それ以外の臓器等に着目すれば、異形と言える程形が違う物を除けば消化器と言った、臓器の類はそんなに変わらない。

まあ、魔物でもその辺りを見ればどういう進化を辿ったのか、ある程度大雑把な足跡を辿るくらいなら出来なくもないが、この童話種という奴は生物をベースにする。そこにダンジョンの血肉もとい、土塊を混ぜて捏ねてで出来た物がこれだ。……………と言っても俺がの目に写る異界は人と違う訳だが、その辺りはまあ、今聞いた話で違和感というかそれでいくつもの種類が作れるのかとか、思っただろうが、その辺りは形だけと言う奴だ。見えるものが違う理由は異界全体に幻覚魔法が使われているからだ。俺が持つ真理のせいで効果は無いが、まあ、土塊でかさ増しして形を作って上から幻覚をかけた訳だが……………

「……………こんなの作って何になるのかねえ？醜悪だ、センスを疑う」

取り敢えず、一番近くに居た童話種のぶんぶく茶釜の元に来たのだが、まあ、他も似た物と言えばそうだが、腹や口に岩を詰め込まれた老人、もつとも、シルエットは原型を留めておらず、馬鹿デカイ亀といった感じだ。しかし、この老人は生きている。内包する魔力量を一定に減らすと助ける事ができるとかで、部位を切り落とすとその箇所は欠損したままになるとの事だ。ただ……………

「完全討伐ってのがどう言う状態を指すのかわからんが……………」

「……………珍しい、パターン？」

その辺りは色々試すつもりだが、まずは俺からだ。背中に素早く移動して冒流で魔力を吸い上げる。……………駄目だ、ダンジョンとのリン

クが切れた。土塊が泥のように溶け出し、衰弱した老人が残る。腹等は裂けていたがその辺りは元に戻っている。その辺りは回復するようだ。

「……………次はどうしましょう?」

「月夜、次は頼めるか、説明は移動しながらする」

「分かりました」

月夜は刀を持って対峙する。月夜に与えた武器は空間切断銃デユランダルと言う。今握ってる刀鍵・一式、跳筒・二式、潜鎧・三式、刃翼・四式、断空・五式、そしてよく使う絶剣・六式を合わせて総称で呼ぶ物だ。ただ武器毎に効果は違うが、どれも空間魔法によって攻撃する代物だ。……………鎧は一度作り直したが、よく使う絶剣・六式は空間切断に特化しているため、刀身の射程を超え、空間ごと斬ることも可能で狭い箇所では空間を切り、刀身を潜ませることで十全に振るうことも出来る。で、刀鍵・一式は、

「……………では、小生は真理を借りますね」

「ああ」

まあ、貸すと言っても一部模倣の能力なので異界の幻覚を無効化できれば何でもいいのだが、月夜は素早く近付き、固まった土塊に向けて刀を振ると、土塊は瞬き一つする間もなく、消える。同じ容量で攻撃を躲しながら刀を振って行き、すぐに全てを取り除く。

「終わりましたよ。ご主人様」

「……………駄目っぽいなあ」

鍵刀・一式の能力は界断失墜、これを使って土塊のみを消したのだが、こうでもないらしい。因みにこの界断という能力は空間切断に近いが、一振りした箇所は二次元に、重なる箇所は一次元になり、近くのを引き寄せる仕様にしてある。……………簡単に言うと三次元から落とす能力でもある。

「じゃあ次だ」

「ご主人殿! 出番ですね!」

バアアン!

途轍もない轟音にしばらく遅れ、土がパラパラと落ちてくる。やった事は単純、向日葵が強欲で作り出した巨大な腕で上から叩き潰した。

「お……………クリアか？」

いまいち条件は分からないままだけど、出来たらしい。再出現しなかったし、

「……………取り敢えず次に行ってみるか」

「はい！」

ボンッ！

北風と太陽、風船が破裂した様な音（規模は数万倍）片方ずつに握り潰した。が、この手の二対一体の奴は同時に潰して見た方がいいかも知れない。

「違うみたいだな……………今度は同時に潰して見てくれ」

パンッ！

今度は両手で掴んで挟んで潰した。まともに受けたら鼓膜が敗れるであろう破裂音を結界で無効化した。が、両手を合わせた際に出る風圧だけでも吹き飛ばされそうになった。

「……………これで良いみたいだな、後はぶんぶく茶釜か」

ボンッ！

砂煙が舞い上がり、広域に広がっていく。結界を使って防いだが、かなりの速度で広がるのが、その凄まじい威力を物語る。それこそ火山が噴火したかのようだ。ただ、これは……………

「駄目みたいだな」

まあ、イマイチ条件も掴みかねてるし、一旦見つめ直すとするか、……………と言つても前例や情報等の判断材料が無い。ここは敵と方法、倒した向日葵と月夜の能力を比較して決めるとしよう。北風と太陽は同時に倒すでもいいとしても、姥捨山だな、

《データの比較……………終了しました》

No name オートマタ

機構精霊 笑顔の向日葵

パーソナルスキル 強欲 正義ノ使徒

スキル 燃烧魔法6 風魔法8 完全再生1 格闘術7 体術4

目利き4 水魔法2 土魔法3 追跡6 疾駆2 採掘2 短剣

術7 料理2

耐性 毒・酸無効

称号 生きた人形

月夜 オートマタ

機構精霊 純白の月長石

パーソナルスキル 忍耐 狡猾 信賴ノ使徒

スキル 完全再生1 読心10 空間魔法3 催淫10 魅了1

0

耐性 毒・酸無効 不壊

称号 生きた人形

向日葵 月夜

str	48263	str	3211
vit	13623	vit	6203
int	3204	int	23216
men	11361	men	10082
dex	12331	dex	6311
agl	6382	agl	7109

一応不壊はあるが、数値としては出る。……訳だが、何だこれ、《称号、生きた人形や正義ノ使徒の影響が大きいです。》

向日葵と月夜では作られた時期も大分違う、生きた人形の効果は通常成長しない自動人形等能力を成長させるというものだが、スキル以外でも出ているんだなど、改めて認識した。ただ、他の子も向日葵ほどステータスが全体的、且つ大幅的に伸びている者はいない。強欲の影響で素のstrは高いが他に影響を与えている要素があるとすれば、間違いなく正義ノ使徒だろうな、俺が与えた使徒と付くスキルの中にあって成長を促す能力の詰め合わせだ。しかも一時的な強化で

は無く、素のステータスを底上げして行くから、拠点周辺に入ってくる盗賊をメインに狩っていることもあってか s t r の上昇が、極めて高い。……………というか高過ぎる。やっぱりこの辺が条件と関わりありそうだな、

「取り敢えず、次はクロシエツト、駄目だったら、アリス、月夜、クロエの順でそれでも駄目なら、月夜が朝日と代わってくれ、……………それとこのメモをレアに渡して、アリスと代わって戻って、ルシアと代わってから、クロエと代わって戻ってきてくれ」

「わ、わたくし頑張ります」

「私も、がんばります！」

「……………そんなに必死にならなくてもいいぞ、それに二人には別のことをやってもらおうし」

「特訓の相手ですか？」

「ああ、あれですか？」

「他に任せられる奴もいないしな、もしもに備えてクロシエツトも審判員につけてな」

手加減もそうだが、実力が足りないとあの四人の特訓は無理、それと、かなりやり取りも苛烈になっていっているのもあって止めるにも速度か技量のどちらがかけていても安全に止められないのでクロシエツトも常駐しなければならない。

結論だけ言うとぶんぶく茶釜は朝日が倒しました。こっちに居るメンバーは向日葵、ルシア、朝日、月夜の四人だ。

「時間もいい頃だし、引き返すか」

異界は広い、その上、ここは外敵も出づらいために、ダンジョン内には街がある。……………まあシヨボい仮設住居みたいなので料金だけ高い宿、低品質高価格の道具類を取り扱っている店、辛うじて小屋の体裁を保っている素人建設の住居などがひしめき合っている場所なのだが、どんな場所でも人が集まるからには価値のある物はある。はっきり言って情報以外は要らんが、ただ、こんな場所だからこそ需要のあるものもある。集合している場所の外れにささっと代行者に家を



建てさせた訳だが、……………まあ、ここに来た理由付けは必要なのだ。安全な拠点も、

「おお、やっと戻ってきたか！早くこれを見てくれ！」  
「今度は何拾ったんだ？」

この異界には童話種以外にも敵がいる。こっちは概ね土の塊と言ったところだが、罪欲種と呼ばれているこれらは、七つの大罪に擬えたもので、高価な物や希少な物を落とす。ただ殆ど土塊で、幻覚も掛けられているわあで、土の中から宝を探すのは一苦勞。で見極める方法は2つ、一つはダンジョンの外に出す。すると、幻覚などが解け土に戻るのだから探す。もう一つは鑑定等で見極める。ただ外まで持つていくより鑑定を依頼する者が殆ど、その理由は積み上げられた土砂の山にある。

「多いな……………」

異界は広い、入り口まで運べないからこそ普及しているのだ。千里眼で必要なものだけさっさと見つけて終わらせるとするか、

土の山から掘り起こした金品を渡し、料金を受け取る。……………掘り起こすのが面倒だ。隔離で多少はラクをしているが、人が見てる前だと使い辛い。特に収納とかの能力の関係上、盗んでると思われる様なことは避けるべきだ。まあ、レアの作った薬や爆弾から見ればここでは小銭みたいなものか、……………ただ儲けが出てもこの金が出ていかないのもなかなか問題だ。この街で流通している通貨が減るからな、明日、ダンジョンの奥にいたらここに来る気もないし、罪欲種にでも幾らかぶち込んどくか、

狭い通路の奥には凄まじい力が宿った珠が見える。その手前にある紋章を真理を使って読む。

『光たる力は意思を形作り、闇たる力は身体を形作る。その力、相反する力なれど互い無くして生命は宿らず、また、どちらかが廃れ、栄えれば奇跡は失われるであろう。』

『業深き者よ、この核に宿りたるは闇の力、汝、望むならば肉体を超越する力を授けよう。新たななる支配者として再誕せよ』

《種族を超えたスキルを習得可能な模様、受け取ったエネルギーに冒

流を行使し、習得可能なスキルを選択可能です。検索……………該当  
数362502、表示しますか》

やめろ！目の前にそんなに出されても分からんわ！そこから俺の  
言う条件で検索をかけるや！

どんな能力もスキルでも手に入るが、既存の物に限定されるら  
しい。表示された物は4つだ。なにになに……………

神祖 超越せし存在

生命蒐集家 命を集める

偽りの生命 魔力による代用

偽りの死 死を回避する

それぞれ細かく見ていくか、

《神祖に真理を発動させた結果#%3\*t・Γの解析が進捗し、#0  
0000……………》

謎の部分も進捗か、……………報告受けたのはなんやかんや初めてじゃ  
ないか？

《そんなことはありません》

はいはい、それより結果は？ステータスは後回しだ。

神祖 ジョブ聖職者、勇者の最上位職の一種、精神力による体力の  
代用が可能。

生命蒐集家 コレクター 吸血鬼始祖のパーソナルスキル、吸収により、命を取り  
込み使用可能。

偽りの生命 フェイクライフ 魔力により仮初の命を創り出し、宿す。尚生み出される  
物はその者が宿す業によつて変化する。

偽りの死 フェイクエンド 生命が失われた事実を無かった事にする。スキル保有者  
が効果を受ける場合のみ一回使用毎に24時間開けなければ再使用  
出来ない。

神祖以外はパーソナルスキルだな。神祖は精神力を代用するとあ  
るが、即死を防ぐようなものか分からないし、求めている効果じゃな  
い。偽りの命は自動人形を作ろうと思った時間いた事があるな、無い

からランタン作った訳だし、今更要らないな。そして、偽りの死、これは待機時間がネックだな。最後に生命蒐集家なのだが、多分これが一番目的に違い、近いのだが……………これ元々の持ち主って

《約5000年前の吸血鬼です》

ですよねえー

人間用じゃない気がするが、血を吸う以外だと効率悪いとかもあり  
そうでも、その辺冒流で上手い具合にできるか?……………他にマシな選  
択肢も無いし、

「……………仕方無いか」

生命蒐集家を選ぶと力が流れ込んでくるのが分かった。

《もう少し力が余っているようです。習得可能スキル検索……………該当  
数302050》

差は……………60452だ、多分、表に軽く目を通すと普通のスキル  
が多く、パーソナルスキルはあまり見られない。さっきみたいな強い  
スキルはそれだけあると言うことか、ただそもそも集まっているエネ  
ルギーが足りず、習得できないほど強大なスキルもあるかもしれない  
し、断定はできない。……………面倒だし、スキル適当に見繕ってくれ、  
《では偽りの死を習得しますか?》

あつ、それも行けるんだ……………ああ、そっちはそっちでメリットあ  
りそうだから貰うか、終わったのでそそくさと出て行くとその後から  
通路が閉じていく。

## 制裁の時代 最善の沈殿

この身に沈殿した怒りは消えない。当の昔に忘れ何の怒りかもわからない。感情だけが今も静かに、されど爆発する時を待つかのように腹の底で蟠っている。そして今もなお、降り積もる雪のよう怒りは積もり続ける。

朝起きて顔を洗って歯を磨く。鏡にぼんやりと向き合いながらも作業的に磨く。歯ブラシは荻原さんに出してもらった奴を大量ストックしてある。この世界でメジャーなのはフロス（歯間に通す糸）なのだが、自分は兎も角、人に教えられる程慣れてはいない。勇者等が来た影響で歯ブラシ自体は作られているがイマイチ品質が悪い（歯磨き粉は特に）。最近はやんと習慣として慣れてくれたが、まあ、もしもの為に一応フロスも揃えておいたのが、どうしてかあまり使う者はいない。自分で歯磨きの面倒を見た幼い子はともかく、自分で磨ける筈の子供達もだ。謎だ、

「今日はケーキとアイスを……エドガーの所だったな」

「……………準備万端（？ー？）b」

「全て抜かりなくU・x・U」

「フォローは任せるにやあー」

「が、頑張ります！」

「姫も頑張る〜！」

アスメシア周辺は魔物は少ないが治安が少しアレだったからな、現在は子供たちに危害や悪影響を与えそうな奴等は粗方シメたから今は大分安全だ。……………なんて思っていたら問題が舞い込んで来た。まあ、刺客を捕まえて終わりだがな、隔離で、

「……………あ、忘れてた。これ今回のパーティーに指し向けられてた刺客な」

「ちよ、さらっと何をい……………」

帰る前に刺客の身柄をエドガーに預けてノルンの転移で帰宅とい

ういつも通りの運びとなった。イベントはいつも通り成功だ。通訳が必要だったのは大変だったな、急拵えじゃ若干拙い印象を持たれた気がする。いつ勉強したのか分からないクロシエツトとスキルでスラスラ喋る朝日、クロエは俺と同程度くらい、後は挨拶と簡単な接客対応以外できないレア、アナスタシアは心は読めても会話はできないので、読み取った注文を先読みで作ると言う離れ業をする為に裏方に専念、お陰で提供速度は最速だったな。しかし、

「……………エドガーの方も刺客対策がいるか」

こういう事は年長者……………何人か居るエルフに聞いてみるか、と思ったらグラーザーがハッスルしてるのが目に付いた。うん、あいつはやめとこう。……………この世界はなんて言うかまあ、あれだ、肉体的な最盛期が長い種族が多い。サ○ヤ人みたいなのばかりだ。

「それならゴレム等如何でしょう？」

「ゴレム……………土とかで作る動く人形だよな」

多分、ゴレムって言われるアレだよな、

「拠点の防衛等には向いています。何で作るかによって耐久性や機動性、弱点等は変わってきますが、結構簡単に作れるんですよ。……………まあ、簡単な分、あまり複雑な命令は理解出来ませんが、適当な魔力の触媒を用意するだけでいつでも何処でも呼び出せます。そこから……………」

長いが重要な説明を細かく聴いていく。まず魔石を加工して核を作るそうだ。作る属性はある程度合わせた方がいいらしいが、その辺は割とどうでも良いとか、まあ、使える場所が限られたら汎用性が悪いだろうからな。弱点は作った場所の属性に影響されるが、核を壊されればすぐに終わるため、何処に核を置くかも大事になってくるが、何処にでも置けるとはいえ場所によっては脆弱になる箇所も出てくるので定石は頭や胴体の何処からしい。

「……………じゃ、いっちゃやってみつか」

「○めはめ波？か○はめ波の練習す……………」

「伏せ字の位置と二回目……………お前隠す気ないだろ!？」

一本背負いでブン投げて黙らせる。まあ、設置することを踏まえる

と属性を揃えても問題無いだろう。属性が異なる場合でも可、と言っても揃えたほうが効果は高い。となると何属性にするか、屋内である事を踏まえると火は不味い。土も床板破って出てくることになる。風はそもそも無理、……………となるに残るは水だけ、になってくる。のだが、実用性安全性をしつかり検討していかないとな。ん？

《侵入者、推定盗賊》

カルマの法則だったか？悪い行いは必ず返ってくる。……………なんて言葉を言うものはいるが、それは半分正解だ。バケツに石を投げればその揺り返しが起こる。ただ、バケツでさえ、正確に真ん中に落とさなければそこに返ってこない。池や海のように大きくなれば石くらいで変化は無いだろうが、もし返って来ても落とした場所とは違う場所に帰ってくるだろう。

行いの結果は何らかの形で返ってくる。それは善し悪しは問わない。ただ、それは必ず本人に帰ってくる訳では無い、親しい誰か、それとも赤の他人か、気づかないほど小さくなって返ってくるか、それこそ誰にも止められない程大きくなって返ってくるか、……………まっ、生きてるうちに返って来ないかもしれないがな、

「ハロー、キャンエニワンヒミアミー？」

「ああーだ……………」

「な……………」

ベシャベシャベチャボチャゴトツ

通りすがりに切り刻んだのだが、どうやら声を掛けられるまで気付かなかったようだ。山の中だと言うのに、

振り返った拍子に体制を崩し、バラバラになった。賊の死体は……………林檎や葡萄の餌か、俺はあいつ等が魔樹の類だと言われたら信じられる気がする。後始末に困らないのはいい事だと思っておくか、

「追われてたのは君か」

「……………」

「一応危険は……………無いから」

喋ってくれないな、人見知りか？ああ、契約魔法が掛けられてるな、この腕輪、冒流で解除して外す。



細く腹の虫が鳴く。

「取り敢えず、飯食つてからでもいいか、口に合うかどうかは分からないが適当に見繕つてくる……あと俺のスキルが気になるか？」

「……………」

「その辺は帰ってきた時に軽く教えるけど、それまでは、これでも食べててくれ」

隔離に管理されていたおやつを出す。皿も入っているのでそれに乗せて、

「なに、これ？」

「シュークリームだな」

「見たことない……………フンフン、中身は乳と卵か？」

「あと砂糖な、匂いでそこまでわかるのか」

「人にはわからない？」

「まあ、匂いだけでは厳しいだろうな……………たしか今日は焼きそばと、ご飯物何だったかな？」

「シュークリーム、シュークリーム」

戻ってきたらこんな感じだった。

「おやつだからな？……………気に入ったなら食後にも出すけど」

「やった！」

焼きそばと握ってきたおにぎり、後は子供が好きそうな唐揚げとかを中心に盛ってきた。

「量はイマイチ分からなかったが、食べられそうか？」

「問題な、い」

一口食べてからは黙ってガツガツ食べていたので静かだった。気に入ったらしい。

「いい食べっぷりだな、シュークリームと……………あとは次店で出そうと思ってるアイスケーキだ。無理だったら食べなくてもいいぞ」

「余裕だなあ」

ケーキを嬉しそうに平らげるとシュークリームは最早一口だった。

「……………じゃあ、落ち着いたらまた話に戻るぞ？」

「……………いやだあ！」



開口一番がこれである。

「駄々こねない、何歳だよ」

「316歳、……子供扱いするなあ!」

「はいはいで、名前は?」

「リオネット・エンド・サヴェレンティス・ロゼット・セブン・リーダ  
……」

「……なんて呼べばいい?」

「ロゼット、名前はそこだから後半は私の特技なんかで追加されて増  
えていく感じだから」

「やっぱりそこか、代行者に聞いておいたのだが上から姓(住処)、次  
が最果て、人化出来る者、名前、得意な属性(聖)、好みと言う順らし  
い、尚追加は何を問わず後に加えられるので能力等は習得順にな  
る。長い時を生きる龍の名前はかなり長いのだが、それも一種の誉れ  
と言う奴か、勲章と言うべきか、

「あなたの名前は?なんて呼べばいい?」

「北川龍登、この施設の管理人、かな?あの子達には先生と呼ぶように  
言ってる」

「先生?……ここは学校なの?!だったら本とか無いの!」

「あー、リードは読書の嗜好って意味か」

「多くは無いがあるぞ……大半は写本だな、好みの本があるとは限  
らないが」

「ヒャホーウー!」

「ダメだ、殆ど聴いてねえ、ロゼットは大人しそう見た目に似合わない  
い奇声をあげながら走っていった。書庫の場所も分からないのに、  
だ。結果、写本等を作ってる作業部屋にたどり着いた。」

「……図書館はあっちだぞ」

「いや、ここはここで面白そうな匂いがする……」

「なんとかドアノブを掴む前に回り込めた。」

「旦那様く、何か御用ですかー?」

「レア、手伝え……」

「おお、兎獣人」

「獣人じゃないですよ。旦那様のしゅ……………」

ドスッ

「目がく目があー」

「語弊のある言い方をするな。あと別に痛くないだろうが」

「人形だもの」

「○つをみたいな感じで言うな」

さつきまで目を抑えてのたうち回ってたのに急にスンっとするな、怖いだろうが、

「隙きあり！」

「ありません」

脇を抜けようとしたが、注意してない訳は無いのであつさり捕まえた。

「図書館はこつちだ」

「はーなーせえー」

「ここが図書館、もとい写本置き場かな？」

「はあー、今回はあつさりと捕まったが、原典を見つけるまで諦めんからなあー！」

「あの部屋に原典はない。俺の能力の話を忘れてないか？」

久しぶりに来たと言うほどでもないが、棚がもう少し欲しいな。と隅々まで視線を走らせると……………」

「はあ……………」

「ん？どうした？」

「いや、どうやらこの図書館で籠もりつきりの奴がいると思つてな」

暫く様子見に来ないとすぐこれだ。三人ほど机に突っ伏しているが、尖った耳が見えている。ここでの飲食は禁止してあるのだが、そもそもそのルールを作った理由は本を汚さない為と言うのもあるが、一番は休憩を適度に取らせる為だ。飲まず喰わずで研究させるつもりは無い。個部屋を割り当てても魔法関係の授業とここを歩き来する感じだからな、こいつら、

「……………換気もしないとな」

「萎びたエルフ？だな」

………こいつもこの住人なるんじゃないか？と思ったが、基本的なルールを説明するだけに留めた。それより萎びたエルフ三人を治療する為に隔離を介して医務室に出す。

「まず点滴、そこから様子見てお粥の流れを何度繰り返すやら」

カルマの法則とは何だったかな、何かいまい思い出さなくてスツキリしない。

《サンスクリット語で「カルマ」は『原因と結果の法則』を意味する言葉で、おもにインドにおいて仏教以前に生まれた概念です。近年では……》

聞きたいのはそういう事じゃないし、因果論もあったな、行いの結果は何らかの形で帰ってくる。良い行いをすれば良い行いが悪い行いをすれば悪い行いが、と真正正銘、公明正大に言い切れる者はそんなに多く無い筈だ。建前でも勇往邁進できる者は良いだろう。ただ良い悪いと言うのは何を基準にするのだろうか？と言う事だ。……やる前から分かるようなことなら別だが、

AがBに対してXの行動を取る。

XのためにはCが必要になる。

AはCを使いBにXを行う。

さて、これは善行？それとも悪行？

ではXが臓器移植と仮定、AはBに臓器移植をしようとした。ただ、臓器は単体でその辺をウロウロしてる訳では無い、Cは当然人物だ。腎臓等のように2つある物なら片方取っても問題は発生しづらいが、生命の維持が不可能になる心臓等となるとそうは行かない。それに移植には適合するかどうかの問題もパスしなければならぬ。となると、CはAに近い、それも血縁の誰かという可能性が高い。

Aを助ける為にCが死ぬ。という結果が出る。

………のだがまあ、この問題の最重点はXの必要性や希望しているかどうかだろう。

Xを行うのはBの意思である。もしXもとい、移植が必要ないのであれば健康なAの臓器を摘出し、Cの（仮定、ここでは健康者とする）臓器を移植するのはどうだろう。

不確定要素が多いから分かりにくいだろうが、正しいと信じて行動しても、その結果が伴うかどうかは後になってみないと分からない。

正義も悪も所詮は結果、もつと根源は意思や欲にある。理屈や道理を話す場に感情を持ち込み、訴え掛けるだけなら兎も角、それだけで押しきろうとする者は前後も結果も感情もすべてあべこべなのだ。悪か正義では答えは出ない。行動の先に結果がある、複雑に絡んだ糸をシンプルにするならこうだろう。

……因みにだが、カルマの法則や因果応報は人間関係には大きく当てはまる場合がある。まあ、周りに横柄に振る舞えば、厄介事として人は原因から遠ざかる。社会的に立場が上とか出あっても直接で無くとも何らかの形で影響していることがある。距離が近い分、概ね直撃する。

……少なくとも見積もっても職場の空気が悪くなり、士気も低くなるだろう。弾いては生産性や作業速度に影響し、進捗が悪くなれば残務を捌くために残り、そこから体調を崩す者が現れ、人材が欠けていく、なんてコースもあるだろう（残業を悪と言うつもりは無いがそれ無しで成立しないのが常態化しているならプランやモデリング、草稿から破綻してるから最初からやり直せ）。

人は自らを移す鏡である。合わせた鏡に写る傷や汚れは果たして相手のものなのか、はたまた、自らの物か、自分と向き合うことは他者との関わり合いを人それぞれの形で円滑にするだろう。

ただ我慢の先に等しく成果がある訳ではない。その我慢には意味があるのか、それは結果が出るまで分からない。

それとカルマの法則は有効では無いが、引き寄せの法則は有効だ。善意からくる行動はより良い未来を、害意や悪意からくる行動には身の破滅を引き寄せる。たとえば当人に直撃で帰ってこなくても結構近くまでは帰ってくるのだ。無影響かどうかは言わなくても分かる気がする。

「我慢出来る分はするだろうが、限度や一線は明確に存在する。……それと損切りもあるかな？」

損切りを上手にできる人間は少ないが、高を括って首が回らなくな

る奴は滅らないよな、

## 新たな住人

巨大な龍に勇猛果敢に挑む少女は、圧倒的な熱量を誇るブレスを悠然と跳んで躲す、ブレスが過ぎ去った直後、距離を詰めるべく地を蹴る。巨躯を揺らしながら振り上げられたを爪をスレスレで身を捻り避けると、その鱗に自らの得物を突き立てる。そう、ハサミを、

「何やってのアイツ……………」

「姉エ……………」

ロゼッタ共々、額に手を当てながら原因を見る。割とガチバトルに見えるが瀬戸原はだいぶ遊び感覚だな、……………尤もさつきまで腸が出てたが、

「止められるか?」

「…………無理、私魔法特化だし」

……………分かってたけどね、抜いた刀を瀬戸原の眉間に目掛けて投げつける。

サクッ

「ええ……………」

投げられた刀は放物線を描き、狙い変わらず瀬戸原の眉間に突き立てられた。

「あいつも倒したし……………会話も」

『助けに来たぞー!』

ええ……………会話する気無し? 振り上げられた爪を身体を捻りながら後ろに飛ぶ。追撃も止める気無いな。すると、日本刀が視界の隅から飛んできた、そう眉間目掛けて、

「怖えよ、こっちは死ぬんだからな? サクッてなったら」

「あら、パスですよ? ただの……………それに借りた物は返さないと、そうでしょう? 先生」

手に戻ってきた刀で攻撃を捌く。

「ロゼッタ! 説得! または説明!」

「……………多分無理」

「理由は?」

『やるな人間！しかしそれがお前全力では無いだろう！さあ、私を楽しませろ！』

「ああ……………頭痛い」

……………戦闘狂吸い寄せ過ぎだろう！

「ロゼッタ、とその姉？……………多少手荒でいいか？」

『手荒？命のやり取りに遠慮など不要！敵の温情など侮辱に……………』

「いや、お前の命はいらん」

ちよいキレてるか？大振りな爪を絶対切断を一瞬発動させて刀で受ける。すると、大した抵抗無く爪を切断。と同時に絶対切断を解除し、呆けるより前に、正面に突き出す。

「天喰・碧落虚空」

龍を大きく吹き飛ばす突き、戦技、射程拡張と風魔法の合わせ技だ。突きという剣技では無く、吹き飛ばす風魔法という感じだな。職業補正とか乗せるなら戦技にしたほうが良いからな。たとえ魔力を消費しないにしても、魔法耐性が高いのもあって、あの巨体は風魔法単体の効果では吹き飛ばせない。そこで戦技で突きに付与してる扱いにしたと言う訳だ。

「自己紹介が遅れた。我が名はリオネット・エンド・サヴェレンティス・ワン・アマリス・アーツェス」

名前はアマリスのところだな。ワンは火、アーツェスは武道？要は近接戦か？ロゼッタと同じく人型にはなれるしな、で、瀬戸原はスキルが整理されたが、……………明らかに壊れてるな。

死ノ完成 内約

dead之：かん染 傷つけた相手を蝕む呪毒を与える。距離が近いと効果が上がり、離れると下がる。

tEんじテ生 一日に一度だけ、死亡時に復活出来る。

ennドデえたa 不死、不死者を殺せる。触れた対象を腐食させる。

毒を喰らwwaばdeAthまで

補足した対象の位置が分かるようになるが、対象は1名、補足対象

を殺傷するまで対象を変えられない。一日経つと対象はリセットされる。

ワレはS Iノ王

復活、身代わりに類いる効果を無効化する。

Gen罪かraNお解ホウ

天使系の結界を無効化する。

……いや、厄介過ぎる。見えなかったら対処法も分からず倒されそうなものもあるな、そもそも不死があるのに更に復活とか、不意討ちで仕留めるのは更に難しくなったな。

「行き違いで戦う事になったが、俺は妹さんを保護しただけだ、迎えに来たんだろ？」

「はい、そろそろ晩御飯ですのぞ」

……家出とさえ認識されてない。

「よし、迎えも来たし、もう帰れるだろ？」

「いゝゝゝ……やー！」

「その、……無理を承知でお頼みしたい事が！」

「なんだ？」

何か妹が戻れない事情でもあるのか？

「貴公の剣技を私に教えては頂けないでしょうか？」

……え、

「投げられた剣であれだけ鮮やかに攻撃を捌く技量、爪を切り落としからの突きへの移行速度、そして、体躯の大きい相手の攻撃を当然のように受け止めた、実力に裏打ちされた姿勢、僅かな時間でもわかる。……手荒等と言いながらも手加減されていた、その底の見えない力に繊細さ、今まで見てきた剣士と比べても隔たりを感じる程だ」

おう……恥ずかしいんだけど、

「ふくん、見所ありそうねえ♡」

「……良かったな友達ができて、壊死させる奴は使うなよ」

「ふふっ……」

「返事しろや！」

「はーいっ……」



ここで言質取つとかないと使うんだよな。コイツ、どうなるか分からなくてもぶつつけ本番で来る時は少なくない。

―後日……

「母上だ」

「母上だな」

―また後日……

「セトウー」

「弟か」

「セトウーちゃんこつちよー」

―そのまた後日

「あ、父上」

「父上だ」

「貴方ー、こつちですよ」

「怒ってますけどまあ、仕方ないですね」

その翌日……

「テエメラあ！家族単位で移り住むな！」

母は金品、父は睡眠、姉は武道、弟は道具や武器、末の妹が魔法、と  
いうか……

「どれだけ欲望に忠実なんだよ！」

後この龍父は悪魔系スキル、墮落を持つ。母は錬金術で生み出した金属やその金細工や工芸品を、姉は模擬戦に人の姿で混ぜてくる、図書室に入り浸る妹に、工房や魔道具の制作してる子供に交じる弟、デカイ図体寝るだけでスペースを取る父……については人の姿になつて寝具で寝てる。

授業も大変だが、技能系の実習は若干滞りがちなので一週間に一回まとめて見る事になっている訳だが、こいつ等の聞きたい事は如何せん細かいので教員枠で確保しているエルフでも答えられないケースが度々ある。言語に関してでもクロシエツトや朝日なら万全な対応の様だがアナスタシアやクロエ、俺はまだ履修済みとは行かない。(他は言わずもがな)

………瀬戸原(言語理解が無い)は所謂片言レベルまでになつてい

る。教本を持ち歩いていない辺りから内容は一通り入ったと言うことなのだろうが、

こうなつて来ると言語理解の能力を貰っているメンバーを翻訳要員として借りてくる必要がある。

鶏が先か卵が先か、普通なら考えても答えの出ない問題かもしれないが、真理ノ瞳がある俺には他の誰にも見えない物が見えている。……まあ、エルフやドワーフ等には精霊を感じたり、見る事のできる者がいるが、俺には見る事は出来ても感じる事は出来ない。それぞれ風や土、属性毎の親和性が問われるのだが、見る分にはすべて見える。が、

「……………」

目の前に見えるコレが明らかに精霊では無い事ぐらいなら感じ無くともわかる。この目にはどんな物も映るが、それが何かは調べるまでわからない。

Error……………

瀬戸原は天才だ。俺が何のヒントも無く、グリッチスキルを作れた訳じゃ無い。可能性は感じていた。無理にやるリスクは無かったが、釣り合うならやる。その為の力もある。

「この世界は人より先にシステムがある」

勇者は何故強いのか？生産職は戦闘力が低い？……………何というかゲームっぽいと感じるだろう。どちらも同じ人間だとしてもこの世界では随分差が出る。

Error. Error. Error……………

イレギュラーを、システム外の物を組み込もうとした弊害、……………いや、組み込まれてしまうのか？謂わばバグやエラーの発生。勇者以外でも転生や転移者はある。その多くが固有のスキルを獲得している。全てで無くとも間違えなく、そんな既存のスキルはなかった筈だ。

error. error. error. error……………

error……………

error……………

ゲームには裏技以外にもバグ技もあるんだ。コツやシステムの特徴を掴めれば、そう思い考えてみた。一応仮説ではあるが、分かったこともある。勇者のステータスが低い理由は恐らく、システムの誤認だ。

何せ最初は普通だ、おかしいのは成長率、分かる範囲で統計を取ると三年以内に鍛えた分が異常な成長をしている。比較の為に千里眼や真理を駆使して一般人や戦闘職、他にも年齢別で演算して出した数値からの推察にはなるが、転移直後はシステムに赤子と誤認されるためだと思われる。謂わば赤ちゃんである。この世に生を受けた段階からシステムの適応範囲に入る。首が座ったりとか、ハイハイできるようになったりと、急激的に成長する時期なのだが、当然まだ産まれて間もない赤ちゃんである。足で立てても暫くはヨチヨチ歩き………と言つても割と活発な子だと走り回るのだが、その辺りに合わせてシステムも調整されているのだろう。多分、

で、結論だが、赤ちゃんと成人ならどちらが遠くまで行けるか？どちらがより重量のある重りを持ち上げられるか？みたいな事である。

………要は鍛えられる量が違う訳だ。赤ちゃんでも、同じトレーニングが出来れば勇者と同程度の身体能力を身につける事はできる。

そう、理論上は、

「まあ無理だけどな」

転生、転移した殆どの者に該当するが、一部その恩恵を受けていない者もいる。だからこそバグなんだろう。俺自身も思い当たる節が無いとは言えない。実際勇者も成長補正はあるがメインはそれぞれを持つ成長限界を破ることにある為、ステータス向上などは大きくは無い。………まあ、他の職業から見れば破格だが、

話を戻すが、バグがあるなら利用出来ないかと思つたのだ。然れども方法はわからない。なので暫くは頭の片隅に追いやつていたのだが、生徒を冒険者ギルドに連れて行った時、アルが付与職として運命の輪と死のカードを引いた時、できたらでいいか、なんて事は言つてられなくなった。

未来視を使ってシミュレーションしてみたが、原因は枯葉剤だ。瀬

戸原が降ってくる想定外はあったが、護衛した列車に積んであった物だ。これが漏れるらしいのだが、どう手を加えても遅いか早いの問題になる。何故か漏れるのだ。これらをすべて隔離する方法も確認したが何故かシミュレーションする未来が変わらないという事態が発生した。

明らかに何かが干渉している。原因と思しき物の痕跡も予兆も何も捉えられない。今までに無い異常性を感じた。一応助けられる未来も見えたが何処か、矛盾と言いか違和感と言いか、嫌な感じがする。そんな訳で代行者も使い、様々な可能性を検証したが、……原因の特定には至らなかった。ただまあ、

「現状無理なら可能性を広げるまでだ」

可能性が出てこないなら作る捻じ曲げるだ。叛逆はちようど良かった。ぶつけるのにちようど良かった。冒読で未来視に叛逆をぶつけるというかなり脳筋な方法だったが何とか可能性を繋いだ。

error、error……

目の前のモヤを冒読で払いのけると、それはキレイに晴れた。